KAIZO

改造

十一月號

1926

實れる秋を三越へ：

……秋・冬の流行品・實用品を豊富に取揃へ

豊饒の秋が参りました。三越の店内にも百貨充實の秋が参りました。秋の御支度、寒さの御用意は、品質が優良で、價格が低廉で、種類の豊富な三越へ何卒御用命の程御願ひ申し上げます

秋冬の御用意に

- ◆背廣服三ツ揃（四階）…四十圓位より
- ◆オーバー（同）…三十五圓位より
- ◆トンビ（同）…三十五圓位より
- ◆中折帽（二階）…五圓位より
- ◆シャツ上下（同）…三圓位より
- ◆手袋（同）…二圓位より
- ◆靴下半打（同）…三圓位より
- ◆スエター（同）…五圓位より
- ◆毛布二枚綴き（同）…十六圓位より
- ◆襟卷（三階）…二圓位より

東京市
駿河町

三越呉服店





改造十一月號目次

時評

社會科學壓迫問題の最近の發展……大山郁夫…一
金融金利に關する問題……堀江歸一…一六
減刑不可ならず……清瀨一郎…三三
ジノヴィエフの失脚を中心にして……佐々木修一郎…三九
右翼結成は必然的大勢だ……赤松克麿…四七
勞働總同盟の『右翼聯盟』への進出……山川均…五三

ロバアト・オウエンの復活……………本位田祥男…三八
英國に於ける左翼運動の展開……………小島精一…八五
政治の非倫理化……………室伏高信…一〇九
藝術の社會的地位に就いて……………阿部次郎…一

作

■小説 吵 …… 三 …… 時 …… 三郎 …
■小説 青塚氏の話……………谷崎潤一郎…七四
■小説 万年大學生……………久米正雄…八二

◇吉波彦作氏新著◇

大好評　新刊

韓非子詳解

（高等學校專門學校學生必讀の參考書）

韓非子の刑名法術は其思想嚴勵峻直其文辭警拔簡勁實に支那先秦文學の精華であり諸子百家の白眉である本書は其最も人口に膾炙せる二柄・說難・孤憤・說林・五蠹・顯學等の名篇雄章二十有五篇を選拔しこれを篇旨・訓讀・語釋・通釋・評釋の五段に分ち毎節詳密叮嚀に著者が其蘊蓄を傾注して韓非子の精髓を闡明したるものである。東洋古代思想の研究家は勿論文檢受驗者並に高等學校各種專門學校漢文科の參考書として必讀缺くべからざる唯一無二の好著である。

菊判最上製美本　全壹册五百餘頁

正價金四圓八拾錢　送料廿七錢

◇田井嘉藤次氏新著◇

大好評　新刊

最近支那時文實鑑

（專門學校學生及實業家必讀の良書）

本書は大支那時文界に於ける彼の歐洲大戰當時より最近の內亂結末に至る迄の社會各種の時事問題政爭の轉變學術文藝の消息等を記述說明評論したる時文を中心とし實業實用俗事の時文を副貳とし其研究方法各種文體の解釋並に時文研究資料等を詳述したるものなれば何人も內的に外的に奇國支那を理解せんとするの士の一讀せざるべからざる實典也。即ち其の文體解釋の實力本位的なる斬新巧妙なる慥に參考に價す。

四六判最上美本　全壹册五百餘頁

正價金貳圓五拾錢　送料十八錢

哲學の一斑　基礎概念講義　市川一郎譯　五圓八拾錢　送料廿七錢

高尚なる理論を平易に講義せる　哲學概論　市川一郎譯　四圓八拾錢　送料廿七錢

哲學教科書　稻毛金七著　參圓八拾錢　送料十八錢

最新哲學辭典　渡部政盛著　五圓八拾錢　送料廿七錢

カント研究　大關增次郎　七圓八拾錢　送料卅六錢

改訂增補　オイケンの哲學　稻毛詛風著　壹圓六拾錢　送料十二錢

社會道德論　一條忠衞著　參圓五拾錢　送料十八錢

體育原論　島田正茂著　參圓八拾錢　送料十八錢

東京市神田區表神保町七番地　大同館發行　振替貯金口座東京八七二番

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。

煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が玆に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人參の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き精涼な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但しこれは眞劒に煙草をやめよゝとする人でなければお勸め出來ない何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの效力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら乾度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之のカロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

（送料内地十八錢　臺朝樺四十五錢）
（代金引換内地卅錢　臺朝樺五十五錢）

東京大森不入斗八二八
發賣元　榮川堂
振替東京五二九壹壹

代理店　天下堂
東京市京橋區瀧山町十三

福本和夫著〔好評増訂五版〕

菊判箱入 五百十頁 布表紙

■定價參圓九拾錢 ■送料金廿七錢

經濟學批判の方法論

本書は著者が徹底せるマルクス主義の見地より、經濟學批判——マルクス主義經濟學——の方法論を取扱ひ、或は其の構成を理論的に分析し、或は其の發展を歴史的に展開し、或は我國近時の小ブルヂヨア經濟學（福田、小泉、高田、河上博士等）——の方法を駁撃し、以てマルクス主義經濟學の根本立脚地を闡明したものであつて、「資本論」の範圍に就ての著者の一發見を示す第二篇の論文、經濟史の研究方法を論じたる第三篇の論文と併せて、正に經濟學並に經濟史研究に於ける世界的一大收獲と云はねばならぬ——こゝに第三篇第二章「日本資本主義社會の自己批判と日本經濟史の研究」と追補して第五版を刊行する。敢て少壯學徒の再讀三讀を望む。

福本和夫著

社會の構成＝並に變革の過程

定價金武圓也 送料金廿一錢

レーニン著 山内封介 井上滿 譯

ロシアに於ける資本主義の發展（全二冊）

定價金各參圓 送料各廿七錢

東京神田美土代町一 振替東京二五四〇〇番 白揚社

異國叢書

卷十二

菊判各冊五〇〇頁以上
佛國マルブル總革天金
挿繪數葉・詳註索引附

◇原著は凡て世界の秘稿！譯者は悉く一世の權威！

耶蘇會士日本通信 上巻 史料編纂官 文學博士 村上直次郎譯
同 下巻 史料編纂官 文學博士 渡邊世祐註
慶元イギリス書翰 史料編纂官 文學士 岩生成一譯註
ドン・ロドリゴ報告書 ビスカイノ金銀島探檢 史料編纂官 文學博士 村上直次郎譯註
慶元オランダ書翰 史料編纂官 文學博士 村上直次郎譯註
ジョン・セーリス日本渡航記 帝國大學教授 文學博士 村川堅固譯註
ファレンタイン日本志 帝國大學教授 文學博士 新村出譯註
ケンペル江戸參觀旅行記 帝國大學名譽教授 醫學博士 呉秀三譯註
ツウンベルグ日本紀行 帝國大學助教授 文學士 山田珠樹譯註

内容見本 電話又は葉書ニテ御申込次第 卽

ヅーフ日本回想録
フイツセル參府記事
シーボルト江戸朝廷參觀紀行
日本關係西籍解題

第一高等學校教授 文學博士・齋藤阿具譯註
帝國大學名譽教授 醫學博士 吳秀三譯註
東洋文庫主任 文學士 石田幹之助編

時送呈

◇本叢書を讀まずして近代日本を語る勿れ！

◇**原著原文** は悉く容易に常人の閲覽を許さゞる葡、西、蘭、伊、獨、英諸國語にて綴られし稀書中の稀書なるか、然らざれば數百載未刊の秘稿なり

◇**内容** は西洋文明移入に關する曠世の史料にして同時に我が大日本帝國史圃の貴重なる落穗なり。附するにパゼス、エンクステルン等に勝る書目解題を以てす

◇**譯註編者** は凡て斯學に於ける一世の權威にして絶對に代譯に非ず

◇**譯文** は流麗無比、**嚴密なる詳註索引**と相俟ちて、天文以降慶應に至る三百有餘歳の間に、碧眼に映じたる日本、近代文明に至る過渡未開の日本の姿を如實に髣髴せしむ

◇**讀者** は湧くが如き興趣を覺えつゝ不知不識の間に現代日本の據りて來る緣由を究むることを得給ふべし

◇**装幀** は**フランス特製マルブル總革**を用ひ、堅牢典雅、正に本邦製本界に劃時代的の驚異を與ふべきもの

◇故に本叢書は一面高く**學界の金字塔**たると共に他面永久に**天下の讀書子の香飯**たらん

豫約募集

▽豫約締切　大正十五年十一月十日
▽配本　十一月以降毎月一冊一ケ年完了
▽申込金　金四圓八拾錢也（最終會費に充つ）
▽會費　金四圓八拾錢也（毎月五日迄に御拂込のこと）
▽一時拂　金五拾五圓也（締切期日迄に御拂込のこと）
▽送料　一冊に就き金貳拾七錢也（會費に添附御拂込のこと）

東京四谷新宿一丁目
聚芳閣
振替東京五六一四七番
電話四谷 五一一番 二一九七番

文庫

不折

第八卷 青い鳥
第九卷 社會學上より見たる藝術 ギユーヨー
第十卷 戰爭と平和「上」 トルストイ
第十一卷 同「下」 同
第十二卷 老子 老子
第十三卷 デカメロン「上」 ボカチオ
第十四卷 同「下」 同
第十五卷 昆虫記 フワーブル
第十六卷 源氏物語「上」 紫式部
第十七卷 同「下」 同
第十八卷 人口論 マルサス
第十九卷 死の勝利 ダヌンチオ
第廿卷 ファウスト ゲーテー
第廿一卷 意志と現識としての世界「上」 ショペンハウエル
第廿二卷 同「下」
第廿三卷 シエクスピーヤ物語 ラム
第廿四卷 春のめざめ ウエデキント
第廿五卷 フランス革命「上」 カーライル
第廿六卷 同「下」 同
第廿七卷 ボブアリー夫人 フローベル
第廿八卷 イリアッド ホーマー

清少納言
第卅五卷 マルクスの資本論 ウヰキー
第卅六卷 萬葉集

第二期以後の主目鈔
懺悔錄 ルーソー
性と性格 ワイニングル
父と子 ツルゲネーフ
梅暦 春水
ツアラトーストラ ニイチエ
失樂園 ミルトン
タルチユーフ モリエル
天界と其神祕 スヰーデンホルク

（詳細內容見本）

申込所

全國書店並に
東京小石川水道端町二
萬有文庫刊行會
電話小石川八一五四番
振替東京七〇八三五番

故アルフレッド・マーシアル著　大塚金之助譯

經濟學原理

（全四冊完成）

菊判上製

定價各冊參圓五拾錢　送料二十四錢
分冊四金參圓七拾錢

マーシャルが年と共にその學殖が圓熟して行つたやうにこの若き譯者の研究が成熟してゆく事はわが學界の喜びである。譯者は震災數年前にこの大著を譯したしかしそれはかれのデリケートな學的良心を滿足させるものではなかつた。震災でその紙型を燒いたかれはもう一度一九二〇年の八版によつて改譯した。本書には第一編の序論より第三編の欲望とその滿足までを收めてゐる、譯書でこんなに著者の心持に忠實なものは近來に見ない。譯書としてわれわれが薦めないと思ふものでこれほどわれわれを喜ばせたものは近頃になかつた。（東京日々批評）

分冊二發賣

分冊一　第一編　序論　第二編　基本概念　第三編　慾望と滿足
分冊二　第四編　生產要素
分冊三　第五編　需要供給・價値の一般關係
分冊四　第六編　國民所得の分配

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

廣濱嘉雄著

私法學序說

◇菊　判
◇定價貳圓五拾錢
◇送料廿三錢

新刊

本書は、我が法學界に於て最も新しい立場に據れる著者が、單行本の形を以て公にする最初の業績である。著者の深き思索と高邁なる識見は、一文を草する毎に、常に斯界の視聽を欹しめたるものなるが、本書はそれにも增して學界及實際界に於て、幾多の波紋を惹起すものと豫期せらる。

内容＝一、私法關係そのもの・一瞥（民法總論その一）。二、我が民法總則編の通則性
三、私法關係の要求（民法總論その二）。四、契約の自由。五、私法關係の
生滅（民法總論その三）。六、民法と裁判。七、私法適用の論理。八、私法
學の對策とその方法。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

農學博士 小野武夫著

日本農民史語彙

――博士十數年苦心熱誠の編纂――

採錄語數三千百語

讀史に研究に愛書家座右必備の書

見本

發することを得」とあるは、公共用水又は口分田の餘水を引きて開田を許したるものならん。（大日本農史）

公文乘（コウブンジヨウ）

官紀を犯して私收する稅の意なり、即ち平安朝の頃、國司が規定の賦課の外に種々の名目を設けて、餘分に人民より稅物を徵發せるを「公文乘」と云ひたるなり、元より甚だ不法の行爲なれば、桓武天皇は布達を以て之を禁じたり。

〔引例〕 桓武天皇、延曆十七年、戊寅勅令、租稅調錢は出納限有り、術を收め用に充つること色數一にあらざれば、姦吏の輩が官物を犯用して公文乘と名け、憲章を憚らず、心に貪濁を挾み、競て截留を事とし、田租を剩徵し、調錢、職寫田の直、術、錢等の類を奸折すること有るに至り、贓汚多端なれども、積習悛むること無し云々。（大日本農史）

公奴婢（コウドヒ）

公奴婢とは世の賤民にして政府に屬する奴婢なり。官戶に似たれども、その品等下れるものとす、多くは東北地方の蝦夷人の捕虜等より成れるが多し。（日本法制史）

紺屋役（コウヤヤク）

紺屋役は又一名藍瓶役とも云ふ、藍瓶の數に掛けて出さしむる役錢なり、國によりては紺屋には役錢を出さしめさる處もあり。（地方凡例錄）

估價（コカ）

王朝の頃、國有地たる公田の耕作者よりは夏の小作料として賃租即ち作料を徵收したるが、其の賃租の高は一に各地方の貨物の騰落によりて定められたり、此の時の相場のことを估價と云ひぬ、大寶令に「凡諸國の公田皆國司隨二鄉土估價一賃租」云々とあり。（日本農政史）

定價參圓五拾錢　送料三十六錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

時評

社會科學壓迫問題の最近の發展

大山郁夫

一

一個月前に諸新聞紙を賑はした學生檢擧事件に關する大掛りな評判は、この頃では颱風一過のあとのやうに鎭まりかへつて來た。伏せ字澤山の關係記事もしくは論文も、次第に新聞雜誌から遠退くやうになつた。『不逞學生』や『不逞教授』の『妄動』や『暗中飛躍』を傳へる報道も、あまり多くは聞かれなくなつて來た。それにつれて、一時その事件を様々に反響して喧々囂々を極めてゐた世論も、――攻撃的のものも同情的のものも共に、――いつしかその聲が微弱なものになつて來た。少くともそれらのすべては、例の怪寫眞事件や鬼熊事件やに關する風聞などと一様に、その本體は通り相場の『七十五日』をも待たずに疾ツくにどこかに消えて行つて、ただその餘波ともいふべきものが時々そこここに擡頭することがあるのが見られるだけのものとなつた。世間が忙しくなつたのか、人心が忘れ易くなつたのか、兎も角それは、初めの頃に比べると、可なり著しい變はり方だ。

否！ いかにもそれは著るしい變はり方には違ひないが、しかし幾ら世間が忙しくても、幾ら人心が忘れやすくても、殘さるるものは殘され、傳へらるるものは傳へられる。問題の發生した檢擧事件の社會的及び社會史的意義は、縦しその全幅の廣さ及び深さが、今日から幾年も幾十年も――或ひは幾世代も――縦

つた後に至つて初めて精密に測知し得られるであらうことにもせよ、それが既に現今に於て把握し得られる部分だけに就いて見ても、極めて重大な性質のものだといふことは、拒めない事實である。少くとも該事件が、その點から見て、怪寫眞事件や鬼熊事件などの比でないといふことだけは、誰れにも異存のあらう筈のないことである。

それだのに、その學生檢擧事件の噂が、縱し一時的にもせよ、少くとも表面的には、他の二三の怪奇めいた事件のそれと共に、今日では殆んど世間的に忘れられたやうな恰好に見えて來てゐるのは、一體何に基因してゐるのであるか？

二

その點に關しては、一寸皮相的に考へただけでも、色々の因緣がつけられる。即ち先づ第一に、學生檢擧事件は、それが持つ社會的及び社會史的意義の如きは暫く別問題として、單に世間的興味——若しくはもつと適切にいへば例のニュース・ヴァリュ—などの上だけから見て、一般の新聞紙によつて少くともそれと同樣に取り扱ふべきものと見做された他の二三の事件と、多少の時日の前後はあつたが、殆んど重なり合はんばかりの間隔をおいて世間に晒らされたので、特にそれのために用ひ得られた紙面が少からず狹ばめられた、といふやうなこともあつた

この推測は無論、全然有理でないとはいはれないものだが、しかし同時にそれが、學生事件の噂が割合に早く薄らいだ上の原因の一つとしても、決して根本的のものでないといふことは、自明の事柄である。

次に第二には、あの事件に關する諸新聞紙の報道は、それが始めて發表されたときは、それのニュース・ヴァリューを、その本來の實價以上に法外に高める積りでもあつたかのやうに、その見出しのつけ方から記事の書き振りに至るまで、驚天動地式に粉飾されてあつたが、しかしその割りにその中に書かれて居た限りの事件の內容が平凡なものであつたり、その上に、そのあとが急に途切れたりなどしたので、一時餘りに極端に煽られた人氣が、間もなくその反動として、がた落ちした觀がないでもなかつた。

この項下で特に注意されることは、あの事件が始めて發表されたときは、諸新聞紙は——その間に少數の例外があつたが——互に秘術をつくして、それに一種の凄味をつけることの競爭みたいなことをしたものである。『聞くも恐ろしき學生たちの共產主義的大陰謀の暴露』といつたやうな印象を讀者の腦裏

に燒き附ける意圖からでもあつたかのやう覺えた大小の活字の縱列横列が、數日間に亘つて、諸新聞紙のどのページかの上に、構成派の繪畫のやうな圖様を顯現させたのは、恰度その頃であつた。そして、それらの新聞記事の中には、學生運動に關する『綱領』とか、「テーゼ」とか、『プロカル教程』とか、『國禁の書』のプリントとか、等等といつたやうな、一般の讀者には何か異常の不思議がその奥に秘められてゐるかのやうな疑ひを起させたほどの耳新らしさの言葉が、相當に數多く挿入されてあつた。かうしたすべての道具立てが、新アラビアン・ナイトの書き卸しには誂へ向きに出來てゐたのであつた。

　更らにまた、實質的には、その事件は出版法違反と不敬罪とを含んでゐた外に、治安維持法の適用をも受けるであらうといはれてゐたことが、一層それの重大性を暗示した。いふまでもなく、治安維持法は、近來無類の惡法として、第五十議會に提案された時に於て既に、非常に激烈なる世論の抗議を受けたものであり、それ以來様々の方面から、——殊に無産階級の方面から最も强硬に、——批難されて來たものである。けれども、政府はそれに對しては、初から常に治安維持法は傳家の寶刀のやうなものであつて、滅多に拔かれるものではなく、殊に學術研究の上には絶對に加へられる筈のものでないといふやうな安全保證的の説明をしてお茶を濁して來たものである。ところが、今度の事件は、その治安維持法制定以來の最初の重大な違反事件として、それの適用を受けようとしてゐると傳へられたものである。しかもその脅威の下に立つたものは、まさしく若き大學生及び專門學校生たちであつた。彼等は一體、國體を變革しようとか、私有財產制度を破壞しようとかの計畫の下に結社を作つたのか、若しくは情を知つてそれに加入したのか、或ひはその實行の協議をしたのか、またはさうした目的の下に金品の授受をしたのか、いづれにしても、彼等は容易ならざる違法的行爲をしたのだらうといふやうな想像への示唆が、諸新聞によつて一齊に公衆に與へられたのである。公衆の驚愕及びそれにつゞいた不安な豫想が、一時非常な高度にまで昇りつめたのは決して無理だとはいへないのである。

　けれども、人々が幾らか氣を落ちつけて、その頃の關係記事の内容を讀んでゐると、これは案外にも、そこには縱し幾分か治安維持法違反の疑ひがあるといへる部分があつたにしても、確實に違反してゐるとの斷定を許すほどの根據は、どうも餘り多く見附からなかつたのである。或ひは關係記事に出てゐること以外に何かの重大事が實際その裏面にあつたのかも知れないが、しかし新聞記事を賴りに事件の内容を知らうとしてゐる一

般公衆には、さういふことが確められる便宜が無論缺けてゐた。さうかうしてゐるうちに、それに關する新聞記事も、少しづつ次第に減つて行つた。かうして、公衆のそれに對する注意もまた、それにつれて、いつとなく稀薄化して行つた趣きがあつたのである。

次に第三には、我々の見るところによると、かうした社會的事件の報道に對する公衆の批判力が近來よほど進歩して來た結果として、學生檢擧事件に對する一般的空騷ぎが、さうは永續しなかつたのだ、と信じ得べき根據がなくもないやうである。この點は、例の朴烈問題のやうな、在野諸政黨や反動的諸分子やが、その政府反對運動に於ける絶好の鬪爭題目の一つに算へてゐたものも、實際上に於ては大して選擧民を動かす力を示さなかつた、といつたやうな風説などを對照して考へられるとき、そこに如何にもとうなづかれることが發見され得るやうに感じられるのである。更らにこの點に關聯して、我々が今、八九年前に我國の勞働運動が最も險惡な難路を辿りつつあつた時からの幾年間に於て我々が見て來た通りに、その頃の勞働運動や社會主義運動やに關するセンセーショナルな新聞記事などが、如何に偉大なる僻目挑發力を一般公衆に對して持つてゐたかの狀勢を回顧するときには、そこに多少の時代の相違の跡さへが觀はれるのである。

近年に於ても、無論關東地方の大震災の際に於ける例の流言蜚語の現實的影響の如きものは幾分アブノーマルなものとするにしても、その時より數個月前に起つた共產黨秘密事件の際などには、官憲側から企てられたといはれてゐた新聞宣傳が最も辛辣に行はれたものであつて、しかもその期間が比較的に永く續いたものであつた。私のやうなものでさへ、或る意味に於ては、さうした新聞宣傳の犧牲者としての體驗を以て惠ぐまれたものであつた。そして若し私がさうしたことに神經過敏に產まれついてゐた身であつたら、或ひはそのために不愉快の程度を通り越して、堪へ難い思ひをしたかも知れない。しかし今の場合、そんな過ぎ去つた私の個人的な體驗談をしたところで始まらない話であるから、それは預つておくこととするが、つまり私の言はうとしてゐた要點は、今いつたやうな新聞宣傳があれほどの效果を擧げたのは、社會的事件に關する新聞記事などへの當時の一般公衆の批判力が如何に盲目的であつたかを語るものだ、といふ一事に外ならないのである

さうしたことを基準として考へるときには、現今ではさすがに、その方面の公衆の批判力は一進歩を遂げたものであること

が認められる。そしてその原因に關しては、私がそれを言ひ出す先きに、既に讀者たちに於て感づかれてゐるとだらうから、それに關して私が口を噤んでゐても、おそらく言葉の過度の節約だとは言はれまい。と言つて、我々は、その點について餘りに安心してゐてはならないのである。今日の支配階級の反動化的傾向が如何に皮肉に昂進しつつあるかは、誰れにも感じられてゐることである。で、この形勢の下に於ては、我々が何時でも足許から鳥が立つたやうな思ひを經驗する虞れがないやうに、始終極度に警戒の眼を見張つておく必要のあることは、改めていふまでもないことである。

三

だが、學生檢擧事件に關する世間の騷ぎが或る程度に鎭まつたといふことは、決してあの事件が最終的に片附いたといふことではないのである。もとより、前にも言つた通りに、あの事件が持つ社會的及び社會史的意義の如きは、幾年か先きの將來に至つて始めてその全幅の廣さ及び深さが闡明されることであらうから、今のところ必ずしもそれの遺漏なき測定に急ぐ必要はないであらう。だが、それは今は別問題とするにしても、我々は尙ほ、現在あの事件に關聯して、まだ少しも解決されてゐない重大問題の前に立たされてゐる多くの人々のグループのあることを忘れてはならないのである

それについて先づ最初に我々の考慮に上つて來るものは、無論事件關係の三十八名の被告たちである。彼等は問題になつた彼等の行動に關して、或る方面からは同情もされてゐるが、また或る他の方面からは鞭を向けられてゐて、しかもその鞭から受ける痛みが、同情から來る慰めよりは、遙かに痛切に彼等に現實感を與へてゐるのである。かうした社會的事件に對する一般公衆の批判力が既往に於ける或る一時期よりは幾分進步して來てゐると言つたところで、それはまだまだ、現在の狀況の下におかれてゐる彼等の苦惱を、これといふほどの程度に取り除くやうに作用するまでにはなつてゐないのである。もとより、彼等が今かうして潜り拔けつつある受難の境涯が、前途有爲の若き靑年學徒としての彼等の身神を蝕ばみつつある風霜の如きものとして見られるべきものであるか、それとも、彼等を未來の社會的鬪士に仕上げるために彼等の意志と情操とを堅固に鍛錬しつつある鐵床の如きものとして見られるべきものであるかは、觀察者らの見地の異るに從つて、それぞれに別様に考へられてゐることであるが、しかし彼等が現在非常に陰慘な空の下におかれてゐるものと見られてゐることだけは一つである。彼

等の前途には、來るべき公判が彼等を待ち受けてゐる。そしてその豫想が、どれほどか彼等の生活を不安にしてゐることだらうといふやうなことが、しかと我々の氣持を囚へない譯にはゆかない。殊にどの點から見ても、彼等に取つて重大問題中の最重大問題をなすものは、その公判の結果であらねばならぬ。雨か？ 風か？ 兎に角それは、善いにせよ惡いにせよ、彼等の一人々々の生涯の上に、一大廻轉期を劃するものであるには違ひあるまい。

しかし、我々が今彼等について言ひ得る範圍は、現在の法律によつて非常に狭く限局されてゐるから、私はこれ以上にどれほど言ひたいことがあつても、それを差し控へなければならない。で、私はここで私の論述の進路を一轉して、次の問題に移つて行くことにする。

四

事件關係の三十八名の被告たちに次いで、この事件からの深刻なる直接影響を受けて居るものは、各大學內に於て社會科學研究團體を組織してゐる幾多の青年學生たちである。尤も、今日の青年學生大衆のうちで、社會科學研究に全然無關心でゐられるものは、絶無でないとするも、それほど多數に上つてゐる氣遣ひはない。で、この點からいへば、學生の社會科學研究の傾向の流れの上の一點で起つた今度の事件からの影響は、或る程度に於て、青年大衆の間に全般的に感じられてゐるものといへる。けれども、青年學生大衆の間に全般的に感じられてゐるその影響が、特に社會科學研究諸團體に參加してゐる學生たちの間に感じられてゐるそれに比して、少くとも、より間接的なものだといふことは、事柄の性質上自明の理である。

學生たちの社會科學研究諸團體が當局からの壓迫の脅威の下におかれ始めたのは、數年前に於けるそれらの創設當時以來のことであつて、決して昨今に生じた新たな出來事ではない。けれども、一般的に知られてゐる通りに、昨年の上半期に於ける軍事教育の實施、及びそれに引き續き昨年末の京大及び同志社學生檢束事件などが起つてから、當局のその壓迫の手は層一層と嚴しく引きしめられて行つた。そしてその間には、高等學校生及び專門學校生の社會科學研究の禁遏問題も起り、またそれに關聯して、所謂文相內訓問題といはれてゐるものも起つた。かうした事情の下に於て、各大學內に於ける社會科學研究團體に參加してゐる學生たちは、極度に緊張した注意を以て右の學生檢擧事件の成行を見守るやうになつた。と、その事件は次第に發展し擴大しつゝ、當初から噂されてゐた出版法違反

及不敬罪の以外に、尙ほ治安維持法違反の問題をも含んだ事件となつてその豫審時代に入つたが、そこでもまた幾月もの時日が消費されたので、外部で待ちに待たれてゐたその豫審の結果の輪廓は、やつと九月中旬になつてから、世上に發表されたのであつた。

發表されたその豫審の結果を玆で細叙することは、全然無用の沙汰であらう。だが、それの發表が學生たちの側に向つて、豫期されてゐたこととはいへ、異常のショックを與へたとは事實である。事件關係の三十八名の被告たちに對する彼等の問題は、玆では觸れないことにするが、しかしその豫審の結果の發表と共に、各大學内に於ける社會科學研究團體の危機が迫つたといふことが、彼等の神經に鋭敏に感じられたことは、書き漏らされてはならないことである。そして、このことがまた、一方に於ては、學生たちの側に於ける學術擁護運動への、そして他方に於ては諸思想團體の自由獲得運動への、それぞれに起動力となつたのである。

學生たちが本能的に豫感したことは、時日の經過とともに段々と事實となつて現はれ始めた。事件關係の被告學生たちが、各所屬學校から受けた處分に關しては、それを公判決定後に決行して貰ひたいといふ學生側の希望に反して、それが咄嗟の間に斷行されたといふこと以外のことは、玆では何も述べまい。それからまた東大及び京大總長譴責問題の如きも、しばらく預かつておくことにしよう。が、豫審の結果の發表以來、社會科學研究學生たちの一擧一動が、從來よりも一層嚴重に、學校及び警察當局の警戒と監督との下におかれるやうになり、學生たちとしては何處から見ても極めて正當な學術擁護運動を擧行するやうなことまでが、ややもすれば非常に不自由な、時としては全然不可能的な、條件の下に持ち來たされたと言つたやうなことすらが、そこここで見受けられるやうになつたのである。その最も極端な一例は、九大法文學部の學生五名が、單に學生生活上の當面の重要諸問題に關する批判講演會を、彼等の主催の下に、十月七日に開かうとしたことから端を發して、遂に大學當局から退學を命ぜられたことである。今や、九大法文學部の教授會はそれに對して抗議を提出したとか、しようとしてゐるとか傳へられてゐるが、彼等の態度が果してどれほど強硬であるかが見ものである。更らにまた、他の一例としては、十月九日に京大法經學部教室で佐々木惣一博士の學生事件批判の講演が與へられたとき、學生聽衆の間に二名の刑事が紛れ込んでゐたことが發覺したとの新聞紙上の報道が擧げられる。それが恐るべき對學生スパイ政策の一端としてでなければ、何と

解釋し得られるものであらうか？

けれども、學生側に取つての最大災難は、社會科學研究聯合會が解散を命ぜられようとしてゐるといふ一事である。新聞紙の報ずるところによれば、岡田文相は『各學校間に跨がる社會科學研究聯合會に對し、斷然たる處置をとることとなり、各學校當局にその解散命令を發するに至つた』（『東朝』十月八日）といふことである。この報道が正確に事實と符合してゐるか否かについては、幾分の疑問がないでもないが、しかしそれが『學聯』の危機に對して警鐘を打ち鳴らす役目をしてゐるとだけは確かである。從來『學聯』は、事實上一の研究團體であると同時に、また一の研究擁護團體でもあつた。『學聯』に參加してゐる各大學内の研究團體の一つ一つが受ける壓迫は、それに依つて、『學聯』全體が受ける壓迫と見做されてゐて、そしてその基礎の上に於て適當と認められた擁護手段が講じられて來たものであつた。ところが、その『學聯』が、今や一大危機に瀕してゐるのである。そのことだけでも、それは學生たちに取つて一重大事である筈である。が、更らにそれから先きのことを考へれば考へるほど、それは彼等に取つては、尚ほ更ら打ち棄てておけない問題となるのである。

五

社會はこの『學聯』解散の危險性を知つてゐなければならない。若し當局のこの『學聯』解散の企てが、彼等が各大學内に於ける社會科學研究團體を虱つぶしに解散して行かうとする豫備行爲だとするならばその危險の程度は一層甚だしいものであるべきことは、言ふまでもないことである。今日の青年學生大衆の社會科學研究への熱心なる突進もしくは沒入の傾向は、決して一時的流行と見るべき現象ではなく、一の社會的必然の顯現だといふことは、私自身も他の諸家と共に、今日まで一貫して極力絶叫して來たことである。この簡單な理路を知ることは、しかし問題解決の鍵を握ることである。だとすると、各大學内に於ける社會科學研究團體を禁止することは、結局は熱心なる多數の學生たちを驅つて、秘密結社の方へ、若しくは秘密結社に導き易き會合の方へ、向はしめることになるのである。當局がもしそれを信じないならば、彼等は歴史の教訓に無知なるものと言ふより外はないのである。

若し當局が各大學内に於ける社會科學研究團體までを禁止する意圖を持つてゐないとするならば、彼等が如何なる方法かで『學聯』を解散しようとしてゐる理論的基礎が、我々には一層

把握できなくなるのである。『學聯』は個々の諸研究團體の結成から産まれた一つの聯合體であるが、しかし――否、それの故に、――聯合體としての『學聯』は、それの分立的構成部分としての個々の諸研究團體と、その目的及び本質內容を同じくしてゐるものである。それ故に、それらの一方を許しておいて、同時に他方を禁止するといふことには、理屈が立たないのである。或ひは當局は、個々單獨的に分立してゐては無力な諸研究團體も、一の聯合體に結成されると有力なものになるからいけない、といふかも知れないが、しかし個々單獨的の諸研究團體としての存在を許されてゐるものが、その許された目的及び本質內容の限界內に於て一の聯合體に結成されて有力なものになつて行つたところで、一向差支はない筈ではないか？ 岡田文相は屢々、各大學內の社會科學研究團體と外部の諸團體との連絡を氣にしてゐるやうなことを言つてゐるが、しかし或る狀態の下に於て外部の諸團體との連絡をとることの可能不可能の問題は、『學聯』と個々の諸研究團體との場合によつて、本質的に差異の生ずるやうなことはないのである。のみならず、各大學に於ける諸學會――たとへば、佛教及びキリスト教靑年會とか、學生國際聯盟協會とか、劇研究會とか、等等――は、大抵は外部との連絡を取ることが許されてゐるのに、ひとり社會科學研究團體だけに限つて、それが原則として許されないといふやうなことは、一體どうした理論的根據から出て來るのか？

若し、當局が『學聯』に解散を命じようとしてゐるのは、さうした本質論から來てゐるものでなく、寧ろ單なる一種の政策論から來てゐるのだとすると、それは敎育行政上から、益々不都合だといけなければならないことになるのである。岡田文相は兎に角敎政の首腦部に長となつてゐる身だから、さすがに各大學內の社會科學研究團體までを、これといふほどの根據もなく、學生檢擧事件の犧牲にするやうな蠻行を躊躇する氣持には、或ひはなれないでゐるのかも知れないが、しかし現在に於ては、政府以上に反動的になつてゐる在野諸政黨や、思想的に尋常一樣の極右黨以上に極右端に至つてゐる貴族院や樞密院やの攻擊の銳鋒を避けるために、一種の折衷的手段として、『學聯』に解散を命じようとしてゐるものと、强ひて解釋すれば出來なくはないかも知れない。けれども、假りに若しさうだとするならば、彼のその無確信及び無定見のふらふら腰は、見るに堪へない醜態といふよりも、寧ろ僞者的ブルジョア政治家の悲哀を語るものと見なければならないことになるのである。けれども、學生たちの立場からいへば、そんなことはどうでも構はないのであつて、寧ろただ『學聯』の解散といふことだけが、徹頭徹尾、

彼等の最大關心の焦點をなしてゐるのでる。

といふのは、『學聯』の解散といふことは、單に理論上不得要領を極めてゐるだけでなく、實際上に於てもまた、學生たちの前に非常に危險なる陷穽を設けようとしてゐるものだといはなければならないからである。前に言つた通りに、若し『學聯』の解散が各大學內に於ける社會科學研究團體の解散の前提である場合は論外だが、しかし萬一さうでない場合にでも、それがために學生たちの上に臨む脅威は決して去らないのである。即ちその場合には、各大學內の社會科學研究團體は、各々單獨の團體として、『學聯』の廢墟の上に存續することにならうが　それらの諸團體は皆、その敗殘の姿に於ても尙依然として相互的に友誼的諸團體であるに相違なからうから、從つて彼等の間には尙ほ依然として相互的往來及び交通が行はれない譯には行くまい。それは、必然不可避のことであらねばならぬ。さうすると、彼等は尙ほ依然として何時までも壓迫され追跡されてゆく危險の下に立たされて行くばかりではなく、それがために彼等が不可測の奇禍を買はないとも限らない機會が、益々多く彼等を待ち受けることになるであらう。そこに、あらゆる不安中の最大不安が、あらゆる危險中の最大危險が、人知れず伏せられてあるのである。

最近數年間を通じて、社會科學に對して熱心な研究的態度を執つて來た青年學生大衆は、陰慘極まる空の下に時をすごして來た。彼等は彼等の忍耐力の堪へられる限り、諸方面から猛烈な鞭を加へられて來た。彼等はその上尙ほ鞭うたれつゞけなければならないのであらうか？　そして彼等がかくて尙ほ無際限に鞭うたれて行くのを、社會はいつまでも冷然と坐視して行くに堪へるであらうか？

六

若し社會科學研究への方向を辿る青年學生大衆に同情を寄せてゐる人々のうちで、『學聯』の解散が社會科學壓迫問題の大團圓でもあるかのやうに考へて、そしてその後は各大學內の社會科學研究團體は靜かに研究をつづけて行くことが出來るであらうなどとの期待を懷いてゐるものがあるとするならば、それは飛んでもない短見だといはなければならない。彼等は本來社會科學研究學生たちに好意を示してゐるのだから、——よしその『好意』がいかほど賴み甲斐のないものにもせよ、——『學聯』解散後に於ても尙ほ各大學內の社會科學研究團體が研究の自由を蹂躪されるやうなことがあるならば、その時こそは一つ積極的に出て行つて應援してやらう、などと決心してゐるかも

知れない。——よしその決心が『いざ』といふ場合に忽ち鈍ぶつてしまふ見込みが充分あるにもせよ。——もとよりその決心も、ある方がないよりは幾らかましに違ひない。が、彼等が假り初めにも『學聯』の解散で社會科學壓迫問題の鬼がつくものとのやうに考へてゐるならば、彼等は『陞落ちて幽寒し』とかいつた諺の意味をすら、餘りよくは呑込んでゐないものだといはなければならないのである。

曾て或る期間に亘つて、學生檢擧事件の經過の發表があり次第、『學聯』の解散はおろか、各大學内の社會科學研究團體も諸共に、同樣に鐵槌を加へられるであらうことが眞劍に憂慮されてゐた。少くとも、この方面に於ける從來からの當局の惡狀を極めた遣り口から察すれば、或る一部でさういふ不安が懷がれたのも、決して無理なことではなかつた。がしかし、いよいよ事件の經過の發表があつた時には、當局はさすがに、即時にその通りの手には出なかつた。それで或る一部では、それがために多少一時のがれ的な安心めいた氣持が感じられなくはなかつたやうである。けれども我々は、それにも拘はらず、豫てから懼れられてゐた結果が早晩必ずやつて來るであらうとの確信を棄てることは出來なかつた。と同時に我々はまた、他の一面に於ては、當局が電光石火的に壓迫の手を出さなかつたことの諸原因を忖度してみる試みを拋擲し去ることも出來なかつた。

この試みに於て、我々がそれらの諸原因を算へることは、必ずしも不可能事ではない。もとより、現在の支配階級が既に充分に遠く乗り出してゐるその反動政策からの方向轉換をすることが絶對的に不可能事である以上、現内閣がその社會科學研究壓迫の根本方針を改めることが出來ないといふこともまた、決まり切つたことである。だが、しかし、その前提の下に於ても、現内閣が四圍の情況に應じて、多少それを加減するといふやうなことは、全然あり得ないことではない。しかも現在の四圍の情況が、現内閣をして否應なしにさうせしめるやうに仕向けて居るといふことも事實のやうに考へられる。尤もそれは、我國の學界の一般の輿論が、——『改造』及び『我等』の各々十月號に載せられてゐる諸家の學生事件批判の上に現はれてゐる通りに、——一齊に當局の高壓手段を糺彈するに傾いて居るといふ事實を指してゐるのではない。從來に於て政府は、學界の輿論などを餘り重要視しないと言つたやうな、我々には無知から出た傲慢さだと思へる態度を取つて來た。けれども今日では、さういふことよりも寧ろ、反動的諸分子の軌道を外づしたやうな各種の活躍が、却てより多く政府を手古摺らせてゐるのである。反動的政府が反動的諸分子に惱まされてゐるなどは、

まことに歴史の悪戯である。だ、それは現在我国の政治舞臺の上に展開されてゐる一幅の活畫である。所謂怪文書事件だとか、怪寫眞事件だとかの出現が、そのことのいい實例である。それに在野諸政黨がまた、盛にさうした諸事件を、政府に向つての攻め道具に利用してゐる。かういふ譯で、次の總選擧に於て赤裸々に反動的氣勢の潮流に乘らうとしてゐるものは、政府の與黨であるよりは、寧ろ在野諸政黨であるべき形勢が、我我の眼前に鮮明に描き出されてゐる。事件進行のロジックは、政府與黨をして、どれほどさうしたくとも、思ふ存分にさうすることを得しめないやうに進展してゐる。そこへ持つて行つて、政府與黨としての憲政會が、次の總選擧に於て、幾らかの政治的自由主義の假面を冠つて打つて出るのは、同黨に取つては必ずしも損にはなるまい、と思はしめる根據も多少はある。殊に次の總選擧は、普選法による最初のそれだから、その時には憲政會は、必ず同黨がその普選法制定の殊勳者だといふことを鼻に掛けて吹き捲くつて、反對諸政黨を不利の地位へ追ひ込まうとするに決まつてゐるから、同黨は少くとも名目上だけでも、多少は政治的自由主義を匂はすであらうことが考へられる。兎に角同黨は、反動派氣取りを餘りにしないであらう。また今日の實際の社會及び政治事情のうちにも、憲政會がさうした行き方に出ることを同黨のために有利に見せてゐるものが澤山ある。たとへば、長野縣事件及び木崎村事件、並びに他の諸地方にも起つたそれらと類似の幾多の事件は、政府及びその與黨に如何なる政治的教訓を與へたかを思へ。最後に、しかし最少にでなく、濱松市の市議選擧に三名の勞働議員が新たに選出されたことの如きもまた、普選實施後の總選擧の行はれるべき時代の政情の或る一面を豫感せしめる。また話はずつと後のことになるが、最近には北海道に於ても、全道の五市に於ける市議戰を通じて、四名の勞農黨議員が選出されて、しかも候補者數に比例しての當選率が、すべての政黨中最高位を占めたとさへ傳へられてゐる。で、かうした社會及び政治事情が、或る程度及び範圍に於て、現内閣の社會科學壓迫の戰術の上に、おそらく暗々裡に、多少の影響を及ぼしたであらうことは、必ずしも我々に想像が出來ないことではないのである。

だが待て！　我々は結論に急ぎすぎてはならない！　今に述べたやうな事情が、よし現内閣の社會科學壓迫の戰術の上に多少の影響を及ぼした――並に、及ぼすであらう――にせよ、それが畢竟ただその手綱の引締め加減の緩急を左右した――並に、するであらう――といへるほどのことにすぎないことは、より多くの必然性を以てそれ自身を我々の上に押し附ける結論

であらねばならぬ。元來、社會科學の壓迫は、直接には現內閣がやつて居ることであるが、しかしその根本的原因は現在の世界に共通的にやつて來てゐる帝國主義時代下の支配階級の反動化的趨勢のうちに求められるものである。それ故に、この趨勢そのものが存續する限りは、――この趨勢は、帝國主義の最終的崩壞の瞬間が到來するまでは、單に依然として存續するばかりでなく、加速度的に增進しようとする內的必然性に驅られつつある、――我國に於て、どういふ內閣が政局の上に至つても、社會科學の壓迫を續行するに決まつてゐる。即ちそれは決して、若槻內閣の特殊性に基因してゐるものではないのである。そして、その時々の內閣の特殊性は、ただその壓迫の戰術の上だけに樣々に形を代へて表現されるにすぎないのである。だとしてみれば、若槻內閣が時として何かの拍子に、その壓迫振りの上に多少の手加減を加へるやうなことがあつても、それは究極に於て、ブルジョア政治の實行機關としてやるべきだけのことを、それがやるのが適當だと認めた時點に於て、必ずやるには違ひないのである。それ故に、如何なる場合に於てにせよ、我々がうつかり油斷してゐるやうなことは、我々に取つて最大の禁物である。論より證據、學生の社會科學研究の危機は、いつのまにか、『學聯』解散の脅威によつて、既に充分に釀成されてゐるではないか！

七

かういふ風に、社會科學の壓迫は、帝國主義時下の支配階級の反動化の趨勢の進みの上に生じた一現象であつて、從つてそれはどの內閣がやるとか、どの內閣がやらないとかの問題ではない。だが同時に、今言つた通りに、個々の內閣の特殊性は、その壓迫の戰術の上に樣々に表現されることも事實である。この理由に依つて、若槻內閣は結局現在では『學聯』解散の間際まで漕ぎ附けて來はしたが、しかしその漕ぎ附けて來た方法の上には、如何にも若槻內閣らしい持味を見せたのである。そして、それを理由づけた岡田文相の辯明が、恰度それに相應して、如何に珍妙を極めたものであつたかについては、私は本誌の前號に載せられた私の學生事件批判のうちに於て、その一例を示しておいた。

ところが、在野諸政黨となると、政友會にしても、政友本黨にしても、さすがは怪寫眞事件などを政府に對する攻め道具に使つてゐるだけあつて、社會科學壓迫問題に關しても、政府の態度に二重三重の輪をかけたほどの反動ぶりを示してゐるのである。尤も、我々の立場から見ても、怪寫眞事件は如何にも一つの

重大問題を含んでゐるもののやうに思はれるが、しかし我々の見當のつけどころは、彼等のそれとは根本的に違つてゐるのである。本誌の前號で發表された布施辰治氏の朴烈問題に對する論文を讀んで多少考へさせられたことを感じた人々は、この問題に關して、おそらく我々と同じ立場の上に立たざるを得ないであらう。しかしそれは、茲では別問題である。我々は今、在野諸政黨の社會科學壓迫問題に對する態度の如何に保守的反動的であるかを見ようとしてゐるのである。

しかし、そのことに關しては、私はその詳細を諸新聞紙の記事に讓らうと思ふ。だが、私が茲に是非とも一言しておきたいことは、彼等が學生檢擧事件に關して、頻りに某々教授の責任を問ふといふやうなことを言ひ立てることに沒頭してゐるといふ一事である。しかも彼等がそれをするに際して、彼等は毫も具體的の實例を示さうとはせず、ただ單に抽象的に、現在に於ては少數の『赤化教授』だか、『不逞教授』だかが、全國の諸大學に於ける社會科學研究學生たちをも危險思想や危險運動の方へ導き入れてゐるのだ、といつたやうな意味の、甚だ茫漠として捉へどころのないやうな憶測を基礎として、兎や角と騷ぎ立てゝゐるもののやうに、我々には見えられるのである。しかも事實上、彼等がそれらの所謂『赤化教授』だとか『不逞教授』だとかとして算へ立ててゐるものは、高々數人を出ることなく、最も多く見ても、兩手の指を屈するにも足りないやうである。それ故に、假りに若し、彼等の言つてゐる通りに、僅かにそればかりの不逞教授たちだけが全國の大學生たちの社會科學方面の學術研究や思想運動の傾向を指導してゐるものだとすると、他の大多數の善良なる教授たちは一體、それに關して從來何をしてゐたのか？　といふ疑問が、當然のこととして、それにつゞいて生じない譯には行かないのである。が、さうしたことが、事實上果してあり得ることだらうか？　私から見れば、彼等がさういふやうなことを言つてゐるところに、もう既に、學生問題の批判及び解決に對する彼等の無智無能が表白されてゐるのである。少くとも、彼等があるがままの事實を正視し得ないでゐて、ただ夢中になつてさうした放言に耽つてゐるのは、單に一般の社會科學研究學生たちに對して大なる侮辱であるばかりでなく、同時に大多數の善良なる大學教授たちに對してもまた聞き棄てにならぬ讒誣でもある。のみならず、彼等が擧げてゐる少數の不逞教授たちだけが、全國の社會科學研究學生たちの學術研究及び思想運動を指導してゐるのだといふことは、それらの少數教授たちだけを『超人』扱ひにすることにもなるのである。それ故に、さうした基礎の上に組み立てられた一切

の談論は、まさしく資本社會が産んだ『神話』だともいへるのである。從つて、さうした『神話』に即して學生問題が『批判』されたり、『解決』されたりしてゐては、學生たちこそ堪まつたものでないのである。

かういふ譯で、現在の諸大學に於ける學生たちの社會科學研究問題に關しては、政府が既にいゝ加減に辛辣な高壓手段に出てゐるにも拘らず、在野諸政黨は、それではまだ不足だといつた風に政府に當り散らしてゐるのである。社會科學研究學生たちが今や異常な受難時代の前に立たされてゐるのも、決して偶然ではないのである。

それに、かういふ情態の下に於て『學聯』の解散問題がいよ〳〵現實化するやうにもならば、學生たちとしても、そのままそれを坐視することが出來ないであらう。彼等が彼等の不當と認める壓迫に對しても、飽くまで消極的受動的態度を取ることが出來るであらうことは、誰れにも期待ができない筈のことである。若しそれを期待するものがあつたら、我々は期待する方が間違つてゐるのだといはなければならぬ。兎に角學生たちが、さうした暴壓に對して、大學理論上、正々堂々と抗議する根據を持つてゐることだけは、爭へない事實である。だとすると、そこに再び、、、、、、、はなければならないことになりはしないであらうか？　私はそれを虞れる。

この際社會がこれらの受難學生たちの立場に對して正當な理解を持つた上で社會科學壓迫問題の批判に向ふであらうことは、我々から見て最も望ましく考られることである。始めから理由の正當と否とに拘らず、學生たちを壓迫しなければならないことに決めて掛つて居るものに向つては、我々は何らのメツセージをも持ち合はさない。けれども、無用の戰ひは、避けられるならば、避けられなければならぬ。が、×××主張が理不盡の、蹂躙に任かされるところ、そこに無用有用の問題を離れた皮肉な、、、必然のものとなり、不可避のものとなる。この意味に於て私は、學生檢擧事件の發表と共に『改造』や『我等』などの例に見られたやうに、學界の或る一部から、それに對する可なり懇切な批判が、しかも比較的快速に公にされたことをよろこぶ。さうした批判は、やがて一般社會の批判への導きの光となることによつて、多少とも、問題の解決を滑かにすることに貢獻するであらうことが、さして無理もなしに推測され得る。それに、社會科學研究壓迫問題はまだ片附いてゐないのみならず、『學聯』の解散の脅威とゝもに、ます〳〵尖鋭化されようとする徴候をさへ見せてゐる、だとすると、この問題に對する理解ある批判が、今後益々多く供給されて行くであらうことは、より一層熱望されなければならないことである。

金融金利に關する問題

堀江歸一

一、大勢順應と市場利準

一國金融の狀況は常に變動して、時に緊縮の極に達したと思はれたものが、何時か緩和したり、緩和其度を過ぐれば、緩慢と爲つたりして、必ずしも一所に定着することを許されない。故に金融機關として、金融市場に於て、資金に對する需要に應じ、且つ其供給を掌る銀行の如きは、斯く金融の變動する狀況に應じて、自家の營業を左右し、以つて繁閑の宜しきを得ることを期しなければならない。但し一概に銀行と云つても、其職務に就て、將た又其金融市場に於ける地位に就て、中央銀行と市中銀行との間には、嚴重なる區別の設けられることを必要とする。蓋し市中諸銀行の金利歩合を決定するや、大體に於て、大勢順應を方針とするのであつて、市場の金融緊縮すれば、之に隨つて諸銀行は金利を引上げる一方に、金融緩和すれば、之に伴つて金利を引下げることを常とし、此定則以外に一歩だも踏み出すものでなく、又踏み出す可きものでもない。萬一或る銀行が金融市場を支配しやうとか、金利歩合を左右しやうと云ふ意思の下に、他の諸銀行に卒先し、又市場の大勢に逆つて、金利歩合を上下したならば、或る場合には、同業者から不利の競爭を受け、他の場合には取引先から銀行の實力上、堪へ得ざる資金融通の要求を受け、其孰れを以つてしても、銀行として、營業上窮地に陷らざるを得ないであらう。市中諸銀行が金利歩合を決定するに就て、常に大勢順應を事とし、甚だしきに至つては、一銀行は他銀行の爲す所又は爲さんとする所に倣はうとし、躊躇逡巡、殆ど自家一已の意思を存せず、一個の木偶に過ぎざる如くに見へるのも、上記の關係の然らしめるものと解される。私は戲に語つたことがある、日本に於て銀行業者と爲る程、容易なる事はあるまい。内に居つては、安全第一を主旨とし、石橋を叩いて渡る心得を持し、外に出でゝは、他銀行當業者の眼顏を窺つて、其爲す所を學べば、大過なきを得るの

であると。言或は奇矯に失するの嫌あるかも知れないが、銀行業者殊に預金銀行の當業者が十年も二十年も一日の如く、單調なる營業に從ひ、何等の奇を求めず、新を逐はず、平穩無事を事とするが如き、即ち以上の批評の出で來る所以である。

中央銀行は其金利政策に於て、大勢順應を方針とす可きものであるか、夫れとも市場利導を方針とす可きものであるかと云ふことは、一個の問題であり、國に依り、又場合に依つて、其行はれる所、必ずしも一なるを得ない。中央銀行が市中銀行の爲すが如く、大勢順應を方針とし、金融の緩和した時に、金利を引下げると共に、金融の緊縮した時に、之を引上げ、總て大勢の赴く所を逐ふて、行動すると云ふことも、一の政策たるを失はないが、私は中央銀行が此政策に重きを置いて、他を顧みざることに、同意を表するを得ない。蓋し中央銀行は銀行券發行の獨占權を擁する一方に、國庫金を專管し、是等の二點から、金融上に大なる勢力を有し、殊に制度若しくは習慣上、市中諸銀行から、預金の預入れを受ける爲めに、益々此勢力に加はる所あり、其方針の立て方に依つて、金融市場の赴く所を左右するに難しとしない。而して一國金融市場を無統制の狀態に置き、金融の緩漫なるや、何處までも金利を低廉ならしめ、又金融の緊縮するや、飽くまでも金利を高貴ならしめるが如き、決して金融市場の安定を保つ所以でなく、之を安定せしめるには、中央銀行に於て豫め金融市場の動靜を觀測し、近き將來に金融の緊縮せんとするや、中央銀行は豫め之に先だつて金利歩合を引上げ、斯くて徐に緊縮の勢の來ることを馴致す可く、又遠からず金融の緩漫ならんとするや、其以前から金利歩合を引下げ、以つて緩漫の勢を促進することを必要とするのであつて、是れが即ち市場利導を方針とする中央銀行の金利政策であり、其適用宜しきを得て、中央銀行の金融市場に於ける職分亦完全に發揮されるを得るのである。

二、日本銀行の金利政策

日本銀行の金利政策は大勢順應と市場利導と孰れに依るものであるか、此點に就ては、日銀當局者なり、財政當局者なりから、何等説明の與へられたものがなく、又之を確める既往の事歴亦不充分であるやに思はれる。元來日本銀行設立の一目的は銀行の資力の足らざる所を補助すると云ふことに存し、日本銀行自ら市場に出でゝ、市中銀行と競爭するが如き、全然考へられざる所であつた。斯くて日本銀行は市場利率よりも幾分か低廉なる程度に公定歩合を置き、市中諸銀行の爲めに、此低廉なる歩合を以つて、手形の再割引に應ずることゝし、今日に至るま

で、此方針に逾る所あるを見ない。此方針の行はれる一方に、日本銀行の資力の豐富である以上は、日本銀行は或る程度まで、如何やうにも、市場を利導し得る譯であるが、從來の事實に徴するに、日本銀行は大勢順應を方針とし、市場利導の方針に出づるは、極めて稀れなる場合に屬し、又其稀れなる場合は多く政府の干渉の日銀に加へられる時であると認められた。既に大勢順應を事とする以上は、日本銀行の金利歩合に於ける變動が必ずしも頻繁ならず、金融市場に起る時々の變動に對して、殆ど風馬牛相關せざる狀態に居つたことも亦怪むに足らない。歐洲諸國の中央銀行を通じて、佛蘭西銀行は金利歩合の平靜なることを得意とし、三年四年の久しきに亘つて、同一率の金利を維持した時代もあつた。之に比較すれば、日本銀行の金利政策には稍や活動的分子を含んで居ると云へるかも知れないが、英獨兩國の中央銀行や、合衆國東部の聯邦準備銀行が金融市場を利導する方針を以つて、金利歩合を上下するものと相對して考ふるときは、同日に談ず可からざるものがある。試に大正七年九月以來の日銀各種金利歩合を改正の期日に就て、掲げれば、左の如くである。

	貸付及手形割引 國債抵當	貸付及手形割引 國債以外抵當	商業手形	當座貸越
七年 九月 一五日	一六厘	一七厘	一六厘	一九厘
同 一一 二五	一八	一九	一八	二一
八 一〇 六	二〇	二二	二〇	二三
八 一一 一九	二二	二四	二二	二五
一四 四 一六	二〇	二二	二〇	二三
一五 一〇 二	一八	二〇	一八	二一

右の表に就て見るに、大正七年十一月日本銀行が金利歩合を引上げ、更に八年に至つて、十月十一月の兩度に於て、同樣の擧に出でたのは、當時我國經濟社會に横溢する投機熱を壓抑して、其甚だしきに至らしめざる趣意に基けるもの丶如くにも解されるが、投機熱の昂進し、熱沸せる程度の高さに對して、金利歩合引上の狀は寧ろ緩漫であつて、上記の目的を達するの効果を現はす能はず、結局大正九年三月に於ける恐慌の襲來と爲つたのである。思ふに此際に於ける恐慌は之を免かれるを得なかつたかも知れないが、若しも投機熱の勃興し、其進行しつ丶ある時代に於て、日銀の金利政策宜しきを得たならば、彼の如き恐慌の慘害を世間に流布するに至らず、幾分なりとも之を輕うするを得たであらうと云ふことは、世間一般の公論であつた。然も當時日本銀行が金利歩合の引上に就て、自由の處置に

出でるを得なかつたのは要するに積極政策の下に、經濟社會に人爲的好景氣を煽揚しやうとする政友會が政權を掌握して、日本銀行の營業方針殊に金利歩合の決定に干渉を加へた結果であることも亦公然の秘密を以つて、目されるのである。

大正九年三月の恐慌、之に次ぐ不景氣時代の數年間を通じて、日本銀行は遂に一回も金利歩合を改正せず、依然として八年十一月に決定された儘に据置いたのである。其理由とする所は第一、投機熱勃興時代に充分の引上を行はなかつた爲め、不景氣時代に臨んで、引下の餘地を生ずるに至らなかつたこと、第二不景氣時代に臨んで、尚ほ財政膨脹し、加ふるに政府の經濟政策の不定であつた爲めに、到底金利歩合の引下げられる狀勢に接せざりしことの二點であつて、何れも首肯するに値した。其後加藤内閣成立し、三派聯合の力に依つて、經濟財政に消極政策を施し、民間經濟社會に於ても、整理に勉めたには、相違なかつたが、尚ほ大正十四年四月に於て、日本銀行が金利歩合を引下げたのは、聊か無理の伴ふ嫌なきを得なかつた。當時の金利歩合改正たる、要するに改正の行はれる直前經濟社會不振の狀況は次第に酷烈と爲り、當業者中、其打撃に苦むもの續出し、現に高田商會の如き、内外に相當の信用を有した貿易業者にして、破産を暴露するに至つたものがあり、若しも其儘斯る勢を以つて進んだならば、他に同樣の悲運に陷るもの丶相踵ぐやも、亦測り知るに難く、此危機を救ふには、一時の應急的措置をして、日本銀行をして利下を行はしめる外に、道なき旨を政府に進言する者あり、政府亦此言に動かされて、遂に日銀をして利下の處置に出でしめたものと傳へられる

三、最近の經濟狀態と日銀金利

然るに本年に入るや、我國の經濟社會には、著しく改新の跡の認められるに至つた。即ち貿易に於ける逆勢の減退、金融の緩和、有價證券市價の騰貴、爲替相場の恢復等は我國經濟社會の趨勢の良化し、改善しつゝあることを證明するものであつて、事情の斯の如く爲る以上は、日本銀行の如き先づ金利歩合を引下げ可きものであり、而して其引下の時期は上半季を終つて、下半季に移る可き際に在りとし、私は本年六月十五日發行の「エコノミスト」に於て「經濟界の安定と振興」と云ふ題下に此事を論じ、續いて改造九月號所載經濟社會轉換期に關する豫測と題する論文の一節に於て、日銀利下の機會の到達したことを述べ、何故に今日に至るまで、之を斷行せざるやを難じたのである。當時私が此事を考へたのは、

第一、諸物價が著しく低落し、假令ひ英米兩國の物價に比

較しては、尙ほ高貴であるとしても、我國の實際に於ては、殆ど其底値とも云ふ可き所に達したこと、

第二、斯く諸物價の低落するに至るまで、公私經濟に整理の行はれたこと、

第三、株式商品兩市場とも年來の不景氣に依つて、疲弊を極め、今更ら多少の利下が實行された所で、爲めに刺戟を受けて、反動的投機熱を惹起するが如き危險の絶無であること、

第四、貿易、國際貸借、爲替、金融の何れを見ても、從來の逆勢を脱して、次第に順調に向ひ、市場の金利歩合中、或るものは日銀の公定歩合に接近し、又他の或るものは公定歩合の以下に下り、將來双方の鞘開きの益々大なるに至らんとすること。

の諸點を理由としたのである。固より內外諸國の物價を取つて比較するに、戰前を百とする物價指數に於て、

		英吉利	合衆國	日本
一九二五年				
	一月	一七一	一六〇	二一三
	六月	一五七	一五七	二〇〇
	一二月	一五三	一五六	一九四
一九二六年				
	一月	一五一	一五六	一九二
	六月	一四六	一五二	一七七

と云ふ數字が示され、英米日の三國中、日本の物價が今日尙ほ最高位に居ることは、明白の事實であつて、其れだけ我國の經濟社會は不健全の趣きを脱しないと云はれ、其之を脱せざる間に、金利引下の如き刺戟の與へられることを不可なりとする議論は一個の議論としては、誠に立派であらうが、私を以つて見れば、餘りに數字に膠着して、事物の實勢を顧みざる嫌なきを得ないのである。即ち右の期間に於て、我國に於ける物價下落の速度が如何に急なるものであつて、英米兩國に對する鞘開きの減縮しつゝあるかは、吾人の看取し得る所である。此以上に低落するものとすれば、其れは自然の成行に任す可き所であつて、濫に人工を用ひて、下落の勢を刺戟したならば、其四邊に及ぼす影響に就て、考へなければならないものがある。現に右の程度に於て、物價の低落しつゝあつた間に、如何に我國の經濟社會に整理の行はれることの急であつたかは、事業會社の減資解散を以つて、之を知るを得るのである。即ち

	減資解散資本金	會社數
大正十二年下期	一五一百萬圓	五〇四
同　十三年上期	七二五	一、二〇〇

同	下期	七七八	一、四三〇
同	十四年上期	、二六二	四三六
同	下期	四五八	八九九
同	十五年上期	二四〇	四一三

とあるが如き、明に右の事實を語るものであつて、私が本年四五月の頃日銀金利の引下を唱へたのも、是等の材料を根據としたからである。然も此事は當時遂に行はれず、空しく時機を逸し去つた。若しも當時此事にして行はれたならば、死兒の齡を算する嫌はあるが、下半季に於ける我國經濟社會の狀勢は今日に比較して、有利なる方嚮に轉換するを得たことゝ考へられるのに、政府並に日銀に決斷のなかつた爲めに、數箇月前若しくは兩三箇月前に行はる可かりし事が今日に遲延し、其間經濟社會を惡化した傾きこそあれ、改善の見る可きものなかりしことは、私の遺憾とする所である。元來日銀の金利步合の如きは、市場利率と同じく金融市場の狀況に變動ある限り、之に適應するために、幾回の改正を加へるに憚らざるものであるのに、我國に於ては、日本銀行金利步合の確定せるを可なりとする考へのある爲めか、其れとも當局者の無能の然らしめるものか、日銀の金利步合は兎角一所に膠着して、時勢と沒交涉の趣きを生ずる。斯の如きは、吾人の認めて不可なりとする所である。

兎に角上半季末若しくは下半季始めに於て、日銀利下の行はれなかつたことは、我國經濟社會の狀勢をして不景氣の儘に居らしむることゝ爲つた其上に、下半季に入つて、株式商品市場の不振、爲替相場の急騰、銀價の下落、支那の變亂等相次げる爲めに、却つて惡化の徵すら現はれるに至つたのである。斯る狀勢の下に於て、日銀利下の行はれるが如きは、不可能事であり、日銀は爲す可き時に、利下を爲さずして、遂に其好機を逸し、金融界に對して超然たるは愚か、拱手爲す無きものであると云ふ非難すら生じ來つたのである。然るにかゝる非難に當る爲めか、日本銀行は十月二日突然各種金利步合に二厘方の引下を行ふことを發表した。此一事は日銀として爲す可き時に、爲さずして、爲す可からざる時に、爲したものであると云ふ再度の非難を蒙ることゝ爲つたのであるが、之に對して吾人は如何なる批判を下することを以つて、正しとするか。

四、日銀利下に對する批判

日本銀行の金利政策を決定するものは、大勢順應方針と、市場利導方針との二者であること、旣に論じた所である。今回の日銀利下は二者の孰れに屬するであらうか。試に市場に行はれる金利步合を見るに、九月中旬並に下旬に於ける東京市中の日

歩は左の如くであつた。（單位厘）

	翌日拂コール 最高	翌日拂コール 最低	無條件コール 最高	無條件コール 最低	月越コール 最高	月越コール 最低	商業手形 最高	商業手形 最低	紡績手形 最高	紡績手形 最低	擔保付手形 最高	擔保付手形 最低
九月十六日	一五、五	一三、五	一六、〇	一五、五	一八、〇	一八、〇	二四、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
十七日	一五、五	一三、五	一六、〇	一五、五	一八、〇	一八、〇	二三、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二四、〇	二〇、〇
十八日	一五、五	一三、五	一六、〇	一五、五	一八、〇	一八、〇	二四、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
二十日	一六、〇	一四、〇	一六、〇	一六、〇	一八、〇	一八、〇	二二、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
廿一日	一六、〇	一四、〇	一六、〇	一六、〇	一八、〇	一八、〇	二五、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二五、〇	二〇、〇
廿二日	一六、〇	一四、〇	一六、五	一六、〇	一八、〇	一八、〇	二五、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
廿三日	一六、〇	一四、〇	一六、五	一六、五	一八、五	一八、〇	二三、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二四、〇	二〇、〇
廿五日	一七、〇	一五、〇	一七、〇	一七、〇	一八、五	一八、五	二三、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
廿七日	一八、〇	一六、五	一八、〇	一八、〇	一八、〇	一八、五	二三、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
廿八日	一八、五	一八、〇	一九、〇	一八、五	一九、〇	一九、〇	二三、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇
廿九日	一九、五	一九、〇	一九、〇	一九、〇	一九、〇	一九、〇	二五、〇	一九、〇	二〇、〇	一七、五	二三、〇	二〇、〇

右の表の如くであるとすれば、市中の金利歩合はコールを除けば、日銀公定歩合に對して、必ずしも下廻る程に、低落して居らないと共に、其れ程までに、金融の緩漫を示して居るとも考へられない。此事實を目前に控へて、尚ほ日本銀行が日歩二厘方の引下を行つたとすれば、其れは決して多年行ひ來たつた如くに、大勢順應の方針に基いたものでなく、寧ろ市場利導の見地に於て、之を爲したものと認められる。然らば日本銀行今回の利下は能く金融市場に向つて、金融緩和の大勢を馴致する力を現はすに至るかどうか。或は世間の一部に風評される如く、單に一時の人氣を博し、政治上に利用する考への下に行はれた技巧に止まるかどうか、吾人の考察を要する所である。

新聞紙上に散見する所を以てすれば、今回の日銀利下に對しては、之に依つて受ける利害の關係から、贊否二樣に意見が岐れて居る。一は三井三菱の如き大銀行代表者の言であつて、彼等は金融未だ緩和せず、金利の尚ほ低落せざる今日、日本銀行が金利を引下げたことを以つて、輕躁であり、不當であるとするのであるが、一方に實際事業を經營し、銀行に就て資金の融通を求める地位に居る事業家は日銀の利下を以て、恰も天來の福音とするが如くに、之を歡迎して已まないのである。蓋し前者は成る可く金利の標準點を高くして、資金融通から生ずる利益を大ならしめやうとする一種の高利貸根性に基くのであつて、彼等の眼中には自家營業上の利益あるに止まり、國家の經濟もなければ、國民の生活もない。斯る輩の言論の取るに値せざるは勿論である。試に少しく既往に遡つて、我國の銀行業者殊に大銀行代表者の爲した所を檢したならば、如何であるか。

往年の日露戰爭の後を受けて、我國公債市場の低落するや、之に依つて窮地に陷つたものは、銀行業者であつた。斯くして彼等は公債市價の騰貴を謀らなければ、自家營業の利益を維持す

る能はざるものとし、百方運動の後、第二次桂內閣をして減債基金の增額非募債政策の實行を果さしめ、以つて目的を達したのであつて、而して之を爲すや、一般財政上の利害の如きに就いては、何等考慮する所がなかつた。然も其後金融緩漫を告げ、金利步合も低落して、彼等の營業上に於ける利益の乏しきに至るや、彼等は金融調節を名として、政府に向つて、公債の發行されることを要望して、已まなかつたのである。銀行業者の言論行動が盡く自家當面の利害から打算され、此以外に何ものゝ存せざるは明白の事實であつて、我慾偏執の精神は彼等に於て、其盛なるを認める。銀行業者の團體が從來憲政會內閣に好意を寄せたのは、此內閣が非募債政策の下に、公債の時價を壓迫せず、一方に比較的高利政策を持して、銀行業者の高利獲得に便ならしめたからであつた。然も今回の如く日銀利下の行はれるや、第一に營業上に脅威を覺へるものは、銀行業者に外ならない次第であるから、昨日の味方は今日の仇敵と爲る譬の如く、忽にして戟を逆にして、政府に反擊を加へやうとするのである。

銀行業者の言動の不信、斯の如くであつて、彼等の利下反對論の如き、私を以つて之を見れば、一顧に値しない。左ればと云つて、事業家が資金の融通に窮するの餘り、如何なる事情の下に於ても、金利步合の低廉なるを欲する考へも亦吾人の可なりとする能はざる所である。中正なる見地からすれば日本銀行今回の利下に對して、可否の判斷を下すには、此利下が單に株式商品市場に一場の刺戟を與へ、叉之を通じて中間景氣を釀成するに止まるか、其れとも是れが動機と爲つて、經濟社會に安定を與へ、金融緩和の勢を實現して、景氣恢復の先驅と爲るか、孰れの方嚮に就くかの一事に重きを置かなければならない。

五、日銀利下の效果

普通の場合に於て、日本銀行の利下が金融市場の大勢を支配するに就ては、其利下が市中諸銀行の貸出割引步合を通じて、預金利子の引下を誘導するに至ることを以つて、重なる原因とするのである。蓋し市中諸銀行中の或るものは、日本銀行に對して、獨立の地位に立つに至つたと稱するもの丶、固より或る場合、或る程度に於ける事實たるに過ぎないし、一流以下の銀行が再割引其他の方法に依つて、日本銀行に就て、資金の融通を仰ぐのは、彼等の存立上、已むを得ざる所に屬し、日本銀行が金融市場に對して、資金供給の源泉たる事實は今も昔も敢て變れるものなしと考へられる。斯る場合に日本銀行が金利を引

下げたとして、如何なる結果を金融上に生ずるであらうか。今回の如き最低の歩合が一錢八厘と爲つて、市中諸銀行の歩合よりも確に下廻るに至れる一方に、諸銀行は或る金額まで右の新利率を以つて、日本銀行に就て、融通を受けることを難しとしない。此場合に市中諸銀行にして從來の如く二錢三厘乃至二錢の日歩を以つて、取引を營んだならば、是等歩合と日銀公定歩合との開きは著しく大なるものと爲り、其大なるだけ、市中諸銀行の利益を增加するに至る。市中諸銀行の取引先たるもの、何條斯く市中諸銀行に利益を壟斷せしめて、默して居る道理はない。必ず取引銀行に向つて、利下を請求す可く、銀行亦之を拒んだならば、取引を他の競爭者に奪はれる恐れあり、寧ろ取引先の意を迎へて、營業を盛ならしめるを賢なりとし、相率ひ、相誘つて、日本銀行の公定歩合引下と調節を保つ程度まで、貸出割引の歩合を引下げざるを得ざるに至ると共に、貸出割引歩合に行はれた引下は一方に必ず預金利子の引下を行ふの已むを得ざるに至らしめ、斯くて日銀利下の影響を徹底的に、又普遍的に金融市場に及ぼすこと丶爲るのである。

彼の市中諸銀行の預金利子協定の如き、此場合に臨んで、諸銀行の行はんとする貸出割引歩合の引下に對して、一の妨害たらざるを得ない。一銀行が日銀の利下に伴ひ、貸出割引歩合を引下げやうとし、其一過程として、先づ預金利下を試みやうとしても、協定に與れる他の諸銀行が取引先に對する關係上、之を肯んぜざるに於ては、其事は困難と爲り、預金利子の引下げられざる爲めに、遂に貸出割引歩合の引下を不可能ならしめるか、少くとも之を遲延せしめるの傾きを生ずるやに見へる。然しながら此事と雖も、要するに一個の程度問題であり、又時期の遲速問題であつて、金利引下に對する日本銀行の決意の確乎たるものあり、引下げられた利率の下に、市中諸銀行に向つて、寛大に資金の融通を許すとしたならば、諸銀行の取引先が之を默過するが如き、到底想像する能はざる所であつて、彼等の取引銀行に對する利子引下に關する要請は諸銀行をして貸出利子引下の一前提として、預金利下を實現するに至らしめるであらう。

由來中央銀行の公定歩合と市中諸銀行の金利歩合即ち銀行利率と市場利率とが如何なる關係の下に、高低の律を保つかと云ふことは、中央銀行制度の存する國に於て、常に問題と爲る所であるが、金融市場をして統制あるものたらしめる點から云へば、銀行利率をして市場利率を支配せしめるの必要は何れの國に於ても、認められてゐる所である。英蘭銀行が尋常の手段を以つて、市場統制の效果を奏せざるや、市場に過剩なる資金を

回收し去る目的を以つて、銀行自身の所有する國債を賣却する方針に出づることは著明の事實であり、更に北米合衆國亦前年聯邦準備金銀行制度を設けるに當り、此點に工風を凝し、出資諸銀行の支拂準備金は聯邦準備金銀行に預入れしめ、而して之を増加する必要に接するや、前者をして後者に就て、商業手形の再割引を求めしめ、其代金を預金として支拂準備金に振替へしめる一方に、此再割引歩合を高くすることに依つて、自然出資諸銀行の割引貸出歩合を引上げしめやうとした。我國の日本銀行が諸市中諸銀行の營業を擁護するに手形の再割引を以つてし、日本銀行に於ける利子の上下は、自ら此再割引歩合に高低を惹起す所以と爲り、斯くて市中諸銀行の歩合を左右するに至るのは、恰も合衆國の制度に於けるものと、同樣であると云へる。從來日本銀行の公定歩合が金融市場に對して、大なる勢力を揮ふを得たのは、一に市中諸銀行の爲めに、再割引を行ふことに依るのであつて、此事の存續する限り、日銀金利歩合に伴ふ統轄的勢力は牢として抜く可からざるものと考へられるのである。

六、我國金融の前途

然も今回の如く市場に於て、金融緩和の狀勢の充分に整つて居らず、金利歩合亦必ずしも低きに就けりとする能はざる場合に、日本銀行獨り金利歩合を引下げたことに依つて、能く市場の金利を左右し、之を日銀の公定歩合に近づかしめるを得るであらうか。之を近づかしめるを得るとすれば、日本銀行は其金利政策に依つて、市場利導の目的を達したものと云へるし、然らざるに於ては、徒に一時市場を騷がせて、近き將來に金利の反動的上進を招くに至るの非難を免かれないであらう。然らば日本銀行が今回の利下に依つて、市場利導の目的を達するには、將來如何なる狀況の發生することを必要とするであらうか。其一は合衆國の經濟社會が徐々に好轉して、我國の貿易品殊に生絲絹織物に對する需要を増進することであり、其二は支那の時局平定して、我國の對支貿易に於ける支障の絶滅することであり、其三は銀價が昨今を底値として、今後次第に騰貴し、我國の綿絲綿布に對する支那市場の需要の開發されることであり、其四は爲替相場が昨今の如く四十七、八弗邊を往來して、其以上に出でず、政府亦金輸解禁を行ふに急燥ならず、徐に其時期を待つことである。是等四個の條件にして實在し、又準備されたならば、我國の貿易は下半季に於ける常態として、必ず輸出超過の方嚮に就き、殊に其超過額の相當に大なるを見るであらう。斯くて此事は内國の金融市場に有利なる影響を及ぼ

し、金融を緩和して、日本銀行の利下に相伴ふに至らしめるのみならず、或は日本銀行をして引續き第二回の金利引下を可能ならしめるかも知れない。蓋し上記の如き條件の備はり、事實の現出した場合に、最も有利なる影響を蒙るものは、株式並に商品市場であつて、他に著しき惡材料あれば兎に角、然らざる限り、市價に騰貴を來して、市場に活氣を添へ、銀行亦株式市價の上進に依つて、貸付金の回收を容易にし、手元を豐富にし、自ら金融緩和の狀勢を作り出すに至るからである。

唯上記四個の事實中、第四の金輸解禁は政府の方寸に依つて、左右するを得るが、他の事實に至つては、何れも他働的のものであつて、我國の政府又は國民の意嚮に依つては、之を如何ともするを得ず、一に外國の事情に依つて、定まる可き所に定まるの外はない。若しも政府なり、日銀なりにして是等三項の事情に就て、其近く我國に取つて、有利なる方嚮に展開す可きことを確信し、斯く爲つた場合には、必ず金融緩和して、金利歩合の低下するに至る可きを以つて、豫め今日から金利を引下げて、大勢を馴致するを可なりとして、今回の如く日本銀行自ら進んで金利の引下を政府に申請し、政府亦同樣の見地から、之を認可したものであるとすれば、政府並に日本銀行としては、將來に對して大なる投機を試みたものであつて、此投機が適中すれば、兩者に取つて、大なる名譽であり、又先見の明を誇るに足るが、事實が兩者の豫想と反對に出で、反動的に金利引上の餘儀なきに至るが如きことゝ爲つたならば、兩者の不面目は兎に角として、其國民經濟を攪亂するの非難は之を免かれるを得ないであらう。

唯政府並に日本銀行をして今回の利下に依つて、近き將來の金融市場を左右するを得せしめるに資すると見込んで居るのは、本年の農産物豐作の一事である。今日農産物の豐作であることは動かす可からざる事實であり、而して其價格暴落せず、或る程度に維持される以上は、農産物の代金の地方に出廻るに隨つて、一方に金融を潤澤ならしめると共に、他の一方に地方の經濟を活潑にし、都會の商工業にも有利なる影響を及ぼすに至るのみならず、地方の潤澤と爲れる資金が都會に回收されて、都會の金融を緩和し、日本銀行の引下げられた金利歩合をして徹底的效果を有するに至らしめる。政府並に日本銀行は此事に期待を置いて、公定步合引下の擧に出で、更に政府自ら斯る趨勢を盛ならしめる爲めに或る施設を講じやうとするものではあるまいか。

更に他の方面から一考を要するは、今正に成立せんとしつゝある東京市外債である。單に外債成立と云へば、我國爲替に對

する强材料たるを失はざるが如きもの丶、其金額六千萬圓の内、半額は舊債の償還に充てられ、其半額は在外正貨に繰入れられるとしたならば、其爲替に及ぼす影響は必ずしも大なるものとするに足らず、相當の影響あるとしても、既に實際に現はれて居る道理であつて、隨つて之を以つて輸出貿易を悲觀する一の資料とするは、當れりとしない、寧ろ幾何なりとも國内金融を安んぜしめる效果ありと考へられる。

七、政府對日銀の關係

政府と日本銀行とが如何なる關係に居るかと云ふことは、時の事情に依つて、自ら異ならざるを得ないであらう。政府殊に日本銀行に對して直接の監督權を持つ大藏大臣の權威の大なる一方に、日銀當局者の方に官權に阿附する卑屈心の多分に存する場合には、政府は日本銀行を頤使して、財政上の方便に利用するに苦しまないであらう。今日兩者の間に果して斯る關係が存在するかどうか、今回の日銀利下か日銀に對する政府の壓迫に依つて、生じたものであるかどうか、更に斯る利下を豫知して、一部の政商が株式投機に依つて、奇利を博したと云ふが如き醜怪なる問題に對しては、政權爭奪を念とする政黨者の詮索に任せ、私としては是等に就て何事をも云ふを欲しない。唯日銀現在の制度を以つてしては、重役の任免權や營業に對する監督權を有する點に於て、政府は絶對の力を以つて、日銀に臨むものであり、隨つて日銀が政府に對して獨立を維持することは、絶對の不可能事に屬し、政府の命令一下すれば、日銀としては、之を如何ともするを得ないのである。現に金利問題に關しても、日銀現行の條例に於ては、日本銀行から金利歩合の改正を政府に申請した際に、政府は之を許否する權能を持つに止まり、政府としては積極的に金利歩合の引下を命ずると云ふ態度に出づることは、條例に認められて居らないのであるが、政府は從來斯る命令を日本銀行に下し、銀行をして之に服從せしめた事例が多々ある。畢竟政府が日銀總裁以下重役の任免權を掌握すればこそ、日本銀行をして政府に對して、從順猫の如きものたらしめるを得るものと解される。日清戰爭の前後、川田小一郎なる人が日本銀行總裁の職に居るや、傲岸不屈、市中の銀行業者をして自己の脚下に慴伏せしめたのみならず、政府に對しても、何等讓る所なく、條例の規定如何に拘はらず、日本銀行をして獨立の面目を全ふせしめたと傳へられる。又川田氏の前に總裁であつた富田鐵之助氏の如きも、時の大藏大臣から、低利を以つて、日本銀行の資金を橫濱正金銀行に貸出す可き命令を受けた際、之に服せずして、敢然職を辭した事實もあつ

た。即ち以前は日銀の總裁として、斯る硬骨振りを發揮し、日銀の運命を荷ふに足る力量を示した人もあつたが、人物の標準の低下しかる今日に於ては、是等は何れも一場の夢物語りに類し、之を再現せしめる由もないのである。

八、日銀の冒險か先見か

然しながら假に日本銀行が政府に對して、全然獨立の地位に居り、日銀一個の判斷を以つて、自由に金利歩合を上下するを得るものとして、今回の如く金利歩合を引下げたとして、世人は果して之を失當であると云ふ非難を加へるを得るであらうか。今日の金融狀況が金利引下を許すまでに、緩漫に爲つて居らないことは事實である。然も日本銀行が近き將來に於て、金融の緩和す可き事相の生ずるの確實であることを信じ、之を促進する爲め、又將來必ず起る可き事相に順應する爲めに、今回の利下を爲したものとすれば、此事たる、日本銀行としては、一個の見識に基いたものとす可く、又一個の冒險を敢てしたものと云へる。此見識が果して能く實際に的中し、冒險亦何等の危惧の伴ふものなきを得るかどうか、一個の問題とす可きである。

我國今日の金利標準は日本銀行の公定歩合に一回の利下が行はれ、市中諸銀行亦之に制されて、利下を行ふに至つたとした所で、之を諸外國の金利歩合に比較すれば、尙ほ著しき高歩に居ることは、左の一表に於て、明瞭である。

各國中央銀行公定歩合

英吉利	五分	佛蘭西	七分五
獨逸	六	日本	六五
紐育	三、五		

佛蘭西銀行は最近「法」貨の價値低落に當る爲め、七月末を以つて、公定歩合を七分上匪に引上げたが、之を除けば英米獨諸國に對して、日本こそ今回の金利引下の後に於て、尙ほ最高の金利引下の後に於て、尙ほ最高の金利歩合を標準とする次第であり、此公定歩合に對して、市場利率が若干の上鞘に居ることを考ふるときは、日本の金利が從來に比較して、將た又他國に比較して、高率に居るの一事は之を動かすを得ない。斯く金利歩合の高いことは、當業者に對する金利負擔を重くして、產業の振興を妨害する所以である。今回の日銀金利引下に對して、之を認可した大藏省當局者は此利下に依つて、生產費の減縮を期することを以つて、一の理由に充てゝ居る。既に金利引下の理由にして、此一事に置かれて居る以上は、一回の利下を以つてして、能く其目的を達し得る道理はない、今後機會を捉へて、再度の引下の行はれることを必要とするのであつて、其時

期が果して近く到來するであらうかどうか。輸出の振興、爲替の安定、外國市場の快復、銀價の騰貴等相並んで行はれたならば、或は日本銀行をして再度の利下を行はしめて、餘りに均衡を失せざるを得るやも知れず、斯くして經濟社會振興の道に就くに至つたならば、近年に於ける經濟上の行詰りは打開されることゝ爲り、政府並に日本銀行をして今回の利下に就て、先見の明を誇らしめる次第であるが、斯る事は今日に於ては、全然未知數に屬し、如何とも判斷を下すを得ないし、又假令ひ右の如きとも判斷を下すを得ない、唯普通の事例から云へば、十月頃から年末へ掛けては、金融自ら繁忙と爲り、金利の上進する傾向を持つのである。此際に右に掲げた金融を緩和する事情が起つたとしても、能く日本銀行をして再度の利下を行はしめるに定るかどうか、又假令ひ右の如き事情に接したとしても、政府や日本銀行に取つては、一場の紛れ當りに類しはしないであらうか。政府が日本銀行をして今面の利下を行はしめたことを以つて、議會解散、其後に於ける總選擧の準備と見るの說がある。其當否は私の知らざる所であるが、經濟上に正道を踏まずして、危道を取るの危險は政府として之に當らなければならないのである。

九、消極から積極への道程

從來消極政策を以つて、終始した憲政會內閣は今や此政策を打切り、積極的施設に一歩を踏み出す決意を爲した趣きであつて、今回の日銀利下の如き、實に其一端であるやに傳へられる。今日まで憲政會內閣の行ひ來つた消極政策の如き、財政に於て、經費に若干の削減を加へ、爾後其膨脹する勢に抑制を施した一方に、經濟社會が此勢に追隨して、事業の緊縮整理を試みただけの事であつて、彼の英米兩國が歐洲戰後經費に大々的削減を加へ、財政緊縮の爲めに、物價を低落せしめたり、金融を緩和せしめたりしたものに比較して、其効果は日を同じうして、談ず可かざる次第である。故に私の如き今一層憲政會內閣が消極政策を財政に徹底せしめることを必要とするものであつて、若しも此政策にして續行されたならば、自ら國民經濟上に利用せらる可き資力に餘裕を生じ、財政に消極方針の行はれる一面に、經濟上に積極的施設の國民自身の力に依つて、行はれるに至ることを期待したのである。然も大正九年の恐慌以來不景氣に不景氣を重ねて、疲弊困憊の甚だしきに至つた我國の經濟社會は或は右の程度の消極政策にも堪へ得ざるの趣きを示した。政府が經濟財政上の根本的政策を消極方針から積極方針に

移さうとすると云ふ説の眞僞は私の知る所でないが、假に斯る變更の加へられるものとすれば、其事たる畢竟消極政策の經濟社會に及ぼす壓迫餘りに大であつて、其存亡に關するを認めた結果であると考へられる。斯く現時の經濟社會を見ることが正しいかどうか、若しも之を正しいとすれば、我國の經濟社會は彼の程度の消極政策に依つて、大なる打撃を受けたものであつて、其根底の微力なること、嘆ずるの外なき次第である。

要するに政府が右の如き見方の下に、消極政策を打切つて、積極政策に移るものとして、如何なる施設が實際に行はれるであらうか。政友會内閣の積極政策なるものは、公債財源に依る事業の濫設、中央並に地方經費の膨脹、民間事業に對する保護の濫行に依つて、其實體を示し、公債の增發、其價格の低落、經費の增嵩、物價の騰貴等に依つて、經濟社會を苦しめる所、大であつた。畢竟大正九年に恐慌が襲來したり、恐慌後に於て以外の長時日に亙つて不景氣の惹起されたりしたことも、斯る積極政策濫行の餘弊とも見る可きものであつた。此般の弊害は當時憲政會の極力攻擊した所であつて、之に關する國民の記憶の尙新なるものがあるとすれば、今日憲政會が積極的施設に移るとした所で、政友會の醜態を學んで、可なりとするものではあるまい。何等か新機軸を出すことに勉めるとして、如何なる邊に其端を示すであらうか。世間に風評される地方債に對する認可方針を寛大にするが如き、其一たるを失はないであらうし、更に東京大阪の如き地方團體に向つて、外債の發行を自由にしたならば、積極政策の効果亦明なるを得るであらう。若し其れ銀行金融の方面に關しては、政府の積極政策の行はれる餘地の多々あることが認められる。其要綱を擧げれば、

第一、今後引續き日本銀行をして利下を行はしめること、

第二、日銀の利下に必要なる資力を增進せしめる爲めに、保證準備の制限を擴張して、今日の倍額又は其れに近きものたらしめること、

第三、日本銀行をして見返品の種類を增加せしめ、更に市中諸銀行に對して、資金を融通する程度を引上げること、

第四、日本銀行、橫濱正金銀行、日本勸業銀行の如き有利の地位に居る特殊銀行をして未拂込株金を拂込ましめると共に新に增資を行はしめ、積立金の一部を割いて、新株式の拂込に充てること、

第五、特殊會社の外資輸入に對しては、政府自ら保證の責に任ずること、

第六、各地方取引所の增資に對して、認可を與へること、

の如き、即ち政府自ら直接に手を下さず、民間營業者に積極政

策を提奬して、之を果さしめるものであつて、財政に必ずしも負擔を及ぼさず、一方に却つて積極的施設の效果を擧げるに足るとするを得るであらう。

積極政策を行はうとすれば、其種子の多き、寧ろ之を選擇し、前後の順序宜しきを得せしめるに苦む程である。政府が今後積極政策に移ること、果して眞であるか若しも眞實であるとして、如何なる方法が行はれるかは、遽に推測を下すに難しとする所であるが、兎に角一回の日銀利下並に將來政府に依つて、積極政策が行はれるであらうと云ふ風說のみを以つてして、市場利率に若干の低落を來し、株式市場の形勢を順調に導き、秋風落莫の趣きのあつた經濟社會に煦々たる春光を迎へしめるに至り、更に此上に金利低落して、資金の運轉圓滑と爲れば、事業計劃の進行また望まれざるにあらずとすれば、政府として積極的施設を此儘に打切るが如き、到底爲すを得ざる所であり、又民間經濟社會に對する責任上、爲すを許されざる所であり、必ず今少しく積極政策の步を進めて、其首尾を一貫するより外に、取る可き道を知らないであらう。而して斯る積極政策の步を進めつゝある間に、內外經濟社會の狀勢良化して實力を以つて積極政策に呼應するに至るか、其れも實勢に依つて、積極政策を援護するを得ず、積極政策の實行は徒に經濟社會を攪亂するに止まり、半途に挫折の已むを得ざるに至るか、一個の問題である。前者の場合に於ては、政府をして意外の功名を遂げしめること〻爲り、內閣の爲めに、一種の延命術たるを得るかも知れないが、後者の場合に於ては、健全なる可き經濟政策に奇法を用ひた失敗を蒙り、投機者流としての非難を受け、今日以上の不評裡に政治的末路に陷らざるを得ないであらう。

今回の日銀利下并に之に端を發せんとする積極的施設が政府を如何なる運命に導くであらうかは、吾人の多く興味を覺へる問題である。

一〇、日銀制度改正問題

今回の日銀利下が日銀一個の發意に據らず、寧ろ政府の干渉に基くものであることは、世間の觀察の略ぼ一致する所である。事の功罪は其是非を決する規矩と爲ること、少なしとしない。日銀の利下が相次いで經濟社會を順境に導き、景氣恢復の礎石と爲つたならば、日銀に對する政府の干渉の如き、何等の問題を惹起すに至らないであらうが、此反對に利下が中間景氣なり、一時的景氣なりを刺戟するに止まり、何等永久の效果の見る可きものなく、却つて經濟社會を攪亂するに終つたならば、斯る政府の日本銀行に干渉を加へる餘地ある制度を不可な

りとする議論の生ずるのは、當然想像される所である。政權に對し、政府に對して、日本銀行の如き重要金融機關を獨立せしめ、政府干渉の跡を絶つのは可なるは、吾人の夙に認める所である。然しながら日銀を政府に對する關係から分離し、一の株式會社として取役の任選其他の事を處理せしめた場合に、其の結果は果して圓滿なるを得るであらうか。我國には財閥なるものがあつて、其實業界に於ける横勢を壟斷し、利益を獨占する勢の著しきものありと認められる。其れ等の財閥が日本銀行の株式を買入れ、大株主として、自己の代表者を日本銀行の取役に擧げ、或る場合には一の財閥と他の財閥と日銀を爭奪として抗爭し、他の場合には互に妥協して、日銀を自家營業上の便に利用するの手段に出でたとしたならば、日本銀行は政府に對して獨立したとしても、財閥に屈從し、其機關たらざれば已まない。日銀組織改正の如き、單調なる意見を以つて、議し了するを得ないのである。此點に就ては、私の近頃著作した「金融經濟一斑」第十二項中「持殊銀行の改善」に於て論述した。就て參照されむことを望む。（十月七日脫稿）

減刑不可ならず

（理由を公開せよ）

清瀬一郎

一、朴烈問題の歸着點

そのはじめ、怪寫眞事件として取扱はれた朴烈事件は、中頃、刑務所に於ける優遇事件となり、終りて不當減刑奏請事件として取扱はるゝに至つた。大逆事件に對する減刑奏請の可否といふのは、是れ、仲々の大問題である。容易に言を立つべきではない。怪寫眞撮影が大正十四年五月二日であつたといふ事が明瞭になるや否や（同年八月卅日迄の司法大臣は小川平吉君）、急轉直下、論斷を轉換して、恩赦不當の論陣を張つた政

治家の勇氣と敏捷とには驚かざるを得ない。之を敢論と做したる政治家の心術、動機は如何にもあれ、既に之が問題となつた以上、國民は之に對する判斷を爲さねばならぬ。

二、大逆犯罪の處罰

明治十三年七月布告第三十六號、彼の舊刑法第百十六條には天皇、三后、皇太子に對し危害を加へ、又加へんとしたる者は死刑に處す」と在る。是れ、我が國に於て、大逆犯罪の處罰を明言したる始めである。（註一）新律綱領にも、改定律令にも、此規定はなかつた。舊刑法の起案者は佛國人であつた事は世人周知の事實である。當時、我國に於ては、至尊に對する弑逆あるべき理なし、之を法文と爲すこと既に我國情に反するとの論もあつたそうであるが、法治國家として、此法なかるべからずとの論が勝を制して、之が存置に決し、明治四十年改正の現行刑法は更に之に皇太孫を加へ、大逆罪は死刑を以て處罰することゝしてゐる。外國に於ても、大逆罪に臨むに極刑を以てするに變りはない。殊に古代の刑法に於ては殘忍な制裁を用ひた事は人の知る所である。（註二）唯だ、我刑法に於て注意すべきは大逆犯罪は通常犯罪と異り、啻に着手以上（既遂、未遂）を罰するのみならず、危害を加へんとしたる者も亦之を加へたる者と同の制裁を受くる事である。是れ恐らく、帝政時代の佛

國、獨國の刑典より出でたるものであらう。獨逸帝國の刑法第八十二條には、大逆の計劃を直接に實行せしむべき行爲は大逆の既遂行爲と看做すと規定してある。解釋家は、右は大逆罪豫備行爲中、着手に直接に接近するものを處罰する意であつて、豫備行爲中でも着手に直接に接近しない行爲は處罰せられないのであると說明して居る。（例へばリスト刑法論五四一頁）。我刑法は、此獨逸刑法に更に一歩を進めて居る。「危害を加へ又は加へんとしたる者」と在る以上、直接接近と否とに拘らず總ての豫備行爲は區別なく死刑を以て處罰せられる。是れ着手以上を以て罪と論ずる、刑法總則の一大例外である（刑法案審議の際に於ける倉富政府委員の答辯參照）、

我國に於て尊きこと天皇に越すものはない。天地と德を合し、日月と明を齊ふし給ふ。今、假に刑法が危害罪の豫備に對し死刑を以て唯一の刑罰としたることを非議するものではない。然し乍ら、同じく惡むへき犯罪であつても、既遂、未遂、直接豫備、豫備の間には自ら階梯あり得べきを注意せんとするものである

註一、彼の大寶令には「凡そ謀反する者は皆斬。謀反とは國家を危くするを謀るなり」と在る。而して其註に「臣下逆節を圖らんとし無君の心あり、敢て尊號を指

斥せず、ことさらに託して國家といふ」と說明して居る。故に令にいふ謀反は大逆罪であるといつてもよい。しかし、表面より天皇、三后、皇太子、の弑逆を法文となしたのは、明治十三年の舊刑法が始まりである。

註二、英國古法では大逆罪は hunged, drawn and quartered といふのである。絞臺まで引摺て來る（步行を許さぬ）。首を括つて吊り下ける。生きて居る間に腹を切つて內臟を摑み出し、其目前で燒却する。それから首を切る。身體を四つに切り放ち、之を國王の任意に處分せしめる。多くは各地に分送した。此法律は一八七〇年に廢止せられ、今日では絞殺だけとなつた。加之、ウキクトリヤ朝以來皇室に對する犯罪は之を刑事法廷に持ち出さず、終生之を病院に監護するのが行政慣例となつたといふ事である。

三、我國體と恩赦

我國體は萬國に冠絕して居る。皇室は殊に尊い。天地と德を合し、日月と明を齊ふする。其尊嚴は彼の覇者の威嚴ではない。王者の尊嚴である。酷刑の脅威ありて人、之に服するのではない。慈惠の普きものあつて民之に感ずるのである。古代の立法者も弑逆を罪名とするを憚り「謀危國家」を刑名とした。其所罰も「謀反者皆斬」とのみあつて、梟首轘裂は用ゐられぬ。況んや歐洲の征服國家に在つたやうに生前內臟を摑み出し、目前に之を燒き、首をはねたる上、身體を四割すなどいふ野蠻なる法は、曾て我國に存在したことはない。たゞ、皇室に對する犯罪は、其外形は微といへども、其實重大なるものがある。されば明治政府の刑法には其着手や直接豫備に限らず、一般豫備も亦盡く之を死刑を以て處罰するの法を立てた。此法が立てられたのには相當理由がある。理由があつて立てられた法なる以上、裁判所は之に依りて判決すべきは勿論である。たゞ、我皇室の尊嚴といふ意味は首めに述べた通りである。玆に恩赦の途があり得るのである。外國に於ける恩赦の制は羅馬帝政時代より傳はりたるものであつて、ベツカリヤ、乃至カント、フオイエルバツハに至るまで理性派の學者は異口同音に此制度を不合理なりと否定して居る。佛國革命時には一時廢止せられた。しかし、今日の各國は總て之を特權としては誠にふさわしき制度といはなければならぬ。甘雨慈雲、此制度より降り來る。彼の憲法義解の著は恩赦大權に關し斯くいふて居る。「恭テ按スルニ國家既ニ法廷ヲ設ケ法司ヲ置キ正理公道ヲ以テ平等ニ臣民ノ權利ヲ保護セシム而シテ猶法律ノ未タ各般ノ人事ヲ曲

悉スルニ足ラスシテ時アリテ犯人事情仍憫諒スヘキ者アリ立法及司法ノ執行遂ニ以テ其ノ闕漏ニ周匝ナルコト能ハサルコトヲ恐ル故ニ恩赦ノ權ハ至尊慈仁ノ特典ヲ以テ法律ノ及ハサル所ヲ補濟シ一民ノ其ノ情ヲ得サル者無ラシメムコトヲ期スルナリ」と。恩赦の權は至尊慈仁の特典である。法律は普遍的、抽象的なるかため、具體的の場合に之を補濟するが爲めに此特典を用ゐらるゝのである。大逆犯罪といへども、其必要ある場合には此恩典を奏請して差支ない。しかのみならず、我刑法の立てかたと我國體の本質とを比照して大逆犯罪に對して特に此御仁慈を用ゐらるゝ場合を生ずるにはあらずやとも愚考せられる。

四、世論短評

朴烈文子の大逆犯罪に對し本年四月五日附を以て「特に刑一等を減して無期懲役に處す。內閣總理大臣勅を奉して之を宣す」との敕狀が發せられた。當時、國論は大恩の無邊なるに喜んだ。然るに、今回、端なくも、此恩赦の奏請が問題となり出した。之に關する世論は紛々であるが、其論は多く淺薄であるやうに感ぜられる。

(甲)先づ恩赦は陛下の大權である。之を云爲するは臣子の分でないといつた樣な議論が一時行はれた。——なるほど恩赦は天皇大權には相違ない。憲法にも其旨の明記がある。しかし天皇大權であつても、立憲國に於ては、大權の行使には必ず國務大臣の輔弼を要件とする。此輔弼の當否につき論議の出來ない譯はない。

(乙)大逆罪に對して恩赦を施すは不都合なりと說く者もあつた。——我皇室の尊貴を承認せざる者は一人もない。しかし其尊嚴である所以は前項に述べた如く酷刑の威嚇ありて然るのでは無い。天恩自ら臣民を感受せしめるものがあるからである。大逆罪は總て死あるのみ、之を赦すべきにあらずといふのは正論ではない。現に幸德事件でも、二十四人中、十二人は恩赦により無期刑に換へられて居る。要は本件の內容如何である。

(丙)國民生活の問題でないから、政治問題と爲すに足らぬといふ論もある。——政治問題でなくとも、國家重大の問題ならば政治問題として差支ない。たゞ、後にも說く通り、ある動機よりして之を政爭の具となす人があるならば、それは怪しからぬ。

(丁)若槻首相が、九月卅日に憲政會の議員總會で陳べたといふ一節に「恩赦は申すまでもなく陛下の大權である。陛下の大御心を推し奉つて輔弼することこそ、然るべきであると信ずる」との言語がある。——もし、閣臣が、陛下の御意思

に追隨したりといふ意味ならば、不穩當の説明である。斯の如くんば大臣輔弼の責任、何處に在りやと問はなければならぬ。たゞ我歷聖の盛德より推し、皇室の意思は此場合斯くあるべきものと裁斷して、其の發露を奏請したりといふならば可なるべきも、首相の此説明は此意味に通じかねる。

（戊）文子には事情憐むべきものがある。然し、これを赦して朴を赦さぬとすると朝鮮統治上不都合であるそれ故兩者を減刑したのだと、余に告げた人があつた。又之に反し小川氏一派は此特赦減刑は朝鮮統治上に於て有害無益であると批難して居る。――――孰れにするも恩赦を一種の政略とすることは不可である。之を施すことが鮮人懷柔の策と考へるのも不可なれば、之を施さゞることが鮮人威壓の策であるとするのも不可である。皇室の仁慈は策略のために犧牲となるべき筋のものではない。

（己）朴は態度傲然として改悛の情なし、之を減刑するは不當なりとの論がある。――――犯罪人に改悛の情があるといふ事も恩赦奏請の一場合であらうけれども、改悛以外の他の條件で恩赦を奏請出來ない事もない。他に條件具はらば特赦を是認するに足る。要は此條件の有無である。

五、犯罪事實並に特赦理由を公表せよ

朴烈恩赦の是非が問題となつた。而して、其判定は、朴、文兩人の犯罪内容に依つて極まる。然るに兩人の犯行はまだ世間に知られて居らぬ。恩赦理由もまだ完全に發表せられて居らぬ。前にも引用の九月卅日の首相の演説にも「恭しく惟るに天恩は洵に海の如く皇室の御仁慈は洪大無邊である。單に御一人よりみそなはせらるゝに於ては誠に恕すべからざるものも、よく宥し給うたことは列聖の御事歷において誠に炳乎たるものがある。奏請の理由に至つては他日細かに説明する機會もあらう云云」といふのみである。皇室の御仁慈が洪大無邊なることは首相の言の通りであるが、閣臣等は何故に此無邊の御仁慈の發露を仰ぎ奉つたかは些も説明せられて居らぬ。大權行爲は重大なものではあるが、其發動は秘密なものではない。現に首相は他日細説の機會あるべきを言つて居る。速に之が發表を爲し、國民の了解と批判に便すべきである。犯罪事實に關しては判決言渡當時（三月廿五日）非公式に司法省より發表せられたものがある。即ち次の如くである。

「被告朴準植は帝國政府の治下に在るを懌ばず陰に朝鮮の獨立を計る意圖を畜へ、大正八年十日頃東京に來りて飴賣其他の種々の勞務に從事して形勢を視察し、遂に社會主義

者、無政府主義者等の思想に慊らず、人世を以て醜悪の府と爲し、自己の生存を否定して萬類の絶滅を期することを以て最終の理想とすると共に帝國の基礎を破壊して反逆的復讐を爲さんことを欲し畏くも大逆を企つるに至りたるものとす、被告金子文子は幼時より不幸にして父母に顧られず纔に親類の扶助に依つて成長し、其間諸方に流寓し、朝鮮に至りたることありしが、大正九年四月頃、志を立てゝ東京に來り修學中、近親の監護を脱し、夕刊賣其他の勞務に從事して、社會主義者とも交遊し、四圍の刺戟に因り漸く思想の變遷を來したる際、偶々被告朴準植と相識るに至り共の思想に共鳴し、大正十一年五月中東京府豐多摩郡代々幡、代々木富谷一、四七四番地に同棲するに及び金子は朴の前記企圖に同意し相共に之が目的を遂行せんことを謀り朴は他人に依囑し海外より爆彈の輸入を計畫せる中、事發覺して大逆を遂くるに至らさりしものなり」

この發表では、實は眞相は判らぬ。これだけで恩赦奏請の可否と斷定することは出來ぬ。たゞ疑はしきは自己の生存を否定し、萬類の絶滅を期することゝ、反逆的復讐といふことが一貫して居らぬ。も少し、詳細な説明がなければなるまい。それは何れにしても彼は「他人に依囑し海外より爆彈の輸入を計劃せる中、事發覺したり」とのことである。他人の依囑は確實なものかどうか。確實なものとしても、爆彈は海外に在り、豫準中の豫準である。狀情を酌量するの點は此邊に伏在して居るのではなかつたか。

大逆事件、之を悲まぬものはない。不詳の事件ではあつたが、既に發生したものである。後世の歴史家の耳目より之を掩ひ去ることは出來ぬ。此事件の記錄存する以上は判決の理由、減刑の理由亦、後世に傳はらざるを得ぬ。之を歴史より抹殺せんと欲すれば却つて測らさる臆說が出ずる。政府は今にして之を公表するの勇氣を持たなくてはならぬ。

六、怪むべき政黨者流の態度

政府が、やゝともすると口を聖旨に藉らんとするは遺憾である。殊に本件犯罪内容を秘し、從て減刑奏請理由を公表しないのは立憲的でない。しかし、此問題を政治問題となした、政黨者流の心事には更に疑ふべきものが多い。彼等の態度に眞摯ならぬ所がほの見える。私は前に述べたやうに、恩赦問題は政治問題にならぬとは言はぬ。それはなる。しかし彼等は本件が本質的に特赦の場合に非さるが故に之を爭ふのか、それともこれが政爭の具として功妙なものと考へ出したのか。立松判事が無用の寫眞を撮つたのは惡い。しかし立松が惡くつても、朴文の

犯罪狀況に增減はない。司法者の發表は拙だ。發表か拙でも朴、文兩人の關する所でない。刑務所が違例の扱をしたのも惡からう。刑務所の責を朴に衣せるわけには行かぬ。これ等の行政事務問題と截然、切り放して朴烈恩赦を不當なりとする論理を立てて爭を爲すならば格別であるが、今日の政爭はそうはなつて居らぬ。刑務所より怪寫眞を持ち出した人は某政黨員の宅に隱れたといふ噂もある。市ケ谷刑務所の看守二名が不穩文書を發表して逃亡したのにも某黨が關係して居るといふ風說もある。朴烈事件につき直訴を企てた者にも某黨總務が背後にありといはれて居る。本文起草の時には此黑幕が判つたと報導せられた。之を政爭の具とするの動機如何。(1)我國民は皇室に對しては特別の心理を有つて居る。敵黨を指して皇室に對する不忠者と呼べは、之を壓迫すること最も確實なりと考へたのではないか。國民の忠誠は、吾々も疑はぬが、此忠誠が合理的に發露するやうに指導するのが政治家の重大なる任務ではないか。之を利用して自派の目的に供するといふ事であつたならは、これこそ、皇室の神聖と國民の忠誠とを濫用するの大罪惡である。(2)此問題を捕うるときは相手方は辯解が出來ぬ。怪寫眞不都合なりといふも、相手方はこれが怪寫眞であるといつて之を公衆に示すことが出來ない。朴烈は不逞なる思想を藏し、不逞なる企を爲したり、之を赦すは不臣の極なりといつても、相手方は朴の思想を說明することが出來ぬ。又朴の企を公示するわけに行かぬ。これが政爭の具として屈强なりと考へたであらうか。是、亦陰險な毒殺方法である。——往年、英國で總選擧があつたときに、勞働黨に對し、露國の「ジノビエフ」よりの文書が屆いたと喧傳せられた。勞働黨は此文書の本體を公示することが出來なかつた。英國人は赤化を恐るゝこと蛇蝎よりも甚だし、保守黨は巧に之を利用した。「ジノビエフ」文書が何ものたるやは判らずしまいに、勞働黨は大敗した。怪寫眞が何たるか、(怪寫眞は實は小川法相の時代のものであるけれども)、朴烈の犯罪が何であつたかを知らざる民衆は大逆の二字に嚇かされて不正確なる意見を構成せぬとも限らぬ。

七、是果して普選最初の爭點たる乎

私は普選論者である。普選の結果には大に望を懸けて居るものである。民衆の要求を立法に顯はすには普選に依るの外はないと考へて居る。故に普選第一回の選擧は民衆生活に即したる問題を以て全國的の表意を求めて見たいものだと思つて居つた。朴烈問題のやうなもので第一回の普選を行はうとは八年に亘る普選運動の期間に於て夢想だもしなかつた。今日の形勢より推すときは第五十二議會は解散である。政府はたとひ、解散

理由を表面上他に求めても、(例へば、輿論に鑑み、普選を實行するの必要あり等)總選擧に際し、野黨は朴烈問題を捕へて氣勢を揚げるであらう。そうなれば政府黨は亦之に應戰しなければならぬ。茲に於て、朴烈問題が普選最初の爭點となること丶なる。それでも、政府にして朴烈の犯罪事實並に犯罪狀情を明告し、之に對して減刑を奏請した理由を公示して應戰するならば、一般民衆も冷靜なる判斷の仕方もある。たゞ一方は傲慢不遜にして改悛の狀なき大逆犯人を恩赦したのは不臣の極だと怒號する。他方は陛下の大御心を推し奉つた。天恩は洪大無邊であると謂ふのでは喧嘩兩成敗といふの外はない。誠に既成政黨にふさわしき政爭であると傍觀するの外はない。

そこで我々は、此問題を次の如く改めて普選に臨む方針に出でなければならぬ。

「國民は朴烈事件を政爭の具となしつゝある既成政黨を信認するや」

朴事件の眞相を發表し、減刑理由を公示し能はぬ政府も立憲的でない。これを或動機のものに、政爭の具として選擇した野黨はなほさら問題にならぬ。彼等は一般民衆に對する同情と誠意を缺くものである。彼等の欲する所のものは政權のみ。政權何が故に貴きか。以て利權を護るに足ればなり。此徒輩に我國家と我民衆を託してよからうか。既成政黨は、政府黨といはず在野黨といはず一齊に之を排斥し、民衆生活を胸臆より離さゞる新政治家の起立を促し、之が結成に依り新黨を樹立することが初期普選の目標であらねばならぬ。(一五、一〇、六)

ジノヴイエフの失脚を中心にして

佐々木修一郎

(一)

一九二四年十一月廿一日――トロツキー全集第三卷「一九一七」の卷頭論文「十月革命の教訓」は、モスコウ共産黨中央委

員をして、「トロツキーの行爲は、ボリシエヴイズムの歴史を十月革命の歴史とを曲解したものと信ずる。委員會は、特に、トロツキーがレニン對共産黨及中央委員會の眞の關係を曲解せる點に向つて、大いに、抗議せざるを得ない。……トロツキーは、十月革命會期に於けるレニンと中央執行委員會との關係に就て、共産黨と共産インターナシヨルとロシア全國とを疑惑と誤解に導きつゝボリシエヴイキの統一的内容を毀損し……その論文の内容は、ボルシエヴイズムに代ふるにメンシエヴイズムの形式を以つてするに過ぎず……昨年末の闘爭の繼續であり、共産黨と共産黨幹部に對する開戰である」と議決させ、越えて、一九二五年一月十九日、レニン一周忌の三日前、共産黨中央委員會は、トロツキーが、ソヴイエト政權、共産黨及一般大衆に與へた惡影響十數ケ條を指摘せる後（一）トロツキーが共産黨員たる間は、レニンズムと黨規とを嚴奉させ（二）革命軍事會議長の職を解き（三）共産黨學諸校の學科中にトロツキーは非共産主義的思想を有することの説明を入れる等の決議を發表した。同時に、トロツキーは、休暇を得て南下したのであつた。

今年になつてから、勞農ロシアの中心的働き手の一人が、他界した。それは、「驅につきけ」の評議すら差し向けられた辛辣な政策の持主「鐵の人」ヂエルジンスキーが、共産黨の内紛を前にして、七月廿日午後四時四十分、物故したことである。「共産黨の内紛を前にして」とは、こうである。――スターリン及ブハーリン一派とジノヴイエフ及カメネフ一派の抗爭は、昨年十二月に於ける共産黨第十四回大會に於て、公的に開展され討論票決の結果、百九六對三六の壓倒的多數を以つて、前者の勝利が指定されたことである。が、それにも拘らず、ジノヴイミフだけは、政治部の委員として踏み止り得たのであつた。併し、此の兩者の抗爭は、日のたつにつれて、前進したかのやうに見えた。即、七月十四日から廿二日にかけて、共産黨中央委員會及共産黨管理委員會は聯合總會を開き――此の會期中に實際派の働き手、聯邦國民經濟會議院議長兼保部長ヂエルジンスキーが死亡した――ジノヴイエフを「宣傳及秘密結社を以て、殊に、第三インターナシナルの委員、ベーレンキーの主動に依るラシエーワイッチが明確に反對團體の組織を主張したモスコウ郊外の秘密會合を似て、第三インターナショナル及ソヴイエツトロシアの破壞を企てたる者として」政治部委員から徐名したのである。

一九二二年、プレオプラゼンスキーの新經濟政策反對以來、共産黨には、多少の暗闘はあつた。一昨年トロツキーは、黨議

に脱するとの陳謝の下に、歩脚とは云ひ、政治部委員の要職から下落せずにすんだのであつた。而して、トロツキーは「幹部專制」に對する指彈のために、中央委員會の反擊にあつた。いひかへると、トロツキーの皮肉と雄辯は、血を湧かする痛快さはあつても、その痛快から、理論と行動を連結さする指導原理は生ぜず、メンーシエヴイヤ的茶番狂言の一幕として若者の胸を躍す程度のものであつた。それ故、トロツキーの此の行動は、共產黨の大方針を倒壞さするために、そう大きな鉈ではなかつた。が、ゼノヴイエフの所謂「陰謀と反對」は、少くとも、レニン死後に於ける共產黨の進路を轉關するものとして見れば、重大な敗北的意義があると信ずるのである。かくして我等は、ゼノヴイエフの「反對的根據」は、何んであつたか？を探ぐる所に到達した。

ゼノヴイエフの反對的根據は⑴クレムリン派即スタリーン等の都會勞働者中心を排し⑵貧農に重點を置き⑶スタリーン等の都會勞働者の重點から當然歸着する中農の第二義的重點を無視し、富農（kulaki）への重き課說の主張⑶勞働者への政治的參與權の分配即都市勞働者獨裁と幹部專制の打破⑷スターリン派の東洋弱小國へ共產革命宣傳に對し、西歐諸國への進出等である。これを要約すると、現在の共產主義を一九一七年―一九二〇年の「生な共產主義」へ復歸させることである。いひかへると、「新經濟政策」―義務國の製產力の發達と都市及田舍との間の交換の統制を確保するために、社會主義經濟の側に、國家の統制の下に置かるゝ資本主義經濟の存在の認容―に對する挑戰であり、勞農の分離を斷らすことであり「都會から」の共產主義」に出發點を求むることである。

「經濟政策の卓絕なることは、原理實行の上から云つて、「無條件な敎理である」而してこれは、政治線上に設定されねばならぬものであるレニンの所謂卓絕な「新經濟政策」は、ジノヴイエフの再建を要するほど政治線上に成長したであらうか？經濟的事實は、社會關係としての政治的事實に逢着して、ジノヴイエフの企てを肯定し得、又するであらうか？此の點を檢討するために「新經濟政策」の實施の結果、如何なる社會事業が、既成諸事實（les donnees）になりつゝあるか。こゝに私の視點を注うとしてゐるのである。

內紛の人的關係も、經濟的諸事實の運行に依て醞釀さるゝものと信ずる故、端的に、此の視點から筆を進めやうと思ふ。

（二）

「商品」と「交換」は同時に、「所有權」と「契約の義務」

を意味する。即、マルクスが、第一インターナショナルに於て、プルードン及バクーニンの一派に教訓した如く、民法の二要素、「物に連關するそれ」と「義務に連關するそれ」とは、繼承權に就て、後者は前者に依據して成立する。所有權の分野に於ける防禦の鐵則は、刑法及裁判權の存在である。いひかへると、「商品」製產の基礎的要素の現存の許容は、同時に、「交換」をも合法化する。

原始的遊牧の生產形態から近代的產業形態を含むロシアは、「社會主義國」とは云ひ、發達の過程として、產業の社會化の立場から各種の私營產業を許容せざるを得なかつた。即國家は、「製產」及「交換」を司法權の存在の上に、合法化したのである。（審問法典《一九二二年》第四條、第六條、民事訴訟法典第三條第四條及一九二一年、レニンの食糧品課稅に關する演說參照）此の「新經濟政策」は、國營產業及その他の產業との關係を、如何に事實化したか？

一九二三—二四年の報告は、我等に次の數字を示してゐる。

賣上總額	（單位百萬ルーブル）	一人宛の賣上製產額
國營產業……4.277		31.9
コーペラティブ…446		3.4
私營……2.826		21.1

右の數字は、又、我等に國營產業は、全額の五六、七パーセント（主に、工業的製產品即、此の全製產額の中九四、八パーセント）コーペラティブ產業は、二、七パーセント、私營產業は二、五パーセントの數字を教へてゐる。此の數字以外に、聯邦の統計は、機械のモーターを有せずして、最大限卅人の勞働者を有するものと、機械のモーターを有し、大人も、十五人の勞働者を傭用するものとが存在するのであるが、これは、私的に傭主に依る企業で「職人產業」と稱せられ、製產全額の約三七、四パーセントの比率を示して居る。此の統計で、我等は、國家產業の大部は、工業製產なることを看取し得たのである。

右の說述に次いで、我等は產業收入の所在を調査して見たい。聯邦の統計中央局の一九二三—二四年のこれに關する報告を左に記すことにする。

農業……5.746	（單位百萬ルーブル）
大工業……1.908.2——	
小工業……726.7——	
運輸業……894.9——	
商業……2 444.1——	
建築業……322.6——	
雜業……10.7——	

合計	12.048.2

右の統計の中、私的經營の產業の分野に包含さるゝものは、農業、小工業、及商業の半分等で、全產業收入の七億七千萬ルーブルが、私經濟の所產なのである。而して此れを取分率にすれば、全產業收入の六十パーセントにあたるのである。即、我等は、又、產業收入中、農業が第一位にのぼつて居ることをも知り得たのである。それ故國家經濟の立場から見れば、農業は重要な地點に立つて居るのである。さればロシア全人口の八五パーセントは、農民であることをも、偶然事として見逃がすわけには行かぬ。

「新經濟政策」の結果、如何に、此の農民經濟は、既成事實に成長したか？

一九二四—二五年に於て、戰前の地農の八八—パーセントが耕作されたのであるが、今年は、九四パーセントに穀物の種が蒔かれ、農業の全收入も戰前の域に、ほゞ、達したのである。而して、戰前、一人宛平均十一ルーブルの重稅から脫して、今日では、此の額の四〇パーセントの稅をソヴイエット國家に農民が支辨して居るのである。此の結果として、農民は、より幸福な生活を享受して居るのである。即、第一に指摘せねばならぬのは、家畜の飼料が改善され而して、勞働者の地位の向上と共に、何所の國々でも起る所の消費的傾向が著しくなつて來たことである。（M. Halbwachs. La Classe ouvrière et les niveaux de vie. chap. ）第二に、資力の增加と共に、高利貸しの金を、より少く利用しなくなつたことを擧げねばならぬ。第三に、製產販賣に對して、好時機を撰擇する智能が生じ、凶年に備へる貯藏をもなすやうになつた點に觸れねばならぬ。此の新興農民階級の製產の販賣と、製產機具の購買とのために、約六百五十萬の農民の加入するコーペラシヨンが存在するのである。が此の存在にも拘らず「商品」と「交換」の關係的危機はソヴイエット・ロシアに經濟的危機を齎らしたのであつた。此の危機に說述を與ふる機會に直面した。

（三）

「都會の共產主義」は、農村の產業化に注視する。

農民の消費力が增進したことは、前にも述べたのであるが、此の事實と、產業化の政府及農民の一致的欲望は、農民の近代的生產機具及製品の購買に導いて行つた。而して、今年中に農民が政府から受け取るべき農事機械の總額に一一六、五〇〇、〇〇〇ルーブルで、その中外國から輸入すべき機械の金額は、三三、五〇〇、〇〇〇ルーブルなのである。その外多く

の製品は外國にこれを求めねばならぬロシヤの現狀である。こうした一方に、政府は、輸出入のバランスを統制するのである。即、政府は、輸出入の計畫年度を前以つて決定してゐるのである。

一九二五年の作物の收獲は、革命以來の最善なものであつた。而して、政府は、一九二五―二六年度の外國貿易計畫に從つて、産業機械及原料品等の輸入を支持する以上に輸出をなさなければならなかつたのである。が、輸出の穀物の購買とその運送に政府は、失敗した。その原因は、種々あるのであるが、主なる原因は「製品の飢餓」であつた。これを云ひかへると、農民が製品購買の不可能なることを知つて、翌年まで、作物を持ちこさんと決定して、それを賣り澁つたためであつた。穀物は、政府購買所から、返送される。その上、惡道路は運送力をにぶら、ひいては、鐵道のクロニツクないろ／＼な艱事に發展して行つた。製品の分配は、都會勞働者三分の二農民三分の一の割合となつた。而して戰前、五千萬頭の馬の數が今日、五百五十萬頭に減じ、農民の中、三五パーセントは馬なしで耕作してゐるのであるが、馬の代用としての製品も、又、馬そのものを買ひ入れることが出來なくなつた。かくして、政府の輸出計畫は頓坐し輸入計畫も必然的に予定の軌道を走り得なかつたのである。

これに關連したもう一つの危機は、チエルブオネッツの下落であつた。同貨は公式に取引所に上程されず、輸出入のバランスは政府の權力の下に置かれてある此の國では、貨幣の下落はあり得ない。が、或種の必需品は、輸入を余儀なくされ、去る六月卅日には、輸出總額が、只、四三七、四〇〇、〇〇〇ルーブルを示し、これとは反對に輸入高は、五二一、一〇〇、〇〇〇ルーブルに上り、チエルヴオネツツの小危機を來したのであつた。此のバランスの不均衡は永續するであらうか？

ロシアの「一九二五年」は、どうして、不運な循環に旅立つた。―こゝに豐作がある。農民は豐富な蓄積の、繁榮の下にゐる。當然、農民は、工業的製産品を要求する。政府は此の要求に滿足を與へ得なかつた。農民は、剩余的穀物を賣り澁る。政府は貿易計畫に失敗する。而して、機械と原料の輸入を削減する。その結果、工業的製産額はプログラム以下に降下する。而して「製品の飢餓」が出現する。こうして、翌年も、農民はその剩余の穀物の賣りこみを欲しない。

右のやうな説述は、作物の價格と、工業品との價格を如何に對立さするであらうか。

左に國家計畫委員の卸し物價指數の統計を掲げることにす

る。

一日から 1925	農業製產	工業製產	平均
七月	1.862	1.898	1.880
八月	1.610	1.903	1.751
九月	1.548	1.927	1.727
十月	1.556	1.949	1.742
十一月	1.563	1.964	1.753
十二月	1.626	1.976	1.793
1926			
一月	1.694	1.982	1.833
二月	1.878	2.001	1.939
三月	1.908	2.017	1.962
四月	1.904	2.033	1.968

右の統計から、農業製產の價格の工業製產の時價より、はるかに、下位に在ることを知り得たのである。此の事實は更に、農民に如何なる反映を投ずるであらうか？

（四）

昨年六月一日の聯邦全體の收穫予想指數は、（三回の場數で平均を出す）はじめ、三、一で收穫期には三、三となりたつたのであつた。今年六月一日の收穫予想指數は三、三で、七月一日には、三、三四を示し、（ウクライナ・クリミアの南部地方は、三、七）七八九—六二二（單位百萬）ポンドを輸出しを得る予想である。而して、已に、前半期に於て、六四、六〇〇、〇〇〇ポンド輸出された。かくの如く、今年も亦豐作らしいが、併し、此の穀物動員に、政府が成功を納め得るかは、依然として疑問とされて居るのである。

チエルジンスキーは、その死亡の一週間前に彼の六ケ月の努力で、製品を十分に給供するために努力するが、農民は又作物の賣却を拒絕するであらうとの危惧を洩らした。

食糧の價格は下落してゐる。農民の興味の中心となるのは、豐作と、穀物及食糧品の高價なることである。併し事實は、これと反對に、五月、六月、七月と月の變るにつれ食糧品が下りつゞけ、反對に、工業品は、少しづゝ騰貴して行く傾向である。兩者の價格の開きの閉じざる此の事實は、製品の欠乏を意味し、一九二六年の作物の政府への集中は困難となる。一九二六—二七年の仕事も、一九二五—二六年の如く、稀れな豐作も無駄になるであらうか。集中と輸出とは、再び失敗し工業製產に必要な貨物の輸入は遲れ、「新經濟政策」の中で、大成功をな

した通貨もおびやかさるることになるであらう。

こゝまで、筆を進めて、我等は、ジノヴィエフが、一九一八年のローカル・コンミュニズムに歸へれの挑戰をなしたことに、再び、立ち止らう。而して又、ジノヴィエフは、幹部專制の打破をも叫んだのであつた。が、此の二つの主張のパラドックスは、貧農の味方の彼をして、スターリンよりもより「ヨーロッパ人」にするのである。

現在のロシアは、製產機械と製品の欠乏に苦んでゐる。此の解決は、「生な共產主義」へ復歸することだけでは達成されない。貧農中心でもない。工業製產の發達に伴ふ。即ち、國內及國際の「貨物」と「交換」とを、正しく進行する機構が必然、ロシアをその危機から脫却せしむるであらうと思ふのである。

(五)

今月四日、モスニー特電は、レニングラード失脚派が、ジノヴィエフを中心に久しく向背を注視されてゐたトロッキーも參加し、アヴイオ・プリボール工場に集合し黨の內部に關する重要問題を密議した。と報知したのであるが、或は事實であるかも知れぬ。

併し、現在のロシアの機體は、個人の失脚から、多少の影響はあつても、根本を覆へすやうなことはあるまいと信ずる。機體の呼吸と呼吸を一にする人のみ生存し、機體の意思の表現をなす人のみ支配的地位に坐すのである。トロツキーとジノウイエフの握手も、來るべき第十五回大會では、表面に出るであらうが、併し、機體の感情と意思の外に彼等が生存する限り彼等の存在は、何人の眼にも映じて來ないのである。それ故「謀反的戰爭」はあるまいと思ふ。

その上、ロシアの產業は、「工業の國家乃至都市」と「農產の地方」とを一體と見て、「商品」と「交換」を中心にして開展と成長とを欲してゐる。

駐佛勞農ロシア大使ラコースキーは云ふ。「一體我等は、新信用建設のために、何處から金をもつて來るのか？……佛露の提携は理論を語る必要なく、只、金融的乃至經濟的關係がこれを結びつける。」と。

どこから金を持つて來るのか？——私は答へる。「アメリカ」と「ヨーロッパから」若しさうあり得ないとしたら、「世界的、、、、、、」と。併し、此等の何れが可能性を有するのであるか？

右翼結成は必然的大勢だ

赤松克麿

一

社會運動の一角から、「共同戰線」、「全國的單一政黨」のスローガンが、うるさい程、高唱されるにも拘らず、事實はスローガンの反對の方向へ展開して、左右兩翼の對立的傾向は、日を逐ふて益々鮮明を加へて行きつゝある。勞働農民黨の共產系排除然り。自治會の分裂然り。更に最近に於ては、勞働總同盟の勞働組合右翼結成運動然りである。勞働組合の右翼聯合は、近年右翼陣營内に於ける一個の希望であり、また懸案でもあつたのだが、總同盟は、愈々去る十月上旬の全國大會に於て、多少の危惧を抱きつゝも、大膽に此の計畫を實現すべく決意したのである。

右翼勞働組合の結成は、全國的總聯合の絕望から生れたものであり、而して又、將來に於ける全國的總聯合の絕望を豫示し且つ保證するものである。我々は斯くの如き現象を、我國勞働運動のために悲しむものであるが、此の必然的大勢は如何ともすることは出來ない。共同戰線の決裂といふ表面の事實だけを見て、詠嘆的哀感を催うすものは、空虛なる大義名分論に囚はれたセンチメンタリストであつて、事實の歷史的意義を解せざるものである。我々は斯くの如き事實の出つて來る所を究明し、その必然性を承認し、しかして其の必然的大勢を勇敢に助長することによつて、却つて我國勞働運動の合理的發達に貢獻するものなることを信ずるものである。然らば、右翼結成の必然性とは何んであるか。

二

私は先づ、美しい大義名分論を着飾つた所謂共同戰線論の僞善的假面を剝いでかゝらねばならぬ。一體今日、最も熱心に最も執拗に、無產階級共同戰線論を高唱して居るのは誰であるか。恐らく多少なりとも無產階級運動の消息に通じて居る人

は、それが所謂共産系の諸君であることを容易に肯定するであらう。かの無産者新聞の如きは、毎號、此の點に一言觸れなければ、義理がすまないやうに、殆んど機械的に之を繰り返して居る。いかにも共同戰線論は、一應は尤もな言ひ分である。資本主義は危機に立つて居る。資本階級は此の危機を脱しやうとして苦悶し焦燥する。その努力が現はれて勞働階級に對する壓迫となる。此の壓迫に對して勞働階級は全勢力を集中して當らねばならぬ。之れが所謂共同戰線論の根據である。資本主義の危機に就いて彼等一流の獨斷はあるが、今それは別問題として、これだけの論據ならば、何人も異存のあらう筈はない。しかし唯だこれだけの論據であるか。我々は世間見ずの處女の如くに、不良少年のほがらかな甘言に釣り込まれて、差し出された手を其のまゝ握り返すが如き氣持には到底なれないやうに、過去の幾多の事實によつて教へられて居る。我々は、所謂共同戰線論には、裏の裏があることを熟知して居る。私は今から、その裏の裏を掻かねばならぬ。之れに就いて實證すべき事例は澤山あるが、最も便利なのは、所謂共同戰線論の内幕を憶面もなくさらけだした左翼幹部諸君の訓令的文書を引用することである。此の訓令的文書の典型的なるものは、「マルクス主義」第二十號に記載されたところの、佐野學氏の「左翼勞働運動に就いて」と荒畑寒村氏の「無産政黨と共同戰線」の二論文である。

三、

佐野氏は訓示的語調を以て云ふ。

「現在の歴史的事情の下に於て、我々の最も根本的な緊急直接の任務となつてゐるものが二つある。

第一は、あらゆる合法的機會を利用して、大衆運動の戰線を擴大し且つ統一することである

第二は、日本の無産階級の最終の勝利のために必然に經過せざるべからざるブルヂョア民主主義の獲得にあらゆる用意をすることである」。

しかし以上の任務を遂行するにあり、「決然たる左翼的精神を以てせねばならぬ」。

然らば左翼的精神とは何ぞや」。それは「無産階級解放の根本原理たるマルクス主義に立つ階級鬪爭の精神、社會主義を意識的目的とする社會××の精神」である。しかして「左翼分子」とは「左翼的精神を確守し、全運動を左翼化するために働く所の前衛分子」を指し、此の前衛分子は「全運動を×××向へ導くために、觀念及組織の兩方面に亘りて指導することを任務と

する」。此指導者の一團、即ち左翼分子のみの結合は、「革命家の團結。と命名し得る。しかし「左翼分子」と「左翼的大衆團體」とは異る「左翼的大衆團體」とは「左翼分子の指導の下にある大衆團體」である。それは「飽くまで大衆團體であるが故に、當然に、「革命家の團結」とは異りたる組織と機能とを有するのであり、またこれを有せしめねばならぬのである」。

右の說明によつて、佐野氏のいふ左翼派の陣形は整つた。次に彼は、右翼派に對する鬪爭方法を敎へて居る。曰く、

「右翼派は勞働階級にとつて最惡の敵である。世界戰爭後、資本主義の崩壞が急激となり、同時に階級鬪爭が愈々鋭くなり、資本に對する勞働の勝利が確實となりつゝあるのであるが、身、勞働階級の陣營に在りつゝ、ブルヂョアジーと野合して勞働階級の勝利を妨害しつゝあるものが右翼派である」。

しからば「いかに右翼派と戰ふか」

「第一、右翼首領の階級的裏切を絕えず大衆に暴露することである。資本家や政府との結合を暴露することは最も有效である」。

「第二、政策と實際鬪爭を通じて右翼派首領の裏切と怯懦とを暴露し、同時に左翼分子は、その適切なる政策と勇敢なる行動とを以て大衆の信任を獲得すべきである」。

「第三、右翼派の組合內に左翼派を形成すべきである」。

「第四、左翼組合は右翼組合に向つて、絕えず諸種の問題に就いて共同戰線を持ちかけねばならぬ」。

「第五、左翼組合は右翼組合に向つて、勞働組合の統一を絕えず迫るべきである」。

「第六、左翼分子はいかなる場合にても改良的組合より脫退してはならない。我々はいかなる右翼組合內にても働き、その大衆を獲得することに努力すべきである。いかなる右翼組合と雖も、勞働者の組織であるからには、是を破壞してはならぬ。これを左翼化することこそ我々の任務である」。

荒畑氏は政治的共同戰線について云ふ。

「日本の無產政黨の構成要素中には、共產主義者もあれば、社會民主義者もあらうし、またブルヂョア自由主義者も居やう。だが、若し共產主義者にして其他の要素との共同戰線を拒み、單獨にその所謂革命的な政黨を組織するとせば、果して能く成功するであらうか。日本の共產主義者は果して、その獨立の政黨を組織し得るまでに、勞働大衆の間に、信賴と後援と地盤とを有してゐるだらうか」。

荒畑氏は、日本の共產主義者が、まだ大衆的背景を持つてゐないから、共同戰線を張らねばならぬと力說する。即ち「たゞ

に一切の無產階級分子、準無產階級分子を糾合して」統一的共同戰線を張るばかりでなく、「政治的に、經濟的に、多くの點に於て無產階級と共通の利害關係を有する小ブルヂョアとも、共同戰線を作らなければならない」。しかして荒畑氏は、現在に於て「無產階級の陣營内に共產主義的要素が稀少であつても、「大衆の間に吾々の思想的感化を及ぼし、吾々の實際的政策と戰鬪的熟練とによつて、大衆の間に指導的位置を獲得し」得るから、將來は樂觀していいと云ふのである。

四

佐野荒畑兩氏の論文は、可成り抽象的であるから、左翼派平素の言論に基いて、之れに具體的註釋を加へれば斯うである。左翼指導者の一團たる「革命家の團結」は、山川均、荒畑寒村、佐野學、德田球一、市川正一等の諸君であり、「左翼的大衆團體」は、評議會、無產青年同盟、水平社無產者同盟、大衆教育同盟等である。又、「勞働階級にとつて最惡の敵たる右翼派」は、勞働總同盟、海員組合、市電自治會、官業勞働總同盟、海軍勞働組合聯盟等であり、此等の幹部は、政府及資本家と結托する階級的裏切者なのである。そして現在、左翼が右翼幹部を腐敗墮落せりと稱して、あらゆる中傷惡罵を加へながら、一方に於て絕えず、全國的組合總聯合又は全國的單一政黨の提唱をなしつゝあること、左翼が絕えず右翼組合內部に自派の細胞分子を扶植しつゝあること、等は、佐野氏の訓令通り現に行はれつゝある事實である。

左翼の言說によれば、眞の無產階級運動指導者は、右の山川氏等の一黨あるのみであり、眞の無產階級團體は、右の評議會其他の團體あるのみであつて、其他の指導者は階級的裏切者か若くは中間的朦朧運動者であり、又其他の團體は階級意識の曖昧な烏合の衆である。だから所謂共同戰線なるものは、全無產階級團體の各幹部及び各團體員が、相互に信賴し諒解し合つて、作り上げるものではなくして、山川均氏と其の一黨の計畫遂行に便ならしめんがために、全無產階級團體をして其の背景にし地盤にし踏み台にしやうとする魂膽に外ならぬのである。斯くの如き腹に一物ある共同戰線論が、うまく當れば御慰みだが、事實は悉く失敗を示して居る。せちがらい此の節、庇を貸して母屋を取られる馬鹿は少いだらう。日本の共產主義指導者諸君よ！諸君は少し世間を甘く見ては居ないか！

眞の共同戰線は、各無產階級團體の幹部並に團體員の、隔意なき諒解と信賴の下に始めて生れるものである。然らざる共同戰線なるものは、詐欺的又は强迫的野合に外ならぬ。若し假り

に斷くの如き不純なる共同戰線が生れたとするならば、それは却つて各組合間の紛爭を繁くし、組合戰線の攪亂を助長する結果に終るであらうことは、火を睹るより明かである。ところで現在、右翼幹部は、自己の運動方針の正當なることを確く信じて居る。しかして左翼幹部の神經衰弱的若くは肺結核的革命運動の誤れることをも確く信じて居る。且又、右翼大衆が、右翼幹部の人格と識見とに十分の信頼を捧げて居ることも事實である。かくの如き狀態であるに拘らず、左翼幹部が自家中心の、蟲のよすぎる共同戰線論を持ち掛けて來たところが、一體誰が之れに應ずるものか。若し之れに應ずるものありとせば、それは超人的なる無抵抗主義者が、さもなければ、別誂ひの間抜ものである。

五

現在、右翼が多くの經驗によつて、經濟的にも、政治的にも、左翼との共同戰線を峻拒するそは當然であるが、左翼の方では、自己の野望が當らないと見るや、今度は右翼は共同戰線の破壞者であり、分裂政策を行ふ者であり、しかも支配階級の手先きとなつて、左翼排擊を爲すものであるといきまいて來る。彼等は自己の非を蔽はんがために、他を傷けんとする卑怯なる戰術に出て居る。梅毒患者が結婚を申し込んでハネつけられ、くやしまぎれに相手の惡口を言ひ觸らすのと同樣である。山川均氏は、「マルクス主義」第二十九號に於て、單一政黨を支持しない右翼指導者を以て「支配階級と意識的に協力する者」と斷定して居る。一體、右翼指導者が左翼指導者の動機不純の共同戰線を排擊する一事によつて、いかにして、支配階級と意識的に協力する者となるのであるか。例を總同盟幹部に取る。過般の總同盟第十五年度大會に於ける中央爭議部の報告によると、總同盟は過去一年間に於て、大小百〇六件の同盟罷工を敢行し、參加人員は三萬四千六百二十三人を算し、延人員數は三十七萬二千〇八十三人となつて居る。勞働組合の主たる日常鬪爭が、勞働爭議であることは言ふまでもないが、右の大小百〇六件の經濟戰には 所謂右翼指導者は直接間接に參畫し指導し、多大の犧牲的勞苦を拂つて居る。一方に激烈なる日常鬪爭に參加しながら、他方には支配階級と意識的に協力することとは、いかなる曲藝によつて演ぜられるのであらうか。海風さやわかなる湘南の天地に、日向ぼつこをしながら革命理論を考案しつゝある山川氏が、日夜階級戰線の巷を馳驅しつゝある實戰の鬪士に向つて、自己の意志に反するとはいへ支配階級と意識的に協力する者などゝ中傷的漫罵を加へる如きは、聊か不謹愼を

免れない。果して右翼指導者が現實に支配階級と協力する者か否か、それは彼等と日夜行動を共にして戰塵にまみれつゝある右翼組合員が最も能く知つて居る筈であつて、靜閑なる保養地に、春夏秋冬、何不自由なく悠々自適しつゝある一高踏批評家の憶斷すべき限りではない。

六

我國の社會運動分野に於て、右翼と左翼とは、戰術に於ける相異があるのみならず、同志的信頼を全く缺いで居る。同志的道德のないところに共同戰線の生れやうはづがない。そこで右翼は、總花的共同戰線に望を絕つて、經濟的にも政治的にも、階級道德並に運動方針に於て、大體傾向を同うするもののみの共同戰線を企圖することになつたのだ。しかして右翼は自己の正しいと信ずる所に向つて、勇敢に邁進することが、却つて我國無產階級運動の健全なる發達を期する所以だと信ずるのである。

左翼結成は夙くの昔に出來て居る。それは隱密の間に、巧みに組織され活躍して居る。左翼の組織的活動に對して、右翼が結成的勢力を作らんとするのは必然だ。むしろおそまきの感じ無いでもない。右翼結成の成就と其の發展とは、社會運動の混沌たる雰圍氣を打開して、新しき光明をもたらすであらう。

勞働總同盟の「右翼聯盟」への進出

山川均

□

さきに（六月二十日）大阪勞働組合會議の提議により、全國の勞働二十六團體、五十餘名の代表が大阪に集まつて、全國組合總聯合の組織を相談したことがある。この會議は、準備の上にも不充分な點があつたと云はれてゐるが、直接には、日本勞働總同盟の積極的な反對により、準備機關の成立さへも見ずして終つた。當時總同盟の代表者が、全國總聯合の組織に反對す

る確定的の態度をもつてこの會議に臨み、準備機關の設置にさへも、一も二もなく反對した理由については、いろ〳〵な憶測が行はれた。そしてその一つは、總同盟には、分量において最も大きく、しかもこれ迄で他の勞働團體と階級的な提携を殆んど少しもしなかつた海軍勞働聯盟と日本海員組合とを惹きつけることのできる、右翼的組合のみの聯合を組織する希望と計畫があるからだといふことであつた。

□

しかしながら總同盟側から發表せられた反對の公式の理由は、もちろんそうではない。それは主として組合の財政上の理由であつた。即ち、今日吾々に必要なものは、單なる全國組合會議といふ形式ではなく、資本の攻勢に對抗し得る力ある全國組合會議である。しかるに現在の勞働組合界の現狀は、何づれの團體も財政難に陷入つて居り、大組合は勞農黨の黨費負擔に惱まされ、小組合は經費の關係から代表者さへも送り得ない有樣であつて、かような現狀においては、財政上の一點から、力ある全國組合會議の成立は不可能である。要するに現在必要とする全國組合會議は實現が不可能であり、實現可能なものは、現在の必要を滿すことが出來ない種類のものである(總同盟機關八月號による。)これが總同盟が徹頭徹尾、六月の大阪會議において總聯合の組織に反對し、全國總聯合の促進に努力するといふ抽象的な聲明以外、苟も責任を生じ、從つて今後の行動の自由を縛られる嫌ひのある具體的な促進方法(準備機關の設置)には、一も二もなく反對した表面の理由であつた。

けれども總同盟は、決して『だから放任して置け』といふものでないといふ事を附け加へておくことを忘れなかつた。『だから放任して置けといふのではない……吾等は……他の團體と十分なる意思の疎通を圖りつゝ、餘りに無理をせず可能なる範圍に於て……之を結成せしめねばならぬ。』これが全國總聯合に對する日本勞働總同盟の『方針』として發表せられたものであつた。

□

これと照應して最も興味あるものは、『社會思想』八月號に發表せられた、大阪會議の失敗に對する河野密氏の見解であつて、氏の見解は或る點まで、大阪會議において日本勞働總同盟の代表者の取つた態度の註釋と見ることができる。

『……尚早論を徹頭徹尾主張した總同盟の西尾君の所論は、飽く迄現實論であつた。……私は大膽にかく斷言せんとする、此度の全國總聯合準備會は事實に於て時機尚早であつた……然ら

ば何故にかく斷ずるか？　曰く、全國の各勞働組合は過去一年有半に亘る無產政黨組織運動に依つて、少からざる疲勞を覺えてゐる。今日日本の勞働組合は、その財力に於て、その人力に於て、重ねて全國的運動に參加すべき餘力を有つてゐない。況んや政治的の總聯合である全國單一無產政黨は、成立したとは名許りで、それが具體的發展は全くの未知數として殘され、前途には尙多くの難關が橫はつてゐる。殊にその一大支障が、財政上の困難にあることは明白な事實ではないか。無產階級それ自身の手に依つて政黨の費用すらも支辨し得ない現狀に於て、重ねて全國的の機關を有つことは、各勞働組合の負擔を過重にすることであり、從つて一個の不可能を强ひる結果になるからである……今假りに全國總聯合準備機關を設立し得んとしてもその具體的活動は先づ財力に依つて制せられ、第二に組合感情に依つて制せられ、結局有名無實になるのがおちである……。

私はいま河野氏の見解を批評しようとしてゐるものではない。いな反對に、大阪會議において總同盟の取つた態度が、河野氏によつて、現實の觀察によつて如何に完全に裏書きせられたかを見ようとしたのである。

のみならず、河野氏が大阪會議と全國總聯合の促進を時機尙早であると『大膽に斷言』せられるいま一つの重要な理由は、全國總聯合は單なる既成組合の全國的協議團體であるべきものではなく、產業別による合同を基礎とした、『財政的に有力な一大組合の出現』でなければならぬ。それがためには既成の『勞働組合の集中（產業別合同、組合の整理）それ等の組合の全國的な結合とは……同次的な道程でなければならぬ』いふ點にある。

既成組合の產業別的整理と、これ等の組合の全國的組織『一大組合』への發展とが、互ひに作用し反作用しつゝ進むべき一つの過程であるといふ意味に解するなら、この見解は正しいと云はなければならぬ。けれども河野氏の見解をかように理解するならば、或る一定の瞬間において、この二つの作用の一方が他方よりも進出するといふことは、少しも差支へのないことである。たとへば全國總聯合の計畫が具體的に進められてゐない瞬間にも、既成組合の產業別的合同が實行せられて差支へないように、產業別的合同の計畫が具體的に進められて居らぬ瞬間に、全國總聯合への第一步としての準備機關の一大組合への更に遼遠な第一步）の設置が着手せられても、同次的な道程を破つたものとは云はれない。

そこで河野氏の見解は、組合の全國的組織の發達と既成組合の產業別整理の完成とが、互ひに相作用し進むといふこと以上

に、すべての全國總聯合または全國會議の計畫には、必ず產業別合同の計畫が同時に織り込められてゐなければならぬ、といふことでなければならぬ。私は勿論、かくあること、かくあり得ることが望ましいと云ふに躊躇せぬ。けれども如何なる場合にも、全國的結合への計畫は（組合會議やその準備機關の程度のもので）產業別合同の具體的なプログラムを含まなければ、徹頭徹尾、反對すべきものだとしたならば、河野氏が『時機尙早』でないと認められる時機は、かなり遼遠なものだと解しなければならぬ。これは組合の財政狀態のみから云つても同じであつて、日本の組合が政黨に費用を辨じ、尙ほその上に樂々と全國機關の經費を負擔し得る狀態となり、かくて全國總聯合が『一個の不可能を強ひる結果』にならぬ時機は、甚だ遼遠なのである。そこでいづれにしても、河野氏の全國總聯合（ないしは全國組合會議）實現の『時機』は、手つ取り早く到來するものではない、從つてそれまでは、『尙早論を徹頭徹尾主張する勞働總同盟の所論が『飽く迄』現實的なのである。

かように河野氏は、全國總聯合の『時機』をかなりの遠方に置かれたにも拘らず、一度びこの『時機』が到來した曉に、總同盟の取るべき態度について注意を與へることを忘れなかつたのである。

『……その故に特に私は總同盟の代表者に言ふ、總同盟の代表者は、時機尙早論をなすことに依つて、社會に對して一個の約束をしたものである。即ち總聯合を爲すの具體的好機が到來するならば、總聯合の必要を迫る具體的の問題が生ずるならば、如何なる犧牲を拂つても、自ら率先して總聯合を實現し、今日の代償を爲すべき義務を負ふたものである。若しその機に至つて尙逡巡し、階級を裏切り、組合利己心の故に共同戰線の實現を防止するならば、その罪正に絞斬に値すべく、天下皷を鳴してその非を糺彈するであらうと。』

日本勞働總同盟は、このアッピールに應じて起つた。即ち無產政黨組織運動の疲勞も癒へ、財政難も一掃されていまこの『好機』が到來した！　そこで總同盟は恐るべき『絞斬』の制裁を免かれ、『社會に對する約束』を果たすために、右翼組合總聯合の促進を決議したのである！

□

これが十月五日の勞働總同盟全國大會における、『我總同盟は、指導精神並に運動方法において大體政綱を同うする友誼團體とのみの結成を計り、……我等は右の方針に基いて今後積極的具體的運動に移るべきことは義務なりと信じ』といふ決議と

なつて現はれたものである。この目指されてゐる謂ゆる『右翼聯盟』の內容は固より明かでないが、新聞の傳ふるところによると、勞働總同盟、官業總同盟、海軍勞働聯盟、日本海員組合、海員協會の五團體の聯盟だと云はれてゐる（十月六日、東京朝日新聞。）この『右翼聯盟』の成否は、主として海軍勞働聯盟の向背にかゝつてゐる。總同盟が分裂によつて加盟組合の半數を失つた當時から、海軍勞働聯盟に着目してゐたことは事實であつて、左翼分子の一掃を目的とする大膽な分裂政策の決行は、そのためであつたとさへも憶測せられてゐた。分裂以後の總同盟に取つては、組合運動の勢力均衡の狀態を有利に展開し、ことに最近においては、しば／＼孤立の危險にさらされてゐる形勢を脫する唯一の方法は、數に於いて尨大な海軍及び海員と結ぶことであつた。そこで今日、總同盟がこの種の『右翼聯盟』の形成に向つて一歩を進めたりと云つても、何人も不思議とせぬにちがひない。たゞ問題は、海軍勞働聯盟が積極的にこれに應ずるかどうかといふ事であるが、これはまた、現在のところでは官憲の意向が決定的の要素となる。總同盟が正式にこの決議をしたところを以つて見ると、官憲當局との間には、すでに相當の諒解が成立してゐるものと見られぬことはない。或は官憲は、海軍勞働聯盟を久しく一般組合運動から遮斷しておくことの、とうてい不可能なことに鑑みて、寧ろこの秘藏の切り札を投げ出すことによつて、右翼の勢力を結成するにしかずとする見地から、積極的に働らいてゐると見る觀察が、事實を誤つてゐないかも知れぬ。

いづれにせよ、かような內容をもつた『右翼聯盟』の形成に一歩を踏出し得たことは、右翼的勢力の結成に努めてゐる總同盟の成功といふことができると同時に、一面においてはその失敗を物語つてゐる。なぜならば總同盟と日本勞働組合評議會以外の無產政黨組織運動に參加した謂ゆる中間組合（日本農民組合をも含めて）を、自己の周圍に結びつけて總同盟を中心とする勢力に結合し、かくて組合評議會を完全に孤立せしめることが、第一次無產政黨の禁止と第二次無產政黨の組織計畫この方の、總同盟の目指した目標だつたからである。この計畫は思はしく行かなかつたばかりでなく、總同盟自ら孤立の危險にさらされた。そこでもう一歩右轉して、直ちに海軍聯盟海員組合との提携を急ぐことが必要となつた。それ故に『右翼聯盟』への一歩進出は、總同盟が第二次無產政黨組織以來の第一段の計畫を未遂のまゝに殘しておいて、（即ち、謂ゆる中間團體によい加減見切りをつけて）第三段の計畫に移らざるを得なかつたことを意味してゐる。

『左右兩派の聯盟結成に對する意見の相異は、(右翼は)いかに無産階級といへども指導精神の異る組合間の(全國)聯合は…無意義であるといふに對し、左翼側は、(全國總聯合は)各組合がその指導精神の異同によつて結成するのでなく、まづ階級團結として結成しなければならぬといふにある』(十月六日東京朝日新聞。)たしかに近き將來に於ける左右兩翼の鬪ひは　この問題を狹んで鬪はれるにちがひない。

『右翼聯盟』が若し成功したならば、或は成功の見極めがついたなら、勞働農民黨に對する總同盟の態度も、今日までの活さず殺さずの方針が一變せられるに違ひない。總同盟は勞農黨から脫退するか？　曰く然り曰く否なである。何人もこれ以外の答を先見することは出來ぬ。なぜならば一切萬事は、たゞ『日和』と『機會』が決定するからである！　(十月七日。)

ロバアト・オウエンの復活

本位田祥男

一

氣高い單純さと偉丈なる實行力を持つた、生れ乍らの人類指導者であると讃え、且英國に於ける社會運動にして彼の名と結びつかなかつたものはないとさえ其功績を認め乍ら、エンゲルスはオウエンをも其批判の俎にのせた。「社會主義の發展」に於てエンゲルスは云ふ、オウエンにとつては社會主義は一の理想の所産である。而して理想は事實の正しき認識から生れる。彼にとつては社會主義は主觀に依つて全く現實と離れて存在してゐる。從つて理想社會の實現にも唯眞理の發見のみで足りる。蓋し今迄此社會が存在しなかつたのは全く民衆の無智に基づくからである。此の如き理性及正義の力に依つて社會主義を實現せんとする事は空想である。社會主義を科學たらしむる爲めには現實の基礎の上に置かなければならぬ。現實の必然的な發展として、其最後の綜合として之を見なければならぬと。其「空想から科學」への標語は多くの人々を動かした、其體系に於てマルキストに非るもの迄も科學的社會主義の名に憧れてゐる。此合言葉に依つてオウエンは完全に否定された様に見えた。

然るに近來度々英國に於てオウエン復活の聲を聞く。一九二三年の夏、勞働黨大會の司會者として、ウエツブは其演説を次の句を以て結んでゐる。「如何なる社會變革を持ち來すとしても、相愛の精神によらなければ大して成功する事は

出來ない。何故なれば我々は英國社會主義の創設者がマルクスでなくしてオウエンであつた事を心に留めなければならぬ。オウエンは說つた、階級鬪爭ではなくして人類愛なる古き理論を、――人類愛なる希望信仰と生きた事實を。」と。此考方は決してウエッブ一人の私見ではない、勞働黨全體の確信である。他の機會に於て其首領マクドウナルドも同樣な事を云つてゐる。其人格と學識に依つて愛敬の的となつてゐるトウネイも之を繰返してゐる。

英國は社會運動に於て世界の先達である。現在に於ても露國を除けば其運動の最も進步した國である。而してマルクスの學說が露國に實現された時、英國社會運動者が之に反してオウエンの後繼者を以て任ず事は奇しき對照である。英國に於ても玆八十年來消費組合運動は其基調をオウエンの社會思想に置く事を誇としてゐた。此意味に於てオウエンは研究されてゐたのだ。然るに今日偉大なる社會的勢力を持つて來た勞働黨の人々の高唱に依つて、オウエンに對する興味は更に新にされた。オウエンの現代に再び生きるものは何であらう、彼の思想の特色をなすものは何であらう。自分は此小さな論文に於て彼の思想的體系をたどつて見度い。

二

オウエンの人生觀及社會觀の根本は彼の有名なる性格形成に關する問題である。彼は云ふ「人は一の複雜なる存在である、其の性格は生れ乍らの性質と組織、及生れてから死ぬる迄夫に對する外的事情の結果に依つて形成される。此の如き根本的組織と外的影響はお互に絕えず働きかけ又反動し合ふ。」即彼は人に對する先天的及後天的の二つの要素を認めた。前者は種々の慾望及性能であるが、夫は直接に神より與へられるもので、我々の如何ともなし難いものである。此等の性能及傾向は個人に依つて全く異つてゐるから、同じ環境に置いても異つた個性を作り出す。此個性がなければ

世は單調退屈となり不愉快となるであらう。各々の差異があつてこそお互の牽引が起り愛情が生れる。實に此個性の差異は人類の幸福にかくべからざるものである。

而し彼の學說の特徴は最もよく其後天的な影響を說く點に現はれてゐる。「人の性格は彼に依つて作られずして、彼の爲めに作られる。」人の性格を作る者は彼自身ではなくして、其周圍の環境である。此環境は後の場合に於ては社會的環境を意味した。從つて次の言葉も生れたのだ「人の性格は、一の例外もなく、常に彼の爲めに作られる。夫は彼の先人に依つて作られる事が出來、且事實主として夫に依つて作られる。先人は彼に其思想習慣を與へ、又與へる事が出來る、夫が彼の行爲を支配し指揮する力となる。人は、從つて決して彼自身の性格を作らず、又作る事も出來ない」

歷史に凡て其時迄陷つてゐた最も大きな誤謬は人々の性格を自ら形成するとした事であつた。基督教は此立場から罪を戒め、神の義を以て罪人を罰せんとした。國家は刑法を以て罪人を所刑した。然し盜賊虛僞不和爭鬪は跡を絕えず却つて益々增加して來た。蓋し罪を生ずる社會的原因を突きつめないからである。罪を犯す者よりも、寧ろ此の如き性格を生んだ社會にも其責任ある事を知らないからである。彼は此關係を最初の名著 New View of Society に於て最もよく說いてゐる。今彼が特に與へた引例を見るに、彼自らの政策を行ふ迄は、ニューレナークの工場には猜疑盜弊不攝生不健康等あらゆる害惡に滿ちてゐた。子供に對しては特に夜學を設備してはゐたが、日中長時間の過勞の爲めに彼等は疲れ果て、勉强に精力を集中する丈の力なく其設備は却つて疲勞を增すに止つてゐた。然るにオウエンが性格形成の原理によつて勞働時間を減じ、給與を多くし、娛樂を十分に與へ、其他其環境の改善に盡し始めてから數年にして勞働者の家庭は悉く一變した。彼等はもはや不當な收入を欲せず、お互に信賴し合ひ互に攝生を戒めて、全く見變へる許り明るい健康な社會となつたと云ふ。此實驗は啻に彼に確信を與へたのみならず、工場經營に施ける模範を世界及後世に與へる

程のものであつた。

環境の性格に關する影響を、彼は又意思の自由の問題として Book of New moral World に詳しく説明せんとしてゐる。各人の個々の意思は其感情及確信から必然的に規定される、然して感情は夫が生來のものであるとしても又後天的に發展した場合も、共に彼の意思を超越して形成される。確信も意思から獨立し意思を規定する、夫は生活經驗の結果其强き印象によつて自然に作り上げられるものである。從つて周圍の環境によつて次第に作り上げられる。此受身である感情と確信とは共に相俟つて行爲の動機即意思を決定するから、意思は決して自由ではない、此くて人間の凡ての性能は決して人に依つて作られずして、環境により人の爲めに作られると。

此の如き思想は一見唯物論である、尠からぬ人々が又彼を唯物論者として取扱つてゐる。此の人の性格に對する環境の影響を認むることは決して彼の獨創ではなく、其以前に多くの先驅者を持つてゐた。物即環境が人格に對する決定要素であるとする唯物論はボーダン以來佛國に興りモンテスキユーに於て益々精密となり、生理學の發達と共に十八世後期の歐洲思想界の常識であつたとさへ云ひ得るであらう。オウエンも素より此思想の影響を受けたであらう。然しオウエンは此等先人の學説を單に受け繼いだのではない、彼自らの生活經驗によつて自ら體得したものである。

恰も彼の生れた頃から興り始めた產業革命の荒波は英國の社會を根底から覆して仕舞つた。舊き封建的な且つ人的な連絡は破れ、人々は唯營利主義の旗幟の下に民衆を塗炭の苦に陷れて顧りみず、不衞生なる工場工業及都市生活の爲めに民衆は其生活のドン底に落ちて仕舞つた。爲めに風紀は亂れ、盜賊は增加し、其性格は全く亂されて仕舞つて、社會は擧げて其不安を感じてゐる時であつた。オウエンは少年の頃から其社會組織の變革が如何に人々の性格を亂したかをまざ／＼と見せつけられて此確信を體得したのである。夫丈ではない、彼は自ら數千人の勞働者の運命を握る企業家とな

り、つぶさに諸種の實驗によつて其確信を強めたのである。自らも云つてゐる「今述べようとする問題の見解は、二十年の間廣き經驗の結果出來上つたものである、其期間に於て其眞理である事が實際に繰返し行つた經驗によつて證明されたのである。」又云ふ「此重要な事實の智識は決して激した統制のない想像の粗野な烈しい空想から得たのではない。反對に、夫は、種々の變つた環境の下に於て、人の性質を理論的にも實際的にも永い間忍耐して研究して得たものである」と。

此くの如く永い間の生活經驗の結果得られた確信が彼の生涯に大なる影響を持つたのは當然であつた。多くの場合學說は單なる學說に止り易く、其を奉ずる人格との間に何等の交渉を持たない——夫は殊に日本の學者に多い——が、彼の場合に於ては此學說は單なる學說として止らず、實に彼の血となり肉となつたのである。夫は實に彼の社會運動の方向を決定したのみならず、其日常生活の態度の指針ともなつたのだ。此生活と社會的態度と學說の統一があつてこそ彼の如き偉大なる力を持つ事が出來たのである。あの名傳記を書いたジモンも云つてゐる「オウエンの時代に於ては、意思と行動が外的環境に依つて條件づけられると云ふ思想は決して新らしくはなかつたか、其思想が現實なる生活と結び付き、社會に役立つと云ふ事は全く新らしい事であつた」と。

オウエンは性格形成の原理が自覺される効果として次の事を上げてゐる。即人々は其行爲及性格に對し直接な責を持たない事を知るから、假令彼に誤があつても其人を憎む事は出來ない。彼は伸ぶべき天賦を持ち乍ら、其境遇の爲めに沈淪してゐる事に寧ろ同情し且憐む樣になるだらう。又お互の感情のもつれ爭に際しても、其事は寧ろ其環境にあるから、其敵を憎まず、寧ろ嬉んで其爲めに其環境を改善しようと努力するだらう。此くして敵をも愛し凡ての人の爲めに盡す事が出來るのであると。此結論は其儘オウエンの生活に適用する事が出來た、彼は夫が敵の罪ではない事を知つて

ゐたから、凡ての人を愛し其爲めに惱んで盡す事が出來た。彼は罪人を心から愛した、此點が彼の性格を美しくし多くの人々を引きつけたのであらう。彼はあの根本的な改革の精神にもえ乍ら少しも敵する事がなかつた。あれ程多くの人と公の戰をし乍ら遂に何人をも憎めなかつたのである。

最後に此環境說に就て注意すべきは、彼は單に其事實を靜的に觀察する事に滿足せず、直に其根源に遡つて社會的環境の改造を爲し、凡ての人の性格を完成せんとした事である。佛國に於ては唯物論は單なる觀察に止つてゐた。其環境が主として自然的に考えられた事も其理由であらうが、オウエンは夫を武器として人間を解放せんと努力したのである。若しも性格に對する社會制度の影響を少しも認めなければ、社會問題は起り得ない筈である、人々は只管に其敎養に依つても此性格を作り上げることが出來るから。彼が近世の社會主義の父と云はれるのは全く此社會組織の人に對する影響を認め、其社會を改革する事によつて人を改造せんとしたからであらう。

三

次に彼の根本思想と見るべきは人生の目的に關する思想である。「今迄人々に知られた凡ての事柄からすると、次の事は自然即神の普遍的法則の樣に見える。即凡ての生命は夫が如何なる形及組織で現れようとも幸福になる事を欲する。換言すれば其自然的本能によつて、夫は苦痛を避け或は免れ、而して……享樂する爲めに爲し得るあらゆる努力を絕えずやつてゐる。「此本能は世界を通じて凡ての生きた運動の直接原因である。」即彼も當時英國を風靡してゐた功利主義的人生觀の上に立つてゐた。

何が人にとつて幸福であり、如何なる條件が凡ての人を幸福にするか、此問題に對しオウエンは十分なる體系を備へ

てはゐないが、可なり詳細に注意してゐる。幸福の條件は種々上げられてゐるが、最も根本的なものとして考へられるのは「各個人の凡ての肉的或は精神的の性能力及性質を適當に伸ばす」事である。「事實は今や人の性質が多くの部分からなる一の全體であり、且夫々の部分は各々の個人の不可思議なる複合を完成するに絶對に必要である事を明にした。そして又夫々の部分が適當に伸ばされなければ、人は今迄と同樣に人性の不完全なものとして殘るよりない。」人性は肉體的、精神的、道德的及實驗的力を持つてゐるが、今迄夫は度々部分的に高調され、其一部丈を高く伸ばす事を敎へられて來た。其最も著しき例は淸敎徒の信條である。然し乍ら是等の凡ての力は人類の生存にとつて缺ぐ可からざるものである、完全なる人を作る爲めには是等の諸種の力、性能は等しく高く伸ばす事が必要である。强健なる身體を持ち、云はゞ眞善美の凡ての慾求と性格とを高く伸ばす事を人類の幸福の最大要件と考へたのである。從つてよき社會制度は此等の性能を等しく高く伸ばす事に役立つべきである、此立場から宗敎或は極端なる分業の上に立つ工業の批判が生れ出た。

此等の凡ての性能及慾求が人類の生存によりよき生存へ必要である以上、夫等を適當に伸ばし滿足させる事は正義でなければならぬ。正義及不正義の區別は結局其幸福に役立つか否かに依つて決定するから。凡ての性能及慾求は善である、然し一の慾求を極端に伸ばし滿足させる時は、他の部分との不均衡を來し却つて幸福とならないであらう。そこで夫等の部分を伸ばし滿足させるに際して節制を必要とする。「人類の幸福は其慾求が自然の命ずる儘に中庸を得て行はれなければ決して獲られない」「人の幸福は凡ての肉體智的及道德的性能の調和があつてのみ在り得らる」此調和の爲めには夫々の中庸を得た發揚がなければならないからである。換言すれば彼の幸福の條件とする所は各個人の凡ての性能の發揚であり、且同時に發揚されたる性能が各々の個性によりて統一調和される事である。凡ての具體的道德は悉く此

命題の適用であり演繹である。夫は正に希臘的精神であると云はねばなるまい。

彼は又或る場所に於て、幸福の條件をよき性格の形成と眞の富の增殖として規定した。後の條件は暫く置き、よき性格とは凡ての性能を發揚し夫々の統一調和されたる性格である。即ち今日の考方によれば完全圓滿なる人格の發揚に依つてのみ、彼は幸福が得られるとした。即ち幸福なる概念を通過し乍ら、彼は最後に人格の發揚と云ふ概念に到達してゐる。人格の統一發揚が幸福の唯一の條件である、且内容である事を見れば、寧ろ其仲介概念たる幸福の衣を脫ぎ棄てる事の失當なるを覺える。然し乍ら彼の時代に於てはベンサム等の功利主義的思想は餘りに多くの勢力を持つてゐた、苟しくも何を爲すべきか何が正しきかと思惟する者は、恐く此幸福と云ふ關門を通過しなければならなかつたのだ。オウエンも又此關門を通る事によつて其思想を築き上げざるを得なかつたのである。然るに其幸福の內容條件として人のよき性格の獲得即人格の發展完成なる思想に到達し得た點は、深き興味の湧き出るのを禁ずる事は出來ない。何故なれば其幸福なる結果を除けば、夫は正しく後にグリーン等によつて皷吹された人格主義となるからである、今日新カント派の人々に依つて唱へらるゝ理想主義となるからである。

四

神即自然の法則は人々を社會的存在としてゐる。善きも惡しきも人は常に一定の社會の中に住み、其社會的環境によつて其幸福を左右されてゐる。眞の富の生產分配の社會制度及性格の形成に直接關係ある社會制度は常に人類の運命を左右してゐる。彼にとつては、人の幸福及性格が常に社會的環境によつて規定される以上、個人の幸福に就いても其個人的倫理よりも社會の組織が主たる問題であつた。惡しき社會は必然的に惡しき性格を生み出し、よき性格を作る爲め

には必ずよき社會を必要とするからである。從つて彼は常に社會制度（Social System）に全心の重點を置いた。

一人にとつてよき性格を作らしめ之を幸福に導く樣な社會は、他の凡ての人にとつてもよき社會でなければならぬ。假令各々の個性は異つてゐても、其社會的環境より受くる影響は同じ方向にあるからである。從つて「個人の幸福はよく理解し十分に考えて見れば、其社會の幸福を增進する樣な行爲によつてのみ達し得られる。」個人の利益と凡ての隣人との利益は往々に衝突を來たし、又常に衝突する樣に見える、然し夫は各人の無智に基づく不合理なる社會の結果に過ぎない。已に個人の幸福が其社會的環境によつて支配されると云ふ根本的な智識を得た以上、其發展につれて次の事は益々明白になる「即個人の幸福は、彼が實際に其周圍の凡ての人々の幸福を增大しようとする事に比例してのみ、增大し得るものである」。此原理は例外も亦制限をも許さない、常に行はれてゐる原理である。

凡ての人々が社會から同樣否影響を受け、而も夫によつてのみ人々の運命が左右される以上、社會は個人の運命に就て凡ての責任を負はなければならない。個人主義者の主張する如く社會は單に消極的立場に止まらず、夫は積極的に其構成員の性格を改善し運命を開拓する責任を持つてゐる。此理論こそ、當時の自由放任主義の現實なる弊害と相俟つて、彼をして個人主義の城塞から拔け出で、社會主義王國を建設させたものであつた。

已に述べた如く個人の目的が各人の幸福を計る事にある以上、其構成の結果出來上つてゐる社會の任務は其人々の幸福を持ち來す事である、出來る限り其苦痛を少くし快樂を增加する事にある。幸福を增進すべき要件はよき性格の形成と眞の富の增殖にある。人類は永い間社會を組織して來たが、多くは亦不合理なる社會生活をして來たから、紛爭は絕えず、性格は墮落し、民衆は飢に泣いて來た。然らば實際に社會が人々の幸福を作り上げる事は困難であらうか。よき性格を作り上げる事は至難であらうか。否彼は確信してゐる「如何なる性格も、最善から最惡迄、又最も無智から最も有

識なるもの迄、一定の方法を採用する事によつて如何なる社會否世界全體へも、與へる事が出來る。其方法たるや、大部分國家の政權を握る者の支配と制御の下にあり、又容易にそうする事が出來る」と。此確信は彼の人生觀の當然の結論であり、且彼の工場ニユーレナークに於て二十年の實驗によりて證明し得たものである。彼は其確信の上に、如何にすれば人々が幸福となるかを絕えず攻究して來た。此の如き人々の幸福を持ち來し得る社會組織の內容に就て、彼は次第に具體的なる成案を得て來たが、夫は先づ當時の社會生活の批評として現はれた。

五

已に述べた如く、社會の目的は夫れを構成する凡ての人々の幸福を計る事にある。而して人々の幸福は優れたる性格を持つ事と眞の富を多量に持つ事によつてのみ得られる。從つて彼は此の二元的な立場から理想的な社會組織の內容に到達した。統一的に見れば兩者は決して離れた事實ではないが、我々も彼の考方に從つて之を檢討すべきであらう。

人々の幸福の爲めとは、富は出來る丈多く生產され、且つ凡ての人に最もよく分配をしなければならぬ。此多量生產の必要については從來も充分に高調されて來た。マルサスの如きも此立場から其の人口論を編み出し、當時の輿論の指導となつたのである。即人口の增加率に富の增加率が伴はない爲めに民衆の貧困があると、此專門的社會思想への批評がオウエンの社會思想の第一步であつた。彼は云ふ、凡そ一國の富の資源は其人口の勞働力の總和である、個々の國民は眞に其生活の爲めに勞働すれば必ず其生活に要する以上の富を得る事が出來る。だからよき社會組織の下に於ては、其人口が如何に增しても富は永久に其等の人口を支える事が出來る筈である。殊に十八世紀以來ワツト、アークライト等による生產技術の改良は其生產力を數倍した。夫が智識即科學の進步の結果である以上、將來も人智の發達と共に其

生產力は益々增加するであらう。從つて十八世紀末から十九世紀の始めにかけての民衆の生活難は、全く生產力以外に原因するものでたければならぬ。夫等の原因はやがて現實なる生產力の發揮を防げてゐる。營利主義社會に於て何が生產力を防げてゐるかを、彼は第一に檢討してゐる。

現在に於て生產力を最も浪費するものは戰爭である。多くの資本と原料及勞力を不生產的に使用して生產力の發揮を防げるのみならず、戰爭は現實に其生產力と富とを破壞してゐる。其經濟への壓迫が如何に強いかは、十八世紀の末以來二十年近く彼が企業家として體驗した所である。經濟界を最も攪亂する恐慌及失業の原因として戰爭を見た事も彼の洞察力の偉大であつた事を物語つてゐる。

次に彼が生產力の敵とした者は自由職業（ profession ）に從事する人々である。彼等は多くの教育を受け乍ら全く不生產的な業務に從事して、生產力を浪費してゐる。夫丈ではない、或は宣教師として人々を暗愚な信仰に導き、眞理から眼を閉さしてゐる。或は法律家となつて「土地貴族や社會の富豪の爲めに、民衆を壓迫し、且心身を共に墮落させてゐる。」

政府及議會の施設が宜しきを得ざる事も亦生產力の發揮を阻止してゐる。彼等は眞の任務を自覺せずして、世を闘爭の巷とし、富者は貧者の幸福を犠牲とするも何等の干渉を敢へてしない。民衆を無智に放任する事も彼等の罪である。而も無智程其生產力の防害となるものはない筈である。

社會思想の發展上彼の最も貢獻した事は、實質即營利主義が生產力の發揮を抑壓し、やがては民衆の幸福を妨げる事を明にした點にある。營利主義經濟に於ては如何に豐富な生產力があつても、其販路即相當な利潤を得て賣れる市場がなければ生產する事は出來ない。多くの場合富の不足は其市場のない事から起る。彼の一八一六年の末以後英國に起つた不景氣も、從つて民衆の失業も、決して生產力の不足から起つたのではない、反對に餘りに多くの富が生產され、夫に

應ずる丈の販路がなかつたからである。ナポレオン戰爭中にあらゆる軍需品に對して新工場は相次で起つた。あらゆる物資は戰時價格に騰貴した。然るに一朝平和の恢復と共に是等のあらゆる軍需品の需用は消滅して仕舞つた。戰爭と云ふ一大消費者を失つて英國の產業は忽にして過剩生產となつた。穀物倉は一ぱいになり、あらゆる倉庫は徒らに溢れ出した、此くては工場の經營は到底不可能である。閉鎖するもの相次ぎ、勞働者は續々と解雇された、之があの社會不安の眞相である。

此販路と生產との關係は平和の時と雖も變りはない。如何に生產力は增しても夫に應ずる需用がなければ生產は增す事が出來ない。然るに社會に於て需用の大宗は其大部分を占めてゐる民衆から生じなければならぬ。民衆の需用が增加すれば自ら生產力の發揮も增さなければならぬ。民衆の需用即消費力は一に其收入にかゝつてゐる、其收入は生產物の一定の分配の結果であるから、結局よき分配がなければ多くの生產は出來ない。產業革命の結果其生產力の增加した今日、民衆の生活難は全く此分配の宜しきを得ざる事に由來してゐる。茲に於て我々は分配の立場から社會制度を眺めなければならない。

人々は初め自分の爲めに生產すると共に、物は交換に依つて富を分配してゐた。交換の繁くなるにつれて物は交換の不便增加し、其仲介物として貨幣を用ひ所謂賣買が配分の手段となつた。かくて交換は容易となつたが、人々は貨幣を得る爲めに營業し萬物は貨幣を以て評價される樣になつて其弊害を暴露して來た。元來貨幣となつてゐる金銀又は紙に夫丈の價値があるのではない、單に人爲的に認めた價値があるに過ぎない。此人爲的否價値が標準となる事に依つて凡ての富の本質的價値(intrinsic Value)を人爲的なものにして仕舞つた。此價値の變換が、今日の分配の不公平の基礎である。云はゞ「貨幣が凡ての害惡の根である。」

貨幣が評價の基礎となつてから、人々は其慾望を滿す眞の富よりも貨幣を欲する樣になつて仕舞つた。若しも貨幣が無ければ、「如何に多くの食料や衣服があつても彼等は全く困却し、苦しまなければならぬ。そこであの一方に飢に泣く人々のある中で過剩な產業と云ふ事實が起るのだ。全く貨幣は社會を混亂の渦に導いてゐる。「今や夫は最大な不正と壓迫の道具である、殊に一番進步してゐると稱せられる國々に於て、今や夫は最も大規模に騙り取る道具とされて仕舞つた。夫は今日では富める人が、無智な者には不可思議な方法に依つて、夫を生產する爲めに辛苦した勞働者の手から眞の富を奪掠し、社會の最も役に立たない人の手に積み上げ、享樂する爲めに使はれてゐる。「夫は少數の人を非常に富ませる人爲的仲介物である、一方に多くの民衆を犧牲にし、彼等を貧困と墮落の淵に陷れ乍ら。「夫は彼の奉仕し得る民衆の唯中に於て其人の利益を孤立させる。「夫は無智な利己心を作り支持する主なる原因である。」

此くして彼は變換の基礎として勞働時間を執るべき事を主張し、一八三二年にはロンドンに勞働交換所を設け、貨幣の代りに勞働切手を發行した事は玆に述べるまでもなからう。唯勞働時間を標準とする事によつて、勞働者の正しき分配を期した事と共に　貨幣の撤廢によつて營利主義を撤廢し、社會の消費の爲めに生產する事を期待してゐた事を自分は付言して置かねばならぬ。

彼は又度々賣買を中心として現代組織を批評した。賣買が貨幣による以上夫は貨幣の批判と重復してゐる點のあるのは當然であるが、更に之を詳に見たものとして我々は其叙述をたどらねばなるまい。彼にとつては商業は生產ではない、其價値に何等の加ふべきものを持たぬ。從つて此不生產的なる商業の爲めに多くの資本が投下される事は、夫丈生產に對する抑壓である。彼等の唯一の目的は利潤を得る事にあるから、出來る丈安く買ひ込まなければならぬ。夫丈生產の利益と反動してゐる。從つて此商人の存在は生產者にとりても絕えざる壓迫である、殊に商人の資本が大きければ

大きい程其壓迫を蒙る程度も大きい。價格を切り下げられた結果、生産者は遂に立ち行かなくなるものさへ出來る。商人は又出來る丈高く賣らなければならぬ。彼等の儲ける丈は消費者の負擔が增す譯である。商人は儲かればよいのだからどんな眞似でもする、遠方からの運送、其他色々な不合理な事も平氣でやるから、夫等の損失は需用家が結局負擔させられる。此不用な人々の存在の爲めに、間違つた原理の運用の爲めにどれ丈け消費者が高いものを買はされるか分らない。此う云ふ人々は出來る丈少くなければならぬと。

尙ほ營利主義經濟一般に對しては最初の彼の雜誌エコノミスト紙上に詳說されてゐる。利潤獲得の爲めには出來る丈け價格を釣り上げなければならぬ。其爲めには需用と等しく供給するか、出來れば常に需用よりも少く供給した方が有利である、少くとも少い樣に見せかけなければならぬ。營利主義者は常に需用の少い事を欲し、生産過剩をこぼしてゐるが、一方には民衆は飢に泣き、寒さに凍へ、雨露をしのぐ家さへも持つてゐない。營利業者の希望を滿す爲めには、今よりも多くの人々が生活難に苦しまなければならないのである。社會の目的は萬人の幸福である事は何人も否定する事が出來ない、此目的に對して是以上著しき矛盾があり得るだらうか。

富の生産を增加する爲めには、出來る丈人々の利己心に訴へ自由競爭をしろと云ふ事の如何に誤つてゐるかは以上の簡單な敍述で明にされたであらう。生産の增加は結局よき分配に條件づけられる、よき分配は決して現代の如き營利的個人主義では望まれない。其所には唯一の方法がある、夫は各自の消費に應じて直接に分配する事である。從つて個々の利益の爲めに人々が生産しないで、社會の消費の爲めに協同する事である。此原理は基督敎徒が野蠻人と稱する北米の印度人の中に其儘に行はれてゐる「彼等は其食料を其氏族の自然的慾望に從つて各々に分配してゐる。此方法こそ最も正しく、最も簡單であり乍ら最も正直である。

此くて營利の爲めでなく、社會の消費の爲めに生産し、其を富各自の欲望即消費に依つて分配すると云ふ社會主義的原則に到達したのである。

六

世の多くの人々の云ふ如く彼は決して空想家ではなかつた。少年の頃からたゝき上げた實務家であつた。一厘一毛も苟しくもせざる企業家であつた。遠大なる社會理想に燃え乍ら先づ其現狀に於て爲し得る事に着手した。否寧ろ其良心に從つて、其理性の命令に依つて、差し當り爲し得る最善の方法を講じた。而も到底其社會組織に於ては十分なる效果を持ち得ない事を知つて最後の社會改革的思想に到着したのである。彼は又世に多過ぎる口先許りの社會改革者ではなかつた。凡ての社會制度を自分自身の問題とした。其社會思想を直に自分の企業に實現しようとした。彼のニュレナーク工場の教育制度、工場の福利增進設備及び如何なる不景氣に會つても決して勞働者を解雇しなかつた事實は悉く其努力の表現であつた。

此ニュレナークの社會的實驗は見事に成功した。彼の努力は悉く酬ひられ、人々は性格を改め、其富を增進して英國に於て未だ曾て見ざる幸福に浸つた。さればこそあのスコットランドの僻村――今も容易に訪ねる事の出來ない程の山奥に世界の參觀者を年々數千人も引きつけたのである。此成功が彼に性格改善の確信を與へた事は已に述べた。夫と同時に現狀、即資本主義社會に於ても萬人の眞に幸福となり得る事を、彼は確信した。此確信の下に彼は先づ資本主義組織の改善案を社會に提出したのだ。

其最初の提案の內容は國民教育及國民的失業救濟であつた。彼獨特の性格形成論に依つて幼時教育を唱へ、文化的教

育を高調すると共に、教育は決して少數なる有産階級の獨占すべきものでなく、如何なる貧民をも等しく教育すべき事を國家の任務とし、社會存在の使命として力說した。又彼は、單に失業者に恩惠を施す救貧法の不合理なる事を明にし、積極的に勞働の需用供給及賃銀の精細なる調査を必要とし、土木造船等の事業を起して萬人に職業を與ふべき事を高調した。

其翌年スコットランドの工場主の會合を主催し、初めて纖維工業の工場設備の改善及勞働時間、年齢等あらゆる勞働條件の向上を提案した。素より其提案は彼等の容れる所とならず、彼は孤りロンドンに赴き、或は政府の要路者を訪ね、議員に懇願して、最初の工場法を提案させた。何處の國に於ても、如何なる時代に於てもそうであるが、彼等は産業革命が果して民衆に惡影響を及ぼしたか否かを調査する必要ありとして數年間引き延ばした。此數年間に彼が英國全土を行脚して實地に調査し、纏め上げた報告は今も尚ほ "Observations on the Effect of the Manufacturing System" として殘り、當時の社會狀態を知らせる最もよい資料の一である。此遷延の間に資本家達はあらゆる方法に依つて彼を陷れ、且此法案の通過を防害せんとした。彼の異常なる努力と隱れた勞働階級の威力とは、遂に其法律を一八一八年に通過させたが、夫は全く骨抜きになつて仕舞つてゐた。此政府の不信と其背後にある資本家の貪慾に彼は漸く醒めて來た。資本主義組織の存立に對して漸く疑惑を深めて來た、此の如き組織環境のある間資本家の貪慾は到底征服し切れないと考えたからである。

此思想的轉廻に最後の決定を與ふべき事件が起つた。夫はナポレオン戰爭後に一年にして起つた恐慌及不景氣であつた。佛蘭西大革命以來長い間歐洲は極度の緊張に强制されてゐた。種々の曲折の後英國は遂に其目的を達する事が出來た。此榮譽ある戰勝と輝く平和の後に英國民は黃金時代の到來を夢みてゐたのだ。然るに彼等の直に得たものは不景氣

であつた、失業と夫によつて醸された社會的不安であつた。其不安の餘りに大きい爲めに、政府及資本家を之も何等かの方策に依つて之を切り拔けなければならぬと考へて來た。此恐慌と失業の襲來が、資本主義經濟の機構の根底に彼の眼を向けさせた。其所で初めて彼は完全な社會主義者となつたのだ。マルクスは恐慌の襲來に社會改革の期望を繫いだが、近世社會主義の父であるオウエンは恐慌の襲來によつて、新しき社會思想に到達した。夫は奇しき運命ではあるが、決して偶然ではない、資本主義の經濟と恐慌とに本質的な關係であり、後者は前者の先天的病氣であるから。

當時識者に依つて組織された此社會不安を除く爲めの集會に求められて、初めて彼は社會主義的組織を提案した。次で同案を空しく、救貧法改正委員會の爲めに報告し、遂にReport to the County of Lenarkとして公刊した。夫は單なる共產村の提案として止まらず、自由競爭の害惡を述べ協同の原理を力說した社會主義に關する最良の教科書の一である。其後の活動は全く此提案を宣傳し、實現せんとした努力であつた。自分は彼の主要な文獻によつて再び靜的に彼の社會思想を見なければならぬ。

七

「今迄立法者は工業を單に一の見地から、即國民の富の源泉としてのみ觀てゐた樣である。國中に一般に工業が分布した事は其住民に新なる性格を作り上げた。而も其性格は個人及一般の幸福に不利な原理の上に作られてゐる。若し此傾向を國家の法による干涉及び統制によつて匡正しないならば悲しむべき害惡を生むだらう。」此は彼が工場法改正運動を起すに際してObservations on the Effect of the Manufacturing Systemに書いた文章であるが、夫は彼の立場を最もよく現はしてゐる。彼は工業及經濟を經濟學者の立場から徹底的に考へ拔いた。然し乍ら夫に滿足しないで同時

に性格の立場から之を考察したのである。夫は幸福獲得の二元論から來る當然の歸結であらう。然し經濟を單に經濟の問題として取扱ひなれた時に於て——今も其傾向は社會思想家の大部分を占めてゐる——人間生活の全部的立場から、人格發展の立場から考察した事は確に一大貢獻であつた。

産業革命の性格的觀察は彼の文獻の至る所に散在してゐる。貧困のどん底に陷れられた勞働者の群が最惡の性格を持つてゐた事は至る所に書き出されてゐる。彼等は幼少の頃から不衞生な工場に長時間働き、歸へるべき家も雨は漏り寒さを防ぐ事は出來ない。夫で滿足な健康が維持されれば不思議である。絶えざる虐使と生活難に、其神經は鋭がり、心は荒んで來る。或は監督の眼をぬすんでは怠けようとし、一時のがれの嘘をつき易く、仕事をごまかし、平氣でぬすみもする。此うした心の唯一の慰安は酒に醉つぱらふ事である、だから社會は申し合せた樣に飲助である。

夫では金を儲けてゐる連中が道德的であらうか、全で反對である。彼等の唯一の目的が金儲であるから、其爲めに心の温りを全で犧牲にして仕舞つてゐる。金儲の爲めには安く買ひ高く賣らねばならぬから、其接觸する人々が其敵である事を知つてゐる、そこで敵である他人におもいやり等の出よう筈はない、利己心が彼等の唯一の原動力である。其爲めには人を欺き、其弱味につけ込む等は何でもない。一方にはお花主には阿諛を事とすると思へば他方では極端に威張つてゐる。此くて富める者も貧しき者も等しく其性格を犯してゐる、此時程人類が墮落した事はない。

此等の性格の墮落は悉く現代の誤つた原理から發してゐる。彼等は社會から何等かの干渉を受けるよりも、各々をして其利己心を出來る丈發揮せしめた方が、其個人及社會の幸福であると云ふ。此利己心の解放は今日の定説である、然し乍ら其結果は此等の理論と全で反對になつて仕舞つた　今日の社會的苦惱を観れば其原理程大きな誤謬はないと云ふ事を直に知る事が出來よう。

自由競爭或は相互の鬪爭よりも寧ろ、相互扶助が人類の本能である。此本能に從つて、內なるものの要求に從つて、他人を愛し社會に盡してのみ人々は幸福である。此要求を滿たさずしては、如何に多くの富を獲得しても人々は幸福になり得ない。此事實は已に述べた環境說社會觀と密接してゐる。凡そ人の幸福は社會的環境に依つて左右される。且一人に幸福を持ち來す環境は他の凡てにとつても幸福を持ち來さなければならぬ。從つて自己の幸福と他人の幸福とは常に一致しなければならぬ。個人の利益と社會の利益とは常に一致しなければならぬ。そこで「一寸でも反省すれば次の事は明である、人は其同胞を幸福にする事を絕えず希ふ樣にされなければ決して幸福ではあり得ない。」

他人の幸福を希ふ事は慈愛（Charity）であり、情愛（affection）である。「慈愛なくしては人間の社會に眞の德はない。人類の凡ての德を作り、凡ての惡を滅すものは慈愛である。情愛は人間を人間化し（humanizer of humanity）凡ての不幸を柔げ少くし、人間社會の最も純粹な快樂と最も高い享樂の泉である。」されば、「合理的な社會に於ては、情愛は凡ての性格を最も高め貴くする感情とならう。「性格があるべき姿となつたならば、其時こそ人類の幸福をもたらすべき情愛は普く造られ、人と人との間にある凡ての恐れと疑惑を驅逐する愛を完全に作り出すだらう。そして又嫉妬も復讐も人類の中に知られなくなるだらう。」

此慈愛と情愛は單に個人の中に心理的に働いてゐる丈では完全ではない。其精神と原理は社會制度に依つて客觀的に社會生活の中に實現されなければならない、此くて始めて萬人の中に愛が伸びて來る。夫は彼の環境說の當然の歸結である。愛の社會制度は協同の社會である、Co-operation の社會である。協同の力が如何に大きいかは戰爭が如實に示してゐる。——ナポレオン戰爭直後の英國には其實感は特に深かつたであらう。——「已に經驗は、人々の統一と連合が、個人の別々に働く連絡のない群集の努力よりも破壞に際して何千倍も力强い事を示した以上、同じ程の大きい力が

統一と連合に依つて創造と保持に際して現はるべきではないか。」

現代産業の弊害に對して人々は漸く醒めて來た。夫から生ずる社會的不安を除く爲めにどうかしなければならぬと思ひ出した。「其どうかするとは、社會の全的組織の完全なる改造でなければならぬ。……夫は今迄の誤つた訓練を經てゐるトリー黨や、佛國の自由派、ラヂカリズムや、はた又獨逸の啓蒙派によつて實現する事は出來ない。其變革は、凡ての人を一に結びつける、偉大な普遍的原理の徹底的發展によつて先行されなければならぬ。「成功する爲めには、社會は其根底から凡ての上層建築（Superstructure）を通して組織し直されなければならぬ。今では、誤れる原理と實際の一部と正しき原理と實際の一部を交ぜ合せて、少々位變革したとて無駄である。……人類に役立つ爲めには社會の改造は凡ての部分で完成されねばならぬ。云はゞ古きものは過ぎ去り、凡てのものは其改造に依つて新しくならたければたらぬ。

即自由競爭は相互闘爭に代る相互扶助の原理の高調である。現代社會を其根本より改造しようとする主張である。又利潤の爲めに動く經濟より直接に社會の消費の爲めに動く經濟の主張である。此利潤に代る消費を直接の目的とする事に依つて近世の社會主義は始めて組識された。此社會主義の確立に依つて現在の凡ての害惡は除かれるであらう。其所では「利己心はなくなるだらう。また生ずべき十分なる動機がないから。凡ての人々は、富が其慾望を越える程生産される事は容易であり、個人的に貯め込まうとする慾求はなくなつて仕舞ふ事が、明とならう。彼等にとつては富を蓄積する事の不合理な事は、使い切れない程ある水を壜の中につめるのと同様である。此智識と夫から起る感情があれば、新しい富の生産に就てのあらゆる抵抗も亦なくなる。今社會に漲つてゐる、低陋の多くの動機と共に。公平、正義、開放及公明正大の原理は社會の凡ての行爲を支配するであらう。從つて勞働の生産物を彼等の間に交換するに際しても何等の困難も起るまい。」

彼は其人生觀から、統制なき個人の勝手な行動に反對して、常に一定の社會制度（Social System）の必要缺くべからざる事を力說してゐた。此 Social System を高調する所から遂に Socialism なる言葉が生れたのである。彼は誠に名實共に社會主義の父であつた。

八

リープクネヒトは其オウエン傳の終に云つてゐる。「プロレタリアトは然し乍ら、其勝利の道程に於て、其目的を自分達に示して呉れた人々を忘れはしまい、たとえ彼等が其手段に於ては誤つてゐたにしても。そして最も忠實であり、最も品格あり且最も鋭かつたのはロバアト・オウエンであつた。」此言葉はオウエンの社會主義者としての立場をはつきりと承認すると共に、其方法に於てマルキストと異つてゐる事を明に現はしてゐる。夫は此論文の初めに於てエンゲルスの語つた所と同樣である。何が彼等と異つてゐるか、夫はオウエンの立場を明にするのみならず、今日の英國社會運動の個性をも明にする事が出來るであらう。

オウエンにとつては個人の目的は人を愛する事にあつた、愛せされば彼自身幸福になり得なかつたからである。從つて社會の理想も各人を愛し切る事の出來る協同の社會であつた。即愛はあらゆる意味に於て普遍的命令であり、理想であつた。然し同時に動かす事の出來ない事實であり、人間本來の姿である。此自然に與へられた性質を、そして種々な人間の迷と誤の爲めに曲げられてゐる性質を伸ばす事が人類の任務であり理想である。現存する凡ての實惡は此性質を認識しない所から來て來る。「彼自身の性質を誤解して作られた人の法は、必然に世界を通じてこの樣な社會を作り出した、其所では人々は絕えず其性質を惡くしようとし、其結果僞瞞に滿ちた制度の中に住んでゐる。此くして、人は生れ

乍らにして悪いものだと云ふ一般的な確信が作り上げられた。人類は、神及自然の手からの仕事であるにも拘はらず、誹謗された。そして人類は今日迄分けられ、反對させられ、罪に滿ち、且不合理にならされた。「然るに自然即神の法は人を社會的存在とした。彼を懇ろに他の同胞と結びつかせ、反社會的感謝を殺す樣に。」

されぱオウエンは云つてゐる、「古人は眞實にも云つた、人の最高のそして最も大切な智識は彼自身を知る事である。」と。自分自身を知るならば他人との關係を知るであらう。そこから自然に相互の愛情が生れて來る。同時に此自覺がなければ、凡ての努力は砂上に樓閣を築くものである。「人類への愛は其智識のみから生れ出る」彼自身を、自然の法を、本來の姿を知らしめる事が凡ての始めである。知らしめる事によつてのみ眞の發展がある。此主智的な傾向は彼の立つてゐた十八世紀の啓蒙思想の特徴であつた、寧ろ廣く自然法的思想に通じた個性であつたのだ。

彼の思想體系によれば眞理は愛である、合理的な事と愛情とは同一物である。從つて「よき社會を構成するものは智識慈愛親切愛及眞理の言葉である。……よき社會は其感情思想及行動に於て合理的になる樣に訓練された男女によつてのみ造られる。」即、盲目的な社會改革に依つて理想的社會が作られるとは決して考へなかつた。社會改造の缺くべからざる條件は正しき眞理の認識である、自我の自覺である。愛の光による洗禮である。此心の革命によつてのみ社會改革が可能である。コールが彼を一人の Moral reformer であると云つたのは此意味に於て正しい。今日英國の勞働黨が暴力革命を排し、先づ眞理に醒め友愛を理想とせよとする事は、此オウエンの思想の流れに乘つてゐるものである。

されば彼の社會改革の具體的手段の第一は教育である。性格は環境に依つて支配される、教育は其環境として最も各人に直接なものである。ニユウレナクの社會的實驗室に於ても彼は教育に最も力を注いだ。幼時の性格は自然である、之に著色する第一歩が最も肝要であるとして、今日所謂幼稚園を創めた。之が恐くは世界の幼稚園の最初であらう。當

通教育の方法に於ても多くの新機軸を出し、或は實物教育を創め、個性を重んじ、兒童の娯樂を求める心を尊重して、音樂舞踊を敎え、彼等のあらゆる性能を伸ばそうとした。彼は原理として、智識を强いなかつた、智識を愛し求める心を培ふとした。彼は信條を注き込まなかつた、正しく考へる心を養ふとした。愛を教育の基礎とし、目的とした事も彼の人生觀から當然の歸結であつた。

彼は專門の教育家ではなかつた、況んや功をあせつて新機軸を出そうともしなかつた。此等の教育は彼の人生觀から必然に流れ出たものであつた。夫にも拘はらず此等の教育方法は今日に於ても最も正しい、最も新しい教育である。彼の多くの事業の中最も成功したものも此教育であつた。世界の識者がニユウレナクを訪ね最も驚歎したのも此教育であつた。此成功に力を得て彼は教育を一般化せんとした。敎育は富める者のみが獨占すべきではない、貧しき者も等しく其光に浴しなければならぬ。教育は教會の偏見から解放されなければならぬ。そこで國民一般の爲めに國家自らする國民教育の必要を唱へたのだ。彼の社會思想に反對した者も此提案に多く贊成した、然し其提唱は祖國英國には實現されずして、却つて大陸のプロシアに實現されたと自叙傳に彼は云つてゐる。

未成年者に對する此態度は成年者に對しても貫かれた。彼はあらゆる方法に依つて社會の啓蒙と改心を計つた。彼の一生は實に此社會教育の爲めに捧げられたのだ。彼が眼を勞働者に向けてから、彼の社會思想を酌む人々の大會を年々開催して、其確信を各々の心に强めて來た。其間彼は文字通り東奔西走して民衆の開明に努めてゐたが、更に徹底的に宣傳する爲めに一八三七年に「社會傳道師」の制度を設けた。其目的は眞理と愛の原理に依つて人々の性格を改造し、新しき社會を準備する事にあつた。方法としては大集會講演會討論、パンフレットの發行等により、中央部及支部の組織を確立し、有給の傳道師を六名置いた。彼等は毎週各地を遍歴し其思想の宣傳に努めたが、毎日曜の集會に出席する者

五萬人に及んだと云ふ。英國各主要都市に支部の設立された數は六十二に達し、其組合の數は一時十萬人の多きに及んだ。從つて其財政も豊であり、普通の集會堂使用を斷られて、「科學と眞理の會堂」を數ヶ所に建てる爲めに年に二萬二千磅を費す事が出來た、此宣傳は非常な效果を民衆の間に納める事が出來た、彼はフランシス・プレースに半年にして新しき社會が生れるだらうと云つたと云ふ。其力の餘りに大きい爲めに全國の基督教徒等が其迫害を始めた程であつた。今日英國の勞働黨及消費組合が、社會教育に多くの力と時を捧げてゐるのは、此經驗による所が多いのではなからうか。

有名な共產村設立の運動も亦此教育を目的としたに他ならぬ。自由競爭の社會より協同の社會へ移る事は餘りに大きな變革である。其變革の準備として共產村を設立したには違いない。然し乍ら同時に此實驗によつて社會の實物教育として役立たせようとしたのである。彼は協同の社會が性格を改造し、眞の富を多く生產分配して、各人の幸福をもたらすべき事を確信した。然し人々は、單なる理論によりて其眞理を知るには餘りに多く相互鬪爭主義に犯されてゐる。そこで事實による彼の理論の證明を思ひ立つたのである。夫は極めて自然の事であつた、蓋し彼はニユウレナクに於て已に一種の實驗に成功し、自らの確信を務める事が出來てゐたからである。

多くの共產村の事に就て書くには餘りに多く知られてゐる。其規模は人口僅に二萬人以下、面積も千五百英段以下に過ぎない、職業も始めには農業を主としてゐたが、彼は種々の制度を彼の考へ得る最上の方法によつて組織した。彼の確信によれば協同は人を正しくするのみならず、物質的生活に於ても豊にする。だから夫が如何に小規模であらうとも社會は必ず成功する。此成功は無智なる人々に協同の福音を知らせるであらう。此福音を知つてのみ人々はこの社會の設立に携はる事が出來ると、素より此共產村は其小規模の限りに於ては、其村民の幸福を計り、少しでも人々を失業の淵

から救ひ出さんとする努力であつた。然し夫以上に他の凡ての社會の典型となり、其現實の利益によりて人々を教化しようと試みたのだ。

此實驗は不幸にして遂に失敗に終つた。然し乍ら計らずも後世に其手段を成長させた運動を殘す事が出來た。夫は消費組合運動である。消費組合も初めは小規模である、然も夫は全く協同の原理の上に立つてゐる。而して其原理のお蔭で組合員は常に經濟生活を豐にしてゐる。夫は世界に對する協同社會の價値の宣明である。人々は此實物教育に依つて此眞理に醒め始めて此社會に參加する。此くして無限に其小社會の數と業務とを擴張して遂には資本主義を征服せんとしてゐる。

共産村の實驗は社會改革の方法に關する今一の問題に解答を與へてゐる。夫は所謂理想と利益との關係である。彼は社會の理想を幸福としてはゐるが、其内容に於て人々の人格の完成と物質生活の豐かである事を擧げた事は已に述べた。此二つの條件は對等の地位が與へられてゐる樣に見える。然し更に詳しく見ると物質生活を前者に從屬させてゐる。例へば如何に多くの富はあつても必ずしもよき性格がありとは云へない。今日の産業界は實に此の狀態にあるものだとしてゐる。彼等を救ふ爲めにも彼は協同の社會を唱へたのだ。後に至つて彼の體系を見れば、よき性格を作る事、即人格の完成を第一に置いたとしなければならぬ。然し此理想も物質生活を離れて社會的に實現する事は困難である。だから彼は共産村に於て、愛の社會が同時に物質生活を豐にする事を證明せんとしたのである。此心理は、彼が始めは政府又は開明した資本家の力に依つて其理想を實現せんとして失敗し、遂に直接無産階級に訴へる事によつても知られるであらう。

九

最後に自分は彼の現代に持つ意味を見度い。素々彼は專門的思想家ではなかつた。彼の人間的な功績は社會思想を造り出した事よりも、寧ろ夫を實行した點に見出すべきであらう。彼は成長するにつれて職業を變へたが、如何に眞面目に問題にぶつつかつたか。多くの周圍の反對にも拘はらず如何に其所信を實行したか。其理想を樹立してからは、自分の凡ての利益を抛げ出して、如何に其實現に忠實であつたか。不幸にして其後半世の努力は多く失敗の跡を殘すに止まつたが、あの熱情と協同への憧憬とは一時英國の上下を率ひる事が出來たのだ。後に來る者の心に最も觸れるのも其點である。彼の如き人格を見出す事は、人類の將來へ希望を繫ぐ最も大きな根據である。

然し彼は社會思想家としても大きな意味を持つてゐる。多くの專門的經濟學者が等しく後生大切に守つてゐた個人主義經濟學に雄々しくも反旗をひるがへした。唯自己の理性と體驗とをたのみとして、永い間其渦中に生きてゐたから、彼は資本主義經濟の矛盾をしつかりと摑む事が出來た。其後一世紀の經濟學がどれ丈進歩をしてゐるのであらう。未だ粗雜だと云ふ非難は免れないにしても、彼は純粹に經濟の立場から社會主義への道を開いたのだ。

夫にしても、彼のより大きい思想上の貢献は經濟を單なる經濟の立場から見ずして、廣く人生全體の立場から見た事である。人生の問題を深く掘り下げ、其上に經濟を建てた事である。彼は優れたる性格の完成と云ふ目的を確立し、此立場から資本主義を批判し、協同社會を創作した。此理想主義的な立場から教育を主とする實現方法が高調されたのであるが、彼にとつては云はば社會運動全體が一つの教育運動であつた。夫は結局各人の性格完成を目的とするからである。此基調の上に消費組合運動は成長して來た。近來過大な勢力を持ち、最後の社會組織を認識した英國の社會運動

が、オウエンをふり返へるのも此點であらう。然し此理想主義的立場は英國のみの獨占すべきものではない、廣く世界の社會運動に永遠に生きるべきである。

而してオウエンの理想主義は空中に浮び上らず、しつかりと現實に足を踏んでゐる所に特色がある。彼は現實をはつきりと見極めた、そして多くの思想家の云ふ所と異り、人の性格が其環境によつて支配される事を發見した。其思想を宣明するに急であつた爲め、彼を唯物論者と見る者が多い程である。然し彼は此環境の力を意識すると共に之を武器として、一方に確立した理想を實現せんとしたのである。彼は云ふ、今迄は環境に支配されて來たが、環境を支配する事が我々の努力であると。又彼が其理想を當時の有力者の手によつて實現しようとした事が失敗した時に云つた「此の制度は地位權力を持つてゐる人々の恩顧の下に實現さるべきではなかつた。眞理は如何なる人の恩顧も不自然な助力をも必要としない。眞理は、永遠である爲めには、自分自身の基礎の上にのみ立たなければならぬ」と。是れ以上理想主義的な立場はないであらう。

資本主義の荒浪にもまれて魂も失はず、現實を見つめ乍ら理想を確立し、宗教家と戰つて凡ての性能を發揚せんとした、此人間的な事が彼の個性であつた。夫はやがて彼の後世に持つ意味である。

英國に於ける左翼運動の展開

——大戰前より共產黨の成立まで——

小島精一

〔第一〕はしがき—世界大戰前の左翼運動

一

極く最近、それも第一回の勞働內閣の出來て後ち、英國の勞働運動に幹部反對、左翼擡頭等の傾向が覩取されるやうに、今から回顧すれば二昔前の一九〇五、—六年頃の勞働運動にも幹部反對の所謂非公認運動が擡頭しつゝあつた。遠きチャーチズム運動の昔は姑く措いて、現代革命運動の源流を遡つて見ると、此二十年前の高潮に注目すべき最初の昂揚を見出だすのである。人も知る通り、英國に社會主義が現代的復活をしたのは一八八〇—九〇年代であるが、其頃から本世紀の初頭にかけて勞働者に浸透した此思想はよし、其理想の窮局に於ては現行制度を否定するにせよ、現前の具體的政策に於ては極めて妥協的な、漸進的な、所謂改良主義と何等選ぶ處のないものであつた。又其方法上の特徵とする處は政治運動を尊重し從來の資本家的自由黨から獨立した勞働者自身の政黨を樹立し、之によつて合法的に社會改造の目的を達成しやうとするにあつた。此運動はとも角も勞働大衆を掴み得て、確實に發展し、一時は彼等の滿腔の信賴と期待とを荷ふことが出來た。其熱情の沸騰期が丁度此の一九〇六年頃だと言はれて居る。處が、史實は既に此隆盛の裡に辛辣なる反動運動の萌ざしつゝあつたことを教へて居る。それは此前後數年の間に海外から移植された革命的組合運動及びサンヂカリズムの擡頭である。是等の新興運動は必ずしも其目的に於て一致するものではなかつたけれ共、少くも現前の政策に於ては勞働組合の改造を尊重し（職業別組合の排斥、所謂產業別組合乃至組合合同運動の主張）此組合組織を中心として現在の制度を××し、新秩序を樹立せんとする點に於て

提携し得るものであつた。そして、何れも政黨運動の頼むべからざることを痛撃し、産業的活動としての同盟罷業其他の直接行動の武器をしきりに宣傳したものである。一九〇三年にスコツトランドにI・W・W・の流れを汲むS・L・P・(Socialist Labour Party)が出來たのも、其五年に倫敦に大英國社會主義者黨が出來たのも、超へて一一年にマンチエスタアにB・S・P・(British Socialist Party) が創立されたのも、何れは同じ此の左翼運動の結實であつた。又サンヂカリストの首領トム・マンを中心とした産業サンヂカリスト同盟(Industrial Syndicalist League) も大戰間ぎはの數年間にはかなりの反響を喚起して、組合合同委員會とか反幹部改造委員會とか呼ばれる左翼急進運動を呼び起し、中にも機械、造船、鐵道、運輸、炭坑等の重要工業に新鮮な××心の昂揚を醸した。是等は勿論勞働黨の偉大な効能に對し盲信を懷いて居た大衆の不滿(勞働黨の社會政策的施設の提唱にも拘らず、一九〇〇年以來生計は次第に困難になり、勞働黨の黨勢も思ふやうに早くは擴張されなかつた) に付け込んだ或る反動運動には違ひなかつたが、それ自體眞に啓蒙的の意義を持たぬものではなかつた。即ち、單に破壞的方面を誇張するだけのものではなく、産業組織の建設的政策に於ても從來閑却されて居た重大な要點を捕へて居たには違ひなかつた。組合組織の改造と言ひ、産業的運動の提唱と言ひ、何れも勞働者運動の眞實の本元的の威力と意義とを發揮する土台であることは、彼等の宣傳によつて少くも明確に意識されるに到つたのである。

二

處が、大戰の始まる頃からギルド・ソシアリズムの運動が普及して此の左翼運動にとつても著しい影響を及ぼした。私は、そこで、ギルド・ソシアリズムの何ものであるかを説く暇はない。たゞ此運動の實際政策が與へた此影響を明にし度いと思ふのである。

大體から言へば、新運動は左翼産業派(具體的に言ふと、組合合同及び改造等の少數、非幹部運動)と合體して其勢を昂めた。此の點では實戰上にも左翼運動に有力な味方が加はつたものと言へやう。

然し、ギルヅメンの與へた運動上の影響の最も深甚な點は建設的實際計畫の尊重を極度に力説した點であらう。ギルヅメンは無敵法に、無方針に猪突するのを排斥する。破壞のための暴行を否定する。なる程、場合によつてはそれも避け難しとはするが、出來得べくば先づ何によりも現實の産業經營に參與し、

之を内面的に改造することを大切に思ふ。そして少しも英國の現在ではそれが當分は可能でもあり、緊要でもあると考へた。局部的な研究によつて工場管理の實際的知識を獲得することこそ——その現實的計畫こそ、何よりも彼等の第一義とする處であつた。例へば組合合同運動にせよ、之を單に戰鬪的見地から主張するのではなく、其の建設的効果を常に力說した。だから、其の運動は極左分子から見れば、現行秩序に執着した微溫的なものに考へられもしたらう。ギルツメンの首領コール自らも、其運動が一部左翼運動者からは反動的のブルジョア運動でもあるかのやうに非難されたと述べて居る。實際を言ふと、此思想は全勞働運動の左右兩翼に一樣に強きセンセイションを起したので、フェビアニストも、獨立勞働黨も、組合主義者も何れも此派から各自の欠陷を補ふものをとり入れたらしい。(殊に從來勞働黨の提唱した集產主義的の國有論に民主的管理の思想が採り入れられたのは其顯著な一例である。)建設的にはかゝる特徵があつたが、それ丈け其運動上の陣營内には左右兩翼の混在する弊を免れなかつた。此派の實行團體たる全國ギルド同盟其者は、そのためにやがて分裂する憂き目に合つたのだが、此運動が力說した教義も政策も左翼運動の發展には實に重要な感化を殘して居るのである。殊に此運動の最も活躍したのは一九一四年頃から戰時中にかけてゞあるが。後に述べるやうに左翼工場委員運動の背景となつたのは實に此思想なのである。

三

コールは言ふ。一九一一——一二年の頃專ら話題に上つたのはサンヂカリズムであるが、其退潮の後ちをうけて之を發展させたのは、マルクス派產業的組合運動とギルド・ソーシャリズムとである。是等の運動は勿論單に眼前の利害にのみ沒頭する大衆の間に迄浸透するものではなかつた。然し、此現前の政策に於ても、少壯有爲の組合運動者の心を捕へるやうになつた。彼等は既に戰前に於てさへ、賃銀時間等の問題に力を注ぎ傍、更に限界を擴げて、產業管理に參與する政策を考へ始めて居た。大戰中此傾向を最も具體化したものは工場委員運動であつた。ロシヤ革命の後ちには左翼運動は更に新展開をした。是等の極左分子は相率ゐてロシヤ流の共產主義に移つて行つた。折柄の不況は產業運動の活躍には不利となつたので此運動は著しく政治的色彩を加へ、そのために產業上の實狀からは、かけ離れてしまつた。

さて、私はかう前置きをして、これから、大戰中に於ける、此左翼運動の進展を檢討し度いと思ふのである。

(參考書) M. Beer · History of Br. Socialism vol. II. 190

G. D. H. Cole: Chaos & Order in Industry, 1920
ditto : Organised Labour, 1924
ditto : Guild Socialism Restated

〔第二〕サンヂカリズムよりボルシエヴイズムへ

四

世界大戰の始まつた一九一四年は社會不安の密雲にとざされ、正に異常な紛擾が產業界に起らうとして居た。では、英國の參戰は左翼運動にどんな影響を與へたらうか。先づ劈頭注意を奪つたのは參戰可否の問題である。左翼は非戰論を唱へて、多數勞働黨と抗爭したが、全國民を蔽ふ愛國的昂奮によつて勞働大衆も亦國難に結束して立つたから、過激な宣傳や紛擾沙汰は一時停頓せざるを得なかつた。然し此の非戰論の運動は單に、左翼急進派許りでなく(B・S・P・は開戰當時はまた黨內に急進派と漸進派との內訌があり、其ために一九一六年を通じて參戰態度を明確にすることが出來なかつたが、遂に一六年の大會でハインドマン一派の保守派は驅逐されて、爾來S・L・P・と相並んで、左翼急進軍の中心をなすに到つた)ケヤハーヂイ、及びマクドナルド等に率ゐられる獨立勞働黨(I・L・P・)も亦其中堅をなして居たことを知らねばならない。と言つても、同じ非戰運動でも、I・L・P・の夫れはB・S・P・の夫れに比べると決して同じ調子のものではなかつた。例へばB・S・P・が參加した一五年九月のチンャアワルドの國際大會では、即時平和や民族自決は言ふ迄もなく、產業休戰反對や進んで××的階級鬪爭の續行を決議して居るやうに、此反戰爭熱を××化するに努めて居たが、I・L・P・はたゞ參戰を援助しないと言ふ丈けで、決して積極的に××的蜂起で妨碍をしやうなどとは試みなかつた。然し、とも角も、勞働黨や組合幹部の主戰論に抗爭して居るうちには勢ひ幹部反對の代辯者ともなり、相提携する處も少くなかつたのであつて、當時のI・L・P・は今日に比べれば余程左傾的であつたように思はれる。少くも其黨內にはかなりの左傾分子を含んで居たやうに思はれる。そはとも角、開戰當座は此の愛國心に訴へて產業の平和が保たれたのである。

五

處が戰爭が進むに從て、軍需品法や强制徵兵令や國防條令など、平時の慣行を無視する峻嚴な强壓的法令が相次で勵行され、產業秩序も、賃銀制度にせよ、作業方法の變更にせよ、或は婦

人、小供其他不熟練工の雇傭にせよ、色々重大な改廢を斷行されたのであるが、之に對しても幹部代表者は國家存亡上の緊急手段として協賛を與へた。つまり勝利のためには勞働者も出來る丈けは耐忍することを認めたのである。然し、此犠牲は決して彼等ばかりの片務的のものではなく、資本家も亦同じ負擔を課せられねばならないと言ふ考へは勿論彼等の寸時も忘れなかつた處だらうし、又此點の疑惑がとかく愛國心を鈍化したらうことは想像に難くない。處が、非戰論者はしきりに此戰爭が資本家相互の利益爭ひから、惹き起されたもので、勞働者が干與すべからざるものだと說いてゐる。且つ又彼等が報道する處では、政府は口には資本家の暴利を取締ると言ひ乍ら、其規律はとかく遷延され、且つ手ぬるいものなることが明らにされて來た。現に、何によりも惡いことには物價はぐんぐん上昇するに賃銀は爭議休止のためか一向之に追ひつけない。(ボウレイの著書によると開戰年を基準とする生活費指數は一六年一四五%、一七年には一八〇%とあるに、主要產業の賃銀は一六年一一五―一二〇%一七年には一三五――一四〇%にしか上つて居ない)。翻つて資本家の景況はと見れば、何事ぞ、どの會社も莫大な利潤の隱蔽に焦慮して居る有樣である。

勞働者はとも角も困難の急には何事をも犠牲として奮起はした。奮起こそはしたが、然し、か丶る偏頗な片手落ちにも口を喊して默從せねばならぬのだらうか。彼等は偶々其幹部に哀訴すればたゞ、屈從を口說かれるばかりだつた。

六

私の見る處では大戰中の左翼擡頭の由來はこゝにあると思ふ。換言すれば、かうした境遇の激變に促されて、自然の必要から、或る特殊の、勞働者の自衞的組織が發生し、それが迅速に成長して、戰時運動の一異彩となつたのである。此機關こそ從來の組合組織のやうに住所に基いて單位をきめず、專ら工場を土台として團結したために普通に工場委員運動(shop-stewards movement)として知られるものである。私は此運動が一方には組合幹部の妥協を嘲笑し乍ら、一方には戰前から浸透して居た××的思想を吸收し、或は之によつて指導され、激勵されて、先づ地方的から次第に全國的に、又一產業から全產業へと漫延して行つた經路を興味深く眺める者なのである。

だから、私は、此運動を理解するには少くも次の四つの事實を綜合して見る必要があると思ふ。

第一は、平時の組合運動が其機能を休止して居たこと、

第二は、戰爭共者が勞働者の生計を困難にした丈けでなく、

工場の經營組織が激變し、雇傭條件が頻發に變更されて其の都度彼等の利益が脅かされたこと、

第三は、大戰前から組合改造や合同運動等の左翼運動があつて、之が元來幹部反對の積極的戰鬪團體であつたがために、鬱積された大衆の不滿を托して、反抗運動の指導者たらしめるには恰好な立場にあつたこと、

第四は、戰時經濟に基く不平は（從て其救濟の必要は）實際の工場生活から起つて居る具體的、特殊的のものであつたから、其改善の運動も工場を中心として組織化するのが便利であつたこと、

かくて、此工場委員運動こそは戰前から靜勢として機會を覗つて居た左翼運動者が、愛國的情熱から目醒めた勞働大衆を捕へて卷き起した颱風には違ひないが、（即ち或意味では大戰前に其の土台が出來て居たものではあるが）そは、何によりも戰時變態的經濟を背景とする應急の組織に外ならない。

次に此運動の發祥地でもあり、又專ら左翼指導者の活躍したのはクライド地方（スコットランド）の軍器工場であるが、これも戰時經濟の中心がそこにあつたことや、此地方が彼のS・L・P.派の根源地であることから、同じやうに說明されると思ふ。

最後に、此運動の主張上の特徵は何によりも勞働者自身による工場管理權の要求にある。が、此點も思想的にこそはサンヂカリズムやギルド・ソシアリズムを背景とするが、此要求が具體化されるに就いては、戰爭初期の經驗其者から生々しい活素劑を與へられて居るのである。と言ふのは、まだ軍需省も出來ない初期に陸軍省に地方軍器委員が設けられ、又其監督で全國彈丸工場が出來たが是等の制度では勞働者にも經營上の管理に參與する權限が與へられそこで非常に有益な經驗を積むことが出來たのである。之は期間から言ふと一九一五年の初めから、約半ケ年の短かい間であるが、其影響はかなり强かつたと言はれる。クライドやタイン等の中心地では殊に其感が深かつたらう。其後此制度が廢止される際には、軋轢沙汰が各地方で行はれたさうだから、工場管理に對する勞働者の執着は生々しい力となつて工場委員運動を動かしたらうと思はれるのである。これらによつて考へても、此運動の成長は特に、戰時所產であると言はざるを得ない。

七

さて、かう言つてしまうと、工場委員運動は恰も生來鬪爭のみを目當てにするものと考へられるかも知れないが、實際は決して左うではなかつた。それは同時に戰時經濟の圓滑な進展に

とつて、なくてはならぬ道具でもあつたし、又同じ此名で呼ばれる機關の中にも温和な、妥協的なものもあつて、是等は次第に幹部や政府と接觸し、遂には公式に承認されて、專ら協調的な交渉を勵んだのである。後に、有名なホヰツトレイ報告で推賞されたやうな協調委員會の前身がそれである。そして此種の機關こそ、一般に勞働大衆の史的發展には、反て、重大な影響を持つものとさへ考へられるが、たゞ、私は此論文の目的上一切かうした妥協的運動には觸れないのである。私の對象とするのは、やはり左翼指導の下に活動した戰鬪的な、非公認な運動の發展であり、殊には、其の大戰末期に××運動と交錯した依存關係の發展である。だから、これは假令、往々、潮に乘つては、かなりの大衆を捕へはしたが、本來一部積極派の運動に止まるものであつたことを忘れないで欲しい。

八

では、此運動の活躍した問題は主として何にであつたか。賃銀の引き上げや、時間の短縮やが大事な問題であつたのは勿論だが、それよりも一層面倒だつたのは、大戰の前半にはディリユーション(婦人、小兒其他不熟練工を雇入れて熟練工に代らせること)の問題であり、一七年頃からは賃銀制度の變更(出來高拂ひ法の採用及擴張)であつた。自然、工場委員運動の活躍は是等の純粹な産業問題を題目として考へることが出來やうと思ふ。

處が進んで、休戰間ぎはになると一方では是等の産業問題は下火となるに反し、他方、平和運動の昂揚と露國革命の成功に刺戟されて、此運動の方向は著しく政治的色彩を佩びて來、××的煽動が中心となるやうになつた。運動の内部の分裂、殊に産業管理の實際的訓練を急務とした多數ギルヅメンの脫退は此方向轉換の産物だと考へられるが、それと共に、從來單に漠然と連絡したに止まる諸左翼陣營が國外、殊に露國共産黨から財政的援助と重要な政策的指圖とを受けて、次第に一個の緊密な組織的政黨を形成するやうになつたのである。一九二〇年八月にB・S・P・を中心とする左翼が工場委員の殘壘を土台として大英國共産黨(Communist Party of Great Bri ain)を組織したのは此狀勢の一進展である。

由來産業運動と政治運動とは交替的にくる。本世紀に入つて暫くは政治運動が盛んだつたが大戰前から戰時中にかけては專ら産業運動が行はれた。閉戰間ぎはからは又政治熱が昂揚したやうに思はれる。然し、共産黨に言はせると、それは勿論産業運動の排斥ではなくして、此兩運動の融合に外ならない。最早、兩

者は反撥的關係をなさず、又何れが偏重され、何れが輕視されると言ふことはないが、政治運動は産業運動に對しては寧ろ指導的位置を占め、此兩運動が一定の組織的中央機關によつて、夫々其の獨自の分野を與へられ、相互に緊密な依存關係を保つて活躍するやうになつたのである。

まあ、言へばかうした成り行きが大戰中から戰後へかけての左翼展開の概況である。人は、之をサンヂカリズムからボルシエヴイズムへの展開とも言ふだらう。

(參考書) 雜誌掲載のものは除いて、

A. W. Humphrey : International Socialism & the War

A. L. Bowley : Prices & Wages in the U. K. 1914—1920

G. D. H. Cole : Workshop Organisation

ditto : Trade Unionism & Munitions

A. Lozovsky : World's Trade Union Movement

マウトナア(岩城忠一譯)ボルシエヴイズム評論

〔第三〕戰時左翼工場委員運動

九

大戰前の組合運動は大體地域的單位を土台として集合契約權の確保を努めて居たから、工場委員制は大體から言ふと殆ど無視されて居た。なる程さう呼ばれる役員もない事はなかつたが、それは極く些細な事務を扱いて居たので、工場の勞働者を代表して經營者と交渉する權能などは持つては居なかつた。爭議の起つた場合等には稍々之を地方委員に報道して參考資料を提供する位なものだつた。たゞ一部の機械工場や炭坑等では往々、之が非公式乍ら、交渉權を持つて居る場合もあつた。とりわけ炭坑業では自然の狀態から坑口委員(ロッヂ)は大事な單位となつて居た。かう言ふ場合には組合公認の地方委員と工場委員とは既に多少の勢力爭ひを免れなかつたので、前者は工場委員の發達をば助長するは愚か、蔑視さへして居たのである。

此工場委員の性質に注意を拂つて居たのは、やはり合同運動者やギルヅメンであつた。彼等は偏狹な職業的立場を打破する見地から、全工場を一體とする工場委員をば激勵し、自然相互に提携して、反幹部の氣勢を昂める傾きもあつたのではあるが、要するに、それは例外的少數に止まつて居た。だから、此運動の活躍は、何んとしても、戰時の變態的境遇の産物だと言ふべきだらう。

一〇

始めてクライドの軍器工場で工場委員が蹶起したのは、一九一四年から一五年にかけての賃銀と時間との交渉に就てゞあ

る。此際勞働大衆は組合幹部の妥協政策を拒否して、愈々一五年の二月から非公認の罷業を開始したのであるが、既に幹部と絕緣して獨立の叛旗を飜す以上、其代表者には前々から此地方に人氣のあつたS・L・P・の連中を迎へたことに不思議はない。かうして獨自の交渉委員たる工場委員が現出したのであるが、夫れは「上から下へ」命令的に與へられた代表者ではなくして、各工場の全職工のレフエレンダムで選出されたものであつた。詳しく言ふと、更に此の各工場の代表者が地方的に會合してクライド全地方の交渉委員たる勞働撤退中央委員會（Central Withdrawal of Labour Committee）が編成されたのである。

然し、此の最初の運動を以て直に××的叛逆運動と考へるのは失當らしい。オルトンの説明する處では此罷業其者も決して一部煽動家の仕業ではなく、大衆の抑へ兼ねた不滿から出現したものであるし、委員等の間も愛國的精神は旺盛だつたらしい。彼の引用する處では此運動の機關誌は其主意を次のやうに宣明して居る。

「……工場委員は勞働者を煽動して罷業せしむるものではない。其職責には指導を含むで居ない、事實として、此全運動は指導の排斥である。それは大衆の側からの組織された表現の一手段である。それは從來の仕來りの方法とは逆に進む。演壇的辯舌で勞働者を誘き出すことはせずに、それは大衆に對して、工場委員から直接に報導を聽取させ、さて、其上での行動の方針は大衆自身に決定させるのである。各工場の完全な組織と工場委員間の協働とによつて、此運動は眞實の民主的表現の手段を提供するものである。」

二

處が、罷業が片付いても此組織は解散しないで、引續いて、常設團體となり、折柄問題となつて來た軍需品法の適用やディリユーシヨンの實行に關する硬派勞働者の代表機關になつたのである。名稱がクライド勞働者委員會（Clyde Workers' Committee）と改められたのも此時である。

其年の七月、軍需品法の通過をうけて、直ぐ後に、此委員は宣言書を發表して居るが、其中には此新機關の由來を説明した一節がある。それによると、去る二月の罷業の際、工場委員は極立つた有能な活動をし、從來、多年公認幹部の指導した場合より組織化も巧妙だつたし、職業間の一致も堅固だつた。その有益な經驗を利用する主旨で此機關が繼續されたのである。

さて、軍需品法に對しては「かゝる惡法に組合幹部が協贊したのは正に勞働者階級を裏切る叛逆的處爲である」と揚言し吾々は賣られることを拒んで、全クライド全職業の代表者から此委員會を組織し、一つには尙ほ殘された自由を擁護し、二つには此惡法を出來るだけ速に撤廢せんとする者である」と述べ

て居る。此の斷片的引用でも、既に此運動の反抗的、戰鬪的精神に滿てるを視ひ知ることが出來やう。私は次にデイリユーションに對する態度を述べて、其政策の眞意を、も少し闡明し度ひと思ふ。

二

勞働者の此問題に對する立場は必ずしも一樣ではない。比較的熟練工は其傳統的特權の破壞されるを廢れて頭から絕對の反對を唱へたが、勞働者委員の態度ばそれとは違つて居た。彼等はデイリユーション自體は產業の自然的發展であるとして承認するが、夫れに伴ふ勞働者の境遇の變化に對しては彼等自ら之を管理せねばならない、と主張した。

一五年の末、ロイド・ヂョーヂは此計畫を說明するためにクライドに遊說し、勞働者委員とも會談したが、其際彼等は繰返へし此主張を切言して居る。それは翌一六年初頭の機關誌「ワーカア」に傳へられて居る。例へば、首領の一人なるカアクウッドの言として次の一節が載せられてある。

「…ロイド・ヂョーヂ氏は勞働者をして工場經營に參與させる覺悟が果してあるだらうか。吾々は社會主義者としてデイリユーションは歡迎する。それは產業狀態の自然の發展だと考へるから。吾々は前世紀の機械破壞者（ラデツツ）の徒のやうに新規の機械を破壞せんとする者ではない。然し、此デイリユーションの計畫は勞働者の管理の下に行はれなくてはならない。吾々は知つて居る。若し吾々が管理せぬならば、低廉な勞働が引き込まれるに違ひないと言ふことを。故に、萬一此の吾々の要求が拒まれる限り、吾々は此計畫には最後迄抗爭するであらう。」

此委員の眞意がデイリユーションの解決を機會にして、結局は工場管理權を奪取せんとするにあることは之でも明である。處で、此主張は、とも角もむげに拒絕はされないで管理委員（それは無論どれも戰鬪的なものばかりではないが）が相次で設置されたから、中でも戰鬪的なものは自然、勞働委員を其指導者として相互に連絡するやうになつたのである。

三

一九一六年の三月にパアクヘッドで罷業が起つた。その導火線となつたのは些細な事柄だが、其の背後には左翼分子の蓄積された憤懣があつた。（生計の困難、資本家の暴利、軍需法の過酷な適用、デイリユーションの不滿等々）。其不平分子をば團結させるには是等の委員が活躍したのは勿論である。單にそれ丈けではない、オルトンの言ふ處では此事件を境い目として左翼運動は著しく××的傾向をさへ示して來たさうである。

此騷擾のために勞働者委員の幹部や工場管理委員等で叛逆罪にとはれて投獄されたり、逐放されたりした者が出來、此地方

の運動も表面は氣勢を挫かれたやうに見えたが、逐放された委員は行く先き々々で此運動を宣傳したから、寧ろ猛虎を廣野に放つた感がないでもなかつた。果して、他の地方にもグラスゴー型の工場委員運動は野火のやうに燃え盛つて、戰時中の騒擾に重要な役目を努めるやうになつたのである。

一四

工場委員運動が大體戰前からの組合合同委員等を中心として居ることは前に一言したが、一六年四月のクライド勞働者委員の宣言にも「吾々は全職業の團結と一層密接な組織とのために働いて居る。一組合と言ふのが最後の目的である」と叙べて此關係を明にして居る。では、戰時中合同運動其者はどんな活動をなしたか。私はそれを一瞥して、工場委員運動との關係を、も少し、明確にして置かうと思ふ。

英國法では一九一七年まで組合の合同は其所屬員の三分の二以上の同意を必要として居たから、組合の多數が徵發されて居り、又俸職上の移動も多かつた戰爭中は本來合同運動には不利だつた。然し、一方では組合幹部の屈從にあきたらぬ不滿が反抗運動への同情を喚起したことは此運動をも奮起させずには置かなかつた。中にも金屬、機械及造船合同委員は最も活躍した。そして一六年から一七年にかけてシェフィールドやリーツやバアミンガムに其大會を開いて機械工合同組合（Amalgama-ted Society of Engineers）の幹部に强硬な合同の勸告をつき付けたり、或は米國のI・W・W・とも連絡してトラファルガア・スクエーアで「一大組合」の示威宣傳をしたりしたが、結局具體的の纏つた効果は收めなかつたやうである。それで彼等も其主力を工場委員運動に注ぐやうになつたので、其の方向轉換は既に一七年には著しく進行して居たらしい。だから、同年の三月にシェフィールドの工場委員の首領なるマルヒイが地方合同委員に檄して次の主旨を叙べて居るのは、事新しい宣言なのではなくて、單に大勢の赴く所を説明するに過ぎなかつたと考へられて居る。（オルトン）

「……記憶せよ、諸君の要求するものは決して單純なる組合の合同だけではなくて、又工場内の勞働者の合同であることを。合同委員を勞働者委員へ轉換させて、諸君の宣傳に明確なる形體を與へよ。組合の合同は寧ろ附帶的にし、勞働者の合同をこそ基礎的たらしめよ。」

（註）かくして合同委員と工場委員とは合體して居る。然し詳しく言ふとクライド地方のみは合同運動よりは寧ろS・L・P・派の指導に從ふので、之は職業別組合の打破、新組合の創立を目標とするものだが、何れにせよ、現前の工場管理を尊重する點では一致して居る。且つ、勞働大衆にとつてはかゝる理論的相違は問題とならない。彼等は日常の不滿を煥發させるに便利な機關を見出したに止まるから。

たゞ、此の見解の相違は次の叙述にも關係があるから一寸記憶を促してをく。

一五

ウヰツトレイ委員會の第一回報告が發表されたのは一七年の六月だが、クライド委員會からも此妥協的協議組織を批妄する強き反對宣言を發表し、「吾々はかゝる懷柔的組織に欺瞞されずに、現に形成されつゝある、勞働者のみの、そして勞働者自身の利益のみを目的とした工場委員を支持せねばならない」と叙べたのは彼等の立場としては當然なことであつた。

一六

話は多少横道にそれたが、さて、デイリユーシヨンの交渉が一段落付くと、今度は出來高拂制の問題がやかましくなつた。此問題に就いても少くも從來時間制で働いて居た者は反對した。處がクライド勞働者委員の態度はデイリユーシヨンの場合と同じく、一定の條件を付けて之を承認しやうと言ふのであつた。それは個人別の契約の代りに、集合的の契約を要求したのである。此委員會長たるガラチヤアが提出した草案には次の四項の要求が掲げられて居た。

第一に雇主對個人勞働者の間には契約を絶對に締結しないこと

第二に工場生産に關する全責任を工場委員に請け負はせること

第三に工場委員が勞資契約の唯一の仲介機關になること

第四に出來高制の單價決定やプレミアム、ボーナスの標準的時間等の決定に就いては工場委員に完全な交渉權を認めること

同じ主意を更に一層詳しく説明した別の草案それは「産業民主制へ」（Towards Industrial Democray と題されて居る）によると、一工場の賃銀總額を工場委員に拂ひ渡し、之を委員から、勞働者相互に、規約した方法で、勞働者に配給することになつて居る。

かうして見ると、此要求と政府の主旨とは其本來の目的から、到底相納れぬものなることが分らう。なぜと言ふに、政府の考へは之で個人的能率を増進させやうとするに反し、此集合制の要求こそは、何にはさて措き、工場委員に管理權を奪取しやうとするものであつたから。

結果から言ふと、此要求は貫徹出來なかつたのだが、とも角も此出來高拂ひの問題は大戰末期の重大な物議の種子となつたのである。

以上、私は工場委員運動の經過を概觀した。これ丈けでも此運動が如何に工場經營の實際的經驗を重視し、其機會を掴むことに如何に腐心して居たかゞ窺はれやう。政治的××のセンセイションを呼び起すことは必ずしも彼等の目的ではない。産業經營の改造の力強き土台を築き上げることこそ彼等の主眼であつたし、これが又ギルヅメンの教義に負ふ處大なるは言ふ迄もなからう。

一七

私は本節を終へる前に、此運動の組織や主意を宣言したクライド勞働者委員制の規約を紹介して置かうと思ふ。

（註）尚ほ此の外に此運動の主意を説明したものにはマルヒイの「勞働者委員、其原理と構成の綱要」（一九一八年）やガラチヤ、及びキヤムベル共著「直接行動」（一九一九年）等がある。

此綱要に「目的」としては次の三項が擧げられて居る。（一）工場に漸次學理權を擴大すること、（二）勞働者の雇傭條件を自ら規律すること、（三）勞働者を階級的基礎によつて組織し、遂には賃銀制度の撤廢と勞働者の自由と産業民主制とが獲得される迄其闘爭を持續すること

次に「原理（プリンシプルス）」としては次の諸項がある。

（一）工場から委員に迄直接代表制のこと、（二）直接管理及び直接行動、即ち政策の管理權を大衆に與ふること

「規則（ルールス）」の中には次のやうな規定も含まれて居る。

會員は毎週一片を支拂ふこと、此會費は工場委員が徴集すること、三工場以上の要求あれば勞働者委員の特別會議を開き、其決議は全會員に通告して、更に、其採否を決すること

「組織編成」は次の通りである。

組織の單位は、工場の全勞働者の互選した shop stewards（又は delegates）で編成する處の workshop Committee である。此各委員會から二名宛の Conveners（婦人を使用する。工場では其一名は婦人代表とする）を選出して、地方的勞働者委員（例へば Clyde Workers' Committee）を作り、更に各地方委員の代表者から全國勞働者委員（例へば Scottish Workers' Committee）を作る。

どの委員會も專斷的執行權は持たず、政策は萬事、大衆に問ふて決定する。だから、委員會の義務は地方的に將た全國的に必要な報道を配給し、政策及び組織の協働を努めることである。

これが綱要の大意だが、これによつて見ても其組織の特徴は工場を單位とすることと、大衆の直接管理とにある。之は何れ

も從來の組合組織に見ざる處で、運動者の自ら誇りとする點でもある。

　では、かゝる新組織をどうして發展させるかと言ふ問題になると前にも一寸述べたやうに現在の組合を內部的に改造すると言ふものと、之を打破して新規に建て直すと言ふ者とがあつて、統一した見解はなかつたらしい。然し戰時中は大體前者に傾いて居たやうであるが、露國革命の影響をうけてからは、其方針も一變したことは之も前に述べた通りである。

（參考書）

W. A. Orton: Labour in Transition, 1921

Report of the Labour party Committee on the Clyde deportations

W. R. Scott & J. Cunnison : Industries of the Clyde Valley during the War, 1924

〔第四〕ロシア革命と左翼運動

一八

　一九一七年になると左翼運動の方向は既に大分變つて來た。一方には工場の產業問題に盡力し乍らも、他方には政治運動の色彩が濃厚になり、××的昂奮が高まつて來た。此の變遷の由來は複雜である。

　同年の七月に提出された政府の產業不安調査報告には、此不安の由來は複雜だが、其根底には或る心理的狀態が土台となつて居る。それは疑惑の念だ。偏頗な犧牲、政府の破約、組合幹部の裏切、產業の將來の恐怖等に根差す疑念だ。是等の疑念を捺する個々の原因には生計の困難もあれば、個人的自由の拘束もあるし、政府の方針に對する疑惑もある、と、かう言ふ主意が敍べてある。それと同時に此報告は、全國を通じて各方面に愛國的感情は旺盛であり、××的昂奮は一般的のものではないと樂觀して居る。然し、或る二、三の地方には資本主義に對する敵愾心が勞働組合員の多數の政治的信念になつて來たと戒めても居る。

　思ふに、戰爭も前途が見え、愛國心も疲れて來るに從て、抑へられて來た慾望が急に擡頭して來もしたらうし、それにつけても政府の其場免れの遣り方にはつく〲愛想が盡きもしたのだらう。少壯血氣の連中は現行制度を打破せざる限り、勞働者は到底救はれ得いと言ふ信念を此戰爭によつてまさしく體驗したと考へたのであらう。かくて、此頃から平和への轉換期を通じて勞働者階級の複雜なる心理狀態の混亂と發展とは實に注目に價ひすると思ふ。

私は、かゝる一般的叙述を背景として此前後に、勞働者の心理的混亂（從て其態度の分裂、反撥）と左傾的發展とを最も強く刺戟したらうと思はれる二つの事件に就て多少の觀察を加へて見度い。その一つは強制徴兵令の擴張を導火線として再燃した平和論の紛爭であり、二つは二次に亘るロシア革命の勃發である。

一九

強制徴兵令は一九一六年三月に先づ獨身者に適用されてから、次には妻帶者にも擴張された。然し、或種の産業は戰爭の遂行上絶對になくてはならぬものとして其適用を免れて居た。軍需工業は其の第一のものである。處が、一六年末には此特權が剝がれて、不熟練工が先づ徴發され、一七年四月には遂に熟練工まで召集されるやうになつた。それと同時に婦人や小兒が補充的に雇傭されもした。此の徴兵令の適用こそは折柄の平和運動の再燃を軍需工場にも引き入れたのである。

平和運動は一六年末に獨逸側から休戰の申出があり、ウィルソンが交戰國に講和の條件を開陳するやうに勸告した頃から再燃して來た。其中心となつたのはI・L・P・や民主的管理同盟（Union of Democratic Control）等であつたが工場委員や地方勞働會議等の諸左翼も之を援助した。然し、勞働黨も組合幹部も政府の講和拒絶に贊同して、戰爭の繼續を要求した。これより先き、國際社會主義局でも多少の平和的活動を始めて居たのであるが、一六年九月の勞働組合大會（バアミンガム）では、きつぱりと國際會議の開催に反對し、勞働黨も亦翌年一月の大會（マンチエスタア）では「勝利迄の鬪爭」をさへ決議した。一七年を通じて此平和論の抗爭は愈々熾烈になり、それと同時に自然、左右兩翼の溝渠を深め、又反幹部派を左傾化するやうになつた。

かゝる分裂の狀勢の際、ロシヤの三月革命が勃發したのである。

げに、オルトンの言つたやうに、社會主義團體にも、勞働組合内にも、否、國民全體の間に到底和解出來ぬ根本的分裂が明に表はれてきた此時に、驚くべき革命の報道——さしも橫暴を極めたロマノフ王朝の××、民主的勞働軍の凱歌と、人民平和の報道が舞ひ込んで來たのである。さしもに動ぜぬ英國民も此報道に接しては深甚な昂奮と混亂とを抑へることは出來なかつたらう。殊にも改造の希望に焦慮して居る左翼のうけた衝動は恐らく想像に余るものであつたらう。

二〇

此混亂の際、彼等がロシア革命を歡呼するには少くも二つの意味があつたと思はれる。それは一つには勞働者の權利と實力との驚嘆すべき發揚としてであり、二つには人民平和の觀念の權威ある肯定としてゞある。

××の熱血に燃える左翼は熱心なる平和論者と合體して、直に合同社會會議（United social Council）を組織し、其六月三日にはリーヅに大會を催して、ロシア××を祝福し、戰爭の休止と國際平和の實現を政府に要求し、言論其他の自由を主張し、其決議を貫徹するためにソヴイエツトの流を汲む勞兵會議を編成することになつた。

此時勞兵會議の設立を說明したロバート・ウイリアムスの演說は此會合の昂奮した、多少混亂的な心理を髣髴させるものがある。

「……若し此會議に多少でも意味ありとすれば、それは社會主義者の演壇から使ひ古された一句、卽ち無產者階級の×××意味するに外ならない。……私の友人スマイリイは言つた、吾々は叛逆を謀らんとしてこゝに來たのではない、道理のために來たのだと。然し、私は彼に注意する、國防條令の下では道理は既に××になつてしまつてるのだ……此國には全世界で最も有能な支配階級がある。（「吾々は彼等をぶち破つた」と呼ぶ者あり）否、諸君は決して彼等をぶち破つては居らぬ。彼等は諸君の指導者を引き拔き去つて、諸君に刄向かはせて居るのだ。……吾々は產業的及び政治的、勞働機關の中にひそむ反動勢力を打破せんと欲する。此會合はそのための企圖である。……議會は諸君のために何事もなさぬだらう、それは戰時や諸君のためには何事もしなかつた。勞働者は國家のためには常に血と財寶とを犧牲として來た。此の犧牲を拂つたればこそ國家は彼等のものだ。……吾々は自分の階級の名によつて×××××××××××××、若しロシヤの××者が神聖ロシヤの×××××したならば、ロマノフ朝は今日でも王座を維持したらう。だから私は告げる××××××××××××××××××××××××。……若し諸君、眞にロシヤに×××送るなら、××××××××××××××。此英國に×××××××要なるはロシヤと同じだ。勞働者は既に××××××に於て××××××た。××××××よ、團結せよ、諸君は其鐵鎖の外に失ふものは××、×××××××を得るであらう。」

前にも言つたやうに此會議には後年共產黨を組織した極左分子は無論だが、漸進主義なるI・L・P・の連中も參加したのである。そしてマクドナルド、スノーデン、ジヨウエツト、スマイリイ、ウイリアムズ、ランズベリイ等の諸首領が此勞兵會議の創立委員に任命されさへしたのである。これでも大體その昂奮狀態は想像出來る。

然し、此リーヅ會議を直に暴力××の謳歌だと考へるのは誤謬だ。何故ならば、人も知るやうに三月革命共者は決して勞働

者の××や暴力的壓制を主張するものではなく、單に民主的共和國を樹立し、民主的憲法を制定したに過ぎないし、又此リーヅ會議の決議にも些かも××的要求と見らるべき事項は含まれては居なかつたからである。勿論之に參加した諸黨派の內には突きつめて見れば到底折り合へぬ見解が混在して居たのだからとも角も左翼分子はソヴイエツト組織の建設から、其儘勢ひを押し進めて政治××に迄引き込まうとしたことは勿論だらう。然し、戰勝國の、しかも沈着で、經驗的で、理性を失はぬ英國の大衆が全體としてどこ迄動搖したかは疑問である。

が、何と言つても勞働運動の分裂は之によつて愈々顯著になつて來た。ロシヤからI・L・P・等にペトログラードへ代表を送れと言ふ招待があつたのは此時である。マクドナルドとジョウエットとが愈々出發しやうとして海員同盟の拒否を受けて、其の旅行が不可能になつたと言ふ挿話からも左右、兩翼の深い溝渠を窺ふことが出來やう。

思ひ上つた左翼は各方面で××期の到來と其福音とを宣傳し、或は政治的な、或は產業的な、モツブのやうな勞働者大會がしきりに催されて官憲と衝突し、世情はかなり不安になつたらしい。殊に機械及造船工はかの徵兵令と賃銀制度との不滿を訴へるために組合幹部の鎭撫を無視して、大擧して軍需省に肉迫したり等した。かうして彼等はとも角も瘦せ田を耕して××の種子を下ろしはした。「英國でのソヴイエツト運動は味方にも、反對者にも充分廣告されて、選擧民にも深い印象を殘した。」此のために果して××の種子が普及し得たか否かは知らぬ。たゞ勞働運動に內訌を深め、反動家に乘ずるすきを與へたことは確かである。

二

其十一月ボルシエヴイキ××が成功して、共產黨の赤旗が朔風に揭げられた。其結果民主主義は倒れて、辛辣な暴力××の政治が復活した。かゝる成り行きが明かになり、(殊に反動家の曲筆で其慘禍が誇大的に報道された)××の何を齎らすかゞ落ち付いて考察されるやうになると、一時は熱狂した勞働者にも萬斗の冷水が注がれたやうな幻滅が來た。(此幻滅のために方向の轉換をしたのは主としてI・L・P・の連中である)然し左翼急進派にとつては直截果敢な其戰略は反て野火を煽ふる颶風の如き有力なる刺戟を與へた。そしてロシヤの共產黨は自然彼等を指導し、團結せしめる中心力となつたのである。ちぐはぐだつた左翼の戰略はかうして確立された。そして產業的活動はたゞ工場內の不滿と焦燥とを昂進させる限りでのみ尊重され

るに過ぎなくなつて來た。ギルツメンを中心とする比較的温和な分子は此運動とは分離することになり、一般の輿論も漸く疑惧と反感とで其の成り行きに注視するやうになつたのである。

一九一七年の末からロシヤ軍の脱退によつて失はれた勢力を補充するために英國では軍隊の増員を實行せねばならなかつた。左翼工場委員は再び其の反對に活躍したが、翌一八年の春獨逸軍の突撃が行はれると勞働者の愛國の血も又燃え立つた。危まれた増員は圓滑に行はれた。一八年の前半を通じて、ロシヤと英國大衆との間隙は次第に顯著になつた。ロシヤは英國戰線の裏切者である許りでなく、レニンは斷乎として英國幹部（無論I・L・Pをも含む）の攻擊者となつた。其政策は又た民主論者たる英國幹部の强く排斥する處でもあつた。

然し運命は皮肉なものである。かゝる嫌はれ者のロシヤが半年も立たぬうちに、たちまち、英國勞働者の滿腔の同情に接しやうとは。

一八年八月。英佛聯合軍は愈々露國戰線に侵略した。處が、輿論は急に風向を變へて、勞働黨が、急に此侵略政策を攻擊し出したのである。然し、政府のボルシエゼイキ膺懲政策は斷乎として動かず、豹變した勞働黨の反對運動は極めて無氣力なものであつた。それが無力で、政府が頑强であればある程、滑稽にも「虐げられた同胞」（？）に對する。同情は沸騰し、「暴虐な恐怖政治」（？）に對する反感は忘れられたのである。

のみならず幹部指導者の無能と無氣力とは一部中堅の首領に一層不滿をつのらせた。そしてかゝる左傾的心理に對してこそレニンの辛辣な政策が胸底に喰ひ込むやうな魅力を持つたのである。

故に言ふ對露攻擊は政府と勞働黨とを分裂させ、ロシヤの政策は勞働黨の内部に左傾化の勢ひを生んだのである。

同年十一月遂に平和が克復された。それは戰時變態の經濟が生むだ左翼工場委員の意義を減殺させてしまつた。殊に危まれた平時經濟への轉換も案外圓滿に進行したし、一方勞働組合の戰鬪機能も復活した。散在して、統一のない工場委員よりは秩序も訓練もある三角同盟等の方が遙に有力な武器として信頼されるやうになつた。

資本家は又戰後の整理の手始めに先づ工場内の騷擾分子を淘汰するに努めたから、此運動は其原動力をも失つてしまつた。一八年の夏及び一九年の春に彼等が指導した非公認の罷業が慘敗してからは、工場委員の威望も落ちて、多くは解散の憂目に會つた。

然し、一九年から二〇年にかけて歐洲の天地には革命熱が席

捲して居た。此革命熱に乘じた政治運動への轉換が結實して大英國共産黨が出現したのである。

R. Williams: New Labour Outlook

三

以上、大戰中の左翼發展を辿るに當つて私は主として機械及造船工業を對象として來た。それは此産業が戰時中に持つ特殊な中心的位置のためにである。然し、大戰後は此特異な意義は失墜して、左翼運動の中心は寧ろ炭坑業へと移り行つた。一九一九年の爭議に始まつて今日の總罷業にまで展開した此運動の經路に就ては既に讀者の熟知する處であらう。私は、本節を終るに際し、此炭坑業に於ける戰時中の左翼運動に極く簡單な一瞥を加へて置かうと思ふ。

大戰中炭坑夫の組織は機械工のやうな激變をみなかつたそれは大戰前から既に、自然に炭坑區(ロッヂ)を單位として其組織が仕組まれて居たからである。此産業でも左翼××派の活躍したのは南ウエルスとかスコツトランドとか北東イングランド地方とかであつた。例へばダアラムの炭坑夫前進運動(Miners' Forward Movement)や南ウエルスの非公認改造委員(Unofficial Reform Committee)等は既に大戰前の社會不安期に其運動を始めて居た。サンヂカリズムの思想が浸透して、炭坑夫を動かす現實の力となつたのは一九一二年の有名な大罷業の經驗に負ふ處が大きい。其年南ウエルスで宣傳された「炭坑夫の次の一歩」と言ふパンフレットは、かなりな影響を與へたものだが、其主旨はクライドの勞働者委員のそれと大差がない。

大戰中は炭坑業にも左翼運動の活躍する機會が少くなかつた。殊に勞働者委員の運動が發展すると、その刺戟をうけて軍器工場に隣接した中、北部にも、それに倣つた改造委員が續々組織され、それと提携して騷擾にも參加するし、××思想をも吸收した。

戰爭が濟んでも此委員は衰へなかつた。否、國有論が喧しくなると反て一層勇躍して奮闘した。

積極派の中心は何と言つても南ウエルスとスコツトランドとであるが、一九二〇年には各地方の非公認運動を全國的に統一するために勞働者委員運動炭坑夫協會(Mineworkers' Society of the Workers Committee Movement)が組織されるに到つた。

彼等はロシア共産黨に共鳴する點が多く、赤色勞働組合國際との提携を主張する急先鋒である。

(註)鐵道從業員組合にも多少似よつた左翼運動があつたが餘りに如は

しいから之は省略する。

〔第五〕英國共產黨の成立

二三

一九一八年の劈頭に勞働黨は其綱領を改正して、とも角も社會主義の旗幟を闡明にしたが、その目的も効果も黨勢を右翼へ擴張するにあつて、之によつて其陣營内の混亂を整頓することは出來なかつた。其中には多數の舊派職業別組合員と混つて、ボルシエヴイズムを迎合するB・S・P・も居れば、I・L・Pの中にもかなり左傾的分子が居た。同じ黨員であり乍ら、其幹部を公然叛逆者呼ばはりして黨規を攪亂する者さへあつた。今日でもさうだが、とりわけ當時の勞働黨は「世界無比の奇妙な寄り合ひ世帶」だつたのである。

平和克復の曉、五年振りで議會の改選が行はれたが無暴な左翼運動がたゝつたのか、勞働黨は寧ろ惨敗してしまつた。非常な意氣込みで三百六十一名の候補者を擁立し乍ら、僅に六十三個の議席しか得られなかつた。二十數名の候補者を立てゝ戰つたB・S・Pなどは一名さへ議席を得られなかつた。

選擧に破れた勞働者には然し抑へきれぬ數々の不滿があつた。それを慰すために彼等は自然、其注意を直接行動に向けた。一九年から二〇年へかけての未曾有の罷業沙汰がかくして現出したのである。當時の社會不安の意味はかなり根本的なものであつた。「今日の勞働不安の根本的原因は現行制度の全構成に對する勞働者の挑戰の決意が莊重となつたために外ならぬ」と言ふのは勞働組合會議が全國產業會議へ提出した説明である。（一九年四月）又「戰爭中の事實とそれからの推理とを意識して、勞働者は斷然、其面を或る新秩序に向けて居るのだ。……各政黨の政治家は正に激變の起らんとしつゝあるのを自覺せねばならぬ。各國で世界を搖する變動が行はれるのを見る。此の不安は決して煽動者流の仕業ではない。それは戰爭の發展によつて促進された年來の經驗の所產である」と言ふのは三角同盟のトーマス（今日彼の如何に保守的なるかを考へ併せよ）の口にして產業會議に演説せしめた一節である。否、トーマスのみではない、今日では決して左翼とは思はれぬスマイリイやクランプやウイリアムス等の有力なる首領の言説には屢々昂奮した××贊美の絶叫を見出すことが出來るのである。

二四

かゝる××的昂奮と資本家の後退を見詰め乍ら、左翼××派

はロシア共產黨の指令を仰いで着々と其勢力の集中と組織化とを講じて居たのである。そこに集まつた一味はB・S・P・やS・L・P・やシルヴイア・パンクハーストの率ゐる勞働者社會主義聯盟や南ウエルス社會主義者協會等を中心とし、それに若干の地方的團體もあつた。勞働者委員會や炭坑業改造委員等も勿論之に參加した。新組織の目標に就ては異說がない。ソヴイエツト組織を承認し、第三國際に加入することには一致して居た。交渉の結實を妨げたのは、(1)新組織が議會政治に干與すべきか否か(2)若し參加するとせば勞働黨に加入すべきか否かの二つの當面の政策に就てゞあつた。一味の態度は大體(1)B・S・P・は其何れをも肯定し(2)パンクハースト一派は何れをも否定し、(3)S・L・P・も大體否定論に傾く。(但し其一部は議會政治に干與することだけは認めるが勞働黨への加入は否定した)と、から言ふ風に分裂して折合ひが出來なかつた。それ故一九二〇年までは共產黨を名乘つて第三國際に加入した團體が數個もあつて、しかもお互に誹謗誣侮を鬪はして居る有樣であつた。

私は既に大戰前の左翼運動の中に此の見解の相違のあることを一言して置いた。その一は米國のI・W・W・を移植したスコツトランドのS・L・P・であり組合の改造を主張するにも先づ現在の組合を打破することを要求して居た。其二はトム・マンの移入した佛國のサンヂカリズムで、之は現在の組合を土台として之を合同し、內部的に改造しやうとするものであつた。戰時中及びロシア革命の政策は大體後者を有力にする傾向があり、S・L・P・も次第に之に接近して來たと言はれたが、やはり其潔癖は脫却しきれなかつた。そして其同じ系統の潔癖論が今、議會政治と、左翼運動との關係にも表はれて來たのである。

此硬論によると、今日の議會は勞働者の解放には無力にする。「議會主義を少しでも援助することは英國のシヤイデマンやノスケの徒に力を與へる丈けである。ヘンダスンやクラインス一味は徹底的に反動的だ。I・L・P・幹部は次第に中產階級的自由主義に支配されて居る。彼等は第三國際には强き敵意を懷いて居る。議會主義的御都合主義を助けるのは彼等の支配に服する丈けのことだ。然し、軈て、吾々の獨立戰は次第に勝利を得て來た。スコツトランドのI・L・P・の大衆は次第に議會の觀念に倦きて來、そして、ソヴイニツト乃至勞働者會議が強く支持されて來た。」のである。(クライド勞働者委員會長ガラチヤアが同委員會の名で發表した意見)要するに、彼等の見解では反動政策との接觸は勞働者を僞り、××心を痲痺させ

るばかりだが、若し共産黨が獨立不羈の戰ひをするならば、全國の左翼を結合させ、奮起させるであらうと言ふのであつた。

B・S・P・其他軟論を唱へる者はかう言ふ。議會政治も亦資本家階級を攻撃する一武器である。既に階級的國家が嚴在する以上、其機關を敵手に委せ置いて、單に産業運動のみで××を遂行することは至難である。從來最も熱烈な産業戰の鬪士も多年の經驗によつて、此國家機關の××が如何に大切なるかが分つたのだ。議會政治を全然拒否することは出來ない。又勞働黨に加入することは大衆に接近する手段である。之によつて吾々は一方に獨自の批判的立場を保持し乍ら、始めて大衆を內部的に自覺せしめることが出來るのだ。

然し、指導者の論爭ではきりがなかつた。それで遂に一九二〇年七月三十一日に倫敦で關係諸團體の大衆會議(レフエレンダム)が開かれ、少數の差で軟派が勝ちを得た。とも角もB・S・P・を中心として大英國共産黨が公式に成立したのは其決議に據つたのである。

二五

かうなる迄の間、硬軟兩派何れもたえず、ロシア共産黨に事情を訴へて其指圖を求めた。此前後の時期は單に英國許りでなく、各國で同じやうな紛糾が續出したから、ロシアの本部でも此問題に對する明確な政策を樹立する必要があつた。第三國際の第二回大會は同年の七月から八月へかけて開かれ、赤色勞働組合國際の假組織は同年の七月中旬に出來た。是等の會議では此問題の討議は重要な題目になつた。英國で行はれた右のレフエレンダムも言はゞ此本部での大勢を反映するやうなものに過ぎなかつた。そこでは又、勿論レニンの意見は指導的であつたから、私は次に彼の見解を一瞥して置き度いと思ふ。

レニンは其「英國左翼共産黨」と題する文章や其他で、右に引用したガラチヤアの意見を批判し乍ら、大體次のやうな、見解を敍べて居る。

「ガラチヤアの意氣は壯だが其戰略は全く誤つてる。議會を否定するは正しいが、此議會の內面にソヴイエット勞働者を導き入れずして、どうして議會を××出來やう。勞働黨の幹部は無論反動的だが、其背後には英國勞働者の大多數を負ふて居る。處で、彼等も援助して政權に有りつかせることは果して叛逆の行爲だらうか。否決してさうではない。何故と言へ。英國の大衆はまだヘンダスン、スノーデン一味の政策の本體を見極はめては居ない。それでこそ、彼等にだまされ乍ら、まだ、之を信頼して居るのだ。共産黨の仕事は先づ彼等に政權を與へ

て、其本體をさらけ出し、自然と大衆の愛想をつかさせることが肝要だ。大衆の見解が今の儘では××は決して行はれない。だが、此見解の變化はたゞ大衆の政治的經驗のみ之を促し得る。たゞ宣傳した丈けでは行はれるものではない。だから、議會に入つて勞働黨を助けるのは裏切り處か、××を進展させる唯一の途だ。空景氣で、豆粒程の少數が進め、妥協せずに進めと絶叫したからとて、何の足しにならう。こんなことはまじめな戰略にはならない。先づ、分立せる諸團體が合體して、第三國際に加入し、その上で、次の申出でを勞働黨に提出するがよい。「お互に提携して資本家の聯合軍に當らう。議席はお互の所得票數で分けやう。たゞ、吾々には煽動と宣傳と政治的活動との完全な自由を保留して貰はう」と。そこで若し、勞働黨が之を承諾すれば吾々は大衆に接近出來るから成功である。又若し、彼等が之を拒んでもやはり成功である。何故と言ふに、吾々は大衆に向つて、彼等は勞働者との提携よりは資本家との接觸を好むことを立證し得るからだ。此政策は嘗て吾々がロシヤでメンシエビイキに施して成功したものである。つまり、吾々が自分の得票でヘンダスン等を援けるのは首釣りをした者を其綱が支へると同じ理窟だ。都合のいゝ事には英國の勞働黨は左右兩翼を一つ世帶にいれ交ぜた奇妙な團體である。それは六、七百萬・の勞働者を包擁する諸團體から組織されてゐるが、別に、一定の政治的信條を求めない。だから行動の自由を求め乍ら、大衆と政惱するにはこんな好都合な團體はないのだ。

二六

かうしてとも角も英國共産黨は成立したが、實はまだ、B・S・P・を中心とする假結黨に過ぎなかつた。然し、彼等は予定の通り直ちに勞働黨に加入を申込んだが、それは、やはり峻拒されてしまつた。その經過に就ては今は述べないが、此拒絶は一方では勞働黨内の左翼を動搖させると共に、共産黨にとつては自ら難問を氷解してくれた。加ふるに、折柄の世界的恐慌の發展と共に資本家は後退から一轉して、斷乎たる攻勢を始めて來た。之が猪突的××の不可能を覺えさせたばかりでなく、共同團結の急務を明にした。翌二十一年一月二十九日リーツの會議で殘る左翼も概ね共産黨に入黨することになつた。工場委員や炭坑夫の改造委員等は形式的には獨自の存在を續けたが、實際は共産黨の産業運動の機關となつたことは言ふ迄もない。又勞働組合の赤化が行はれたのは主として是等の機關を通してゞあつた。此前後のI・L・Pの動搖は注目に價ひする。同黨では同年の三月サウスポート大會で一部左翼から、第三國際への加入が

提議されたが、それが否決されたために、是等の左翼は相率ゐて共産黨に入會した。其數は五千名に達したとさへ言はれる。之を一段落として共産黨員の政治的分野は略ぼ確定し、當時の黨員は一萬人と稱された。頭數から言へば甚だ微弱な小團體だが、其威力は頭數よりは辛辣な煽動政策にあるのだから、之によつて其全勞働者運動に與へる影響を速斷することは出來ない。ともかくも、かうした英國の××的分子が統制と訓練とを持つ一個の政治的團結力となり、然も一國內に止まらず、其背後にロシア共産黨を通じて全世界の强力な國際的組織の援助と指導とを持つに到つたことは、左翼發展史上のある劃期的現象だと言ふことが出來やう。此運動の其後の展開ととりわけ勞働黨の關係等に就ては近い中に別の論文で述べたいと思つて居る。

——一九二六、七、三〇——

N. Lenin: Left Wing Communism
T. Mann: From Syndicalism to Communism (Labour Monthly Oct. 22)
T. Bell: Communist Review, Oct, 1921
A. Lejovhinsky: Lenin & Britain

政治の非倫理化

室伏高信

一

政治に對する非難をわれ〳〵はいろ〳〵の方面から聞くのである。就中代議政治に對する不平は今日は一つの通り言葉となつたのである。

今日の政治、今日の代議政治の有樣に對しては何人もこれを辯護するの勇氣をもたないであらう。黨派爭鬪若しくは階級爭鬪の局面において白を黑とし、黑を白とすることを仕事とするところの如何なる討論家と雖も自ら瞬間の反省において心中忸怩たらざるものはこれないであらう。政治の倫理化といふ叫び聲は、後に述べるであらうやうにそのこと自體が如何に無意味なことであらうとも、それは少くとも現代政治の反影としての意味をもつてゐる。野猪のもつところの螺旋狀の齒、蝦蛄のもつところの角のごとき突出物、若しくはわれ〳〵のもつところの脾臟でさへも目的論の立場においては一つの意味が與へられてゐるごとくに、政治の倫理化運動なるものがそのこと自體如何にわれ〳〵のもつところの脾臟のごとき贅物であらうとも、政治的テレオロギーの立場においてはたしかに一つの意味を附與することができるのである。大道廢有仁義。政治の非倫理化が極まつて政治の倫理化の聲がある。政治の倫理化とは政治の非倫理化を直截簡明に曝露したものとしてたしかに一つの意味、脾臟的意味をわれ〳〵に要求してゐるのである。

二

今日の政治が如何に低調なものであるか！　今日の政治が如何に低き標準に於いて戰はれてゐるか！　如何なる實證主義者と雖も最早や何等の證明をもこゝに要求することをしないであらう

曰く朴烈事件・曰く國體擁護・曰く何・曰く何。黨爭から黨爭へ・陰謀から陰謀へ・墮落から墮落へ——然り非倫理化から

非倫理化への限りなきこの發展の過程において政治の正體は國民の眼前における赤裸々なる練獄である。政治が人々の精神を跋扈したところの時代が遠くへと去つて政治は正しく侮辱の對象となつたのである。

何といふ憐れなる道化役者の一群であらう！　五十年前において政治のミレニユウムを約束したところの政黨政治家の諸君が今日は暗の妖精のごとくに政治の尻尾を曝露するために踊つてゐるのである。この淺ましい怪物等の見苦るしい踊りを見よ。人々は最早や多くのことを研究し、高き理論に訴へることを必要とはしないのである。この政治の現實に直面せよ。たゞに現代政治に對してばかりではない。政治そのものについての正しき認識、政治に對する最後の理解をわれ／＼は把握することができるのである。

然り正しき認識である。今日における政治論の根本的欠陥は政治に對する認識の欠乏である。政治に對する囂々たる不平も、政治に對する凡ての改革運動も、政治に對する認識の不足を示さないところの何ものでもないのである。就中政治の倫理化運動なるものにおいてその最も代表的な現象を見ることができる。私は政治的認識欠乏の代表的のものとして政治の倫理化運動なるものを俎上にもちきたつたのである。私の目的とするところは今日の政治上の個々の現象、若しくは諸現象一般について論んずることではなくして、政治に對する認識を回復することにあるからである。繰返していへば政治倫理化運動なるものを批評することによつて私は政治に對する認識に到達することを求めてゐるにほかならないのである。

三

人々は政治の倫理化について疑ひを抱いてはゐないごとくである。今日の政治に對して如何に失望してゐるものであつても、若しくは明日の政治に對してさへ失望の眼をもつて見る人であつても、また若しくは政治の倫理化運動の局面に立つてゐる人その人の誠意について如何なる疑をもつてゐる人であつても、政治の倫理化そのものについてはこれを疑ふことをしないごとくである。即ち現實の問題としてはこれを問題とすると否とにかゝわらず、一つの理想價値としてはこれを疑ふことをしないのである。一つの理想、可能の理想としては一般に承認せられてゐるごとくであるのである。實に政治は今日如何なる狀態にあるにもせよ、また明日の政治が現實において如何なるものであるにもせよ、政治は究極において倫理化されなければならないものであり、そしてまたその可能性が永遠のうちに在存し

てゐるものであるとなすことが人々の信條、少くとも一般の常識であるかのやうに見えてゐるのである。

政治の倫理化運動はこの點において既に成功したのである。一つの政治運動としてはたしかに成功したのである。朴烈事件をもつて、然り一豫審判事の行動にかゝわるところの事件をもつて「政策以上」の大問題として評價するがごとき頭腦明晰なる政治家の時代においては、この運動、この脾臓運動もまた正に政策以上の大問題として一般的承認に訴へることができたのである。

人々は實に永い間錯覺に陥つてゐたのである。古るき政治學をもつて新しき政治に接續し、古の社會をもつて今日の社會と混同し、人々は永く政治と倫理とに對する根本的反省を忘れてゐたのである。就中儒教の影響を多かれ少かれうけてゐる人々にとつては政治と倫理との間に存在する區別の可能について眼を開くことはできなかつたのである。政治の倫理化運動なるものが今日において尙ほ承認されてゐるといふことは實にかくのごとき錯覺の賜物である。一つの傳統的錯覺の賜物であるといふべきである。

政治の正しき認識にと歸れ。政治は果して倫理化することが可能であるか。政治の理想とするところは果して倫理であるか。政治は果して究極に於いて倫理的價値の實現を目的とするものであるか。まことの政治家は常に倫理的目的に向つて努力し、または努力しなくてはならないものであるか否か。そして汎くわれ〳〵國民の政治に對する態度はそれの倫理化に向つての意識的努力でなくてはならないか否か。

四

私はこの頃一つの好奇心をもつて後藤新平氏著すところの「政治の倫理化」なる小冊子を讀むだ。この小冊子を批評することはもとより私の目的ではない。私にとつてはこの片々たる小冊子についても、若しくは後藤氏その人についても、それを批評の對象とするがごとき如何なる企てもないのである。ありていにいふならば私はこの小冊子が果してその定價に示されてあるところの拾錢の價値さへもあるかないかを疑ふのである。恐らくはこの小冊子自體は總選擧においてもろ〳〵の候補者からうけとるところの無料の宣傳ビラと撰むところはないものである。從ひて私の見るところではこの宣傳ビラが拾錢の價を要求することはたゞに高價であるばかりではない。それは無限の高價なのである。けれども今日の政治家の知識、思想、見識、頭腦の程度の如何なるものであるかを示すところの一つの標準と

してはこの書物が一般に多く讀まれることを望むのである。そして、それが少くとも著者自らが深き自信をもつて、彼の中心思想として、「最後の御奉公」としての根本思想であると標榜してゐる以上は、この小冊子をもつて著者その人の思想、知識、見識、頭腦の尺度とすることにおいて何等の不當はないのである。またそして著者その人が今日の政治上に占めてゐるところの地位、名聲、勢力のうへからいふて、彼のこの小冊子が現代日本における代表的政治家の思想、知識、見識、頭腦の大體標準を示してゐるものと見ることは、著者その人を強いることでもなく、また現代政治家を強いるものでもあるまいと私には思はれるのである。

五

政治の倫理化とは何か。謂ふところの政治の倫理化とは何か。それは一つの理想主義だといはれる。ヘエゲル的理想主義ではない。新理想主義だといはれるのである。

然りそれは最新の哲學、最新の科學のうへに立つところの最新の政治哲學であると銘打つたものである。たゞに滔々たるRealpolitiker が到りえないところの高き思想的産物であるばかりではない。如何なる政治學者も追隨を許るさないところの宏大なる思想體系であると標榜されてゐるのである。われ〱は先づこの大思想について聽かねばならぬ。

「政治の倫理化」に曰く今日在朝在野の政治家にして眞に内外の思想問題に思を潜めてゐるものが幾人あるか。自ら思想問題を研究せずして國民の思想善導など〻叫ぶのは烏滸がましいことではありませんかと。まことにそのとほりである。それだけでも、否これだけでは拾錢の價値はたしかにあるといはなければならないのである。われ〱はこゝに拍手喝采して多くの烏滸がましい政治家の諸君とそしてわれ〱自らを深く戒しめたいのである。そして鳴りをひそめて暫く著者その人からして内外の思想問題についての深き蘊蓄と高き見識とを聽きたいのである。

著者は自然科學の信者である。自ら醫者であるところの著者は政治界における一個の自然科學者をもつて任んじてゐるごとくである。パン・ルベエが科學的降雨の豫言者であり、バルフオアがベエコンの銅像除幕式を主催したごとくに、日本の政界における著者は多くの「思想善導」的時代錯誤の政治家の間にあつて一個の自然科學者をもつて深く自ら任んじてゐるごとくである。曰く精神的問題即ち哲學とか宗教とか政治思想乃至は法律思想といふものが自然科學即ちナチユウラル・サイエン

スから深い影響をうけるといふことは私から申上げずとも折様の充分御承知のことでありますと。

人々は何を承知してゐなければならないか。曰く最初に自然科學が政治のうへに與へたところの影響はニユウトンのそれである。ニユウトンの力學説がモンテスキユウの三種分立論となつたのである。次いでダアヰンの進化論である。ダアヰンの進化論が憲法の機械的解決からして有機的解決への進化をもたらしたのである。そして今日は如何。曰く今日はアインスタインの時代であると。著者の言葉通にいはんか、曰く然らばダアヰンの説は今は何に押されてゐるかと申しますと先年日本にもきて諸君の記憶に新たなるアインスタインの相對性理論に支配されるやうになりましたと。ダアヰンがアインスタインに押されたのである！相對性理論のために進化論が光を失つたのである！アインスタインの出現とともに進化論なるものが時代後れとなつてしまつたのである！著者曰く昔つてはニユウトンの力學説が政治思想を支配した。大正元年にはダアヰンがそれを支配した。大正十五年の今日においてはアインスタインの相對性理論がこれを支配しなければならないと。時間空間の相對的理解、否、アインスタインの所謂時間の空間に對する相對性、時間の規定が空間的に制約せられ、光の速度に依存するとなすところの相對性理論なるものが今日の政治思想を支配する！

萬能膏の相對性、エホバにとつて代つたところのアインスタインの相對性理論とは何か。著者曰く、私の知つてゐる範圍においてアインスタインの説を紹介しますとその相對性原理は物質といふものと精神といふものとは別々ではない、一つであるといふことでありますーーアインスタインの相對性理論とは精神と物質との一致、靈肉一致においての世界一元觀にほかならないものであると！それは時間空間の問題ではない。エエテルの存在に關するものでもなく、宇宙の有限性についてのものでもなく、若しくは物體の速度と光の速度とに關するものでもなく、萬有引力に關するものでもない。純粋に形而學的である。物質と精神との一致、靈肉一如の哲學である。自ら一個の自然研究者であるに過ぎないと卑下してゐるところのアインスタインはこゝにマツハのごとく、ポアンカレのごとくに今や一個の哲學者である。謂ふところの新理想主義の哲學を樹立したのである。アインスタインが如何に雄大なる遠征を遂げたことであるか！世界のアインスタイン研究者が呆然としてゐる間に、否アインスタイン自身が呆然自失してゐる間にアインスタインが如何に雄大なる遠征軍を指揮したことであるか！政治の倫理化運動とは一つの殖民地、アインスタイン遠征軍が日本に

獲得したところの赫々たる戰勝の記念であつたのである。

相對性理論に基づくところの政治の倫理化！ 何といふ高遠な思想であるか！ 高遠の理想によつて一世を煙に卷いたところの早稻田の大學政治家が逝いてから第二の早稻田的大政治家が出現したのである。然り第二のシヤアラタン、第二の山師醫者。

六

科學が政治に與へるところの影響については私はもとよりこれを否定してゐるのではない。今日の社會が一つの科學的産物であると見るところの私は今日の政治がまた一つの科學的産物であることを否定するものでないことは勿論である。

今日の社會、そして今日の政治が、科學の發達を離れて成立しうると考へるがごとき如何なる想像も許されないのである。それは自然科學の發達から生れたところの直接の産物、直接の効果であることにおいて一つの科學的社會であり、一つの科學的政治であるといふことができるのである。社會學が科學たりうるかではない。政治學が科學たりうるかではない。汎く社會學なるものが科學たりうるかではない。今日の社會、今日の政治の歴史的意義についていふ時は、それはたしかに科學的社會であり、科學的政治である。一々の科學の發展が今日の社會における一々の發展であり、若しくは今日の政治における一々の發展でさへもありうるのである。

最近の科學はわれ〳〵に何を敎へるか。科學は今やその最後の段階へと近づいたのである。科學は科學自らの發展によつて唯物主義の城廓を捨てつゝあるのである。物質が終局の要素であるとなしたところの舊物理學が終りを告げて科學は物質の城廓を明け渡さなくてはならなくなつてきたのである。ジュウル、マイヤア、ヘルムホルツ等のエネルギイ恒存則によつてエネルギイが實體の位置を占めてきた以上、自然科學に基くところの唯物主義の不可能であることは科學自らの力によつて證明されたに相違ないのである。科學が哲學に影響し、新らしい哲學がわれ〳〵の生活を支配しなければならないことは勿論である。新らしい哲學は既に着々われ〳〵の社會において準備されつゝある。生命哲學のもろ〳〵の流れは既に新らしい時代に向つての芽生えでもあり、豫言でもある。われ〳〵はこゝに科學の究極において世界の變化を豫知し、豫言することができるのである。新らしい時代は決して遠い彼方であると私には思はれないのである。

けれども豫言は豫言である。それの實現が遠き彼方であるに

せよないにせよ。豫言は豫言であり、詩であり、未來であり、そして今日ではないのである。われ／＼は明日に對する豫言によつて今日を指導することを常に忘れてはたらないのであるが明日への豫言をもつて今日への認識を混同してはならないのである。否、今日に對する認識からして明日への豫言が可能である。今日への認識が存在することなくしては明日への豫言は不可能である。今日への認識と明日への豫言とによつてはたゞに今日に對する理解のうへに誤謬を導くばかりではない。また實に明日への豫言を不可能ならしめるのである。

七

私は今日の社會は一つの科學的社會であり、今日の政治は一つの科學的政治であるといふた。社會は今や科學社會である。政治は科學政治である。哲學は科學哲學である。そして疑ひもなく人々は科學人である。昔の信仰人に對して今日は科學人である。然り昔の神の子孫に對して今日は猿の子孫である。猿猴が、科學が人々の行動を規律し、人々の信條であるばかりではない。人々の社會生活はそれによつて、成立し、それによつて維持されてゐるのである。中世の社會が信仰なくしては成立しえなかつたであらうやうに、今日の社會は科學なくしては成立することができないのである。それは最早や血族によつて成立してゐるのでもなく、地域的共同によつて成立してゐるのでもなく、若しくは歴史の共同によつて成立してゐるのでもない。テンニイスの言葉でいふならばそれは最早やゲマインシャフトではないのである。現代社會に對する批評は根本においてその點から出發しなくてはならないのである。この點から出發したいところのあらゆる批評は認識の不足を證明するほかの何ものでもないのである。

今日の社會は最早やゲマインシャフトではない。從つてそれは倫理社會ではないのである。ヘエゲルのしたごとくに社會をもつて、若しくは人間の共同生活體をもつて倫理の實現であると見ることは今日の社會においては時代錯誤である。再びテンニイスの言葉でいふならば今日の社會はゲマインシャフトではなくしてゲゼルシャフトであるからである。一つの利益社會である。一つの經濟社會である。一つの科學的社會であるとゝもに一つの經濟社會である。科學的社會であるがゆえに經濟社會である。こゝに社會の本質は倫理の實現から經濟の實現とに變つたのである。こゝに社會の成立は倫理觀念によつてではない。經濟觀念によつてである。科學的倫理といふことは不可能である（ポアンカレ）ごとくに、Sittliche Gesellschaft といふこと

は不可能である。ヘエゲルの國家哲學に於ける致命的誤謬は實に倫理的社會と經濟的社會の混同であつたのである。倫理的社會の理想をもたらしきたつて今日の經濟社會に於ける規定と看做し、神の子孫の研究によつて直に猿の子孫を讃美したところに、われ〳〵は彼の國家哲學における致命的缺陷が認識の缺乏といふことに存することを知るのである。然り認識缺乏である。ヘエゲルの國家哲學が今日の世界において全然廢物となつてしまつたといふことは實にこの認識缺乏からきたるところの時代錯誤の結果であるといはなければならないのである。

八

廢物にもまた拾ひ手がある。ヘエゲル哲學の廢物にもまた拾ひ手がある。政治の倫理化運動なるものは自ら新理想主義であるといふてゐる。新らしい科學の立場に立つところの新らしい理想主義だといふてゐる。けれどもそれには何等の新しいものもない。古るき革袋に古るき酒が盛られた。ヘエゲルの國家哲學に於ける最惡なるものが復活されたのである。認識否定のシヤアラタニズムである。それは如何なる新理想主義であるのでもなく、如何なる科學的の根據に立つてゐるのでもない。ヘエゲル的舊理想主義の紙屑である。アインスタインの紙屑ではなく、ドリイシユ的エンテレヒイの新らしい紙屑でもない。單にヘエゲル哲學の古色蒼然たる紙屑であるにしか過ぎないのである。

九

試みに政治の倫理化運動なるものが何を要求するかを見よ。政治は力にあらず、倫理的要求であるとなすところのものが如何なる高き倫理を要求してゐるかを見よ。

彼は人口問題を說く。人口問題について彼は強く國民の注意を喚起してゐるのである。彼の叫びかけはたしかに成功である。朝野の政治家の諸君が彼に追隨して今や先を爭つて人口問題を彼等の旗竿に掲げたからである。

日本は實に一年に七、八十萬の人口增加である。昨年は八十七萬の人口增加であるといはれるのである。この人口增加を如何にすべきか。マルサス的偏見が先入してゐるところの現代人を人口問題についての正しき見解に引きもどすことは極めて難事である。けれどもそれはマルサス的偏見をとりさるところの難事である。人口問題そのもの、難事ではないのである。

人口問題といはれてゐるものは一つの僞瞞である。政治的僞瞞である。それは一つの原因ではなくして結果であるといふこ

とに思ひ及ぶならばこの問題は直ちに解決されるのである。

私はここに人口問題を論ずることが主眼でないから、それについてはたゞ原因では無くして結果であるといふことを指摘するだけで充分である。結果を原因となし、マルサスの幽靈を手品として、近代の帝國主義が如何にこの問題を利用したことであるか。それによつて領土が擴張され、これによつて軍閥が如何に勢力を伸ばしたことであるか。十九世紀的ビスマーク主義の紙屑！

然りビスマークの紙屑である。政治の倫理化といはれるものは遂にビスマークの紙屑である。彼が聲を大にして日本の日本、世界の日本、そして遂に「日本の世界」を高調するのを見よ。それは十九世紀においては脅威である。十九世紀の總決算としての世界戰爭に至るまではそれはたしかに一つの世界的脅威であり、現實であり、力であつたのである。けれども今日は最早や幽靈である。紙屑である。廢物である。狂氣である。

然り十九世紀の紙屑である。廢物である、狂氣である。

再び紙屑が拾ひあげられた。曰く政治の倫理化であると。何といふ素晴らしい倫理であるか。倫理の廢物、紙屑の倫理、狂氣の倫理！

權力への意志が再び倫理の壇上にもちきたされたのである。支配への陰謀が再び倫理の玉座にと据えられたのである。

政治は力なりといふことを否定すると稱する運動の旗竿にビスマーク的帝國主義の廢物が掲げられてゐるところのこの狡猾古狸の正體を見よ。

十

狸は遂に尻尾を出さなければならない性質のものである。時代錯誤といふことの致命的欠陷はそれの時代的不可能といふことに存在するのである。それが他の時代においては如何に美しい思想であると認められたにしても、若しくは遠き將來においてそれの實現が如何に望ましいことであるにしても、現代において不可能なる思想は悉く時代錯誤である。それの原因は時代に對する認識の不足といふことに歸着するのである。それは最早やたゞなる思想の相違といふことによつて辯護することはできないのである。それは純然たる Irrtum である。

十一

社會に對する認識の不足からして――それは Irrtum であるが――政治に對する認識の不足が生ずる。政治に對するもろもろの期待も政治に對する認識の不足から生ずると私はいふ

た。實に政治に對する不平は政治に對する期待から生れたのである。誤謬の期待から生れたのである。それ自體一つの Irrtum なのである。

政治に對する Irrtum が如何にわれ／＼の生活を支配したことであるか。物質がわれ／＼を支配したとともに觀念がわれわれを弄んだのである。われ／＼は政治に對する Irrtum によつての支配を永遠化されるがごとき物質的環境のうちに生活したとともに、またかくのごとき觀念的ミリユウのうちに生活してきたのである。

われ／＼は今や政治の奴隷である。たゞに物質的にそうであるばかりではない。觀念的にわれ／＼は政治の奴隷である。政治的社會主義が無産階級の精神を捉え、そして更に農民の精神をさへ捉えてゐるところの今日において、われ／＼は實に政治の永遠の奴隷であるかのごとくに見えてゐるのである。

サンヂカリズムと科學的無政府主義とは明らかに失敗である。それは實際運動として力でありえないばかりではない。それは最早や一つの理想としてわれ／＼を鼓舞することはできないのである。否、それは最初から失敗であつたのである。それは一つの抗議としては、一つの不平としては、一つの精神、然り一つの文明病としては成立することができたのである。けれどもそれには最初から何等の積極的理由はなく、可能の餘地はなかつたのである。一つのセンチメンタリズムである。そのこと自體矛盾である。科學的倫理といふことが成立することのできないやうに、若しくは sittliche Gesellschaft といふことが成立することができないやうに、科學的無政府主義といふことも、サンヂカリズムといふことも、そのこと自體不可能である。實に政治的社會主義が政治に對する認識の不足（過當の評價）を意味してゐるごとくに、サンヂカリズムと科學的無政府主義もまた政治に對する認識の不足から出發したのである。

サンヂカリズムと科學的無政府主義とは何ゆえに失敗したか。現代社會においては無政府主義的なる如何なる要求も可能ではないからである。また現代社會の肯定においての無政府主義的なる要求はそれ自體矛盾であるからである。

現代社會は一つの經濟社會であるばかりではない。一つの科學的社會であるばかりではない。また實に一つの政治的社會である。否、それが科學的社會であり、經濟的社會であり、ゲマインシャフトでなくしてゲゼルシャフトであるがゆえに、それは政治社會であるのである。政治はこゝに偶然ではない。必然である。政治は發明されたのでない。要求されたのである。政治が先行したか、經濟が先行したかと問ふことは愚ろかである

政治と經濟とは同時に發生したのである。政治社會と經濟社會とは同時に發生したのである。何故ならばそれは二つの獨立なるものではない。それは楯の兩面であるからである。サンヂカリズムと科學的無政府主義とは楯の一面をとりながら他の一面を拒んだ。政治社會と經濟社會との有機的結合の事實を忘れたのである。現代社會の本質に對する認識の欠乏が政治に對する認識の欠乏へと導いたのである。

十二

今日の社會においては政治は要求されてゐると私はいふた。經濟社會においては政治は常に要求されてゐるのである。科學的、機械的、都會的、大社會的、征服的、階級的ゲゼルシヤフトにおいては政治は常に要求されてゐるのである。否、政治はたゞに階級征服といふがごとき機能において必要であるばかりではない。勿論かくのごとき社會、政治を要求するところの社會においては階級は必然的に存在するのではあるが、政治は階級的征服、若しくは謂ふところの階級獨裁のためにのみ存在の理由をもつてゐるといふことはできない。それは階級的であるとともに、都會的、經濟的、商工業的、大社會的、科學的、機械的社會であるがために要求されてゐるのである。試に商工業主義の一つをとつて見る。今日は勿論職人、親方、丁稚の時代ではない。それは科學的であり、機械的であり、大經營的であり、從ひて大社會的である。かくのごとき社會は本質において共同的、有機的、自然的統一ではない。それは何等かの外部的、機械的な力によつて統一されなければならないものである。それは自身において統一されてゐるのではない。外部的、機械的な力によつて統制されなければならないところのものである。かくのごとき統制が外部的、機械的に存在しなくてはその社會は成立することができないのである。たゞに混亂爭鬪であるばかりではない。その社會は成立することができないのである。その外部的統制が法律である。法律が權力を伴つてゐることは勿論である。政治はこゝに不可避である。商工業主義の社會においては政治は常に不可避である。それはそれ自體統一でないことの理由によつて政治を不可避的に要求するのである。經濟社會がそれ自體統一でないといふの理由によつて政治が要求されてゐるのである。否、かくのごとき社會においては政治的行動と經濟的行動とを區別することさへもたゞなる觀念的遊戲である。政治的行動とは經濟的行動のある段階である。それは集團的經濟行動であるといふことができるのである。サンヂカリズムの謂ふところの經濟的行動なるものは、それを議會政治から

區別することはできるであらう。けれどもそれはそれ自體政治・ある。である。動機においても、目的においても行動自體においても、それは純粹に政治である。經濟的行動といはれるものは政治の一つの方法、そして恐らくはより高き政治の方法であり、そして政治時代の終局を示すところの政治の一方法である。

ギルド社會主義と雖どもまた一つの錯誤である。勞働組合はギルドではない。勞働組合は近代社會と結合し、そして近代社會**とのみ結合する。ギルドは中世紀と結合し、そして中世紀的社會**とのみ結合する。近代社會においてギルドを復活せんとするナショナル・ギルドは一つの錯誤である。National—Guilds といふこととそれ自體が錯誤である。それは永久不可能である。それは頭腦の混亂といふことを示してゐるほかの何ものでもないのである。ナショナル・ギルド社會主義の國家觀なるものはこゝにおいて最も不可思議なものである。兩頭の蛇である。現代社會の本質について全然理解を欠いてゐるのである。現代社會が必然的に政治を要求してゐることを忘れてゐるのである。そして更に近代的・都會的・經濟的・商工業的・機械的・科學的・大社會的社會が強大なる權力、如何なる時代においてよりも強大なる權力、そして今日は最早や何人もその權力から逃避することが不可能であるところの權力を要求してゐることを忘れてゐるので

自由に對する迷信が常に政治に對する認識を錯誤に導いてゐる。經濟社會においては自由は不可能であるといふことについて人々は眼を閉くことができないのである。大社會において自由が存在するとなすが如き社會學者は大社會についても自由に**ついても何等の理解をもたないことを示してゐるにしか過ぎないのである。否、政治的自由、若しくは經濟的自由といふがごときことはそれ自身錯誤であるといふことを人々は忘れてゐる**のである。

十三

われ〳〵は最早や政治を離れて經濟を語ることもできないし、また經濟を離れて政治を語ることもできないのである。政治と經濟とは堅く結合する。二つにして一つである。政治が常に經濟的社會においてのみ存在するといふてゐるのではない。非經濟的職分においても政治を想像することは全然不可能ではない。けれどもかくのごとき政治は廢止することができる。經濟的社會においては政治は廢止することができないのである。それ自體を廢止しなくては政治を廢止することはできないのである。かくのごとき社會においては政治は經濟のために存在

しこれ以外の目的は存在しないか、少くとも附隨的である。政治と倫理とが混同されたのは昔の政治學である。マキアベリイの後においてはかくのごとき政治學は最早や時代後れである。彼は政治人なるものは斷乎として倫理的觀念から區別したのである。アリストテレスさへも既に政治と倫理との區別を試みてゐる。夫は勿論全然別個のものとなしたのではない。けれども政治と倫理との區別は既にアリストテレスに始まつたといふこも差引ないのである。政治の倫理化運動なるものはマキアベリイ以前であり、そしてアリストテレス以前でさへもあるのである。

十四

政治と倫理とが混同されてゐた時代の存在したことはたしかである。政治は常つてはその高き觀念において倫理にと導かれたのである。凡音。生於人心者也。樂者。通於倫理者也。審音以知樂。審樂以知政。こゝに治道備はつたのである。昔の八政といはれたものは深く倫理と結合してゐたのである。租税は祖先と結合し、公けといふことは共產を意味し、社稷といふことは神と結合してゐたのである。王道蕩々といはれるところのものは高き倫理である。けれどもそれは最早や今日の意味においての政治ではない。政治と倫理との結合であるといふよりは、それは倫理である。王道は遂に政治ではない。無政治である。無支配である。無領土である。然り無政治であり、無支配であり、無領土であることが王道の本質である。道之以德、齊之以禮。孔子の不徹底をもつてしても遂に窮極において無政治にと達到したのである。亞細亞おける政治の觀念なるものは實にかくのごとき高き觀念、然り無政治の世界であつたのである。大上下知有之。これ實に亞細亞における政治思想の最高所である。そして實に亞細亞文化の特色であり、誇りであり、西洋文明が遂に到りえないところの高き境地である。それは亞細亞的頭腦のみが到りうるといふのではない。亞細亞的社會においてのみ到りうるといふのである。亞細亞的生活においてのみ到りうるといふのである。政治と倫理との結合といふことは近代社會の超克においてのみありうるといふのである。經濟的社會の超克においてのみありうるといふのである。政治的社會の超克においてのみありうるといふのである。汎く文明の超克においてのみありうるといふのである。近代社會は非倫理的社會であるからである。經濟的社會は非倫理的社會であるからである。難得之貨を求むることにおいて結合するところの經濟的社會は非倫理的社會であるからである。倫理的社會が終りを告げて經濟的社會が實現されたのである。テエゼとアンチテエゼで

ある。社會は益々經濟化したのである。即ち非倫理化したのである。文明の歴史は非倫理化の過程である。近代社會における政治の需要は社會の非倫理化において存在する。否政治を要求するところの社會とはそれ自體非倫理的社會である。非倫理的社會なのがゆゑに政治を要求するのである。倫理的目的を高く掲げて立つことは、眞面目な考察においては、政治の超克においてのみなしえられるところのものである。政治の最高の目的は天下神器の理解においてのみ理解することができるからである。政治過程は倫理化の過程ではない。非倫理化の過程であるからである。然り存在するものは政治の倫理化ではない。政治の非倫理化である。繰返していふ、汎く文明の過程は非倫理化の過程なのである。

十五

私はこの論文の最初において代議政治に對する非難が今日の世界の通り言葉となつてゐることを述べた。代議政治の不信は今日は世界的流行である。獨り無政府主義者、獨りサンヂカリスト獨りソキエチストがこれを唱へてゐるのではない。科學的無政府主義とサンヂカリズムとは今日はそれ自身は亡びたといふていゝのである。ソキエトはまたそれ自體において一つの代議政治である。それは獨裁的代議政治のほかの何ものでもないのである。露西亞の共產主義のあるものは政治を鬪爭し、鼓舞を鼓舞し、權力を鼓舞し、暴力に鞭打つたほかの何ごとをもなしとげてはゐないのである。けれどもそれは政治に對する一般的不信用のためには、彼等の期待に對してではあるが、役立つたのである。獨り饒舌、無能の代議政治に對してばかりではない。カリギユラ的獨裁政治に對しても、自由主義の政治に對しても、反動の怪物に對しても、汎く政治に對する不信用といふことが時代の特長となりはじめてきたのである。自由主義と反動派と、饒舌とカリギユラとが互に戰ひつゝ、互に共倒れの道に苦悶してゐるのである。今日の時代が政治の要求から離れてゐるといふのではない。今日は益々政治を要求してゐる。アルコオル中毒が益々アルコオルを要求するごとくに、政治中毒の時代において政治は益々要求されてゐるのである。政治は科學的無政府主義とサンヂカリズムの攻撃によつて倒れるものではない。政治は中毒の過程において彼自身の進化を行つてゐるのである。こゝは倫理的社會の豫言は最早や空想ではないといふのである。倫理的社會は既に用意されつゝあるのである。王道平々は決して遠きに非ず。世界の苦悶の意義に徹底するものゝ眼においては、まことの王道平々は決して遠きに非ず。

小山内薫著

戯曲集 森有禮

定價金壹圓參拾錢
送料金拾七錢

新刊

本書は、我が新劇運動の先覺者として、劇作に演劇に、不斷の努力と奮鬪を續けられつゝ著者の近業の中より、會心の作五篇を蒐められたものである。氏の作は、巧緻に陥らず、小手先を使ひず、正面より堂々と立向ふ所に、その長所を稱へらる。又何れの作を取上ぐるも、氏が劇に關する含蓄の豐富よりして、幾多の暗示を與へる。劇に志す人士の缺くべからざる良書として薦む。

（内容）＝1、森有禮（五幕） 2、吉利支丹信長（一幕） 3、ある敵討（四幕） 4、奈落（一幕） 5、財（一幕）

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

佐藤春夫著

定價貳圓五十錢
送料貳十錢

童話集

蝗の大旅行

上品で、多分の藝術味が盛られてあると同時に、面白さこと此の上なく、一度繙くと大人も子供も不思議な力に索き付けられて、思はず全卷を終へてしまふのは、佐藤氏の此の童話集です。童話も亦藝術の一樣式であるが、佐藤氏は玆に於ても亦十分な成功を示して居る、子供の教養のため家庭の悦樂のため廣く此の書を推奬します。

（目次）1、どうして魚の口から一枚の金が出たか。2、日光異聞。3、花と風。4、おもちやの蝙蝠。5、魔のもの。6、笛吹と王との話。7、鸚鵡。8、蝗の大旅行。9、實さんの胡弓。10、私の父が狸と格鬪した話。11、私の父と父の鶴との話。12、わが最初の記憶。13、たからもの。14、こんな美しい町があつたら！

最新刊

佐藤春夫著　童話　ピノチオ（七版）　價壹圓八十錢　送料十八錢

佐藤春夫著　窓展く（六版）　價貳圓　送料二十錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

藝術の社會的地位に就いて

(遊歐雜記——歸來の一)

阿部次郎

兩性關係の嚴かさと深さとを體驗するためには、性的感情の處女性がなければならぬ。この感情の純潔が濁されるとき、吾々の性生活は假令その形態に於いて千態萬樣の變化を現することが出來ても、其處には常に最も本質的なものが——「なくてならぬ一つの事」が缺けてゐるであらう。かう云ふのは、固より肉體的の意味に於ける處女や處子のみが戀愛の祕奧に參することが出來るといふ意味ではない。男で云へば、ドン・ホアンのやうな者にも猶、性感情の處女性が保持されてゐることは可能である。さうして女で云へば「あだし仇波、寄せては返る浪、淺妻船のあさまし」く「枕恥かし」き遊女のうちにも、「勤めのうき一節ならば、とくも消えなん露の身の、日かげしのぶのよる〱人に、逢ふを勤めの命」とする誠の戀があり得ることは、德川時代の公娼制度といふ高價な實驗が證明するところである。故に眞正の戀愛にとつて必要なのは、肉體の處女性ではなくて、性的感情の處女性——性生活の神祕を弄ぶに堪へぬこゝろにあると云はなければならぬ。さうしてこのこゝろが鮮かに動き出せば出すほど、人はおのづからにして多淫を愧ぢ、賣

笑を營み、肉體の處女性をも亦尊重するに至るであらう。ドン・ホアンも遊女も、この慚愧と痛恨とを感ずることによつて、始めて性的感情の處女性の存在若くは復活を證明することが出來る。深刻な内心の矛盾なしに、人身を賣り若くは買ふに堪へるものは、彼がそれに堪へ得る限り、その性感に本質的な缺陷を持つてゐるのである。この意味に於いて、放縱そのもの、賣笑そのものは、原理上性感の處女性と矛盾する。況して賣笑を公認する制度が、國民の性的純潔を損し、性感の處女性を麻痺させ、放埒無恥の習風を奬勵することは云ふまでもないであらう。徳川時代に於けるこの意味の墮落は、感情の表現を使命とする藝術に就いて、歴々として指摘することが出來る。徳川文藝の大部分が現代に對する教養の資料として通用し難い理由には色々あるが、就中それは戀愛觀の低劣な點に於いて特に警戒されなければならぬ。性慾の美化から眼を轉じて、この墮落の性質と經過とを見るのが、今や吾々の新しい課題である。

併し私がかういふのは、性的墮落の責任を公娼制度にのみ負はせようとするのではない。公娼制度は寧ろ前代に於ける性的粗野の結果でありその墮落の徵候である。それは朽木から發生せる一種の菌類として、更にその朽木の腐朽を早めたに過ぎないのである。凡そ歴史を形成する要素として、個人及び制度が、自然の勢を推進し、轉化させ、若くはこれに逆行することによつて意外の新生面を開く可能性を持つことを認め得ないのは史眼の曇りであるが、その反面に於いて、個人及び團體の事業には、それを可能にし、これに方向と基礎とを與へ、彼の欲すると否とに關せず彼の事業の歴史的意義を決定するやうな社會の大勢があることを認識し得ぬ者も亦同樣に(寧ろ前者以上に)狹隘である。慨世の士大宰春臺が、豐後節の流行を嘆じて、「此淨瑠璃さかりに行はれてよりこのかた、江戸の男女淫奔する者數を知らず、元文の年に及びては、士大夫の族は言ふに及ばず、貴き官人の中にも、人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にても、姦通するたぐひ、いくらといふ數を知らず、是れ正しく淫樂の災なり」と云つてゐるが如きはその一例である。正

德享保のころ、一中節の中から豐後節が生れ出たのは如何なる時代的要求によるか、元文に至つてそれが江戶に盛行し得るためには、凡そ江戶人の生活に如何なる精神狀態が準備されてゐなければならなかつたか、春水の言葉はこれ等の問題に對して何の觸れるところがない。故にそれは慷慨家の警世言として相當の見識と情熱とを有するに拘らず、歷史的認識としては極めて一面的であることを脫れないのである。さうしてこのやうな一面觀の最も悲むべき點は、その情熱が當面の社會現象に即してこれを導く方面に活用されずに、離れてこれを呪ふ方面にのみ浪費されるところにある。固よりこの類の慷慨と雖も、その當時にあつては、狹隘によつて生ずる銳さによつて、社會の意識に興奮と刺戟とを與へる効果がなかつたとは云はれないであらう。併し今日の吾々から云へば、德川時代は、吾々の呪咀憤慨を誘ひ出すにはあまりに遠い時代である。吾々の如何なる絕叫も、墓の彼方の世界を警醒する力は持つてゐない。故に私が玆に求めようとするところは、たゞ歷史的因果の靜かな認識とこれに聯關する現代の問題の考察とのみである。

公娼の設置が——而も資本主義的に組織された遊廓としてその肉體營業を公認するやうな制度が——漸次社會生活の各方面に浸潤して、それが押しも押されもせぬ社會的勢力を持つやうになる前に、日本人の性生活とこれに伴ふ性的感情はどんな狀態にあつたか。その問題を、織田豐臣時代、戰國時代、室町時代、鎌倉時代、平安時代、奈良時代、及びその以前と、遡源して行けば際涯がない。今これを戰國以後に限定して、その大體を瞥見しようとするとき、吾々は第一に、僧侶と武人との間に於ける衆道の流行が久しき淵源を持つてゐる事實と、第二に、京畿に於ける官許の遊廓が既に前時代に始つてゐる事實とを看過してはならぬ。そのうち後者の社會的浸潤は、德川時代に入つて、一般に文化の平民化と共に始めて完成されるが、前者がその時既に重要な社會的事實として成熟してゐたことは、德川時代最初の好色文學が主として男色物であつたことによつても想見し得るであらう。さうしてこの風習に伴ふ性的無恥が既に前代に於

いて甚しかつたことは、その時代の文學に就いて幾多の例證を擧げることが出來る。その最も剴切な一例を見ようと欲する者は、近江源氏佐々木氏の末裔、彼自身も亦戰功ありし武將、山崎宗鑑が、永正十一年（西暦千五百十四年、徳川家康の將軍宣下に先つこと八十九年）に編んだと云はれてゐる「犬筑波集」を一讀するがよからう。この野氣とあらさとを持前とする武人、不羈洒落なる俳諧法師は、其處で、人間の性生活の（特に衆道生活の）極めて露骨な描寫を敢てしてゐるのである。そのうち

女夫ながらや夜を待つらん

まことにはまだ打とけぬ中なほり

穴を覗ける親を持ちけり

といふやうな世相圖（ジャンル）は、まだしも品のいゝ、引用に堪へる部分である。彼は單に人間の性生活を性生活として描寫するのみならず、又自然をも色情的（衆道的）に觀察する。「春風にふらめきわたる松ぶくり」も、水鳥の柔毛（にこげ）を傳ふとくとくの筆も、共に彼によつて衆道的に見られることを脫れないのである。固よりこのやうな徵候を直ちに性的頽落と解釋するのは、充分に妥當であるとは云へないでもあらう。それは寧ろデカメローネやヘプタメロンやシエークスピーアの戲曲の或部分のやうに、「性的粗野、原始的無恥」と解せられることを至當とするでもあらう。併し性生活を好んで、翫弄し、滑稽化する傾向は、此處に充分にその芽を伸ばしてゐるのである。

「醒睡笑」は淨土僧安樂庵策傳が、當時の名判官、京都所司代板倉重宗の所望に任せて書き贈つた滑稽小話集である。當

本についてゐる重宗の奥書に「元和元年の頃、安樂庵咄を所望いたし承候へば、別而おもしろく存るに付て、御書集候て草子にいたし給候やうにと申候處、一兩年過、八冊に調給候。紛失可仕かと存、奥に書付置也」とあると云へば、その編輯の年代は江戸に於いては吉原創始の直前、京都に於いては六條柳町の遊廓が全盛な時代に相當する。この書は、諸侯の前に話され、諸侯のために書集められたものとして、當時の上流社會にどれほどの程度の滑稽が許容されてゐたかを見るために興味ある資料である。大體から云へば、其處には後世の落語に見るやうに色情の臭ひが漂つてゐるとは云へない。それは比較的に自然な、無邪氣な、非技巧的なものである。さうして夫婦以外の女色や遊女に關する題材は全然取扱はれてゐないと云つてもよいほどであるのに、衆道に關する滑稽はなほ八卷中の一卷(特に卷之六)を占めるほどに多く集められてゐるのである。固より卷之六の第一節——

「叡山西塔に、兒達よりあひて、おもひ〳〵の物がたり時うつりしに、一人がいへるは、この若道といふ事は、昔たれが企み出したるぞやと、さもうらめしさうに問はれけるを、此道は高野の大師弘法といふ人、これの御影堂に殊勝顏して居らるゝ坊主の、唐までありき廻り、かやうの雜儀を仕出されたりと語る者あり、中々憎やと思ひしが、ある朝院主も同宿も留守なりしに、小法師が兒をよびて、此お佛餉を、お大師へ參らせたまへと敎ゆる時、彼兒持ちゆきて、さあこれ食うて、まつと何ぞ企めと。」

といふ話が示すやうに、其處には、この不自然な生活の犧牲にされる少年の、生活の全體を思はせるやうな、おのづからなる哀れの籠つた滑稽も少くはない。さうしてその大部分はこれ等の哀れな兒達の、色氣よりは食氣の話であるが、併し所謂「下戸」に關する露骨な說話も亦少からずそのうちに交つてゐることと、而もそれが「×××××××××」を放つことゝ(この音が又滑稽の一大主題となつてゐることは、代々の滑稽文學を歷觀する人の容易に聽取するを

得るところである）と殆んど同樣に、輕々と平氣に取扱はれてゐることを、吾々は看過することが出來ない。これを例證するために、既に公刊を許されてゐる活版本（滑稽文學全集第九卷）のうちから、最も甚しいものをとり出すことは、私の敢てするに堪へぬところであるが、たゞ次の一節のやうに滑稽のうちに自然の哀情を含んだものは、此處に引用することを妨げないであらう――

「見といねたるに、法師如何ありけん、鬮を一つすひ拔きたり。肝をつぶし、暇乞までもなく逃げて歸り、靜に火をとぼして見れば、麥飯にてぞ候ひける。ふたしなみなお兒の有樣や。」

『醒睡笑』が遊女に關する說話に緣遠いのは、それが實際多くの笑語を生み出すほどに社會生活に浸潤してゐなかつたためであるか、或ひはこれに關する笑話は僧侶が諸侯の前にすることを許容されぬほど下品なものと考へられてゐたためであるか、その理由は孰れにあるとするも、兎に角衆道の方は、當時の上流の武人にとつても、家常茶飯事であつたことは、この書によつて容易に看取することが出來るであらう。さうしてこのやうな性的無恥が女色の方に應用されるとき、遊廓を官許するやうな現象が行はれることは少しも怪むを須ゐないのである。このやうな事實を背景として考へれば、江戸に於ける公娼制度の出現は寧ろ風紀廓淸の第一階段――少くとも風紀廓淸の努力の一つのあらはれとして解釋せられ得るであらう。然るに事實上それが性的墮落奬勵の結果を生じたのは、人間の知慧のあさましさ、誠に是非もなき次第である。

併し公娼制度が性的墮落奬勵の結果を生じたといふ言葉には少しく註釋を要する。それは出發點となつた無恥が、自然にして素朴なるがまゝに益々その程度を增して行つたといふ意味ではない。本來公娼制度は賣笑の制限を目的とするものでなければならぬ。其處には既に、私娼を無制限に放置する以上の倫理意識が働いてゐる。とは云へ、制限は一面

に於いて、集中である。集中によつてその誘惑の力を倍加することである。元吉原開始の始め、市井の男子がどれほどその珍らしさと華かさとによつてそゝのかされたかは、前に(第二十七節)引用した「東海道名所記」の一節によつても想見し得るであらう。遊里の面白さは薔薇色の夢として男といふ男の心をゆすぶる。かくて春を購ふの習慣は次第に社會一般に浸潤する。併しそれは必ずしも其處に遊ぶ男の心が從前に比して一層放埒に無恥になつたといふことをば意味しないのである。文藝に反映したところによつて判斷すれば、事實は寧ろその反對であつた。從來の無恥には流石に羞らひの影がまじつて來るが、その羞らひは無恥を征服する方向をとらずに、その無恥の生活を精妙に、文化的に裝飾する方向をとつて行くのである。一般に倫理的意識が進歩するにつれて、好色は從前のやうな自然な無邪氣さを失ひ、それは次第に意識的になり、意識の分裂を伴ひ、云はゞ男子の放埒に一種の理論的根據を與へる必要を感じて來る。それは感覺に於いて益々纖細の度を增すとともに、意志の態度に於いて愈々それを面白づくに弄ばうとする傾向を生ずる。一言にして云へば、內心の無恥は、無恥なるがまゝに、多くの着物を着重ねる必要に迫られて來たのである。出發點の無恥が墮落といふ言葉に置きかへられる所以はこの點にある。この間の消息は、墮落といふ言葉を更にデカダンスといふ言葉に代へることによつてもつと明かになるであらう。好色は、その本質に於いて無恥なるがまゝに、辯解がましく、纖細に、誇張的に、思はせぶりに、技巧澤山になつて來るのである。固より好色の流れがこのやうな傾向を追ふこと著しくなるにつれて、悲痛な、絕望的な、赤裸の戀愛は、性的墮落の本流を形る通人の文藝と次第に分離する。併し吾々の差當り問題とするところが德川時代の性的墮落にある限り、このやうな狹義の戀愛藝術は暫く視野の外に置かれなければならぬ。

通人文藝を觀察するために、私は上來手操つて來た糸を放たずに、「醒睡笑」のあとを追ふ笑話落語の類の考察を續け

ようと思ふ。後世の笑話と雖も、その滑稽が悉く色情的背景を持つてゐるのではない、綜合に於ける全體の色調（トーン）といふやうな意味で、色情がこれ等の文學の基調をなしてゐると見るのは、事實を無視した誇張である。併し色情に關する題材が次第に増して來てゐることと、その描寫が次第に微細になり、その取扱ひが益々ひねくれてピカントになつてゐることゝは、如何にしても爭ふことが出來ない。凡て短小な形式の滑稽文學が、滑稽を結晶する焦點を求めて、突如としてその世界に矛盾を點出し、而も亦突如としてその矛盾を解決し去る「下げ」（ポアント）を造り出すやうになるのは極めて自然な經過であつて、輕口話の急所が次第に特別の强調を受けて落語といふ形をとるに至つたことは、固より深く怪むに當らないが、たゞ下げに用ひられることによつて、或言葉、或事件、或生活が非常に際立つた印象を與へるやうになることは、記憶して置かなければならぬ。さうして色情の世界は、世が下るに從つて、單に話の途中に於ける描寫が刺戟的になり行くのみならず、又下げに用ゐられて、一層際立つた、ギラ／＼した光を帶びて來るのである。

貞享元祿のころ、京に露の五郎兵衞、大阪に米澤彦八、江戶に鹿野武左衞門が出て、輕口話を民衆化した。彼等の舞台は今や所司代の私邸ではなくて、四條河原や生玉の辻や、中橋廣小路の莚張の小屋である。さうしてこの三人がそれぞれに當時の市井に大評判であつたことは、その頃の文獻を通じて明かに想像し得るところである。中に就いて五郎兵衞の『露のはなし』、彦八の『輕口御前男』などは、大體に於いて『醒睡笑』の舊風を追うて新様の著しいものを見ないが、後世に於ける落語發達の本場、江戶の鹿野の『鹿の卷筆』には、色情的材料に對する特別の偏愛や主観的に滑稽を造り出さうとする作者の機智の働きが重要な役割を演じて、客觀の世界からおのづからなる滑稽を拾ひ出さうとする逸話風な『醒睡笑』とは、既に別様の途を進みつゝあることを看取させる。其處では『濡れのはじまり』といふ人生の最も嚴肅な事實が、考へ得べきうちで最も穢い意味に於いて語源的に解かれる、それは又人體の各部と「世中の諸道具家居

門戸」を比較して、遂に「かんじんの拔道」に至らなければ承知しない。私は比較的に罪の淺いものとして、玆にはたゞ一つの話の梗概を述べることを以て滿足する。話の主人公は南紺屋町二丁目に住居するさる浪人者に仕へて「何やらのかきにかゝりたるやうになま長き男なれば作藏とつけ」られた田舍者である。彼は田舍訛りの片言まじりで、きゝとり難いもの云ひをする男であつた、或日近火のとき彼は屋根に上つて火の見をしながら「さて〳〵臭かつたが道理じや、火が近い」といひ、又「おかみ樣、御用心なされませい、火事は和田倉ちやと申ますが××××ぶらり〳〵とまひります」と云つたと云ふのである。こんな滑稽は穢いのみでなくて又無理押付である。而もこれが男女の聽衆の面前で口演されたものであることを思へば、當時に於ける羞恥心の麻痺がどれほどであつたかを想像することが出來るであらう。

飛んで寛政年間に至つて、落語中興の祖と云はるゝ談洲樓焉馬の作風はどんなものであつたか。此處では落語の下げの形式はもう完備してゐる。說話は相應に委曲を盡してゐるが、その後の長咄のやうに、滑稽の急所に落し込むための前提としては必要のないやうな說話の道草によつて、客を釣つて行くまでには至つてゐない。それは必要な程度に壓搾され、必要な程度に幅を持つてゐて、而も下げの構成に氣が利いたものが多いのである。併しその落語の全體がぴり、と洗練されたものになるにつれて、色情的要素も亦極めて刺戟的、技巧的に驅使される。それは、その露骨なものも、婉曲なものも、最早『鹿の卷筆』のやうな間拔さを持つことが出來ないやうになつてゐる。今彼の編輯した『開卷百笑』のうちから、二三の話の筋だけを拾ひ出せば、嘗て樂屋の風呂番をしてゐた物貰を呼出して、淨瑠璃もどきに節をつけて、裸になつた役者の體形を物語らせる「歲暮、年の市」。雪の夜に吉原行の客を乘せた女駕籠屋が、懸聲ばかりでちつとも前に進まないために、その乘客に「エヽじれつてへ早くやらねへか」と叱られて、「ばからしい」と受ける「女郎のかご」。足利賴兼公から追善のために大川に花火をあげて貰つて滿足だらうと思ひの外、死後も花火をとぼされる恨を

云ひに、上手の道哲の前にあらはれたといふ「高尾」。これ等の落語は、或ひはその叙述の甚しき猥雑によつて、或ひはその下げの厚顔無恥な意味の故に、孰れも此處に引用し得ぬもののみである。尤も後の二者は相應の程度にぼかしをかけられてはゐる。それは空想的な、あり得べからざる夢幻界を描出し來つて、空に憑つて最もデカダンなおちに急轉直下するもの、これを托する世界の夢幻性がその滑稽に一種のとぼけた感じを添へてゐるものである。併しこれ等のつけ合せもその覘ひどころの極めて現實的な卑しさを淸めるほどの力は持つてゐない。現代に生れた男女の過半は、恐らくこの滑稽の意味を領會し得ないであらうが、わからぬこそ彼等の幸ひである。若し不幸にしてその意味がわかつたとすれば、彼が純潔な魂を持つてゐる限り、何よりも先に彼は赤面するであらう。さうしてその次に、彼の綻びかけた笑は直ちに消えて、彼の顔は陰鬱な眞面目な表情をとるであらう。この滑稽に同感して笑ふことが出來るためには、先づ魂の汚れが準備されてゐなければならぬ。『鹿の卷筆』の作藏の話は、魂に格段の汚れがないものでも、習性に多少のだらしなさを持つてゐる人間ならば、兎に角一種の笑を含むことは出來るであらう。併し「高尾」や「女郎のかご」に對しては、性感の處女性が滅びてゐる者でなければ笑ふことが出來ない。その笑は正に地獄に落つる者の笑ひである。德川時代の性的頽落は遂に此處まで來てゐるのである。

併し前例に從つて『開卷百笑』からも、その見本を引用して置かなければならないとすれば、私は寧ろ吾々の現在の問題に直接の交渉あるものを避けて、たゞ一般にその苦味走つた作風を想見させるものを擧げて置きたい。「百夜車」（永魚亭叅石作）の一小話は、說話の全體から見て上乘の作とすることを得ないが、その下げに用ゐられた皮肉は、全卷のうちで最も調子の高いものに屬してゐるであらう――

「今は昔、小野小町は美人の名高く、歌は世に知れる所なり。されば戀慕わざる物なし。中にも深草の少將、思ひの

たけを知らせんと、雨の降る夜も雪の夜も通ひて、車に榻に其數を書て、九十九夜通ひしかど、此戀叶わずして思ひ死せられしと云ふ取沙汰、女中連これをきゝ、小町のおそばへ參り、少將さまには終にお果なされましたといへば、小町きいて局を呼給ひ、コレ其惣帳を出して、少將どのゝ所は消しておきや」。

結末を此處に落して行くためには、相應に錬り上げられた理知の冴えがなければならぬ。さうしてこの理知の冴えが心情の無恥と結合して色情界の題材に應用されるとき、其處には前に云つたやうな頽廢的な滑稽文學が生れて來るのである。德川時代の性的頽廢は、凡そ性的墮落のうちでも一種特別の方向をとつた墮落である。さうしてこの特殊の方向を決定した原因は、單純に公娼制度そのもの（並ひにその根抵にある性的無恥）にのみ求めることが出來ない。然らばその主要なる原因は何處に置かるべきであるか。茲に於いて德川時代の儒學思想は、實奚とその責任を分つべきものとして、吾々の考察の前にひき出されなければならぬ。

女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬことなり。此道に親炙せば人をもて傳ふべし。惣て男女の道は嗣を立る而已なり。流蕩すれば心敦一ならず。此道は主一無適にしてなす。能おのれを省るべし。

——これは芭蕉の書と稱せらるゝ「行脚掟」の一節である。これは眞實に芭蕉の書であるか、乙由の子麥浪の所傳は果して芭蕉の遺墨として信用することが出來るか。其處には少くともその一部分に後人の竄入があるやうなことはないか。これは芭蕉研究の上で明かにせられなければならぬ一つの問題である。世俗の間には、單にその發句から推して主として自然のみを歌つた者のやうに考へられてゐるが、連句に於いては人事の表裏に對して微細の觀察を怠らなかつた

芭蕉。一面に於いては「さま〴〵に品かはりたる戀をして」といふ兩句を抑へて、「浮世の果は皆小町也」と戒めながら（『猿蓑』）一面に於いては「あやにくに煩ふ妹が夕ながめ」といふ句を溫かに受けて、「あの雲は誰が淚つゝむぞ」と唱和し（『曠野』）晩年に至つても「まぶたに星のこぼれかゝれる」風情に催されて「引立て無理に舞はするたをやかさ」を思ひ（『續猿蓑』）、「上おきの干菜きざむもうはの空」なる賤の女に「馬に出ぬ日は內で戀する」馬方を配する（『炭俵』）ほど戀知りであつた芭蕉。而もその女弟子園女の亭の菌の過食から死病を得たといふ芭蕉が、縱令その門弟達を警めるためであつても、病床さらに前に掲げたやうな捉へ書くことが出來たであらうか。これを決定するには色々考へなければならぬ問題があると思ふが、それはこの場合どうでも構はない。私が茲に云はうとするのは、「總て男女の道は嗣を立つるのみなり」といふ思想が、德川時代に行はれた儒教の代表的觀念であるといふことのみである。三界に家なき女性に對する憐憫や同情や優しさの必要や、人間に對する愛を女性にもそゝがなければならぬことについては、頑儒の書に折にふれての教訓が書き殘されてゐるが、男女が男女としての結合を正しきものにする倫理的根據は常に子孫繼續の義務の上にのみ置かれてゐる。子なきは去るといふ離婚の法則も、子孫を得るための蓄妾の權利も、凡てその根據をこの一點に持つてゐるのである。併しこの最高原理は果して兩性生活に對する人間の要求を遺漏なく整理し、正當に充足することが出來たか。働くことなき兩性の慾はこの最高の原理によつて果して如何なる方向に動かされて行つたか。吾々の問はなければならないのは主としてこの點にある。

「總て男女の道は嗣を立つるのみなり」――この最高原理に從つて行はれた結婚の理想的な狀態はどんなものであらうか。嗣を立つるとは家を傳へることである、嗣を立つるための結婚は、主要な點から云へば、個人と個人との結婚ではなくて家と家との結婚である。故に社會的經濟的階級的の意味に於いても、生物學的血統的の意味に於いても、對手の

家柄が先づ愼重に考慮されなければならぬ。併し家柄や血系の正しさは親となるべき者の個人を通じて新しく婿の家に流れ込むものなるが故に、その親の人柄、特にその心ばえの良否が重要な條件となることも亦勿論である。さうして美しき子孫を殘すためには、その妻の肉體的な美しさも無視するわけに行かぬ。故に嗣を立つるための結婚には、審美的見地が參與する餘地もないことはない。さうしてこのやうにして擇ばれて他人の家に入る妻は、本來果敢なき、弱き――又貝原益軒流に云へば淺墓な――女性である。夫はこれに同情ある保護を加へ、妻は己を捨てゝ從順に夫に奉仕しなければならぬ。完全な倫理的な夫の支配と身のほどを自覺した妻の服從とが相俟つて夫婦の間の深い情愛が生れる。併し正しい情愛は夫の支配と妻の服從とを基礎とすべきものなるが故に、この基礎を危くするやうな狎褻の愛は許さるべきではない、これ「夫婦別ある」所以である。さうして夫婦の間の性的接觸は、常に祖先及び子孫に對する義務の感情――種族保存の厳肅な義務の感情の下に行はれなければならぬ。この義務の感情が、夫婦の間に於いても、放縱な亂婚を調節する。――單に德川時代と云はず、凡そ儒教に於ける最高の結婚は、恐らくは、一般に上に述べたやうな性質のものであつたであらう。

このやうな結婚には一種獨得の美しさがないとは云はれない。特にそれは人間の性的生活に、性慾以上の厳かな意味を與へる點に於いて尊敬に價する。併し兩性の關係は、何を云ふにも、直接な、端的な、個人的な、相互の牽引を出發點として、善惡兩面に於けるあらゆるちからをこの出發點から汲み取らなければならぬ事實である。「嗣を立つる道」はこの動かすべからざる事實と如何なる接觸點を持つか。それは如何なる方面からこの事實に觸れ、この事實を支配して行くことが出來るか。問題を玆に移すとき、吾々はこの思想があまりに人情に遠いことを思はずにはゐられない。儒學的兩性觀の狹さと、その狹さに伴ふもろもろの餘弊は、凡てその源流を此處に發してゐるのである。

老莊の敎や佛陀の敎に對して人情に近いことを誇りとしてゐる儒敎は、何故に此處では人情に遠いといふ非難を受けなければならないか。それは「禮を立つる」理想は人間の性的本能に對して天降りの法則であるからである。人間の性的本能はこれによつて强制されることはあつても、中から温められ淸められることが出來ないからである。固より自然が性的本能の背後に種族保存の目的を置いたといふ說は、一つの假說として首肯することが出來る。假に自然が種族保存の目的を持つてゐるとすれば、それは生物の性慾を通じてのみ實現することが出來るであらう。この意味に於いて種族保存から性慾への道は極めて直接端的である。併し性慾が一度人間の意識生活の中に踏込んだ以上、性慾から種族保存の理想への道は、それとは反對に極めて迂遠でなければならぬ。この間の消息を髣髴するために、私は玆に一つの譬喩を設ける。AとBとは一つの圓環上にあつて相接する二つの點である。AはBの左にあり、BはAの右にある。今この圓環の上に左から右へ一つの方向に進行する運動が發生するとき、AからBへの距離は極小であるが、BからAまでの距離はその圓環の全延長を必要とするであらう。而も若しその運動が單に圓環を傳ふ平面運動であるに止らずに、上に卷き上る力がこれに加はるならば、Bを通過する運動は永遠にAに歸着することなく、螺旋狀をなして延びて行く曲線のうち、平面に投影すればAと重るべき點は、Aと同一垂直線上にあつて而も常にAより高い位置を占めなければならぬ。Aはこの運動の起點として運動全體のうへに重要な位地を占める。その運動が描く曲線の全體はAの立場から見れば步々にAの力を實現するものである。併し平面的に見てAに重るべき點に到達するためには圓環の一周が必要であるのみならず、これを立體的に見れば、Aがその運動の目標點となるが如きは全然不可能と云はなければならぬ。私の見るところを以てすれば、人間の性的生活は、他の多くの意識生活の現象と等しく、ほゞこの曲線に比較せらるべき發展形式をとるものである。故に「男女の道は禮を立つるのみなり」といふ倫理は、人情に遠きもの、自然に從ふが如くに

してその實自然に遂行する天降りの法則であるといふのである。

自然の目的論的考察には固より愼重なる用心を要する。併し一つの假説として上來の考察を續けることを許されるならば、自然は氣長である。それは浪費と迂餘曲折とを愛する。併しそれはこの迂餘曲折を通じて生物學的出發點を精神的價値の世界に高めることに成功するのである。若し種族保存といふことが、自然によつて吾々の性的本能の背後に置かれた唯一の目的であるとするならば、これに伴ふさまぐの心的生活は――目標の定かならぬあこがれや、伴侶を求むる煩惱や、愛する者を發見せる歡喜や、愛する者と共に居る恍惚やは――何といふエネルギーの浪費であらう。人間のそれにくらべれば鷄や犬や猫や豚の生殖の方が遙かに種族保存の目的にふさはしい、手短かな方法である。併し自然は吾々に對しては鷄や豚のやうな生產方法を指定しない。何故にそれをしないか、自然の秘密な意圖を充分に推測することは不可能であるとするも、少くとも吾々に與へられた性的本能の指示する方向はおのづから明かである。人間にあつては、種族保存が單純に生物學的意味のみを持つものであつてはならない。生殖は一般に人格的な生活の中に攝取されて、その重大な一要素を構成するまでに高められなければならない。この高める力の源泉となるものは、人格價値全體の世界、この世界の性生活に於ける發現としての戀愛である。人格的な選擇と愛着、人格的な融合と歡喜、人格的昂揚を基礎とする自己犧牲である。このやうな戀愛の理念（イデー）に到達することによつて――もつと簡單に云へば、生殖慾から戀が生れることによつて、性生活は始めて倫理的基礎を與へられるのである。この基礎の上に立つことを知らぬ限り、假令それは文化價値繼承の生物的單位を産出することを意味するにしても、「嗣を立つる道」は猶一種の生物學的概念に過ぎない。愛する者によつて子孫を得むとする欲望として、從つて戀愛を通して庶幾せらるべき一つの結果として、種族保存の理想は倫理的に吾々の生活に補助的に働きかける力を得て來るのである。自然は單に種族を保存するのみならず

又人格を産まむことを欲する。進化がこの段階に達するとき、種族保存も亦人格的に、換言すれば戀愛を通して、行はれなければならぬ。故に男女の道は人格的に愛し合ふことであつて「嗣を立つるのみ」ではないのである。

併し私自身の戀愛觀を述べるのは現在の問題ではない。私の仕事は儒學の性生活觀とその文化的影響とを觀察することであつた。故に私は再び「男女の道は嗣を立つるのみ」といふ假定に歸つて來なければならぬ。この假定の上に立つとき、吾々の性生活は如何なる方面に於いて肯定され、如何なる方面に於いて否定されるか。それが性慾そのものを肯定することは自明である。性慾を否定すれば嗣を立つる道も亦ないからである。——「飲食男女の欲の心に生ずるは自然の妙理なり。これにて性命をつなぎ、此にて嗣續を生育す。世の人、僧などを見慣て、男女の欲を拙なき事の様に思たすは、以の外の僻事なり」。「男女の欲は人の心を柔弱にするもの也……世の人男女の欲を遠ざくるときは、自然と粗厲猛暴になりて、忿戾鬪爭の心を生ず、畏る可きの至なり。……女故に人の氣を和柔にし、且は妻子に羈さるゝ故、忍難き事をも忍べり。如し妻子もなきものならんには、忿怒の爲に人を打果すもの少かるまじ」(太田錦城著『梧窓漫筆』)。——この程度に性慾を肯定し若くは許容する思想は決して錦城一人のことではない、多くの儒者も亦彼と同一轍に出でゝゐることは、改めて例證するまでもないであらう。併しこの場合吾々の注意を要するのは、玆に許容されてゐるのは、既に「嗣を立つる」に必要な男女の欲のみではないといふことである。男女の欲を遠くるために生ずる忿戾鬪爭の心、性欲の鬱屈より生ずる粗厲猛暴の態度を避けるためには、嗣を立つる目的を別にしても、性欲の充足は許されなければならぬ。性欲は、種族保存といふ積極的目的のためのみならず、忿戾鬪爭の心を和げる消極的目的のためにも亦是認される。固よりこれはやむを得ずとして看過されるのみであつて、これを最小限度に制限することゝ、これを充すには「嗣を立つる」ための妻妾によることゝが希望されるであらう。併し孰れにしても飽くことなき男女の欲が種族保存の

理想のみによつては制御し難き事實を認めて、既にこれと妥協するの途を講ぜむとしつゝあることは見逃すわけに行かない。篤行の碩學中江藤樹か少年の質問に答へて「なほ〳〵、色念除きかたきとの御事、少年の通病にて御座候、不邪の色にて精を御もらしなされ候はゞ、自らのぞきやすく可有御座候、不婬戒のごとく御愼みなされ候はゞ、念やみかたく可有御座候、たゞ邪味を不貪、邪色に交らざるを飲食男女の戒とす、精微の理よく御體察可被成候」(『答一尾』)と云つてゐる言葉も傍證とすべきである。この點だけから云へば、儒教は禁欲主義に較べて確かに人情に近い。併し藤樹の所謂「不邪の色」が一歩を移して賣笑の是認となれば、儒教と公娼制度との握手は其處に始まると云はなければならぬ。果然吾々は錦城がこれを敢てしてゐることを發見する──「布帛の端物(たんもの)は方幅なり、されど方幅のまゝにて衣裳となるべきや、斜に裁ち、筋違に剪りて、初めて衣裳の用を爲すなり。されば世間の萬事も方正なる義理のみにては通じ難し、一天下の上にても、一身の上にても、斜なること筋違なる事有て始めて安穩無事なり。先づ其一段を知らんとには、女は貞潔をのみ人道の正と爲す者なり、然るに色情を炫賣する遊女と云ふもの天地の間に有ては、人道の正は無き事なり。されど今日の時勢にては、是も無くては治平の大害なり、是筋違の最なる者にて又治平の道具なり。此一つを以て其餘は推て知るべし。此理を悟れば、斜に行き横に行くも仁道の一端ならざる事なし。夫を大道に暗き學者は、唯義理の正直なる事のみを道と心得て、世間の人情に疎濶なるは無用の學なり」(『梧窓漫筆』)。これは、錦城の語氣によつても推察せらるゝやうに、あらゆる儒者の同感するところではないであらう。併し既に「關を立つる道」に除外例を承認せる限り、さうしてその除外例を認容する理由が色慾の氾濫を防ぐところにある限り、寛假の程度かこの邊まで及ぶことは深く怪むを須ゐないのである。

併し情慾の許容は恐らくこれが行どまりである。實行上、個人としてこの程度を踏み越えた儒者が多かつたことは云ふ

までもないが、時代の良心を代表するものとしては、厳密に官憲のなせるところをそのまゝ裏書して、遊女はたゞ性慾充足の道具として認められたに過ぎないであらう。一歩をその圏の外に踏み出せば、男女の情は既に否定せらるべきものの領域に屬するのである。遊里に耽溺することは、この意味に於いて時代の良心の深く警めるところである。——「賣女は渡世のために美目よき女を買取つて、白粉紅粉をぬり、其色を增し、綾羅をきせて人をあざむき、香具を帶て臭氣を去り、諸人を落し穴へ入れ、一生をあやまらせ、或は命をも損する不仁なる家職ゆへ、世の人別として交らず、是を亡八と云、孝弟忠信禮義廉恥の八つを忘れたるゆへと、唐人は戒たり」。「傾城賣女に近付ものの七損、〇主人の機嫌をそこなふ〇身上をそこなふ〇命をそこなふ〇邪智を增し正智をそこなふ〇正じきをそこなふ〇孝をそこなふ〇人をそこなふ」(鬼尾庵著『わが衣』)。固より吾々は柳澤淇園がこのやうな非難に對して遊女町を擁護した言葉を知つてゐるが、それは時代の正統的良心に對する反抗であつて、これを代表するものとは云ひ得ない。この點に於いては鬼尾庵の言葉こそ遙かに代表的であるといはなければならぬ。たゞこの場合吾々の注意をひくのは、德川時代には淇園と流れを等しくする異端者が多かつたことと、これ等の異端者が迫害されずに人並に取扱はれてゐたことゝである。さうして言葉の上では遊里を擯斥する者も、實行上にはどうか知れたものではないと思はれるほど、良心の緊張が覺束なく見えることである。併し情慾に對する批判に於いて主として利害損得の功利的見地に立つ以上、これを戒むる言葉に充分の權威がないのもそれほど不思議とするに足らぬ。たゞこの點の思想が節慾に近づけば近くほどその言葉が正しいものとして世間に通用してゐるところを見れば、最右翼にある思想が常に性生活の事實を牽制する力を持つてゐたことは爭ふことが出來ない。——「女色の害は畏るべし。第一には、人の身體を尫羸せしむ。第二には、人の心志を柔弱にして成立することと無からしむ。第三には、驕奢の心を生じて華美に流れしむ。世俗の華奢は皆女を悦ばしむるの一念より無

輩の害を生じて、身を亡し、家を亡し、國天下を亡す。古昔の亡國を以て觀れば、淫慾より奢侈を生じ、奢侈より困窮を生じ、困窮より亂亡を生ず」(『梧窓漫筆』)。この中で女色と奢侈との關係を說くところは、例へばトルストイが『クロイツア・ソナータ』に說くところと等しく、一面の眞理として傾聽に價ひする。併し錦城が此處に籠めてゐる「女色」とは、侯が寵姬に溺れ、武士や町人が傾城狂ひをするの類であつて、男女の慾の最も奥深きもの、兩性の心と心との牽引と融合との是非については、殆んど觸れるところがないといふことは、特に記臆して置かなければならぬ事實である。

然らば錦城は他の節に於いてこの問題に觸れてゐるか。私は『梧窓漫筆』の何處にもこれを發見することが出來なかつた。さうして一人の太田錦城に止らず、德川時代の儒學者の何人によつても、嚴密な意味に於ける戀愛觀を聽くことが殆んど出來ないのは、必ずしも私の寡聞の所爲だけではないであらう。固より其處には『ひとりね』の著者のやうな例外はある。併し彼の思想は、儒敎に依り儒敎に出發しながら儒敎を越えて獨自の推論を進めたもの、その歸結に於いては寧ろ正統的儒學に叛いて却つて儒學の敎の裏を行く蕩兒の感情と握手するもの、多數の儒者がそのつまみ食ひにあこがれながら而も口を拭つて公言するを敢てせぬところをぶちまけたものであつて、これをこの時代の公式の良心を代表するものと見難いことは勿論である。問題が人生の表向に關する限り、戀愛の問題が默殺されて、意識若くは無意識の間に、戀愛を一つにして「畏るべき女色」の中に一括されてゐたことは、この時代を理解せむとする者にとつて、見逃すことの出來ぬ事實である。德川時代の儒學にとつて、男女の欲のうち最も注目をひいたものはその肉欲的方面である。儒者の敎訓の主要なる部分は、この肉慾の仕末と、肉慾と實用との調和にある。さうしてこの肉慾に對する態度について、本心を修むることを主とする學者と經世の時務に志す學者との間におのづから寬嚴の差別があるとはいへ、兩者ともにこれを最小限度に制限して、「嗣を立つる道のみ」に倫理的意義を認めむとする點に於いては結局一致するであら

う。かくて儒學の志すところは、自然の盲目的な種族保存の傾向から人間の意識的な性慾への途を逆にして、性慾から種族保存への最短距離を押返すところに——一旦意識的になつた性慾がその自然の傾向に從つて人間的價値の全體と絡み合ひ、その意識的體驗を深くして人生の間に深刻な位置を占めむとする傾向を遮斷して、人生に於ける最小不可缺の意義（その家に傳はる格式名譽材能財産等の文化財を繼承すべき一生物を産出すること）のみをこれに指定するところにあるやうに見える。故に最も儒學の嫉忌する言葉を逆用して極端にこれを云へば、事が性的生活そのものに關する限り、それは人間が禽獸的性生活を營むことを要求すると云ふことも出來るであらう。かういふのは固より、儒學が性生活に最小限度の位置を指定しようとするのは、他の方面に於いて人間の最も非禽獸的な性能を發揮するための妨害を、取除かうとする動機に基くといふことを諒とせぬのではない。又「嗣を立つる」ことが道とされることによつて、禽獸が無自覺に種族保存の道具となることとは截然として區別される理由を無視するのでもない。「流蕩すれば心專一ならず」、人間が萬物の靈長たる職能を發揮するためには、彼は犬若くは雞のやうに無制限に性欲を恣にする意味に於いて禽獸的であつてはならない。又種族保存の道徳は性生活を翫弄するを許さぬ嚴粛な規範として、性欲の上に高く——恐らくはこの二つの動機の事實的結合が不可能であらうと思はれるばかりに高く、——掲げられてゐる。併し此等の人間的制限の埒内に入り來る限り性慾そのものは、禽獸のやうに自然に單純に、「嗣を立」てむとする生物的念願以外他の人格的要素との結合を求むることなしに、充されなければならない。これが最も「色念」の害を少くする所以である。——私の考へるところによれば、儒學の性觀は、徹底的に追求すれば、此處に歸着するより外に途がないやうに見える。從つてこの思想の、此方面に於ける文化的意義もおのづから明かである。それは性慾の氾濫を外から制限して、人のエネルギーを他の文化に集中させる力を、或程度までは持つてゐるであらう。併しそれは性慾そのものゝ向上を導く力がな

い。然るに文化全體の向上は、性的文化の進歩をもその重大な一要素とするが故に、それは又文化全體の世界を導く上に於いて、常に何等かの缺陷を持つてゐなければならぬ。性的文化の向上と特に密接な關係を持つ藝術が、この敎の下に立つて惱みが多いのは、決して偶然ではないのである。

さうして戀愛に倫理的基礎を與へる力を缺くことは、この敎自身の、理想としての權威を薄弱にする。それは、人間の嗣を立つる道は、戀愛若くは戀愛に似た感情を基礎とすることなしには、到底圓滿に行はれ難いからである。それがさうでなければならぬことは、一つの心理的實驗によつて容易に明かにすることが出來るであらう。試みに、嗣を立つることのみを唯一の動機として、最初に性的生活に踏み入らうとする者の身心の狀態を想へ。異性に對する欲情の存在は既に假定されるにしても、自然が純潔な男女の心に置いた羞恥心の關を、滑かに踏み越させる力はそれでは足りない。一人の個人として、一個の人格として、對手に寄する信頼と愛着、雙心の融合を基礎とする感情の昂揚――かういふやうな人格的要素の參加のみが、始めて一人の人間を、屈辱の感情なしに性的生活に導き入れることが出來るであらう。この戀愛に似た感情の正しさを信じて、事前にこの感情の發生を豫定することを許されないならば、嗣を立つる義務は、純潔な處女にとつては××甘受の義務である。純潔な男子にとつては××敢行の義務である。このやうな義務のみじめさは、嗣を立てるといふやうな天降りの道德觀念によつては到底救はれることが出來ない。さうして「嗣を立つるのみ」の結婚は、二人の間に幸ひにして戀愛に似た情合が發生するまでは、長くこのやうな狀態を續けなければならないのである。故に結婚以前の戀愛が不義いたづらとして――(固よりそれは主として結婚以前に於ける最後の關係に名けられた名であるが、嚴密に云へば目上の指圖を受けぬ心的結合も亦この中に數へられなければならぬ)――排斥される限り、「嗣を立つるのみ」の結婚は、この屈辱の感情を胡魔化すために、知らず識らず他の遙に卑しい動機の助力を

仰がなければならなかつた。それは、女性にあつては、信愛する男子と一切に亘る共同の生活を營むこととは全然異れる意味に於いて、一身の安を托するためにその純潔を犠牲にすることである。男性にあつては、妻の扶養を引受ける代償として、便宜と肉慾とを購ふことである。實質上に於けるこの取引に道德的の假面をつけるために、「嗣を立つる道が口實に用ゐられる場合が如何に多いかは、必ずしも徳川時代と云はず、今日に於ける多くの結婚も亦これを例證するであらう。「何時まで一人でもゐられまいから」と云ふ言葉は、この事態に巧にぼかしをかけたものと見らるべきである。嗣を立つる動機が、男女の戀愛を假定せぬ限り極めて人情に遠いといふ事實は、このやうな「人情に近い」墮落を殆んど必然にする。

固より事實は理論ほど惡くはなかつた。それは、「嗣を立つるのみ」ののみが最初からそれほど厳密に考へられてゐなかつたからである。前に少年の悶を遣るための肉慾が除外例として許容されたやうに、戀愛も亦或程度までは實行上默許されたからである。未婚の男女の戀愛は、その親達の子女に對する慈愛によつて――「子に甘き」親達の涙脆き計らひによつて、救はれ得る。おしつけられた夫婦の氣拙さは、公許された夫唱婦隨の情愛に魂を吹き込むことを解する者にとつて、必ずしも越え難き溝とはならないであらう。戀愛は恐らく、臭いものに蓋をするやうに、若くは君子は庖厨に遠かるやうに、目にあまるほどでない限り、見て見ぬふり、知つて知らぬ顔に取扱はれた。人間の魂は、蓋をされた臭いものとして、君子の監視を脱れた庖厨の中に、息づくことが出來た。徳川時代に於ても、吾吾の眼から見て立派な男女關係が、必ずしも少くはなかつたであらうと私は考へる。併し正當にその存在權を認められぬものは、要するに斬捨御免の氣まぐれの下に置かれるものである。「嗣を立つる」といふ義務と「嗣を立つるのみ」といふ生物學的制限は、その欲する時には何時でも、結び得ぬ心と心とを繋ぎ、結ばれたる心と心とを裂き――かくて男女の人格的要求を蹂躙す

る權威を持つ。故に當時にあつては極めて優越の位置に立つてゐた男子と雖も、「親仁欲にて棟高き家の娘を持たされ」る惱みが、今日に比して遙かに多かつたであらう（固より自分欲にて棟高き家の娘を持つた惱は別問題である）。併し男子の側には、嗣を立つるとは男系の繼承を意味する時代にふさはしく「家の嫁」が特別の詮考の下に擇ばれて、兩親が見て力一杯の――時としては彼には勿體ないやうな――良妻をあてがはれるといふ格別の幸福があり得た。これに反して哀れをとどむるは女である。彼女が美にして才ある生れであればあるほど、彼女は往々良家の馬鹿息子と彼の親々との注目を惹くといふ危險を持つてゐる。さうして家柄が最も重きをなしてゐた時代にあつて、その娘の「聘せらるれば妻となる」機會を待つてゐた兩親が、この招聘を拒絕することは稀有の例外と云はなければならぬ。かくて三從の道の最初の一つに覺束なくも一生の運命を托して、愛なくして嫁し、到底夫婦の情愛が生れる餘地のないやうな夫に「仕へ」、天降りの道德と肉體の習慣と物質的利害と子と親とによつて結ばれた腐れ緣に繋がれながら、その地位權勢に滿足を求めるか、子の代になつて膨れ出す時期を待つか、若くは忍從のために全力を消耗し盡すかして此世を去つた女性は、恐らく幾千萬を數へなければならないであらう。況して「嗣を立つる道」は多妻を義務とさへしてゐる時代である。諸侯の一人が自らその娘を諭して、「我國にも、皇后を立給ふ外に、女御更衣の數あまたおはします、もろこしの法に、天子は十二人、諸侯は九人、卿大夫三人、士は二人の婦女を置とかや、これは、いさゝかもいろをこのみ、えむ（淫力）にひかるゝにはあらず、世繼のおほからむためぞかし、唯人にくだりてこそ、一夫一妻のものなれども、子なきときはおもひものとておく事あり、まことに人の妻たらんものは、夫のために女をもとめすへて、世繼のたえざらん事を願ふこそ道ならめ、われ一人のあいをもとめんため、かへりて他をそしりねたみするは、淺間しくはづかしき事ならずや」（伊達吉村、『あしの下根』）とさへ云つてゐる時代である。固より男の多妻的傾向は恐らく古今同一轍で、如何なる社會

組織の時代にあつても――單に階級的男尊女卑の時代のみならず、自由主義の時代でも、無産者獨裁の時代でも――兩性の悲劇は絶えないであらうが、この時代の特殊な點は、女の心が深く動いて行く限り、悲劇を常態とするところにある。夫の戀が移動するのではなくて最初から男の心が多くの女の間に散らされることを原則とする道徳が支配するとき、妻は偶々心に觸れて來る夫の情愛をも戀としてはたのみ難いことを感ずるであらう。假令行末の不安は絶えないとしても、男が誠實にその多妻的傾向を否定する決意を持つときには相互の戀は成立し得る。併し「一人思はるゝこと」を最上の幸福とする女の心が、この決意を持たぬ男によつて底から充されることは考へ得られない。夫に對する妻の戀が、おしつめて行けば最初から片思ひに終るべき運命を持つてゐるとき、妻がなるべく心の底を動かさずに事務的に夫に仕へて、せめて家庭に波風少く、靜かに一生を暮したいと念願するのは自然の數と云はなければならぬ。今も時として老人の口からきかされる「女が男に惚れるのはきたない」といふ言葉を參照すべきである。このやうなみじめな地位に置かれて猶魂の純潔を保つことは、無知の聖女のみがこれをよくするであらう。「嗣を立つるのみ」の教は、原則上女性の地獄である。彼女の幸福はたゞこの原則の範圍外にのみ成立することが出來る。「苦界の勤め」を餘儀なくされるものは、決して遊女のみではないのである。故に「貴き官人のうちにも妻を盜まるゝ」者が多くなる事情は、最後節を待つまでもなく、男女の道に關する時代の教によつて既に醸醸されてゐる。家庭にあつて心の底から不幸な女の魂が、戀の幻影を追うて其處に救ひを求めるのは脱れ難き理數であるからである。今日の吾々から見れば、當時の女流がよく忍從して「盜まるゝ」ことの甚だ少かつたのが、寧ろ不思議と云はなければならぬ。

併しこの教の隤落的傾向は單に戀愛の倫理的基礎を與へ得ぬ處にのみあるのではない、それは又自ら期せずして肉欲の（特に男子の肉欲）の放肆を指嗾する。それは、性生活を肉欲の一方面から見る傾向が本來この教の根柢に含まれてゐる

からである。而も亦この教は、精神的方面から抽象された肉欲をそのまゝに除外例として認容する方向に、既に一歩を踏み出してゐるからである。一體に「嗣を立つるのみ」の教は理想として充分な資格を具備してゐない。完全な意味に於いて理想と呼ばるべきものには、個々の實現に於ける普遍性を問題外として、要求としての普遍性が常に備つてゐなければならぬ。それは、あらゆる場合を通じて要求さるゝもの、その實行に於いて如何に過つこと多きも、猶決して除外例を許さぬものでなければならぬ。同じく人情に遠ざかるにしても、トルストイの絶對貞潔の教にはこの資格が具備してゐる。それは何人によつても完全に實行されることは出來ないが、而も猶それは無限の方向としてあらゆる性生活に適用される。現在即下の性生活は例外なく兄弟姉妹の愛に淸まらうとする努力を含んでゐなければならぬ。永遠の彼方にある理想は、無限の異れる程度と色合とに於て、現在即下の性生活を淸める力として働くことが出來る。然るに「嗣を立つる」教にはこの普遍性が含まれてゐないのである。それは男女の道が「嗣を立つるのみ」に止まることを希望する。併しそれは他の理由によつてこの希望と離れた除外例を認容する。その理由が嗣を立つる道とは區別せらるべき他の功利的な見地にある限り、この教へそのものは最早此等の除外例を指導すべき如何なる權威をも持つことが出來ない、それはたゞその考へ方の根柢にある肉欲的傾向によつて、除外例として認容せられた現象の進行に影響することを得るのみである。「嗣を立つるのみ」の教が直接に多淫を教へるものでないことは勿論であるが、人が一度この人情に遠い道から踏み外すとき、從來男女の道を肉的に考へた心的習慣に從つて、その過誤を肉欲的に進行させることは、如何とも し難き自然の勢である。故に頑固なる性欲制限説の末流には、『紅樓夢』に所謂「皮膚濫淫之蠢物」が生れ易い。この蠢物の進み行く途は、世間に坊主かへりと呼ばれてゐる種族の如く、申譯澤山に、その古巣であつた「嗣を立つるのみ」の教に牽制されながら、理知的にひねくれた放縱に耽ることである。それは所謂「意淫」に——性欲美化の衝動に、協同す

るだけの精神性をさへ持つことが出來ない、それはそれほどに文化的生産力（ポテンシア）を缺いてゐるのである。德川時代に於ける性欲美化の道場であつた遊廓は、墮落せる儒學の方面からこの影響を受ける。一方に於いては、口には先王の道を說きながらその實行と精神とに於いては皮膚濫淫の虜となれる俗儒の二重生活。一方に於いては、極めて無恥放縱な生活を表にしながら何となく肩身の狹いことを感じ始めた蕩兒の意識化。これ等の者の間に、性的墮落は一種特別な方向をとつて流れる。德川時代の性的頽廢は、かくの如くにして、儒學的良心と賣笑との握手によつて生れた私生兒である。

私がかういふのは、決して、德川時代に於ける儒學の社會的貢獻を否定しようとするのではない。德川時代はその昌平を維持し發展せしめむがために、學術の普及によつて一層生活を意識化し、人心を倫理化する必要があつた。さうしてその時既に存在してゐた敎へのうちで、最も世間の實際に適切なものとして儒學を採用したのも、決して選擇を誤つたものとは云へないであらう。儒學が一般に人心の開發と倫理意識の進步に偉効があつたことは、公平に事實を見れば何人も疑ふことが出來ない。性生活の方面に於いてさへ、それは前代の無恥を或程度に敎化して、性慾の氾濫に對する一つの堤防を築いたといふ業績は擧げてゐるのである。さうして儒學の精神に從つて淸らかな、品格のある家庭を形成してゐた學者と智識階級とが少くなかつたことは、爭ひ難き事實でなければならぬ。たゞこの敎は特に性生活の事實を解釋する點に於いて重大な缺陷を持つてゐた。それは單に智見の狹さと低さとに於いて誤つたのみではなく、又性的感情の機微を味會してその文化の進み行かなければならぬ方向を察するだけの、心の細かさと深さとを缺いてゐた。さうしてこの缺陷は前代以來の性的無恥の潮流と握手して一種特別なる性的頽廢を釀成した。私の上來の所論はたゞこの點を明かにしたかつたのである。併し善惡二つの方面に於いて、それが如何に時代の意識を倫理的にするに成功したかは、儒學の浸潤が深くなるにつれて、滑稽に見えるまでに一切のことを道義に關係させなければ承知が出來ぬやうな心的

習慣が生じたことによつてもわかるであらう。上來私が觀察して來たのは、これによつて生じた性的頽落であるが、一面に「嗣を立つる」道とは異れる意味に於いて性生活に是認を與へむとする努力が發生して來たことも、亦この主潮につるゝ一つの傍流として注意して置かなければならぬ。それは情慾や戀愛を性生活そのものとは異れる仁義禮智信の道と結合して、これによつてそれ等のものに存在の理由を與へむとする傾向である。かくて其處には、萬葉や源氏の、大らかにしておのづからなる、若くはほのかにして柔かなる戀とは全然異れる戀愛のタイプが生ずる。その最も適切な例は馬琴であるが、比較の便宜あるものとして、私は玆に德川末期の小說、種彥の『偐紫田舍源氏』をあげたい。この命名は作者の意圖の如何に拘らず、事實上決して謙遜ではない。それは名は實の賓として立派に通用する。それが「田舍」であり、「にせ」である理由は色々擧げることが出來るが、源氏物語の幽趣微韻を甚しく粗雜化してゐる意味に於いてそれは特に「田舍源氏」である。さうして主人公の好色を寶刀の詮義や君への忠義によつて動機づけなければ承知の出來ぬ點に於いて、それはとりわけ「偐紫」である。このやうな變化は、中間に挾る儒敎の浸潤を除外しては到底說明することが出來ないであらう。

さうして上來吾々の問題になつて來た性的頽廢も、この全體の潮流の一つの方面として理解されなければならいのである。

附記　――書き出すときには今度こそ完結にするつもりだつた。書いてゐるうちに時間がなくなつて、結論は次回に廻さなければならないことになつた。併し德川時代の話だけはどうしても今度書いてしまふつもりで急いだ。ところが祖父危篤の電報に接してそれも半分で筆を擱いて歸鄕しなければならぬことになつてしまつた。あまり不規則な書き方をしてゐるから、讀者諸君のために、今後の大體のプランを御知らせして置く――次回に德川時代に於ける藝術家が自分の仕事について持つて居た自覺と、當時の識者が藝術に對して持つて居た評價とを概觀して、この時代の藝術がどれほどの社會的地歩を占め得たかを見極めたい。その次の一回で、問題を藝術一般のことと現代のことゝに轉じて全體を結論したい――これが自分の大體の計畫である。「遊歐雜記」を書き出すときには、「歸來――二」

として「東洋」といふ題目を掲げ、その後、「獨逸の卷」、「伊太利の卷」、「埃及の卷」などを書きついで、それ〳〵の卷に幾つかの小節（今書いてゐるものはその最初の一小節に當るのである）をわかつつもりであつた。併しそんなことをしてゐたらこの先何年かかつて書き了へることが出來るか、殆んどあてがつかないであらう。從つて最初の計畫どほりに書くことが出來るかどうかは、今豫約するわけに行かない。併し半年か一年休んだあとで、「東洋」の節だけは是非書きたいと思つてゐる。（九月廿二日記）

骨董

幸田露伴

骨董といふのは元來支那の田舍言葉で、字はたゞ其音を表はしてゐるのみであるから、骨の字にも董の字にもかゝはつた義が有るのでは無い。そこで、汨董と書かれることも有り、又古董と書かれることも有る。字を假りて音を傳へたまでゝあることは明らかだ。さて然し骨董といふ音が何樣して古物の義になるかといふと、骨董は古銅の音轉である、といふ說がある。其說に從へば、骨董は初は古銅器を指したもので、後に至つて玉石の器や書畫の數まで、すべて古いものを稱することになつたのである。なるほど韓駒の詩の、「言ふ莫かれ衲子の籃に底無しと、江南の骨董を盛り取つて歸る」などゝいふ句を引いて講釋されると、然樣かとも思はれる。江南には銅器が多いからである。しかし骨董は果して古銅から來た語だらうか、聊か疑はしい。若し眞に古銅からの音轉なら、少しは骨董といふ語を用ゐる時に古銅といふ字が用ゐられることが有りさうなものだのに、汨董だの古董だのといふ字がわざ〳〵代用されることが有つても、古銅といふ字は用ゐられてゐない。羅嗊江は通雅を引いて、骨董は唐の引船の歌の「得董紇那耶、揚州銅器多」から出たので、得董の音は骨董二字の原だ、と云つてゐる。得董紇那耶は、エンヤラヤの樣なもので、囃し言葉である、別に意味も無いから、定まつた字も無いわけである。其說に據つて考へると、得董又は骨董には何の意味も無いが、古い船引き歌の其の第二句の揚州銅器多の銅器の二字が前の囃し言葉に連接してゐるので、骨董といふことが銅器などを云ふこ

どに轉じて來たことになるのである。又それから種々の古物をも云ふことになつたのである。骨董は古銅の音轉などゝいふ解は、本を知らずして末に就いて巧解したもので、少し手取り早過ぎた似而非解釋といふ譯になる。

又、蘇東坡が種々の食物を雜へ烹て、これを骨董羹と曰つた。其の骨董は零雜の義で、恰も我邦俗のゴッタ煮ゴッタ汁などゝいふゴッタの意味に當る。それも字面には別に義があるのでは無い。又、水に落つる聲を骨董といふ。それもコトンと落ちる響を骨董の字音を假りて現はしたまでゞ、字面に何の義も有るのでは無い。畢竟骨董はいづれも文字國の支那の文字であるが、文字の義からの文字では無く、言語の音からの文字であつて、文字は假りものであるから、それに訓詁的のむづかしい理屈は無い。

そんな事は何樣でも可いが、兎に角に骨董といふことは、貴いものは周鼎漢彝玉器の類から、下つては竹木雜器に至るまでの間、書畫法帖、琴劍鏡硯、陶磁の類、何でも彼でも古い物一切を云ふことになつてゐる。そして世におのづから骨董の好きな人が有るので、骨董を賣買する所謂骨董屋を生じ、骨董の目きゝをする人、即ち鑑定家も出來、大は博物館、美術館から、小は古郵便劵、マッチの貼紙の蒐集家まで、骨董畠が世界各國都鄙到るところに開かれて存在して居るやうになつてゐる。實におもしろい事で、又盛んなことで、有難い事で、意義ある事である。惡口を云へば骨董は死人の手垢の附いた物といふことで、餘り心持の好いわけの物でも無く、大博物館だつて盜賊の手柄くらべを見るやうなものだが、そんな阿房げた論をして見たところで、野暮な談で世間に通用しない。骨董が重んぜられ、骨董蒐集が行はれるお蔭で、世界の文明史が血肉を具し脈絡が知れるに至るのであり、今までの光輝が吾儕の頭上にかゞやき、香氣が我等の胸に逼つて、そして今人をして古文明を味はゝしめ、それから又古人とは異なつた文明を開拓させるに至るのである。食欲色欲ばかりで生きてゐる人間は、まだ犬猫なみの人間で、それらに滿足し、若くはそれらを超越すれば、

是非とも人間は骨董好きになる。云はゞ骨董が好きになつて、やつと人間並になつたので、豚だの牛だのは骨董を捻くつた例を見せてゐない。骨董を捻くり出すのは趣味性が長じて來たのである。それから又骨董は證據物件である。で、學者も學問の種類によつては、學問が深くなれば是非骨董の世界に頭を突込み手を突込むやうになる。イヤでも黴臭いものを捻くらなければ、いつも定まりきつた書物の中をウロツイてゐる譯になるから、美術だの、歷史だの、文藝だの、其他いろ〳〵の分科の學者達も、有りふれた事は一ト通り知り盡して終つた段になると、いつか知らぬ間に研究が骨董的に入つて行く。それも道理千萬な談で、早い譬が、誤植だらけの活版本で何程萬葉集を研究したからとて、眞の研究が成立たう譯は無い理屈だから、何樣も學科によつては骨董的になるのがホントで、ならぬのがウソか横着かだ。マア此樣な意味合もあつて、骨董は誠に貴ぶべし、骨董好きになるのは寧ろ誇るべし、骨董を捻くる度にも至らぬ人間は犬猫牛豚同樣、誠にハヤ未發達の愍むべきものであると云つても可いのである。で、紳士たる以上はせめてムダ金の拾萬兩も棄てゝ、小町の眞筆のあなめ〳〵の歌、孔子樣の讃が金で書いてある顏回の瓢、耶蘇の血が染みてゐる十字架の切れ端などゝいふものを買込んで、どんなものだいと反身になるのもマンザラ惡くは有るまいかも知らぬ。

骨董いぢりは實にオツである、イキである、おもしろいに違ひ無い、高尚に違ひ無い、そして有意義に違ひない、そして場合によつては個人のため社會のためになる事も有るに違ひ無い。自分なぞも資産家でさへあれば乾度すばらしい贋物や贋筆を買込で大ニコ〳〵であるに疑ひ無い。骨董を買ふ以上は贋物を買ふまいなんぞといふ其樣なケチな事で何樣なるものか、古人も死馬の骨を千金で買ふとさへ云つてあるでは無いか。仇十州の贋筆は凡そ二十階級ぐらゐあるといふ談だが、して見れば二十度贋筆を買ひさへすれば卒業して眞筆が手に入るのだから、何の譯は無いことだ。何だつて月謝を出さなければ物事はおぼえられない。贋物贋筆を買ふのは月謝を出すのだから、少しも不當の事では無い。根

月謝を澤山出した擧句に、いよ〳〵眞物眞筆を大金で買ふ。嬉しいに違ひ無い、自慢をしても可いに違ひ無い。嬉しがる、自慢をする。其の大金は喜悦税だ、高慢税だ。大金と云つたつて、十圓の蝦蟇口から一圓出すのは其人に取つて大金だが、千萬圓の弗箱から一萬圓出したつて五萬圓出したつて、比例をして見れば其人に取つて實は大金では無い、些少の喜悦税、高慢税といふべきものだ。して其の高慢税は所得税などと違つて、政府へ納められて盜賊役人だかも知れない役人の月給などになるのでは無く、直に骨董屋さんへ廻つて世間に流通するのであるから、手取早く世間の融通を助けて、いくらか景氣をよくしてゐるのである。野暮でない、洒落切つた税といふもので、いや〳〵出す税や、督促を食つた末に女房の帶を質屋へたゝき込んで出す税とは譯が違ふ金なのだから、同じ税でも新得税なぞは、道成寺では無いが、かねに恨が數々ござる、思へば此のかね恨めしやの税で、此方の高慢税の如きは、金と花火は飛出す時光る、花火のやうに美しい勢の好い税で、出す方も、ソレ五萬兩、やすいものだ、と欣々として投出す、受取る方も、ハツ五萬圓、先づ此位のものをお納めして置きますれば私も鼻が高うございますると欣々として受取る。惡い心持のする景色では有るまい。誰だつて高慢税は出したからうでは無いか。自分も高慢税は澤山出したい。が、不埒千萬、人生五十年過ぎてもまだ滯納とは怪しからぬものだ。

此の高慢税を納めさせることをチャンと合點してゐたのは豐臣秀吉で、何といつても洒落た人だ。東山時分から高慢税を出すことが行はれ出したが、初は銀閣金閣の主人みづから税を出してゐたのだ。まことに殊勝の心がけの人だつた。信長の時になると、もう信長は臣下の手柄勳功を高慢税額に引直して、所謂骨董を有難く頂戴させてゐる。羽柴筑前守なぞも、戰をして手柄を立てる、其の勳功の報酬の一部として茶器を頂戴してゐる。つまり五萬兩なら五萬兩に相當する勳功を立てた時に、五萬兩の代りに茶器を戴いてゐるのである。其の骨董に當時五萬兩の價値が有れば、然樣いふ

骨董を頂戴したのはつまり筑前守は五萬兩の高慢税を出して喜んでそれを貰つたのと同じことである。秀吉が筑前守時代に數々の茶器を信長から勳功の賞として貰つたことを記して居る手紙を自分の知人が持つてゐる。專門の史家の鑑定に據れば疑ふべくも無いものだ。で、高慢税を拂はせる發明者は秀吉では無くて、信長の方が先縦であると考へらるゝのであるが、大に其の税法を廣行したのは秀吉である。秀吉の智謀威力で天下は大分明るくなり、安らかになつた。東山以來の積勢で茶事は非常に盛んになつた。茶道にも機運といふものでがな有らう、英靈底の漢子が段々に出て來た。松永彈正でも織田信長でも、風流も無きにあらず、餘裕も有つた人で有るから、皆茶讌を喜んだ。然し大煽りに煽つたのは秀吉で有つた。奥州武士の伊達政宗が罪を堂ヶ島に待つ間にさへ茶事を學んだほど、茶事は行はれたのである。勿論秀吉は小田原陣にも茶道宗匠を隨へてゐたほどである。南方外國や支那から、おもしろい器物を取寄せたり、又古渡の物、在來の物をも珍重したりして、おもしろい、味のあるものを大に尊んだ。骨董は非常の勢をもつて世に尊重され出した。勿論おもしろくないものや、味の無いものや、平凡のものを持囃したのでは無い。人をして成程と首肯點頭せしむるに足るだけの骨董を珍重したのである。それ食色の慾は限りがある、又それは劣等の慾、牛や豚も通有する慾である。人間はそれだけでは濟まぬ。食色の慾が足り、少しの閑暇が有り、利益や權力の慾火は斷えず燃ゆるにしても其れが世態漸く安固ならんとする傾を示して來て、然樣無暗に修羅心に任せて馳きまはることも無効ならんとする勢が見ゆる時に於て、何樣して趣味の慾が頭を擡げずに居よう。況んや又趣味には高下も有り優劣も有るから、優越の地に立ちたいといふ優勝慾も無論手傳ふことであつて、こゝに茶事といふ孤獨的で無い會合的の興味ある事が存するに於ては、誰か茶讌を好まぬものが有らう。そして又誰か他人の所有に優るところの面白い、味のある、平凡ならぬ骨董を得ることを悦ばぬ者が有らう。需むる者が多くて、給さるべき物は少い。さあ骨董が何樣して貴きが上にも貴くならずに居よ

う。上は大名達より、下は有福の町人に至るまで、競つて高慢税を拂はうとした。税率は人々が寄つてたかつて競り上げた。北野の大茶の湯なんて、馬鹿氣たことでも無く、不風流の事でも無いか知らぬが、一方から觀れば天下を茶の煽りに煽いて、大煽りに煽つたもので、高慢競爭をさせたやうなものだ。扨又當時に於て秀吉の威光を背後に負ひて目眩いほどに光り輝いたものは千利休であつた。勿論利休は不世出の英靈漢である。兵政の世界に於て秀吉が不世出の人であつたと同樣に、趣味の世界に於ては先づ以て最高位に立つべき不世出の人であつた。足利以來の趣味は此人によつて水際立つて進歩させられたのである。其の腦力も眼力も腕力も、尋常一樣の人では無い。利休以外にも英俊は存在したが、少々は差が有つても、皆大體に於ては利休と相呼應し、相追隨した人々であつて、利休は衆星の中に月の如く輝き、群魚を率ゐる先頭魚となつて悠然として居たのである。秀吉が利休を寵用したのは、流石秀吉である。足利氏の時にも相阿彌其他の人々、利休と同じやうな身分の人々は有つても、利休ほどの人も無く、又利休が用ゐられたほどに用ゐられた人も無く、又利休ほどに一世の趣味を動かして向上進歩せしめた人も無い。利休は實に天仙の才である。自分なぞは所謂茶の湯者流の儀禮などは塵ばかりも知らぬ者で有るけれども、利休が吾邦の趣味の世界に與へた恩澤は今に至て猶存して、自分等にも加被してゐることを感じてゐるものである。斯程の利休を秀吉が用ゐたのは實に流石に秀吉である。利休は當時に於て言はず語らずの間に高慢税査定者とされたのである。

利休が佳なりとした物を世人は佳なりとした。利休がおもしろいとし、貴しとした物を、世人はおもしろいとし、貴しとした。それは利休に一毫のウソも無くて、利休の佳とし、おもしろいとし、貴しとした物は、眞に佳なるもの、眞におもしろい物、眞に貴い物であつたからである。利休の指點したものは、それが塊然たる一陶器であつても一度其の指點を經るや金玉たゞならざる物となつたのである。勿論利休を除けて當時の趣味の世界を進歩させた諸星の働きも

有つたには相違ないが、一代の家匠として利休は恐ろしき威力を有して、諸星を引率し、世間をして追隨させたのである。それは利休のウソの無い、秀靈の趣味感から成立つたことで、何等其間にイヤな事も無い、利休が佳とし面白しとし貴しとした物は、長へに眞に佳であり面白くあり貴くある物で有るのであるが、然し又一面には當時の最高有力者たる秀吉が利休を用ゐ利休を尊み利休を殆んど神聖なるものとしたのが利休背後の大光焔だつたことも爭へない。で、利休の指の指したものは頑鐵も黄金となつたのである。點鐵成金は仙術の事だが、利休は實に靈術を有する天仙の臨凡したのであつたのである。一世は利休に追隨したのである。人々は爭つて利休の貴しとした物を貴しとした。これを得る喜悦、これを得る高慢のために、高慢税を納めることを敢てしたのである、其の高慢税の額は間接に皆利休の査定するところであつたのである。自身は其樣な卑役を取るつもりは無かつたらうが、自然の勢で自分も知らぬ間に何時か然樣いふ役廻りをさせられるやうになつてゐたのである。骨董が黄金何枚、何十枚、一郡、一城、或は血みどろの惡戰の功勞とも匹敵するやうなことになつた。換言すれば骨董は一種の不換紙幣のやうなものになつたので、そして其の不換紙幣の發行者は利休といふ譯になつたやうなものである。西郷が出したり大隈が出したりした不換紙幣は直に價値が低くなつたが、利休の出した不換紙幣は其後何百年を經て猶其價値を保つてゐる。流石は秀吉はエライ人間をつかまへて不換紙幣發行者としたもので、そして利休は又ホントに無慾で而も煉金術を眞に能くした神仙であつたのである。不換紙幣は當時何程世の中の調節に與つて靈力が有つたか知れぬ。其利を受けた者は勿論利休では無い、秀吉で有つた。秀吉は恐ろしい男で、神仙を驅使して吾が用を爲さしめたのである。扨祭りが濟めば芻狗は不要だ。よい加減に不換紙幣が流通した時、不換紙幣發行は打切られ、利休は詰らぬ理屈を付けられて殺されて終つた。後から後からと際限無く發行されるのでは無いから、不換紙幣は長く其價値を保つた。各大名や有福町人の藏の中に收まりかへつてゐた。考へて見れ

ば黄金や寶石だつて人生に取つて眞價値が有るのでは無い、矢張り一種の手形ぢやまでなのであらう。徹底して觀ずれば骨董も黄金も寶石も兌換券も不換紙幣も似たり寄つたりで、承知されて通用すれば樹の葉が小判でも不思議は無いのだ。骨董の佳い物おもしろい物の方が大判やダイヤモンドよりも佳くもあり面白くもあるから、金貨や兌換券で高價税をウンと拂つて、釉の工合の妙味言ふ可からざる茶碗なり茶入なり、何によらず見處の有る骨董を、好きならば手にして樂しむ方が、暢達した料簡といふものだ。理屈に沈む秋のさびしさ、よりも、理屈をぬけて春のおもしろ、の方が好さゝうな譯だ。關西の大富豪で茶道好きだつた人が、死ぬ間際に數萬金で一茶器を手に入れて、幾時間を樂んで死んでしまつた。一時間が何千圓に當つた譯だ、なぞと譏る者が有るが、それは譏る方がケチな根性で、一生理屈地獄でノタウチ廻るよりほかの能の無い、理屈をぬけた樂しい天地の有ることを知らぬからの論だ。趣味の前には百萬兩だつて煙草の煙よりも果敢いものにしか思へぬことを會得しないからだ。

骨董は何樣考へてもいろ〳〵の意味で惡いものでは無い。特に年寄になつたり金持になつたりしたものには、骨董でも捻くつて貰つてゐるのが何より好い。不老若返り藥などを年寄に用ゐて貰つて、若い者の邪魔をさせるなどは惡い洒落だ。老人には老人相應のオモチャを當がつて、落ついて隅の方で高慢の顏をさせて置く方が、天下泰平の御祈禱になる。小供はセルロイドの玩器を持つ、年寄は樂燒の玩器を持つ、と小學讀本に書いて置いても差支無い位だ。又金持は兎角に金が餘つて氣の毒な運命に囚へられてるものだから、六朝佛印度佛ぐらゐでは濟度されない故、夏殷周の頃の大古物、妲己の金盥に狐の毛が三本着いてゐるのだの、伊尹の使つた料理鍋、禹の穿いたカナカンジキだのといふやうなものを素敵に高く買はすべきで、此は是れ有無相通世、間の不公平を除き、社會主義者だの、無產者だの、といふむづかしい神々の神慮をすゞしめ奉る御神樂の一座にも相成る譯だ。

が、それはそれで可いとして、年寄でも無く、二才でも無く、金持でも無く、文無しでも無い。所謂中年中產階級の者でも骨董を好かぬとは限らない。斯樣いふ連中は全く盲人といふでも無く、されば云つて高慢税を進んで澤山納め奉るほどの金も意氣も無いので、得て中有に迷つた亡者のやうになる。ところが書畫骨董に心を寄せたり手を出したりする者の大多數は此の連中で、仕方が無いから此の連中の內で聰明でも有り善良でも有る輩は、高級骨董の素晴らしい物に手を掛けたく無い事は無いが、それは雲に梯の及ばぬ戀路みたやうなものだから、矢張り自分等の身分相應の中流どころの骨董で樂しむことになる。一番聰明善良なるものは分科的專門的にして、自分の關係しようとする範圍を成るべく狹小にし、そして歲月を其中で樂しむ。所謂一ト筋を遁し、一ト流れを守つて、畫なら畫で、何派の誰を中心にしたところとか、陶器なら陶器で、何窯の何時頃とか、書なら書で、儒者の誰々とか、蒔繪なら蒔繪で、極古いところとか、近いところとか、と云ふやうに心を寄せ手を掛ける。此の「筋の通つた蒐集研究をする」これは最も賢明で本當の仕方であるから、相應に月謝さへ拂へば、立派に眼も明き味も解つて來て、間違無く、最も無難に清娛を得る譯だから論は無い。しかるに又大多數の人々はそれでは律義過ぎて面白くないから、コケが東西南北の水轄にあたるやうに、雪舟くさいものにも眼を遣れば、應擧くさいものにも手を出す、歌麿がゝつたものにも色氣を出す、大雅堂や竹田の畫なんていふ變なものをも買はぬと限らぬ勢で、それでも畫のみならまだしもの事、彫刻でも漆器でも陶器でも武器でも茶器でもといふやうに氣が多い。然樣いふ人々は甚だ少く無いが、時に氣の毒な目を見るのも然樣いふ人々で、惡ばたけにも鍬を入れたがる、運が好ければ韓幹の馬でも百圓位で買はふ氣で居り、支那の笑話にある通り、杜荀鶴の鶴氣は無くとも少し慾氣が手傳つてゐると、百貨店で品物を買つたやうな譯では無い目にも自業自得で出會ふのである。中には些性が惡くて、骨董商の鼻毛を拔いて所謂堀出物をする氣になつてゐる者もある。骨董商は一寸取片付けて澄ま

して居るものだが、それだつて何も慈善事業で店を開いてゐる譯では無い、其道に年期を入れ資本を入れて、それで妻子を過してゐるのだから、三十圓のものは口錢や經費に二十圓遣つて五十圓で買ふつもりでゐれば何の間違は無いものを、五十圓のものを三十圓で買ふ氣になつて居ては世の中がスラリとは行かない。五圓のものを三十圓で賣附けられるやうなことも、能り間違へば出來ることになる道理だ。それを彌が上にもアコギな掘出し氣で、三圓五十錢で乾山の皿を買はうなんぞといふ圖々しい料簡を腹の底に持つて居たとて、何の、乾也だつて手に入る譯は有りはしない。勸業債劵は一枚買つて千圓も二千圓もになる事は有つても、掘出しなんといふことは先以て無かるべきことだ。惡性の料簡だ、劣等の心得だ、そして暗愚の意圖といふものだ。然るに骨董いぢりをすると、骨董には必ず何程かの價があり金錢觀念が伴ふので、知らず識らずに賤しく無かつた人も掘出し氣になる氣味のあるものである。これは骨董のイヤな箇條の一つになる。

掘出し物といふ言葉は元來が忌はしい言葉で、最初は土中冢中などから掘出した物といふことに違ひ無い。惡い奴が棒一本か鍬一挺で、墓など掘つて結構なものを得る、それが即ち掘出物で、怪しからぬ次第だ。伐墓といふ語は支那には古い言葉で、昔から無法者が貴人などの墓を掘つた。今存してゐる三略は張良の墓を掘つて彼が黄石公から頂戴したものをアップしたといふ傳説だが、三略は然樣して世に出たものでは無い。全く僞物だ。然し古い立派な人の墓を掘ることは行はれた事で、明の天子の墓を惡僧が掘つて種々の貴い物を奪ひ、おまけに骸骨を足蹴にしたので罰が當つて脚疾になり、其事遂に發覺するに至つた讀むさへ忌はしい談は雜書に見えて居る。發掘さるゝを厭つて曹操は多くの僞塚を造つて置いたなどゝいふことは、近頃の考證で然樣では無いと分明したが、王安石などさへ僞塚の傳説を信じて詩を作つたりして居たところを見ると、伐墓の事は隨分めづらしいことで無かつたことが思はれる。支那の言俗では、身分

のある死者の口中には玉を含ませて葬ることもあるのだから、酷い奴は冢中の寶物から、骸骨の口の中の玉まで引ぱり出して奪ふことも敢てしようとしたことも有らう。雒縣あたりとか聞いたが、今でも百姓が冬の農暇になると、鋤鍬を用意して先達を先に立てゝ、あちこちの古い墓を捜しまはつて、所謂掘出し物拵きをするといふ噂を聞いた。虚談では無いらしい。日本でも時々飛んでもないことをする者があつて、先年西の方の某國で或る貴い塋域を犯した事件といふのが傳へられた。聞くさへ忌はしいことだが、掘出し物といふ語は無論かういふ事に本づいて出來た語だから、苟も普通人的感情を有してゐる者の使ふべきでも思ふべきでも無い語であり事である。それにも關はらず掘出し物根性の者が多く、蚤取り眼、熊鷹眼で、内心大掘出しを仕度がつてゐる。人が少し惡い代りに慾が大に好い談である。然樣いふ人間が多いから商賣が險惡になつて、西の方で出來たイカサマ物を東の方の田舍へ埋めて置いて、掘出し黨に好い掘出しを仕たつもりで悅ばせて、そして釣鉤へ引掛けるなどといふ者も出て來る。京都出來のものを朝鮮へ埋めて置いて、掘出させた類で、チヤンと釣るなぞといふケレン商賣も始まるのである。若し眞に掘出しをする者が有れば、それは無賴潑皮の徒で無ければならぬ。又其の掘出物を安く買つて高く賣り、其間に利を得る者があれば、それは即ち營業税を拂つてゐる商賣人で無ければならぬ。商賣人は年期を入れ資本を入れ、海千山千の苦勞を積んでゐるのである。每日每日眞劍勝負をするやうな氣になつて、良い物、惡い物、二番手、三番手、いづれ結構上々の物は少い世の中に、一ト眼見損へば痛手を負はねばならぬ瀨に立つて、いろ／＼さま／＼あらゆる骨董相應の値ぶみを間違はず付けて、そして何がしかの口錢を得ようとするのが商賣の正しい心掛である。何樣して油斷も隙もなりはしない。波の中に舟を操つてゐるやうなものである。波瀾重疊が此の商買の常である。そこへ素人が割込んだとて何が出來よう。今此の波瀾重疊險危な骨董世界の有樣を想見するに足りる談を一寸示さう。但しいづれも自分が假設したので無い、出處は有るのである。所

訂「出」は判然してゐるので、御所望ならば御割かし申して宜しいのです。ハヽヽ。

これは二百年近く古い書に見えてゐる談である。京都は堀川に金八といふ聞えた道具屋があつた。此の金八が若い時の事で、親父にも仕込まれ、自分も心の励みの功を積んだので、大分に眼が利いて來て、自分ではもう内々、仲間の者にもヒケは取らない、立派な一人前の男になつた積りでゐる。實際また何から何までに渡つて、隨分に目も屆けば氣も働いて、もう親父から店を讓られても、取りしきつて一人で遣つて行かれるほどに成つてゐたのである。然し何家の老人も同じ事で、親父は其の老成 の大事取りの心から、且は有餘る親 切の氣味から、まだ〳〵位に思つてゐた事であらう、依然として金八の背後に立つて保護してゐた。

金八が或時大阪へ下つた。其の途中深草を通ると、道に一軒の古道具屋があつた。そこは商買の事で、一寸一ト眼見渡すと、時代蒔繪の結構な鐙がチラリと眼についた。ハテ好い鐙だナ、と立留つて覗ると、如何にも時代といひ、出來といひ、中々めつたには無い好いものだが、殘念なことには一方しか無かつた。揃つて居れば、勿論こんな店にあるべきものでは無い筈だが、それにしても何程といふだらうと、價を聞くと、ほんの端金(ハシタガネ)だつた。アヽ、一對なら、おれの腕で賣れば慥に三十兩にはなるものだが、片方では仕方が無い、少しの金にせよ賣物にならぬものを買つたつて何樣もならぬと、何とも云へない其鐙の好い味に心は惹かれながら、振返つては見つゝも思ひ捨てゝ買はずに大阪へと下つた。いくら好い物でも商賣にならぬものを買はなかつたところは流石に宜かつた。ところが、それから道の程を經て、京橋邊の道具屋に行くと、偶然と云はうか、天の引合せと云はうか、たしかに前の鐙と同じ鐙が片方あつた。ン、これが別れ〳〵て兩方後家になつてゐたのだナ、しめた、これを買つて、深草のを買つて、兩方合はせれば三十兩、と早くも腹の中で笑を含んで、價を問ふと片方の割合には高いことを云つて、これほどの物は片方にせよ稀有のものだから

と、中々廉くない。仕方が無いから割に高いけれども、腹の中の目的があるので、先方の云ひ値で買つて、吾が家へ歸ると直に此話をした、勿論親父に悦ばれるつもりであつた。すると親父は悦ぶところか大怒りで「たはけづらめ、慾に氣が急いて、鐙の左右にも心を附けずに買ひ居つたナ」と罵られた。金八も馬鹿ぢや無かつた。ハツと氣が付いて「じまつた。向後氣をつけます、御免なさいまし」と叩頭したが、それから「片鐙の金八」といふ渾名を付けられたといふことである。これは、もとより片方しか無かつた鐙を、深草で値を付けさせて置いて、捷徑のまはり道をして同じ其鐙を京橋の他の店へ埋めて置いて金八に掘出させたのだ。心さへ急かねば謀られる譯は無いが、他人に仕て遣られぬ前にといふのと、なまじ前に熟視して居て、テツキリ同じ物だと思つた心の虚といふものとの二ツから、金八ほどの者も右左を調べることを忘れて、一盃食はせられたのである。親父は流石に老功で、後家の鐙を買合せて大きい利を得る、そんな甘い事が有るものでは無いといふところに勘を付けて、直に右左の調べに及ばなかつたナと、紙燭をさし出して慾心の黒闇を破つたところは親父だけあつたのである。勿論深草を尋ねても鐙は無くつて、片鐙の浮名だけが金八の利得になつたのである。昔と今とは違ふが、今だつて信州と名古屋とか、東京と北京とかの間で、此手で謀られたなら、慾氣滿々の者は一服頂戴せぬとは限るまい。片鐙の金八は一寸おもしろい談だ。

も一ツ古い談をしようか、これは明末の人の雜筆に出てゐるので、其の大分に複雜で、そして其談中に出て來る骨董好きの人々や骨董屋の種々の性格風丰がおのづと現はれて、且又高貴の品物に搦む愛著や慾念の表裏が如何樣に深刻で險危なものであるといふことを語つて居る點で甚だ面白いと感ずるのみならず、骨董といふものに就て一種の淡い省悟を發せしめられるやうな氣味があるので、自分だけかは知らぬが興味有ることに覺える。談の中に出て來る人々には名高い人々も有り、勿論虛構の談では無いと考へられるのである。

定窯といへば少し骨董好きの人なら誰でも知つてゐる貴い陶器だ。宋の時代に定州で出來たものだから定窯といふのである。詳しく言へば其中にも南定と北定とあつて、南定といふのは宋が金に逐はれて南渡してからのもので、勿論其前の北宋の時、美術天子の徽宗皇帝の政和宣和頃、即ち西暦千百十年頃から二十何年頃までの間に出來た北定の方が貴いのである。又、新定といふものがあるが、それは下つて元の頃に出來たもので、ほんとの定窯では無い。北定の本色は白で、白の泑水の加はつた工合に、何とも云へぬ面白い味が出て、然程に大したもので無くてさへ人を引付ける。

ところが、ここに一つの定窯の寶鼎があつた。それは鼎のことであるから蓋し當時宮庭へでも納めたものであつたろう、精中の精、美中の美で、實に驚くべき神品であつた。はじめ明の成化弘治の頃、朱陽の孫氏が曲水山房に藏してゐた。曲水山房主人孫氏は大富豪で、そして風雅人鑑賞家として知られた孫七峯とつゞき合で、七峯は當時の名士であつた楊文襄、文太史、祝京兆、唐解元、李西涯等と朋友で、七峯の居たところの南山で、正德十五年七峯が南亭の古のやうに修禊の會をした時は、唐六如が圖をつくり、兼ねて長歌を題した位で、孫氏は單に大富豪だつたばつかりで無かつたのである。そこで其の定窯の鼎の寨座には、友人だつた李西涯が篆書で銘を書いて、鐫りつけた。李西涯の銘だけでも、今日は勿論の事、當時でも珍重したものであつたらう。然様いふスバらしい鼎だつたのである。

ところが嘉靖年間に倭寇に荒されて、大富豪だけに孫氏は種々の點で損害を蒙つて、次第次第に家運が傾いた。で、蓄へてゐたところの珍貴な品々を段々と手放すやうになつた。鼎は遂に京口の靳尚寶の手に渡つた。それから毘陵の唐太常凝菴が非常に懇望して、とう〳〵凝菴の手に入つたが、此の凝菴といふ人は、地位もあり、富力もある上に、博雅で、鑒識にも長け、勿論學問も有つた人だつたらう、家には非常に多くの優秀た骨董を有して居た。然し孫氏舊藏の白定窯鼎が來るに及んで、諸の窯器は皆其の光輝を失つたほどであつた。そこで天下の窯器を論ずる者は、唐氏凝菴の定

鼎を以て、海内第一、天下一品とすることに定まつてしまつた。實際無類絶好の奇寳で有り、そして一見した者と一見もせぬ者とに論無く、衆に嘖々として云傳へ聞傳へて羨涎を垂れるところのものであつた。

こゝに呉門の周丹泉といふ人があつた。心慧思巧の非常の英物で、美術骨董にかけては先づ天才的の眼も手も有して居た人であつたが、或時金閶から舟に乗り、江右に往く、道に毘陵を經て、唐太常に拜謁を請ひ、そして天下有名の彼の定鼎の一覧を需めた。丹泉の俗物で無いことを知つて交つてゐた唐氏は喜んで引見して、そして其需に應じた。丹泉はしきりに稱讃して其の鼎をためつすがめつ熟視し、手をもつて大さを度つたり、ふところ紙に鼎の紋様を模したりして、斯様いふ奇品に面した眼福を喜び謝したりして歸つた。そしてまた舟を出して自分の旅路に上つてしまつた。

それから半歳餘り經た頃、また周丹泉が唐太常をおとづれた。そして丹泉は意氣安閑として、過ぐる日の禮を述べた後、「御秘藏のと同じやうな白定鼎をそれがしも手に入れました」と云つた。唐太常は吃驚した。天下一品と誇つてゐたものが、他所にも有つたといふのだからである。で、「それならば其品を視せて下さい」といふと、丹泉は携へて來てゐたのであるから、異議なく視せた。唐は手に取つて視ると、大きさから、重さから、骨質から、釉色の工合から、全く吾が家のものと寸分違はなかつた。そこで早速自分の所有のを出して見競べて視ると、兄弟か攣生か、いづれをいづれとも言ひかねるほど同じものであつた。自分のゝ蓋を丹泉の鼎に合せて見ると、しつくりと合する。臺座を合せて見ても、又それが爲に造つたものゝやうにぴたりと合ふ。愈々驚いた太常は溜息を吐かぬばかりになつて、「して君の此の定鼎は何様いふところからの傳來である」と問うた。すると丹泉は莞爾と笑つて、「此の鼎は實は貴家から出たのでございまする、嘗て貴堂に於て尊鼎を拜見しました時、拙者は其の大小輕重形貌精神、一切を擧げて拙者の胸中に了々と會得しました、そこで實は倣つて之を造りましたので、有り體に申します、貴意を欺くやうなことは致しませぬ」と云つた。丹

泉は元來毎々江西の景德鎭へ行つては、古代の窯器の佳品の模製を良工に指圖しては作らせて、そして所謂掘出し好きや、比較的低い錢で高い物を買はうとする慾張りや、譯も分らぬ癖に金錢づくで貴い物を得ようとする耳食者流の目をまはさせて居たもので、其の製作は款紋色澤、すべて明々として眞に逼つたものであつたのである。恐ろしい人も有つたもので、明の頃に既に斯樣いふ人が有つたのであるから、今日でも此人の造らせた模品が北定窯だの何だのと云つて何處かの家に什襲珍藏されて居ぬとは限るまい。扨、周の談を聞いて太常は又今更に歎服した。で、「それならば此の新鼎は自分に御讓りを願ふ、眞品と共に秘藏して永く副品としますから」といふので、四十金を贈つたといふことである。無論丹泉は其後復同じ品を造りはしなかつたので有らう。

此談だけでも可なり骨董好きは敎へられるところが有らうが、談はまだ續くのである。それから年月を經て、萬曆の末年頃、淮安に杜九如といふものが有つた。これは商人で、大身上で、素敵な物を買出すので名を得てゐた。千金を惜まずして奇玩を是れ購ふので、董元宰の舊藏の漢玉章、劉海日の舊藏の商金鼎なんといふものも、皆杜九如の手に落ちた位である。此の杜九如が唐太常の家に在る定鼎の噂を聞いて居て、かねがね何樣かして手に入れたいものだと覬つてゐた。太常の家は孫の代になつて、君俞といふものが當主であつた。君俞は名家に生れて、氣位も高く、且つ豪華で交際を好む人であつたので、九如は大金を貸らして君俞の爲に壽を爲し、是非とも何樣か名高い定鼎を拜見して、生平の渇望を慰したいと申出した。君俞は金で面を撲るやうな九如を餘り好みもせず、且つ自分の家柄からして下眼に覗たことででも有らう、ウン御覽に入れませう、と云つて、半分冗談に、眞鼎は深藏したまゝ、彼の周丹泉が倣造した副の方の假鼎を出して視せた。假鼎だつて、最初眞鼎の持主の凝菴が歎服した位のものでは有り、まして眞鼎を目にしたことは無い九如であるから、贋物と悟らうやうは無い、すつかり其の高雅妙巧の威に撲たれて慾つて、堪らない佳い物だ

と思ひ込んで惚れ〳〵した。そこで無理やりに千金を押付て、別に二百金を中間に立つて取做して呉れる人に酬ひ、そして贋鼎を豪奪するやうにして去つた。巧偷豪奪といふ語は、宋の頃から既に數々見える語で、骨董好きの人々には豪奪といふことも自然と起らざるを得ぬことである。マアこれも恕すべきこととすれば恕すべきことである。

然し君兪の方では困ることであつた。何故と云へば持つて行かれたのが眞物では無いからである。君兪は元來は高位の高いところから、町人の腹ツぷくれなんぞ何だ、といふ位のことで贋物を眞顔で視せたのであるが、元來が人の悪い人でも何でも無く、温厚の人なので、欺いたやうになつたまゝ濟ませて置くことは出來ぬと思つた。そこで門下の士を遣つて、九如に告げさせた。「君が取つて行つたものは實は贋鼎である、眞の定鼎はまだ此方に藏してあるので、それは太常公の戒に遵つて輕々しく人に示さぬことになつてゐるから御視せ申さなかつたのである。然るに君が既に千金を捐てゝ贋品を有つてゐるといふことになると、君は知らなくても、自分は心に愧ぢぬといふ譯にはゆかぬでは無いか。何樣か彼の鼎を還して下さい、千金は無論御返しするから」と理解させたのである。ところが世間に得て有るところの例で、品物を賣る前には金が貴く思へて品物を手放すが、品物を手放して了ふと其物の無いのが淋しくなり、それに未練が出て取返したくなるものである。杜九如の方ではテッキリそれだと思つたから、贋物だつたなぞといふのは口實だと考へて、約束變改をしたいのが本心だと見た。そこで「何樣いたしまして。あの樣な贋物が有るものではございますまい。假令贋物にしましたところで、手前の方では結構でございます、頂戴致して置きまして後悔はございません」とやり返した。「そんなに此方の言葉を御信用が無いならば、二つの鼎を列べて御覽になつたらば如何です」と一方は云つたが、それでも一方は信疑相半して、「當方は何樣しても頂戴して置きます」と意地張つた。そこで唐君兪は遂に眞鼎を出して、贋鼎に比べて視せた。双方とも立派なものでは有るが、比べて視ると、神彩煥威、もとより眞物は世間に二ツ

とあるべきで無いところを見はした。然し杜九如も前言の手前、如何ともしようとは云はなかつた。つまり模品だといふことを承知したゞけに止まつて、返しはし無かつた。九如の其時の心の中は傍からは中々面白く感ぜられるが、當人に取つては隨分變なもので有つたらう。然し此の委曲を世間が知らう筈は無い、九如の家には千金に易へた寶鼎が傳はつたのである。九如は老死して、其子がこれを傳へて有つてゐた。

王廷珸字は越石と云ふ者が有つた。これは片鐙を金八に賣りつけたやうな性質の良く居い骨董屋であつた。この男が杜九如の家に大した定鼎の有ることを知つてゐた。九如の子は放蕩もので有つたので、花柳の巷に大金を捨てゝ、家も段段に惡くなつた。そこへ付込んで廷珸は杜生に八百金を提供して、そして「御返金にならない場合でも御宅の窯鼎さへ御渡し下されば」といふことを云つて置いた。杜生はお坊さんで、廷珸の謀つた通りになり、鼎は廷語の手に落ちて了つた。廷珸は大喜びて、天下一品、價値萬金なんぞと大法螺を吹立て、かねて好事で鳴つてゐる徐六岳といふ大紳に賣付けにかゝつた。徐六岳を最初から廷珸は好い鳥だと狙つて居たのであらう。ところが徐はあまり廷珸か狡譎なのを惡んで、横を向いて了つた。廷珸はアテがはづれて困つたが仕方が居かつた。もとよりヤリクリをして、狡辛く世を送つてゐるものだから、嵌め込む目的が無い時は質に入れたり、色氣の見える客が出た時は忽に質受けしたり、十餘年の間といふものは、まるで毬を打つやうなカラクリを仕てゐた其の間に、同じやうな族類系統の有たものをいろ／＼求めて、何樣かして甘い汁を啜らうとして居た。其中に泰興の季因是といふ、相當の位地のある者が廷珸に引かゝつた。

季因是もかねて唐家の定窯鼎の事を耳にしてゐた。勿論見た事も無ければ、詳しい談を聞いてゐたのでも無い。ただ其の名に憧れて、大した名物だといふことを知つて居たに過ぎない。廷珸は因是の甘いお客だといふことを見抜いて、「これが其の寶器でございまして、これ／＼の譯で出たものでございまする」と宜い加減な傳來のいきさつ談をして、一つ

の窯鼎を賣りつけた。それも自分が杜生から得た物を賣つたのならまだしもであつて、贋鼎にせよ周丹泉の立派な模品であるから宜いが、似ても似つかぬ物で、しかも形さへ異つてゐる方鼎で有つた。然し季因是はまるで知らなかつたのだらう、廷珸の言に瞞着されて、大名物を得る悦びに五百金といふ高價税を拂つて、大ニコニコで居た。

然るに毘陵の趙再思といふ者が、偶然泰興を過ぎたので、知合で有つたから季因是の家をおとづれた。毘陵は即ち唐家の在るところの地で、同じ毘陵の者であるから、趙再思も唐家に遊んだことも有つて、彼の大名物の定鼎を見たことも有つたのである。其の毘陵の人が來たので、季因是は大天狗で、「近ごろ大した物を手に入れましたが、それは乃ち唐氏の舊藏の名物で、わざとにも御評鑒を得たいと思つて居りましたところを、丁度御光來を得ましたのは誠に仕合せで」と云ふ談だ。趙再思はたゞハイ〳〵と云つてゐると、季は重ねて、「唐家の定鼎の方鼎は、君も曾て御覧になつたことが御有りですか」と云つた。そこで趙は堪へかねて笑ひ出して、「何と仰ります。唐氏の定鼎は方鼎ではございませぬ、圓鼎で、足は三つで、方鼎と仰あるが、それは何で」と答へた。季因是はこれを聽くと廢然として奥へ入つて了つて久しく出て來なかつた。趙再思は仕方無しに俟つてゐると、暮方になつて漸く季は出て來て、餘怒猶は色に在るばかりで、「自分に方鼎を賣付けた王廷珸といふ奴めは人を馬鹿にした憎い奴、南科の屈靜源は自分が取立てたのですから、今書面を靜源に遣はしました。靜源は自分の爲に此の一埒を明けて呉れませう」といふことであつた。果して屈靜源は有司に屬して追理しようとしたから、王廷珸は大しくじりで、一目散に姿を隱して仕舞つて、人をたのんで詫を入れ、別に僞物などを贈つて、やつと牢獄へ打込まれるのを免れた。

談はこれだけで濟んでも、可なり可笑味も有り愉快も有つて澤山なのであるが、まだ續くから愈々變なものだ。廷珸の知合に黄賁石、名は正賓といふものがあつた。廷珸と同じ徽州のもので、親類つゞきだなど云つてゐたが、此男は揩

紳の間にも遊び、少しは骨董書畫の類をも蓄へ、又少しは眼もあつて、本業といふのでは無いが、半黒人で賣つたり買つたりも仕ようといふ男だ。斯樣いふ男は隨分世間にも有るもので、雅のやうで俗で、俗のやうで物好でも有つて、愚のやうで怜悧で、怜悧のやうで畢竟は愚のやうでもある。不才の才子である。此の正賓はいつも延珸と互に所有の骨董を取易へごとをしたり、賣買の世話をしたりさせたりして、そして面白がつてゐた。此男が自分の倪雲林の山水一幅、すばらしい上出來なのを延珸に託して賣つて貰はうとしてゐた。價は百二十金で、一寸は無い程のものだつた。で、延珸の手へ託しては置いたが、金高ものでもあり、口が遠くて長くなる間に、何樣な事が起らぬとも限らぬと思つたので、そこは中々ウツカリして居ぬ男なので、其幅の知れないところへ豫じめ自分の花押を記して置いて、勿論延珸にも其事は秘して居つたのである。延珸は其の雲林を見ると素敵に好いので、欲しくなつて堪らなかつた。で、上手な贋筆かきに賴んで、すつかり其通りの模本をこしらへさせた。正賓が取返しに來た時、米元章流の巧偸をやらかして、摹本の方を渡して知らん顏をきめようと云ふのであつた。ところが先方にも荒神樣が付いてゐない譯では無くて、チヤンと隱し印のあること、には氣が付かなかつたのである。斯樣いふイキサツだから何時まで經つても賣れない。そこで正賓は召使の男を遣つて、雲林を取返して來いと云付けた。隱し印のことは無論男に呑込ませたのである。此の男の王佛元といふのも、平常主人等の五分もすかさないところを口聞して知つてゐるので、中々賢くなつてゐる奴だつた。で、佛元は延珸のところへ往つて、雲林を返して下さいと云ふと、延珸は承知して一幅を返した。一幅は何も彼も異つては居なかつた。しかし佛元は隱しじるしの有り處に就いて其の有無を査べた。不思議や主人の花押は影も形も無かつた。無い筈である。延珸が今渡したものは正しく摹品なのであるもの。

佛元は扨こそと腹の中でニヤリと笑つた。ところで此男がまた眞劍白刃取りを奉書の紙一枚で遣付けようといふ男だ

全集

豫約募集

二、月貳冊宛ヲ刊行シ大正十七年十一月ヲ以テ完結ス

二、内容製本及紙 概要 明治大正ニ於ケル代表的文學ニ關スルモノニシテ其ノ體裁紙數左ノ如シ

體　裁　（一）並　製　菊判紙裝
　　　　（二）特　製　菊判洋裝天金兩面クロース函入

紙　數　特製並製共約三百頁

三、豫約定價及代金前納ノ方法

第一、**定　價**：左ノ通リニシテ毎卷拂込ヲ俟テ發送ス

（甲）分　拂
（一）壹　冊　拂　並製　壹圓　特製　壹圓五拾錢
（二）十二冊前拂　並製　十一圓五拾錢　特製　十七圓
（三）廿四冊前拂　並製　二十三圓　特製　三十三圓

（乙）一時拂　並製　三十三圓　特製　五十圓

（丙）送　料　一時拂ト分拂トヲ問ハス一冊ニ付十錢但シ書留送附ヲ希望セラル丶向ハ別ニ書留送料十錢増

第二、**申込金**：申込金トシテ金一圓ヲ申込ト同時ニ拂込ミノ事。但申込金ハ最終ノ會費ニ充當ス

第三、**申込期限**：申込期限ハ大正十五年十一月卅日迄トス

□尚詳細は内容見本及新聞廣告改造十二月號によりて發表す

□**内容見本**ハガキにて申込次第送付します

□締切拾壹月參拾日

政史

第二節 財政組織
一 財政官廳
二 出納の法
三 收入源
四 中央と地方との關係
第三節 租稅制度
一 田租及び地子
二 夫役及び庸調
三 出擧及び義倉粟
四 租稅の減免及び逋脫
第四章 莊園社會の財政
第一節 財政狀態
一 莊園の發達と財政
二 財政の窮乏
三 財政窮乏に對する政策
第二節 財政組織
一 財政機關
二 收入源
三 中央と地方との關係

二 幕府の財政狀態
三 諸侯の財政狀態
第二節 財政組織
一 財政機關
二 收入源
三 收入の分析
四 財政と米價、貨幣改鑄及び御用金等との關係
五 經費
第三節 租稅制度
一 租稅の種類
二 租稅の賦課及減免
三 租稅の誅求
第七章 我國財政發達の特徵
一 明治の財政
二 財政の變遷
索引
年號表

定價金貳圓五拾錢 送料貳拾四錢

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 **改造社**

つたから、「これは怪しからん、模本贋物を御渡しになるとは、」と眞正面から此方の理屈の木刀を揮つて先方の讒悪の眞劍と切結ぶやうな不利なことをする者では無かつた。何でも無い顔をして摸本の雲林を受取つた、敵の眞劍を受留めはしないで、澄まして體を交にして危氣の無いところに身を置いたのである。そして斯様いふことを言つた。「主人はただ私に書を頂戴して参れとばかりでは無く、こちらの定窯鼎をば預かり致してまゐれ、御値段の事はいづれ御相談致します」と云つた。定鼎の賣れ口が有りさうな談である。そこで廷珸は悦んで例の鼎を出して佛元に渡した。廷珸は佛元に、より長い眞劍を渡して終つたのである。

そこへ正賓が遣つて來た。そして書を撿査してから、「售れないなら售れないで、原物を返して呉れるべきに、狡いことをしては困る、」と云ふと、「飛んでも無い、正しくこれは原物で」と廷珸は云ひ張る。「イヤ、然様は脱けさせない、自分は隠しじるしを仕て置いた、それが今何處に在る。ソンナ甘い手を食はせられる自分ぢやない」と云ふ。「それや云掛りといふもので、原物を返せば論は無い筈だ」と云ふ。双方負けず劣らず遣り合つて、チヤンチヤンバラと闘つたが、佛元は左右の指を鼎の耳へかけて、此鼎を還すまじいさまをして居た。論に勝つても鼎を取られては詰らぬと氣のついた廷珸は、スキを見て鼎を奪取らうとしたが、耳をしつかり持つてゐたのだつたから、巧く奪へなかつた。耳は折れる、鼎は地に墜ちる。カチヤンといふ音一ツで、千萬金にもと思つて居たものは粉砕してしまつた。ハッと思ふと憤恨一時に爆裂した廷珸は夢中になつて當面の敵の正賓にウンと頭撞(ヅツ)きを食はせた。正賓は肋を傷けられて卒倒し、一場は無茶苦茶になつた。

元來正賓は近年逆境に居り、且又不如意で、惜しい雲林さへ放さうとして居た位のところへ、廷珸の侮りに遭ひ、物は取上げられ、肋さへ傷けられたので、憤悶苦痛一時に逼り、幾夕もして終に死んで仕舞つた。廷珸も人命沙汰になつたの

で土地には居られないから、出發して跡を杭州にくらました。周丹泉の遺つた模品はこれで土に返つた譯である。

談はもうこれで澤山であるのに、まだ續くから罪が深い。延珸が前に定窯の鼎類數種を蒐めた中に、猶ほ唐氏珍藏の定鼎と號して大名物を以て人を欺くべきものが有つた。延珸は杭州に逃げたところ、當時潞王が杭州に寓して居られた。延珸は潞王の承奉俞啓雲といふ者に遇つて、賓鼎を出して示して、これが唐氏珍藏の大名物と誇耀した。そして潞藩に手引して貰つて、手取り千六百金、四百金を承奉に賄ることにして、二千金で賣付けた。時はもう明末にかゝり、潞事不束で、人も滿足なものも無かつたので、一厨役の少し麁鹵なものに其鼎を藏した箪笥を扱はせたので、其男があやまつて其の贋鼎の一足を打つて仕舞つた。で、其男は罪を懼れて身を投げて死んで終つた。其頃大兵が杭州に入つて來たつて、潞王は奔り、承奉は廢鼎を錢塘江に沈めて仕舞つたといふ。

これで此の一條の談は終りであるが、骨董といふものに附隨して隨分種々の現象が見られることは、ひとり此の談のみの事では有るまい。骨董は好い、骨董はおもしろい。たゞし願はくはスラリと大枚な高慢税を出して樂みたい。延珸や正賓のやうな者に誰しも關係したくは思ふまい。これからまた、何程詰らぬ人にだつて、鼎の足を打つたゝめに身を投げて貰つたりなぞしたくは有るまい。

鬼熊一代記

田中貢太郎

一

大正十四年九月二十八日の夕方のことであつた。千葉縣香取郡多古町の隣村、久賀村二本松の旅人宿松野屋の二階では、荷馬車挽の熊次郎が酒を飲んでゐた。熊はさうしてその小さな陽やけのした頬骨の張つた顔をふくらまして、隣の室の話聲に耳をかしげてゐた。隣の室からは細ほそとした男の聲と、賑かな女の聲とが聞えてゐた。そして、女の聲がちよと切れると、熊は、

『おい、おい、おい、』

と、突つかかるやうに云つた。すると下から愛嬌のない女の聲がした。

『なんだね、熊さん、用かね、』

それはお神さんの聲であつた。熊は叱りとばすやうに言つた。

『おめへに用はねえのだ、用はおはなにあるのだ、』

『おはなさんだつて、お客さんがあるぢやないかね、』

『俺はお客ぢやねえのか、』

お神さんが續いて何か云ひかけたところへ、隣の室から足音がして銀杏返に結つた眼にねつとりした光のある年増女の顔が覗いた。それはおはなであつた。

『どうしたのだね、熊さん、おまへさん酔つたね、』

『すこしは酔つたらうよ、飲んでるからな、』

熊はその二三日そこに入りびたつてゐた。女は氣輕に室の中へ入つた。

『おまへさんは、この頃、どうかしてゐるね、』

『どうかしてるよ、俺もどうかしてるが、おめへもどうかしてゐるだらう。きよときよとせずと坐つたらいいだらう、』

『坐るよ、』

おはなは食卓の前に坐つて、銚子を執り、熊の前の杯に酒を注いだ。

『何故そんなにするのだね、おかしいぢやないか、』

『なにがおかしい、おかしいたあてめへのことだらう、てめへの腹に聞いてみろ、ふざけた眞似をするない、』

『どんな、わたしが、ふざけた眞似をしたね、』

『ぢや、おめへは、ふざけた眞似をしねえと云ふのか、』

『何時、わたしが、ふざけた眞似をしたね、』

『してゐるぢやねえか、』

『どんなことをしてゐたね、』

『人が知らないと思つてるのか、あすこへ來てるのは何んだ、』

『お客さまぢやないかね、』

『そのお客は何人だ、坂田沼の野郎だらう、』

『ま、ま、おまへさん、』おはなは抑へるやうにして、『わるいわ、そんなことを云つちや、此所の旦那にわるいわ。お客さんのことなんか云つちや、』

『なにがお客さんだ、あんなお客があつてたまるか……』

熊は自分が預けてある女に、坂田沼の男が逢ひに來てゐることを知つてゐても、それ以上口にすることは自分の腹を見透かされるやうな氣がしてできなかつた。熊は神經的な眼をちかちか光らした。

『お客さんだよ、此所な大事のお客さんだよ、旦那にわるいわ』

『なにがわるい、あいつが指金でやつてることだ、』

『わるいわ、そんなことを云つちや、』

『なにがわるい、人の女をつツついて、わるいことばかりさせやあがる、あの野郎、ふざけてやがる、』

この時下から怒鳴る聲がした。

『熊、詞がすぎるぞ、ふざけたことを云ふと承知しねえぞ、』

それは亭主の忠治の聲であつた。癇癖の强い熊の心は敵手を得て燃えたつた。

『野郎、勝手な眞似をしやがつて、大きな口をきくない、承知しないぞ、田沼の熊を知つてるか、』

『きさまが田沼の熊なら、俺は四角山の忠治だ、てまへ達と人間がちがあ、』

『人の女に、男を世話したりなんかしやがる奴が、どこが人間が違ふのだ。野郎、』

熊はさう云ふかと思ふと手にしてゐた杯を投げつけて起つた。印半纒を著てカーキ色の半ズボンを穿いた小男ではあるが

肩幅の廣い彼の體は、いきなり室を出て二階のあがり口に往つた。

『なにをするのだね、おまへさん、』

おはなが驚いて追つかけて往つた時には、熊は階子段の口に立ちはだかつて下に向つて放溺しようとしてゐるところであつた。

『まあ、なにをするのだね、』

『なにも糞もあるか、』

階子段の下には痩ぎすな忠治が長いきよとんとした顔を見せて立つてゐた。溺は忠治の前に滴々としたたつた。

『野郎、ふざけた眞似をしやがる』

忠治は火のやうに怒つて階子段を駈けあがりながら熊に打つてかかつた。熊はひよろひよろとしたが、すぐ體を整へるなり右の手を忠治の股間にやつた。

忠治は一聲唸るなり動けなくなつてしまつた。そこへ忠治の女房が駈けあがつて來た。忠治の女房はそれを見ると、『野郎なにをする、』

と云ひながら熊のゐた室へ飛び込んで往つて、食卓の傍にあつたビールの空壜を持つて來て、いきなり熊の頭を撲りつけた。熊の額に血がかかつた。熊は忠治から離れながら獣の吼えるやうな物凄い聲を出した。

二

松野屋は二本松の入口になつた四角山と云ふ所にある旅館と小料理屋を兼ねた一軒家であつた。そこは丘の上にある開墾地で、家の前には佐原の方に往ける可成り廣い道路が通じてゐた。多古町からは一里位の北になつてゐた。香取郡の南部になつた多古町は、總武本線の八日市場驛からだと二里二十四町の間に定期自働車があり、成田線の成田からだと五里の間に輕便鐵道がある。その多古町から久賀村に往くには、佐原に往つてゐる縣道によるか、この四角山を經てゐる道路によるかする。

松野屋は多古の方からすると路の左側で、家の後は桑畑になつてゐた。二本松の人家の並んでゐる所は、そこから二三町ばかりの先であつた。熊と忠治の喧嘩は、その人家の入口の右側になつた松本屋と云ふ茶店に知らせて來た。松本屋の佐平老人は、松野屋に駈けつけて額に血を浴びて猛りたつてゐる熊をなだめて伴れて來た。

酒が好きで二升の酒量のある熊は、松本屋とは久しい馴染であつた。そこには一棟の離屋があつた。松本屋は二本松の草わけとも云ふべき茶店で、老婆のすていは開墾婆さんと云ふ渾名さ

へあつた。元來此のあたりは、小金五牧佐倉七牧と云はれた古牧の一部で、明治四年岩倉具視が新政厚徳の名の下に、東京はじめ諸國の窮民を移して開墾さしたのが始めで、しだいしだいに開墾した土地である。上野公園の臺地のやうな丘陵が模型地圖の山脈のやうに數里に渉つて連り、その上を畑にした所もあれば植林にした所もある。二本松開墾、出沼開墾、赤池開墾、飯笹開墾、三里塚開墾、さうした名の開墾地が到る所にあつた。

世話好きな佐平老人は、口を利いて二人の間を和解さすと共に、熊は女を松野屋に置かないことにした。女が松野屋から借りてゐた金は、熊の頭の治療代と云ふことにして。

女は高橋はなと云ふ姓名を用ゐることもあれば、土屋げんと云ふ姓名を用ゐることもあつた。山武郡睦岡村植谷の生れで、もと横芝あたりで酌婦をしてゐたものであつた。熊は、材木の賣買をしてゐる忠治の家に出入して、その材木を運搬してゐたので、松野屋の店に坐つた年増女にふと眼が往つた。荷馬車を挽いて村から町、町から村へと往復してゐる熊は、町の小料理屋の女をからかふことも知つてゐた。熊はそこでその女の客の一人となつたが、女には單に客とばかり思はれないやうな客もあつて、自分でも亦單に客の一人となつてゐられないやうになつた。熊は無理な手段によつて八十圓の金を作つて女を自分の有にしたが、女は熊の期待を充たさなかつた。熊は松野屋と女に對する不滿で、數日來酒に浸つてゐたところであつた。

熊はいろいろ考へた末に、女をこれも茶店をやつてゐる次浦の岩井長松の許に置いてもらふことにした。一軒家を持たして置くことは境遇が許さなかつた。長松の家のある次浦は久賀村の村役場のある所で、そこは縣道に沿うた軒に葭簀の日覆をした小さな家であつた。とつつきの横庭には二本の桐の木が見えてゐた。その長松の家の前を往き過ぎて左に折れ、郵便局をやつてゐる家を右にして入ると、丘の上にあがつて往く爪先あがりの村道があつて、左右に民家の屋根があつた。村役場はその坂道の左側にあつて、その上の段に駐在所があつた。

長松は五十近い世間を見てゐる男で、女房は横ぶとりのした人の好い女であつた。熊は此所へかうしておけば、女ももう自分を裏ぎるやうなことはないと思つた。しかし、女はさうした社會の通有性のやうになつてゐる。狡猾で放縱で、ただ刺激ばかりを趁つてゐるやうな、一口に云へばばくれん者であつた。それだけ中年の疎放な勞働者の慾望を滿足さすことができたか。熊のはそれが判らなかつた。女は刺激のない窮屈な所にはぢつとしてゐられなかつた。彼は多古へ往つたり、四角山へ往つたり、八日市場へ往つたり、成田へ往つたり、氣の向くまま

に出歩いた。その出歩いてゐる女の影に關係する物の影があつた。それは坂田沼の男の影であつた。熊は安心ができなかつた。熊は女が一晩でも歸らないやうなことがあると追つかけて往つた。そして、女と一緒に向ふの料理屋で酒でも飲むやうなことがあると、氣性の烈しい男に似合けず何時もきまりのわるいやうな容をして默つて酒を飲むのであつた。

そのうちに女が何處へ往つたのかゐなくなつてしまつた。熊は狂人のやうになつて長松にも賴み、自分でも心當を探して歩いたが、皆目判らなかつた。熊はもう仕事も手につかなくなつた。木材篠竹類を町に運んで、歸りにはほしか初め肥料類を積んで來るうへに、養蠶期には繭の中買もやつて、小金にはすこしも不自由しなかつたが、女に關係するやうになつて困つて來たところへ、仕事もろくろくないようになつたので、一圓の金にも追はれるやうになつた。

その時分のことであつた。ある日熊は往くともなしに二本松の松本屋へ往つた。松本屋では圍爐裏の火の燃えてゐる傍に村の者が二人顏を赭くして酒を飲んでゐた。村の者の一人は熊を見ると杯をだした。

『おい熊、一杯さそう、』

熊は手を出さなかつた。

『今日はもらはない、もらつても俺にはかへしができないから、』

『まあ、そんなことはいいぢやないか、一杯さそう、』

『いや、ありがてえが、今日はもらはない。』

熊はさう云つてから老婆の方を見て、

『おばさん、俺は、今、どうにもならないから、借金は待つてもらふよ、』

と云つた。老婆は熊の氣心を呑み込んでゐるので、

『いいとも、おめへさんの都合のいい時でいいわね、ぢや一本つけやうね、』

と云つて、もう出來てゐる銚子を膳にのつけて持つて來た。

熊は一杯注いでそれを口にしながら、村の者の方を向いた。

『今日は、借りて飲んでる酒だからささないよ、』

彼はさうしておし默つて酒を飲むのであつた。熊の氣性は村の者もよく知つてゐた。彼は金があれば何人にもでも酒を飲ました。そのうへ彼は人の世話もした。家を建てるに材木は手に入つても、それを運ぶことのできない家があると、手辨當で運んでやつた。養蠶期に桑を刈るのが後れて、夜になつて刈つてゐる者を見ると、手傳つて夜半過ぎまで刈つてやつた。荷馬車挽きを初める者があると、これ又手辨當で馬を馴らしてやつた。

これだけに意は充たないことでもあると、人と逆つた報復をした。飯土井坂や中村の直坂で、荷馬車の馬がへとへとにでもなると、

『この馬鹿野郎、しやらくせえ、』

と云つて、鞭を加へると共に、頬冠の手拭を解いて、馬の二つの前肢を束ねた。馬は三本の肢でせかせかとあがつて往つた。

熊の教育は僅に假名が讀める位のものであつた。ある時村の青年の集まつてゐる時、熊は新聞紙を覗いてゐるので、何人かが、

『おい熊、新聞が判るかい、』

と云ふと、熊は顔色をかへた。

『なに野郎、力で來い、喧嘩なら負けねえぞ、』

と云つて怒りだした。

三

そのうちに年が明けて大正十五年となつた。熊は三十五になつた。彼は荷馬車挽にも往かないで所債のした力ない顔をしてゐた。熊の家は出沼開墾の上にあつた。丘と丘との間になつた民家の中を往つて、丘をあがつて往くと廣い桑畑の縁に、トタン葺の建てから十二年位にしかならない、棟の下の半分を物置にした家がある。それが從來の熊の勤勉を語るものであつた。そこは次浦からは十町ばかりの西になり、二本松からこれ又十町ばかりの東北になつてゐた。多古町と次浦とのほぼ中間になつた御所臺の丘陵のはづれにある自轉車屋の前から入つて、高津原を經、大門を通つて往つてもいい。蜘蛛の網のやうな大小の里道が縱横に通じて、自働車も人力車もたいていの所へは往かれる。

熊には男女五人の子供があつた。女房のよねは二つの年上であつた。大門の豪家の五木田と云ふ家に百姓奉公をしてゐた熊は、五木田の親戚の長女で、同家に女中奉公をしてゐた女と親しくなり、主人の五木田のはからひで結婚して家を持つたものであつた。よねは裏ぎられた怨みと貧しさとから、最初のうちは熊と朝夕のやうに爭ふてゐたが、もうこの頃は諦めて何も云はなかつた。熊は家内の者から除外せられて獨りぽつねんと坐つてゐる時、十二になる長男の潤藏が何か讀んでゐるのに眼でもゆくと、

『うんと勉强しろ、教員になるには、うんと勉强しないといけないぞ、』

などと云つた。多賀小學校の五年生で一年から級長で通して

ゐる少年は、學校の先生になるといふのが幼い志望であつた。熊はこの長男によつて何かしら自分が得られなかつた高い大きな物を得てもらひたかつた。

熊はその時、津島政吉から馬を賣ることを頼まれてゐた。熊はある日、その馬のことで高津原の方へ往つてゐた。仲間の一人が向ふから荷馬車を挽いてやつて來た。仲間は熊と顏をあはすとぴつたり足を停めた。

『おい、熊、一杯買ふか、』

『なんだ、』

『なんだつて、たゞぢや云はれないやな、』

『なんだ、』

『おめへの、』と右の小指を動かしてみて、『これがゐるぜ、』

『何處だ、ほんとうか、』

『伊能の宮本にゐるのだぜ、』

『ほんとうか、』

『ほんとうとも、』

『さうか、』

熊はそのまま引返して歩いた。

『おい、熊、』

仲間が聲をかけても耳に入らなかつた。熊はその足で出沼に歸り、自分の家へちよつと寄つて、そこから赤池の方へ出て本大須賀村へと往つた。出沼から本大須賀村へは三里位の道であつた。熊はその道を走るやうに往つて、宮本と云ふ料理屋へあがつた。そして、微陽の射した二階の廊下を向ふの方へ往つてゐると、傍の室から障子を開けて顏をだした者があつた。それは酒で眼元を紅くしたおはなであつた。

『あ、』

『まあ、』

おはなは呆れたやうに云つて眼を見はつた。その時熊の眼が室の中に往つた。室の中には長松が此方向きに坐つて杯を持つてゐた。熊はそれに眼をつけた。

『長さんぢやねえか、』

『さうだよ、』

女はあはてたやうに云つた。

『熊が、ちやうどいい所へ來た。俺は、今日此方に用事があつて來てみると、おはなさんがゐるぢやねえか、おめへのことを話してたところだ、』

長松の聲にも落ちつきがなかつた。

『さうか、俺も、さつき仲間に聞いたもんだから、來たところだ、ちやうどよかつた、』

熊は長松の室へ入つた。彼はおはなに逢へた喜びのために、その場の陰翳には氣がつかなかつた。そのうへ、女に逢つたなら思ふさま云つてやらうと思つてゐたことも消えてしまつた。

『熊もこれで安心した、どんなに二人で探したか判らなかつたよ、おはなさんもすこしひどいぜ、』

長松が笑ひながら云ふと、女は熊の杯に酌をしながら云つた。

『わたしもわるいとは思つたが、いろいろ都合があつてね、』

『それは判つてる、それは聞いてみるともつともだが、なにしろ熊が心配してな、』

熊は長松と一緒に二日ばかりゐて、金を持つて迎ひに來ると云ふことにして歸つて來た。女を迎ひに行くには百圓の金がなくてはならなかつた。熊は歸る途みちその金を得る手段を考へてみたが、これと云ふ好い手段も見つからなかつた。そのうへ坂田沼の男の影がそこにも動いてゐた。その金は熊のためには何物にもかへられない金であつた。

熊は出沼へ歸るなり加瀬三治の家へ往つた。三治は政吉の馬を買つても好いと云つてゐる者であつた。熊は三治に馬を買はせて、その手金を流用するより他に早く金をこしらへる手段がなかつた。

熊はたうとう三治を說きつけ、三百圓に馬を買はせることにして、百圓の手金を出させ、後は二百圓の金を持參した時に馬を受け取ると云ふ契約をした。

三治から百圓の手金を受け取つた熊は、その足で長松の家へ往つて、長松を伴れて本大須賀村の女の許へ往つた。そして、又二日ばかりゐて女の借金と二人で飮んだ飮み代を拂はふとすると、百五十圓ばかりになつてゐた。熊は懷にしてゐた金をすつかりだしたうへに、不足の分は長松の云ふままに長松の書いた證書に捺印して三人で歸つて來た。

熊は又女を長松の家に託して、その方には安心することができたが、安心できないのは馬の授受の期日であつた。熊はぼろをださないやうにと思つて奔走したが、彼方此方に借金こそあれ、金の入つて來さうな所はなかつた。能がはらはらとしてゐるうちに馬の授受の日が來た。後の二百圓の金を持つて政吉の家へ馬を受け取りに往つた三治は、手金の入つてゐないことを知つて驚いた。

三治は怒つて熊を告訴すると云ひだした。熊の不始末は熊の兄の岩淵清次郎の耳に入つた。清次郎は弟のために百圓の金を辨償して事件はことなく解決したが、その紛擾の最中に女は又逃亡してしまつた。熊は又狂亂した。兄の清次郎は愚直な弟を

叱りもすれば慰めもした。

『熊、いいかげんに眼をさませ、あれや、忠治と長松がぐるになつてやつてることだ、』

兄と共に母親も熊を誡めた。女に關係しない位には、町に往けば必ず土産を買つて來て大事にしてゐた母親の詞は耳に痛かつた。

やや冷かになつた熊の眼の前に、女の人形に忠治と長松のつけたあやつりの糸の端が見えて來た。熊は自分より先に本大須賀村に往つてゐた長松のその日のそぶりを初めて思ひだした。熊は歯がみをしたがこれと云ふ證據がないので、どうすることもできなかつた。

四

熊はもう女を追つて往くこともできなかつた。彼は婿の呼吸を吐いてゐるやうな氣持で吾と吾が心を押へてゐたが、その時になつてふと彼の苦しい氣持を轉換したものがあつた。それは數年前から淡い關係のあつた高須原の女であつた。女は貧しい家に小さな男の子を伴れて、祖父母を養ふてゐる者であつた。女の家は縣道の方から自轉車屋の前を入つて行くとすぐであつた。二本松から往くと松本屋の傍を折れて、密林の中の道をおりて行つた。そこには水田を中にして高須原の民家が左右の丘の麓に點在してゐたが、その中に左側の民家に交はつて二軒の大きな第宅があつた。手前の家は津島德三郎で、先のは菅澤重雄であつた。菅澤家の向ひには小學校もあつた。女の家は菅澤家の前の道を少し往つた所にあつた。草屋根の蓋の腐つたやうなあばら屋で、それは道の右側の水田の縁にあつた。そこも酒を置き駄菓子を置き、寒い間は蕎麥なども置く茶店で、上州屋と云ふ屋號があつた。店口は家の横で、そこには其處の丘の上の民家の方から來て水田を横ぎつてゐる小さな道があつた。そこには軒に藤棚があり、下に堀井戸があつた。廣い道に面した方には雨戸を二枚締め、それと並んで透し格子にした板窓があつた。

女はけいと云ふ名であつた。その時二十七で、三十六のはなから見ると小供のやうであつたが、氣持は老けてゐた。そのけいは十五で女になつてゐた。小學校を卒業して村の十郎右衛門の家へ三年ばかりおはりに通つてゐたこともあつた。男の子は正と云ふ名で五つであつた。茨木の方へ奉公に往つてゐて、そこの倅との間に生んだ小供だと云ふ者があつた。彼は生きるためでもあつたが元來が放從であつた。無智にして放從な女の手は温かつた。女の傍には前後にたくさんの男が寄つて來た。熊

もその男の一人であつたが、はなに踏みにじられた後の熊は、はなに全部を求めたやうに一人の男となつてはゐられなかつた。熊は先づ女の家の内部に入つて往つた。

貧しい家ではすぐ熊に縋つて來た。熊の氣持は平常に復した。村の人は又荷馬車を挽いて町に往復する熊の姿を見るやうになつた。熊は女の家に米をやり、薪をやり、二十圓の金をくめんをしてやつたこともあつた。熊は又そんなことで無理な金を作らなくてはならなかつた。熊のさうした心づくしを無智な女は組みしやすしと見て取つた。女は一つの足痕に二つの足を容れるのを憚らなかつた。

はなの陰に山武郡大總村坂田沼の柳堀信一と云ふ掛茶屋の亭主の影があつたやうに、そこには菅澤寅松と云ふ若い男の影があつた。熊の神經は又たつて來た。熊は足繁く女の許へ來るやうになつた。そして、そのつど熊は女の傍に來てゐる寅松を見た。寅松は女の家の前を數間菅澤重雄の方に往つて、右に坂道をあがつて往つた所にある農家の次男であつた。女の家の店の前からすぐあがつてゐる坂道の上にゐる菅澤種雄と云ふ、四十を過ぎたばかりの男も時どき女の家に來て、熊の素振をぢつと見てゐることがあつた。熊はその男も好まなかつた。

熊は又時どき人と爭ふやうになつてゐた。そのうちに稲の植付と養蠶にいそがしい期節となつた。それは六月三日頃のことであつた。熊はその日の夕方松本屋へ往つた。松本屋では一人の男が酒を飲んでゐた。熊はその男の顔を見るとつかつかと進んで往つた。

『おい、今日は逃がさんぞ、渡すか、』

それは八日市場野牛の肥料商の齋藤軍司であつた。軍司は熊の方をきつと見た。

『渡すとはなんだ、ふざけたことを云ふな、』

『なにがふざけてゐるのだ、馬車賃だ、馬車賃をよこせ、』

熊は三年前から軍司と約束してほしいかを門[illegible]地に賣込んでゐたが、初めの女を探し歩いて三月ばかりも遊んでゐるうちに、すつかりほしいか代を使ひ込んでしまつた。軍司が催促しても金のできやうはずがなかつた。軍司は怒つて執達吏を向けやうとしたが、口を利く者があつて熊の家にある薪を渡して解決することになつた。そこで熊が薪を軍司の家へ運んで往つて決算してみると、十五圓だけ餘分に薪を運んだことになつてゐた。で、熊がそれを請求すると、今度は軍司が支拂はない。熊は怒つて、『よし、それぢや、薪代のかはりに、途で逢ふたびに摸ぐるから、さう思へ、』と云つて歸つたが、それから途で軍司に逢ふと所かまはず摸ぐりかかつた。軍司は弱つて人に賴んで十圓の

包み金で和解することにした。そして仲人と三人で酒を飲んでゐると、その席上で熊が、『新代はあれで好いが、運んだ馬車賃もう十圓よこせ、』と云ひだしたが、軍司は相手にならずに別れてゐたところであつた。

『人が仲へ入つて、もうすんでゐることを、なにを云やがる、』

軍司も怒つた。熊ももう燃えあがつた。

『渡さなけれや、今日は腕づくでも取つてやる、』

『取れるなら取つてみろ、やるか、』

『外へ出ろ、』

『出るとも、來い、』

軍司は佐平老人の支へやうとするのを振りはらひ、庭に飛びをりて、夕陽の射した道の上に出た。續いて熊も走り出て二人で立ち向つた。軍司は五尺六寸熊は五尺五分の小兵であつた。

二人の手は戟のやうに閃いた。それは傳奇的な場面であつた。佐平老人も老婆も傍ではらはらするばかりで、どうすることもできなかつた。二人の體はそのうちに一つになつて揉みあつてゐたが、やがて倒れて沙塵を立てながら地べたを轉げまはつた。

軍司の悲鳴がやがて聞えて來た。そこへ附近の者が集まつて來た。二人はそこで左右へ別けられた。

五

熊は又仕事を休みがちになつた。熊は女の家に入り浸つて女の傍へ若い男を近寄らさないやうに努めたが、熊の眼がなくなると若い男は來て女に絡はりついた。熊はある時女の家で酒を飲みながら、

『おけい、つまらねえ眞似するな、』

などと云つた。その傍には七十になる祖父の啓十郎と、一つ年下の祖母のはなが人の好ささうな眼をしよぼしよぼさしてゐた。

『さう、』

女はたかをくくつてゐた。

『ほんとにつまらねえ眞似をするな、そのかはりお前の家のことは、どうにでもしてやる、』

『それや有難いわね。』

『有難いぢやないよしつかりしろよ。』

『なにをしつかりするの、』

『なんでもしかりするのだ、間違はないやうにさ、』

『さう、』

『さうさ、』

熊は男が年下で女が年上であることを考へた。寅松は二十五であつた。年下の男が年上の女の許へせつせと來るのは、年上の女の誘ひがなくてはならなかつた。やはり二つ年上の女と結婚してゐる熊にはその經驗があつた。熊はそれが何よりも妬ましかつた。又女の家では寅松を養子にしようとしてゐるのだと云ふ者があつた。熊はいらいらして來た。

熊は女の家のまはりに忍んでゐて若い男の女に近寄るのを見張ることがあつた。六月二十五日の夜であつた。熊は又夜遲くなつて女の家の傍へ來て、そつと透し格子の前に立つて家の内を覗いた。小さな灯のよはよはとさした蚊帳の中に女と若い男がゐた。熊は頭を撲られたやうな氣がした。彼は庭口へまはるなり雨戸を引き開けて飛び込んだ。

蚊帳の中の二人は驚いて起きあがつた。熊は蚊帳を引きまくつて、右の手に女の髪を掴み、左の手に男の腕を掴んだ。

『畜生ども、動くな、』

寅松はその手を振り拂ふなり逃げて往つた。

『よし、野郎は後でやつつける、このあまだ、』

熊は左の拳に力を入れて女の横顔を續けさまに撲つた。女の顔に血がにじみでた。熊は又女を突き放して足蹴けにしはじめた。

『まア、熊さん、熊さん、』

隣の蚊帳に寢てゐた老婆が起きて來た。

熊は折檻の手をひかへてそこに胡座をかいて坐つた。熊の折檻の手が無くなると女は聲を出して泣きわめいた。

『さあ、殺せ、殺せ、殺してくれろ、』

熊は女の方を光る眼でぎつと見てゐた。

『さあ、殺せ、殺せ、殺してくれろ、』

そこへ老人が這ひだして來た。熊は起ちあがつた。

『おぢさんとおばさんにはすまなかつたな、』

熊は强いて自分の心を押へて歸つて來た。熊の女房のよねは、熊のその頃のしうちを見て、又前の女でも歸つて來たものだと思つてゐた。よねは熊が幾等遲く歸つて來ても泊つて來てもすててあつた。

その翌晩になつて熊は又女の家の傍の暗がりに立つてゐた。熊はさうして女の家の容子を見てゐた。そこへ寅松がひよつこりやつて來たが、熊の姿を見ると逃げて往つた。女の家には種雄が往つてゐた。

熊は又その翌晩も女の家の傍にゐた。熊は女の家の容子を見ながら女の家から挨拶を待つてゐたが、女の家からは何も云つて來なかつた。

熊はもう何もせずに夜も晝も女の家のまはりを歩いてゐた。

七月五日になつて大浦の駐在所の巡査が熊の家へ來た。向後岡松と云ふ巡査であつた。向後巡査は熊の性を呼んだ。『岩淵、いそがしいのに氣の毒だが、多古の警察へ往つてもらはなくちやいけないが、』

『なんでだらう、』

『さあ、なんだらう。多古の方から命令があつたものだからね、』

向後巡査は努めてやはらかに云つた。向後巡査は一度熊を駐在所へ呼んで手を燒いてゐた。それは彼の馬の事件のあつた時、素行調査の必要から熊を呼んで、『馬のことを聞いたが、あれはどうなつてゐるかね、』と云ふと、熊は顏を眞赤にして怒つて『あの話は、きれいにすんでゐるのだ、』と云つて、今にも飛びかかりさうにしたので、向後巡査はひどく恐れて、『いや、僕は君にまづいことをやらせたくないと思つて何かあるなら話をつけやうと思つて、心配したから來てもらつたまでだ、』と云つて、やつと熊を歸してゐるのであつた。熊は向後巡査の詞を聞いてゐるうちに、ふと二十五日の晩のことではないかと思ひだした。

『さうですか、往きます、すぐですか』

『ああ、すぐ往つてくれ』

向後巡査の歸つた後で、熊はちつと考へてゐたが、やがて手拭にくるんだ物を懷に入れて出かけた。そして、高須原へ往つて女の家の店先へ顏を出した。女は店の上框に腰をかけてゐた。

『おい、おけい』

女はすまして熊を見た。

『俺は多古の警察へ往つてくるところだが、お前は俺を馬鹿にしないだらうな』

熊は懷から手拭にくるんだ物をだした。それは鰺切庖丁の包んだものであつた。女は何も云はなかつた。

『よく考へておけ、あはてることはない』

熊は庖丁を懷に入れて歩きだした。女の家からは多古まで半道位のものであつた。熊はやがて警察へ往つた。警察の召喚は二十五日の夜の傷害脅迫と、齋藤軍司から八日市場の裁判所へ提出した毆打傷害の告訴の件であつた。熊はそこで八日市場の刑務所に出頭することを命ぜられた。

熊は裁判所に對する用意をしなくてはならなかつた。彼は歸りに先づ大門の五木田へ往つた。五木田は舊主である故に、高須原の津島德三郎と共に同地方に於ける憲政會の有力者で、元

縣會議員をやつたこともあり、代議士の選擧をはじめ各種の選擧の際には、熊を壯士として用ゐる代りに一身上のことは何によらず面倒を見てくれてゐた。

　そこは大門の民家の奥になつた丘の中腹にあつた。長屋門のやうなトタン屋根の建物がそこにあつた。そこは門口の左側に格子戸の入つた入口があつて、酒と煙草を賣つてゐた。母屋はその建物の奥になつてゐた。母屋の後は三間位の崖になつて上には杉の大木が蟲々と茂つてゐた。熊は背のずんぐりした主人の太郎吉に逢つて相談しかへりに仲間の家によつて、十五日の夜の暴行の警察に知れた經路を探つてみた。仲間は菅澤種雄が女に勸めて告訴さしたものだと云つた。熊はそこでひどく女と種雄を怨んだが、その實はそれは向後巡査が告訴を發したものであつた。

六

　熊は兄の清次郎にも相談しなくてはならなかつた。熊よりいくらか背の高いだけが違つてゐて、他は熊そつくりの清次郎の家は、出沼の民家の多く聚まつた所から左に離れた丘の麓にあつた。そこにも三四軒の民家があつた。もし其所に通じた村道を清次郎の家へ寄らないで、そこの丘の出つぱなを廻はつて往くと、道は田の中をすこし往つて、又向ふの丘の出つぱなに取りつくのであつた。その出つぱなは楡木部落で、出つぱなしの手前、田の上になつた丘の麓に小さな畑があつて、その右の緣に五つの石碑が見える。それが熊一家の墓地であつた。

熊はその二日間は兄の家に往き、五木田に往き、仲間の家へ往つて相談した。熊はその間にも女のことは忘れなかつた。彼は女の不實を怒りながらも女の全部を得やうとする慾望は棄てなかつた。

　八日の朝になつた。熊は女房に後のことを云つておいて家を出た。熊はその足で高須原の菅澤種雄の家へ往つた。種雄は庭先に立つてゐた。

『おい、菅澤、俺はこれから八日市場へ往くのだが、歸つて來たら、きつと禮を云ふぜ、』

　熊の氣は急にたかぶつて來た。彼はそのまま種雄の家を出て、門の前の山坂を走つた。熊はづかづかと店先に入つて往つた。女は店先に雜巾をかけてゐた。

『おい、おけい、俺はこれから八日市へ往つて來る、それに就いておめへに聞いておくことがあるのだ、』

　女は熊の顏を見たが何も云はなかつた。

『返事をしねえのか、』

『なんだね、』
　熊はどしんと上框に腰をかけて、懐に手を入れて手拭にくるんでゐる物を取り出した。
『おい、俺あ愚痴の何も云はない、たつた一つ返事をしろ、』
『なんだね、云つてごらんよ、』
『よし、云つてやる、おめへは、寅松と切れるか切れないのか、返事をしろ、』
　熊はさう云つてから手拭をくるくるとほぐした。女は平氣であつた。
『それを聞いてどうするのだね、』
『殺してしまふのだ、寅松も一緒に、』
　女は默つて鰺切庖丁を見た。
『どうだ、返事をしねえのか、』
　そこへ老婆が起きたばかり男の子を伴れ出て來た。
『熊さん、まあ、あがつたら、どうだね、』
　熊は老婆の方をちよつと見たばかりで返事をしなかつた。老婆はそこでけいの方に向いて云つた。
『おめへは、熊さんに好い返事をするがいいよ、』
　女は云つた。
『お婆さんは引込んでるがいいよ、』
　熊はそこへ口を挿んだ。
『おい、おけい、返事をしろ、』
『するわよ、』
『どうだ、寅松と切れるか、』
『わたし、寅松さんなんかなんとも思つていやしないよ、』
『そんなことはねえ、』
『なんとも思つてやしないよ、』
『そんなことは云はさない、さあ、どうだ、切れるか切れないか、云へ、切れなけれや殺してしまふ、』
　老婆が又そこへ口をだした。
『おけい、熊さんには、いろいろ厄介になつてる、』
　けいが又老婆を叱りつけた。熊はもどかしかつた。彼は庖丁を逆手に持つた。
『おけい、さあ返事をしろ、しないか、』
　その時店先へ入つて來た人の影があつた。それは向後巡査と山腰信司と云ふ刑事の二人であつた。二人は隣家の知らせによつて駐在所から駈けつけたものであつた。
『熊、何をする、』
　二人は熊の權幕に恐れて手をかけることはできなかつた。熊は庖丁を手拭にくるんだ。

『その女は、俺が世話してる女なんだ、叱つてもいゝでせう、』
『云ふことがあれば、口で云つたらいゝだらう、その刃物はおだやかでないな、』
『ぢや刃物を出さなけれやいゝだらう、わしの家内のやうな女に、わしが折檻することは、』
『それは、まあ、いゝ、それから多古へ君を伴れて往く、』
『さうか、往くとも、』と、熊は庖丁を懐に入れて、女の方を見て、『おけい、今の返事は、俺が八日市場から歸つて來るまで預けておく、』

熊は向後巡査と山腰刑事に引立てられるやうにして多古署に伴れて往かれ、そこから脅迫現行犯として八日市場の刑務所に送られた。すると五木田はじめ二三の者は、我黨の壯士のために奔走して、懲役三箇月、三年間執行猶豫の特典に浴させるやうにした。そして、八月十七日になつて熊が出獄して歸ると、その十九日五木田の家で祝杯をあげた。首澤重雄一派の政友會への漫然とした面あての意味も籠つてゐるのは云ふまでない。

七

五木田で酒を飲んでゐるうちも、熊は女のことばかり考へてゐた。女を全部自分の有にするか、一切を無くするか、熊の感情はつきつめてゐた。告訴せられたと思つて怨んでゐる怨みは、それに附隨する問題であつた。五本田をはじめ二三の者は、熊はもうそつち除けにして現内閣の噂などをしてゐた。

熊は何時の間にか五木田を出て出沼の方へ歩いてゐた。熊は先づその後の女の模様を探らうとしてゐた。熊は知らなかつたが、女はその日多古署へ召喚せられて取り調べを受けてゐた。それは風紀上のことであつた。女は自分の罪を自白したが、男の名は口をつぐんで云はなかつた。

『それは、皆、私が惡うございます、どうか名は訊かないで、』

これは留置せられても仕方のないことであつたが、警察の方では女の境遇に同情して歸宅を許したのがその夜の十時頃であつた。

熊の姿はもう女の家の傍にあつた。それは十九日が經つて二十日の零時半頃になつてゐた。熊は又そつと透し格子の傍へ往つた。小さな灯の物に怯へてゐるやうに射した蚊帳の中に二つの影繪が並んでゐた。彼は何かしら自分を包んでゐた物がガラスのやうに粉こなに砕けてしまつたやうに思つた。絶望の怒は彼の頭を暗くした。彼は店口に往つて雨戸をづすりと開けた。

『おい、もう寢たのか、』

熊の態度はいやに落ちついてゐた。

『何人だね、』

便所にでも起きて來たところであつたのか、老婆が女の蚊帳の傍から暑苦しさうな顔をして泳ぐやうに出て來た。

『おばあさん、俺だよ、おけいに逢ひに來たのだよ、』

熊はすばしく上にあがつて蚊帳の傍へ往つた。中からはもそもそと云ふ糊の硬い著物を動かすやうな音がした。

『おけい、起きろよ。熊さんが來たぞい、』

老婆は熊を遮らうとでもするやうに體を持つて來たがもう遲かつた。熊はそのまま蚊帳の裾をまくつて中へ入つて、起きあがつて片膝立ててゐる女の髮に左の手をやり。逃げ出さうとしてゐる寅松の素裸になつた左の手の肱を掴んだ。

『熊さん、まあ靜にしておくれ、蚊帳をはづすから、』

老婆がおどおどした聲で云ふと、

『このままがいいや、蚊が多いでな、』と、熊はすまして云つてから、微暗い中にも見える紅い唇をした女の顔を覗き込み『なア、おけい、ゆつくり話さうぜ、』

『いやだよ、放しておくれ、』

女の詞はふてふてしかつた。

『いやか、』

『いやだよ、わしは、監獄の飯を喫つた者は嫌いだよ、』

『なにツ、』

その時寅松が熊を突き放して逃げやうとした熊は逃がすまいと寅松を押へつけるはづみに女の髮を掴んでゐた手が緩んだ。女は蚊帳の外に飛びだした。

『このあまつ、』

熊は寅松を放して女を追つた。女は土間に飛びおりた。熊も續いておりやうとして土間の片方に積んだ薪に眼が往つた。熊はそれを手にするなり女を追つた。女は掘井戸の傍まで往つた。熊は女に追ひついた。熊の手にした薪は女の頭上に閃いた。女は悲鳴をあげてよろよろした。薪は續けて加へられた。

『熊さん、熊さん、熊さん、』

老婆の姿がその渦卷の中にあつた。女はがつくりとなつて倒れてしまつた。熊はそれを見ると女を捨てて暗い中を見まはした。熊は寅松を探してゐるところであつた。寅松の姿は見えなかつた。寅松はその時上州屋の店口からは背後になつた隣家の垣根に隱れて、女の悲鳴を聞いてゐたのであつた。

熊は手にした薪を持ちなほすと、そのまま丘の上にあがる道をあがつて往つた。その道は民家の垣根の間を曲りくねつて往く道であつた。その道のあがり詰、丘の上を通じた道と合した所の左隅が種雄の家であつた。熊はそこへ入つて往つた。そこ

て戸口へ往つて雨戸を叩いた。

『おい、おい、種雄、』

種雄の家では遲くまで蠶にかかつてゐて蚊帳に入つたばかりのところで起きてゐた。

『何んだ、』

『熊だ、禮に來た。開けてくれ、』

『なに、熊が禮に來た、夜來るやうな禮ならろくな禮ぢやあるまい、明日來い、』

種雄は起きて桑切庖丁をがちやがちや云はした。十四になる女の子は、喧嘩でも起りさうに思つたので、そつと裏口から出て隣家へ往つて熊の來たことを知らして引返し、垣根の傍に隠れて見てゐると、戸を開けないので仕方なしに出て來た熊が丘の上の道を左に往つたので、內に入つて家の者に知らした。家の者は不安だから皆で隣家へ往つた。

熊はそれから寅松の家へ往つた。寅松の家はその道を二町位往つて、下へおりる道へ入つて、すぐ右側の崖の上にあがつた所にあつた。寅松の家では未だ父親が起きて煙草を喫んでゐた。

『寅松はゐるのか、』

父親は熊の顔を見た。

『寅松は未だけへらない、』

『けへらないことはない、今けへつたはずだ、』

『けへらない、』

『けへらないことはない。用事があるから出してくれないか、』

『おめへは、寅がけへつたことをどうして知つてる。ほ、かうしてゐる俺が知らないのに、おめへがどうして知つてるのだ、けへらないと云つたらけへらない、嘘と思や、あがつて探してみろよ、』

『さうか、そんぢや種雄の家へ火をつける、マッチをよこせ、』

『よこせとはなんだ、ほしければ、くれろと云へ、』

『ぢやくれあがれ、』

父親は熊の權幕が荒いので、しかたなしに煙草入の傍にあるマッチを差しだした。熊はそれをひつたくるやうに取つて走りでた。

熊はそれから最初の道を引返して、種雄の家に往くなりマッチを擦つた草葺の農家はみるみる火になつて燃えあがつた。附近の民家は騒ぎだした。熊は何處からか萬能を持つて來て四邊に眼を配つてゐた。

時を移さず消防が駈けつけた。熊は門口に立ちはだかつた。燃えあがる火に映じだされた萬能を持つた熊の姿は、地獄

の繪にある雞殺そのままであつた。

『てめへだち、この火を消してみろ、承知しないぞ、』

高津原の消防組の菅澤直吉と菅澤榮助の二人は無理に火を消さうとした。熊は萬能で二人を倒した。消防組はかかれなかつた。種雄はこの時大浦の駐在所へ駈けつけた。

半鐘は物凄く谷の間の部落から部落に鳴り響いた。家にはもう火がかかつてしまつた。熊はそれを見ると燕のやうに身を飜して闇の中に姿を消してしまつた。

熊がけいを撲殺して老婆にも重傷を負はしたと云ふ凶報が傳へられた。大浦駐在所の向後巡査は種雄の急報によつて、多古署に電話を送ると共に、山越刑事と二人で高津原へ駈けつけた。種雄は未だけいのことは知らなかつた。向後巡査は半被を著て消防姿となつてゐた。

向後巡査と入違ふやうにして熊が駐在所に姿をあらはした。熊は向後巡査を覘つて來たところであつた。戸締もしてない駐在所の中には電燈がぽつかりと點つてゐるばかりであつた。熊はそつと入つて見まはした。その熊の眼に壁にかけてある洋刀が見えた。熊の眼は光つた。熊はいきなりそれを取つて中身を脱き、駐在所を出て坂の下へおりて往つた。道の出はずれには長松の家があつた。熊はその軒下へ往つて戸をがたがたと云はした。そこには自轉車を置いてあつた。長松は自轉車を竊はれてはならないと思つて、飛び起きて雨戸を開けた。

『何んだ、』

戸を開けるのを待ちかまへてゐた熊は、洋刀を振りかぶつて長松の頭に斬りつけた。長松はびつくりして後に退つた。熊は上に飛びあがつた。長松は家の中を走りでて駐在所の方へと逃げた。熊は追つかけた。長松の女房は二人の子供を起して坂のあがり立ての左側にあつた家に逃げて往つた。

長松は駐在所の前へ往つてよろよろとなつた。追ひついた熊は長松の頸すぢを後から突きさした。長松は斃れてしまつた。熊は長松の斃れたのを見ると引返して長松の家へ往つた。長松の家には何人もゐなかつた。熊は四邊の人家の前を探して歩いた。坂の左側の知りあひの老人の家の中で長松の女房の聲を聞きつけた。

『おい、おい、俺は熊だ、長松の嬶を出してくれろ、』

すると雨戸がちよつと開いて老人の顔が出た。

『熊か、俺の頼みだ。どうか赦してやつてくれ、長松に腹があつても、嬶は知らんことぢや、俺が一生の頼みぢや、今までのなじみがひに、俺の頼みを聞いてくれ、』

熊はその老人には材木運搬のことで何時も世話になつてゐ

た。

『そんぢや、俺は長松の家に二十圓ほど借金がある、俺が死んだ後で、女房や子供に催促しないと云ふなら赦してやらう、』

『それは俺が引受けた、催促はさせない、』

『よし、』

熊の血に染まつた姿はすぐ見えなくなつた。

向後巡査と高津原へ駈けつけて熊の暴行の眞相を知つた山越刑事は、五人の消防手を伴れて熊の逮捕に往つた。一行は出沼の清次郎の家へ往つて熊のことを問いたが熊は來ないと云つた。そこで一行が引返してその家の前の里道へ出たところで、すぐ前に人影がぼんやりと見えてゐた。

『熊ぢやないか、』

山越刑事が聲をかけた。すると人影が動いた。

『なにをツ、』

それは確に熊であつた。その刹那にきらりと光つたものがあつた。山越刑事はすぐ刃物だと思つた。刑事は腰にしてゐたピストルを取つて放した。それは空彈であつた。洋刀は又閃いた。刑事は實彈を打たうとした。彈は發しなかつた。刑事はあはてて引鐵を引き引きした。しかし幾ら引いても彈は發しなかつた。それは梅の花のやうに五つか六つ彈の入つた古い型の小さなピストルで、嘗て先輩某氏から五圓に讓り受けたものであつた。

山越刑事は仕方なしにピストルを捨てて、穿いてゐた足駄を脱いで向つた。洋刀は刑事の頭に觸れた。一つの傷は右前額から左に、一つの傷は左前額の生え際から右にかけてゐた。足駄を持つてゐた小指にも傷があつた。足駄はかかとの下裏を切られてゐた。頭の血が眼に入つた。刑事はそれにも屈せず熊の手許につけ入つた。刑事の手は熊の洋刀を持つた手にかかつた。二人は道から稻田の中に落ちた。熊は刑事の右の親指に嚙みついた。刑事はとうとう洋刀を奪ひとつて熊の手の屆かない所へ投げた。熊は逃げだした。刑事は洋刀を拾つて追つかけた。熊は里道を丘に沿うて走り、その外れ山路から丘の上にあがつて逃げてしまつた。刑事は眼前が暗らんで動けたくなつた。彼は山路のあがり口に洋刀を突き刺してすがつたままで氣絶した。最初のピストルの音に蜘蛛の子を散らすやうに逃げてゐた消防手が來て山越刑事を見つけた。逃げ散つた消防手の中には御臺所の自轉車屋まで逃げて往つて、そこの入口の戸に凭れかゝつて氣絶してゐた者もあつた。

八

恐怖の夜は明けた。血に飢えた殺人鬼は何時何處に現はれて狂暴を逞しうしないとも限らないと云ふ恐怖が久賀村は元より、附近の町村を襲ふた。香取、印旛、山武三郡の隣接町村は鼎の沸くやうな混亂を呈した。

警察では在鄕軍人、消防組、青年團と共力して殺人鬼の捜査に著手したが、開墾地の地理に精しい熊は出沒自在で逮捕することができなかつた。殺人鬼の噂は縣下ばかりでなしに日本全國に傳へられた。縣の警察部では全縣下の警察力をあげて殺人鬼を逮捕することにした。野村警察部長はじめ縣警察の首腦は二本松の捜査本部に詰めてゐた。

熊は時々現れて食事をしたり、自分の意のある所を話したりした。それによつて熊が忠治と寅松を覘つてゐることが知れた。最初熊が現はれたのは八月二十五日と六日で。それは飯笹開墾の椎名忠吉の家であつた。警察では二十七日に三千人の人數で飯笹開墾地から赤池開墾にかけて捜査したが徒勞に終つた。

この二十七日の夜の九時頃、熊は三里塚開墾の內の駒の頭の道路へ現はれて、警官に誰何せられたので、脫いで肩にかけてゐた著物を投げて逃げたが、三十日の午前二時頃、又三里塚開墾の五辻停車場の近くに現はれて逃げた。警察では九月一日、五千人で久賀本、大須賀の附近を捜査したが、これ亦何等獲るところがなかつた。熊は九月三日にも五辻驛に近い開墾地の一軒家に現はれた。熊が續けてこの方面へ現はれるのは、坂田沼の柳堀信一とはなとを覘つてゐるからであつた。新聞には信一とはなの二人が熊の襲擊を恐れて坂田沼の沼の中に水上生活をしてゐると云ふことを報じた。

九月八日の夜になつて熊が出沼の山倉虎吉の家に現はれた草刈鎌を持つて往つた。殺人鬼の世評は高まるばかりであつた。九月十日の夜になつて、熊は大門の五木田の裏崖に現はれ、崖をおりながら手にしてゐる鎌で暗がりを探つたところで、そこに木劍を持つて張込んでゐた豐和村飯塚の駐在巡査河野昱の頸があつた。河野巡査はそれがために殉職した。そこで警察で十二日には又大山狩を催したが、それも徒勞に終つた。熊に覘はれてゐる忠治は、警官に守られながらも不安でたまらないのか、何時も刀を手から放さなかつた。寅松は家族全部で兄の所へ移つた。熊はこの忠治と寅松の家の附近を徘徊した。

熊の捜査はしつきりなしに行はれたが、熊は見つからなかつた。それは熊の兄清次郎、脇佐次郞、出沼の消防手の多田幾四郞、消防部長の山倉長四郎、鈴木一郎などの親しい者が掩護してゐたからであつた。

熊はその後もちよいちよい姿を見せたが、依然として逮捕す

ることができなかつた。警察では捜索方針を時どき變更して努力したがその効がなかつた。効のないのは掩護者が捜索の網を熊に知らすがためであつた。警察の方でもそれに氣がついたのか、九月二十五日になつて山狩を廢止して、僅に警官を止めて捜索することになつた。筆者が久賀方面に往つたのは二十七日であつた。二本松の捜索本部にもあまり警官の姿は見えなかつた。そして筆者はその二十八日に、次浦、出沼、大門、高須原、二本松の各地を廻はつて事件の關係の場所を見、及び關係者に逢つた。次浦では長松の妻君に逢ひ、大門の五木田では、淸次郎、脇佐次郎の兩君に逢つた。脇は本大須賀村前林の者で熊の姉の夫であつた。熊には今一人の姉があつてそれは大都村柳生にゐるのであつた。筆者はそれから四角山へ往つて忠治君にも逢つた。忠治君は四十一であつた。忠治君は『昨年の今日が熊の暴れた日だから、今晩あたり出ます』と云ふやうなことを云つて、ひどく浮うきしてゐたが、それはその日に村外に出ることになつてゐたので、安心してゐたものと見える。筆者は他にもたくさんの人に逢つた。

二十九日になつて忠治と寅松が村を出たことを知つた。筆者はとても熊はつかまらないだらうと思つてゐると、翌朝になつて自殺の報が傳はつた。閾將を煩すること十萬、世間を騷がすこと四十二日。筆者はほつとした氣分になつて自働車を驅つて出沼へ駈けつけ、熊の家の近くからおりて、そこから檜木の丘と向きあつた丘の背を往つた。檜木の丘の麓にある熊の家の墓地には警官や消防組が人垣を作つてゐたが、間もなく青竹で造つた擔架に入れて白い汚れた毛布を着せられた熊の體は、眼の前をすれすれに運ばれて淸次郎の家へと往つた。秋草の中には蟲の聲がしてゐた。

熊の死は毒物を服した上で頸部を切斷したものであつた。忠治と寅松が遠く去つたので復讐の目的物のなくなつた熊は、二十九日の夜、淸次郎及び佐次郎の意見に從つて、佐次郎の父の福松が手に入れて來た毒藥の入つたもなかを喫つて、その後で頸部を切斷したのを、山倉多田を初め三四人の消防手で抱いて、祖先の墓地に運んで頸部切斷自殺を裝はしたものであつた。

それがために十月四日、淸次郎作次郎の二人は自殺幇助罪、幾四郎長四郎一郎の三人は隱匿罪とて起訴せられ、八日市場刑務所に收監された。この間の消息は裁判の確定後でないと判らないが、恐らく眞箇の事實と云ふことは外部には表はれないものであらう。

ただ、この悲しむべき事件を淺間しい黨派心から辯護もしてやらないのみか、却て幸にして陰忌を摘發して快としてゐる政友一派の心事を哀れむものである。筆者は血屬なるが故に、朋友同人なるが故に不慮の災厄に身を投じた淸次郎君はじめその他の人人の心事を悲しみ、併せてその災厄の一日も早く去らんことを心から祈るものである。同時に地上の榮光希求してゐる同胞の間に、憲政會とか政友會とか、愚にもつかない舊式の政爭の消失せんことを希ふものである。

奇術閑話

阿部德臧

目に見えぬ女

「大空を眺めぞ暮す吹く風の音はすれども目にし見えねば」

この歌は恒躬集の雜の部にある。たしか拾玉集でも見たと思ふ。また有名な都々逸に、

「聲はすれども姿は見えぬほんにお前は風の様だ」

といふのがある。

もし怪談の中からからういふ構想―出處のわからぬ聲―を探し出したら、ほとんど際限なくあるに違ひない

お名染みの本所七不思議の一つ「おいてけ堀」にしてもさうだ。「おいてけ々々」といふ聲は聞えるが、源兵衛堀には誰もゐない。多分河童だらうといふ話だ。おなじ七不思議の「馬鹿囃し」にしても、音樂だけが聞えて演奏者を見たものがない。この方は狸だつていふが、妙なものは狐狸の仕業ときまつてゐる。

古代の埃及や希臘にも出處のわからぬ聲といふ奇蹟は隨分多かつた。テーペの迷宮の戸はあけると雷鳴のやうな音のする仕掛がしてあつて通る人を驚かせたとプリニイはいつた。戸をあけると水の作用で喇叭のやうな音のする仕掛がヘロの書いたものゝ中にもある。

そのほかパクトルス川から出た石が喇叭のやうな聲を立てゝ、寶物を盗みに來た盗棒を追ひ散した話。レスボスの神託を告げる首の話。東がしらむと音樂のやうな聲を出すといふメムノンの像の話。……等と數へればいくらでもある。

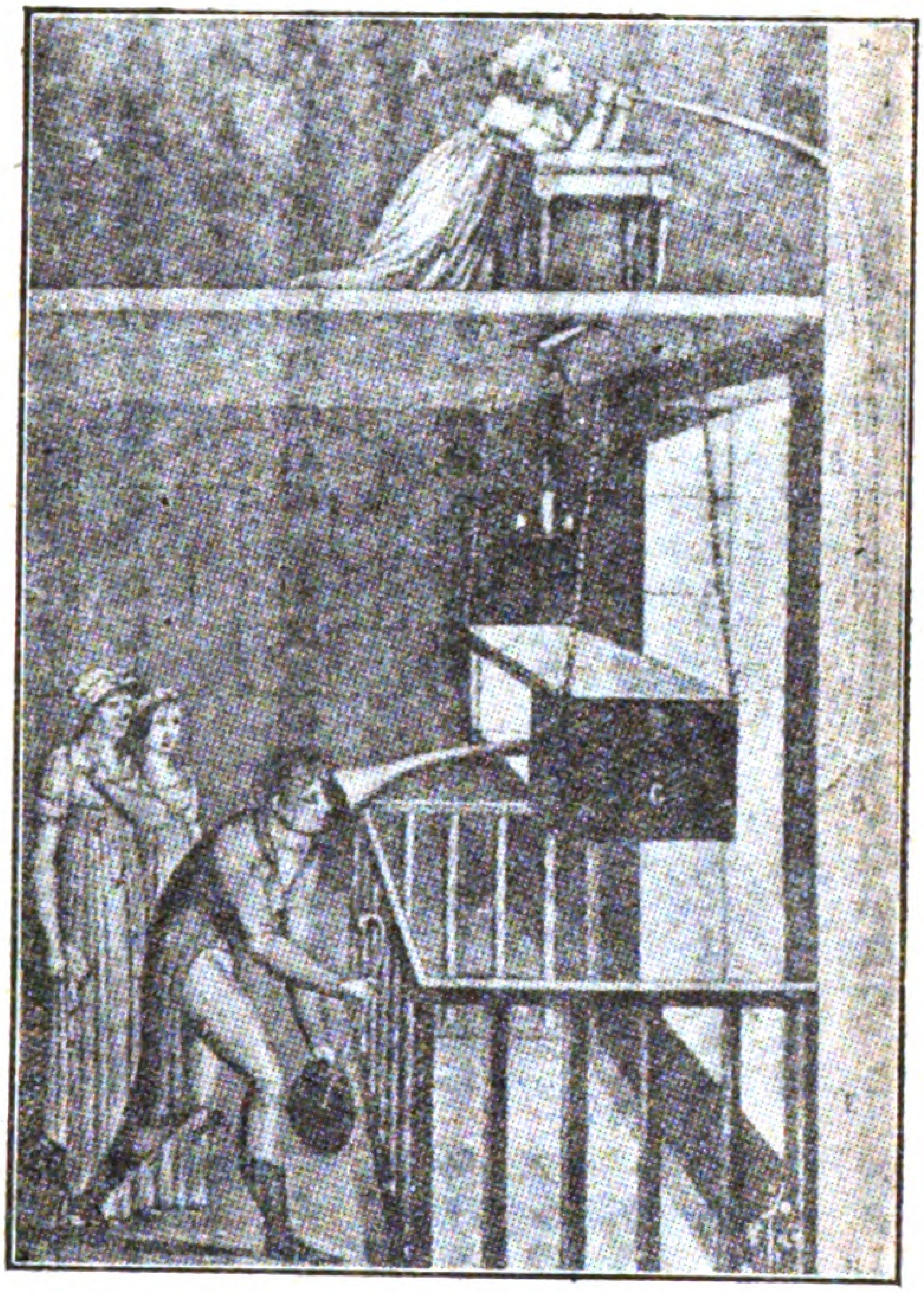
からういふものを奇術に仕組んだのが「目に見えぬ女」で宙につるした喇叭から聲が聞える仕組を見せたものだ。

一八〇三年、佛蘭西のローベル・シャルルといふ奇術士がレスター街のセギル座で奇術の公演をした。その時の呼物が「目に見えぬ女」と「デルフイのピシアの半身像」とであつた。

舞に觀客が上つて第一圖及第二圖に示すやうな喇叭の中

から聲が聞えて、觀客の尋ねる事に返事をするといふ奇術である。

第一圖



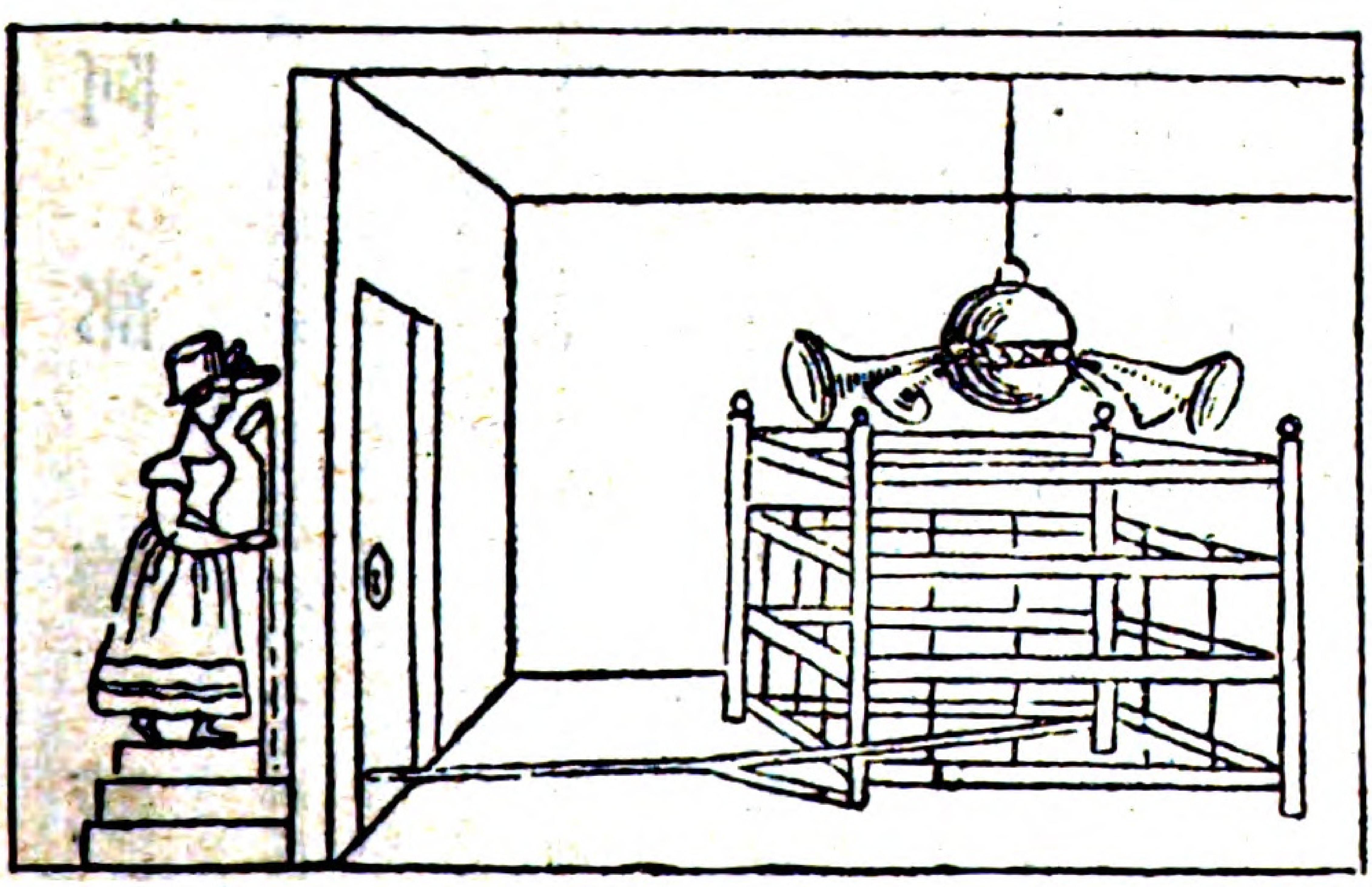
マーガレツト・テニエル
音聲を吹き込みの圖

風景畫家として有名なジョセフ・フアリントンがこの奇術を見て、大層感心して仕舞つた。

一八〇三年六月二十八日のフアリントンの日記に、

「ソモンド夫人が、目に見えぬ女、といふ奇術が大層不思議だからと、ひどく褒めそやすのでレスター街へ見に行つた。舞臺には喇叭のやうな格好をしたものが四つ下つてゐて、それに耳をあてるとその中から女の聲が聞えて來て、色々の質問に返事をしたり、觀客の樣子や服裝に付いて話をしたり、歌をうたつたり、時刻を知らせたり、ピヤノの音が聞えたりした。喇叭の四つ付いてゐる玉が天井から下つてゐて、それが檻の中に

第二圖



「目に見えぬ女」種明しの圖

這入つてゐる。喇叭から出て來る聲と音樂とは、實に驚くばかりで、その仕掛に就いて觀客は色々のあて推量をしてゐたが、綴つたものはひとつもなかつた樣だ。—ある人のいふには下から聲が管を通つて來て喇叭の口から中へ這入るのだが聞いてゐるものには、玉の中から出るやうに聞えるのであると——その聲は英、佛、獨の三ケ國の言葉で話をした。入場料は二志六片であつた。」これがフアリントンの日記の一節である。その中で「ある人云々」といふのが正しくこの奇術の種を見破つてゐる。

この奇術は數年間各所で人氣を集めてゐた。

その後「目に見えぬ女」と半身像とを一つ奇術にまとめて仕舞つた。その時聲を吹込んだのは靴下洗ひの娘マーガレット、ダニエルといふものだつた。

目に見えぬ女

一名

デルフアイの託宣

レスター街一番地に於て開演

舞臺には、外部とまつたく絶縁されてゐてしかも中には人の這入られぬ程の小さな神殿を安置し、その中から昔の人が神と交通したといふのもこんなかと思はれる樣な聲が聞え見物人の服裝、生國、そのほかのこまごましいこと迄も話しをする。奇々妙々の仕掛であるから、どんな人でも騙されないものはない。

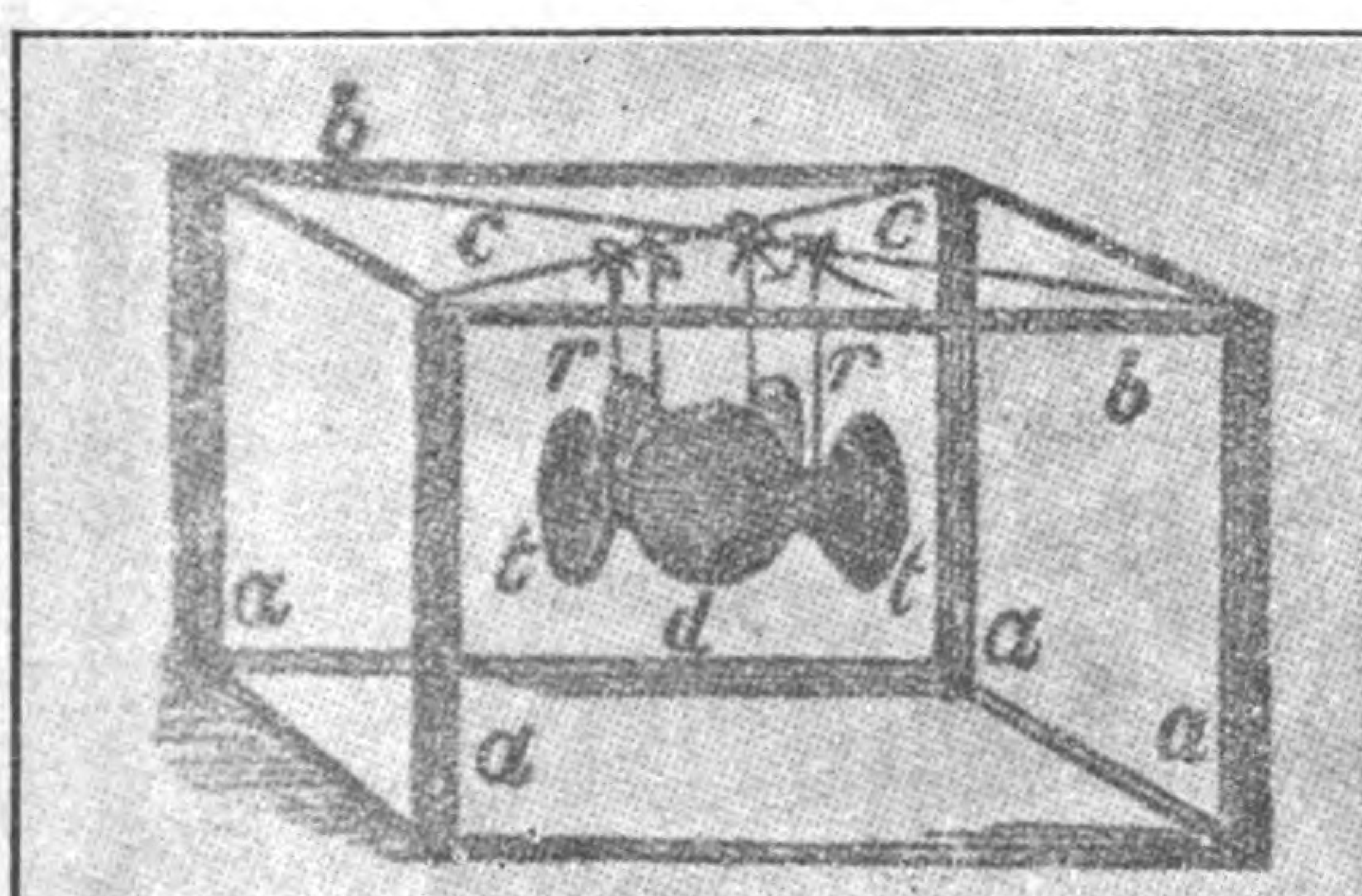
また見物人の耳のそばで、靜なあるひは調子の高い音樂が聞えるなど、さながら妖術のやうで、哲學的にもまた高尚優美な觀覽物である。

入場料　一志

朝九時より夜十時迄日曜には例外とす。

この奇術は一八五一年まで、ほとんど五十年といふ永い間倫敦でやつてゐた。その後紐育を始め各所で相當の人氣を集

第三圖



「目に見えぬ女」種明しの圖

めてゐた。

一八五六年に、紐育から「奇術士の虎卷」といふ本が出た。その中にこの奇術の種明がしてある。同書の圖に依つて説明する(第三圖參照)

aは柱、bは横木、dは銅製うつろの玉、tは喇叭、cは針金、rはリボン。

別室から床下を通つた管が柱aの中を通つて横木まで通つてゐる。別室にゐる女が第一圖及第二圖のやうに、管の端から歌や音樂を吹き込むと、それが喇叭の前の穴から出て、喇叭の口から銅の玉の中へ這入りふたゝび喇叭の中から外へ聞えて來る。それ故どの喇叭にしても、一ケ所から聲が這入りさへすれば、四つの喇叭のどれからも聲が聞えるわけだ。この邊が一寸工夫のしてあるところであらう。

日本にもこれと同じものがあつた。「小夜の中山夜泣石」といつて縁日や村の祭禮の時掛小屋の中で見せてゐた。

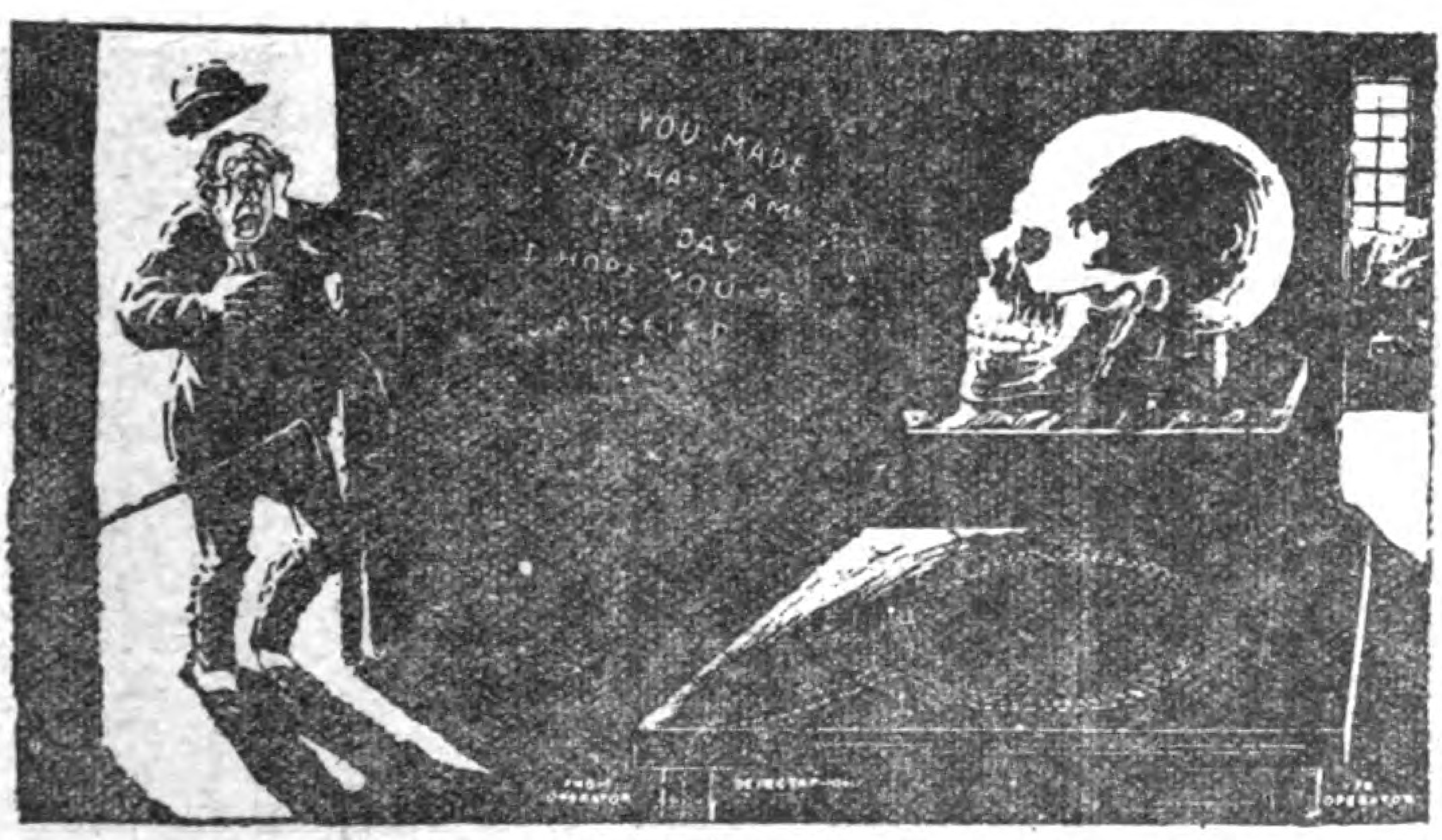
看板には人が大きな石の下敷きになつてゐる繪が書いてあつて、白い着物をきた木戸番が泣口上をもつて「あれ〳〵ごらうじませ、あの通り、いたアい〳〵と泣きまする」と客を呼んでゐる。

中へ這入ると竹の棒を三本組合せて、その上へ、石が一つ置いてある。これが小夜の中山夜泣石だ。

見物は石のまはりを取卷いて、石のそばへ耳を寄せると、「痛アい〳〵」といふ聲が石の中から聞えて來る。

種は「目に見えぬ女」とすこしも變る處はない。石のまつ下へ穴があけてあつてその上へ竹や木の枝を組んで、藁を拵へ上から泥がかぶせてある。つまり落し穴と同じものが出來てゐるわけだ。その穴から節を拔いた竹が地の下を通つて、莚でかこつた別室へ拔けてゐる。痛

第四圖



口をきく髑髏の圖

いゝといふ聲も實はそこから、竹の管へ吹き込むので、それが管を通つて石の下の穴から聞えるのだ。

また「口をきく髑髏」といふのがある。これも聲だけ聞えてその出處のわからない奇術で第四圖にあるとほり、上から釣した硝子板の上に、載つてゐる髑髏が口をきくといふ奇術である。「通俗奇術」第一巻に詳しく説明がしてあるが、こゝでは筋だけをかいつまんで書くことにする。(第四圖參照)

誘導線輪の付いた擴聲器を髑髏の中に入れ硝子板の上に載せて宙につるす。丁度その眞下にある卓子の中には、助手のゐる別室に接續された誘導線輪が這入つてゐて、別室にゐる助手の聲に依つて起された電氣が、卓子の中の誘導線輪から、髑髏の中の誘導線輪に誘導作用に依つて傳へられ、髑髏の中の擴聲器にあらはれるのである。また卓子の中には大形の震動膜を取付けたマイクロフオンが取付けてあるから、觀客の聲も別室にゐる助手の耳に聞える樣になつてゐる。それゆゑ髑髏に向つて口をきくと、その聲は別室の受信器に傳はり、助手はそれに應じた返事をする、と、その聲が外部と縁のきれてゐる髑髏の中から聞えて來る奇術である。もしラヂオと云ふものが一般化されない時代であつたら、かなり不思議な奇術として珍重がられたことだらう。

また「喇叭の中から口をきく幽靈」といふ奇術がある。本來心靈現象、として暗闇交靈會(電燈を消して室の中を眞暗にする)に於て行はれるもので、表面は靈媒者の心靈能力に依つて

第五圖



喇叭から口をきく幽靈の圖

靈魂を呼び出し、それに口をきかせるといふことになつてゐる。その時靈媒者は恍惚狀態にはいることもあれば、その儘しらふでゐることもある。

この靈魂の聲を「直接の聲」といひ、かういふ現象を惹き起す靈媒者を「喇叭靈媒者」といひ、その實驗をする集りを「喇叭交靈會」といつてゐる。靈媒者に呼び出された靈魂が話しをしたり歌をうたつたりすることはいふまでもないが、時によると、色々の物まねをすることがある。鋸の音　紙鑢の音、釘を打つ音、雨の音　風の音、水の飛び散る音　瀬戸物を毀す音　ピストルの音、馬の蹄の音、汽船の走る音、機關車の音。氣がむくと飛行機のプロペラーの音のまねまでする。それが大變上手なので、列席の人達も思はず感に打たれて　聞き惚れるといふから面白い。時によると犬の鳴聲の聞えることもある。これは靈魂が物眞似としてやることもあれば、ほんとうの犬の靈が現れて鳴くこともある。死んだテリヤが來て膝の上へのつて鳴いたので重かつたなどと眞面目くさつていふ人さへある。この邊の消息には隨分變つた話がないでもないが、書き始めるとあまり長くなるから、茲ではたゞ幽靈が喇叭から口を開くといふことだけを簡單に說明することにしやう。

例へ事實をいろどる表面の理論はどうあらうとも、結局奇術のひと手であることはいふ迄もない。第五圖にある通り靈媒者の兩手を縛り、そのそばへ喇叭を置く。列席者は思ひ々々の質問を小さな紙に書いて　卓子の上に置き、一同で靈媒者のたはりをぐるつと取卷いてゐる。

電燈が消えると喇叭から幽靈の聲が聞えて　紙に書いた質問にそれぞれ返事をするといふのである。

電氣を消して室がまつくらになると、靈媒者は繩拔けの術をもつて繩から手をほづし、ふところに忍ばせてゐる特別仕掛の電燈で、紙に書いてある文字を讀んで、そばに置いてある喇叭を取つて、列席者の質問に返事をするといふだけのことである。

この際前號「首切術」の一部で一寸述べた腹話術をもつて、聲の遣ひ分けをすることも屢々ある。もと々々幽靈ではなく、靈媒者が口をきくのだから　實驗の濟んだ後で喇叭の驗査をされると中が濕つてゐるので、靈魂の聲の表現を助ける爲だといつて、始めから中をぬらして置く。

「さくら」の話

術者の仲間が前もつて術者と打合せをしておき、ひそかに客席へ入り込んで、表面、術者とは一面識もない様に見せかけ實はその演技を助ける者を「さくら」または「とはつかい」と云ふ。Confederate, plant もこれと同じ意味である。この「さくら」を使つて大しくじりをした話がある。今でこそ亞米利加一流の奇術士になつてゐるカール・ハーツも、まだ年の若い時分には

とんでもないしくじりをして、たくまず客に腹をかゝへさせたこともあつた。

第六圖



カール・ハーツ

あるときルイズギルのバッキンハム座で、銀貨飛行術をやつたことがある。(飛行術といふ名稱はかなり廣い意味に使はれるもので、ある物品を甲の場所で打消し、乙の場所から現はすといふ場合には、「……飛行術」といふ)バッキンハム座でハーツのやつた銀貨飛行術は、まづ銀貨を消失させてそれをレモンの中から取り出し、ふたゝびその銀貨を観客のポケットへ通はせるといふやり方であつた。

「白狀すれば實はさくらを使つて、そのさくらに前もつて印のしてある銀貨を預けて置くのだ」とハーツ自身もいつてゐる。

或晩ハーツが芝居の入口で、さくらに使ふ子供を見付けてゐた。そのうちこれはと思ふひとりを、そつと物陰へ呼んで、自分は奇術士だが、今晩一寸奇術の手傳ひをして貰ひ度い。ほかでも無いが、この一弗の銀貨を預けて置くから、右のズボンのポケットへ入れて置いて、銀貨の奇術になつて「何誰か舞台へお上りさい」と云つたら、一番先に舞台へ上り、私が別の銀貨をなくして、「あなたのポケットへ通はせます」といつた時、それを出してくれゝばよいのだ。その通りにやつてくれゝば一番前列の席を提供しやう。と云ふとその子供は大層喜んで、堅く約束して芝居へ這入つて行つた。番數が進んでいよ〳〵銀貨の奇術となつた。さつきの子供は前列に腰をかけてポカンと口を開いて見てゐた。

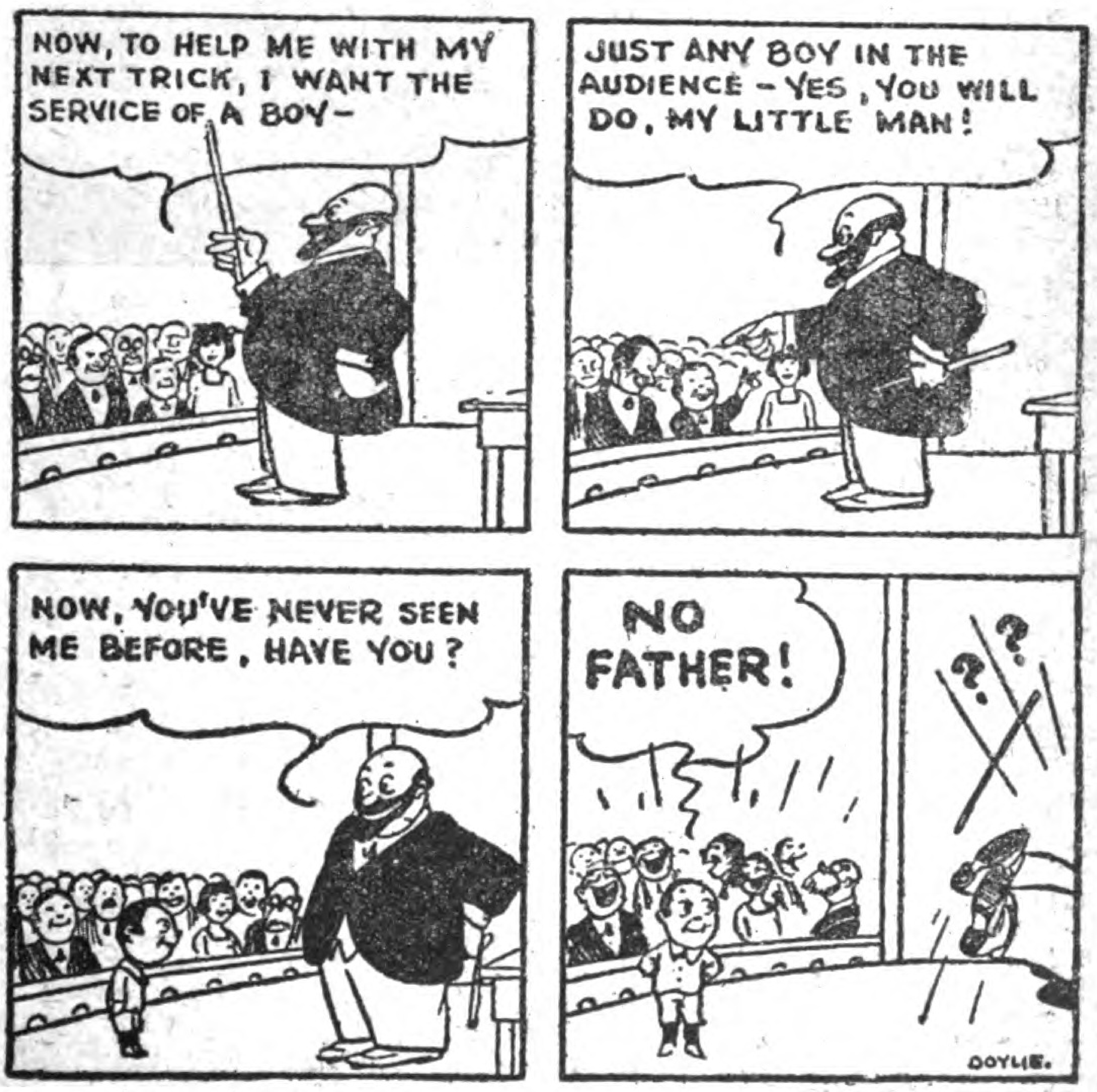
ハーツが別の客から一弗の銀貨を借受けてそれを消失させ、かたの通りレモンを切るとその中から今の銀貨が現れたので大喝采を受けた。

「皆様たゞ今私はこの銀貨をレモンの中から取り出しました。今度はどなたかおひとり御登場を願ひまして、遠方からこの銀

貨をその方のポケットへ通はせると云ふ離れ業を御覧に入れます。どなたかおひとり御登場下さいまし」と云ふと約束の通りさつきの子供が舞臺に上つて來た。ハーツはその子供に「こゝに一弗の銀貨が有ります。私が今この銀貨を打ち消しまして、あなたの右のズボンのポケットへ通せて御覧に入れます。ワン、ツー、スリー、ゴー！」と云つてハーツはぐつとそりみになつた。ふんわりと微笑を浮べながらひと渡り客席を見廻して、さあ坊ちやんの右のポケットを探して御覧なさい、只今の銀貨はあなたのポケットへ通つて居ります。」と云ふと子供は少し赤い顔をしてもじ々々しながら、右の手をズボンの隠しへ入れて、ゴチヤ々々の小錢を手一杯摑み出して、「あんまりのどが渇いたものだからラムネを呑んで九十仙しか殘つてゐません」と云つた。

この一撃でハーツの大藝術は目茶苦茶に成つた。「今考へれば馬鹿々々しいので、ふき出さずにはゐられないが、その當時はとても喜劇の一幕としてその場の出來事を味ふといふ様な悠長な氣にはなれなかつた。」と云つてゐた。今のハーツならこんな馬鹿氣た奇術をやるきづかいはない。

第七圖



さくらしくじりの圖

一體奇術でさくらを使ふといふことが間違つてゐる。もしさくらを使つても差支へないとしたら、どんな離れ業でも自由に出來る。

かりにも藝道の向上といふことを考へたら決してさくらを使つてはいけない。

しかし「襯衣拔取術」をさくらとみられてピネテイが困つた様に、さくらを使はないでもさくらとみられる場合が往々ある。奇術士の側から云ふとかなり辛い話だが、時々さくらを使はないではないのだから、さう思はれたからといつてあながち苦情もいへないわけだらう。

ハーツのやつた銀貨飛行術にしても、さくらを使はないでやることが出來る。それはごく簡單で、たゞをりをみて客のポケツトへ入れて置くと云ふだけのことだ。しかしこの方は一寸むづかしい。ほうり込むところをつかまるとほんとうの現貨暴露になる。十八世紀の終りから十九世紀にかけて、佛蘭西でならした奇術士にオルギエといふ者がゐた。この男はことに銀貨の奇術が上手で「銀貨飛行術を」やつてナポレオンを驚したといふ話は有名なものだ。

オルギエのやり方に依ると、最初大形の銀貨を一つ借り、それに印をつけて貰ひ手に受け取つてから別の銀貨（同種類のもの）とすり替へて、それを卓子の上に置く。それゆゑ觀客の目には今借りた銀貨（印のしてある）を卓子の上に載せたやうに見えるか、その實術者の手のひらの中に隱れてゐる。（この時、術者はてのひらをチヤンと開いてゐて、しかも銀貨は掌にくつついてゐる。これを物品の掌握法といふ）そこで術者はふたゝび客席へ來て今の銀貨より小さい銀貨をもう一つ借りる。その時からだを一寸前にかゞめ加減にして、手に持つてゐる銀貨（印をつけてある）をその邊で一番入れよい位置に腰けてゐる人のポケツトへ投げ込んで、ふたゝび舞台に戻り、卓子の上の銀貨と今借りて來た銀貨とで、銀貨小手のあしらひとつた様なものを二三手やつて愈々銀貨飛行術に移る。

しかし、この奇術の一番むづかしい處は、すでに奇術以外の仕事——觀客から銀貨をかりること——の中でやつて仕舞つてあるのだから、あとは手に持つた銀貨を手の中に消すといふ至極簡單なことをすればよいのである。

怪力の話

怪力の話も古いものだ。ヘラキユールスの大力を始めとして、胸の上の鐵敷で鐵を鍛へさせたといふフアームスの大昔から、サンドウのだんべるに至るまで、いづれの國いづれの世にも、大力無雙を以て一世を驚倒した話は、ほとんど擧げ盡されぬ程であらう。しかしこの怪力も興行物となると、巧に力學の理論を應用して、持前の力をその何層倍といふ程の能率に働か

せることが屢々ある。

前號「五色酒」の部で述べたデザギユリエ博士が一七六三年に「實驗物理學」といふ本を倫敦から出版して大力術の種明しをした。

その當時フオン・エツケベルヒといふものがサムソンといふ名で歐洲諸國を巡業して、力持ちの藝を見せ、古今の怪力としてならしてゐた。この男中肉中背、さして力のありさうな體格もしてゐなかつたが、やることを見ると、とても人間業とは思はれなかつた。

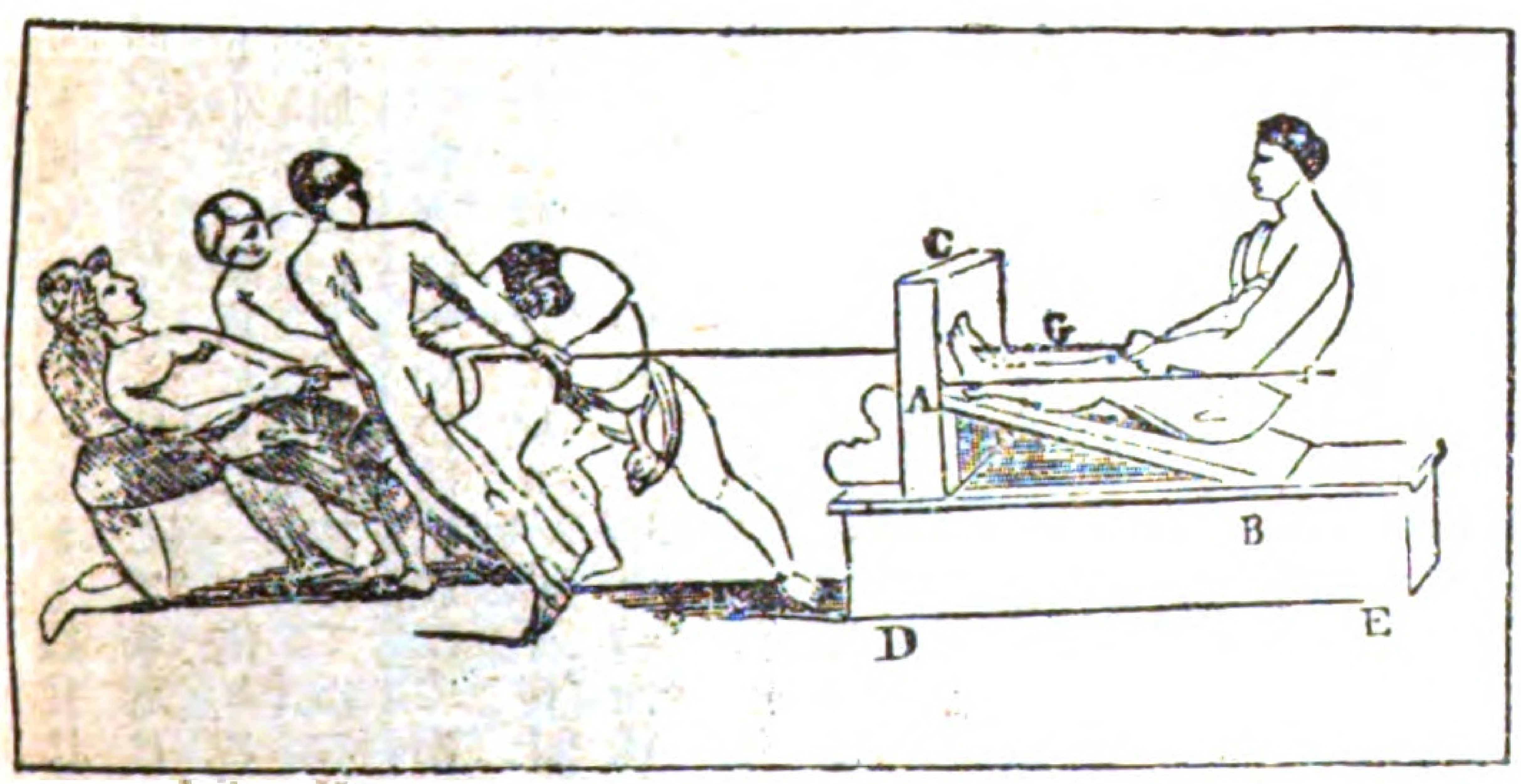
しかし流石にデザギリエ博士だけはこの大力を怪しいと見てとつた。かならず何か秘傳があつてやるものと目星をつけて、テユリバデイヌ侯、スチユーアート博士、プリングル博士それ

第八圖



デザギユリエ博士

第九圖



力業の圖

に博士の助手と都合五人でサムソンの力業の實地驗査をした。一同で力持サムソンのまはりを取卷いて、演技をさせ嚴しい實驗をしたところ果して博士の鑑定通り、ほんとうの大力ではなく、悉く力學に依つて說明の出來るものばかりであつた。そればかりではない見物に行つた人達も種がわかつたら、その場でサムソンのとほりにやることが出來たといふから面白い。

その後博士は自然科學研究會を始め各所で公演と實驗とをやつた。

これ等の怪力に對する博士の說明の一、二をあげると、

術者は十一圖に示した樣な台の上にのり、斜めの板（AB）の上にすわり、垂直の板Cに足をかける。腰のまはりに卷いた丈夫な帶に鐶をつけ、それに紐の端を結んで、ふんばつてゐる足の間をとほして垂直の板Cにあけてある穴から外へ出す。その紐を數人の人或は二頭の馬で引いても動かないといふ藝當をした。その時臺の上の術者は、兩手を紐にかけてひつぱつてゐるが、それはほんの體裁だけのことで實際は何の役にもたゝないことだ。

次に繩を切る術がある。柱を一本たてて下から一間ばかりの處へ繩を卷き、そこから二尺ほど下に、柱に鐶を取りつけ柱へ結んだ繩をその鐶へとほして繩の先を兩手でしつかり持ち、兩足を柱の繩の處へかけて、うんとうしろへふんばつてその繩を切る藝當をした。たゞし柱の下には羽布團を敷いて、繩が切れてからだが倒れた時に、怪我をしない用意をして置く事。

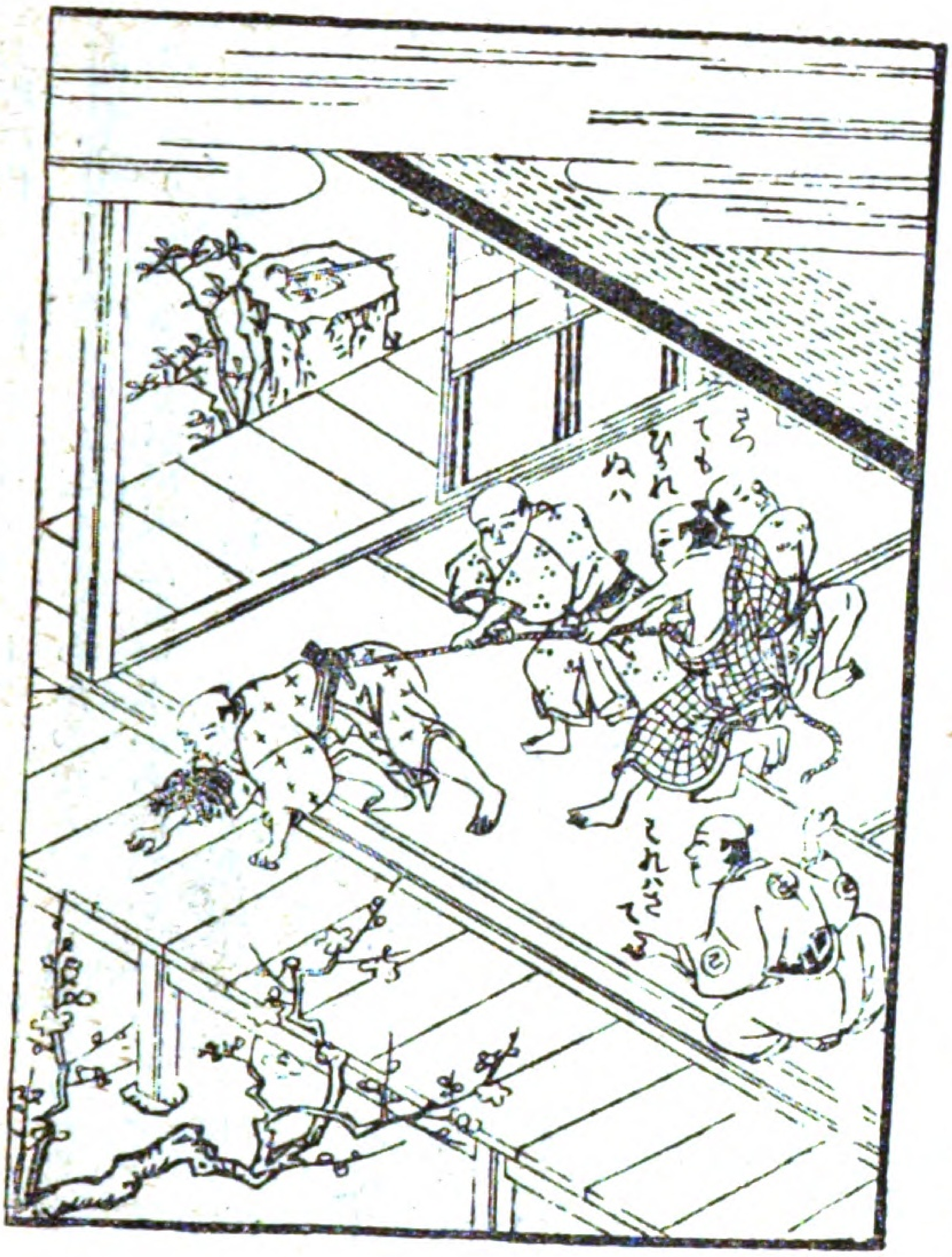
右の演技は骨盤の力に依るもので、どんな大力でもこの二重弓門形の骨盤の力の中心に打ち勝つといふことは到底不可能のことだ。ことに脚と股をまつすぐにつつぱつたときの力は想像以上で優に四五千封度の重量を支へることが出來る。この理に基いて術者は馬二匹に對抗し、二三千封度の大砲を引上げることも出來る。

ナザニエル・ワンレイといふ人が一八〇六年に倫敦から「小世界の驚異」といふ本を出した。その中にルイ十六世の馬車が、ぬかるみへ這入つてどうにも動かなくなつた時に、金剛力をあらはして馬車を引き上げたバルサバスの話が書いて有る。バルサバスはこの功に依つて年金を貰ひ遂にエランシエヌエンヌの市長になつた。

このバルサバスがある日フランダーの町の繩屋へ繩を買ひに行つた。店番をしてゐる若い娘に「なりたけ、丈夫な繩を見せて呉れ」といふと、奥から井戸繩の樣な太いのを出して來た。バルサバスちよつといたづらがし度くなり、その繩を受取ると、まるで木綿絲でも千切るやうに、捻ぢ切つて、「こんなやわな

のは駄目だ」と云つた。「もつといゝのもありますがお値段が高くなりますよ」といふ。「高くてもいゝ」と銀貨を三四枚出して渡すと、今度は娘の方でその銀貨をぐいと捻ぢつたと思ふと無雑作に千切つて仕舞い「いゝ縄ですからこれではとても足りません」といつた。これには流石のバルサバス、どぎもを抜かれ、「一體あなたはどういふ方で御座います」と言葉までも改つた。娘の素姓を聞いた時のバルサバスの驚きは、とても銀貨を千切られたどころの段ではなかつたといふ。その筈だ。娘といふのはバルサバスが家を飛び出してから生れた自分の妹だつたのだ。

第十圖



力業の圖

のちにこの女は専門の女力持ちとなり歐洲各國を巡業した。跣足でまつかに焼いた鐵の棒の上を歩いたり、重い大理石をからだの上へのせて、手離しで六尺も跳ね飛ばしたりして見せてゐた。

「續たはふれ草」といふ本に力持ちの奇術が載つてゐる。（第十二圖及び第十三圖參照）

「這ふてあるく人に細引を付けて引きとめんとするに幾人しても引きとめられぬしやう」

「人に錢貳貫文を口にくはへさせて匍匐に這ふて行くを其人の腰に細引を付て。二人して力を出しひくに引とめること叶はざるもの也」

「曾我五郎朝比奈三郎草摺引」

「一人腰をすへ右の足を踏張。左の足も少しかゞめてふんばり。左の臂を張て手を腰に突張。時致の繪のごとくして居るなり。引人は朝比奈の繪のごとくしてひくにいかほど大力の人引てもひかれぬ法なり。ひかれる人の右の足の先にて。ひく人の足の指先をとめるなり。引人の左の足先

第十一圖



草摺引の圖

と行あふなり。ひかれる人右の手にて、引人の左の腕の中程をおしとめるなり。かくのごとくするときはいか程の大力の人にてもひかれぬものなり。」

ド・グリジーと時計の奇術

ド・グリジー伯爵はルイ十六世のそばを離れなかつた。偶々一七九二年の暴動の時ルイ皇帝の身をかばつて、自分はチュイリー王宮に押し寄せた群集の爲に殺されて仕舞つた。

その子にエドモンド・ド・グリジーといふものがゐた。巴里の混亂に紛れて、國境を越えわづかの金を持つてフロレンスまで落ちのび、醫學校に這入つて二十七の時に一人前の醫者になつた。

しかしグリジーは生れつき奇術が好きだつた。専門の醫學よりもよつぽど奇術の方が好きだつたので遂に本業を捨てゝ、奇術士となり「襯衣拔取り術」で有名なピネテイと技術の上で張合つてゐたが、とう々々ふたりは大喧嘩をして仕舞つた。この話しは奇術にからまる復讐奇談として、かなり有名なものだ。

このド・グリジイが羅馬へ行つた時に、羅馬法王から是非といふお招きを受けて、奇術をやることになつた。いよ々々あしたが法王の御前演技といふその前日一寸用があつて、町の一流の時計屋へ行つた。折柄なにがし大僧正の使が修繕を頼んで置いた時計を受取りに來た。まだ直しが出來てゐなかつたので、時計屋は言譯をして、「かならず今晩こちらからお屆け致しますから」といつて使ひの者を歸した。時計屋は箱の中から大きな懷中時計を出してド・グリジイに見せ、「馬鹿に大きな時計ですが、有名なブレケットの作で僧正樣の御秘藏の品

で御座います。つひ二三日前のこと、この町にゐる人が博打に負けて金がいるので是非一千法で買つてくれないかと持つて來たのがこれと寸分違はぬ時計で御座いました。妙なことがあるものですね」といつた。これを聞いたド・グリジー忽ち奇抜な一策を思ひついた。焦る心をぐつと落ち付け、「その人はいまでもその時計を賣るだらうか」と聞いた。「勿論賣るでせう。金に困つてゐるのですから」と時計屋が答へた。「それなら一千法でいゝから是非買つて貰つてそれへ大僧正の紋章と同じものを彫り付けてくれ」と頼んだ。時計屋は大分躊躇してゐた。「しかし決して悪いことに使ふのではないから」といつたので、直ぐその時計を買つて來て大僧正の紋章と同じ紋章を彫つてくれた。ふたつを並べて見ても、もと々々同じものだから寸分の違ひがない。ド・グリジイは飛立つばかりに喜んで、その時計を持つて自分の宿へ歸つた。

翌日法王の御前へ出た。正面の一段高い處へ着座した羅馬法王第七世を始めとして、時の高位高官綺羅星の如く居並んでゐた。中にもなにがし大僧正は、いまにいたづらをされるとは知らないから、やんわりとした床几の上へさも鷹揚に腰をおろしてゐた。

大喝采のうちに大小奇術十數番は終り、いよ〳〵問題の時計の奇術となつた。しかしたゞ時計をお貸し下さいといつたのではどんな時計を渡されるかわからない。こちらはどうしても大僧正の時計を借りなければならない。そこでド・グリジイは考へた。「どうか一目で見わけのつく様な素的に大きな時計を貸して下さい」といつた。これならば大僧正のより外にはない。例の條法王がすぐ大僧正に、「その大きな時計を貸しておやり」といつた。何しろ秘藏の珍品だから寸時も手放し渡くはない。といつて法王のおほせにそむくわけにも行かないし、澁々ながら大切の品をド・グリジイの手に渡した。

ド・グリジイはそれを受けとると、手早くきのふ買つた時計とすり替へて、堅いか柔いか驗めすのだといつて、いきなりそれを床の上へほうりだした。見物は思はずあつといつた。大僧正はまつさほになつて「何をするッ」といつたが、ド・グリジイは落ち時き拂つて、ほうり出した時計を拾ひ上げ、鐵敷の上へ載せて大きな大砲の玉で、グワンとひとつ時計をぶつつぶした。あまりのことに一同はたゞ々々呆れるばかりであつた。ド・グリジイはぴしやんこになつた時計を大僧正に見せて、「これはあなたのに相違ありませんね」と念を押した。大僧正は裏の紋章を見て、溜いきをつきながら「あゝたしかにわしのだ。いくら貴公が魔法使ひでもこれだけは元には戻らんわい」とい

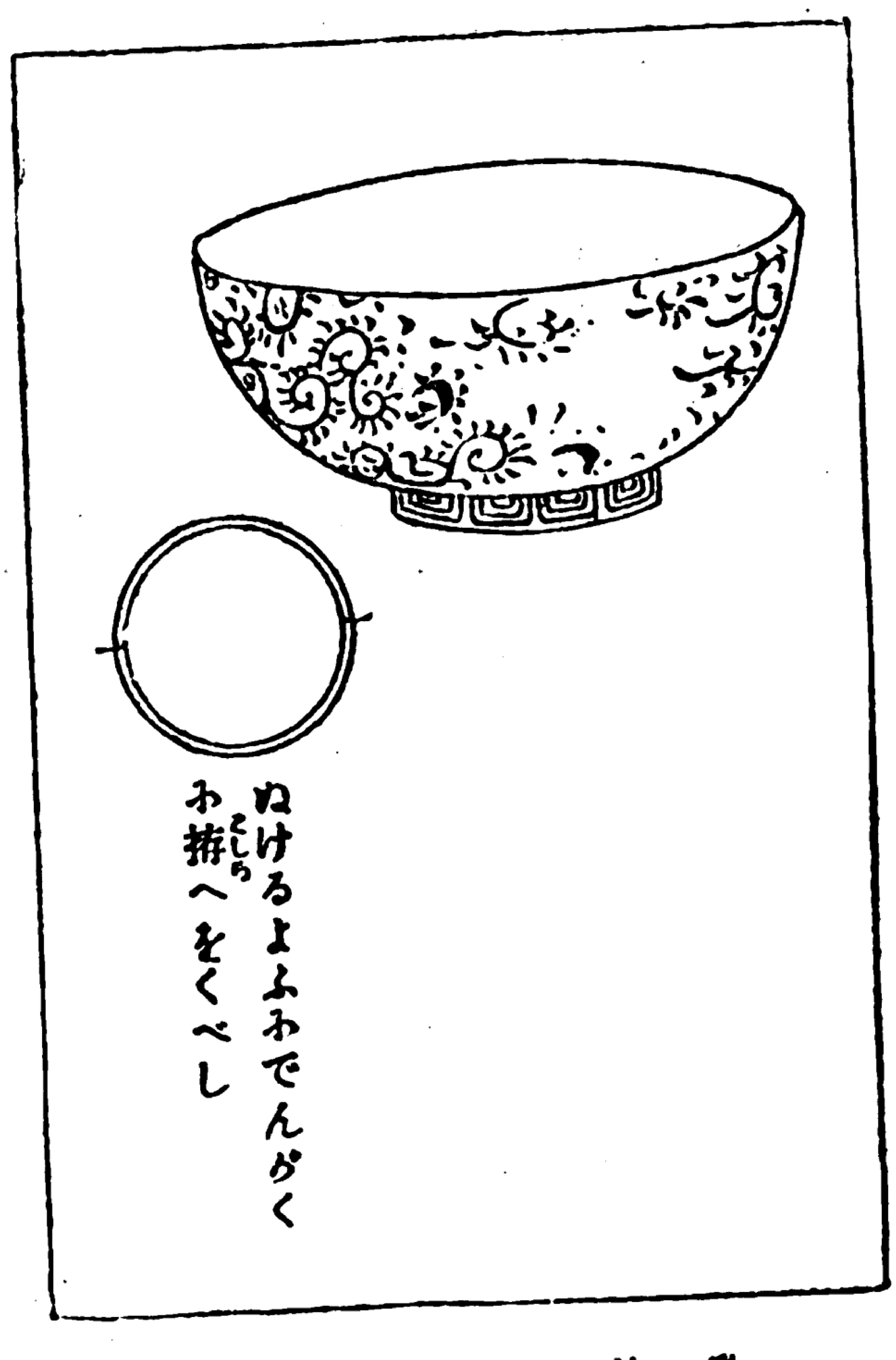
つてすつかりしよげ込んで仕舞つた。ド・グリジイはぴしやんこの時計を眞鍮の乳鉢の中へ入れ「何とかしてみませう」と今度は乳棒でゴチヤ〳〵に搗碎いて、火藥をふりかけ、火をつけた。白い煙がぽうつと立つた。「どうか皆樣こちらへいらしやつて、實地に御檢査下さいまし」といつた。法王を始め一同乳鉢の中をしらべに來た。その時、そつとほんとうの時計を法王の衣のかくしへ忍ばせた。

この後は「銀貨飛行術」の行き方と變りはない。コナ〳〵の時計を仕掛箱の中で消失させ、法王の衣のかくしへ通はせるといふ順序になる。大僧正の大切な時計が羅馬法王のかくしからピカピカ光りながら現れた時のおどろきはよもやと思つてゐただけに、彈丸の下敷になつた時にも決しておとらない程であつた。大僧正は胸撫でおろした。法王は感服のあまり、「わしは喜んでド・グリジイ伯爵は魔術の名人であるといふ」といつた。

この一藝でド・グリジイは一千法を棒に振つた。しかし名人ド・グリジイといふ評判は羅馬全市にさながらいかづちのやうに鳴り響いて忽ち一千法の何百倍の収益を得た。

この場合は例外として、普通に奇術士がやるのは、前號の「鳩と指輪」の處で一寸いつた樣に、「すり替袋」といふもの丶中へ入れる。この袋は普通天鵞絨でつくり中が二つの部分に分れてそれに短い柄がついてゐる。てもなくさかなを抄ふ叉手と同じ格好である。その柄に仕掛がしてあつて、そこをねじつて袋の内壁を甲乙と變化させる。觀客から借りた時計をこの袋の中へ入れ、柄をねぢつて替玉の時計にすり替へる。このやり方によると時計は奇術の最初にすり替へて仕舞ふのだから、その後はつぶさうと、叩かうとすきなことが出來る。助手はその袋を持つて樂屋へ這入り、中から時計を出して、任意の入物へ入れて持

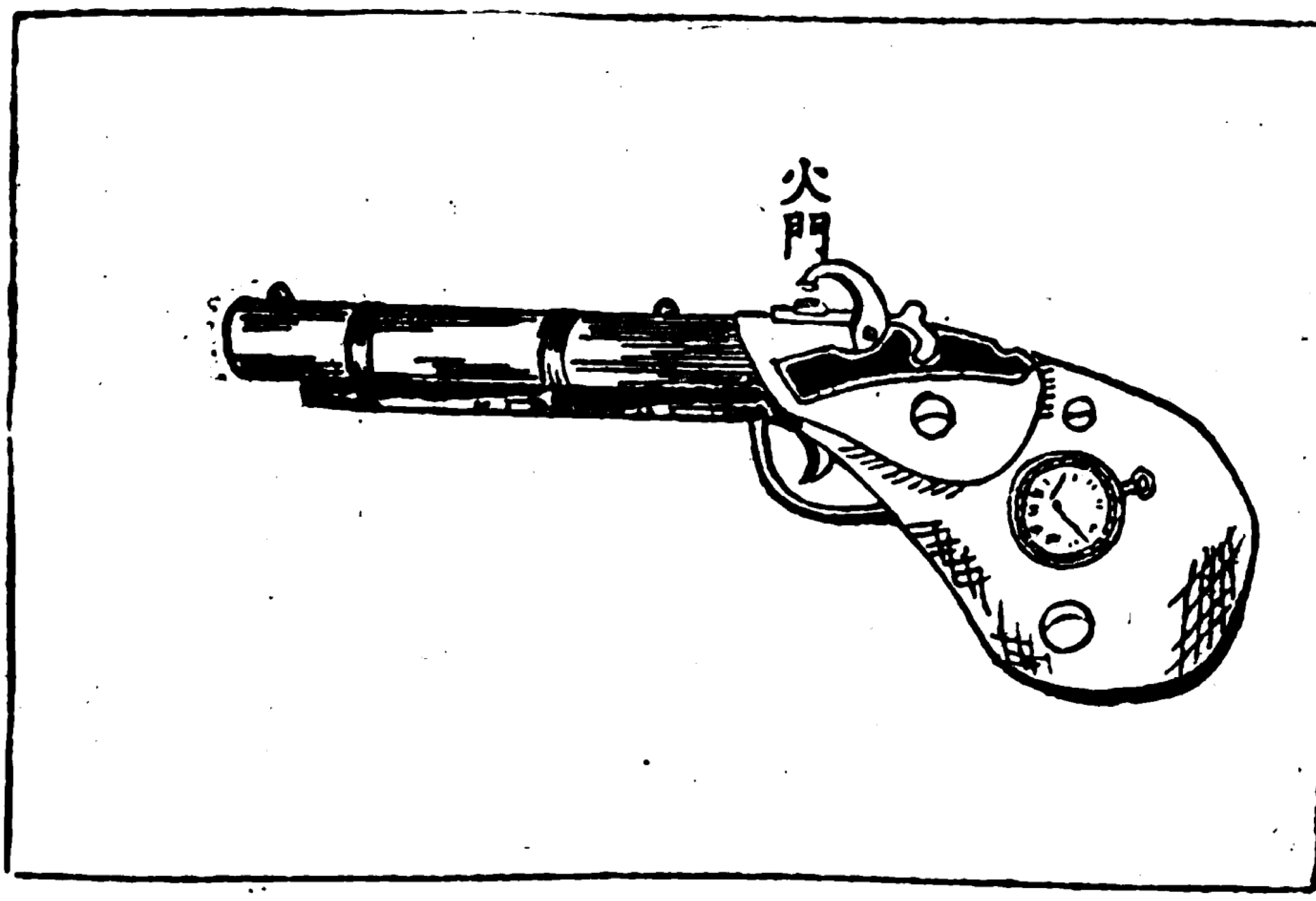
第十二圖



乳鉢仕掛の圖

つて出る。食麺麭の中、或はいくつも組合せた箱の中、ときによると洋盃へ注いだ牛乳の中から引き出すこともある。こはした時計をピストルの先きの喇叭の中へ詰めて、鏡に向つて打ちだすと、鏡がわれて時計の現れるやりかたも、ある。また古い式では乳鉢の底をがんどう返しにしておいて借りた時計を抜きとることもある。明治十五年に出版された「西洋手づまの種」といふ本に「時計破砕術」の種明しがある。

第十三圖



ピストル仕掛の圖

（第十四圖及第十五圖参照）

時計を砕き鐵砲にて打時計は保存する法――「觀者の時計を借受て饒鉢（是は丸薬杯を調製する器なり）の底を拔バネにて物品の出入るよふに拵らへ元の如くに仕置借うけたる時計を饒鉢へ入る際に隱し持ちたる用意の破却たる時計を其上へ運び入似合なる擂木にて時計を微塵に叩き壊ち饒鉢の內法をゴリ／＼と擂廻し或ひは突砕く體になし其間に彼の饒鉢の底より眞の時計は拔取（此ぬき取たる時計は前座のものに渡し前座は此時計を飾り附ある燈籠の中へ飾り付置なり）右拔き取たる以上に鉢の中なる破却たる時計を塗盆の上へバラバラと明けて見せる諸君御覽の通り粉微塵にしか／＼と口演鐵砲の中へ砕けたる時計を込め（鐵砲は右の手にて握る處まで穴ありくだけ時計は成丈穴の奥へ入るよふにすべし）から筒を放せは其音と共に（前座は注意して燈籠に仕掛ある糸を引眞の時計飾り附あるを顯れる樣にするなり）觀者より借得たる時計は燈籠の中に遺然としてある至極觀者をして欣喜せしめる手品なり猶圖を見て知り得べし。

一本傘の術

お附みに日本手品「一本傘」の種明しをする。本來これは最初にやる奇術ではないが、こゝでは一番太鼓がはいつた時の前口上から書き出すことにする。

「東西、一座高うは御座りますれど、御免を蒙り、不辨舌なる口上をもつて申上げ奉ります。

お運びのいづれも樣方益々御機嫌うるはしう御座遊され、我等身にとり恐悦至極に存じ奉ります。

従ひまして御當所は、花の三府と御座りまして、あまた諸藝者入替り差替り、てにてこじつを盡されましたるその後へ、未熟不鍛錬なる總一座、何樣なる藝當御目にかけましても、お目とまる儀はこれもつて御座りませぬ。なれども下手は上手のかざりもの、枯木も山の賑かし、蝶々とんぼも鳥のうち、針も金棒のうちとやら、下手な鐵砲も數打ち當ると御座ります。

従ひまして只今は、一番太鼓打ち込みましたるばかりにて、樂屋にては太夫身ごしらへ舞臺にては後見道具しらべの間、お耳やかましくも、今ひと囃しはわけて御用捨。

といふ。舞臺の眞中には奇術士のすわる席が設けてあり、その左右に臺箱（樂屋では種箱といつてその中に種を仕込んで置く、寸法は一定してゐないが、およそ、高さ七寸五分、横五寸、縱九寸位）が飾つてあり、その前に燭臺を置き、火がついてゐる。

後見（今いふ助手のことで、いぼ打ち或は種廻しともいふ）は木綿の黑の着付けに小倉の袴で太夫の席から三尺ばかりしも手に前へいぼ太鼓としめ太鼓とを置いてすわり、下座の囃しジンジロに合せていぼ（いぼ太鼓のことを略していぼと云ふカンカラ音がするので一名かんかん太鼓ともいふ）を打ち始める。

そこで口上言ひが、

「東西、ながらくの間打囃しまして、さぞかしお耳やかましう御座いませう。樂屋中に置きまして太夫身仕度く整ひますれば、お目通り正座なかばまでは控へられます。」といふ。

太夫は腕ぬきを付け模樣の着付けに袴、本式には裃をつけ、中の舞ひの囃しで出る。太夫が自分の席に袴の裾を絞つてすわるのと、中の舞ひの太鼓の打ち切りとが、ぴつたり合はねばなぬ、此邊なか〳〵やかましいものだ。ことに一本傘の時は左側の袴の中へ傘を忍ばせて出て、太鼓の打切りと袴の裾を絞つてすわる呼吸が合つた時に、左手で傘の頭を持つて横に捻つて自分の後へ置かねばならぬ。

口上言ひが、

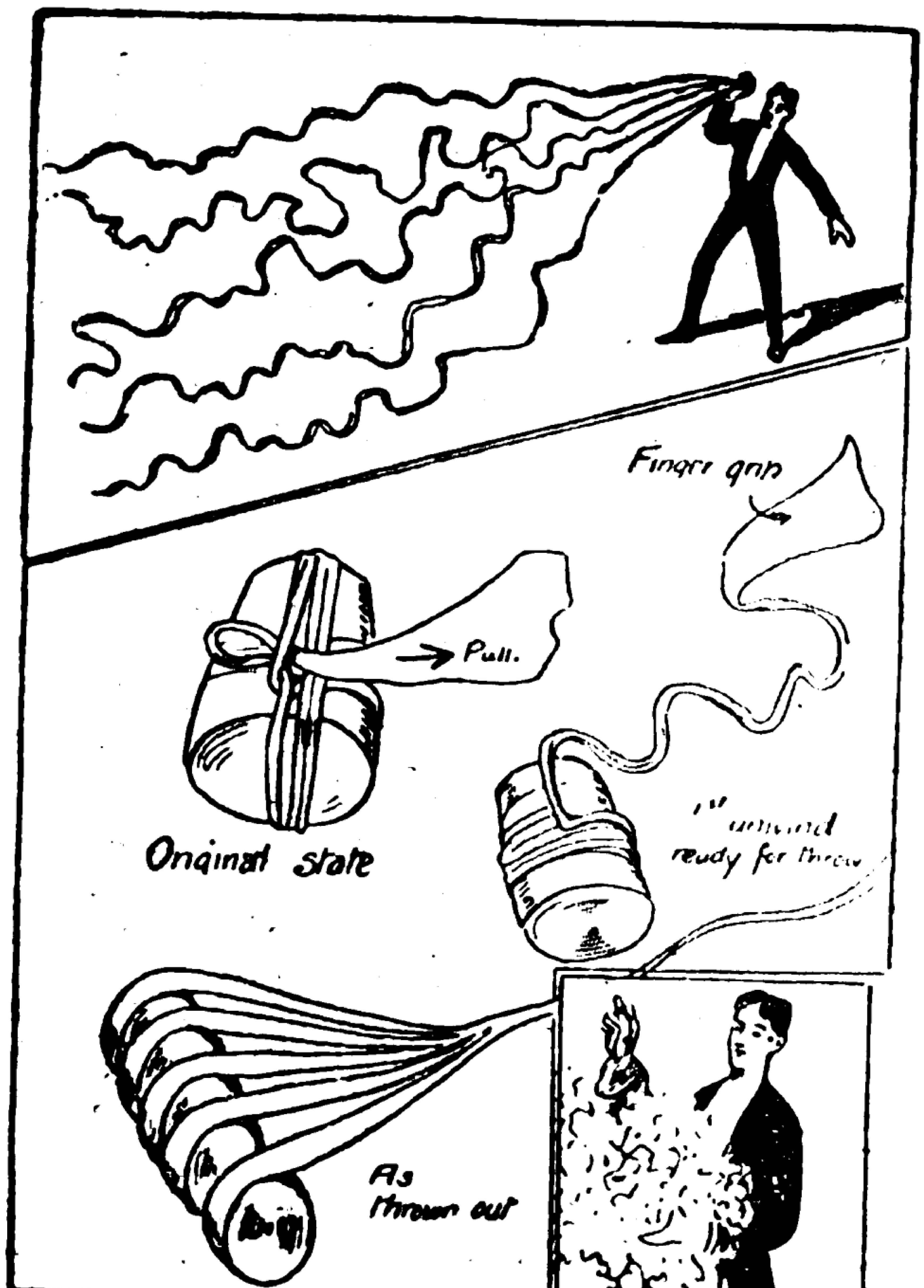
「東西、お目通り上座控へられましたる太夫名目の儀は何某と

申されます。初なる御客様へ御見江御禮相濟みますれば、自身と口上な述べられ前所のわざごとより取立てまして御覧に入れます。」といふ。

この時地囃しが始まる。しも手臺箱のそばに置いてある褂を取つてかけ、扇子(金縁あるひは銀縁の白扇)の頭を持ち、しも手の方を見て「東西」といひ、

「玆もと御覧に入れまするは、日本手品のひと手白紙の早業より取立てまして御覧に入ます」と、しも手台箱の上に載せてある白紙一枚を取り、兩手の指先で持つ。

第十四圖



白絲の圖

「白紙は裏と表を験めます」と太夫の方から向つて紙の左の角を上に上げて持ち、裏表を験める、(これを舞台のかみ手を上げるといふ意味である)玆で太夫と後見との間に白紙一枚に就いて、道化の掛合があり、ふたゝび白紙の奇術に戻る。

「験めましたる白紙小手のうちにおいて折上げますれば、神前に供ふる目出度きみきの口の形、焰にかける不動明王は火焰の體と御座います」とかみ手の蠟燭の火にかける。ぱつと燃え上る紙を左手に渡し、かみ手台箱の上に載せ、右手で扇子をとり、叩いて火を消す、その時台箱の裏にぴん付で付けてある白絲を紙と一緒に左手で取り「燃えのこりましたる白紙小手のうちにおいてよりあげ、よつてあなたへ投げる時は、美濃は養老山暫時白絲の瀧」と云ひながら白絲を五つ筋あなたへ投げる。(第十六圖参照)その時しころと云ふ下座が入る。向ふへ投げた白絲を手元へ繰り寄せ、「またもや旗はひと流れふた流れといひながら、綺麗に彩色をした長いリボンの様な紙を投げ、また手繰り寄せ、また投げかけ、手繰り寄せて「表れましたる旗はほのほにかける、兩國は夕すずみ花火のひと手と御座います」と云つて蠟燭の火にかける「吹出し」といふ花

火へ火がうつて、ちゆうつと火を吹き出す。火の切目と一緒に手繰り寄せた紙の中から傘を出して開き。「白紙練磨の早業一本傘のひと手お目とまりますれば次なる藝當取立まして御覧に入れます」といふ。後は地囃に移る。

白絲は細卷き、或は小卷ともいつて美濃紙を長さ四間半につなぎ、心に線香を入れ堅く卷いて巾一分五厘程にぶつ〻〻輪切りにして五筋ひとまとめにしておく（第十四圖參照）

白絲の次に投げるダンダラの紙は「小のべ」といつてやはり美濃紙をつなぎ、心には竹の軸を入れ繪具で綺麗に彩色して巾一寸に切つたものを二本。次に投げるものを「大のべ」と云つて巾は一寸五分、これを三本投げる。すべて卷は端をひと纏めにしてその端へ輪を造り、卷が飛ばない爲に、その輪の中へ右の小指を挾んで置く。

右手で白絲を投げ、五筋の紙は瀧の樣に流れて觀客の目がそれに注がれたときに、左の手でかみ手の台箱の蔭に置いてある次に投げる卷きをとる。傘を取るのは花火に觀客の目が奪はれてゐる間に左手で後から拔きだし、右手で持つてゐる卷の束の中へ隱すのである。

第十五圖



カルタ吹上げの圖

西洋でも昔の奇術士の說明には一寸變つた趣きがある。十八世紀の後半期の諷刺作家ジエー・イー・アレキサンダーがジョーナスのカード奇術の口上を面白がつて書いてゐた。卑俗な處にかへつて輕妙なあぢはひがある。これもお慰みに譯出して見やう。

「手前ことはなみ〳〵の小手先師では御座いません。外樣の手品師におきましては、加留多は袖の中へ引込み、それをば練磨のひと手と見せかけて、お目を瞞着いたして居ります。

さて皆樣、これなる加留多をお拔取り下さいませ。

一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、半ダース。

加留多は、こちらの方からごらうじませ。あちらの方からご

らうじませ。ひと吹き吹くと申しますれば、ぷッぷッと吹かれますれば、加留多は宙に舞ひ上ると御座います。よう、よう。

さて皆様。皆様のおめを瞞着出來ませうや。もう一度扱つてお目にかけませう。どなた様でも手前同様お扱ひになれませうなら、失禮ながら一萬ポンドを差上げます。

加留多は、こちらの方からごらうじませ、あちらの方からごらうじませ。ひと吹き吹くと申しますれば、ぷッとひと吹き吹かれますれば、ようよう。」

東北奥羽の切支丹宗門

姉崎正治

一　概見と端緒

奥羽は古來、日本文化の潮流が最も後に波及する地方であるが、切支丹の傳播も亦此地方が最後で、九州や上方で迫害がどしどし起つてゐる頃に、漸く東北傳道が初まつた。但しその開始の遲かつただけ、傳播は頗る迅速で、その開始後十年で既に可なり多數の信者があり、段々迫害が始まつた。而してその潜伏時代も長くつゞいて、西國にはキリシタンの消滅しかけてゐる頃、此地方には潜伏バテレンも居り、殉教者もあつた。即ち奥羽地方のキリシタン宗門は、傳道と傳播と潜伏とが密接して、三方面が隨分同時に錯雜してゐた。此點で奥羽の宗門は、傳道史上に興味の多い事項を殘してゐる。

その材料について云へば、政宗の遣外使一件の外は、皆斷片的のもので、纏まつた記錄は一つもない。但し書類、遺物など今後材料の出て來る望はある。西洋側では段々交通困難になる時代であるが、幸にパゼスやシャルルボアの書物に飛び／＼に出てゐる報告があり、それを聯絡して、大體の運動を知り得る。而してパゼスの記事は、元一々の報告に基いたもので、その結果をこちらの材料に參照して見て中々正確な事をも確め得たから、それ等を基にして、此の記事を綴る。

さてキリシタンの痕跡が東北に印し始めた明確の記錄は存しないが、信者としてレオといふ名を受けた蒲生氏郷が、天正十七年（1589）會津に入城したのが一つの目じるしになる。家臣の中に信者もあつたが、傳道者が入込むだや否や、全く不明である。宗門改記錄の中に、蒲生の臣岡野越後守が猪苗代の城代でゐたので、その地の家來や百姓が盡くキリシタンだつたと記してあるのが、その感化の跡を傳へる。但し蒲生氏の治は僅に九年であり、且つ第二代には一度下野に移り、それから迫害を始めたのであるから、その感化が永續し普及したとは思はれない。

その次は敗餘の流人であるが、天正十八年（1590）織田信雄が秋田に流されたといふが、信雄は大にキリシタンに傾いてゐたと傳はるから、どれだけかの聯絡はあつたものと見られる。但しその在留僅に一年であるから、傳道上には何等の痕跡を殘してゐない。

此よりも確かなのはコンスタンテニヨ（Constantinho）大友義統の流竄で、通常史傳には義統が常陸に追はれたまでを記してゐるが、教會側では、京都から「出羽の秋田へ流され、その領主に預けられたが、領主が封を移されたので、それについて行つてみじめな生活をした」とある。つまり慶長六年（1601）、常陸水戸の佐竹氏へ預けられたのが、翌七年、佐竹氏の秋田移封に伴つて秋田に住む様になつたのである。そこで秋田に於けるコンスタンチニヨの生活は、懺悔と祈りの生涯で、苦行精進に日を送つたといふ。妻子はなく、三人の從者を伴ひ、キリシタン同信徒の世話になつてゐたといひ、又病床で臨終のサカラメントを受けて、慶長十年（1605）に死んだといふを見れば、その地には、信徒又は教師の往來があつたものと見るべきである。兎に角、キリシタン史に有力な大友の流れの末は、出羽の秋田で消滅したのである。

尚一つは慶長十二年（1607）、奥州で多くの領地を有してゐたジユガザン殿（不明）の嗣子が大阪で信者になり、教師を國の方へ伴はんとしたが、その後、大阪で病死して志を果さなかつたといふ。

次に伊達政宗の遣外使一件、或はその豫備行動になる。此の一件は政宗にとつては宗教上の意味を有してゐない事は明白であるが、然し通商又は政治上の考で外國教師と聯絡すれば、教師はそれを利用して傳道するは自然の事である。政宗とバテレンとの關係は、慶長十五年（1610）、ドミニコ會の教師が江戸で政宗と會見したといふのが、所見の初になつてゐる。而して遣外使の準備はそれから八年の間に進むだものとすれば、その間に宗教方面の關聯が生じた事も想像し得られるが、確な事實は傳はらぬ。只仙臺に傳はる一傳説では、後に陸奥キリシタンの中心人物となる後藤壽庵は、外國關係の必用からして慶長十七八年の頃に伊達家に事へるに至つたといふ。而して壽庵の居留やその近傍には、最も信者が多く後まで殘つた事を思へば、元和六年（1620）に大に迫害の起るまで七八年の間に大に傳播したか、若くはその前から、教師の傳道はなくとも傳播のあつたものと見える。兎に角、仙臺領のキリシタンは教師の正式傳道に先つ歴史を有すると見るべきである。

大友義統の流れがどれだけ秋田に殘つたか不明であるが、仙

臺領以外にも段々東北布教が始まつたのは、上方で迫害が起るにつれて、逃亡者や追放の人が東北に來たによる。パゼスが傳へてゐる伏見で洗禮を受けた一信者が、慶長十八年(1613)出羽に來て熱心に傳道し、二百人の信者を得、終に出羽で死んだといふ。而して次年の條に、伏見で洗禮を受けたペドロといふ者が、出羽の仙北に來て、六百人を感化したといふ。此は多分同一人に關する報告と考へられるが、その二年後に東北開教の主動者になつたアンゼリスは此のペドロに會つてゐる。そのアンゼリスが奥州の信者に招かれた事は後に記すが、奥州（津輕か南部）にも、正式に教師の來るまでに既に信者が百を以て數へる程あつたものと考へられる。

尙一つは、シャルルボア(五ノ十七)に傳へてゐる所によれば、一六一三年に、カミルレ（Camille de Costanzo）といふ教師が、津輕の流民を訪ひ、又松前侯の需に應じて、信者である醫師を松前に送り、蝦夷開教の端緒を開いたといふ。津輕の流民については後に記す如く、一六一四年に追放されたのは明に知れてゐるが、その前年にも既に同樣の流民が居たと見るか、然らずとも教師の來往が開かれたのである。即ちカミルレはその後直に大阪に行つてゐるから、一六一三年に東北に行つたとしなければならぬ、而して後にアンゼリスが擔當した蝦夷開教も、此に先驅者があつた譯になる。東北のキリシタンは慶長の中期に、此の如く段々傳播の端を開きつつあつたのであるが愈よ立派に組織ある傳道になつたのは、慶長十九年（1614）京阪の教民が津輕に流されて、教師がその方に出かける樣になつてからの事で、上方での迫害の結果が、東北では傳道開教の氣運を作り出したのである。ずつと後も、長崎方面で迫害が甚しくなつて、教師等の中には東北傳道を計畫し實行する者の出來て來たのも、同樣の現象で、一方の迫害が他方の傳道を誘起するといふ事實の一例になる。

總括して見て、東北キリシタンの端緒は慶長の中期にあるものと見るべく、その末に傳道が起り、それから僅に五六年で迫害が起り、迫害期が約十年、即ち 1620-30 で、それから潜伏期は約二十年（1630-50）で、以後は消滅の時代である。

二　津輕の流人と傳道者の往來

慶長十九年（1614）禁令の遂行は、教師教徒の追放となつて諸方面に及び、加賀にゐた高山右近、内藤飛驒の一類も外國に追はれた。德川實紀（三月七日の條）には、その殘徒七十餘人を陸奥外ケ濱に配流したとある。その詳細は西洋側に傳り、京から四十七人、大阪から廿四人を捕へた。その中には宇喜多秀家の舊臣ギ

ユヰ（Ghiozza）もあり、又一人阿波の舊城主であつた人（三七殿だといふ）もあり、皆身分賤しからぬ人であつた。此には大阪城に浪人の集まるを防ぐといふ考へも加はつてゐたかと想像される。捕へられたのは、陽曆四月（陰曆三月十五日とある）で、皆縛られたまゝに馬に乘せられ（小供は四人を一疋の馬に）その下旬（バゼスが六月一日としてゐるのは明に誤）、大津から船で湖水を渡つた。パデレ二人が同行せようとしたが、許されないで、同宿一人が漸く一行に加はつた。敦賀に着いて暫く風待に逗留したが、その間に、その前から、六年以來北國で働いしゐたパテレ・トルレス（Balthazar de Torres）も北國を追はれて大阪に忍び行く途上、此の流民の一行を慰問した。その事を報じた書簡に曰く、

陰曆三月廿二日（陰四月三十日）流人を見舞に參り候が、人々の有樣を見てその信心に感激仕候と同時に、悲慘に心を痛め候事、言葉に盡し難く覺へ候。人々は常に相集りて、オラショを捧げ、みじめの中にも喜び勇みて苦行にいそしみ居られ候。その仲間は一つの共和團と申すべく、各々受持を定めて互に勵み勉め居候。

一行は暫く此地に逗留仕候が、此處に到着の日には、大なる土藏の中に入れられ、土藏には鍵をかけ候。翌日漸く一人に一枚の蓆を給せられ候が、食物も其と同樣あはれなるものに候も、人々は、互ひに慰め合ひ、聖きマルチルの物語、初期のエケレジヤの話を語り合ひながら時を送られ候。……

或日の事、流人の目附なる一人の士が、一行の人々に白狀して申候には、始め方々を護送すべき命を受けし節、方々の中には名ある武勇の人もおはすことなれば、役目恐しう思ひしに、それも間もなく消え失せ、方々が御信心の爲に苦むことを厭ひ給はぬのみならず、喜び勇みて艱難を忍び賜ふを見參らせつつ御伴致候中に、方々の信ぜさせらるる宗旨は、眞の道、聖き教なるべきかと思ふ外なき心地致し、此後よき折もあらば、その宗門に入り度く存じ居る旨、物語り候由。

流人の悲慘は何れも同じながら、信仰の爲の流人生活、配流の旅路は、それ自らで好箇不言の傳道になつたのである。それにしても、一方はこれから海を渡つて北に向ふ流人、一方は忍びの身を大阪を目ざす傳道者、定めて天上の再會を期して相別れたであらう。トルレスはその後、大阪籠城に加はつたが、流人一行が敦賀の港を出帆したのは五月廿日（陰四月十二日）北海を渡つて津輕に着したのが六月十七日（陰五月十日）。その間處々の港で風待をしたらしいが、その間の記事は一つも傳はらぬ。津輕に到着後、京都にゐる教師に宛てた流人の手紙に曰く、

我等は四月十二日敦賀を出帆仕り越前の海岸に沿ひて進

み、逆風にも逢ひ色々變りし事も候ひしも、五月十日一同無事、津輕に到着仕候。到着の翌日、國守越中守殿（津輕信牧）の御申渡にて、内府樣の上旨として、荒地若干を賜はり、それを耕せとの事、又それを御請致すべきや否やとの御質し有之、我等一同謹く、御言附通り致すべく、但し土地を耕し候は、我等全く不慣の事ながら、デウスの御掟に背かぬ限り、何事にても領主の御言附通り少しも違背致すまじく、萬事勇みて御請致すべき旨を申上候。越中守殿は此の返答を喜ばれ、その旨書面にて差出せとの事につき、我等は即座にその通り仕り御あてがひの土地を耕し可申旨誓約書差上候。殿は直に其書面を内府樣へ差上げられし由に候。

今我等は、こゝに山川遠くパデレ樣方と離れ候も、親愛の心を申上げ、我等がデウスの御ガラサによりて、最後まで堪え忍び候樣、デウスへ申乞ひ下さるゝ樣願ひ候。我等がパデレ樣方に御願ひ申し度き事は、今年にはとても運ぶまじきも、明年はあなた方樣の中御一人、此方へ御越ある樣に願ひ候。その他萬事はチウサイ（Tchiousai 同伴の同宿）が親く申上ぐべく候。此同宿は船の中にても常に、我等を御助けなされ、萬事何事も御世話下され、誠に有りがたく存じ候。

尚又、今の難儀辛苦は如何につらくとも、デウスを敬ひ奉る爲に堪え忍び候へば、御主が我等に澤に賜はる滿足と喜びとは、何物にも越えて有り難く存じ候。

慶長十九年六月五日（陽七月十一日）

かくて流人の生活で農業を始めたところが、翌年は不作で東北地方は大飢饉の厄に際會した。それを報じた書信がある。

我等事此地にて無事、至極達者に暮らし居候。但し此國は恐ろしき飢饉に苦み居候も、我等は喜で此のためしに逢ひ、何事も御思召のまゝ、又廣大なる御慈悲と存して苦難を凌ぎ申候。かゝる廣大の御慈みを賜はるは、御主の限なきガラサのなさしめ賜ふ所と存申候。

今年此國にては米一粒も實らず、又買ふべき米穀も無之、祿を頂戴する士分の人々にても、木の葉木の根を食と致し居候。パデレ樣方は、流しものになり居候我等が仕合を御存じなさるべく、たゞ明年三月頃、船が米を積み參候まで生き存らへんと、勵み合ひ申候。近國も饑饉は同樣に候も、我等は御思召の御恩を蒙り候。我等が最後まで忍び堪え得る樣、入用の御合力を常に與へ賜はる彼の御方（聖母）に、パデレ樣方もオラシヨ御捧げ下され度く、一人上方へ參り候者を遣はし候間、それに何なりとも施物を御傳へ下され候はゞ、誠に仕合と奉存候。特に此の艱難の中にて聖き御藥（聖餐の）を下

されたく、先達夏の間此地へ參られし方は、御藥を御持參なかりしも、我等の心を慰められしこと、誠に有難く存候。こちらへの旅は危殆と申す程にてはなかるべきにつき、パデレ様御一人御越し下され候様にと、偏に待ち奉り候。

慶長二十年八月二十五日（1615 十月十七日）

此年七月十三日元和と改元のあつたのが津輕へはまだ知れてゐなかつたのである。信徒が教師を敬慕する事恰も子の父に對する如き心持は種々の事實に現はれてゐるが、特に流人がパデレに對する心情は此に手紙に歷々と見える。而して教師等も亦子を思ふ心で彼等の爲に盡し、右にある通り、流竄の翌年も何人かゞ見舞に行つたのである。慰問に傳道を兼ねての旅であつたに違ひない。

三　アンゼリス、卽ち天使のジロラモ

流人の切なる願に應じて遠く北日本に出かけたのは、イタリヤ生れでゼスス會のパデレ・アンゼリスであつた、此人の名は Girolamo de Angelis で、ジロラモはゼロニモ又はヒエロニモと同し事であるが、他に紛はしい名もあるから、單にアンゼリスとして述べる。アンゼリスは、慶長七年（1602）三十四歲で日本に來着し、伏見で一寺を監し、駿府に出て僧院を建て、それから江戸へ出たが（多分慶長十八年、）迫害か始まつたので駿河に引返した。翌十九年（1614）の大追放には、難を逃れて長崎に隱れて居たが、津輕流人の厄を救ふ爲に、長崎で慰問の施物を集めて、津輕へ出かけた。後に後藤壽庵等か法皇への書簡に、「此の七年以前……アンゼリス下向候て」といつてゐるに當る。此が此人の東北布教の中心人物となる端緒で、津輕の外、出羽の方へも巡回したか、先に述べた伏見生れのペドロに仙北で會したのも此の旅行中の事と思はれ、ペドロは恐らく伏見でアンゼリスの感化を受けたもので、云はゞその傳道の先發者であつたのである。アンゼリスが旅行中に出した手紙はその狀態を物語るが、多分出羽の方から南部に出、それから津輕を訪ふて後、北秋田の山中から出した手紙と思はれる。

こゝへ參るには、二つ險き山を越ゆる外なく、阪路は急にてすべり易く、日本にては他に例少かるべしと思はれ、見るも恐ろしき程に御座候。いくつも松林の中を通り、雲かゝる峯をいくつか越えつゝ、足下の危き事度々にて、時には下へころびて谷底に呑まれはせずやと思はれし程に候。雪は積もり固まりて城壁の如く、近き得ず、飛越は尙更出來ず、此より先一步も踏み出し得ざるべきかと考へしも度々に候。旅は總て徒歩にて、糧もなく、又山の頂には人の住家とてもなけ

れば、食を求むる事も出來不申候。彌右衛門と申す者とその女房とが病氣にて、コンヒサンを求め候爲、それに會ふ爲に奥州に參り候が、二人に止まらで、二百人のコンヒサンを聽取り候。此等のキリシタンは今までパデレに會ひし事無之、何れも初めてコンヒサンを願候者に御座候。

尙進みて津輕に流され候キリシタンを慰問して、その力とならばやと、その方に罷越し、人々を組に分ち、組毎にその仕事を果す爲に組頭を定め置候。……（中略）……

尙ほかゝまほしく仕候へども、紙盡き、いづくに求めても一葉の紙も無之候。

此の如くコンヒサンを求める信者が多く、又パデレの來るのを待つてゐたのは、多分伏見のペドロの感化で、ペドロとアンゼリスとの間に聯絡のあつた事を示すと見るべきである。此手紙に出てゐる信者は、明に土着の人であるか、此から後には、上方や九州から避難して來た信者のあるのも、忘れてならぬ事實である。

アンゼリスが教會の長から、奥州全體の教監を命ぜられたのは、後四年餘の事であるが、後藤壽庵の書簡に、「下向候て種々才覺をもて諸方を廻り、エワンゼリヨを弘通せられ」とある通り、時々江戸との往復の外は、奥州傳道の中心人物として働き、又海を渡つて蝦夷にも佐渡にも手を延ばした。此事尙ほ後に述べる。

アンゼリスの跡を追ひ、その助手として働いたのは、同しくゼスス會のパデレ、生國阿波の人、結城デーゴ（Diego Youki）。元和三年（1617）途上の困難や見張番の難關を排し、聖式の用具一切を調へ、又京都信徒からの慰問贈物を齎らして、津輕流人の慰問に來た。その頃流人の生活は耕作にいそしみつつ、共々信心の物語をして勵み合つてゐたが、中には他を感化して洗禮を授けるまでに至つた者があり、それが新に問題を惹起した。即ち流人の一人、マチマス（Mathias）といふ醫者は夫婦二人を感化し、他の一人レオ重助（Giousouche）は刀工一人を感化した。津輕の殿は驚いて、事を江戸へ上申したが、五人共死刑に處せよとの命が下り、五人を馬に乘せて、高岡（弘前）市中を引廻し、終に火あぶりにした。元和三年七月四日（1617八月四日）の事で、奥州最初の殉教である。

此年、アンゼリスは奥州に働いてゐたが、二代將軍の禁教政策が段々その方面に及び、出羽では一大名（秋田か）が教徒二十名を追放したといふ。此の三四年の間に隱れた傳道が段々に功を奏して、信者は到る處に出來、大名の大奥にも及むだ。即ち秋田の佐竹右京大夫義宣の妾で、西ノ丸殿としてかしづかれ

た婦人、教徒の間におニサマ（Onisama 即ちおねえさま）として知られた婦人は、キリシタンに歸服し、洗禮を受けたいとの望は叶はないながらに、オラショの功德を積み、又侍女等にも同じ信心を勸めて、その感化を受ける者も出來て來た。西ノ丸は大奥に居ても教師と交通してゐたので、近頃秋田城内から出た遺物聖母像は、此人と關係あるに相違ない。此の爲に殿の怒に觸れて追放されたが（後にキリシタンの男と結婚したといふ）、佐竹義宣がキリシタンを憎むに至つた原因の一つは此にあると傳へる。

四　其他の東北布教者

津輕の流人教徒は、先に述べた火刑以外には此といふ事もなく、比較的平和な生活をしてゐて、教師等の傳道旅行には、いつもそれが目標になり、その訪問が大した障害を受けなかつたらしい。

教師が最も多く東北に入込むだのは、恰も仙臺で迫害が始まつた元和六年（1620）にあるが、その前年に來たゼスス會の一教師は、初め鑛夫に扮裝して奥羽境上の山中を往來し、特に仙北地方の鑛山に入込むで傳道した。蓋し追放せられた教徒の中には、鑛山に苦役せられた者があり、それが端緒になつて鑛山傳道が始まつたものと思はれるが、此から後も奥羽の外に佐渡や松前の鑛山へ傳道が多く行はれ、潜伏期に入つては教徒の鑛山入込が多い。それは後に再び述べる。此の同じ教師は、又平地町村に出る時には商人に粉裝し、一人の同宿者と共に、和田勘右衛門、板屋喜兵衛といふ變名で旅行し、秋田から津輕に行き、高岡で十八日間教徒を慰めて秋田に引返した。その間には山路と共に關所の難關もあつたのである。

元和七年（1621）には少くとも四人のゼスス會員が奥州に入込んだ。此年は、アンゼリスが東北監教になつた年で、三四年以來の計畫が熟し、策源地たる江戸との聯絡が立派についた年で、ゼスス會の東北活動は、此にその最盛期に入つた譯である。此頃フランシスコ會も亦活動を開始し、此の同じ年に二人（一人は新來）の傳道者がある。而して此の年には一千人の新信者出來たといふが、その數は、その後一層多くなつた。

此の序でにフランシスコ會の東北傳道について記す。政宗が始め接觸したのはドミコニ會の教師であるが、遣外使一件で最も多く利用したのは、フランシスコ會のソテロ（Luis Sotelo）。而してそのソテロの用事で、元和四年（1618）に仙臺に來たのは、同じくフランシスコ會のガルベス（Francisco Galves）、彼はその時、仙臺で公に說教する許を政宗から得たと

いふが、兎に角、此人が東北に於けるフランシスコ會の中心で、又奇妙にもゼスス會の中心たるアンゼリスと一緒に最後、元和九年（1633）江戸で火刑になつた。而して右に述べたゼスス會の教師が多く東北に來た元和七年には、ガルベスは最上に行き、新に一人フランシスコ（Francisco Barajas）、後に孫右衛門として知られる教師が奥州に來た。その後尚少くとも二人同會の教師が加はつてゐるが、それは最後に述べる。

此の如くフランシスコ會の傳道も江戸を策源地として奥羽に及び、その痕跡が後まで殘つてゐるが、何といつても東北のキリシタンにはゼスス會が中堅であつて、教師の數も最も多い。それ故、今云つた如く元和七年に入込むた四人と共に、その後に來た教師等をも、此に一括して、活動の概略を記す。その中多くの人に共通の點は、慶長十九年（1614）の追放で一度日本を去り、再び日本に來てからは東北で働き、又多くは餘生を東北傳道に捧げ、而して一二の外皆殉教の死を遂げた。

第一に重要の人物、カルバリヨ（Diogo de Carvalho）はポルトガル生のゼスス會員で、追放後主として交趾支那で働き、元和二年（1616）日本に再入し、翌年第四の誓（根本の三誓、貞潔、清貧、服從に加へて獻身傳道の誓）を立て、アンゼリスの配下として奥州に入り、特に仙臺藩で活動し、後藤壽庵の指導者又伴侶として感化を施した。但しその外三度までも津輕を訪問し、蝦夷にも渡り、糠部方面に手を延ばし、又南部や秋田にも旅行した。即ち北方海島と共に、奥羽境上の山路は此人の多く踏破した所で、後に寛永元年（1624）水澤から横手へ出る山中で捕はれ、仙臺に送られて殉教した。

アダミ（Giovanni Matteo Adami）はイタリヤ生のゼスス會員で、追放の後、再び潜入し、元和六年（1620）奥州でアンゼリスの下に働き、又カルバリヨと共に南部盛岡地方に布教した。その頃南部地方には九州邊からの避難者が集まり（その遺物らしい物も存在する）、信徒の數は增してゐた。アダミは翌々年アンゼリスに伴はれて越後佐渡に傳道し、元和十年（1624）には、會津地方で領主蒲生家の迫害に對抗して奮闘した。その後一度江戸に出、寛永七年（1630）には、又奥州に下り、津輕に行き、再び松前へも渡つた。十年餘の東北傳道からどうして轉じたか不明であるが、三年後には長崎で在牢の身となり、終に穴つるしで殉教した。

此外に日本人の教師も可なりあるが、先に記した結城デーゴは一時奥州で働いた後は上方や中國で活動し、寛永年間九州で穴つるしになつた。その他は元和六年（1620）に東北に來たジヨアン・ヤマ（山又は伊山か）は津國生れ、ゼスス會のイルマン

であるが、それから九年間東北傳道に從事し、他の人々と共に會津で召捕られて江戶へ送られ、四年近く入牢の後、寛永十年(1633)江戶で穴つるしになつた。ジョアンは頗る能辯で又文才に長じてゐたといふが、拷問に逢つた時、筆を求めて口上書を出した。その文意は左の如くであつた。

日本の國は暗黑の中にあへぎ、その民は目盲して自ら滅亡の淵に陷らんとす。その心眼がデウスのエワンゼリヨ(福音)に對して開き得ざるは、神罰を蒙れるしるしに外ならず。

それから在牢中も多くの人を感化し、十分で之に歸依した人も少くなかつたといふ。死する時、齡六十三、法臈四十七年であつた。云ふまでもなく、九州セミナリヨ出身で、日本キリシタンの花の時代を經て、その秋風に散つた一人である。

マルチノ式見(Martino Chikimi)のシキミは姓だと思へるが、それは肥前外海の地名で、それを姓としたものと推定する。他の人々と共に元和六年に奥州に入り、それから北陸、東海、江戶の間を往來し、駿府では、慶長十九年の殉教者ジョアン道壽やペドロ角助の骨を掘出して供養を施した。元和八年(1622)には南部地方で、盛岡に於ける組織ある傳道の基礎を拵えた。その後の動靜は不明であるが、寛永十五年(1638)仙臺で捕はれ、市左衛門といふ名を名乗り、江戶に出て、井上築後守の手で拷問にあひ、終に「ころむだ」が、後間もなく病死した。教會側の報告では、不確ながら一支那人の報告に基いて殉教したとなつてゐるが、日本記錄ではどうしても棄教者である。

最後ペイトロの性はCassoniとなつてゐるが、糟井であるか、又一層の想像を廻らせば後藤壽菴の舊姓葛西(かさい)で、その同族だとも考へられる。日本側の記錄ではキ〇〇ヘイトロとも又はキベとも呼むでゐて、此も想像を廻らせば、寛永初年奥州白河に潛入してゐたバテレン喜太夫とも聯想し得る。生れは豐後の伊美(又大村ともいふ)で、父の姓はシベ(Chibe 木遊らしい)、母は泰(又は波多)氏で共に熱心の信者であつたが、「キベ」と記錄にあるのは父の姓かも知れぬ。ペイトロの一生は實に變化に富むでゐる。慶長十九年の追放で日本を去つて後、印度、ペルシヤ、トルコを經てゼルサレムに參詣した。日本人のゼルサレム參詣は此人を始とすると思はれるが、第二は恐らく明治五年の佛僧島地默雷師であらう。(而して默雷師の墓は盛岡にある)。ペイトロはそれからロマに行き、そこでゼスス會員となり(元和六年1620)、ポルトガルで尚修行をつゞけて誓約の仲間入をした。然し志は常に本國の傳道にあり、印度を經てシヤムへ行つたのが元和九年(1623)。そこで二年間船頭の生活をし

たが、目的は、必要と機會に應じて獨力舟を漕いででも日本に歸る爲であつた。轉じてマニラで又二年間の船頭生活。奴隷の奉公をして、同志數人（中には追放人松田ミゲル等）と共に舟出した。九州に近づいた時嵐にあひ、薩摩のシシト附近で破船したが、漸く坊の津へ送られ、そこで役人に改められたが、商人として通された。それが多分寛永四年（1627）、即ち追放後十三年であつた。それから恐らく暫く九州に居たのであるが、後東北へ來た。最後寛永十五年（1638）末の大檢擧の時、マルチノ等と共に仙臺で捕はれ、江戸へ送られた。やはり筑後守の拷問に逢つたが、最も頑强で、同伴の同宿二人を激勵しつつ、つるし殺しに殺された。實に歸朝後十一年であつた。

以上ゼスス會の人々であるが、その外、フランシスコ會その他の人々は、各々その處々に記す。こゝに總括して記せば、東北傳道で名の知れゐるだけが十六人、その中五人が日本人、その他名は知れないが、右十六人以外に少くとも七人ある。

五　仙臺藩のキリシタンと その中心人物後藤壽庵

津輕の流民が却て傳道運動を誘致して、奧羽に傳道者敎師が往來して以來僅に六七年で、感化は殆ど全體に及んだ。而して元和六年（1620）には新に數人の敎師も入込み、云はゞ東北傳道の最繁昌期を劃する。然るに、その時は、二代將軍の禁敎政策が幕府權威の增進と共に、ひし〳〵と各地に及び、伊達政宗も、之に服從して迫害を加へ始め（彼自身は勿論信仰も何もなかつた）、遣外使としての榮譽を荷ひ、イスパニア王の前で洗禮を受けたドン・フランシスコ支倉六右衞門は、恰も此年に歸朝して、後間もなく容易に棄敎を聲明した。然し、政宗の政略や、支倉の外交的洗禮の外に、信仰の種は旣に地中に蒔かれて芽をふき出してゐる。此等を刈り取らなければ禁敎の目的は達せられない。そこで迫害の第一着手として仙臺領キリシタンの中堅人物たる後藤壽庵がその鋒先にかゝつた。

東北に於ける組織的迫害の開始は、後に記す壽庵の上書にもある如く、一六二〇年九月四日（元和六年八月八日）、即支倉が仙臺に歸着する前十六日、彼が日本の土を踏むで仙臺に向ひつつある時であつた。そこで此の迫害の主目的になつた後藤壽庵について少しく述べる要があるが、實はその正確の傳は不明である。一傳では從前その土地に居た人の如くして、政宗に事へ始めた年月は不明であるが、他傳では、元は奧州留守所葛西氏の裔で、支流岩淵氏の出であるが、秀吉の小田原征伐の後、土地を沒收せられ九州に落ちた一人だといふ。後者によれば壽庵は

その頃まだ幼少であつたが、九州で信者になり、後五島の宇久島に隠れ、それで五島を姓とした。その後慶長十七八年の頃、政宗の海外政策に參與した田中莊助（又勝助）の推擧で、政宗に事へ、膽澤郡で千二百石の領邑を有する事になつた。（年齢は此時三十五六歳かと想はれる）。そこで元の葛西岩淵一族を集めて、水澤の近くに一廓を構へた、それが今の福原組で、その館の跡に加へて郎黨の屋敷地割が儼然として存してゐる。

一方の旗頭としこの壽庵の生活が此の一廓、壽庵沒落後水澤藩の足輕組福原の一部落に眼前なると共に、壽庵が膽澤川の水を引いて灌漑に利した壽庵堰は今も尙ほ數十ケ村の田園を潤ほして居る。（此の灌漑事業の功で贈位もあつた。贈位につゞいて、壽庵神社を建てうといふ役人達の案は、彼自身の信仰を尊重せよとの反對で破れた）。然し、今の問題にとつて、それ等よりも重要なる點は、この一廓の宗教的遺跡である。今一廓の内、人の屋敷にほこらが二つあり、一は毘沙門堂といひ、一は觀音堂となつてゐるが、傳說では毘沙門堂は、元「旁鐵禮盂」を祭つた跡だといふが、此の「禮」を「斯」だとすればバウテスモ即ち洗禮となり、禮拜堂の事と思はれる。觀音堂には、元子育觀音即ち聖母像があつたといふが、今は何もなく、堂內から出た箱の中に印籠に入れたものがある。それは二つのメダリアンで、一はサビエの祈りの姿、一はフランシスコのステグマの光影で、確に十六七世紀の作。此の堂の場所は恐らく聖母堂であつたので、一部落百戸の中に少くとも二つ禮拜所があつた事を示し、その此外壽庵自身の館にも尙一つあつたと考へられるが、館の跡は二方の溝の外は全く畠地になつてゐる。此の館から西南七八町の處に、水田の小高い場處は即ちクルスバ場（文字は色々に書いてゐる）で、今も木立のある墓地であるが、此が即ち此部落キリシタンの安らひの場處であつたので、寺と墓地とを具へてゐたのである。此等の遺跡だけでもその昔のキリシタン部落の實狀を想見せしめるに足る。尙ほ又傳說によれば、福原組百戸の中、十餘戸は、迫害の時主人壽庵について他國に逃れたが、殘る八十七戸は棄教して水澤藩の足輕になり、今日尙ほ一部落團結してゐるといふ。（此等の事盛岡の菅野義之助氏の教示で實見した）

壽庵の宗教的感化が此の部下の一廓に留まらなかつたのは勿論の次第で、此に一つ本據が出來た以上、アンゼリスやその伴侶もそこへ來往したに違ひなく、特に壽庵に親しくしたのはカルバリヨであつて、此等の教師は此を本據に近村に傳道したのである。特に壽庵の宗家葛西の一族は、此の近傍に散在して、伊達家の治下では失意の人として百姓をしつつ、而かも平將軍の昔をも追憶する。その配下には百姓もあり、又鑛山で働く者

もある。傳道者がその間に入つて感化を及ぼす素地は十分に具はる。而してその間に存外弘く多くキリシタンのあつた事は、今は尙斷片的に殘つてゐる貞享以後の類族調でも十分推則するに足る。（此は菅野義之助氏が蒐集し研究して居られ、尙後に少しく述べる）。即ち膽澤郡から東西磐井郡を中心にして江刺、和賀、本吉、登米、栗原、諸郡には、到る處キリシタンが存在してゐたので、それが全部後藤壽菴の感化で出來たものでないにしても、壽菴の存在が宗門の傳播を助けただけは確實で、彼が此處に居を占めた十年足らずの感化は、實に豫想以上に廣く深かつたのである。

　此の如くにして後藤壽菴は仙臺藩キリシタンの中堅人物であつた。然し仙臺それ自身には、政宗の遣外使關係からつゞいて敎師の來往のみならず、自ら外國に出かけてキリシタンになつた者も少からずあり、支倉もその一人であるが、後に述べる横澤將監も同樣で、感化は士分から百姓にも及び、後に出る殉敎者は村落の者に中々多かつた。

　兎に角、政宗の意圖は單に外交又は通商であつたにしても、それが宗教に及び、彼自身の望むだ方には一向結果がなく、その豫期しなかつた方に大影響を及ぼした。而して支倉一行が歸着する頃には、幕府禁敎政策の壓迫が益す加はり、獨眼龍もそれに屈從して領内の敎徒を迫害せざるを得なくなつた。そこで、前に述べた如く元和六年（1620）の秋から迫害を始め先づ家臣の中の熱信者を目ざして、少くとも公の宣布を止めさせやうとした。その最も目ざゝれたは後藤壽菴であつて、壽菴の親友石母田（いしもだ）大膳（宗頼）をして勸告せしめた。その勸告は、一、パテレンを家に泊めるのは已むを得ないとしても、永く滯在させぬ事。二、他人に宗門を勸めたり公に說敎せぬ事。三、此事を祕密にし、且つ堅く守る事。條項は極めて溫和の事で、つまり餘り公に宣傳せられては幕府に對して濟まぬから中を執つておかうといふ腹が見える。政宗自らがどう考へ、又どういふ命を發したか分からぬが、此は石母田の友情から出た調停策と考へられ、それで幕府の手前を繕はうといふにあつた。然し壽菴の熱信は、その樣な妥協を容さない。彼はどうもその命を奉ずる譯にゆかぬと答へるのみならず、一書を主人に呈して信仰を主張した、恐らくその中には政宗の背敎的行爲をも諫めたと想像し得る。破裂は避けられない。その上、壽菴に親善な石母田大膳以外に、茂庭石見（延元）といふ敵役が居る。のみならず、幕府の命を奉ずる爲には、禁壓を强行せざるを得ない。仙臺の傳では、その年の末に打手を差向けたとあるが、初めの溫和な勸告から直に打手に轉ずるといふのは、少々

受け難いのみならず、その次の年にロマへ出した教徒の上書（次に述べる）に壽庵が署名してゐる外に、秋田の方の記錄では、翌々年、即ち元和八年二月江戸への報告に、その前年壽庵が秋田領内に來た事を傳へてゐるのを見れば、初の勸告と最後の打手との間には一年位の餘裕があつたと見るが至當であらう。即ち元和六年（1620）八月から段々に壓迫を始め、色々抑問答の末、次年（1621）の末に近い頃、愈よ最後の手段をとり、打手を向け、壽庵は部下數十人と共に領外に逃れたと推定する。

壽庵の最後については後に讓り、重臣に對しては直に高壓に出なかつたにしても、土民百姓に對しては猶豫も容赦もない。キリシタン地方の中心たる水澤の役所は迫害の發動地となり、石母田の配下なる但馬といふのが主任として、召捕や拷問を始めた。或る者はころんだが、或者は頑強に信仰を主張する。後者は皆殺されたが、或は居村で、或は水澤で、又或は仙臺へ送られたものである。一村では住民三百人擧つて信仰を守るので、如何ともし難く、暫く捨てておいたといふ。かくて元和六年の末と翌年の大部分に亙つて、仙臺領内の迫害には幾多の血を流したが、アンゼリスはその間に奔走して、弱きを勵まし、殉教者の回向を務めた。

かゝる迫害の間に立ち、又眼前には同信の教徒が刑戮せらるるのを見て、壽庵は如何に心を惱ましたか。然し又、十分で信仰を同じうし節を守る伴侶もあるのはせめてもの慰であつた。その年に恰もロマから教皇の廻章が屆いた。それはロマでペトロ大殿堂の建立を祝ひ、そのジユビレヨとして教徒の善行を勸め、その功徳によつて全世界にインドルゼンチヤ赦罪を宣告するものであつた。此はロマで時々ある事で特に珍とすべき事でもないが、迫害の中に苦難と鬪ひつゝある日本の教徒にとつては、まだ見ぬ理想界にも似たるロマからの福音、パツパ様の御聲として特に有り難い慰藉となつた。日本の教徒は地方每に代表者が署名して、之が謝狀をロマに送つたが、今云つた感情が歷々としてゐる。『是れ其地ロウマより到來すといへども、偏に天より降り下りたる心地致し、貴き御主の我等に對して給ひての無量なる御大切』（長崎信徒の謝狀）といひ、『我等も此へルキサン（迫害）の逆浪大波に漂ひ、危きに及び奉るの處に、賴母敷（希望）と歡喜充滿の御聲を、御扶手キリシトの直の御口より聽聞し奉るに等しく、寬宥の心を得奉ること斜ならず』（京阪信徒の謝狀）といふ如き、その一端である。そこで奥州の信徒を代表して後藤壽庵、横澤將監初め十七人の署名を以て、同じく謝狀を出した。その和文とラテン文と共にロマに現存してゐるが（史學雜誌第十一卷參）

その内容は、當時迫害の狀態と教徒の心持をよく言ひ表はしてゐる。

（前略）日本のエケレシヤ、數年相續き、ヘルセキサン（迫害）嚴き樣にて御座候。然りと强もヒイデス（信仰）に對して身命を惜まず、デウスの御名譽をかゝげられ候、毎年此處彼處にマルチレス御座候を以て御照覽なさるべく候。

倩、此出羽奥州の……大名衆の領内所々に於てエワンゼリヨ（福音）ひろまり大に繁昌仕候。然る處に去歳上旬のころ、伊達政宗、天下を恐れ、私の領内に於てヘルセキサンを起し、數多マルチレス御座候。御出世千六百二十年九月の四日（陰暦八月八日）より穿鑿仕りはじめ、ころばざるをころびたると側より謀判（目判）など仕り候へども、次第にきゝつけ、奉行の前へ出て、曾て以てころばざる由申しひらき、ヒイデス堅固に有之儀に候。此節に、貴き御親、御哀憐の御内證（思召）より尊翰並にジユビレヨの御ゆるしを下され候儀、諸キリシタン、大なる力を得、ヒイデスの勇氣、ヘレセキサンの爲鉾盾と罷成候御厚恩、筆紙に申し盡しかたく候。

當國にキリシタン出來申す事は、此七ケ年以前……アンゼリス下向ゆて、種々の才覺を以て諸方をめぐり、エワンゼリヨを弘通せられ候、近きころのキリシタン、乳房をふくむ童子の如くに御座候へども、デウスのガラサを以て數度のヘルキサンにも勇猛精進の心さしをあらはし、デウスの御名をゼンチヨ（異教徒）の前にかゝやかされ候。誠、デウスの御恩、忝く存じ奉り候。當時（現在）はコンハニヤのパデレ三人、其他……教化者あまた相添ひ、諸キリシタンのヒイデスをかゝへ、育てられ候。政宗ヘレキサンの砌も、彼のパデレ・アンゼリス、政宗の居城を離れず、難儀に思ふキリシタン衆をすくひたて、ヒイデス弱はりたる者共をヒイデスに立ちかへされ候。樣をかへ、在々所々をかけまはり、忍び／＼の合力、淺からず候。誠に大事の節、粉骨を盡され候。コンハニヤの衆の芳心、出羽奥州のキリシンタンダテ（宗門）の爲、深重に存し奉り候。

今より以後、デウスの御奉公に相屆き申候やうに、御ふびんを加へ給ひ、恐れながら、御ベンサン（祝福）を仰ぎ奉るべき爲に此の如く言上仕候。

日附は元和七年八月十四日（1621九月二十九日）で、前に述べた推定の如くすれば、後藤壽庵に勸告が始まつてから一年、雙方の對抗は益す危機に近きつつあつた時である。但し壽庵の最後は實に不明であつて、西洋傳では、迫害の始から三年餘の後、即ち一六二三年末頃に南部に追放されたとなつてゐるが、仙臺方

面では先に述べた如く始の年の末に逐出したとあり、秋田方面では（藩の記録といふが確實ではない、）元和七年（1621）末に領内稻庭邊で大眼宗（後に述べる）の騒動を起したものは仙臺の壽庵だとしてゐる。そこで今の推定では、右法皇への謝狀を出した事は、確に主人政宗に對する反抗を含み、去年以來の危機はその後切迫し、此の元和七年の末に打手を向けられたと見たい。而して地方傳説にある如く、彼は部下十戸の人々を率ひ、膽澤川の谷に沿ひ、國境を越えて逃れた。さすれば行先は自ら栢峠を越えて仙北地方に出る。但し平地に出得ずして谷の間に入り稻庭方面で傳道したのは自然の成行である。此の推測が當り、又秋田の傳説が正しいとすれば、仙臺キリシタンの執行後壽庵は、元和七年の末か、又は翌年の始に、仙北の討手で包圍の内に死んだのである。一傳説では、追放の後餘生を信心に送つたとあるが、死の年月もなく、全くの臆測に外ならぬ。又横手で死んだとすれば、打手と戰つての事であるから、殉教の死にはならぬが、一六二七年に、パウロ三木等と共にマルチルの榮位を授け、二月五日を以てその祭日と定め、法皇ウルバノ八世が宣言を發した。此と共に注意すべき事は、ロマへの謝狀に署名した他の十六人が、殉教その他何れにも名が現れず、終末の不明な一事にある。

六　傳道の興隆と迫害の切迫

元和六年は、東北に於ける組織的迫害の始の年であるが、又他方にはアンゼリスが年來の計畫漸く熟して、教師が多く入込み、傳道興隆の一期を劃する。此年に東北に來たゼスス會の教師四人の事は前に述べたが、中にも最も能く活動したのはカルバリヨであつた。水澤で迫害の始まる時、彼は其地方には居らず、仙北から秋田に進み、それから、鑛夫に扮裝して津輕の教民を訪はうとしたが、關所の爲に妨げられて引返した。而して秋田から海を渡つて松前に行つた。而してその次の年には、仙臺で迫害と闘つてゐたアンゼリスも蝦夷に渡つてゐる。それ故此處で蝦夷傳道の事を述べよう。

蝦夷の開教は、始に述べた如く、一信者の醫者が松前に渡つたのが先驅になつてゐるが、恰も此頃、松前の北方で砂金を採り始めたので、それに出かける者が多くなり、奥州からは勿論、上方からも來た者がある。（パゼスが四五萬人といつてゐるのは、多過ぎるが何百か或は千を越えたかも知れぬ。）而して東北布教の主任者アンゼリスは夙にその方面に着目して、既に二度その地を踏み、蝦夷の地圖を作り（それには蝦夷を半島と假にしてゐるが報告には島だらうといふ理由を述べてゐる）且つ

土人の言語風俗に關する報告をも教區長へ提出した。そこで北方への移民も増して來たし、尚ほ組織的に傳道するの要を認めてゐたので、元和六年（1620）、自分は仙臺で迫害と闘つてゐる間にも、カルバリヨに命を傳へて津輕と共に蝦夷へ出張せしめたのである。而して、次の年（1621）にはアンゼリス自らも蝦夷へ出かけてゐる。此後も他の教師で北海に渡つた者が二三人はあるが、何れも永くは駐在しなかつた。それでもその感化は可なり後まで殘つてゐた。

カルバリヨが松前に渡り着いたのは、恰も水澤で迫害の起らんとしてゐる時で、着後「雪のサンタマリヤ」の祭日（陽暦八月五日）を祝つた。松前に七日滯在の後、險路一日を經て金鑛地方に行き、そこで聖母昇天の祭（八月十五日）を行つた。金鑛地方には、前から同宿か二三人駐在して教を傳へてゐたといふ。此の如く教化を施して後、カルバリヨは松前へ歸つた。

松前から津輕へ渡つたが、高岡の二村には京都から、他の一村には大阪から、他の二村には北國からの流人が住み、何れも信心堅固に德行の生活をしてゐたといふ。即ち一々記錄には現れてゐないが、流人が段々加はつてゐたことを示す。カルバリヨは彼等に説法して曰く、

ヒイデス（信仰）の爲に流人となり居る名譽を忘れ賜ふな。此の貴き位を得たる方々の務めは、偏に信を落さぬにあり、一天下の人々が、方々に對して抱く信用の者を弱めぬ樣に勉むるにあり。今まで、方々は日本キリシタンダアデ（宗門）の名譽となり、模範となり賜ひしことなれば、その證を立て通し、方々の生命の完全を得るまで、その名に背かぬ樣なさるべし。

津輕では、役目のある武士で信者があり。その力で、カルバリヨは關所を通過する事を得て、南部地方に出て、新來のアダミと一緒になつた。南部の信者は、その一年餘前に一教師が來て以來、教師に接しなかつたので、カルバリヨを熱心に歡迎した。三日滯在の中に此等の信徒を慰め、又多くの新信者を得たが、その中には長い間信仰の確立を求めて始めて洗禮を受け、生命を新にした者もあつた。

南部から山を越して（即ち國見峠）カルバリヨは秋田に出た。久保田では先に述べた西ノ丸殿をも訪ふたが、その少し前に佐竹の殿は西の丸殿に佛寺禮拜を命じたのに禮拜をせぬので衝突してゐたので、カルバリヨは大に之を激勵して、信仰を主張せしめた。それから仙北地方を巡回して、院内、その他の鑛山を訪ふた。松前以來三ケ月の旅行中、色々の危險に遭遇し、一度は泥の中に落込み、一度は舟が轉覆しかけたこともあつたが、幸に無事なるを得、「聖書に、彼等の手は汝を支へ、汝の足

が途の石に傷く時は、之を守らんとある通り、アンジョ（天使）が常にお守り下さるのだ」と感激した。

アンゼリスとカルバリヨを中心としたゼスス會員の活動の外に、此年（1620）にはフランシスコ會の教師が東北街道に加はつた。即ちガルベス（Francisco Galves）は最上地方に、フランシスコ（Francisco Barajas）は奥州、特に仙臺で活動する様になり、此に於て東北のキリシタンには二つの會が併むで働く様になつた。ガルベスは先に政宗に使した事もあるといふが、兎に角、奥羽と江戸との間を往來して、三年の後にはアンゼリスと共に、江戸で火刑になつた。フランシスコはその後多分ずつと奥羽に居たらしく、最後島原亂の後に仙臺で捕はれ、江戸へ送られ、此も火あぶりになつた。フランシスコ會の教師は、此後に尙ほ二人位は東北で働いた。

元和七八年（1621-22）、全國を通じて形勢は段々切迫し、仙臺での迫害は續いて行はれ、秋田では佐竹が禁教令を發し、キリシタンと大眼宗とを一緒に滅さうとする。それに抵抗して教師の活動は加はり、庄内酒田に布教を始めたのも此頃で、出羽では二百人、奥州では、百人、關東と合せて千五百人の新信者が出來た。その中熱心家の話が傳はつてゐる。出羽で七十歳になる一老人は、佛教者の間で有徳の人として尊重せられてゐたが、改宗して餘生をキリシタンに捧げる様になつて、人を驚かしたといふ。奥州で武名の高かつた一老武士は、キリシタン信仰を棄てて貰はないと、立派な葬式を營み得ないと親族等が愁訴したに對して、答へて曰く、

わしの一生、今まで世界の繁昌の爲に盡した事は、お前達の知つてゐる通りであるが、今は限ない光榮の途を歩むでゐるから、幻の様な榮花に目を轉ずる心は毛頭もたぬ。一生の最後にゼスス様のガラサの御蔭で、尊く淨い光榮に接し得ながら、若しそれを棄てて、實もない名譽の爲に、影か煙の様な榮を求める様な事は、何たる阿呆ぞ。自分の事や家の爲といつて、此の堅い決心、キリシタンとして死んで行かうといふ決心を更へる譯には行かない。若しお前達が、眞にわしの爲を思つてくれるなら、わしの屍體をキリシタンの仲間に渡してくれ、人々はその聖い儀式で葬つてくれるから。

此く云つた後數日で、老人は死んで、キリシタンで葬つたが、三日間墓の上に光があつたので、親族一同も信仰に入つたと傳へる。

アンゼリスが松前から歸つたのも此頃であるが、奥羽と蝦夷との信者の間に聯絡が段々ついた譯で、迫害の進むにつれて、奥州から彼地に渡る者も出來る。又上方や江戸から奥羽に避難

して來た者もあり、其の痕跡が、飛びとびながら今日尙ほ發見される。此の形勢の中に弘く傳道して、全國を縱橫に（勿論隱れ忍びながら）旅行した一人はゼスス會のポルロ（Giovanni Battista Porro）である。卽九州の有馬から出發し、九州諸國を經て長門に出、周防や安藝、山口と萩などを歷訪し、それから伯耆、因幡、美作を經て四國に渡り、伊豫、讚岐を旅行し、板島（宇和島）まで行き、最後奥州に來た。それから常に奥州に居たらしく、最後、寬永十五年（1638）仙臺で捕はれた。

迫害の壓迫と傳道の反撥とは、互に激發して來た。特に元和九年（1623）三代將軍治世の劈頭に、江戶で慘烈な殉敎のあつた事は、中央に於ける衝突の頂點をなし、その影響が各地に及び、東北では仙臺の外に、秋田、會津、米澤、到る處に迫害を惹起した。然し傳道者の活動は依然として引續き、恰も此の年の長崎から出したゼスス會の報告には左の如く東北の狀態を叙してある。

奥羽では我會の敎師四人あり、三人はパデレにて一人は同宿。此地方の國々には、伊達政宗、蒲生飛驒殿、及佐竹殿が主なる大名にて、敎師等は始終、景勝の領地（米澤）と最上を巡回し、又越後と佐渡にも及び、又信仰の爲に津輕に流されたる敎徒を慰問す。日本の外なる蝦夷の地には、日本人のキリシタン多く松前に住し、敎師は津輕より海を渡つて之を訪ひ、且つ又土人に福音を傳ふる爲に蝦夷の地を探險す。

此の報告は、今まで述べた點を總括したものであるが、而かも此の報告の出た後直に重大な變化が生じた。卽ち東北傳道の主動者たるゼスス會のアンゼリスとフランシスコ會のガルベスとが、同じく江戶に出てゐた間に捕はれ、その年（1623）の晩秋江戶で火刑になつた事で、兩方ともその中心人物を失つた。ゼスス會の方はカルバリヨがアンゼリスの跡を承けて、南北に奔走活動したが、これも翌年末に水澤で捕はれた（後に述べる。）その後にはアダミとポルロと日本人の敎師とが殘り、フランシスコ會の方ではガルベスの後をパロマレス（Diego de Palonares）が繼いで敎會の保護を回復せうとしたが、勿論無効であつた。此人の行末は不明になり、又最後仙臺で捕はれるベルナルドはまだ來てゐなかつたらしい。兎に角、困難の上に人物の欠乏、東北傳道の衰頽期は此から始まる。但し、他方面に新手は加はつたのであるが、これも散り〳〵の仕事であつて、後に少しく述べる。兎に角、東北傳道の最盛期は丁度その迫害の口切りと一緖の時であつて、元和七八年（1621—22）はその境目をなし、それから、寬永十五年（1638）島原亂の平定まで

十七八年の前期は迫害刑戮旺盛の時期、後半は教運衰頽の時期その後はほんの跡始末の時期になる。

七　迫害と信徒の移動

流罪が傳道を誘致し、傳道の興隆は迫害の壓迫と相反撥し、その間には傳道師の往來の外に信徒の移動が行はれ、それが又傳道と迫害との移轉を促す。九州や上方からの流民や避難民が東北に來て、キリシタンの仲間が增す、東北と江戸、江戸と北陸、互に聯關して往來移住が行はれる。此等の移動については、傳道者の往來に比して記錄が極めて少く、關聯に不明の點は多いが、どこの迫害史にも通有の事實で、頗る重要の事項である。

元和八年(1622)幕府の重臣本多上野介が、會津改易の事に坐して、出羽の由利庄内に流された。事件は勿論宗門一件ではないが、駿河以來バテレンに好意を表して、交際の多かつた人であり、流罪の地でバテレンと交通もあり得る事である。此人の流罪が宗門傳播にどれだけ影響したか、全く定め難いが、此人の居た由利庄内にも、その終焉の地なる仙北の横手にも前後キリシタンの少くなかつた事は注目に値する。その外前に述べた如く、津輕には二箇村までも北國からの宗門流人があり、上方からも加はり、又南部地方には九州から難を避けて來た者もある。後藤壽庵が南部に追はれたか、又は仙北地方に出たか、何れにしても從者若干がついて行つたので、それだけ宗門がその方に移動した譯である。その他秋田や仙北に迫害があれば、比較的平穩の庄内へ行く者があり、會津の壓迫は、その地方の宗門を幾分阿武隈河の流域に追ひやる。現に郡山附近には、會津から逃れて來た貴婦人の感化を受けた村があり、遺物が殘つてゐる。又教會側の記錄には一向出てゐない二本松や三春には、寛永以後にも可なり多くの信徒が居たのみならず、福島やその附近にも信徒も殉教者もあつた記錄や傳說もある。つまり、迫害は一部分教徒剿滅の效果を呈するが、同時に他方面へ移動や傳播を促す。

信徒の移動と傳道者の活動の外に殉教の事實は、教會の重要事項として報告が比較的に多く、よく傳はつてゐる。然し迫害が加はるに從つて交通通信が不便になり、且つ東北地方は外國交通の門戶と最も遠く隔つてゐるから、九州地方の如くに豐富の材料がない。宗門記錄の外に、日本側では、その當時こそ著しく世間の注意を惹いたに違ひないが、(又爲政者は刑罰を成るべく世に知らせる樣にした)、後には段々秘密に葬られ抹殺破毀に逢つた。例へば後に述べる米澤藩の殉教者甘糟衛門の事は、少しく藩公の年譜に出てゐるが、その一族の系譜にはその人の

名をすら抹殺してある。又殉教の事實や信徒の生活などについて各地方に傳説の殘つてゐるのが、訛傳も多く、不明は尙更で、その上故意に誤く云ひ傳へた點が少くない。兎に角、日本側や教會の記錄の外に、傳説遺物、或は書類の斷片等で東北地方のキリシタンに關する材料は、今後尙ほ現れて來る望は可なり多い。著者自らが僅に十日間の旅行ですら得る所が多かつた事で思へば、今後材料の蒐集と聯絡總合によつて、迫害殉教、移動傳播、その他の事實を明にする事が出來やう。

八　仙臺領の殉教者

伊達政宗の壓迫は、藩臣中の首領後藤壽庵の居なくなつた後、會釋なくキリシタンの上に加はつて來た。然し、時に隨つて緊縮弛張のあるが迫害の常であつて、先の迫害から續いてはゐるものの、その間著しい刑戮なしに三年餘を過ごしたらしいが、元和九年（1623）の末になつて再び酷烈になつて來た。此は政宗自身の發意ではなく、江戸でバテレン二人を發見して火刑にしたつゞき、三代將軍の治世始めの嚴命に基く迫害であつて、追究は領內一般に及むだが、特に壽庵の舊領で、又當時バテレンの忍むで居る見當のついた水澤が主としてねらはれた。

傳説によれば、壽庵の去つた後、福原組の八十七戸は棄教したといふが、此も必しも內心からの事でなからうし、且つその附近にはキリシタンが充滿して、一朝一夕に芟除し得るもでない。此方面の教師、信徒の師父たるカルバリヨは、北方から歸來して後、主として仙臺で働いてゐたが、此年（1623）のナタル（クリスマス）を祝ふ爲に、信徒の最も多い水澤方面へ來て、信徒を慰問した。後藤壽庵は既に死んでゐたにしても、その郎黨で一旦逐電したものゝ歸來したものもあらうし、上方からも激勵の手紙が來たといふ。云はゞ一つのデモンストレーション、それに更新の勢で迫害追究が加はつて來た。恐らく多數の打手をそこらに送つての召捕が始まつた。カルバリヨは、能く路案內を知つてゐる出羽の方へ出るつもりが、膽澤川の上流に向ひ、山奥の下嵐江（Orocie とあるが、土音オロシェ）に着いた。後藤壽庵の逃れたのも此の道であつたと思へるが、その時は秋であつたから、高さ千メートルの柏峠も越えられたが、此時は陽曆の二月、雪の最も多い時で、峠は到底通れない。下嵐江村には信徒六十人があつて、カルバリヨを山中の小屋にかくまつた。追手の役人は村中を搜索の後、終に雪中の足跡から小屋を發見して、そこにゐた者を盡く捕へ、皆を裸體にした。カルバリヨは自ら進み出て、信者をかばひ、自分は縛につき、

且つそこにあつた飲食を盡く捕吏にくれてやつた。その時彼は、今までの日本服をぬぎすて、法服を着し、立派に教會の教職として縛に就いた。元和九年十二月十九日（1624二月七日）であつた。

召捕られた數十人は引き立てられて、代官所のある三分一（下嵐江から五里餘、福原の西南約半里）に着き、雪中戸外にさらされた。餘りの氣の毒に村民も彼等に施與をしたといふ。カルバリヨは、信徒の中二人と共に役人の前に呼び出されたが、生國や姓名は如何と問はれても、これ等を語る要はない、生命を捧ぐれば足りるとのみ言ひ張り、信徒は各々カルバリヨの弟子で、その荷をした事を明に白狀した。一應吟味の後、一同は小屋に入れられたが、パデレは終夜信徒の告白を聽いて最期の用意をした（死の前には告白を要する）。

一夜は小屋の中にあけて、翌朝一里ばかりの水澤の役所へ引立てられた。「此者はキリシタン也」といふ高札を立てての引廻しであつた。雪中の艱難で、老人二人が足許危く、一行につづき得ないで、途ばたで切られ、ためし切に寸斷された。水澤について、暫の間は風雪にさらされ、夜になつて漸く小屋に入れられた。翌日二人の奉行（簗岡備後と橋本與後）が吟味をして拷問を始めた。カルバリヨの答は始終一貫、殉教の覺悟をつつばるのみ。そこで役人はサビナといふ女を引ぱり出し、パデレの前につきつけて、男には信仰固守を勸めるにしても、女には棄教を勸めよ（然らずば女をも拷問にかけうといふ意）といふ。勿論それに從はない。そこで教師が一緒に居ては、信徒等が激勵され、教師が目前に居なければ、他は命に從はうといふ見當で、カルバリヨを退席させた。それも無効で、信徒は一人も拷問に屈しない。役人等は、自分等の手に餘ると見て、一同を仙臺へ送ることにした。

十二月廿二日（陽暦二月十日）、一同は雪中を仙臺に向つた。カルバリヨは馬で（此は見せしめの意）、他は皆徒步。驚くべき事には、拷問で膝の折れたレオがよくあるいたにあるといふ。仙臺へは三十里の途、少くとも四五日はかかつたと思ふが、その途上、自ら進むで名乘り出て一行に加はつた者も少なからずあつた。仙臺に着いて九人づゝ牢に入れられ、茂庭周防が吟味役として年末の三十日（陽暦二月十八日）拷問にとりかゝつた。

水澤の召人が仙臺に着く前に殉教の幕は既に始まつてゐて、十二月十三日（陽暦二月一日）仙臺の東なる大村（今の高砂村の邊）のもの、マルコ嘉兵衛とその妻マリヤが火刑になつた。二人は一日間裸體で公衆の前にさらされて後、十字架上で火をかけられた。マリヤは火焰の中で、デウスのガラサ、此の名譽を賜はると高聲に叫

むで死んだ。此よりも殘忍なのは、仙臺の醫師安西ジョアン（又ジョアキムとも）とその妻アンナとで、二人とも七十以上の老人であるが、先づ廣瀬人の流にひたし、時々は引き出して又水につける。大寒の川水は流れてゐても、ひたたる水は忽に凍る。三時間川水でいぢめた後、引上げて裸體のまゝ馬に乘せて仙臺市中を引廻した。それのみならず、辻々に行つては馬を留めて水をあびせかける。此は十二月廿六日（陽暦二月十四日）で、水澤の一行が仙臺に近きつゝあつた時である。この半ケ月の間に殉敎した者、仙臺、登米（Toyomaとあるもの）、薄衣等で可なり多數に上り、皆斬殺又は火刑で死んだ。

かくて、水澤の一行が仙臺に着いたのは元和九年の年末近くであつたので　處刑を正月後にせうとの議もあつたが、即行論が行はれて、年末の三十日に拷問を始め、その日の午後、カルバリョとその一味を河瀬につれ出し、そこに深さ四五寸、廣さ三尺餘の穴を堀り、河水を浸して、召人を悉く裸體にして穴の中に坐らせ、且つ棒ぐいに縛りつけた。カルバリョは激勵の說法をして、信徒等と共に、ゼスス、マリヤの御名を呼ぶ。共有樣は拷問に苦む者の群でなくて、祈念の會合に河原で集まつてゐるに異ならぬ。然し、時のたつと共に、皆の聲もかすかになり、一同靜座默想せるものの如くであつた。そして四方から、ころべ、ころべと叫ぶが、一同は默して應じない。そのまゝにすれば死んでしまふが、成るべくころばせたいのだから、三時間の後に河瀬から引上げたが、一同は凍えて自分で動く力はなく、そのまゝ砂の上に倒れる。カルバリョは尙ほ手を胸にあててオラショを捧げてゐる。然しそうする中に呼吸を引取る者が續出した。先づ死んだ一人ジュリアン治右衛門は、その時何か眼に見た如くに、「御主樣でござりますか」と叫んで呼吸を引取つた。此等の屍骸は尙も刑を受けて寸斷せられ、廣瀬川の水に投げ込まれた。

役人は特にカルバリョを目指して、強くころびを勸めるが、答は同じで「デウスの御掟に背く事は、如何なる事でも應ぜられませぬ。」どうにも仕樣がないので、又々生き殘つた者を牢獄にぶち込むだ。あけて元和十年（後二月寛永と改元）になり、正月も三ケ日が濟むや否や、四日（陽暦二月二十二日）再び水責を始めた。今度は水を膝まで位に深くし、暫くその中に立たせては、又坐らせる（即ち水が胸の邊まで屆く。）日の暮までそれをつゞけて、ころべ、ころべを繰返す。答は同じで「出來ませぬ。」日は暮れて寒風は強くなる。雪も加はり、水は氷る。その中にカルバリョは依然默想祈念をつゞけ、信者等は、此世の別れ、即ち天上の再會を願ひ、或者は既に天上の姿を見てゐる。「も少しだ、も暫

くだ、此の苦みは直に濟む」と互に勵み合ふ。彼等は此世に望をおかず、只アニマが天國へ旅出する刹那を待つのみである。

夜の更けると共に、最後まで殘つた四人も段々に死ぬ。多くは最後の一言をパデレ樣に交はし、カルバリヨは祝福を與へる。カルバリヨは一同の最後で、五體全く石の如くなつて呼吸を引取つたのは、深更子の刻に近かつた。齡四十六、初めて日本に來てから十五年、東北の傳道に從事する事六七年、奥羽の各地を縱横に旅行して傳道し、北は蝦夷の奥に進み、アンゼリスを助け、その亡き跡は東北キリシタンの中堅であつた。その外、壽庵が灌漑水路工事を起すにも、カルバリヨの助があつたと傳へる。此人の書簡が傳はつてゐないのは遺憾である。

此等五人の遺骸は寸斷して河に投ぜられた。然し、信徒等は熱心にパデレの遺骸を得やうとし、その頭部だけを得て葬つたとも、又一人の士が全體をかくし取つたとも云ふ。

此が仙臺での最大の迫害であるが、迫害と殉教とは、寛永元年全體につゞき、その後も斷續的に行はれた。跡始末は、その後四五十年の仕事であつた。

九　秋田領內の殉教者

元和九年から寛永元年にかけての迫害殉教は、此の如く、宿題であつた仙臺に始まつたが、禁教策の普及の結果として、同じく宿題ともいふべき秋田藩では、約半年おくれて、寛永元年(1624)の夏に爆發した。即ち豫て殿中の異分子、大名の家には似合はない西ノ丸殿が二年前に放逐せられたのを手始に、佐竹の殿のキリシタン憎惡が段々加はりつゝある時に、三代將軍の短氣一徹な禁教令が此方にも及むで來た。それに加へて仙北地方には、他にも一つ異宗禁斷の問題が起りつゝあつた。即ち先に後藤壽庵に關聯して述べた大眼宗の一件である。西洋側で Daiganchou として傳へてゐるのは「大願宗」で、東北地方に今も多い秘事門徒の一つじやないかと思へるが、地方の傳説では大眼宗としてゐる。此は他の神佛を崇拜せず日月のみを拜むと傳はつてゐるが、實は內容は全く不明で、只公に認められた宗教でなく、秘事の一種たるだけは明である。而して此の宗徒について種々の流言があり、終に彼等が仙北地方で騷動を起すまでになつた（多分壓迫に堪えかねた結果）。此の騷動が後藤壽庵の歿後と關係あるや否やは、定め難いが、年代は大抵その頃にあるらしい。即ち西洋の方で傳へる所では、此の騷動を鎮壓し、主立つた者六十餘人を斬罪に處したが、その中に二人キリシタンがゐた爲に、藩では二つを混同し、キリシタンを不逞の徒と見たといふ。且つ又、カルバリヨはその間に盡力して

（西ノ丸を通してと想像される）、その冤罪を雪がうとし、その他は追放に處せられたといふ。即ちキリシタンの四家族三十人を、冬の最中に裸體でかり出した領外に追放した。此の如くにしてキリシタンと大眼宗騒動が混線して藩政の厄介となりつゝある頃、西ノ丸殿は放逐されたとすれば、少くとも佐竹の殿の心では、總てがキリシタン憎悪になつて來たのも想像するに足る。

但し組織的迫害は、此等地方的原因の外に、幕府の威令が最大の刺激であつて、寛永元年（1624）、秋田の城主佐竹右京太夫（義宣）は江戸の例に倣つて、梅津半右衛門を奉行として組織的に禁教の遂行を勉めた。その着手は藩士中のキリシタンで四十二人を召捕つた中二十一人は身分の重い人々であつた。その一人カツタ（勝田？）釆女は非常の熱心家で、七歳の男児を訓練し、殉教の用意として、手に火を握る修行をさせた位であつたが、奉行の前に出ても、雄辯に法を説いて、奉行の舌を卷かせた。

捕はれた者のみじめさはいづくも同じであり、又信仰の爲に受難する者の覺悟も同様であるが、今此新開教地に於ける迫害受難に目立つ事は、婦人のしつかりした態度である。此は西ノ丸殿の手本が激勵になつかたと思はれるが、その秋田城内から出たメダイヤンにベルタと女の名のあるのも、興味ある事實である。デーゴといふ教名あるカクテイ（格率父は柱井か）治郎右衛門の妻ルシヤは、禁教と共に里方に引取られたが、親達に對して断乎として云ひ張つた。「此の様に無理に里方へ引取られましたが、わたしを可愛いと思召さば、夫と同じく牢獄へ御送り下さい。」ビセンテ萩原の妻モニカお若は、曾て西ノ丸殿に事へてゐたが、召捕られて柱にしばられ、四日間食物なしに過ごした。その上傍には十才と三才の二人の小供が居て、「おとゝさまはどこ、御飯を頂戴」と泣き叫ぶ。モニカはその悲惨極まる試練にこらへ通して信心を飜さず、偏に十字架上のゼスス様を觀念してオラショを捧げた。獄吏は尚も意地悪く、信仰を棄てずば、目の前で小児を絞り殺すとおどかしたが、「殺すならばお殺しなさい、而してその二つの屍骸の上にわたしの屍骸を重ねて下さい、さすれば眞の命を頂戴することが出來ます」といつて動せない。そこで餘儀なく、いましめを解いて臺所の下働きをさせ、且つ父兄から棄教を迫らせた。それでも頑として應じないので、終に數ケ月の後首をはねた。此は寛永三年正月八日（陽曆二月十四日）の事で、その時モニカは二十七歳、死後には奇蹟があつたといふ。

秋田領内を通して召捕刑戮が増して來た。六月三日（陽曆七月十八日）

には藩中のキリシタン三十二人が、久保田から三里離れた處で火刑になつた。皆身分ある士とその家族であつたが、禮裝を整へ、刑場に引かれるにも、志願して繩をかけて貰ひ(ゼススに倣ふ爲)、その中の頭目ジュアン河合七右衛門が先になり、その子トメ(十三歳)がつき添ふてリタニーを唱へ、衆が之に和す。信者等は、之を途上に見送り、且つ飲食物を捧げる。殆と祭禮の行列の如くにして刑場に着く。十字架上に縛られて火焔が上ると、内外相應じて「主よ我等を憐み賜へ」と歎ふ。燒き殺しといふよりも蒸し殺しにして、三日間屍體をさらしたが、同信徒が之を葬つた。男二十一人、女十一人、中には夫婦親子一緒の一家もあり、その名は盡く傳はつてゐる。

その外久保田の獄中で死んだ者も少なからず、殘る二十五人の上に院内で捕へた二十五人も牢舍に加はつた。六月十一日(同上廿六日)には五十人が盡く牢から引出されて打首。此の中先の二十五人は多くは藩士であつた事は、その姓名で知られるが、中三人は妻女であつた。殘りの二十五人、院内から召捕つた者二十五人の中二人名がないが、他の二十三人は、鑛夫の常として多くはその故郷を名として呼むでゐたので、どこから來た者といふ事が分かる。即ち大津、仙北、關東、大阪、播磨、尾張、駿河、仙臺、伊勢が各一人、備前、越前、越後が各二人、石見が四人、他の四人は故郷不明、皆男である。此の地理的分布で見てもキリシタンの避難者が鑛山に隱れた一端を知るに足る。

續いて六月廿日(陽曆八月四日)仙北の寺澤から來た者十四人が久保田で、七月三日(同八月十六日)仙北の山中なる善知鳥(ウトウ)の者十三人が横手で、八月六日(陽曆九月十八日)には薄井(ウスイ)の者四人が居村で、何れも打首。その他處々の村落でいくつもの殉教があつた。教會傳には記してない雲然(クモシカリ)の殉教(遺跡が現存)の如きは、こういふ散在の一に外ならぬ。その中で故郷の分かる者には、江戸から逃げて來た士(或は仲間か)太郎次、七右衛門(此名は後藤寿庵の變名だとも傳へる)、若狹、近江、下野、宮(多分尾張の)の者の外に朝鮮人嘉左衛門夫婦がある。(朝鮮人のキリシタンについて一般に重要な事があるが、他日に讓る)。その他通常の名の者は、多く土地の者であつたと思はれるが、先の院内の場合と同じく、信徒の移住を示す有益な材料が此等の斷片によく現れてゐる。今後秋田地方の材料が出てくるに從つて尙ほ種々の點を發見し得やう。教會側で分明してゐるだけで秋田領の殉教者は百九人に上る。

此の如く三代將軍治世の第二年、寛永元年(1624)は東北に於ける最大迫害の年で、仙臺と秋田が最も大袈裟であつたが、會津、南部、津輕領何れも迫害はあり、南部の盛岡では少くとも三人の死刑があつた。第一回、元和六年の迫害を序幕とすれ

ば、第二の寛永元年の分が本幕で、それから四五年の間、どこにも斷續して行はれ、寛永五年の末（1628-29）米澤での殉教がその最後の花となつた。それから後は裏面に移り、段々教徒が潜伏狀態に入ると共に、迫害も陰性になつて來た。

一〇　寛永初年の狀勢

寛永初年、迫害の盛なに拘らず傳道は衰へず、その二年（1625）には東北で新な受洗者二百七十人、同く三年（1626）には九百四十人。教師は少くともパデレが三人（アダミ、式見、フランシスコ）にイルマンが一人（ジュアン山）が常住して巡回し、中には蝦夷に行つたもあり、江戸との聯絡もあつた。そこへもつて來て、長崎から又新手が加はつた。此の新手は二重の意味で迫害の結果である。即ち元和八年（1622）長崎で大殉教のあつたを聞いて、冒險的にマニラから九州に來たもの十人、一は殉教の爲に生じた教師の欠乏を充たす爲と、一は殉教志願ともいふべき冒險心の結果である。然し長崎地方の周密な迫害で、教師は殆ど手も足も出ない、土穴や壁の間にもぐつて布教をした。そこで敢て難を避けるといふ意味でなくとも、もつと布教の効果のありそうな方面に着目するのは自然の勢で、若干のパデレの中には、期せずして眼を東北地方に注ぎ、その方に出かける計畫を進めつつあつた。その意圖が期せずして一致したのを發見した彼等は、此を以てデウスの御思召だと信じて、遠路且つ危險を冒して東北へ來た。その一人はオゴスチノ會の改革派跣足教師ゼススのフランシスコ（Francisco de Jesus）であつて、同時にフランシスコ會で同樣の計謀を立てゝゐたギユテレスの指導を受け、同行四人（フランシスコ會とゼスス會の人々）と同伴し、「新イスパニアの海（太平洋）に注く無數の河を横ぎつて」、即ち東海道を經て東北にやつて來た。其は彼が長崎に潜入してから四年目、その間に日本語の練習は十分出來てゐたのであるが、九州語を覺えた者が東北に來ての困難は、言葉の上だけでも察せられる。東北に來た翌年即ち一六二七年三月廿六日、出羽の長井から出した手紙に曰く、

昨一六二六年（寛永三年）七月上旬、Fincari（東といふこと）といふ此の諸州に到着の後間もなく、尊慮に申上候如く、途中の困難試練と共に、此の多難の時にデウスが下し賜ひし不思議の御合力と、萬艱難に堪ゆる樣助け賜はりし事の數々盡きせず覺え候。試練の加はる毎に、自分がデウスを敬ひ奉る爲に喜んで悩み申さんと思ひ、デウスを崇め申し候。……我等四人（人名不明）相伴つて此地方に參り候てより六千近くの人に洗禮を授け、自分のみにても千五百人をキリシタンに致し候。但し

此も望む所の半に過ぎず、願ふ所は、此地方に一人も我等の御主ゼスキリシトの誠のヒデスを知らぬ者なきに至らしむるにあり、御主が我等の爲に惱み賜ひし一分なりとも、心盡に報ひ奉らばやと考へ候。……

人々は心善良にて、洗禮を受け候者は熱心に救ひを求め候。今までにキリシタンに致し候者共多くは、一ケ月打ち込みてオラシヨを捧げ申候。又此等の人々が自らの過を悔み候て、御宗旨を奉ずる熱心を見候事は、一方ならぬ慰安に有之候。

最近、將軍より諸大名に更に嚴命にて、心の盜賊を搜り盡せよとの達し有之、此の危難の中、迫害の最中に、デウスが我等を導き賜はる樣にと祈り奉るばかりに御座候。但し、必要ありて、此のアニマと此身とを御用に立つる要もあらば、熱鐵にも堪え忍び、暴君が考へ出ださうずるあらゆる拷問をも凌ぐべく存じ候。デウスを敬ひ奉る爲に此の我が生命を捧げ奉るべき御恩命、御惠を我等の御主が下さるべきや。此身の罪科はその御恩にはふさはしからずと恐縮仕候。

我等四人は、各々地方を受持ち、又各々いくつもの地方を受持つ要も有之、五十人の教師ありとも、それにて足れりとは思はれず候。我等が相會ふ事は極めて稀にて、折も少く、天候の妨も少なからざる次第に御座候。

右の中にある一年足らずの間に六千人の新信者を得たといふのは、少々誇大に失する嫌はあるが、その樣な事が無いとは云へない。兎に角。四人の新手の加はつた事は重要で、且つ右の手紙で見てもその傳道の熱情は伺はれる。右四人の中ゼススのフランシスコの外、三人の名に傳はらぬが、その一人は、最後十二年後に山形で捕はれるベルナルドであらうと思はれる。

一方新手も加はつて傳道するに對して、迫害刑罰は到る處に行はれ、斷片的に傳はつてゐるだけでも、高岡での火刑二人、會津若松での斬首一人が傳はる。その中の一人は大和生れ、一人は蝦夷生れであるが、何れも奥羽に來てからキリシタンになつたので、此の一事は、東北キリシタンの感化力を示すものといつてよからう。此等殉教の物語も傳はつてゐるが、略して、兎に角、殉教があれば、それに感激して新に信者になる者の出來たのも注意すべき事である。

一一　米澤藩の迫害

そこで最後の一幕、米澤での迫害は寛永五年の末から始まり、翌年につゞいた。米澤の藩主上杉景勝は、前に會津にゐた時も同樣と考へられるが、米澤に來て以來はキリシタンを壓迫せず、二代將軍の禁教命令があつても、「當領内にはキリシタン

一人も御座なく」とすまして、手を入れなかつた。此は敢てキリシタンに好意を有した譯でなく、幕府に對して一々屈從しないといふ心持から出たことと想像される。その景勝は元和九年(1623)春に死んで、つゞいて江戸は三代將軍の代となつた。次代の彈正(パゼスの Damion)定勝は、中々氣慨家であつたといふが、三十萬石の一大名、もう一々江戸の命に從ふ外ない、況や又キリシタン問題で幕府に反抗する要は少しもない。そこで藩内に迫害が始まつた。教會側では、此の爲に彈正を惡人の如く見てゐるが、藩主の立場としては誠に已むを得ないことであつた。寛永五年(1628)江戸在府中、領内のキリシタン絶滅を傳令したが。一の國家老たる志駄修理(名は義秀)は溫和策を執つて突進しない。他の家老廣居出雲(忠佳)は之を手ぬるいとして江戸へ報告した。彈正は歸國に先つて、幕府の命を遂行する決意を堅めたと察せられるが、十月廿八日江戸を發し、十一月五日(陽暦十一月三十日)未刻米澤に歸着した。そこで先づ壓迫の目當になつたのは重臣ルイス甘粕衛門(右衛門信綱)であつた。此人は謙信の驍將甘粕近江守の孫と考へれるが(系譜に削ってあるが年齡によって推測)餘程前からの信者らしく、藩中と近傍のキリシタン首領であつた。(近頃殺人で名を廣めた甘粕某も此の家系と思はれる)

甘粕衛門は此時妻は亡くなつてゐるらしいが、長子ミゲル太右衛門、次男ビセンテ市兵衛(他家を嗣いで Cousabane C-ouragane となつてゐるか、米澤藩には黒金、倉賀野の姓があり何れとも定めかねる)、その妻女と共に熱心の信者。壓迫は先づ勸告で始まつた。志駄修理は甘粕の友人で、先づ勸告の任に當り、修理の子三郎は太右衛門の友人として同じく勸告した。何れも無効。殿からの使としては三潴式部が吟味役として甘粕一家に命を傳へた。結果は同じ事である。志駄修理は尙ほ緩和を講じ、若し甘粕に死を賜ふ樣な事があれば、勢ひ他の數千の教徒を刑する必要に迫られ、事が餘りに重大になるとの意を以て殿を諫めて見たが、殿の心では、事の起りは幕命を奉ずるにあつても、一旦主君の命となつた事に背く臣下を不埒とする方が主になり、志駄の言に耳を假さない。それ等の往復交渉で一ケ月半を費したが、落着く先は定まつてゐる。十二月十七日(1629一月十一日)愈よ上使を以て殿の命を衛門に傳へ、同時に他の同樣の信徒にも命を下した。衛門は上命を御請けし、且つ言つた、「今までも殿から蒙つた高恩は大きいが、今度の恩命に越した有難き仕合はなく、最後の御恩として謹で御請を致しまする。」而して豫て用意した刃劍槍銃等一切の武器を揃へて上納して他意なきを示した。

かくて衛門は、又家財を處理し、友人親戚に分ち、又召使等

には物をとらせて暇を出したが、中に僕二人と婢二人は、主人と共に殉教する決心で去らない。家族には長男とその妻テクラと幼女ルシヤ、次男とその妻ドメニカ（里方は會津）と幼女ジュスタ總計七人、それに江戸から來て居た家の客分大峽(オーバヤマ)チモテとその妻ルシヤと、奴僕を併せて十三人と、同信徒數人とが、最後の夜を守つた。衛門は同信のパウロ西堀式部を訪ふて家に歸り、家族共々、聖母像の前で禮拜を遂げ、又此世の果敢(はか)なさと天上の福を語り、オラシヨと聖歌で一夜を明かした。同信の他の家族も同様であつた。

明くれば十二月十八日（陽暦一月十三日）甘粕の家では、定まりの卯の刻前に總て出發の用意を整へて、檢使の來るのを待つてゐる。その來着に迎へられ、一族十五人、最後の禮拜を行ひ終つて衛門と女の外は縛した姿で、家を出る。その先頭には一人の童子が聖母像を繍めた旗を立て、一人の童子は蠟燭をつけて進む。米澤平原の冬のあけぼの、板谷峠の連山に茜を染める頃、一行は家中屋敷から、町の北はづれ、最上街道の出口になる刑場北山原(ホクサンバラ)（西傳の Wocousambara）に進む。刑場に牽かれる人々といふよりも、祭式の行列の如くで、聖歌連禱を唱へる。中には當歳の孩兒が十七歳の若い母に抱かれたもあれば、八十の老人もある。途上の見物も、その光景に感動せざるを得ない。

衛門は途中親友西堀式部の家を過ぎたが、西堀の家へ來て殉教の待設けをしてゐた和田村の一信者は、次の番を待ち得ないで、願つて甘粕の一行に加はる。北山原に着いて、一同は再び聖歌を合唱し、女等を先に、衛門を最後に段々首を打つ。牽行は行列の童子二人と他の一人とはそれに加へず釋放した。

續いて他の家族も段々に刑場に連れ出される。ジヨアン板齋(バンサイ)主計（又は數右エ門）とその妻アウラと、一族合計七人。シモン高橋忠左衛門とその娘テクラ。それからパウロ西堀式部。（パウロの妻は殉教の志を堅めて夫につかうとしたのを、無理やりに里方に引取られてしまつた。）それから多分身分の輕いルイス甚右衛門（八十歳）と妻アンナ、マンショ吉野左衛門と妻ジュリア、次々に首打たれた。日が總て同日であつたや否や不明であるが、米澤藩家中の二十九人は此の如くにして、武士としてもキリシタンとしても、立派な最後を遂げて、北山原の露と消えた。遺骸は皆その邊に埋めた。

殉教は城下の武士に止まらず、近郊の足輕にも及むだ。米澤の南一里餘、會津に出る路に糠山(ヌカヤマ)といふ小山につゞいて松林があり、その中には今もキリシタン井戸といふ水溜があり、その傍にはキリシタンの手箱岩といふのがあつて、それでキリシタンが魔法を行つたと傳へる。又松林の南はづれの野原に、少し

く小高い土まんぢゆうが七つばかりあつて、キリシタン塚の名がある。松林内の井戸は多分洗禮に用ひ、キリシタン石は祭壇に用ひたものと思はれるが、此の鰍山部落のキリシタンが松林の中で秘密に祭を行つた跡がかく傳はる。而して荒涼の野原土まんぢゆう二つの上には供養塔が立ち、土地の傳説では七家族約五十人の塚であるといふ。此の部落のキリシタンはアントニヨ穴澤太右衛門を中心にしたらしいが、教會の傳では男七人は北山原に送られ、女と小供六人は居村で首打になつたといふ。但し、殉者は此の一回に留まらず、その後もつゞいたので、松林中の祭壇や七の土墓も此の前後を合せての遺蹟と考へられる。足輕仲間の他の部落、米澤の東なる新藤臺(シンドガダイ)では八人、花澤では三人、十二月十八日と翌日とに斬られた。北山原で死んだ者の首はさらされ、「天下の御法度に背いてキリシタンとなりし故に處刑するもの也」といふ高札が立てられた。

お仕置は村落百姓にも及び、米澤の北三里の多屋(パゼスのPoyo 或は大橋村の法遥かも知れぬ)では八十歳のジョアンを始め十數人が殺された。ジョアンは特に願によつて十字架の上で殺された。それは十二月廿二日(陽暦一月十六日)であつた。

寛永五年の此所刑が大な迫害の最後になるが、米澤領だけでも尚ほ續いて行はれ、剿滅までは少くとも二三十年を要したのである。後の時代の事ではあるが、斷片的に知れてゐる點を一括する。(此等は教會側には少しも傳はつてゐない)。

後期殉教者で米澤の記錄や傳説に著しいのは、磯九兵衛の一件で、その最後は承應二年(1653)にある。此人は定勝の室が都四辻家から來た人について來た者で、殿でも大切にして保護して居たが、江戸で訴人があつた爲に手がつき、慶安三年(1650)末に井上筑後守から通牒して來た。その前か後か、元の姓山浦をかへて磯九兵衛といふ名にし、他處預にしてあつたか、往復交渉三年の後、老中の奉書で死刑を命じて來た。そこで、その男子二人は寺に入れ、妻と娘二人は代官預として、本人を斬罪にしたのが承應二年極月二日、米澤郊外の極樂寺の庭での事。九兵衛は刑場に引かれる間も、「紫雲が迎へに來る」と喜び勇むでゐたか、愈その時に紫雲が見えぬので泣き出したと傳へる。泣き出す位ならば棄教する筈であるから、此はキリシタンを惡く云ひなす爲の作り事であらう。此の頃江戸の追究は中々綿密であつたものと見え、此と殆ど同時に米澤の鈴木清藏、福島の茶賓長右衛門か斬罪になつてゐる。此等も記されざる殉教者である。又殉教者を生じたや否や不明であるか、長井の北、佐野原村にも多くキリシタンかあつて、色々の處分を受けてゐる。又同しく米澤領である福島の北で山中になる鰍山村

で、最後に隠れ忍んだキリシタンが牛をむして油をとつたといふ様な傳說もある。何れも皆潜伏キリシタンの跡を示す。(此等の點は、米澤の伊佐早謙氏の教示で得た材料である)。

一二　餘波と結末

米澤で大迫害を行つたが、その餘波が中々殘つてゐた事は、又他の地方も同様で、寛永六七年以後は、東北のどこでも殘徒剿滅の時代で、處刑が時も處も散在的に行はれて數十年に亘つた。その中教會に傳はつてゐる方面で見ると、寛永六年（1629）には會津で召捕があり、イルマンのジュアン・ヤマは十五人の信徒と共に捕へられて、自分は江戸に送られ、四年後殉教）、次年（1630）には山形で六七人（何れもフランシスコ會の第三會員）が火刑、續いて最上地方のどこでか九人が火刑、二十六人が火刑と首打、若松では三十人（内十一人女）火刑、十三人首打、二本松では男十二人、女二人（多くは首打）。即ち少くと百人づゝ毎年殉教があつた。又類族書斷片の中で僅に記されたものも、寛永十六年（1639）仙臺領の栗原郡に女一人首打、同二十年（1640）膽澤郡に男一人釣殺しが見える。同じく仙臺領磐井郡白山村の傳說では、寛永十七年（1640）に三十人の斬罪、九人は闕所逐電、その他南部領にも大分ある。(菅野氏蒐集の材料)。此等斷片がもつと出て來て綜合すれば、一時殉教の分布を知り得やうが、兎に角、斷續して弘く行はれた事實は失はれない。さればこそ、島原亂の平定後四年の寛永十九年（1642）には、奥州の山中に天主教徒が多く潜むでゐるから、嚴に搜索せよとの命を江戸から東北諸藩に傳へてゐるのである。

此間で教師の狀態は如何と見るに、今までの布教者は皆殉教し、殘つた者は後に述べる五人のみであつたらしく、而かも、それに一人新手が加はつてゐる。但し此は駐在でなく、北陸布教と共に巡回したので、それは精神（スピリトサント）のルカス（Lucas del Espiritu Santo）で寛永十年（1630）頃に東北を一巡してゐる。而して新信者の出來た最後の記錄は寛永七年（1630）に、奥州で八百六十人、出羽で百四十三人（それに比べて關西で二百八十八人）。此の數は少しく多過ぎる様であるが、アダミが東北に働いた最後の年であつて、彼はポルロと共に津輕までも行つてゐる。

そこで記錄は最後の幕に移る、即ち島原亂の平定した年寛永十五年（1638）から翌年にかけて、東北でのバテレン召捕である。

此の檢擧は三代將軍の威嚴に關する重大事として各方面に嚴しく行はれたのであるが、仙臺で先づ四人のバテレンとイルマ

ン數人がつかまつた。一般信者の處刑もあつたに違ひないが、記錄には傳はらぬ。教師格の者は江戸に送られ、評定所で吟味し、將軍自らも訊問したが、終に目的を達しない。即ちころばせて總てを白狀させようとしたが無効である。そこで事件を井上筑後守に托して、玆に江戸での宗門改役の端緒を開いた。その話しは此に略するが、東北キリシタンの一結末として召捕れたパテレンの事を述べう。

仙臺パテレン第一、ペイトロ粕井は、先に述べた如く世界的冒險の後、日本に歸つて約十七八年東北で働いた後、江戸へ送られたが、拷問に逢つても最も頑强で、穴つるしにあひながら、他の人々を激勵しつつ死んだ。その時六十歳位であつたが、ゼスス會の最も熱情ある教師であつた。マルチノ式見は、之に反して比較的容易にころんで、間もなく病死した。その次に、詩庵といふのはジュアンバウチスタで、教會の記錄中、ポルロより外に之に當る人がない。その記錄では、最後どこかの村で、村人と共に燒死だとし、殉教には入らないが、日本側の記錄では、やはりころんで間もなく病死した。齡は六十三位であつた。以上三人ゼスス會のパテレンであつた。

仙臺パテレンのフランシスコはバラシヤス（Francisco Barajas）だと推定するが、慶長十九年に長崎に入込み、翌年京都から奥州へ出向したといふのが教會記錄の最後になつてゐる。それから東北に居たものとすれば、年月約二十年で仙臺で捕はれたのである。彼は拷問に屈せず、次にいふベルナルドと一緒に殺された。此のベルナルドはフランシスコ會員で先に述べた如くゼススのフランシスコと同作して寛永三年（1626）東北に來たものと推定するが、最後同十六年（1639）山形で捕へられ、井上筑後守の拷問に屈せず、バラシヤスと共に芝で火あぶりになり、江戸でのパテレン火刑の最後をなした。

此が表面記錄に表れた最後であるが、跡始末は、その後數十年つゞいたので、盛岡の管野氏が調べてをられる一關邊の類族調で見ても、寛政頃までは古切支丹五代の孫が存在してゐ、此の類の類族最後が人口六百の一村で寛政二年（1790）に三十一人あるのもある。即ち元祿享保頃にはまだ中々多かつたので、古切支丹は大體それまでに盡きたと見てよからう。（此等の事倘ほ同氏の研究を待つ）。

そこで跡始末の一面、潜伏教徒の生活について、先にも述べた鑛山との關係を述べやう。教徒が鑛夫として潜伏した事は、秋田の迫害中にも述べたが、此は南部領にも甚だ多かつた。例へば佐比内の金山で、寛永何年京都の丹波與十郎といふ者を技師にしたが、その率ひた千人の鑛夫の中にキリシタンがだ多か

つたといふ事は藩の記録にあり、その與十郎一味を追擊して召捕つたといふ傳說的地點が、佐比内の東、上閉伊郡鱒澤村にあり、而してその邊にはキリシタン暮らしいものがある。その他一ノ關地方の保呂羽（ホロワ）鐵山、大籠銅山、小友金山等は皆キリシタンが技術者であつたといふ傳說があり、又キリシタンが鎔鑛の「湯加減」を知つてゐたと傳へる。カルバリヨが逃げ込むだ下嵐江には今はないが（廢鑛はあるかもしれぬ）、當時は鑛山があつたといふ。此を佐渡、松前、伊豆の例に參照し、又述べた仙北地方の鑛山や、後にキリシタンの多く出た延澤（山形の北）山間の湯澤銀山などと併せ觀れば、迫害追究を受けたキリシタンが鑛山に入り、それを最後の隱場にしたといふ事は爭はれない。鑛山と同じく山間の村落も同樣であつたが、今一々列擧しない。只奇妙なのは、今の陸中の東岸地方の山村や、八甲田山附近の山間に、一向その形跡のない事である。然し此もなかつたのでなく、跡が堙滅したのか、若くは、今後尙ほ證跡が出てくるかも知れない。

尙ほ一つは陸中に多い念佛祕事法門との關聯である。先に秋田の項に述べた大眼宗もその一種だと考へられるが、起原が別であるにしても、あの場合には、外間者が大眼宗とキリシタンを混同してゐるのみならず、教徒の混合もあつたのである。然らば陸中地方の祕事法門は、その起原は分からぬにしても（門徒は自ら稱して蓮如から出たといふが）、キリシタンの中には、その中ににげ込むだ者がないとは限らぬ。祕事法門そのものが祕密であり、その起原歷史が全く不明であるから、此問題は何とも斷定が出來ない。只キリシタンがそれと聯絡した事はあり得る事態だといふに止める外ない。

總括して見るに、東北奧羽の切支丹宗門は、最も適確には慶長十九年（1614）の津輕流民から始まり、傳道、傳播、迫害の三巴戰を經て、最後寬永十五年（1638）のバテレン召捕に終つた。前後僅に二十五年、而かも最後は潛伏狀態であるから、寬永五年の米澤迫害を終の幕と見れば、前後僅に十五年。その間に働いた教師は二十人位であるが、それが殆ど盡く殉教の死を遂げ、信徒で斬罪、凍殺、火刑等の死を遂げた者は恐らく二千に近からう。迫害は元和六年（1620）仙臺藩のを始とし、同九年（1623）末の仙臺、次年（1624）夏の秋田地方に於ける迫害殺戮を中心とし、寬永五年末（1928—29）の米澤の迫害は、多くの立派な武士を亡きものにして、表面に現れる最後の幕を閉ぢた。

此を傳道活動の歷史として見れば、屢述べた如く流人訪問が傳道の端緒となり、ゼスス會の教師がアンゼリスのジロラモを

首長として京都江戸と連絡して布教に從事し、少し後にフランシスコ會はカルベスを首長として、同じく上方と江戸とに聯絡して活動した。上方は一番元ではあるが、策源地は段々江戸になり、而して兩會の首長は、共に元和九年（1623）江戸で花々しい火あぶりの最後を遂げた。最初の開教以來僅に十年目である。

江戸を策源地とした東北傳道は、又一方北陸特に佐渡の布教と聯絡してるが、それよりも重要な事は、松前並に奧蝦夷への布教並に探險が、津輕を足がゝりにして行はれた事である。此方面は永續的結果はなかつたにしても、兎に角、重要の事實で、日本北邊の探險と地圖製作はバテレンの手で行はれたのである。

傳播迫害二十年、總てを一掃した樣でも、先に述べた如く、寛永十九年（1642）になつてもまだ山中の捜索をやつてゐるのみならず、明暦三年（1657）までの宗門改記錄で見れば、その二十餘年間に秋田、盛岡、延澤、山形、米澤、仙臺、二本松、會津、白河諸處では多數の召捕が出たのである。此も信仰の粘着力を示す重要の事實である。

武者小路實篤著

最新刊

孤獨の魂

四六判上製

定價 金壹圓六拾錢

送料十八錢

武者氏の存在は日本の誇りだ。氏の抒情は恒にゲーテを突き、氏の氣魄は恒に石濤を覆ふ。而も奔放にして深き詩魂は遂ひに「孤獨の魂」「或る畫室の主」を得た。先きに「愛慾」を投じて一世の文人を驚倒せしめ、今またこの神品を物するに至りしは實に驚嘆の外ない。その珠玉の如く美しき筆致と、その氣韻の朗々さは誠に散文藝術至完のもの、今、本書を敢へて高く揭げ、江湖千載の青年に俟つ所以のものは繙讀數葉、自ら明らかなるであらう。

武者小路實篤著
愛慾
定價一圓六十錢 送料十八錢

武者小路實篤著
第三の隱者の運命
定價一圓九十錢 送料二十錢

武者小路實篤著
文學に志す人に
定價一圓三十錢 送料十八錢

武者小路實篤著
筆の向くまゝ
定價一圓十錢 送料十四錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

文藝雜感

武者小路實篤

今度も讀めなかつた理由

自分は今度は出來るだけいろ／＼のものをよんで批評しやうと思つたが、昨日まで自分の仕事に頭を奪はれてゐて他のものがよめなかつた。そして之からよみたいとも思つたが、どうしても今日原稿をわたしてくれと云はれてゐるので、どうにもよむ暇がないし、よし暇があつても、よみたい氣になれない。

文學は本來の性質上よみたい時によむべきものであつて、よみたくない時によむべきものではない。批評しなければならないと思つてゐはてゝよむのでは文學の眞の味はわからない。讀みたくない間は讀まないがいゝのである。文學は愛讀されるべきものであつて、愉讀されたり、いや／＼讀まれたり、職務的に讀まれたりして喜ぶものではない。

多くの批評家の最初のまちがいは、いや／＼職務的によむと云ふことにある。從つて心に餘裕がなく、嚙みしめることが出來ず、ながいものなぞをよまなければならないと先づ反感を感じる。それでは文學はわからない。

文學には誰にも讀んでくれと强要する資格もなく、又强要する必要もなく、愛讀者許りに愛讀される處に文學の特色がある。展覽會の畫とはちがう。御相伴に見られる必要はない。芝居になると少しちがう。しかしそれも自分のもの許

りやつてもらへるのだと別だが、他の多くのものとやられる時は、見たくない人にも見てもらはなければならないと云ふ不幸にお互に相遇する。しかしそれも本當に見たくなければ見ないですむ。

展覽會の畫でもつい目にふれるが、いやなものはゆつくり見る必要はない。又いやな畫を買つて自分の室にかける馬鹿はない。

食ひものだつて自分の嫌ひなものを食ふ必要はない方が仕合せだ。餓えては困るが、御馳走を食ひにゆく以上は嫌ひなものは注文しないですきなものだけ注文して食へばいゝ。

文學は性質上、讀むのに時間がかゝり、しかも相手の頭の動きに全然自分を從屬させなければよめないものだけ、なほ讀みたくない時はよめない。自分の頭が充實し切つてゐたり、何かに注意を奪はれてゐる時は他の人のかいたものはよめない。自分のものだつてよまない。

さう云ふ時に無理によんだつて、よむ方も迷惑だが、よまれる方も迷惑である。だから僕は自分のものを嫌ひな人がよんで何とか云つたつて問題にはしない。その人のためには他の文學があればいゝ。僕のものはその人のために存在の價値がなくとも、それはお互にやむを得ないことゝ思つてゐる。愛讀者が他にゐてくれるからそれでいゝと思つてゐる。他によし居なくとも、自分に確信さへあればいゝと思つてゐる。愛讀者は必ず出てくるものと思つてゐる。文學は愛される時に價値の出るものである。このことは藝術品のこの世に存在し得る、唯一の理由である。

だから自分は惡評許りの批評を尤と思つたことはない。それは僕のものを愛することの出來なかつた人が、讀まなくつていゝものをよんで見當ちがいなことを云つたに過ぎない。

作品によつて愛されゝば愛される程、自分の美點を示す作品と、いくら愛して見ても、美點をあまり見せない作品と

ある。後者の方が一般には歡迎されるが、自分は前者の方を尊敬する。前者はいつまでも愛し得るが、後者はすぐ鼻につく、すぐあきがくる。

だから自分も讀みたくない時には、よまない。よんだつてその作のいゝ處がわかるとは思はないからだ。心に餘裕が出來、なつかしくなり、よみたくなつた時、よめばいゝのが文學の一番ありがたい所と思ふ。一と月批評をおくらすともう讀む氣がしなかつたり、批評する氣がしなかつたりする作品はよむ必要のあまりない作品と思ふ。

批評について

批評をする時、いつも氣になるのは自分の感じてゐることが本當であるかと云ふことである。尤も非常にすぐれた作品にふれればそんなことはない。自分が夢中に愛してしまつた作品だつたら、誰がなんと云はうが、確信をもち、信仰をもつて、自分の感じを主張出來るが、さう云ふ作品に毎月ふれ得るとは思はない。どうでもいゝやうなことを云ふのでは面白くもないし、無責任でもある。云ひたくつてたまらないことだけ云ひたい。しかしさう云ふ氣持にさせてくれる作品は少ない。殊に自分のやうに自分の作品に追はれてゐるものは、滅多に出逢はない。

又齢のせいも手つだつてゐるせいか、何に見ても新鮮な氣持は中々しなくなつた。丸善なんかへ行つて見ても之はよみたいと思ふものには實に出逢はない。結局畫の本以外は滅多に買はない。もう少し氣持がおちついたら又よめるやうになるだらう。今が一番他の人のものゝよめない時かも知れない。

しかし自分のよめない云ひわけはその位いにして批評と云ふものが實にあてにならないことを知らされてゐる自分は、自分が批評するのも何となく不安である。

先日藤村の「嵐」の批評をかいたあと、いろ〳〵の批評を見たら、皆賞めてあつたので、自分も安心した。處が東京へ行つて園池公致に逢つたので、「藤村の嵐に感心した」と云ふ意味のことを云つた時、皮肉の隱居の匿名で白樺の六號を書いてゐた園池は言下に「僕はいやだつた」と云つたので、僕は少し參つてしまつた。

園池（兄貴の方）は一種のもの〻感じ方では志賀よりも鋭感な方面さへもつてゐる男だ。さう云はれると自分も體裁のいゝことだけを云つてゐたやうな氣が一寸した。しかしすぐそんなことはないと自分でうちけした。園池は「體裁のいゝことと切りかいてないのでいやだつた。新生もさうだつた。かいてないうらがあるやうに思ふ」と云ふ意味のことを云つた。

さう云はれると僕には園池のさう云ふ意味が思ひあたつた。しかし僕は其處が藤村らしい所であり、感心してもいゝ處だと私かに思ひ、そして自分の批評があやまりではないと思つて安心することにした。

つまり僕が考へたのは、園池とはちがうかも知れないが、藤村の親としての愛や本能の方が感じられずに、親としての責任觀や、義務心の方が何となく重くるしく感じられるのが、園池にはもの足りなかつたのではないかと思つた。そして藤村の態度は立派であるが、其處に不自然さを園池は感じ、僕は其處に藤村らしい努力さを感じ、藤村の自己を意識的に完成しやうとする辛捧強さに感心した。しかし同時にその本能的な愛が卒直に、無邪氣に生かされてない處から或る重くるしさを感じ、そして藤村の子供になることが大ギなやうな感じを殺すわけにはゆかなかつたのだと思ふ。

しかし嵐のやうな作でさへ、僕達の友人の内でも意見がまち〳〵であつた。まして僕の「ある畫室の主」なぞは一番賞めてくれた人と、一番惡口を云つてくれた人との差は隨分ちがつてゐた。そしてその中間が又適當な距離をおいて公平にちらばつてゐた。そしてどの人も自分の主觀を正しいと思ひ込んでゐた。あとで自分の批評をとりけした人も一人

あつたが。

批評と云ふものが一致しないと云ふことは決して惡いと許りは思はないが、批評する時にはなるべく正格に批評したく思ふので、自分とちがふ考へをもつ人があると、一寸ぞつとする。そしてその元因をはつ切りしないと一寸責任上不安である。自分のものが何とか云はれた場合はこの頃は笑つてすませるやうになれた。恐ろしい批評家がゐないせいかも知れない。

批評家として

自分は批評家として適當な人間とは思はない。しかし批評家として自分はしたい仕事はいくらでもある。自分は文學の價値を正當に評價したい。文學の仕事を買ひかぶりたくない。同時に縮少したくない。

文學の本來の性質をはつ切りしたい。

そして人間の生命のために働きたい。

文學は、たゞ經驗をかけばいゝものでは勿論ない。出來るだけ多くの人の生命に役立つことが必要だと思つてゐる。藝術のための藝術もつまりは、人間が面白がるための手段にすぎない。藝術が藝術を味はふのではなく、人間が藝術を味はふのだ。

人間が居なければ藝術は存在の價値を失なふ。人間以外のものが藝術をよろこぶにしても。たとへば動物が音樂をよろこぶやうに。しかしそれは動物をよろこばすためにつくられたものではない。殊に文學に至つては他の動物にはわかるわけはない。

人間の生命の要求なしに文學は生れ得ないのである。人間に本心の要求がなかつたら文學は存在する必要がない。人間はどんな時でも嘘では辛捧が出來ない。

或人は嘘でもいゝ本當らしくかけばいゝと云つたとする。僕はその反對のことを云ふ。嘘らしくつてもいゝ本當のことをかゝなければいけないと。

イッップ物語りには動物が人間らしく饒舌るやうにかいてある。そんなことはあり得ない。しかし書かれてゐることは本當のことが多い。だから我々もよんで興味をもつ。

いくら本物らしく果實がつくつてあつても、本物と同じ味はつくれないし、食ふわけにはゆかない。もしそれを本當の果實だと云つてわたされて食つたら、だまされたと思つて腹をたてるだらう。しかし其處に作品として藝術的な味が出てゐれば、いくら本當らしくない四角や八角の果實がつくつてあつても、我々は感心することが出來る。其處には何か、說明は出來ないでも、人間の心をよろこばすものがあるからだ。

人間の內心の要求を滿さない作品を自分は高く評價するわけにはゆかない。

文學の價値はその作の內に生てゐる生命の價値によつてきまると自分は思つてゐる。だからいくらうまくかけてゐても內味が貧弱では困る。又如何なる人格者や、大人物がかいたものでも、その人の精神が半分以上はみ出してゐたり、不隨筋や、タンコブの多い作品は價値はない。

作品の價値は作品の內に血が過不足なしに通つてゐ、そして生命が豐富さできまる。だからいくら多くのことを經驗した人でも、その人の內要が貧弱では仕方がない。同時にいくらその人の內容が豐富でも、それが經驗が貧弱で外に生る機會がなく眠つたまゝでは仕方がない。

經驗の豐富さは、內容の豐富さをあらゆる方面から生かし得る時、價値が生れる。だから大作はあるゆる境遇に主人公をとし入れて、その人の生命のあらゆる姿を生かす。

大事なのは人間の生命のうちにかくされた寶を出來るだけ多く外氣にふれさし、讀者に見せることだ。勿論その寶は數でこなすよりは、より深い寶を一つでも見せる方が價値がある。

自分は人間の生命の內に藏されてゐる寶を批評する時は、作品のうちからさがし出してお目にかけたい。作品の價値を示すよりは、作品を通して人間の價値をしめしたい。しかしさう云ふ批評をすることを許してくれる作品に每月お目にかゝれるかどうか。又さう云ふ作品があつても自分はよむ機會がないかも知れない。

自分が日本の作品の多くにあきたらないのは、人生にとつて大事な寶にふれることが少なすぎることだ。たまに見せられても、それは人生上に役に立たせやうとすると鍍金だつたことがわかつたりしては困る。

人間の心の內にある寶。そんなものはないと云ふかも知れない。しかしそれは海岸で砂をひろつて見てこの內に砂金がないから、砂金なんて云ふものはないものだと云ふのにひとしい。さう滅多に落ちてゐないからと云つて、ないとは云へない。

しかし文學は宗教や、道徳や、哲學とはちがう。だからさう云ふ寶が露骨になくとも、我々がよんで、心が生々して來、愉快になつて來、藝術的な喜びを感じ得れば、それで立派に藝術品たり得る。そしてその作品は又人類の寶にもなり得る。玉のやうなものであつて實踐的道徳には役に立たないでも、我等の心に愛をよびさます力があればいゝ。

しかしさう云ふ作品を批評するのに僕は適してゐるか、どうかはわからない。たゞ自分は愛するものは愛すると云ひたい。

畫なんか見てゐて、何故いゝか說明が出來ないでもたまらなくいゝものがある。何とか說明つければつくだらうが、それではもの足りない。自分はさう云ふ感じも尊敬したい。

僕は文學の價値を、材料によつてきめたくない。たとへば太陽は誰でもかける。乞食も誰でもかける。しかしつまらない畫はつまらない。花をかけばいつも美しいとはかぎらない。文學でも同じことが云へる。材料によつて生かされるものはちがうが、生たものが下らなくつては仕方がない。

それらのことはたゞ口で云つてもわからない。いつか作品を借りて一言して見やう。

しかし物指が大きすぎるのもよしあしである。しかし自分は日本に本當にすぐれた作品がやがて生れ出すことを信じたい

夏目さんの「我輩は猫である」をよみ出した時、西洋にもこんな作は滅多にないだらうと思つた。自分は西洋の下らない作を日本人が感心してゐるのを往々見て、日本にだつてもつといゝものがあると思ふが、しかし日本の文壇はまだ若すぎる。之からの人が決心づよく生れてくることをのぞんでゐる。一寸位いの感心のされ方では滿足してはならないのは云ふまでもない。

同時に我々はもう西洋人のおともをする時はすぎたやうに思ふ。西洋人が行かうと思つてゆけなかつた所に我々は一歩すゝまなければならない。西洋人によつてなされた仕事は人類によつてすでになされた仕事だ。我々は世界にとつての田舍者であつてはならない。彼等に求められない、彼等で滿足出來ない處にふみ出さなければならない。彼等がやりかけてやれない處を一步進まねばならない。

面白い時は之からと思ふ。

自分のこと

自分はいろ〳〵のことで自分の家の生活以外に千圓許りの金を毎月つくる義務を負はされてゐる。自分で好きで負つたのだが。新しき村の爲許りではない。出來たらもう少し新しき村の爲にも金をとりたいと思つてゐるが、手一ぱいすぎてやゝもすると借金がふへる。

自分の家でも何かと三百圓以上かゝる。之は耻かしいと思つてゐる。他で儉約は出來ないでもせめて自分の處では三百圓以内にしたいが、税なんかも中々とられるし、二人の子供に仕事の邪魔をされないために二人女中をおいてゐる。之は贅澤だが二人ともよろこんでゐてくれて斷れない。最近又一人新子が赤坊の時村で世話になつた女の人が、日向からくることになつてゐる。之も向ふで來たがつてゐるので何となしに來てもらうことにした。しかし今月から出來るだけ儉約するつもりだが。家賃に六十圓とられ、所得税だけで三月に一ぺんだが六十九圓五十何錢とられ、その上いろいろの税をとられるから一寸三百圓よりへらせさうもない。好きな畫もかはず、小遣も出來るだけつかはない決心してゐるから大目に見ることに自分でしてゐる。それ以上儉約するよりは、それ以上働く方針にしてゐる。五十圓儉約するよりは六十圓もうける方がいゝと云ふ方針でやつてゐる。

これで毎月金をとるのに一苦勞である。それで志賀は大いに同情してくれ、いろ〳〵考へた結果金のことは僕に任せては駄目だと云ふことになつた。なぜかと云ふと一寸無心をされたり、金の入用な人があつたりすると、僕は二三枚原稿をかけばいゝ、五六枚原稿をかけばいゝと云ふ氣についなつて、あとで困るくせがあるから。

それで今後、僕は禁治産見たやうなことにして金の方は一切大阪の茶谷君と云ふ友人に任せ、そして志賀が後見して

くれるやうになつた。其處で僕もいくらか安心出來るが、あと一年位いは、相變らず多作をする必要がありさうだ。しかし今迄よりは少しづゝよくなるつもりだ。借金も少しづゝかへせるやうになり、うまくいつたら、仕事をよくした時は奬勵に誰でも買へるやうにしたく思つてゐる。一二年の内には新しき村も自活が出來ると思ふ。さうしたら一月五十枚も原稿をかくか本を一冊でも出せばのう〳〵してゐられる。先月は芝居の金が入つたので一ヶ月近かく呑氣にしてゐた。

しかし僕は多作はするが、かく時だけは全力はつくしてゐるつもりだ。

こんなことは云はない方がいゝかと思ふが好んで多作をしてゐるわけではない。今後一二年たてば僕は金のために仕事をしないでいゝ身分になれると思つてゐる。今の內にかいておく。今後金のことは一切僕は監督づきだから、今迄約束した以外の金は僕一人の勝手にはならないことにしたことを一寸一言する。憎まれ役は志賀が引きうけると云つてくれてゐる。厄介な男だ。

金さへあれば新しき村の仕事は來年こそ本當に一通り完成出來るのだが、しかし遲かれ早かれ村はものになる。人間の方は實によくいつてゐる。しかし金のないこともわるいこと許りではないと思つてゐる。兎も角皆一生懸命になれるから。

平和な生活

自分は實に平和な靜かな生活をしてゐる。奈良の秋は中々いゝ。先日から近所の寺や、佛像を見てあるき出した。實にすぐれたものがある。どうして今の日本の彫刻にはひどいものが多いのだらうと思ふ。いゝ人も少しはゐるのだらうが、ひどいのが多すぎるのだと思ふ。いゝ彫刻家が日本に出てくれると實にいゝと思ふ。今の日本人のいゝ彫刻が實に見たい。ブルデルやマイヨールのゐるフランスは羨やましい。

文學者

文學者も、眞劍になつていゝ時だと思ふ。眞劍にならないでは生きられないのは苦しいが、しかし腹の底に眞劍な氣持をもつて、そして日本人獨特なほがらかさと、呑氣さをもつて悠々と仕事をしてゆきたい。毎月々々いゝものをかくのは無理と思ふが、しかし全力的な仕事をおちついてやつてゆくことは必要と思ふ。おちついて仕事をしてゐる點で藤村は手本にしていゝ人と思ふ。しかしもう少し積極的な人が出てくれるといゝ。長與が病氣をしてゐるのは惜しい。半年許り仕事が出來ないさうだが、なほつたらなほ進むことゝ思ふ。志賀は來年は大いに働くつもりでゐる。僕もやれるだけはやるつもりだ。他の人のことは知らないが、皆鼻息だけの仕事はやつてくれると思ふ。そろ／＼日本も面白い大ものが出て來さうに思ふ。

色魔について

僕は合評と云ふものに尊敬を拂へないものだ、自分も二度程合評の席に出たことがあるが、自分の云ひたいことを云ふ機會がなかつたり云ひたくないことをつい云つてしまつたり、半分切り云はない内に他の人に邪魔されたりして、あとでどうも心のこりなことが多い。あゝ云へばよかつたとか、あんなことは云はないでもよかつたとか、一番大事なことを云はなかつたとか、そして筆記したものを見ると、自分の言葉のあいまいさは巧みになくなされてゐて安心することもあるがそれだけ、云つたことがせまくなつたり、あさくなつたり、大事な所がぬけたりする。だから他の人の場合もさう云ふことがあるだらうと思ふ。だから合評の言葉について何か云ふのはいやだが、僕が天才や色魔は何をしても

いゝやうに思つてゐると、とんでもないことを云つてゐる人があるのを見ると一寸何か云ひたくなる。之は何か大事なことがぬけてゐると思ふ。天才は色魔であつてもいゝと云ふ意味ならまだわかる。しかし色魔は何をしてもいゝと僕が思つてゐるとはまさかその人も云つたのではあるまい。しかし僕自身は天才は色魔であつていゝなぞとはまるで思つてゐない。天才と色魔とは別にして、色魔であつても天才だつたら、天才の方面だけは自分は認めるものだが天才は色魔であつていゝなぞとは、僕は思つてゐないし「書室の主」の主人公だつて思つてゐない。むしろそれにひつかゝりすぎてゐるのがいけないのだ。辯解する必要はないと思ふが變なよみ方をする男もあるのにはおどろいた。

僕は正直云つて色魔は嫌ひだ。誰もすきな人はあるまい、當人だつて好きではあるまい。殊に若い人間で放蕩家の感じのする男を電車の內で時々見るが實に不愉快なものである。

僕自身、藝者や娼妓や淫賣婦や酒や烟草のない世界に生活をしてゐる。それ等のものが地上からなくなつても一向困らない。あつても一向交渉がない。四十二までさう云ふ世界と沒交渉で來た。尤も之は色魔でない證據にもならないし、又自慢すべきことでもない。むしろ僕は若い時にもう少し女を知つてゐた方がよかつたかと思ふ。さうすれば今の自分はもつと性慾とは戰はずにすめたらう、愛慾風なものはかゝずにすめたらうと思ふ。

自分は若い僧侶のかいた憧憬的エロチックなものをよむといやな氣がする。あまり禁慾を强いられてゐるものゝエロチックの臭はいやなものである。寧ろ思ひ切つて實行する方がいゝ位いに思ふ。

しかし早く父を失ない、嚴格な母につましく育てられて來た自分はとう／＼さう云ふ世界と一生交渉なしにすむことになりさうだ。僕は規則正しい生活、朝は仕事、午後は散歩か、友を訪問、夕方歸つて上の赤坊をねかしながら自分も八時か九時にねる生活が、自分には一番ふさはしい。時に演說しに出かけて夜おそくなつたり、活動も月に一度か二度

見にゆくがそれもすめば急いで歸る。僕の生活はそれで至極平和だ。時に浮氣の衝動が起りかけるが實行する機會は何年かない。

時々今でも四角關係と云ふ言葉をきくといやな氣がするが、二人と二人になつたのだから僕達の關係は四角ではない。たゞ法律上離緣の方法をとらないのと、今でも男子を赤の他人とは思はず、不幸には斷じてしたくないと思つてゐるだけだ。よろこばせたいと本當に思つてゐる。友人の幸福をのぞむのとちがいない。僕はむしろ一度夫婦だつたものが、さつぱり赤の他人になれる人の方が不自然でもあり、不道德でもあると思つてゐる。一人で二人づゝ肉交してゐるのならそれは氣持がわるいのは當然だ。僕達の間はさうではない。だから自分は自分を色魔とは思つてゐない。その素質が自分にもあり得ることは自分は否定出來ないが。

男女がすべてがもつと健全になり、こだわらず、またいぢけず、いやしくならず、そしてお互がごく自由に無邪氣にあそべる時がいつかくるかと思ふ。僕はその時が來たら、男女の關係を重大視する必要はなく、當人に任せておけばいいと思つてゐる。

しかし色魔や、放蕩者には僕は厚意はもつてない。それ等の人の他の美點は十分認めたいと思ふがその點だけは是認出來ない。

自分は英次を色魔だとは思つてゐない。しかし英次自身が自分を色魔だと思つてゐることには自分はむしろ敬意を示したいと思つてゐる。

天才と云ふ言葉も自分の口から出れば他の人は笑ひたくなる言葉だ。しかし英次があの場合、生てゆくには自分は天才かも知れないと云ふはかない希望が唯一の力となつたのである。人殺しを僕が是認してゐないのは云ふまでもない。

蜜室の主の主人公の英次は人を殺さず、女に自由を與へたことをせめてもの傲りとしてゐる、あはれな男と思つてゐる。

僕は地上における孤獨な男が死なずに生てゆく氣持がかきたかつたのだ。

僕自身は仕合せものすぎるのを感謝しながら。

一體自分があまりに淋しい時には淋しいものはかけない。僕は失戀して三年たつて始めてその胸の傷にふれてそれを材料にして短かいものをかいたが、二三枚かくと參つた。本當におちついてかけるやうになつたのはそれから十年後結婚してからだつた。

今の自分は昔の自分とはちがうが、しかしかくものは自分の經驗し得ることよりも、むしろ今後のいましめや、自分の内に解放されたがつて解放される機會のないものを解放するためだ。その時一番創作力が生れる。

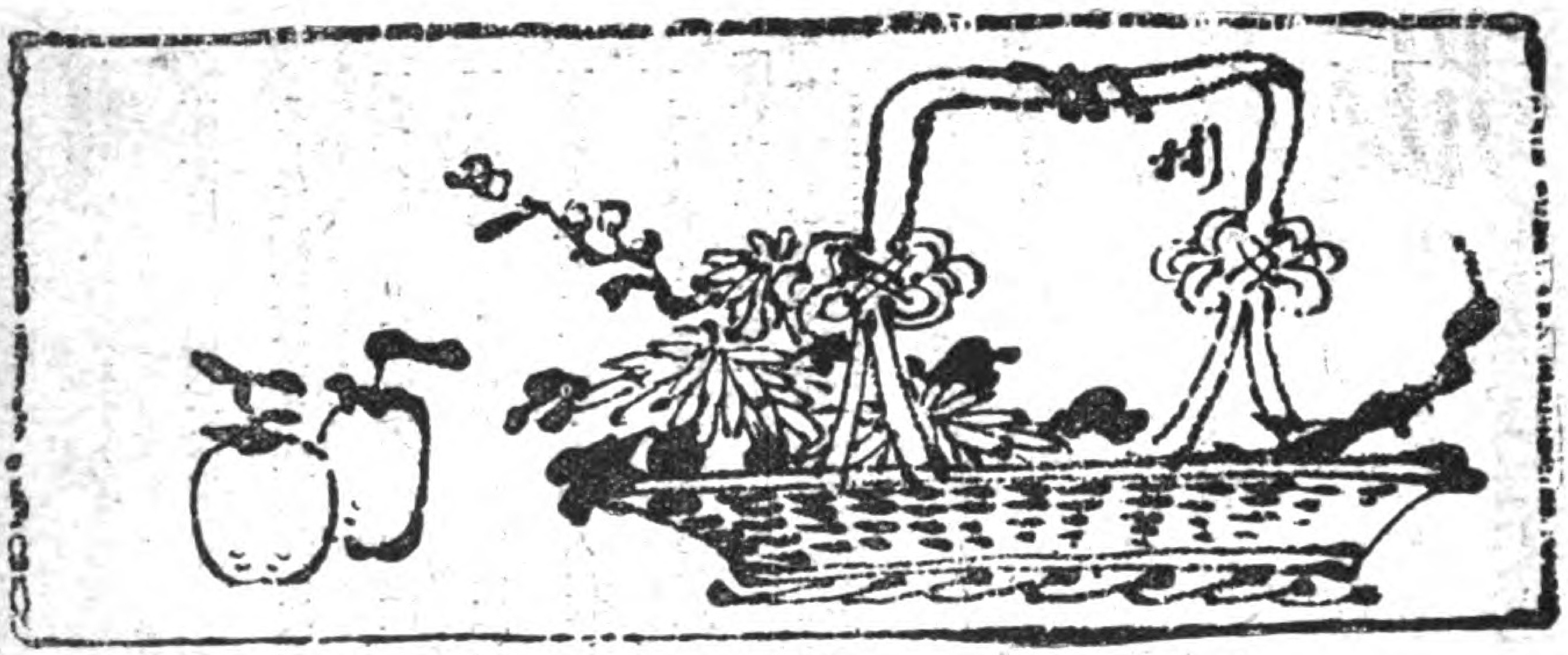
尤も僕のものを非難した人は自分の經驗した以外のことをかくのはわるいことのやうに思つてゐる人かと思ふ。その人の名を上げないのは禮を失してゐるかとも思ふが、しかし合評會の即席的一言をとりあげて責任きせていゝかどうかがわからないからである。

責任をきせていゝのならあらためて何かかくことにする。しかしかく必要もないやうに自分は思ふ。

僕は平和な清淨な生活を最上のものと思つてゐる。だが女をつくつたものは惡魔でなく、神であると思つてゐる。たゞ愛情や、性慾は無責任に生かすべきものではなく、むしろつゝしむことで更に美しく生るものと思つてゐる。

しかしそれにしても女の裸體の美なぞを賤しいものとせず、健全なものとして、別に性慾のことを思はずに味はへるやうにする方がいゝやうに僕は思ふ。それには健全な裸體の美をあらはした活動寫眞なんかは公開する方が反つていゝと思ふ。裸體の彫刻や畫で性的刺戟はもう誰もうけないだらうと思ふ。よしうけても、そのうけ方は害のない程度と思ふ。多數で健全に、平氣で見ることが出來る時危險性はないと思ふ。あつてもそれはすぐとほり越して、より健全な世界に入り、つまらぬ處にひつかゝらずにすむと思ふ。

下等な意識の入つたものは困るのは尤もであるが。（二六、一〇、一〇）



暗夜行路（續篇）

志賀直哉

一

謙作は其冬、初めての兒を失ひ、前年とは全（まる）で異つた心持で、此春を過ごして來た。都踊も八重櫻も、去年はその儘樂めたが、此春はそれらの奧に何か不思議な淋しさのある事が感ぜられてならなかつた。

彼は今後に尙何人かの兒を豫想はしてゐる。然しあの子供はもう永遠に還つては來ないと思ふと、その實感で淋しくさせられるのだ。次の兒が眼の前に現れて來れば、此感情も和らげられるに違ひない。が、その時までは死んだ兒から想ひを脊向ける事は出來なかつた。

散々になやまされ、しかも、それが何から來るか分らなかつた自身の暗い運命、それを漸く拔け出し、これから新しい生活に踏出さうと言ふ矢先だけに此事は甚くこたえた。丹毒は豫防しようもない。寧ろ偶然の災難だ。普通ならばさう思つて諦める所を、彼は偶然なこと故に却つてそれが何かの故意のやう考へられるのだ。僻み根性

だ。自らさう戒めもするが、直ぐ、とばかりも言へないといふ氣が湧いて來る。彼はかういふ自身に嫌悪を感じた。然しさういふ自分をどうする事も出來なかつた。

直子は思ひ出してはよく涙を流した。それを見るのが彼はいやだつた。そして殊更ひき入れられない態度を見せてゐると、

「貴方は割りにお平氣なのね」と直子は怨言を云つた。

「いつまで、くよ〳〵してたつて仕方がない」

「さうよ。だから私も他人には涙を見せないつもりですけど、仕方がないで忘れて了つちやあ、直謙に可哀想よ」

「まあいゝ」謙作は不愉快さうに言ふ。「あなたはそれでいゝよ。然しこつちまで一緒にそんな氣になるのは御免だ。實際仕方がないぢやあないか」

「…………」

「それより僕は近頃お榮さんの事が少し心配になつて來たんだ。此方には全で便りを寄越さないし、前の關係から言つて信さんに任せつきりといふわけには行かないから、その内一度朝鮮へ行つて來ようと思ふんだ」

直子は一寸點頭いたまゝ、返事をしなかつた。少時して謙作は、

「その間、あなたは敦賀へ行つてゐないか」と言つた。

「泣言でもいひに行くやうでいやあね」

「泣言を言つて來ればいゝぢやないか」

「これがいやなの。貴方にならいゝけど、實家の者にもそれは言ひたくないの」

「何故。……一緒に行つてあなたゞけ置いて來よう」

「いゝえ、結構。どうせ、十日か半月位なら仙と二人でお留守番してゝよ。あんまり淋しいやうだつたら、その時勝手に一人で出かけるわ」

「それが出來れば一番いゝ。家で悲觀してゐるやうだと、こつちも旅へ出て氣が樂でないからね」

然しこんな事を言ひながら謙作は却々出かけられなかつた。西は嚴島より先を知らなかつた。それで京城までが甚く大旅行のやう思はれ、臆劫だつた。一つはお榮の方にも差迫つてどうといふ事もなかつたから、出掛けるにも氣持に踏みきりがつかなかつた。

直子が出來、お榮に對する彼の氣持が幾らか變化したのは事實だつた。が、少年時代から世話になつた關係を想ひ、又、一時的にしろお榮への一種の心持――今から思へば病的とも感ぜられるが、兎に角結婚まで申込んだ事を考へると、差迫つた事がないとしても、かう具圖々々、ほつて置く事が、如何にも自分の冷淡からのやう思はれ、心苦しかつた。

或日、鎌倉の信行から書留で手紙が屆いた。それに信行宛のお榮の手紙が同封してあつた。

不愉快な出來事から、最近、警部の家を出て、今は表記の宿で暮らして居ります。私もほと／＼自分の馬鹿には呆れました。此年になり、生活の方針たゝず、その都度お手賴りするのは本統にお耻かしい次第ですが、他に身寄りもなく、偶々力になつて貰へると思つたお才さんは私が思つたやうな人でなく、どうしても、又お願ひするよりムいません。

精しい事情はこゝで申上げません。又申上げられるやうな事でもムいません。私は一日も早く内地に歸りたく、その

心で今は一杯でムいます。

こんな意味だつた。つまり宿の拂ひと旅費を送つて貰ひたいと言ふのだ。謙作は讀みながら、信行の手紙にも一寸書いてあつたやうに、前には大連で盗難に會ひ、直ぐ歸るやう、金を送つても歸らず、勝手に京城に行き、今、又そんな事を言つて金を請求して來る。若しかしたら殖民地らしい不檢束な生活から、變な男でも出來、それが背後で糸を引いてゐるのではないかしらといふやうな疑問も起こつた。

謙作は一緒に暮らして居た頃のお榮を想ふと、かういふ推察は不愉快だつた。然し、又、病的にもしろ、自分がさういふ感情を持つたお榮にけ何か未ださういふ誘惑を人に感じさせるものが殘つてゐるに違ひなく、且つ話に聞いたお榮の過去が過去であるだけ、此推察も必ずしもあり得ないとは思へなかつた。お榮が精しい事情を書かない點からも何か色情の上の出來事らしく感ぜられた。

信行も、今度は行つて連れて來るより仕方あるまいと書いて來た。

その日はもう銀行が間に合はないので、彼は翌晩の特急でたつ事にし、その事を京城と鎌倉とに電報で知らせた。

二

お榮の天津での失敗はお才に騙されたとは言へないまでも、わざ〳〵金を持つて內地から出掛けた者に對し、それを勸めたお才としては、やり方が少し無責任だつた。惡氣はないにしても親切氣がなかつた。お才も後で此事は幾らか氣になつたらしく、お榮が大連へ引きあげてからも再三、手紙で、又來るやう勸めて來た。が、お榮はもうお才を信じなかつた。假りにさう勸めて吳れる親切は信じられても、それがどれだけ續くか、信じられなかつた。お榮はその度、

當り障りのない文句で斷つた。

鐵嶺ホテルの女あるじ、増田といふのは、男まさりのしつかり者だといふ噂はお榮も嘗てお才から聞いてゐたが、此女が最近土地の檢番と喧嘩し、一つは意地から自力で別に檢番を作る事にし、前から多少知合ひだつたお才へ手紙でその事をいつて寄越した。お才はそれを直ぐお榮の方へ知らして來た。

四五人の藝者に間に合ふだけの衣裳を持ち、それをもとでに何處かで藝者屋を開かうとしてゐるお榮には、實にこれは渡りに船の話だつた。勿論二つ返事で乘つて來るものとお才は思つてゐるに違ひなかつたが、お榮はそれも斷つて了つた。

これが大連とか京城とかの話ならば嬉しいのだが、近頃のやうに病氣をしてゐると一層氣が弱くなり、鐵嶺まで入込んで行くのが、益々內地と緣遠くなるやうで心細い。折角の親切を無にするやうだが、鐵嶺へは行きたくない。そして此大連も今の所いゝ話もなさゝうなので、そのうち京城へ行かうと思ふ。少しでも內地に近づきたく、若し京城の方にいゝ話でもあつたら、其時は是非知らして貰ひたい、と書いた。

その後又お才から、若し京城に行くなら警部で野村宗一と云ふ知人がある。それに賴めば萬事便宜を計つて呉れるだらう。若し行く場合は此方から手紙を出して置かうと言つて來た。

お榮は早速その手紙を出して貰ふ事を賴んだが、隔日に瘧の發作が來、鹽酸キニーネで漸く治めてゐる時で旅行は未だ暫くは出來さうもなかつた。そして具圖々々してゐる內に盜難に合ひ、唯一つのもとでとしてゐた藝者の衣裳幾行李かを荷作りのまゝそつくり持つて行かれて了つたのである。

お榮は其時落膽もしたが、何んとなく淸々した氣持にもなつた。もう內地に歸るより仕方なく、信行に賴んで旅費を

送つて貰ひ、直ぐ歸るつもりだつたが、もう再び來る事はないと思ふと、少しは見物もしたく、朝鮮を廻つて歸る事にした。一つは船の長いのもいやだつた。

十月に入つて病氣は余程よくなつた。お榮は豫定の如く朝鮮を廻り、京城まで來たが、お才の手紙にあつた野村宗一を訪ねると「內地に歸つていい仕事でもあるんなら別だが、此所でもう一度商賣をして見たらどうです、」と勸められた。

警部の野村が何故こんな事を云つたかよく分らない。仕舞に腕力でお榮を自由にしようとした、その下心が其時からあつたのか、或は單に輕い親切氣からそんな風に勸め、同居してゐる內にさういふ氣になつたのか、お榮の話では謙作には見當がつかなかつた。が、兎に角お榮はそれで又其所へ腰を下ろして了つたのだ。

「食料は拂つてゐたんですけど、兎に角厄介になつてゐると思ふから、町のお使もなるべく私が行くやうにしてましたし――京子といふ五つになる女の兒があつて、小母さん小母さんつてよく懷いてゐるもんですから、私も可愛くなつて、お使の時はいつでも連れてつて、翫具（おもちや）やお菓子なんか買つてやつてたんですけど、それがどうでせう。――野村がおかみさんの留守に私に變な事をしようとして、仕舞ひには腕づくでかかつて來たから、私は野村を突飛ばしてやつたんです。すると、丁度其所へ入つて來た京子が、何んにも分らない癖に、小母ちやん、馬鹿々々、畜生々々つて泣きながら二尺差しを持つて私をぶちに來るんです。それが一生懸命なの。其時は私も何んだか、情けなくなつて涙が出ましたわ。あんなに可愛がつてやり、むかうもよく懷いてゐて矢張り他人は他人ですわね。さういふ時には本氣になつて親の加勢をしようとするの。腹が立つやら、可笑しいやら、情けないやら……。でも親子といふものはいいものだと私は自分がその味を知らないせいか、つくづくさう思ひましたよ」

お榮は自分の年にも耻ぢたし、よくして呉れる野村の妻にも氣の毒で、事を荒立てる氣にはならなかつた。そして翌日なるべく穩やかに此家を去つた。

謙作はお榮の話を聽きながら何んとなく愉快でなかつた。近頃の自分の生活とは折り合はぬ調子が氣持をかき亂した。彼は放蕩をしてゐた頃にも、さういふ場所の空氣に半日以上浸つてゐると、いつも息苦しくなり、憂欝になり、もつと廣々した所で澄んだ空氣を吸ひたいといふ慾望にかられた。今彼は丁度さういふ氣持になつた。切りと京都の家――直子の事が想はれた。

彼はお榮が不檢束者になつてゐなかつた事を嬉しく思つた。要するに、いゝ人なのだ、只人間にしつかりした所がなく、その時々の境遇に押流されるのが不可いのだ、と思つた。さういふお榮を一人放してやつた自分が無責任だつたとも顧られた。

嘗つて彼はお榮の止めるのも諾かず、一人尾の道に行き、幾月かして、からだも精神もヘト〳〵になつて歸つて來た時、お榮から「痩せましたよ。もう、これから、そんな遠くへ一人で行くのはおやめですね」と云はれた

その同じ言葉を今彼はお榮に云つてやりたかつた。そして彼はそれを彼自身の言葉で云つた。

「貴女は馬鹿ですよ、少しも自分を知らないんだ。一本立ちでやつて行かうなんて、柄でもない考へを起こしたのが間違ひの元ですよ」

然しお榮の將來をどうしていゝか、彼には分らなかつた。自分が結婚を申込んだといふ事さへなければ、當然自家へひき取り、一緒に暮らしたかつた。又、その事があつたとしても直子が意に介さないなら、さうしたかつた。然し少しでも直子がそれに拘泥するやうなら、乾度面白くない事が起りさうだ。多少でもさういふ點で絶えず直子が何か思ふや

うなら、それは避けねばならぬ事だと考へた。

謙作は朝鮮では余り歩かなかつた。開城から平壤へ一泊で出かけた以外は、或る晴れた日、お榮と清凉里の尼寺に精進料理を食ひに行つた位のものだつた。途中山の淸水の湧いてゐる所で朝鮮人の家族がピクニツクをしてゐるのを見かけた。白髯の老人が何か話してゐる、周りの人々が靜かにそれに聽入つてゐる、長い物語でもしてゐるらしかつた。昔ながらの風俗らしく、見る者に何か親しい感じを與へた。

南山から北漢山を望んだ景色が好きで彼は二度其所へ出かけて行つた。景福宮、昌德宮、それから夜は一人で鍾路の夜店あさりをした。古い螺鈿の鏡台があり、欲しかつたが、毀はれてゐる割りに値が高かつた。彼は美しい角皮張りの文函を直子の爲に求めた。これも今出來でなく、いゝ味があつた。

平壤への汽車の中で、彼は高麗燒の窯跡を廻つてゐるその方の研究家と一緒になり、色々さういふ話を聽いた。謙作とは殆んど同年輩の人だつたが、話しぶりにも老成した所があり、朝鮮統治などにも一とかどの意見を持つてゐた。

謙作は此人から或る不逞鮮人の話を聞いた。関德元といふ若い兩班で、その地方では相當勢力のある金持だつたが、鐵道布設の計劃で、その方の役人から相談を受け、一手に敷地の買占を引きうけた。

絶對秘密で、安く買上げるつもりだつたが自分の土地は總て抵當とし、親類緣者も金の出る所は總て出さし、益々買占めの手を擴げて行く内に何時か此噂も評判になつて了つた。

人々は関德元を裏切者として憎んだ。然し彼は自分は單に親日主義者なのだといつてゐた所で、いよ〳〵鐵道敷地の買上げが始まつて見ると、それは関德元が役人から指定され、買占めて置いた土地とは三里も四里も離れた所だつた。布設計劃が何時の間にか變更されてゐたのだ。関はそれを少しも知らなかつた。前に相談

を持込んだ役人がそれを閔に教へなかつたのだ。其役人も好んで閔を窮地に陷れる氣ではなかつたが、勸めた手前、既にかなり買占めの出來た閔にそれが打明けにく〻なつたに違ひない。

然し閔にとつてはこれは甚い打擊だつた。自分が無一物になつたばかりでなく、親類緣者からも甚く怨まれ、土地の者からは裏切者のい〻見せしめとして笑はれた。立場が全くなくなつた。役人の言葉を簡單に信じた所に自分の手落ちはあるにしても、そちらから勸めて來た話である以上、此行違ひに對し、誰れか責任を持ち、どうかして呉れる者があつてもい〻筈だ。見す〳〵自分一人が見殺しにされる。閔は此事をいつて再三再四、總督府に談判した。然し誰れも取りあつてくれる者はなかつた。責任者を出してくれといつても、勸めた役人は今は內地に還つてゐないといふ風で、その眞僞は別として、彼に對し氣の毒だつたといふだけの誠意さえも見せなかつた。閔が此不合理に就いて熱すれば熱する程、役人の方は冷めたく取扱つた。そしてそれ以上に熱するやうなら不逞鮮人と認めるやうな氣配さえ見せた。結局閔は泣寢入りより仕方がなかつた。

その后、一二年して、閔德元は札つきの不逞鮮人になつた。彼は何かの意味で日本に復讐してやらうと決心した。朝鮮の獨立といふ程の事は彼には考へられなかつた。それは殆ど不可能な事に思へてゐたし、その夢想は彼にはなかつたが、それより彼では自分から總ての物を奪つて了つた者に對する復讐だ。絕望的な復讐心だつた。彼は近年あらゆる悪い事に關係してゐた。

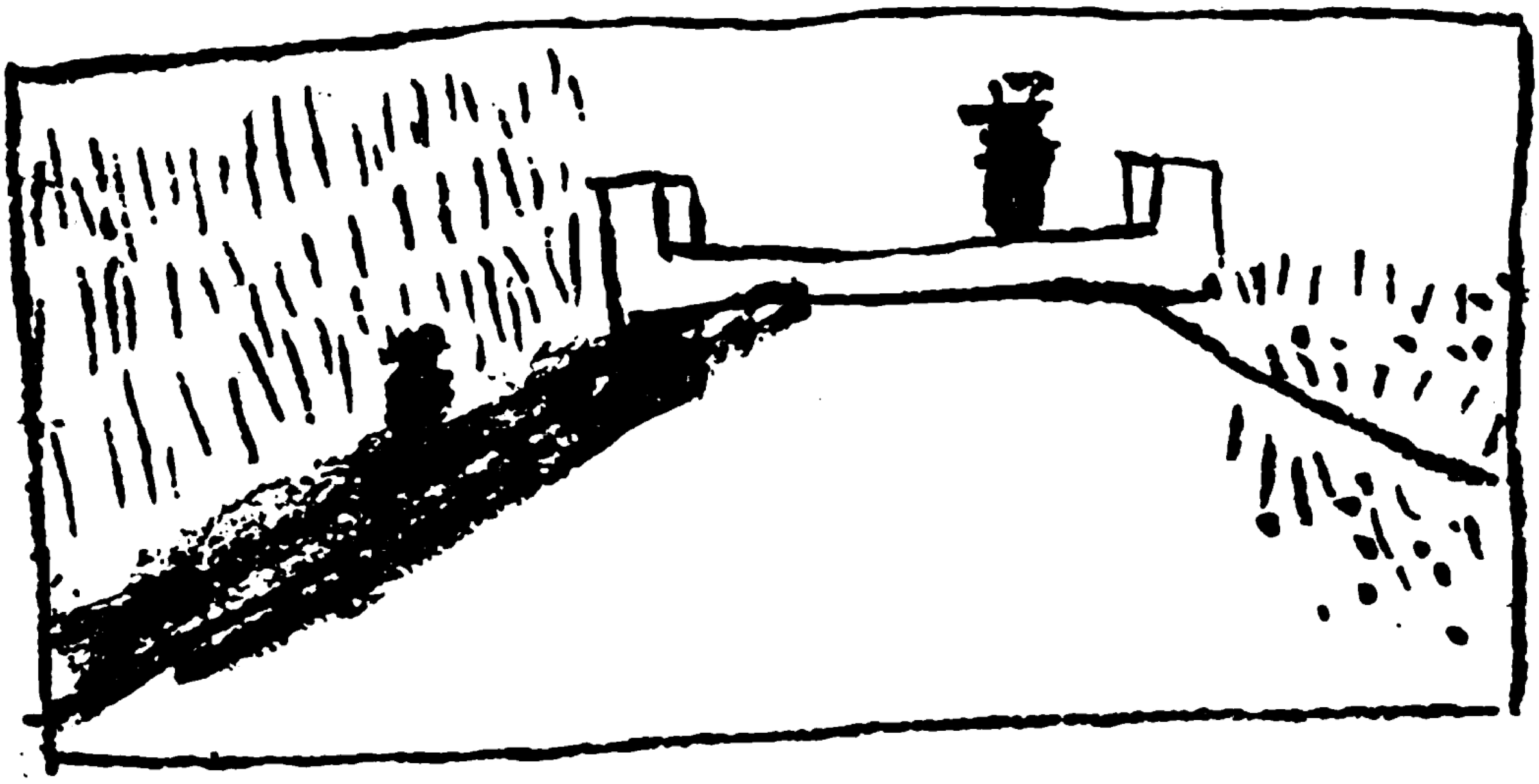
「多分此間死刑になつた筈ですが、四五年前例の案內探しで、案內して貰つた時など、何んだか非常に靜かでそんなにならうとは夢にも思へないやうな若者でした」

（未完）

又「暗夜行路」を書き續ける事にした。長篇は自分の柄でない氣もするが、短かいものばかり書いてゐると、時々は長い物にも手がつけて見たくなる。それに「暗夜行路」も話としてはまだ大分先があり、或る機會にそれだけ書上げて置かないと、何時までもそれにつきまとはれさうで漸々出來ない。

話、そのものは現在新しく筋立すればかういふ風になるかどうか分からないが、三四年前よりは現在の自分の方が主人公と氣持が一緒になれさうで、その點は樂みだ。

此月は余り書けなかつたが、前からの約束で此月から出し始めた。長いものゝ初めとしては景氣が悪いが、さういふ事にはなるべく拘泥せず、やつて行くつもりである。（作者）



喧嘩三昧

（この一篇を林倭衛におくる）

岡田三郎

一

はじめ、ただいたづらな相撲とばかり見てゐたのに、いつとなく森と小谷の二人は眞劍に組みあつてゐるらしいのを、傍觀者の一人、岡野は、遠く廣場の周圍から來る蒼白い街燈の光にも知ることができた。

森は、ともすれば上背のある小谷にひねられさうになり、二度も危ふく踏みこたえたが、そのたびごと、混凝土でかためた廣場に二人の靴音が、無氣味にいりまざりながら鳴りわたつた。

岡野は、廣場の奧にそそりたつノートルダム寺院から、その靴音の反響をきくやうな氣さへした。それを機會に彼は、自分一人だけの、自由な、他にかかはりのない、のびのびした氣持を樂しまうと思ひついた。半圓狀をなして相撲を見てゐる同

國人の群を離れ、寺院に面し、ほのあをく色づけられた夜のうすものをとほして、あの、星くづにみちた夜空をかざる濃藍紫色の高い塔の頂邊を、心ゆくばかりに岡野は見あげた。

相撲をとる人達の亂雜な雜音の反響は、その高い塔のいただきから、空に消えてゆくやうに思はれた。そればかりではない。すぐ右手に流れるセエヌ河の對岸をはしる電車の音も、あちこちに反響をよび起したはてには、やはりノートルダム寺院の高い塔から、最後の微妙な反響を空にかなでてゐるのを岡野は聞きとつた。彼はその場合、强ひて高踏的な藝術境に彷徨しようとしてゐることを自覺しながら、空に消えて行く反響のあとを追つたが、もうほとんど聞きとれなくなつた時、セエヌ河のむかふ岸を見やつた。ちやうど、サン、ミシエル河岸からモントベロ河岸の方へはしる電車の窓あかりが、こつち岸の木立の隙間から見えかくれし、やがて、その木立のはづれに立つシャルルマアニユ皇帝の騎馬銅像あたりを出はづれると、暫くは橋畔に全車體を現はし、ついで、むかふ岸につらなる偉大なプラタアヌ並木の裾にかくれ、葡萄酒市場の方へはしり去つた。

それを見おくると、岡野は、仲間のものを、殊に誰よりもあの森を、その場へおき去りにし、すぐにも橋をわたつて羅典區（カルチエラタン）の住居へ歸らうかとも思つた。さつき、はじめはただのいたづら相撲と見てゐたのが、次第に眞劍味をくはへ、まつたく男性的な爭鬪をいどまうと狂ひかゝつて來た、その形勢をみとめた時、岡野は心中に苦しい焦燥を感じたのであつたが、……だからこそ、無理にもその心境から逃れたさに、ノートルダム寺院の塔が奏でる反響の音樂に耳をかたむけ、高踏的な藝術境に遊ばうと試みもしたのだ、……けれども、あひにく、きつと森のにちがひない、攻撃的な、異樣な呻き聲を耳にすると、岡野はまたさいぜんの焦燥にとらはれた。

誰でもを征服せずにはおくまいと、ことごとく傍若無人にふるまふ森の態度を憎惡する、と同時に、岡野自身、森を

征服しようとする欲望にさいなまれる、その憎悪と欲望の二つで糾はれた焦躁、……森と相對するごとに、多かれ少かれ、かならず經驗しなければならない、その不愉快な焦燥感で、彼は、仲間の人垣に隙間をみつけ、そこから爭闘の有様を窺つたのだが、……

まもなく、彼は、同國人の群に背をそむけてたち去りかけた。森のために片足を抱きこまれ、そのうへ彼の頑強な頭で胸をつきまくられ、やうやう一本足であとへ跳びすさりつつあつた小谷が、もうすぐ仰けになること、岡野にははつきり讀めたからであつた。案の定、岡野は背後に、東洋人的な響のある鬨の聲と、賑かな笑聲の合奏をきいた。彼はふりかへつて見た。

小谷は倒されたままの十字なりで、うなつてゐた。森は、小谷の再起をうながすやうに、時々靴で地をたたいて張つてゐた。が、それに對して岡野は、反感や憎悪をいだくよりは、むしろ森を輕蔑することによつて、たとひ安價にせよ優越を感じようと、ひとり暗のなかに微笑しながら、左岸にわたる橋の方向へ、快活な大股で廣場をななめによこぎつた。

皇帝騎馬像の前にさしかかつた時、岡野は遠くから名を呼ばれたやうな氣がした。銅像をとりかこむ夏木立の緑葉に、日光よりも美しい輝きを反映させてゐる三重街燈の光域のなかに、彼は自分の黑服姿があざやかに點出されてゐることを意識しながら、今しがた彼が廣場の中心に見すてて來た一團の方へふりかへつた。

小谷をたふして、完全に勝利者となつた森は、その征服の手を更に岡野の方へのべようとでもするやうに、いらだたしい聲で岡野の名を呼んでゐた。ふと、岡野も、それに挑戦してやらうと云ふ氣紛れな考から、勇ましく右手を上にさしあげた。すると、たぶん森の命令であらう、彼の左右に立ちならんだ仲間は、みな一様に手をあげて、岡野を呼びも

どすやうな動作をした。

だが、岡野はふたたび、橋の方へむかつて歩きだした。そして、街燈のあざやかな光域から、暗への明暗境へ足を踏みいれた時、期待してゐたやうに、森の罵聲を彼はききとつた。彼は歩みをとめずに、自分の肩越しにかへりみたが、仲間はたいがひ、巴里市立病院の横町めざしてだんだん暗がりへと消えてゆくところだのに、森一人はまだふみどまり、拳を空間にふりながら罵つてゐた。

いつものことだが、森の野性が外部に現れれば現れるほど、その反對に、岡野の野性は影をひそめ、まつたく冷靜な理智の世界に逃避するのを、あちためて不思議に思ひかへしながら、彼は橋畔の石垣にもたれ、眠りながら流れてでもゐるやうな河のおもてを、見るともなしに見おろしてゐた。

そこからは、銅像附近の木立にさえぎられて、廣場の中心は見えなかつたが、森も今頃はきつと仲間のものに追ひつき、またどこかのカフエにでも繰りこむ算段をしてゐることだらうと、岡野は考へた。それにしても、一度は、森の野性と岡野の野性とが爭ひあつて、ちやうど石と石とうちあふやうな悲壯な場面が展開されずにはすまされないのではないか？……と、彼は、それと云ふ根據もなしに偶然思ひついたのだが、それ以上の穿鑿を避け、たゞ漫然たる空想として、むしろさう云ふ場面を描きたのしんだ。

だが、森なんかに負けるものか！と、石垣をはなれしなに、岡野はきつぱり心に云つた。

橋の中途で、彼は、裁判所のほがらかな大時計の音をきいた。一歩に一音の割合で、彼は、自分の靴先を見つめながらゆつくり大股に歩いたが、九時をかぞへをはると、すぐにふだんの歩調にかへり、ソムラル街のホテルへと急いだ。

二

しかし、人通りもない寂しい裏街の一角にともるホテルの軒燈を、遠くの街角からのぞんだ時、岡野は、そこの四階の一室に、書きかけの長篇小說が亂雜な原稿となつて机上に散らばつたまま彼を待つてゐることを思ひだし、……もちろん、橋の上で裁判所の九時の時計をきき、それからすぐに路をいそいだのは、部屋に歸つて、稿をつゞけようとしたとのではあつたが、……それだのに、ホテルの軒燈が眼にはいるや、彼は、二週間前までは順調にすゝんだ創作が、それ以來、たつた或る一つのこと、決鬪の場面、その一つのためにまつたく頓挫して、幾枚も幾枚もむだ書きの原稿をつくつた、それを思ひだし、ホテルへ歸らうとする足も自然にぶりがちになつた。

決鬪を目擊したことがない、といふことは、彼にとつて少しも問題ではなかつた。決鬪の方法ぐらゐなら、百科辭典にもくはしく書いてあるし、それに彼は、昔讀んだことのある小說、たとへば、クウプリンの『決鬪』やレルモントフの『現代の英雄』などに描かれた決鬪の場面を、數年後でもはつきり思ひおこすことができたので、その方面の知識には不足を感じないつもりでゐた。が、ただ彼に缺けてゐたものは、決鬪する意志であつた。

Aと云ふフランスの一青年が、彼の愛する女のことから、もう一人のBといふ、おなじフランスの青年と森の奥で決鬪するところを、長篇小說の一挿話として書く必要にせまられたのだが、……しかもそれは、A青年が心のすべてを傾けて熱愛してゐる女を、他のB青年がやはり心のすべてを傾けて熱愛してゐると云ふ場合、さいはひ女はとうからAを愛してゐるので、Bに對しては笑顏を見せるどころか、いつも嘲笑を浴びせるやうにしてゐたにせよ、Aは、そんな邪魔な男の存在を許すことができなかつた、それで決鬪をすることになつたのだが、……岡野は、それを創作として

たやすく表現し得るほどには、まだ、A青年の性格を充分に築きあげてゐなかつたし、したがつて、A青年の決闘する意志をいくらかでも體得しようなどとは、とても及びのつかぬことであつた。

朝、眼をさましても、岡野は、仕事机にむかふことを怖れて、容易に起きようとはしなかつた。彼の好みで、修理の時にもホテルのマダムにねがつてそのまま二つの窓にかけつづけてゐる、古びた飴色の窓懸を、一日中ひらきもせず、寢床に横たはつたまま、あやしい光のただよふ部屋の何處ともない空間に眼をみはつては考へ、或はまた、枕に顔を伏せては暗黒のなかにいろいろな作中人物を描きだし、……しまひには、無駄とは知りつつ、一日、決闘の場面をさぐりに、巴里の西の郊外、ボア・ドウ・ブウローニュの奥ふかく、日も暮れて、わづかに森の間からさしいる落日の光に足許をさぐりさぐり、遲くまでさまよひつづけたこともあつた。

部屋にゐる時は、街にでもでたらきつといい考が浮ぶだらうと思ひ、街を散歩してゐる時には、今夜こそ必ず書かうと決心し、……そのくせ、なるだけ遲くまで戸外にゐようと、日のあるうちは、リュクサンブウル公園の芝地を啄りまはる雀の群に、さも餘念なささうに麵麭をちぎつて與へたり、やうやう公園を出たとしても、すぐには歸らず、カフエで音樂をきくとか、そのうちに、一隅から片眼をまばたいてなまめかしい微笑の合圖をおくる女にでも會へば、創作とは相容れない食慾増進(アペリティフ)の甘い酒をその女と飲みあつたうへ、濃厚な晩餐を、カラマゾフの父のやうに飽食し、そしてカラマゾフの父のやうに、…………

が、夜更けて、舗道に自分一人の靴音を寂しくききながら、ソムラル街のホテル前へ來ると、今更苦しい創作意識によびさまされ、部屋に歸ると勇氣を失はなければならなかつた。

森その他の仲間に別れて來たその夜も、彼は、冷酷に見えるホテルの瓦斯燈を尻眼にかけ、その前をとほりすぎよう

かと思つたほどであつたが、變な、不愉快な力で玄關口にのみこまれ、鉛の足で階段をのぼつた。

四階の部屋にはいつても、彼はあかりもつけずに、靴のまま寢臺に轉がつた。あいてゐる一つの窓は、折折おとずれる微風にすなほな通路をあたへ、そのたびごと、窓懸の上部から次第に裾の方へとはらみ、しをれ、やがて平靜にかへるのを暗に馴れた岡野の眼は熱心に凝視してゐたが、急に或事を思ひつき、勢よく起あがつて、陽氣な口笛を吹きながら階段をくだつた。

三

半時間の後、岡野はモンマルトルの踊場バル・タバランで、踊子のアンリエットと膝をふれあひ、彼女のあらはな肩を抱きながら話してゐた。

『今夜、僕が何しに來たか、解る？』

『ええ、解るわ。』

『ダンスしに？』

『いゝえ。』

『飲みに？』

『いゝえ。』

『それぢや、………』

『………』

『いゝや、お前には解らないんだよ。……今夜はね、シバタのことをきゝに來たんだ。』
『シバタ？　誰、シバタつて？』
『ほんたうかい？　お前はもう、あの男の名前すら覺えてゐないのかい？　……まつすぐこつち向いて、眼を見せろ。……ほんたうに忘れてしまつた？　あの男のことだよ、そら、お前が僕に云つたぢやないか、先夜。
『あゝ、さう、思ひ出すわ、ムシユウ・シバタ！　……ぶるゝ！』
『ぶるる？　なんだい、ぶるるつて？　……なんていやな顔するんだ！』
『あなたよ、あなたが惡いのよ。あんな獸みたいな人を、あんなきちがひを、連れて來るなんて、……』
『連れては來ても、あの最初の晩には、そのまゝ連れ歸つたぢやないか。その次の晩だらう、ひとりでやつて來て、お前と、……』
『もう云はないの、そんなこと。』
『いゝや、たゞきいて見るんだよ。知りたいんだ、知る必要があるんだ、シバタがお前をどんなことをしたか。……おい、その晩、例のオテル・デイザアルへ行つたんだらう？』
『……』
『何番の部屋へはいつた？』
『……』
『おい、何番の部屋へはいつたかつて、きいてるんだよ！』
『……』

『云はないんだな！……よし！』

岡野は、シモンヌの顏をさがすために、中央の踊場へふりかへつた。

場内いつぱい、何重にも環をつくつた男女の組々は、うごきがとれずに、たゞ腰をゆすつては徐々に移動してゐる、そのなかに、シモンヌを發見しようと、岡野はいそがしい眼を見まはした。

やうやくそれらしい顏を、ずつとむかふの隅あたりに見つけたので、彼はそれから眼をはなたず、だん〴〵こつちへまはつて來るのを待つてゐると、場内のあかりが一時に消え、かはりに五彩の光が闇に縞をなして流れた。

歡喜の聲が、到るところに爆發した。音樂も調子をたかめた。そして高音の絶頂へ登りつめたと思つた時、急に、嵐のおちるやうに靜まりかへり、たゞ五絃琴(バンジョー)の錆び濁つた沈欝な哀音だけが、暴風に吹きのこされた孤兒のやうに、めん〳〵とかこちつゞける、……しかし、またすぐ、狂氣じみた嵐に吹き消やされる。……

岡野は、彼の附近にそゝぎかけられた綠色の光のなかで、大聲に笑ひ興じ、全身を揺りうごかして踊りたいほどの陽氣さと、反對に、そのまゝ地の底へでもめりこまされるやうな憂欝さと、この二つの感覺につぎ〳〵と弄ばれてゐるのを感じながら、席をはなれ、踊場におりる小さな階段にたゝずんだ。

『あなた、おこつたの？』アンリエットの聲がうしろから彼の耳をくすぐつた。

『ねえ、おこつたの？』彼女は猫のやうに忍びより、媚びを裝うて岡野にすりよつた。

『あたしとダンスしないこと？』

『シモンヌをさがしてるんだ。』

『シモンヌを？　……シモンヌをさがしてどうするの？』

『アンリエットが僕の云ふことをきかないよつて、云ひつけてやるんだ。』
『まあ、いぢわる！……そんなことしないで！ね！云ふことをきくから。』
『ほんたう？……ぢや、シバタのことを正直に云ひな！』
『えゝ、云ふわ。………ダンスしながら、ね。』
ダンスの波にもまれながら、岡野とアンリエットは、軽く抱きあひ、手を握り、頬をふれ、囁きあつた。
『でも、あなた、嫉妬なの？』
『うん、嫉妬だよ。』
『それほど、あなたは、あたしを愛してゐるのねえ？』
『それは反語だらう？　わざとお前の顔を見ないでゐるが、今、お前がどんな表情をしてゐるか、僕に解るよ。』
『さう？　あたし知つてる筈ねえ、……それほどあなたが、あたしを愛しちやゐないつてことぐらゐ。ですから、あなたのは嫉妬ちやないわ。……でも、なんだつて、ムシユウ・シバタのことを、そんなにきゝたがるの？』
岡野はしばらく答へなかつた。ダンスの環が移動するにつれ、つぎつぎに、青、紫、桃色などの光に彩られるアンリエットの横顔をまぢかに見てゐるうち、例の、耳の下の小さな黒子に、彼は眼をすひよせられた。
『僕はね、ほんとうは、アンリエットを好いてるんだよ。……』
しかし、五彩の光は一時に消え、音楽もはたとやみ、場内はふたゝび以前の明るさにかへつた。誰も誰も、惜しい夢からさめたやうに、眼をまばたき、嘆聲をもらし、組をといてはめいめいの席へもどりかけた。岡野も、次にフレンチユ・カンカンを踊るアンリエットをそこに殘して立ち去らうとしたが、またひきかへし、彼女の耳に囁いた。前をまつ

すぐ見てゐるアンリエットの訝い眼を横からちつと覗きこみながら。

『何番の部屋、……シベタと行つたのは？』

彼女の瞳は、岡野とは反對の方へ動いて見えなくなつた。

『いつもの十二番？』

『いいえ、十六番。』

『三階だつたねえ？』

『えゝ。』

『それぢや、ね、もしその部屋があいてゐたら、そこで待つてゐるよ。……十二時十五分前に、いゝね？』

『えゝ、行くわ。』

やうやくふりむいたアンリエットの顏が、あまりに嚴粛であつたため、岡野は、瞬間、眼をとぢ、うなだれて、小さな階段をのぼりかけた。

階段の上に、見覺えある銀金具づきの女靴が、足先をひらいて靜止してゐる、それを見た岡野は、もうシモンヌには用がないんだがと思ひながら、すこしづゝ顏をあげた。鼠色の絹の靴下、黒い裳、……二十法の金貨を鎖で手首にさげた彼女の右手が、岡野の手を待つやうに差しのべられてゐた。

その手を握つて、岡野はやうやうシモンヌと顏をあはせた。

『今晩は、ムシユウ・ヲカノ。』

『今晩は、シモンヌ。』

『今晩は、あなたお一人で？』
『うん、一人つきり。』
『ムシユウ・モリは？』
『四五日前に、伯林から歸つて來たよ。』
『え〻、それは知つてますわ。』
『來たの？』
『え〻、伯林から歸つた晩、すぐ。』
『一人で？』
『え〻、一人で、……そしてね、また醉つぱらつたのよ、三鞭酒を飲んで。』
『喧嘩でもした？』
『い〻え、喧嘩はしなかつたけど、……』
『今夜ね、僕と、もうすこしで喧嘩するところだつたんだよ。』
『ムシユウ・モリと？　どこで？』
『ノートルダムの廣場で。』
『まあ、驚いた！　……そして、どうしたの？』
『喧嘩するのも面白くないから、僕一人、さつさとうちへ歸つたさ。』
『よかつたこと！喧嘩なんかするんぢやないのよ。』

『うん。』
『今夜は、アンリエットと？』
『うん。……アンリエットにすこしききたいことがあるんだ。』
『なあに？』
『シバタのこと。』
『シバタつて、……あ、ムシユウ・シバタのこと？でもあの人、一週間も前に、伯林へ行つちやつたんでせう？　ムシユウ・モリが、會ひたかつたけど、たうとう伯林で會へなかつたつて云つてゐてよ。』
『會ひたかつたにはちがひないんだが、本當のところはね、シバタを擲りに行つたんだよ。』
『擲りに？……まあ殺伐な！』
『シバタの部屋の番號をきいて、あがつて行つたんだが、その番號がちがつてゐたんだ。人ちがひさ。戸をどんどんたいて、「シバタ、出て來い！　擲つてやるから、出て來い！　おれはモリだ！」つてどなつたら、中の人は、……日本人は日本人だつたんだが、「わたし、シバタではありません、」つて、ぶるぶるふるへながら、戸もあけないで、云つたんだつて。』
『人ちがひして、よかつたこと！』
『モリも云つてるよ、擲らなくつてよかつたつて。「僕だつて、シバタみたいな人間なんだからなあ！」つて、苦笑ひしてゐたつけ。………ちや、失敬しよう。またそのうちに。』
『さよなら。』

出口で、岡野は、はじめて踊の方へふりかへつた。フレンチュ・カンカンを踊る八人の踊子は、四人づつにわかれ、輕い、短い、うすものの腰着をひらめかし、足を交互に頭の上へはねあげ、はねあげ、笑顔で踊つてゐた。

岡野は、アンリエットの視線を遠くからとらへようと、かなりの間、彼女の横顔を見つめてゐたが、たうとう彼女は、踊場を去らうとしてゐる岡野を見送りもしなかつた。それを、强ひても、アンリエットの不實が暴露された證據とみなし、それならば、自分も約束を破つていいだらう、ほんたうは、あんな女なんかちつとも好いてゐるんぢやないんだ、このまま歸つてやらうか？……と、彼は、それから十五分の後、オテル・ディイザアルの三階、十六番の部屋で、服のまま寢臺にころがりながら考へてゐた。

『つまりは遊戯にすぎないんだ。いい加減な幻影を描いてゐるにすぎないんだ。自分が書かうとしてゐる小説の傀儡に、自分であつてゐるんだ。ふざけすぎる。遊びすぎる。それほど惚れてもゐない踊子に、どうかして無理にも惚れてゐるやうな氣持になつたうへで、その踊子に横戀慕した柴田に對して、嫉妬心、競爭心、敵愾心をおこし、決鬪でもする氣になつて見ようなんて、……それも、柴田はもう伯林へ行つてしまつてゐるのに、……ずゐぶん頓馬な話だなあ！　だが、一體全體、今夜、そんな芝居じみた計畫をはつきりたてて、バル・タバランへ行つたんだらうか？　それほどの馬鹿でもないらしいがなあ。ことによると、きつと、こいつは、みんなあの森のせゐぢやないだらうか？　森の奴が巴里へ歸つて來たから、……ぢやなからうか？　……』

頭の下に兩手をくみあはせ、水色の飾絹を笠にたれさげた電燈を見あげながら、岡野は、なんとかして、彼自身の心理に解決を見出さうとあせつた。

ふと氣がついて、腕の時計を見た。約束の時間から十分過ぎて、十二時五分前になつてゐた。彼は、いきなり起き

て、戸をあけると、上體を廊下へのりだし、凄い形相で階段口をにらんだ。もし今にもアンリエットの顔が、鍵の手になつた階段の中途から現れでもしたら、とびかかつて、……と、思つたが、さつき、さほどにも愛してゐない踊子を、などと云つた手前、はづかしく、苦笑しながら、そつと戸をしめ、スヰッチをひねつて暗くすると、思ひつきり寢臺のばねをならして、またあふのけに寢ころんだ。

何分間か過ぎた。戸が、そとからすうつとおされ、廊下のあかりが室内にさしこんで、天井、壁、敷物の一部をてらし、そこに人影がうごめくのを、岡野は寢たなりでぢつと見てゐた。

『あら！ゐないの？』

『ゐるよ。』

岡野は暗の底から低くこたへて、寢臺をおりた。

『戸をしめるんだよ。』

戸はしめられ、電燈がともされた。アンリエットは、咽喉の奥で陽氣な曲を巧みにころがしながら、マントをとると岡野の胸をめがけて投げつけ、ぬぎおろした踊着をまたぐと、それもとつてまた投げつけ、うす絹のシユミーズ一つになり、その裾を兩手の指先で器用につまみあげ、さも美しい肉體をみせびらかすやうに、胸をはり脚をまげては、岡野の周圍を踊りまはつた。

四

深夜の街をはしるタキシイのなかに、岡野は腰かけてゐた。車の動搖から、子供らしい無邪氣さに導かれた彼は、ロ

笛を吹いては、兩側の窓からかはるがはる外を眺め、をどりながら飛び去る暗い並木や、並木の間に耀く街燈を、輕快な行進曲で見送つた。

しかし、必ずしも輕快な行進曲は、それを奏する人自身の心を、全部輕快ならしめるとはかぎらない、と云ふことを知つてゐる岡野は、だから、前の細鏡にうつつた、厭世的な、………口をとがらして、笛を吹いてはゐても、眼は、ことによると泣きだしさうな憂欝に支配されてゐる、その、彼自身の暗い顔を見た時にも、殊更に驚きはしなかつた。驚くよりは、むしろ、彼は、一つの顔に、さう云ふ矛盾した表情が併在し得るのを見て、大袈裟にも、なにか人生の秘密な眞理でも發見したかのやうに、ますます愉快になり、ますます口笛を高く吹きならして、輕快な行進曲を奏した。

反對に、彼の眉根と眼の關係が、ますます陰慘に、憎人的に、暗くなつていつた。彼はふつと口笛をやめ、眼をつぶつたが、その拍子に、彼の二つの握拳が、無茶苦茶に彼の頭をなぐりつけた。

『さつきのことを忘れたのか？獸！』一人の岡野が、もう一人の岡野を叱つた。

『まあ、さう云ふな！捨ておけ、捨ておけ！』

『それや卑怯だ！自分の醜惡さを正視するには忍びないんだらう。』

『さうかなあ！………だが、獸だの、醜惡だのつていやらしい表現は、よさうぢやないか。人間は人間でいいさ。人なんだ。獸ぢやないんだ。』

『ごまかすな！あれほど獸性を發揮してゐながら、まだ、人間だとかなんとか、ごまかさうとしてゐる！』

『ごまかすわけぢやないんだが、………それに、アンリエットだつて、まんざらよくはなかつたぢやないか。かうして、シユミーズの裾を兩手でつまみあげ、さもみせびらかすやうに、しかもぢらすやうに、あんなに踊りまはるところ

、、、、、、、、、………』

『、、、、、、、、、、、、、、、』

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

『それくらいのこと、なんでもないさ。投げたふされたら、投げたふされたなりで、おとなしくしてゐればいいんだ。それを、あの女は、まるで栗鼠のやうに、はしつこく、投げたふされるよりさきに、おれの腕からすべりぬけ、寢臺の上をころげて、向側へちよんと立つと、さつきよりもなほさら、これみよがしに、シュミーズの裾を高くひらめかし、おれを嘲るやうに、ちらつ、ちらつ、ちらつと横眼をくれちや、笑顏で、たらんらんらん、たらん、たらん、なんて陽氣な歌をうたひ、踊り、……そこで、おれは、彼奴を懲らしめやうとしただけのことなんだ。』

『嘘を云へ、懲らしめるどころか、かつとして、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、……ところが、アンリエットはかるがると寢臺をふみこえ、また反對側に立つて、お前をぢらしたんだ。今度は、お前の方でも寢臺をふみこえて、追つかけると、あの女はぐるつとまはつて、また、反對の側へ行つて踊りつづける。それだのに、お前は、　眼をむき、とつて食ふやうにアンリエットを睨んで、………お前は、あの時のお前の姿を想像して見ても、はづかしくないのかい？誰も見てはゐないとしても、お前自身が、このおれが、何から何まで見て、今、このとほり、お前を罵り、責めてゐるんだ。おれの顏を見て見るがいい、………鏡の中の。』

『ちつとも怖くなんかないや。笑つてらあ、かへつて、………そら、大口あいて、へへへへつて。』

『ごまかすな！自分の醜い獸性を、まざまざと見せつけられては、さすが極道のお前でも、眼をそらすと見える。意氣

地なし！眞正面に、おれの顔を見るんだ！あの時のお前の姿を見せてやるから。……、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、その時までは、た
だ陽氣にはしやぎふざけてゐたアンリエットも、お前の、眞劍な、物凄い顔を見ると、急におびえ、部屋の隅の方へしりごみしながら、頸をちぢめ、口をうつろにあけ、恐怖の眼をみはつてお前を見てゐたが、いよいよ進退きまはつて、あの女が兩手で顔を蔽うた、その瞬間、お前は、あの女の二つのかぼそい肩を、いきなり鷲づかみにし、その場へおしつぶさうとしたんだ。さうだらう？』

『さうだとすればどうなんだ？』

『ふて腐るつもりだな！……それぢや、お前は、アンリエットがどんなことを喚いて、お前を罵つたか、それももう忘れた顔をするつもりなんだらう？』

『そんなことくらい、忘れた顔なんかしやしないよ。「獸！きちがい！……シバタそつくりの、獸！きちがい！」つて喚いたさ。おれは、腹の中で笑つてゐたんだよ、本當を云へば、芝居をうつてゐたんだからなあ。あの女をうんと窘めたかつたんだ。』

『それなら、あとで、なぜあやまつたか？』

『それも芝居さ。あやまつて、なだめて、そしてしかも、あの女がまだ興奮からさめないでゐるうちに、柴田のことを云はせようとしたんだ。實に痛快に、柴田を罵つたぢやないか！あの時ほど、何か神性なものにでものりうつられたかと思はれたほどの、神神しい美しさで、あの女の顔が輝いたことは今までなかつたよ。……「ムシユウ・シバタの血

管には、惡魔が棲んでゐる！、、……」かう云つて、アンリエットは右の肩に、まだかすかに殘つてゐる齒のあとを、おれに見せた。……「ほら、こんなにまだ痕があるでせう。あきれたきちがひ！もがきにもがいてやつとすりぬけ、やはりこの隅へしりごみして、樣子をぢつとうかがつてゐると、ムシユウ・シバタがふところからとりだしたもの、なんだと思ふの？匕首よ！」……その匕首つてのは、おれも見て知つてゐる。柴田のホテルへ行つた時、自慢にして、女の黒髮ひとつかねと、その匕首をおれに見せたんだ。日本を出る時、なんでも無理矢理に、どこかの溫泉宿で、女の髮を切つたんだとか云ふ話だ。だが、おれにはそんなものはどうでもよかつたんだ。ただその時のアンリエットが、柴田に匕首をつきつけられ、どうしたか？と云ふことだけに興味があつたんだ。……』

『アンリエットが、窓をあけ、はだかの半身をのりだして、救ひをもとめかけた。それを見て、さすがの柴田も、こそこそ部屋をのがれ出た。アンリエットは柴田に一指もふれさせなかつた、……そこで、お前は、優越を感じたんだらう？　しかし、それにしても、お前の野蠻な獸性を、おれは決して承認しないぞ！』

『うるさい！　さつき、だから、本當を云へば、芝居をうつたんだつて斷つたじやないか！』

『芝居をうつたのなら、なほさら惡い。お前の罪は二重になると云ふわけだ。自然は藝術を模倣す、と云つた馬鹿者があつたが、お前は、人生に藝術の模倣をさせようとしてゐる大馬鹿者だ。お前のやうな人間の書く小說を、この人生が模倣しなければならないとするなら、おれはいさぎよく人生からしりぞくよ。おれもしりぞく、お前もしりぞけ！』

『お前はしりぞけ、おれはしりぞかん！……お前の罵るやうな獸で、おれがあらうとも、おれはおれ流に人生を愛

し、人生を樂んでるんだ。誰がしりぞくものか！　お前のやうな、十九世紀の陰氣くせえ遺物こそ、しりぞいつちめえな！　せいせいすらあ！　……おれは、これからまた、ジプシイの夜あかしの踊場へ行くんだ。タンブウル・ドウ・バスクとカスタニエートの音をききに行くんだ。あの、踵の高い靴で、床板をふみならして踊る、ロマンチツクな、狂はしいスペインの踊を見に行くんだ。斷つておくが、お前は、どうかついて來ないでくれよ！　おれは、おれ一人で行きたいんだから。……おい！　ショーファー！』

岡野は硝子窓をたたいて、ショーファーに呼びかけた。

『ジプシイへ！』

五

ノートルダム寺院前の廣場で、森と小谷と相撲をとつた日から三日目の朝、森ひとり、岡野の部屋をおとづれた。その時、岡野はまだ寢床にもぐつてゐたが、起きあがつて、ひとめ森の顏を見ると、彼は直覺的に、やつたな！　と思つた。

いつもかけてゐる眼鏡をかけてゐない。左の眼の周圍が、うまれつきの疣のやうな紫色ににじんで、しかも顏全體が無氣味にむくんでゐる。血色が惡い。カラもかけてゐない。むろんネクタイも。……服は汚れてゐる。まるで場末の勞働者のやうだ。

森は、これを見ろと云ふやうに、左手の人差指をたてて自分の左の眼をゆびさし、岡野を凝視しながら、善良な苦笑をうかべ、いつまでもそこに立つてゐた。

『どこでやつたんだ？』
『うん、市場横町のキヤフエで。』
『いつ？』
『おとといの晩、君とわかれてから。』
『誰と？』
『キヤフエのギヤルソン達と、擲りあつたんだ。なにせ、ギヤルソンなんて、一體何を食つてやがるか知らないが、みんなどいつもこいつもでつかい奴ばかりなんでなあ、……ぐんぐん階段から、突きおとされつちやつたよ。』
森は眼をむいて、苦笑した。岡野は變に感傷的になり、うつかりすると、森の手をぐつと握りしめ、くやし涙でも流がしさうな氣がしたので、笑ひにまぎらしながら、寢臺をとびおりるとすぐ、押入から白葡萄酒の壜を卓上にとりだし勢よく栓をぬいた。
『さあ、やれよ！　ア・ヴオトル・サンテ！』
『うん、やらう！ア・ヴオトル・サンテ、か！だが、このさまぢや、サンテもへつたくれもないや！』
『弱音を吐くな！なんだ、喧嘩くらゐに負けたつて！』
『誰が弱音を吐いたーふん、弱音なんか吐くもんか！先方の奴等、卑怯なんだ。ポリスを呼んで來やがつたんだからなあ。正正堂堂とやるんなら、あんな奴等に負けるんぢやないんだが、ポリスの五六人にも來られた日にや、とてもかなはないや、おかげで、二晩、警視廳の暗がりへ抛りこまれちやつたよ。』
『みんなか？』

『おれと、小谷と。……おれ一人ひつぱつてけつて頑張つたんだが、おれはフランス語がしやべれないだらう、だから小谷がついて來てくれたよ。』

『原因は？』

『うん、原因か、つまらないことさ。一體は、おれも惡かつたには惡かつたんだが、……』

森は、はじめて、罪のない笑顔をつくり、はづかしさうに眼をしばたたいて、てれかくしにコップをあふつた。

『金がたらなくなつたもんだから、ギャルソンの奴が、日本人を輕蔑するやうなことを云つたんだ。いや、云つたらしく、僕に思はれたのさ。「金なんかいくらでもある、ここに千法のチェックがあるんだ、足らなかつたら、これでとつとけ！どだい、貴樣、フランス人のくせに生意氣だ！」とかなんとか、今思ふと、自分でも滑稽でしやうがないやうなことを、しかも日本語でどなりちらすなり、コップをテーブルへぶつつけて割つたのが、そもそものはじまりさ。』

『むろん、醉つてたんだらう？』

『うん、むろんとも、でなかつたら、いくら僕だつて、………つまり、酒が惡いんだね。惡いんだが、……』

彼は、にやにや笑つて、また葡萄酒を飲みほした。

『疲れてゐない？』

『うん、すこし疲れてるやうだ。ろくに眠らないんで、眼がちくちく痛む。』

『眼の痛むのは、眠らないからばかりぢやあるまい。』

『嘘だい！眠らないから痛いんだ。擲られたあとなんか、へでもないや。』

『さうか、ぢや寢るといいよ。』

『うん、ぢや寝るよ。』

森は服を脱ぐのももどかしさうに、岡野の寝床へもぐり、夜着をかぶると間もなく、鼾をかいて眠つた。

擲られた人間に對する同情なんか、やすつぽくつて、しらじらしくつて、岡野はいやであつた。もし自分が擲られた時、誰か同情の言葉でも與へるものがあつたら、その同情のかげに、傲慢な侮蔑感のひそんでゐるのを見のがしはしなからう。しかし、岡野は、テーブルに兩肘をつき、頭をかかへ、コップの中に微動してゐる琥珀色の透明な液體を見つめながら、考へて見た。彼が、時時、森に對して抱く野蠻な敵意が、今、跡方もなく消えてゐるのは、擲られた森に對するやすつぽい同情で、その敵意が差引きされたからであらうか？さうは考へられなかつた。敵意が同情におきかへられたのではない。つまりは、岡野の心には、もう、野蠻な敵意を發する原因がなくなつたのだ。野蠻な敵意を發する原因がなくなつたのだ。野獸性が失はれたのだ。失はれたと云ふよりは、その野獸性を、何者にか美事に擲りとばされたのだ。

森が擲られたときいた時、岡野は、最初、ざまを見ろ！と云ふ、痛快を感じた。次には、だが、可哀さうだと云ふ、憐憫を感じた。岡野自身にも、いつか、森とおなじ慘敗の苦をなめる時が來るのではないか、いや、いつかさう云ふ時が來る、と云ふよりは、すでに、森の野性が擲りのめされた時、岡野のそれも同時に擲りのめされたのだと見てもいい筈だつたから。……そして最後に、彼は平和な幸福を感じた。森も、彼自身の惡を自覺して、悔いてゐるやうに見える。岡野も岡野自身の惡を自覺して、悔いてゐる。多分、二人は、かれの惡とこれの惡を、たがひにぶつつけあふことなしに、平和な交りをつづけて行くにちがひない。……

もちろん、岡野は、それをさうだのみとして、冷笑し去り得ることを知つてゐた。が、それを冷笑し去らうとする論

理は、一人の岡野から分裂した「懐疑的な岡野」の工夫したものにすぎない。暗い。不健全だ。强ひて云ふなら、そこには、「昨日」の黄昏の鐘がいまはしく鳴りわたり、惱ましい暮靄がただようてゐる。………

岡野は、「昨日」の暗さからのがれて、「明日」の明るさにむかふやうな幸福を感じた。

六

巴里在留の日本人なら、誰しも藤澤の名を知つてゐたし、藤澤の名を知つてゐるほどのものは、誰しも、よしんば實際に見なかつたにしても、彼の有名な「自畫像」でなり、或はまたぎきでなり、支那の少女のやうに前髪を眉毛あたりまできりさげ、セルロイド縁のまるい眼鏡をかけ、眼にいくらかの憂鬱な物怖ぢの暗い影をたゞよはせ、色の惡い唇を、何かしらはかなさうに輕くとぢた、彼の容貌のどの點かを見覺えてゐたにちがひない。

だが、藤澤の容貌をすこしでも見覺えてゐるほどの人なら、誰しも、かならず、藤澤の細君を中心とする三角關係を知つてゐなければならなかつた。

岡野も知つてゐた。それを岡野に告げたのは、郊外に近い日本人クラブに秘書役（スクレテユル）として生活の資を得ながら、畫をかいてゐる葉山であつた。

ある夜も、葉山のすまひになつてゐる、クラブの三階、屋根裏部屋で、岡野は、藤澤に對する葉山の罵りをきかされた。

いつもの癖で、ズボンのかくしに兩手をさしこんだまゝ、椅子にかけ、すこし前かがみになつてテーブルの一點を睨みながら、病的に赤い頬を一層赤くし、鬚をふるふかせ、口をとがらし、熱心に罵る葉山を見てゐると、岡野もつひひ

きいれられて愉快な氣持になるのだが、時には、ふつと、見えない手で頭を輕くたたかれたやうな寂しさを感じた。

『あなた、そんなに人の惡口云ふもんぢやなくつてよ。』

細君もききづらくなつたと見え、シュミーズを縫つてゐたのを、顔をあげて葉山をたしなめた。

しかし、たしなめられたりすると、葉山の激昂はますますはげしくなるのが癖だつた。

『よけいなおせつかいだ。貴樣なんか、默つてろ！藤澤がおれの惡口を云ふから、おれもあいつの惡口を云つてやるまでのことなんだ。おれは昔、非常にかたい信仰を持つたクリスチャンだつたんで、右の頬をうたれたら、左の頬もうたせてやるつてるくらゐ、キリストの敎に從つてゐたもんだが、今では、もう、そんな僞善はよしにしちやつたよ。眼には眼、齒には齒だ！……なんだ、あの、藤澤の繪は！伊太利あたりの古くさい、黴のはえたやうな壁畫か何かの模倣ぢやあないか。畫布(トワル)をつるつるさせれや、どうだつてんだ！ペンキ屋に少しばかり毛のはえたやうなもんだ。うすつぺらで、小器用で、淺くつて、人生の惱みもしなければ、さうかと云つて、歡びもない。あんな奴の繪を、これこそ日本人の繪だなんて、無暗とほめちぎるフランス人つて奴も、おつちよこちよいだ。………

『一體、君、繪だの藝術だのつて、そんなものは、そもそも、末の末だらう？人間だよ、何よりも人間だよ。藤澤つてえ野郎は、人間がなつてゐないもんだから、あんな繪しかできやしねんだ。あいつは、妥協的で、お世辭屋で、功名心が強くつて、物質慾が深くつて、良心もなければ、信仰もない熱もない、……だから手前の女房が、弟子みたいな奴に横どりされても、どうともしやうがなくつて、泣面をかいてゐるんだ。それほどあの女が青柳に戀してるつてえんなら、男らしくくれつちまふがいい。それとも、自分の女房とふざけた眞似をした、憎い奴だと思ふんなら、これまた男らしく、青柳をぶん擲つてやるがいゝ。もし、藤澤が、自分では出來ない、諸君にたのむ、青柳をやつつけてくれつて

えなら、よろしい。おれは一人でだつてひきうけてやる。さうなれば、もちろん森だつて贊成するにちがひないし、岡野だつて、………』

『岡野さんは、そんな亂暴なことなさらないわ。あなたのやうな、熊ぢやあるまいし。』

岡野は何か叫んでやりたいやうな氣持をおさえ、窓の方へ顏をそらし、ボア・ドウ・ブウローニュの森の梢が月明の空に蒼く拌えてゐるのを、遠くに眺めやりながら、葉山の云ふのをきいてゐた。

『貴樣みたいな、江戸の人間に解るもんか！岡野は、こいつは、猫つかぶりなんだ。すこしばかり教養があるんで、文明人らしいなりをしてゐるが、どうせ、おれとおなじ北海道人なんだ。荒涼たる朔北の人間なんだ。一皮むけば、岡野だつて、ちやうど北海道の原始林、………曠野、そつくりそのままの荒つぽい正體を現はしつちやふんだ。』

『ああ、さうだとも！』

半分は背走的に、半分は自嘲的に、岡野は云つて笑ひながら立ちあがると、窓にもたれてそとを眺めた。

『ところが、あの青柳は、おなじ北海道人でありながら、おれ達北海道人のつらに泥を塗る奴なんだ！………泥を！』

葉山は、岡野の背後で、なほ罵りつづけてゐた。

岡野は窓じきりに肘をつき、もういくらか冷くなつた夜氣を額に感じながら、眼下に深く暗い溝渠をなして横たはる郊外線路の、蒼白く光る鐵道を見おろしてゐた。

藤澤をたよつて、巴里に來た青柳が、同居一週間のうちに、藤澤の、、、、、、、、、、、、、、しかも。その關係は、葉山に云はせると、藤澤×××の方から積極的にとりむすばれたもので、それを、彼女は藤澤に告白するにあたり、藤澤をも愛してゐる。、、、、、、、、、、、、、、、、、愛するのだと云つたさうだ。

どんなに綺麗なフランスの女を見てゐても、ふつと藤澤の××の顔を思ひだすと、たちまちどの女もどの女も醜くなつてしまふと、柴山は噛んではきだすやうに口癖に云ふところから察するに、彼女はよほど美人型に遠い顔の持主だらうと、岡野は考へてゐた。しかも、精力絶倫だと云ふ。……

だが、在留の日本人ばかりではなく、巴里人にさへとかくの評をくだされてゐる、そんな不倫な女を、どうして藤澤は投げすてることができないのだらう？噂にきくやうに、藤澤が巴里で名をなすに、あづかつて力あつた糟糠の妻だからか？

たゞし、彼女を藤澤の糟糠の妻と呼ぶのは、ほとんど非難乃至は中傷の意味からで、……と云ふのは、彼女も畫家であつたが、彼女自身の出品畫についてはもちろんのこと、かりに誰かの畫が審査會でほゞ落選と決定した場合でも、彼女がもし、一夜、審査員を歴訪するなら、翌る朝には、その畫がかならず入選になつてゐる、と云はれるほどの或る才能を持つ女、その女と藤澤を結びつけ、藤澤の名聲をそねむものが、非難まぢりに、彼女を藤澤の糟糠の妻と呼ぶのだとも解釋されないことはない。そしてまた、云ふものは、青柳がマルセルをとらへたのも、彼女を愛するからではなく、實は、たゞ、彼女の持つ特殊な外交的才能を利用して、藤澤にもまさる名聲をかち得たいからだと云ひ觸らす。それをきいて、柴山は彼等を人外と罵る。藤澤の藝術をけなし、青柳を、北海道人の顔に泥を塗る奴だと嘲り、どいつもこいつも擲つてしまへと怒る。……

七

『ぶん擲つてしまへ！』

葉山はよく云つた。

『うん、ぶん擲つてしまへ！』

岡野も、すぐあとから來る反省を豫知しながら、いつも葉山の言にいさましく應じた。

時には、ほんたうに誰かを擲つて見たくなり、と云つて葉山を擲るわけにもいかず、しかたなしに立ちあがるなり、窓から森にむかつて喚きたてることもあつた。

葉山は葉山で、やはり窓際に立つて、獸のなき聲を眞似することがあつた。野蠻な割合に、……野蠻だからこそ、さうなのかも知れないが、……抒情味を愛する彼は、仔熊を奪はれた親熊の悲しいなき聲だと云ふのを、得意のものとしてやつてきかせた。（そのために、彼は細君から「熊」と云ふ綽名をもらつた。）

最初、彼は、眼をみはり、上唇と下唇をくはへこむくらゐに口を堅くしめ、息のつゞくかぎり、咽喉の奥で、多少抑揚のあるながいながい底叫りをやる。それがをはつたかと思ふと、彼は、急に大きく息をのみこむや、今度は口をいつぱいにあけ、眼球をむき、聲になるかならないか、そのさかひめくらゐのせつぱ詰つた苦しさうな大息を、とぎれとぎれに吐きつゞける。最後に、彼は、ものうげに顔をもたげると、かなしさうな眼で星空をあふぎ、口を輕くとぢ、かぼそい鼻音でめんめんと訴へる。

葉山の説明によれば、第一段は、仔熊を失つた親熊が、不安に戰きうなりながら、雪の野を夢中にたづねまはつてゐるところ、第二段は、たづねあぐんで、斷念し、しかも仔熊を奪つたものに對する怒りに狂つてゐるところ、第三段は、月明の夜、雪中に坐し、あふいで天に悲運を嘆き訴へてゐるところ、……

岡野は、またかと思ひつゝも、窓じきりに頬杖をつき、眼をつぶり、ぢつときいてゐるうちに、いつとはなし、月光

あふれる涯しない雪の野に、天をあふいで悲しみ訴へる熊の姿を描いてゐた。

葉山の演ずる「熊の嘆き」は、やがては「葉山の嘆き」であり、「岡野の嘆き」であるとは、彼等二人は別にあきらかな言葉で表現しあつたことはない。あるひは、葉山は、そんなことを思つて見ないかも知れない。だが岡野は、葉山が時々「熊の嘆き」を演ずるのは、たゞ單なる彼の藝術的表現にすぎないのではなく、葉山、岡野に共通に潜在する一つの嘆きを、彼が無意識に表現してゐるのだと解釋することに、異常な興味を覺えるやうになつた。

葉山にも岡野にも、……葉山、岡野にはかぎらない、森にも小谷にも柴田にも、その他の誰彼にも、あるひは凡ての現代人にと云つてもいいか知れない、……何かしら共通の失はれものがあるのではないか？ 失はれものと云ふよりは、むしろ、剝奪されたもの、剝奪されたものと云つては卑怯だ、剝奪されたのではない、自分から投げすてたもの、投げすてはしたが、今更それが欲しくなつた、欲しくなつたから、他に罪を嫁して、失はれもの、剝奪されたもの、などと云ふのだらう。……

クラブを出て、ポルト、マイヨオからエトワル廣場の凱旋門にむかふ廣い並木道を、岡野は考へ考へあるいて行つた。彼は、生理的の息苦しさに似たものが、彼の頭のなかで喘ぎ苦んでゐるのを感じた。夜なかに近く、電車もとだえ、自動車も時時一臺か二臺、通行人も、たまに遠くの横町から現はれて、暗い並木の下をよこぎると、また向側の横町へととほりすぎるくらゐのもの。それだのに岡野は、箱にでも閉ぢこめられたやうな狭苦しさを感じた。

馬にでも乘つて、思ふ存分野原を馳驅したい！ と、彼はふと、たまらない誘惑に襲はれて、並木と並木とに挾まつた散歩道にたたずんだ。都會の馬のやうに、尻尾やたてがみを氣どつたふうに短くきつたりしないで、自然のままに、たてがみは頸の左右にながい房をたれたやうに靡かせ、尾も地にひくまでのび放題に、しかも、それが、馳ける時には

勢よく空になびく、……さう云ふ馬に乘つて、あの、十勝原野のやうな野原を、秋草でもなんでもかまはず踏みにじつて、心ゆくまで縱橫にかけまはりたい！……

遠く背後の、ポルト、マイヨオにあるリユナ・パルクでいつも吹奏する、封建時代の狩獵の喇叭が、並木を越え、懷古的な哀調できこえて來たが、それがなほさら、自由不羈な原野の蠱惑を岡野にもたらした。

八

市場橫町のキヤフエで森が喧嘩をした、あの頃からずつと、ながらく岡野と森はたがひに疎遠をつづけてゐた。

森が、エルネスト、クレソン街の、宗田や野本とおなじアトリエの一室に起臥して、ほとんど一日繪をかいてゐると云ふ話をきいた時、岡野は寂しい氣がした。森が、アトリエにとぢこもつて繪をかく。あたりまへのことだ。岡野が仕事机にむかつて小説を書くのが、あたりまへのやうに。

だが、岡野はそれをあたりまへのこととして、看過することができなくなつてゐた。彼は藝術を肯定してはゐる、が、藝術のみを肯定することはできなくなつてゐた。彼と人生とを結びつけるのに、藝術と云ふただ一つのものを繋ぎの絲とすることは、できなくなつてゐた。

それだのに、森はアトリエにとぢこもつて、毎日繪をかいて暮らしてゐる。

『おれは金をもうけるために、繪をかくんだ。でなきや、誰が繪なんかかく馬鹿があるもんか！』

森がいつか云つたことがあつたが、岡野は、もしエルネスト、クレソン街のアトリエへ行つて、なぜ繪ばかりかいてるんだと森にきいたら、きつとおなじ答をするにちがひなからうと想像した。

だが、それは森の本心だらうか？　金もうけに繪をかく？　金もうけに小説を書く？　そんなら、森、きつともつと賣れるやうな繪をかかうぢやないか！　もつともつと賣れるやうな小説を書かうぢやないか！　いつそのこと、藝術なんかやめて、何かちがつた、大金儲けをやらうぢやないか！

お前が日本をたつ時、たとひ冗談にせよ、スペインへ行つて、三十六萬圓の博打をやるんだと云つてゐたが、それを冗談と云ひきるには、あの時のお前の云ひかたはあまりに眞劍だつたよ。なにも、スペインへ行つて三十六萬圓をもうけるか、命を失ふか、どつちかをやつて來いと云ふのではない。ただ、それくらゐの氣持で、いつも冒險に燃え狂つておれと云ふだけのことだ。

いつだつたか、ルーヴル博物館のどこかの廊下に、名も知らないやうな畫家の變な繪、……一人の女が觀者の方へこれ見よがしに尻をまくり、うつぶせになつてゐる繪であると云ふことを長田か誰かにきくと、いきなり、お前は、おなじ畫家仲間の井出とつれだつてタキシーに乘り、ルーヴルへ駈けつけたことがあつた。そして、その繪を一つだけ見ると、すぐそばの部屋に、ミレエの『晩鐘』や『牧羊の娘』などと云ふ傑作があるのを一瞥もせず、また、幾度見た人であつても、ルーヴルに行つたついでには、誰しもかならず立ち寄る「フランス十九世紀の室」へも寄らずに、そのまゝとつとと、ふたたびタキシイでホテルへ歸つて來たぢやあないか。

この話を、葉山は、森の傑作だとして、いつも愉快さうに云ひ觸らしてゐる。葉山ばかりではない、おれも愉快に思ふ。ゴツホがなんだ！　セザンヌがなんだ！　ルノワル、ゴオガンがどうしたと云ふんだ！　マティス、ドンゲン、……一體、藝術がなんだつてえんだ！　……

天文臺にむかふサン・ミシエルの並木道を、もう散りしいたマロニエの落葉を蹴りつけ蹴りつけ、岡野は、あきらか

に思想上の矛盾を自覺しながら、それでも森に對して云はずにゐられないことをくりかへし考へ、歩みをはこんだ、エルネスト・タレソン街のアトリエの一室に、あの喧嘩以來眼鏡をかけない、一變に淒味をおびた眼で、ぢつとモデルの肉體を凝視してゐる森を見ると、岡野は考へて來たことを一つも云はずに、寂しい微笑をのこして、部屋を出るよりほかはなかつた。

晝でも暗い、僧院のそれのやうな寂寞とした階段を最上階までのぼり、宗田の畫室をおとづれても、やはりおなじことであつた。たえず驚いてゐるやうな、青い大きな眼をみはり、それでゐて、いつも口元には笑ひをふくんでゐる少女を着衣のままかいてゐたが、宗田は森とはちがひ、ほそい眼をなほさらほそめ、そりみになつて顎をつきだし、赤い髭の下に口を少しあけてはモデルを眺め、眺めては繪筆を畫面になすつてゐるばかりで、岡野はなんとなく、見知らぬ港にはじめて上陸した異邦人のいだくやうなきまり惡さを感ぜさせられた。

隣室の野本は、森（ボア）の方へ寫生に出かけたとのことであつた。

岡野は、螺旋形の階段を、自分の靴音を寂しくききながら、一段一段とくだつて行つた。何階も築きあげられた高いアトリエに四方をとりかこまれ、日光もうけない、陰氣な石疊の中庭におりついた時、彼は、これと云ふこともなしに、石疊と石疊の間を埋めてゐる青苔を靴先で撫でながら、云ひやうのない孤獨を感じた。やがて、すべてに對する漠然たる反感から、畫家の窓窓を下から上まで睨みあげ、はては四角にきりとられた高い青空をふりあふいで、もうこんなところへなんか來るものかと、心に叫んだ。

或る夜、しかしオランピアで、岡野は森に出會つた。

グランブウルワールの往來から地下の酒場オランピアへ降りられるやうになつてゐる、その階段をくだつて立飲臺の前をとほり過ぎようとすると、見知り越しの女が岡野に卷煙草をねだりながら、彼の友達が來てゐることを知らせた。

『誰？』

『知らないわ、名前なんか。』

青い絹の着物(ローブ)を着た狐顔のその女をいつか森と岡野の二人で低能だと批評したことのあるのを、彼は思ひだした。

『ムシユウ・モリだらうよ。』

岡野はひきかへさうかと思つた、が、そんなことを思ふ彼自身を冷笑した。

はなやなか光彩にみちた、廣い地下室の空氣は、あひかはらずジャズの燥狂音に波だつてゐた。廣間いつぱいのテーブルに席をしめてゐる無數の遊客、その間を縫つて媚びを賣りあるく派手姿の娼婦たち、片手の掌に銀盆を載せささげ、いそがしさうにたちまはる禮裝の給仕(ガルソン)たち、すべてが、一瞬間、岡野の眼に波だつてゐるやうにさへ見えた。

が、いつもならば浮きたつべき筈の心が森が來てゐると云ふことのために、ちやうど、廣間の入口に棒立ちになつてゐる彼同然、彼の內部に堅く棒立ちになつたまま、右にも左にも動かなかつた。

卓子と卓子の狹い間を横あるきして、森たちがかならず席をしめることにきまつてゐる、或る壁際の凹部が彼の視界にはいるところまで進んで行つた時、その席をいつも受持ちにしてゐる、額のはげあがつた、丸顔の、愛嬌ある小男の給仕(ガルソン)が、横手から來て、岡野に、片眼につぶつてその方へ口をねぢまげ、何者かが彼處に存在することを暗示した。岡野はうなづいた。

森の横には一人の女がゐた。何か話でもしたあとらしく、二人は笑ひあつてゐたが、森が卓子のコップをとつて口にあてると、女はむきだしの腕をしなやかに森の肩にまはし、顔をさしのべ、飲ませてくれとでもいつたらしく、森が飲みかけのコップを彼女の口にあてがふのを岡野は見た。

『ムシユウはとりこにされたやうですね。』

給仕(ガルソン)は、おどけたふうに首を左右にふりながら行つてしまつた。

女の虜になつたのだらうか？　さうぢやない、單に、日頃の放縦性が現はれたにすぎないのだと、岡野は答へた。實際、その夜の森は、いつか畫室で見た彼とはまつたく異つてゐた。が、不思議にも、畫室の森に反感をいだいた岡野は、その夜の森の豪放さにも同感はできなかつた。森が醉へば醉ふほど、岡野は彼の横にゐて、冷靜な心を持ちつづけてゐた。

最初から彼の傍にゐたエルエヌと云ふ女のほかに、なほ三四人の女を前によびよせ、酒をふるまひ、給仕(ガルソン)にどなり、

………

それだのに、その次の夜、やはりおなじ席で、森はいかに冷靜にしてゐたことだらう！　その反對に岡野はいかに興奮してゐたことだらう！

エレエヌが原因であつた。岡野はエレエヌを面前において、泥棒女！　と罵つた。むろん、彼女は抗辯し、はては岡野を罵りかへしさへした。

ほんたうは、岡野はエレエヌを問題にしてゐたのではなかつた。顔はエレエヌにむけてゐながら、心の眼は、常に、森の冷靜な態度を、冷笑をうかべた彼の顔を、小面憎いものとして睨んでゐた。それではなほさら、エレエヌを罵倒

し、彼女を罵倒すればなほさら森が沈默の冷嘲を岡野に投げることを知り、さらになほさら、彼はエレエヌを罵倒するのであつた。

森と岡野は、前夜あるホテルにとまつたのだが、夜が明けてから、森が岡野の部屋へ來て、エレエヌは夜明けがた、森がまだ眠つてゐるあひだに、彼の上着のかくしから百法の札をさらつて行つたと、別に憤慨するやうな色も見せず、笑ひながら岡野に告げた。

睡眠不足の岡野の頭には、そのことはたいした問題として響かなかつた。殊にああ云ふ女の得てしがちなことで、とがめだてする氣にはなれなかつた。ただひととほり、まだ歸らずにゐた岡野のつれのマリイに云つてきかせたうへ、今後なるべく、あの女を日本人には近づけさせないやうにと注意して、その朝はホテルを出たのだ。

が、夜になつて、學校街（リュー・デ・ゼコール）の中華飯店へ岡野と森が晩餐に行くと、葉山がゐたので一緒になり、食後またグラン・ブウルワールの方へ散歩に出かけた、そして、前夜となおじオランピアの地下室へおりて行つた。例の凹部へ席をとつた。

マリイはすぐに笑顔でやつて來た、エレエヌは、……？

期せずして、岡野も森もエレエヌをさがした。

岡野たちがしめてゐる席のまむかひ、はるか向ふの壁際に設けた壇に立つて、若い男の歌手が、兩手を前に握りあはせ、異國的（エキゾチック）なスペインの小唄をうたつてゐる時であつた。たいがいの客は、みな、顔を歌手の方へねぢまげ、聽きいつてゐたが、たまには、小唄などには耳もかたむけず、頰と頰を觸れるばかりにして語りあつてゐる男女の幾組かが眼についた。

さう云ふ組の一つに、岡野はエレエヌの顔を見つけた。かなり遠くはあり、そのうへテーブルにうつぶせになつて、彼

女の横にゐる相手の男を下からのぞきあげるやうにしてゐるので、その顏をたしかに判斷することはできなかつたが、そのうちに、ちらと岡野の方へ視線をむけた笑顏は、まさにエレエヌのそれであつた。しかも、岡野たちが來たのを、さつきから知つてゐたやうな顏とさへ思はれた。

岡野と森は、眼を見あはせた。眼を見あはせたまま、二人とも無言で、おなじやうに、エレエヌのゐる方向へ指をさしむけた。

『とつちめてやらうか？』岡野が囁いた。

『うん。』森は煮えきらない返辭をして、すぐにやにや笑つた。『ほつとけよ、あんな奴…男らしくもねえ！』

岡野は咄嗟に、こいつ、エレエヌにまゐつてやがるんだなあ！と思つた。

『何が男らしくないんだ！泣寢入りする方こそ、よつぽど男らしくないや。癖になるから、一つ、こつぴどいめに遇はせてやる！』

岡野はマリイに云ひふくめて、エレエヌを呼びにやつた。

來た。前夜とおなじ、單純な黒の着物（ローブ）、白い腕を肩からあらはに、手に南京玉の化粧袋をさげ、細面に微笑をうかべてやつて來る彼女を、岡野は美しい女だと思つた。と同時に、あの美しい顏を、今に醜くさせてやるのを痛快に思つた。

『今晩は、みなさん！』

岡野たちの卓子の前へ來て、立つたままみなに愛嬌をふりまくと、最後に彼女は森に特別意味ありげな笑顏を與へながら、彼とむかひあひに腰をおろした。

岡野は、いきなり躍りかけたいのをこらへ、それでも睨みつけることだけは我慢できずに、まづ問ひかけた。

『僕等が來たのを、知つてゐたらう？』

『ええ。』

エレエヌは、こともなげに答へた。が、こともなげに答へた肯定の一言葉の背後に、はやくも何かしら彼女が感づいて、無言のうちに用心ぶかい心構へをひそめてゐるのを、岡野は見てとつた。

『知つてゐたら、なぜすぐ來なかつたんだい？』

『だつて、話の最中だつたんですもの。』

『話の最中にしろ、とにかく、一應はすぐ來るのがあたりまへぢやないか！　知つても知らん顏して、ここへは來ないつもりだつたんだらう？』

『あらあ、あんな、………』

彼女は、あとを笑ひにごまかした。

『それほど大事な話をしてゐたのなら、マリイが呼びに行つたつて、さうすぐには立つて來られる筈はないんだ。呼ばれたから、仕方なしに來たのにちがひない。………泥棒女！』

葉山は、握拳で卓をたたき、ふとい唸り聲で叫んだ。

『ぶん擲つてしまへ！』

たちまち、エレエヌの顏には混亂があらはれた。彼女を見つめてゐる葉山と岡野の視線にはねかへされ、救ひを求めるやうに、森へ、無理につくつた媚び笑ひの眼をむけた。

森を籠絡するつもりだな！　森のあまさをのみこんでるんだな！　でなかつたら、被害者たる森にむかつて、加害者たる彼女が大膽にも救ひをもとめよう筈はない。………森がにやにや笑つてゐるのを、岡野は見ないでも知ることができた。

『泥棒女！　今朝、森のかくしから百法の札を盗んだらう！　云へ！　云はないと、ここにゐる何百人の人達へ、大聲でお前の惡事を知らせてやるぞ！　云へ！　はやく！』

　エレエヌも、彼に對抗するやうにたちあがるなり、はげしく首を左右に振つた。

一〇

　オランピアの、あの凹部の壁につくりつけた、皮張りの柔い腰掛にもたれかかり、煙草をふかし、一言も云はずに、なにかしら嘲弄めいたまなざしで岡野を見送つてゐた森の顏は、森をそこへおきざりにしたその時以來、ながいあひだ岡野の腦裡を去らなかつた。

　勢こんで首を振りながら、眼をむき、脣をゆがめて抗辯し、はては口汚く岡野を罵りかへし、さもさも憤りにたへないと云ふやうに、傲然として去つたエレエヌの態度は、おもひかへして見ても、別に憎くも思へず、かへつて親みぶかい滑稽感をさへ彼に催させた。だからこそ、その後、彼がオランピアへ行つた時も、以前よりは親しい言葉を彼女とかはしあふことができたのだが、ただ一つ、あの夜の、冷靜に構へた小憎らしい森の顏だけには、我慢がならなかつた。

　それもしかし、いつとはなしに薄れて行き、やがて秋が來て、冬が來た。

　或る雪もよひの夕暮、岡野が散歩にと、ホテルから街路へ一歩踏みだすと、すぐ前に森の顏を發見した。

森は黒い外套にくるまり、すこし背をまげ、人懐しさうな眼で、微笑さへうかべ、岡野の前に立ちどまつた。二人あふのは、あのオランピアの夜以來であつた。岡野もすべてを忘れ、心からの笑顔で彼を迎へた。

その後、日本人クラブで、巴里在留の畫家や小說家の懇親會を催す計畫を急にもくろみ、森はソムラに街の方へ勸誘に來たのであつた。岡野は快く出席をちかつた。そして二人は、ひとまづ別れた。

岡野は、何等の豫期も豫感も、その時持たなかつた。おそらく森も持たなかつたにちがひない。岡野はむしろ、久し振りに會つた森とゆつくり語る時間もなくて別れたのを殘念に思つたが、クラブの會であれもこれも話しあはうと樂しみにしながら、セエヌ河の岸を散歩し、めづらしく、アレキサンドル三世橋の彼方に落ちる夕日の壯美を眺め得たことにも、一層の喜びを感じたほどであつた。

それだのに、おなじその夜の夜更に、ホテルの螺旋形階段を一段一段のぼつて部屋に歸る彼は、實に慘めであつた。慘めと云ふのは、彼はホテルへ歸つて來ても、まだ怒つてゐたからであつた。

一階毎に薄暗い電燈がともつてゐる、それをぢつと見あげて、彼はもう一度階段をくだり、あとへひきかへさうかと思つた。ホテルの前へ歸りついた時も、さうであつた。戸の釦を押し、ギャルソンが中から戸をあけるのを待ちながら、そこでも彼は、ひきかへさうかと思つた。サン・ミシエルの地下停留場で、地下電車(メトロ)から降りた時にも、反對側の線ですぐにまた、來たとほりに、……………と思つた。その頃は、それでも餘程怒りはうすらいでゐたが、ポルト・マイヨオの並木道から地下停留場へと導く高い石段を一歩降らうとしかけた時には、實際彼は、今出て來たクラブへひきかへさうと、足の方向を後へ轉じたほどであつた。それよりも、クラブでは、二階の會場の、今の今、怒りにまかせ、はげしい音をたてて閉めて來たばかりの戸口へひきかへし、陶器のにぎりたまをすら摑み、もう一度この戸をひきあけ、そし

て、あの森の奴を、と、憤怒に燃えたつたのだが、……

が、彼は慘めなざまでホテルに歸り、螺旋形の階段をうなだれながら一段一段のぼり、やうやう部屋にたどりついた。彼は慘めをとほりこして、寂しくさへなつてゐた。

寢床へはいつても、彼は、あの、立食を終つたあとの亂雜な一室に、森と二人壁際にあぐらをかき、敷物の上で葡萄酒を飮みながら罵りあつた光景をまざまざ思ひだし、いつまでも眠ることが出來なかつた。

小谷の話も、何等かの刺戟を與へたにちがひなかつた。一同は二列の食卓をさしはさんで立ち並び、壁際のものは壁にもたれ、背中をむけあつてゐるものは、たがひにもたれあふやうにし、煙草の煙と酒の香に充滿した室内を、たえずどよめかせ、さわつかせてゐた。その時、小谷が、彼と柴田との喧嘩の話をはじめたのだが、最初は、彼の近くにゐるものだけの耳をあつめてゐたのに、しまひには、遠くのものまでも振りかへらせるやうになつた。

伯林からまた巴里へ戻つて來た柴田と、或夜かなり遲く、小谷は、ソルボンヌ廣場の角の、大學生をおもな常連とするキヤフエ・ダルクウルへ行き、一つの卓子にさしむかひでサンドヰツチを食べたりしてゐたのだが、その時柴田が、だしぬけに、まつたく妙なことを小谷に云ひかけた。

『お前はおれの家來だなあ！』

小谷はむつとして、その理由をとひかへした。

『理由か？　理由は解りきつてるじやないか。お前のことなんか、おれはちつとも知らなかつたんだが、お前の方では、おれが巴里へ來るやいなや、鞠躬如としておれの前へ現はれ、しかもおれのことを、君、君と云ひ、お前自身のことを、僕、僕と云つてるだらう。つまり、お前自身、君臣の關係を承認してゐるところを見れば、お前はおれの家來だ

つてことは、誰の眼にだつて解りきつてるさ。」

柴田は、いつもする、とつてつけたやうな豪傑笑で肩をゆすぶり、そりみになつて嘯いた。

そこで、喧嘩になつた。小谷はいきなり、柴田の横面へ拳固をくらはした。柴田はほとんど狂的發作で、たべかけのサンドヰッチのナイフをとるや小谷に斬りつけた。ナイフはそれて、小谷のカラを突いた。小谷は咄嗟に、柴田に組みついた。

二人は、卓子をひつくりかへすやら、器物を割るやらして、床板に轉りながら組打ちの亂鬪をやつてゐるうち、キャフエの客も、娼婦達も、總立ちになつて罵り騒ぎ、やうやく給仕男(ギャルソン)達に二人はひきわけられた。さきに手をだしたのは小谷の方だが、彼はフランス語でキャフエの主人に事情を話したので、結局、柴田が器物の辨償を請求され、言葉ができないため抗議もなし得ず、不承不承辨償金を支拂つてキャフエを出た。

小谷も、柴田が去つた戸口とはちがふ、別の口から外へ出ようとした。すると、そのキャフエ・ダルクウル詰の娼婦で、「女拳鬪士」と綽名されてゐる、ふとつた、すがめの、醜い女が小谷を呼びとめて、喧嘩のいきさつをとひかけた。小谷は云つてきかせた。それをきくなり、彼女は、大きなからだを搖つて戸外へ飛び出し、ぢつと街をうかゞひ、角を曲つて來る柴田を見つけると、つかつか進んで、ものも云はず、柴田の眼と眼のあひだへ拳をつきあてた。柴田は叫んで、あふのけざまに舗道にたふれる。彼女はふりかへりもせずに、さつさとキャフエへはいつてしまふ。……

小谷の話を喝采をもつてきき終つた立食の人達は、再び思ひ思ひの談笑にうつり、室内は以前の喧騒にたちかへつた。が、はじめのうちは一緒にゐたのに、知つた顏が來るにつれ別れ別れになり、食卓では、偶然、はしとはしとにたがひに遠くむかひあひになつた岡野と森は、小谷の話がすんだあとでも、周圍の話には加らず、沈默のうちに探るやうな眼

ををりをり見かはしては、そらしてゐた。

しかし、それだけだつたら、或は岡野と森のあひだに、何事も起らなかつたかも知れない。

『藤澤はどうした？』

葉山の底濁つた聲を、突然、岡野は耳にした。

『藤澤の野郎、逃げて歸りやがつたな！　意氣地なしめ！』

その頃はもう立食も終り、半數以上の人は歸つてしまひ、葉山、森、岡野、小谷、長田等の數人しか殘つてゐなかつた。森は壁際にあぐらをかき、眼を光らせ、なんだか物足りなさうな顔でそこらを見まはしながら、ひとりで葡萄酒のコップを傾けてゐた。

岡野は窓によりかゝつてゐた。

葉山は、卓上の盃を一つ一つ電燈にすかして見ては、飮みのこしの酒を喇叭にして飮み、飮んでは藤澤の惡口を云つた。

『人の前ではぺこぺこ頭をさげ、女みてえなお世辭をふりまいてゐやがるくせに、陰へまはると、おれの繪の惡口を云つてやがる。葉山のやつてるやうな仕事は、おれ達が十年前にもうやつたことだ、なんて、嘘をつけ！　おれのかいてるやうな、あんなへんちきりんな繪を、どこの誰が、これまでかいたことがあるつて！』

岡野は笑つた。葉山自身も笑つた。そして、コップを岡野に持たせると、葡萄酒をついでやり、しかもそれを、彼は脣をのばして自分で飮んでしまつたのを、眼を細くして無邪氣に笑ひながら、あらためて岡野のために酒をついだ。

『さア、飮め！　酒は地下室にいくらでもあるんだ！　……だが岡野！　お前、をさまつちや駄目だぞ！　もつと無茶

苦茶にやれ！　あばれろ！　小說を書けば、どうしたつてえんだ！　藝術は藝術でえゝさ、しかし藝術なんてえものは、それほど値のあるもんぢやないんだ！　豚のくしやみみたいなものさ、藝術なんて！　……まあ、えゝ、飲め、飲め！飲んで、うんとあばれろ！』

云つて、彼は、空へ顏をむけ、眼をつぶつて、例の「熊の嘆き」をうなり出した。

岡野は醉つてゐなかつた。殊に、彼の性癖として、葉山にせよ、森にせよ、醉つてゐるものが誰か傍にゐる時には、彼はいつでも醉ふことはなかつた。だから、葉山の醉語にも、たゞ笑顏でうなづいてばかりゐた。

突然、岡野は森によびかけられた。

『岡野！　こゝへ來い！』

アルコールと水の喧嘩が馬鹿げてゐることを知つてゐる岡野は、挑戰的な森の眼を微笑で見かへした。それが却つて、森の戰意を煽つた。

『ここへ來いつたら、來い！』

『用があるなら、そつちから來るといい。』

岡野もつひ、森の執拗さにたまりかねて應戰したが、すぐに、惡いことを云つたと思つた。

『よし、來いと云つたな！　來いと云ふなら行つてやらう。……さあ、來てやつた。來てやつたが、おい、どうしてくれるつてえんだい！』……

寢床のなかで思ひかへして見ると、岡野は今更をかしくなつた。醉つて管をまいてゐる相手に、眞劍で、絕交だなどと云つたのが後悔されもした。それにしても、森の暴言のなかには、何かしら岡野の自尊心を傷つけるもののあつたこ

とは、否定できなかつた。それに、常常、森が何か根に持つてゐて、それが一夕の醉ひをかりてそとに現はれたと思はれる節も、ないではなかつた。

『いやにをさまりかへつた、そのしやつつらが、おれの氣にいらねえんだ。なんだい、その物知り顏は！　土臺、小說なんか書く奴に、碌な奴あゐやがらねえ。朝から晩までうちんなかに閉ぢこもつちや、面白くもねえものを書いてばかりゐやがる。お前は一體、おれ達を相手にしねえつもりなんだらう！　おれ達のやうな、のんべえの醉つたくれとは、おつきあひなさらねえつもりなんだらう……』

かう云はれた時、岡野は、森に對していつかそれとおなじ不滿を抱いたことのあるのを思ひだし、おたがひが誤解しあひ、と云ふよりは、めいめいの仕事を、ほんたうは理解しあつてはあるのだが、ただ二人とも我儘なために、自分勝手な意固地な解釋を、相手にくだして憎みあつてゐることを知つた。彼は、森の横にあぐらをかき、腕をくんで、敷物の一點を見つめてゐた。

が、『飮め！』と云はれて、森にコップをさしつけられた時、彼はどうしてもそれを受ける氣にはなれなかつた。それを快く受けたら、二人の間に、それ以上の爭ひが生ぜずにすむことは解つてゐたにせよ、岡野は頑固にしりぞけた。

『飮まない。』

そこで、森のにくにくしい揶揄がはじまつた。

『飮まない？　意氣地のねえ奴だ！　飮まないんぢやない、飮めないんだらう。だから、へどなんか吐くんだ。嘘だつてえのか？　嘘なことがあるもんか。去年の冬、さんざん競馬で損しやがつて、やけ酒飮んで、栗山の縁臺へ、へどを吐いたつてえぢやあないか！　きたねえ奴だなあ！　よせよ、みつともねえから、なあ、岡野、日本人の恥さらしだ

ぜ！』

岡野は滑稽な感じがしながらも、いきほひ駡りかへさずにゐられなかつた。

『何云つてやがるんだ！　あの時は、すきつ腹へ飲んだからよ。すきつ腹へ飲んで、醉つぱらつてへどを吐くのに、何が不思議だ！　それよりも、お前の方こそ、よつぽど見つともよくない、耻さらしをしてるくせに。……モンマルトルの踊場の、しかも食卓の上に、衆人環視のなかで、三鞭酒に醉つぱらつてへどを吐き散らかしたのは誰だい！　日吉と葉山と、おれと、それに日吉のマダムもゐたつけ、……日吉のマダムなんか、お前の話が出ると、ああ「ムシユウ飲んだくれ(イヴーロニユ)」かつて、そう云ふたんびに、こんな、狆みたいなくしやくしやした顰めつつらしてらあ！

『日吉のマダムが、どうしたつてえんだ！　あんな猿みてえな、へなちよこ女、……第一、日本人の嬶になるやうなフランスの女に、碌な奴がゐるもんか！　ホツテントツト人の嬶にもなれないやうなすべたが、日本人の嬶になるのよ。おれは、フランスの女なんな大嫌ひだ！』

『さうとも！　お京つてえ女がついてるからなあ！』

『この野郎、おれを嘲弄するんだなあ！もう一度云つて見ろ！』

『云ふよ。森はお京に惚れてるのさ。ところが、お京の方ではさうぢやないんだから、態みてえな男が、悲觀してるつてえわけだ。お前が横濱から船に乘つた時、おれも岩壁で見送つたが、その時偶然、おれのすぐわきにお京がゐて、口では笑ひながら、一生懸命ハンケチを振り振り、眼をしばたたいてゐた、泣いてゐたつて、おれが巴里へ着くとすぐお前に云つてきかせたら、そしたら、お前、さうか、さうか、ほんたうか、お京が泣いてゐたか？……いや、嘘だらう？あの女、泣いたりするもんか！あいつはおれのことなんか、ちつとも、………

『よせ、よせ！うるせえ！』

すべてを攪亂するやうに、兩の握拳を空にふり出して、森は喚いた。そしてから、岡野へぢつと眼を据えると、……

『お京に惚れたつて、ちつとも耻ぢやあるめえ！』

『むろん、耻ぢやあねえ！』

『ぢや、なんだつてあんなことを云つて、おれを嘲弄するんだ？』

『嘲弄ぢやない。おれはただ、ありのままの事實を云つただけだ。』

『いいや、嘲弄だ。おれは、ひとに嘲弄されることなんか、大嫌えだ。……やい、なんでえ、その面は？おれに對して、すこしでも權威ありさうな面する奴は、氣にいらねえんだ。おれは無政府主義者（アナーキスト）だ！』

『お前が無政府主義者（アナーキスト）なら、おれは虛無主義者（ニヒリスト）だい！』

岡野は、森の眼を見つめかへしながら、不思議な緊張を感じた。

『ふん、虛無主義者（ニヒリスト）か！虛無主義者（ニヒリスト）なんてえ奴あ、南瓜の蛆だ！』

『南瓜の蛆たあなんだ！おれを罵倒するんだなあ！』

『罵倒でもなんでもいい！南瓜の蛆だから、南瓜の蛆だと云ふのに不思議はあるめえ。だから、お前の藝術なんか、南瓜の蛆がひりだす糞なんだ！蛆の糞だ！蛆の糞みてえな藝術をつくる奴あ、おれの友達ぢやねえ！おれの友達にや、そんな糞野郎は一人だつてゐねえ筈だ！』

岡野は唇をふるはして、森を睨みすえた。睨みすゑたまま、彼はたちあがつた。下から岡野を見あげ、まばたきしながら、變な笑ひを口角に刻みつけた森を、彼は立つたまま、鋭い眼で見おろした。

『友達でなかつたら、つきあふな！』

云ひすてるなり、岡野は奮然として室を出た。そして、戸をあらあらしく締め、階段をくだりかけ、ひきかへし、戸のにぎりたまを摑み、あけて、もう一度森の前に、と思つたのを、彼はやうやう、自分で自分をなだめながら、ホテルに歸つた。……

南瓜の蛆、蛆の糞！……岡野は寢ながら、白い天井を見あげ、聲をあげて笑つた。が、强ひて笑はうとし、聲をあげてまで笑つた彼自身の心理が、明かに變態であることに氣づいた。やはりまだ、森の毒舌にこだわつてゐるのが解つた。

二

まもなく、或る夜、森は南へ出發した。セザンヌが『海』をかいたと云ふ、マルセーユ附近のレスタクへ。

岡野は妙に寂しかつた。やはり、森も畫をかかなければならないのだ。畫をかくために、南へ行つたのだ。みなそれぞれの仕事をしなければならない。時には藝術冒瀆の言を吐きながら、岡野も結局はその外の道へ行けさうになかつた。

それにしても、なぜ喧嘩をするんだらう？と、岡野は考へて見た。考へることも何もない、喧嘩したくなるんだから仕方がない、と云つてしまへばそれまでだが、それでは、なぜ喧嘩したくなるのか？

森と岡野ばかりではない。葉山と藤澤だつてさうだ。柴田と小谷だつてさうだ。いや、誰と誰とと云ふやうに、はつきりしたものではなく、誰でも誰でも、みな總がかりで喧嘩をしあつてゐるのだ。

森が南へ行くについて、中華飲店で、七八人の友達が一緒に晩餐をとつたが、その夜もやはりさうであつた。

中華飯店は、羅典區（カルチエ・ラタン）にある二軒の支那料理屋のうち、いやにけばけばしい上品すぎる萬花酒樓にくらべて、狹くはあるが、質實で、居心地よく、それでいつとなく、何かと言へば日本人同士集つて會食する場所になつてゐた。日本畫ともつかず、支那畫ともつかない、日本人の心をあやまかすやうな、しみじみした趣味があるかと思ふと、豪放な南畫の趣味も窺はれる、が、また、それをひつくるめて洋畫風に、濃厚な色彩で描いたと云ふやうな畫が、黑い細柱にしきられた壁の間毎間毎、一面にかけられてあるのだが、硝子の裝飾をさげた支那燈籠の薄赤い灯に反映して、いつも異國的（エキゾチック）な雰圍氣に室内にただよはせてゐた。が、そこへ來る日本人達は、異國情緖にひたると同時に、故國に近い親みと氣安さを味ふことができた。

客も日本人が多かつた。支那人は來ても、日本人に對して强ひて遠慮がちにしないまでも、傲慢な態度は決して見せなかつた。巴里男、巴里女もずいぶん來るには來るが、彼等はわざわざ東洋の美味を味ふために來たものと見なし、誰も彼等にひけめを感じはしなかつた。自然、日本人は、のびのびした氣持で食事をすることができ、他のレストランではあまり大きな笑ひ聲すらたてられないだけ、中華飯店では、日頃の鬱でも散ずるやうなつもりで談笑した。だからこそ、擲りこみの相談も調つたのであらう。最初、別に、誰も長谷場を擲らうと云ふ感じをもつて、その席に臨んだものはなかつた。ただ、南へ行く森と、一夕の宴を張ると云ふだけのことであつた。

誰が云ひ出したものか、岡野は知らなかつた。彼等の一團は中央の圓卓をかこんでゐたのだが、席を隣りあはせた岡野と森は、正面の壁を背に、睦じさうに並んで食事をしてゐる日本人夫婦の品評を、ひそかにやつてゐたのであつた。

『ちよつといいな！』

『お京とどうだい？』

『馬鹿！お京は別だい！』

『すこし顔が細いね。眼も小さいや。冷たさうだ。………あれやね、東京のなんとかつて銀行をやつてるうちの次男だつて。』

『畜生！しやれてやがるぞ！あいつ、いやにむつつりらしいな。女房に負けてるなあ！』

『いいね、僕は好きだよ。女房の尻にしかれるなんて、あまくつていいぢやないか！』

『うん、おれも賛成だ。女にあまくねえやうな奴は、男の資格がないや！』

『おい、じやんけんしよう！』

『じやんけんして、どうするんだ？』

『あの女をよ。』

『いやだい、おれが先にめつけたんだから、おれのもんだい！』

『おれんだい！』

『いや、おれのもんだ！』

まじめにそんなことを云ひ争つてゐる時であつた。向側の葉山に、岡野と森は呼びかけられた。

その時はすでに、長谷場を擲りに行かうと云ふ動議が、他の連中の間に持ち上つてゐたのだ。土谷伯仙といふ日本畫家が親密にしてゐる女を、日頃みんなから嫌はれてゐる西洋畫家の長谷場が、土谷がフランス語のできないのをいいことにして、彼のゐる面前で口說いた、圖圖しい奴だ、擲つてやれ、と云ふのであつた。

だが、土谷も意氣地がなさすぎると云ふ說をたてるものもあつた。フランス語が解らないから、長谷場が女に云ひよ

つてゐるのも知らずに、あの蒼白い顏でやにさがつてゐたのは仕方がないとは云へ、あまり見つともよい圖ではない。それはそれとして、あとで女が、手眞似か何かで、長谷場がからかうと土谷に云つてきかせたのだから、その時、土谷はなぜ憤慨して、長谷場に抗議を申込まなかつたのか？　全然長谷場の不留を許すなら許すでいい。それなら、なぜ、日本人のところへ行つては、長谷場つてえ奴はひどい奴だ。おれの眼の前で女にこんなことを云つた。などと愚痴まじりな怨言を觸れあるくのか？………

それでは、いづれ土谷もやつてやるとして、さしあたり長谷場を擲りに行かう。きつとキャフエ・ロンドンで球撞きをやつてゐるにちがひないから。………

しかし、ソルボンヌ大學横のキャフエ・ロンドンには、長谷場の姿は見えなかつた。モンパルナスのキャフエかしら、と、七八人の一團は、夕方から降つてゐるまばらな粉雪を浴び、リユクサンブウル公園にそうて、上院前の寂しい暗い街をぬけ、モンパルナス並木道で二三軒のキャフエを搜したが見當らない。或るキャフエの少年使者に手紙を持たせて、長谷場のうちへやつたが留守だと云ふ。

諦めて歸らうと、キャフエ・リラの十字路にさしかかつた時、偶然向側から車道を越えて、長谷場がやつて來た。岡野と森は、顏を見あはせて笑つた。

『運の惡い奴だなあ！』

『うん、わざわざ擲られに來たやうなもんだ。』

少くとも岡野は、殺伐な鬪爭氣分から醒めてゐた。それに、たつた一人の人間に對して、七人も八人もが徒黨を組んでゐることに、何よりも氣がひけた。森もさうらしく、岡野には思はれた。誰しもさうだつたにちがひない。だから、

この事件にあまり口を出さなかつた小澤が、誰よりも先に前へ進み出るなり、長谷場を横町へ連れて行き、彼の頬を無言のうちにつづけうちしたのも、一人對一人で事件に終結を告げようとしたものと解釋するのが、至當のやうに思はれた。

だが、なんだつて喧嘩するんだらう？　なんだつて喧嘩したくなるんだらう？これも懐郷病(ノスタルジイ)の現れだらうか？……

岡野はみなと別れ、唯一人、ヴァヴァンの地下停留場から地下電車(メトロ)に乘り、車室の硝子窓に面し、そこに薄暗くうつる彼自身の顔をまともに見ながら考へて見た。

擲りたくなる懐郷病(ノスタルジイ)！　そんな懐郷病(ノスタルジイ)があるものかしら？　岡野は、窓硝子の中で彼の顔が、苦笑で皺めさせられたのを見た。

馬に乘つて曠野を駈けまはりたくなるのも、やはり懐郷病(ノスタルジイ)の一つかも知れない。馬に乘つて駈けまはれないものだから、競馬に金を賭けて、賭博心理に醉はうとするのも、それもやはり懐郷病(ノスタルジイ)の一つの現れだらうと、彼は、競馬場の枯草地に寢轉んで、たまたまの冬の青空を眺めあげながら、皮肉に考へても見たりした。

その實、彼は、故國のことなど少しも念頭に浮べなかつた。馬券を買ふまでは、いろいろに迷ひこそすれ、一旦この馬ときめて買つた以上は、もう運命にまかせきりであつた。乾いた枯草地に外套をしき、あふのけに寢て、雲の流れるのでも眺めてでもゐれば、なんの苦勞もないのであつた。

その點で、彼も葉山も、サン・クルウの競馬場を最も愛した。オートウイユにはいい草地がなく、それに障碍競走で、雨か雪でも降らないかぎり、あまり番狂はせもない。ヴァンセンヌは速歩(トロ)で、馬も少く、張合がない。アンギヤンは場所が閑散でない。メエゾン・ラフイートには野趣がない。わづかにトランブレエは、いかにも荒涼とした曠野の趣があ

り、深い雜草のなかにただ一本立つてゐる枯木だけにも心をひかれたが、それにくらべれば、サン・クルウの方は、荒れ寂びた曠野の趣が少いとしても、競馬場の埒外に一叢をなしてゐる森と、その周圍をとりまく、牧草のやうな枯草地は、葉山と岡野に、北海道の、荒涼としながら猶ほ一脉の詩味をたたへた高原の感じを思はせるだけでも、前者には遙かにまさつてゐた。そのうへ、出場馬も多く、短距離ではあり、番狂はせは頻繁、それに、他は毎週一度だが、サン・クルウに限り毎週日曜土曜の二度あることが、彼等をして一層その競馬場に親みを抱かせた。

綠の葉は振り落されたにせよ、褐色の濃淡に錯綜する裸形の森が、冬の薄日をうけて、ひそまりかへつてゐる姿は、また、他の季節のもつ味とはちがつてゐた。葉山と岡野は、競馬開始の鐘が、はるか遠くから、心をそそりたてるやうに鳴りわたつて來ても、草地から起きようとはせず、起きたとしても、まつたく競馬には無關心のやうに、……實際無關心でもあつた。なぜなら、彼等は、いつか競馬を觀ることよりは、競馬の結果だけを知ることに興味を持つやうになつてゐたのだから、……だから、群衆をかきわけて、強ひて競馬の實況を觀ようと懸命にもならず、それどころか、競馬開始の鐘の音をうしろに聞きながら、森の中へはいりこんだりした。

岡野達ばかりではない、時には若い女が、たつた一人、森蔭に消えのこる雪を手にすくつてゐることもあつた。雪が殘つてゐるのを見ると、きつと岡野と葉山は生き生きした足どりで、枯草を踏みわけ、そこへ突進し、綺麗なところを掻きあつめ、握つて口へいれるのであつた。或時一緒になつた、その若い女は、二人の野蠻な行爲に驚きの眼をみはつてゐたが、やがて彼女もおづおづながら雪のかたまりを噛り、笑ひ、……そして、少女時代を父に伴はれて諾威で暮したことを、優しい聲で二人に話した。

森を出はづれるまで、三人は語りあつて、別れしなには、たがひに手を握りあひもした。彼女は、ずつと遠くの決勝

線まぎはに群る人達の方へ、裾の狹いスカートで小急ぎに行つたが、途中で一度振りかへり、手をあげて、もう一度別れをつげた。岡野も葉山もそれに應じたが、見送つてから、二人は、何かしら寂しさうな笑顏を見あはせた。

しかし、さう云ふ靜かな、しみじみした心境はいつまでも續かなかつた。暴風雨は、すぐうしろに待つてゐた。馬券賣場のなかに聳える揭示塔が、その暴風雨の根源地であつた。

一競馬が濟むと、群衆はすべてその前に蝟集する。そこに現れる配當金額の多寡によつて、勝つたもの、負けたもの、それぞれ異つた複雜な心理に混亂させられる。五分前、あれほど平靜だつた葉山、岡野の二人には、もはや空を流れる雲もなければ、森もない、殘雪もない、女もない、ただ、金があるばかりだ。

實際は、岡野にとつては、ただ金のみの、………金と云ふよりは、ただ賭博のみの生活であつた。彼は、友人達との交渉を絕つために、四階の廣い部屋を引拂ひ、六階の屋根裏の小部屋へ移つた。そこは、ななめの天井に、下から押しあげるやうになつた、大きな一枚硝子の窓が一つあるだけで、寢臺と、机一脚、椅子一脚、主人公一人の外には、まつたく他に席のないほどの狹い部屋であつた。隣室は、ホテルの下女、その隣はフランス人の苦學生、その隣は、毎日晝から夜まで、キヤフエ・ロトンドで賭將棋をやつては、夜の一時過ぎでないと歸つて來ない、中年の貧乏フランス人、それだけであつた。

朝のうちだけでもせめて本を讀まうと思つたのだが、最初の朝、眼をさまして、眞上の斜面をなした天井窓から、どこもただ雲ばかりの景色を眺めあげてゐると、それだけで、屋根裏生活は事足りるやうな氣がした。手をのばして、机の上から本をとることすら、餘計事に思はれた。起きることすらも、不必要に思はれた。強ひて起きる必要があると云ふなら、それは、毎朝街角の店へ新聞を買ひに行くためであつた。新聞で何を讀む？　その日の競馬の番附、競馬の豫

評を。

新聞を一度手にとると、彼の頭は俄かに活動をはじめる。キャフェの立飲臺で、朝の珈琲を飲みながら、時には、街上で三日月麵麭(クロワッサン)を噛りながら、新聞を讀み、賭馬をきめ、懐中の金を胸算用し、屋根裏の部屋へ歸つては、各新聞の豫想的中の統計を調べ、馬の斤量を調べ、騎手を調べ、迷ひ、トランプで占ひ、數字を刻明に書きつらね、收支を決算し、樂觀し、悲觀し、……やがて晝飯をすますと、葉山を誘ひ、自動車に乘り、素晴らしい夢想を抱いて競馬場へ行く。

オートウイユでは、少い日でも百法、多い日には八百法以上必ず勝つた。アンギヤンでは、いつも七八百法負けた。ヴアンセンヌでは、歸りの電車賃しか殘らないこともあつた。トランブレエでは、惜敗しつづけた。サン・クルウでは、負ける時には負けても、勝つ時には、大きな番狂はせのために莫大な勝ちをしめた。それだけサン・クルウの誘惑が强かつた。

はじめて出場する「ミカド」と云ふ馬に敬意を表し、他の馬に大金を賭けておきながら、餘興として「ミカド」に僅か五法一枚賭けておいた、それが「ミカド」一着、五法が七十八法、……もし五百法賭けたら七千八百法になつたのに、……岡野と葉山は、腕をつかみあひ、涙をこぼして口惜しがつたのも、サン・クルウであつた。

これが駄目だつたら、もう競馬はよさう、きつとこれも負けにちがひない、ほんたうにもう今日かぎりだぞと、二人誓つて、ありたけの金を賭けた「スリゼエ」と云ふ馬が、群衆の背後で二人眼をつぶつて、わざと見ないでゐる間に一着になり、三千法の勝ちを豫想し、混凝土の觀覽臺に群る人達の前も構はず、抱きあつて踊り狂つたのもサン・クルウであつた。その時狂喜したのは、彼等ばかりではなかつた。床几の上に爪立ちして見てゐた一人の男が、この大番狂は

せに、思はず知らず『スリゼエが勝つた！』と叫ぶ拍子に、床几がひつくりかへり、横ざまに倒れた、倒れても、まだ『スリゼエが勝つた！』と叫んでゐる、それを、岡野と葉山が、兩方から手をとつて起してやりながら、彼等もやはり『スリゼエが勝つた！』を連呼した。

何日も負けがつゞき、夜も外出する元氣がなく、窓をつきあげ、屋根の上に首だけ出して、夜空の下に展開するノートルダム寺院中心の巴里夜景の遠望に、わづかに氣を紛らしてゐる時でも、ふつと、あの「スリゼエ」が勝つた日のことを思ひ出すと、たちまち岡野の暗い心にも光がさした。あの時の競走を碌に見もしなかつたのに、白地に緑の一線を胸にひいた競馬服と白の競馬帽が、最後の隅角から一氣に先頭をきつて、眼の前を掠ぎながら飛び去る幻影を描いては、岡野は連日の慘敗も忘れ、たとひ葉山と、もう明日は行かないと誓ひあつてゐたにせよ、翌る日は、また必勝を期してでかけた。

いつも倚りかかることにきまつてゐる鐵柵の、或る一定の場所へ、ほとんど本能的に運ばれて行き、背をもたせかけ、プログラムをとりだしながら何氣なく隣の人を見ると、そこに葉山も、おなじやうに背をもたせかけて、プログラムを熱心に讀んでゐる。二人は、苦笑する。が、結局は、もう競馬はやめやうと誓つたりすることの、如何に愚劣であるかを他人事のやうに背をあはせて罵り、飽くまでもやりとほすことを誓つた。

『スリゼエが勝つた！』と叫んだやうな日が、一週に一度あればよかつた。五法が百八十法、百法から三千六百法、……しかし葉山と岡野は、毎日のやうに日の暮れる頃、競馬場前で默默として三法の乘合自動車に乘り、ポルト・マイヨオで降り、金がなければそのまま別れ、もし少しでも殘つてゐると、角のキヤフエの立飲臺で、無言裡にコップをかちあはせ、無言裡に飲みをはり、おもての暗い立木の下で、眼だけ見あはせ、やはり無言裡に別れる。……時には葡萄

酒を買ひこみ、葉山の部屋で痛飲しながら、『スリゼエが勝つた』夢に有頂天になることもあつたが、やがては二人とも默りこみ、ふとして視線が出合つても、何かしら憎みあつてでもゐるやうな腹立たしさで眼をそらし、めいめい考深い顏になる。………

或る日の歸りも、彼等は一本づつ、葡萄酒の壜を外套のかくしにつきこみ、クラブのあるウエペル街の暗い横町を、何某の邸宅をかこむ鐵柵に沿うて、默りがちに行つた。その時、向ふから、葉山の細君が來るのに合つた。帽子の鍔で顏をかくすやうにし、彼女は葉山の耳に何か囁いた。葉山は肯定するともつかず、呻るともつかない、妙な濁音を發して細君に答へると、岡野をうながして歩きだした。

森が、無政府主義者大會に出席するため、日本を脫出した大木と一緒に、クラブで、葉山の歸りを待つてゐると云ふのであつた。

二

葉山の部屋で四人テーブルをかこみ、葡萄酒を飲みながら語りあつたのを序幕とし、翌る日、岡野が、彼の屋根裏部屋に眼をさまし、寢床にあふのけになつたまま、ぼんやり、例の窓から空の雲を見あげてゐるのを幕切とすれば、その序幕と幕切をつなぐ中間の幾幕かは、少しも連續的記憶となつて彼に思ひおこされなかつた。

酒をちつとも飲まず、眼を生き生きと光らせ、絕えずにこついてゐる大木の顏は、何よりもさきに思ひだすことができた。葉山の部屋で、テーブルに頰杖をつき、岡野の眼を見つめて、どもりがちに何か話してゐる大木、………それもしかし、はたしてクラブであつたか、或は別のどこかであつたか、………そしてまた、どんな話をしたのか、………

突然、岡野はひやりとした。眼をさまして、天井窓から空を見あげても、まだ彼は、どこの部屋に寝てゐるのか、はつきりとは感じなかつたのだが、暫くして彼は、ホテルの六階、屋根裏の部屋に寝てゐるのだと知つた時、夜なかに、戸口の前で、百階の螺旋形階段の中心が渦巻の深い暗い穴をなしてゐる、その穴を、階段の手摺に腹をあて、上體をかがめて覗きおろしたことを思ひだし、悪感を覺えた。なんのために、あんな危險な眞似をしたのか、彼自身にも解らなかつた。覗きおろしたばかりではない、たしか手摺に腰をかけたやうでもある。さうだ、その時、隣室の下女が、シュミーズ一つで便所へ起きた。多分便所へではなく、下からあがつて來た靴音が、階段の上でとまつたきり、どこの部屋へもはいつた氣配がないのを怪しんで起きたのにちがひない。

だが、岡野自身には百の階段をのぼつた記憶はなかつた。ホテルへどうして歸つたか、……歩いてか、タキシーでか、その記憶もなかつた。往來で一度倒れた記憶はある。拳銃を肩から吊した巡査に起された。起されしなに、巡査に笑ひかけながら、拳銃をいぢつたことは覺えてゐる。そこはたしか、オランピアの前だつた。倒れた時、頭の上に赤い電燈でOLYMPIAと、はつきりは讀めなかつたにせよ、そんなやうなものを見た。

もう一度倒れたやうだ。たしか、椅子から轉げ落ちたらしい。オランピアの中だ。例の凹部だ。誰と一緒だつたらう？　壁際には、大木のにこにこ顏が、……だが、森はゐたらうか？　葉山は？　……また、なんだつて椅子から轉げ落ちたんだらう？　立たうとしてよろけたのか、それとも、エレエヌと仲直りしよう、連れて來るからとか、そんなことでも云つて、方方探しまはつた揚句。戻つて來て、椅子へかけしなにひつくりかへつたのかも知れない。さう云へば、立飲臺のところで、エレエヌと話したらしい記憶もある。彼女の美しい顏も見えて來る。彼女の魅惑ある靜かな笑顏の前に、頭をさげてあやまつたやうだ。が、あの凹部へ、エレエヌを連れ戻つたかどうか、その記憶はなかつた。

そして一體、オランピアで何をしやべつたのだらう？ なんだか知らないが、ひつきりなしに喋舌つてゐたやうだ。……小說の話だ。大木が、彼の小說を、……たしか軍隊物を讀んだことがあると云つたのに對してだつた。彼は駄駄つ兒のやうに、無茶苦茶に首を振り、兩腕を空間にふりまはし、『おれの小說なんか、……おれの小說なんか、………』と云ふやうなことを、絕望的に、泣面ででも喋舌りつづけたものらしい。

もう夜更だつたとは云へ、まだまだ人だかりのする、あんなオランピアの前で往來に寢倒れたのも、感傷的な絕望感からであつたかも知れない。ホテルの六階目から、螺旋形階段の渦卷の穴を覗きおろしたのも、やはりおなじ氣持からだつたかも知れない。……

その岡野が寢臺に寢てゐるのに、寢臺に寢てゐる岡野は、それを別の岡野として批評的に、冷かに眺めてゐた。

『なぜお前は、そんなに絕望的になるんだ？』

『なぜつて、これがおれの病なんだ。だが、お前はそんな威張つた口をきくが、おれが、かうして、眞黒けな着物にくるまり、膝を抱き、陰鬱な顏でうづくまつてるのは、ほかのどこでもない、お前の、その頭の隅つこなんだ。』

『それぢや、おれはその隅つこから、お前を追ひ出してやるよ。』

『追ひ出されれば、また誰かの頭の中へはいるまでのことだ。おれの兄弟分は世界中のどこにでもゐて、おれの行くのを何時でも待つてゐてくれるよ。』

『それぢや、おれはお前を殺してやる。』

『おれは決して死なないよ。時に死んだ眞似はする。だが、やがて、そつと眼をあけるんだ。』

『それぢや、お前のその病を、どうにかして癒すことにしようぢやないか！』

『泣言を云ふやうだが、出來ることならさうしてくれ！』

『たうとう弱音を吐いたな！　いくらお前でも、絶望の暗闇で生涯を終りたくはないと見える。それぢや起きて競馬へ行かう！　競馬へ行けば、きつとお前も、踊りあがるにちがひない。』

『それが駄目なんだ。お前は競馬へ有頂天になつてゐるから、一度も氣がついたことはないかも知れないが、おれは一度だつて、顏をあげて、競馬を見たことなんかない。やつぱりいつもとおなじやうに、かうして、お前の頭の隅つこで、兩膝を抱き、暗い顏でうなだれてゐるんだ。おれは誰にも殺されないとは云つたが、このままの生活がもう少し續いたら、自分で自分をどうにかしてしまはないとも限らない。ゆうべのやうに、お前が醉つぱらつて知らないでゐるうちに、そつと、階段の渦卷の底へ、おれ一人もぐりこんでしまふかも知れない。………ほんたうは、おれは何處かへ行きたいんだ。旅へ連れて行つてくれないか？　イタリイへでも、………』

『イタリイへ？』

『さうだ、イタリイへ連れてつてくれ！イタリイには何かありさうだ、ほんたうの道を辿つた人間が砂地に殘した足跡、それのたつた一つでも見れば、おれはきつと生きかへる。起きて、窓からそとを見るがいい。もう四月ぢやないか！この四五ケ月、お前の眼には自然の推移も映らなかつたらう。窓から顏を出して眺めるがいい。春は巴里の城廓外あたりまで追つてゐる。おれも甦りたくなつた！』

『甦りたかつたら、勝手に甦れ！おれは寢てゐるんだ！そして、起きたらまた競馬へ行くんだ！……お前が昔愛讀したボードレエルの散文に、こんなのがある。………「人生は病院だ。病人は誰も誰も、絶えず寢臺をどこかへ移したがつてゐる。一人火のそばへ寄りたがり、一人は、若し窓際へ行つたらきつとよくなるのにと思ふ。たましひは常に、どこ

かもつと幸福な國へ住居を移したがつてゐる。リスボンでもない。オランダでもない。バルチツク海の涯でもないし、オーロラの輝く極北でもない。またしまひは地上の世界のそとの何處かを望んでゐるのだ。……』ちやうど、お前そつくりぢやあないか。そんなたましひを、おれは殺してやる。おれはお前を憎む。おれが世の中に生きてゐて、何に歡びを感じ、何に戰慄するか、それも解つてくれないやうなお前なら、殺されたつて仕方なからう。』

『殺されても、死なないよ。だから、そんなことは云はずに、今日はオペラへでも行かう!』

『いやだ!』

『ぢや音樂會(コンセエル)へ。』

『いやだ!』

『ぢや、これ一度でいいから、ルウヴルへ行かう!「モナ、リザ」を見に、……』

『モナ、リザ」なんか一度見ただけで澤山だ。』

『それぢや、どうしても競馬へ行くのか?』

『さうだ、競馬へ行くよ。行かう、行かう!鐘の音がきこえるやうだ。薄日もさして來た。行かう!』

屋根全體を背棚のやうにして、岡野は窓から巴里を愉快に眺めわたした。なるほど、空の涯に見えるそちこちの塔も霞にぼかされ、春らしくなつてゐた。屋根をわたる微風も、岡野の頰を生暖かく擽り、街のどよみも、セエヌがよひの小蒸汽船の汽笛も、もう冷い冬の音を傳へはしなかつた。

彼は敷煉瓦のゆかに足踏みしながら着物を着換へ、やがて輕快に、跛馬のやうな跳び足で階段を駈けくだつた。

三

殊に郊外のセーヴルは、巴里よりも春に近かつた。垣根際には青草が萠え、窓の前には桃の花も咲いてゐた。岡野は窓に腰かけ、雲ににじむ薄黄ろい月の光にすかして、桃の枝に花と蕾を讀みわけ、花の數をかぞへたりした。

その日競馬に行くつもりで、N・F銀行に預金をひきだしに行つたのに、支配人の日吉の事務室で偶然森に會ひ、そのまま話しこみつひ日吉の晩餐によばれて、一緒にセーヴルの邸宅まで來た、そのために競馬にも行けなかつたのだが、岡野は悔いもしなかつた。第一に、セーヴルの初春の夜が氣持よかつたから。第二に、ともすれば食ひちがひがちな森とも珍らしく打解ける機會を得たから。

だが、やはりさうではなかつた。岡野にも森にも、何かしら平和を好まないものが潜んでゐるのらしい。晩餐後、日吉は二階の寢室へ、マダムはオペラの無電放送をききに、おなじやうに階上へあがつて行つた、そのあとで、四人、……日吉の家に寄食してゐる山下と吉村と、それに森と岡野と、食堂のテーブルをかこみ、ウイスキイを飲みながら雜談に耽つたのだが、おどけたおちよぼ口で、いつも眼元に笑ひを浮べて人の逸話をぼつりぼつり喋舌る吉村と、額の廣い額をあまり表情で崩さず、ただ折折眼に神經をひらめかし、無口でゐる山下と、その二人を右左にして、さし向ひになつた森と岡野は、時には笑ひ、時には元氣よく喋舌つてはゐたものの、そのひまひまに、機會を狙つては、鋭い眼で相手の眼の中を覗きこむことを忘れなかつた。

たうとう來た！二人ともテーブルに兩肘をつき、兩の拳をそれぞれ頬にあてゝ、ぢつと睨みあつた。

『やい！なんだつて人の面(つら)を睨んでやがるんだ！』

『貴様こそ、なんだつておれの面を睨んでやがるんだ！』

『手前の面が、氣にいらねえからよ！なんでえ、その秀才面は！日本へ歸れや、大學教授つて面してやがる！　虱の糞のくせしやがつて！』

『なんだと？　手前の雁首こそ、なんでえ！洗ひそこなつた牛蒡みてえな面しやがつて、失戀もへつたくれもあるもんか！セエヌ河へ三年もつかつて、よつく洗つて來い！』

『こん畜生！　やい！　表へ出ろ！』

森は立ちあがつた、岡野も立ちあがつた。二人とも、ひきちぎるやうに上着をゆかへ脫ぎ捨て、憑きものゝしたやうな荒々しさで、玄關から表へ出た。

わづかに月のありかが知れるほどの朧ろげな空あかりをたよりに、二人は、植込の間の砂利を敷きつめた前庭に、少し離れて身構へた。最初は、岡野が猛然飛びかゝつて、森をあふのけざまに、リラの藪へ突き倒した。次には、起きあがつた森が、兩腕を振りまはして岡野に肉迫し、砂利の上に岡野を組み倒した。森は野蠻な叫り聲をたてながら、岡野の胸を壓した。岡野は齒ぎしりしながら、下から森をはねのけ、組あつたまゝ地上を轉げまはらうとした時、吉村と山下にひきわけられた。

が、食堂へ歸つても、まだ二人は睨みあつてゐた。

『どうだ、負けたらう！』

『手前こそ負けたらう！』

『手前が負けたんだ！』

『嘘つけ！　負けたのは手前だ！』

『ぢや、もう一遍やらう！』

『よし、やらう！』

一度着た上着をまた脫いで、森よりさきに岡野が廊下へ飛び出した時、そこにマダムの心配さうな顏を見つけて、彼

はちよつとたじろいだ。

『何したんですの?』

『遊戯ですよ、日本の遊戯、………てれかくしに岡野は笑つたが、そのうちに森がうしろから迫つて來るを感じ、すぐに緊張した。マダムはそれを遮り、山下と吉村に森を食堂へ連れこませ、岡野には、階段をあがつて行くやうに促した。

二階の部屋で、岡野は、亂鬪後の快い疲勞を感じながら寢床についた。綠色の窓懸をとほして來るかすかな外光は、白い寢台の所在だけをぼんやり知らせてゐた。窓際のもう一つの寢台には、やがて森が寢なければならないのだが、………不思議にも森と擲りあひをやつたあとの氣持は、さつぱりしたもので、少しの敵意も感じなかつた。

やがて階段を誰かのぼつて來る靴音を、壁越しに岡野はきいた。

『こゝか?』戸の外で森の聲がした。

『こゝだよ。あかりはつかないんだ。』岡野は起きて、寢臺に腰をかけた。

森がはいつて來た。

『さつきは、やつたねえ。』

『うん、やつたねえ。』

暗闇のなかで、二人は手を握りあつた。

『寢ろよ。』

『うん。』

二人とも寢た。

靜かだ。たつた一度、森が寢がへりをうつたのを、寢臺のばねの音で岡野は知つた。それきり、室內には何の音もしない。戸外にも、物音はない。

岡野は眠つた。



青塚氏の話

谷崎潤一郎

（前篇のつゞき）

暗いのでよくは分らなかつたが、その西洋館は丘の上にぽつりと一軒建つてゐるので、隣り近所に家はないらしく、あたりは一面の籔か森であることは、今も云ふ青葉の匂ひや、土の匂ひや、もののけはひで感ぜられる。さうして欝蒼とした影が背後をうづだかく蔽つてゐる樣子では、うしろは崖か山になつてゐるのだらう。石段を上り詰めると、突きあたりの正面に、白壁を仕切つての龕のやうに凹んだ入口がある。入口の扉は三尺ばかりの板戸であると思つたのだが、近づいて見るとガラス戸であつた。家の內部に明りが燈つてゐないので、それが遠くからは黑い板戸に見えたのであつた。さつき石段の下から望んだ一點の燈火は、その龕のやうな凹みの眞上に、圓筒型のシエードに入れられて、白壁の上へ朦朧と圈を描いてゐる。西洋館とは云ふものの、此の外構への鹽梅では、四角な、平家の、晝間見たらば殺風景な掘つ立て小屋のやうなものらしい。……

彼ははつはつと息を切らしながら、ポッケットから鍵の鎖をカチャカチャと取り出して、入口の扉を開けた。私は彼のあとに續いて土間へ這入つた。彼は內部から今の扉に鍵をかけて、泥だらけの靴を脫いで、手さぐりでスリッパアを穿いたやうだつた。——何處かにスヰッチがあるのだらうに、明りをつけようとはしないで、暗闇でやつてゐるのである。外の門燈がガラス戶を透してぼんやり映つてはゐるものの、その覺束ない光線では、土間の樣子はさつぱり私にはわからない。はつはつと云ふ彼の吐息が俄かに酒臭く、けぢかく反響する工合から察すると、此の玄關はわりに狹いのに違ひなく、ひどく窮屈な壁の間へ閉ぢ込められたやうな氣がする。と、彼は再び懷中電燈を照らし始めた。光の先を床の方へ向けながら、何か捜し物をしてゐるらしい。光がチラリと通り過ぎるあたりに、支那燒のステッキ入れと、鏡の附いた帽子掛けの台が見える。台には帽子が三つ四つ懸かつてゐる。ソフトの中折れと、鼠色の山高と、烏打ち帽と、普通の麥藁と。……台の下には革のスリッパアが二三足あつて、中に一足、派手な鴇色の絹で作つた、踵の高い、フランス型の女のスリッパアが交つてゐる。——私が第一に驚いたのは此れであつた。と云ふのは、それは大分穿き馴らしたものらしく、脂じみた足型がついてゐるのであるが、若し此のスリッパアを默つて見せられたら、私はきつとお前のものだと思ふであらう。それは私の家にある、お前の穿き古るしたスリッパアにそつくりなのだ。同じ所に皺が寄り、同じ所に踵や趾の痕が出來、同じ足瓣で汚れてゐるのだ。私はそれが眼に觸れた瞬間、お前の美しい足の形を明瞭に心に浮かべた。兎に角にも、そのスリッパアはお前の足と同じ足が穿いたのだ。「おや、うちの女房が來てゐるのかな」と、私はさう思つたくらゐだつた。

彼はそのスリッパアを大切さうに傍へ置いて、——恐らくわざと私に見せたかつたのであらう、——革のスリッパアを一足取つて、「此れを穿き給へ」と私の前に投げてくれたが、それきり懷中電燈を消してしまつた。さうして先へ立ち

ながら、暗い廊下を眞つ直ぐに進んだ。二人が一列にならなければ通れないほど狹いところを、彼はよろよろと兩側の壁へぶつかりながら行くのである。自分のうちへ歸つて來たので、氣が弛んだのかも知れないが、さう云ふ私も餘程飮まされてゐたに違ひない。何しろまるで入梅のやうなじとじとした晩だつたから、その家の中は蒸し風呂のやうに生暖く、おまけに彼の酒臭い息が廊下にこもつて、ぷうッと顔へ吹きつけて來る。私は襟元がかつかつと上せて、一ぺんに醉が發したのを感じた。

「さあ、先づ此處へ這入つてくれ給へ。」

廊下の突きあたりへ來た時に、彼はさう云つて左側の部屋へ私を通した。それから彼はマッチを擦つて、ゆらめく炎を翳しながらつかつかと室内を五六歩進んだ。見ると一個のテーブルがあつて、上に燭台が載つてゐる。その蠟燭へ彼は手の中の炎を移した。

蠟燭の穗が次第に伸びるに從つて、そのテーブルを中心に濃い暗闇がだんだん後ろへ遠のいて行つたけれども、まだ此の部屋がどのくらゐの廣さで、中にどう云ふものがあるのか見究めることは出來なかつた。ちようど此の時、私と彼とは燭台を挾んでさし向ひに椅子へかけた。私の視線は一とすぢの灯影を前に赤々と照らし出された相手の顔へ、期せずして注がれたのであつたが、私が見たものは實は顔ではなく、腦天のところがつるつるに禿げた頭であつた。彼は台灣パナマの帽子を脱いで、テーブルの上に置いてゐた。さうしていかにもくたびれたと云ふ恰好で、椅子の背中へぐつたりと身を寄せ、糸のちぎれた繰り人形のやうに兩腕を垂らし、首を俯向け、未だにはつはつと吐息をしてゐた。だから彼の顔の代りに、その禿げ頭がまともに此方を見返してゐたと云ふ譯になる。けれども私の醉眼にそれが人間の頭であると呑み込める迄には、多少の時間を要したのであつた。私は彼がこんな立派な禿げ頭を持つてゐようとは、今の今まで想

像もしなかつたのだから。成るほど前額にも後頭部にももぢやもぢやとした縮れ毛があつて、ぐるりと周圍を取り卷いてゐるから、帽子を被れば巧い工合に隱れるのである。私は暫くアッケに取られて、その蛇の目形に禿げた部分をしみじみと眺めた。もう此の男は「五十に近い」どころではない、たしかに五十を二つか三つ越してゐるだらう。……と、彼はいきなり、物をも云はず立ち上つて、部屋の隅の方へあたふたと駈け付けて、又何かしら飲んでゐるらしく、ゴクリ、ゴクリと、見事に喉を鳴らしてゐる。はゝあ、先生、醉ひざめの水を飲んでゐるんだなと、その飲み方があまりがつがつしてゐるので、私は最初さう思つたのだが、よくよく見ると、隅ツこの所に洋酒の罎を五六本列べた棚があつて、彼はその前に立ちながら、獨りで聞し召してゐるのである。さうして五六杯も立て續けに呷つてから、濡れた唇をさもうまさうに舐めずりながら、――よだれで濡れてゐたのかも知れない、――私の方へ戻つて來て、今度はそこに突つ立つたまゝ、テーブルの上の燭台を取つた。

「さあ君、女房に會はせて上げよう。」

「へえ、――ですがどちらにいらつしやるんで?」

「向うの部屋だよ。そうツと僕に附いて來たまへ、今すやすやと寢てゐるからね。」

「およつていらつしやるんですか、そいつはどうも……」

「なあにいいんだ、此處が女房の寢室でね。――」

さう云つてゐるうちに、彼の手にある蠟燭の火は既に隣室の入口を照らした。

それは何とも實に不思議な部屋であつた。部屋と云ふよりは押し入れの少し廣いやうなもの――と、まあ蠟燭のあかりではさう見えるのだが、そこと今までゐた部屋とは、濃い鰕色の帳で仕切られてゐるだけで、それを芝居の幕のやう

にサラリと開けると、中にも同じ色の帳が三方に垂れてゐて、まん中に大きな寢臺がある。――だから寢台が殆んど部屋の全部を占めてゐると云ふ形。で、その寢台がまた、日本の昔の張台のやうに、四方を帷で圍つてある、つまり支那式のベッドなのだ。さうしてまたその寢台の帷が――――此れもハッキリとは分らなかつたが、――――暗綠色のびろうどのやうな地質なので、かう幾重にも暗い布ばかり垂らしたところは、何の事はない、松旭齋天勝の舞台だと思つたら間違ひはない。

「此處に女房は寢てゐるんだが、何處から先へ見せようかね、――背中にしようか、腹にしようか、足にしようか。………」

と、彼は手を伸ばして、帷の上から中に寢てゐる女房の體と覺しきものをもぐもぐと揉んで見せるのであつた。その眼は怪しく血走つて、さも嬉しさうなニタニタ笑ひを口もとに浮かべながら。…………

かう書いて來れば、その寢臺の中に寢てゐた者が何であるかは、無論お前にも分つただらう。私も實はそれが人形だらうと云ふことは、もうさつきからの彼の口ぶりで豫想しないではなかつたのだが、玆に誠に氣味のわるいのは、それがお前に生き寫しであるばかりでなく、彼はさう云ふ人形を、――彼の所謂「由良子の實體」なるものを、――幾體となく持つてゐるのだ。即ちお前の寢てゐる形、立つてゐる形、股を開いてゐる形、胴をひねつてゐる形、――それから到底筆にすることも出來ないやうな有りと有らゆるみだらな形。私が見たのは十五六だつたが、彼の言葉に從ふと「うちには由良子が三十人も居る」と云ふだ。

私はよく、船員などが航海中の無聊を慰めるために、ゴムの袋で拵へた女の人形を所持してゐると云ふやうな話を聞いたことがある。しかし實際にさう云ふものを見たことはなし、又そんなことが有り得るかどうかも疑はしいと思つてゐたけれど、此の男の人形はつまりそれなのだ。彼はそれらの三十人もある「女房」を、一つ一つ丁寧に疊んで、風呂敷に包んで、棚の上へ載せてあるのだ。例の天勝式の裝置、——寢室の三方に垂れてゐる帳のかげに、その棚は幾段も作つてあつて、一段一段に、何か暗號のやうな文字で印がつけてあるのである。お前は彼が、

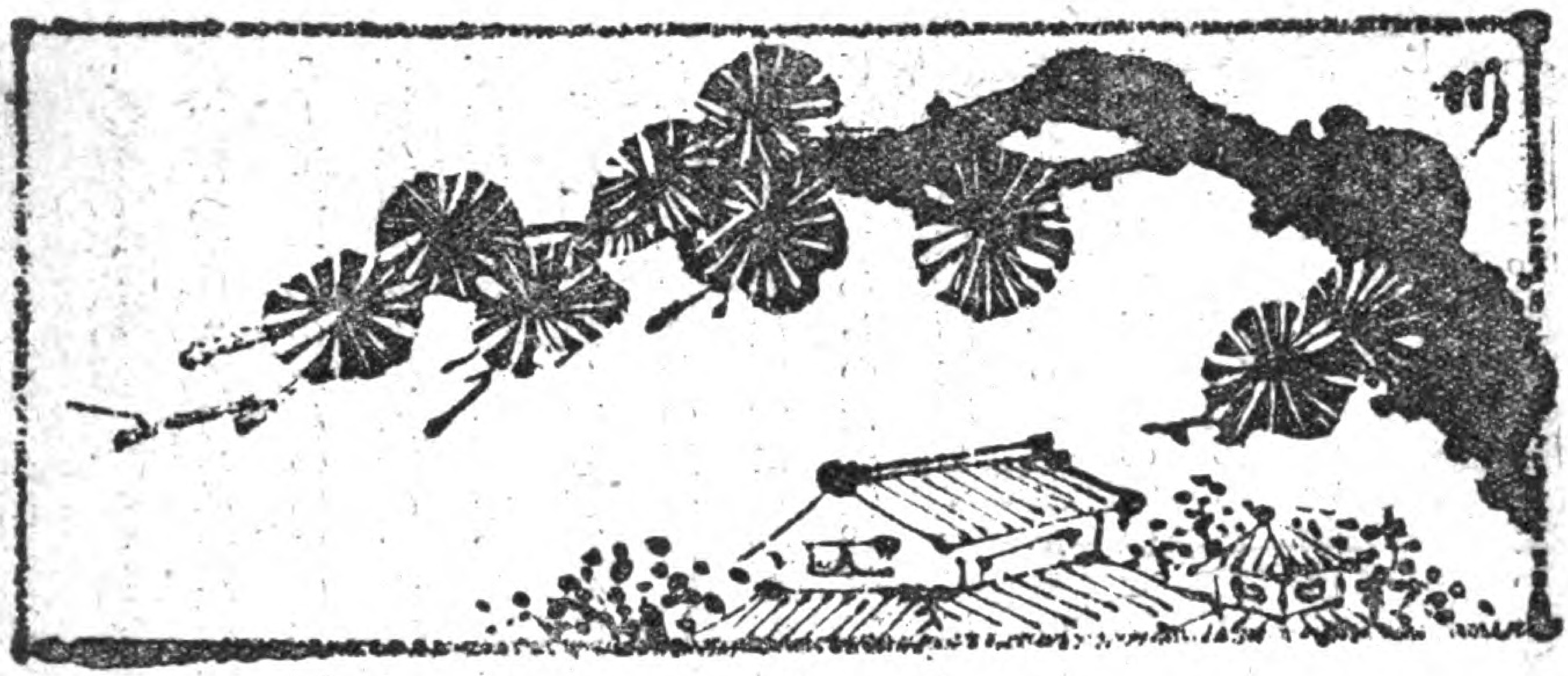
「さあ、今度は女房のしやがんだところを見せようかね。」

と云つた工合に、呉服屋の番頭が反物を取り出すやうないそいそとした恰好で、それを棚から卸して來る時の滑稽な樣子を考へて御覽。さうしてそれらの等身大のお前の姿が、十五六人も默然と列んで、物靜かな、しーんとした深夜の室内に立つたところを想像して御覽。おまけに彼がその平べつたく疊んだものを膨ます手際と云つたら、實に馴れたものなのだ。水道をひねつて瓦斯に火をつけると、直ぐにお湯が出て來るやうな仕掛けがしてあつて、——此れも帳のかげにあるのだ、——そこから管を引張つて人形の孔へ取りつけると、見てゐるうちに膨らんで來る。それが次第に一個の人間の形を備へ、だんだん細部の凹凸がはつきりして來るに從つて、腕から、肩から、背中から、脚から、紛ふ方なきお前を現ずる。水を注ぎ込む孔の作り方と位置に就いても、馬鹿々々しい注意が拂はれてゐて、氷枕の栓のやうなあんなぶざまなものではないのだ。一つ一つの人形に依つて皆適當に考へてあつて、それを詳しく説明することはお前に對する冒瀆のやうな氣がするから、私は此れ以上を云ふことが出來ない。彼は恐らく、水を注ぎ込むと云ふその事自身を享樂してゐるに違ひあるまい。「君、僕は造化の神樣と同じ仕事をしてるんだよ。昔の神樣がアダムとイヴを作る時には何處から息を吹き込んだのか知らないが、面白くつて止められなかつたに違ひないぜ」と、彼は云ふの

だ。

お前は定めし、そんなものがいくら自分に似てゐると云つても、ゴムの袋ならたかが知れてゐる、どうせたわいのないものだらうと思ふであらう。彼がいかにしてあの驚くべき精巧な袋を縫ふことが出來たか、その凄じい苦心の跡を語らなければさう思ふのも尤もだけれども、一と通り説明を聞いた私にも、さて自分でやつて見ろと云はれたら、到底あの眞似は出來さうもない。云ふ迄もなくそれは材料の買ひ入れから最後の仕上げまで、悉く彼一人の手で作られたもので、彼の工房へ這入つて見れば、決して僞りでないことが分る。お前はそこに、凡そお前の肉體に關する得られる限りの參考資料が、途方もない執拗と丹念を以て集められてゐるのを發見するだらう。人は總べての表面が鏡で張られた室内へ閉ぢ込められると、遂には發狂するものださうだが、お前はきつと、ちやうどそれと同じ氣持ちを味はふだらう。

(つゞく)



万年大學生

久米正雄

約束の期日が迫つてゐるのに、原稿が少しも出來ないので、躊屈に躊屈を重ねてゐるところへ、美術學校の鑄金科に居る、年少の友人が遊びに來た。が、さう話もハヅまなかつたので、私は一緒に散歩に出た。久しぶりで本郷通りを溯つて行つたが、街筋は少し埃つぽかつたので、赤門を入り、大學構内の樹の多い方へ、向けるともなく足を向けた。

まだ震災の殘骸が、それから一年以上は經つたけれども、悉くは取り除けてない時分だつた。入つて直ぐ左り手の、醫科の教室や圖書館が、燒けたり崩れたりした跡は、それでも煉瓦壁はすつかり取毀つて、一隅に順序よく積み重ねられ、其向うに巨大な足場がゝりなぞが出來て、再築しかゝつて居る樣子だつたが、そこらの舊態はまるで無くなつてゐるので、構内の案内は充分知つてゐるつもりだのに、私には道が分らなかつた。私たちは中庭の池の方へ出ようと思つたのだつた。其處へ行く一番の近道として、圖書庫の裏を拔けるのが、最も便宜だつた記憶があるので、

私は亂雜な積み煉瓦の間を辿つて、其方向へ友人を導いて行つた。すると、街で路次口を間違へたやうに、とあるバラック建の平家の裏で、先が行き詰まつて了つた。

立停つて見ると、その文化住宅の長屋めいた建物には、何處の寄宿舍にも通有な、大きな横窓が並んで明いてゐた。そして其一つの窓枠の中には、一人の大學生らしいのが、俯向いて何か書いて居るのが見えた。突嗟に私は、ハ、ア、是が近年出來たと云ふ話の、大學の寄宿舍だなと覺つた。そして何だか先輩めいた慕しさと好奇心とを覺えた。それに丁度道が行き詰つたので、其拔ける方向を訊くために、其窓へ近づいて行つた。

其途端に、向うでも、窓外に近づく人の氣勢を感じたと見えて、ふと顏を上げた。私はその男と顏を見合せた瞬間、オヤと思つた。その五分刈にした頭の形にも、其やゝ赤味を帶びた圓い顏貌にも、其小狡さうに見える二重瞼の下の三白眼にも、私は非常に見覺えがあつた。それは直ぐ思ひ出せたが、高等學校時代に、同級だつた五百木の風貌に、非常によく似てゐるのだつた。似てゐると云ふよりも、殆んど同一だつた。

私は思はず瞳を凝らすやうにして、暫らく彼を見定めた。見れば見る程似てゐた。が、私が高等學校を出たのは、大正二年だつたから、それから既に十年以上も經つてゐるのに、からも其時分と變りなく、からも同一印象を持續してゐるのは、却つて他人の空似でなければならないと思はれる位だつた。

さう一瞬間思つてゐると、彼の方でも、私をしげ〳〵と見返してゐる樣子が、どうも舊知かどうかを疑つてゐるやうな、一種の親しみに似た眼色を、ハッキリ現して居た。――それを見て取つた瞬間、私はもう間違ひなく五百木だと感じた。

「……ヤア。五百木ぢやないか？」

私は思はず大聲で、さう呼びかけ乍ら、窓の直下へ近づいて行つた。意外な偶會に、心臓が少し高く鳴るのを覺えた。

「やア。久野か？」

彼もさう云ふと、卓子の所から立上つて、窓枠の所までやつて來た。窓はさう高くないので、二人はさう高低なく相對する事が出來た。

「此處に入(はい)つてゐるのか？」

私は四邊を鳥渡見廻すやうにして云つた。

「うむ。まだこんな所にごろ／＼してゐる。」彼の顔には、小供のやうな羞笑が、ちらと赤みをさした頬を過つた。そして猶もぢつと私の方を見下し乍ら、「君は隨分變つたな。餘り老けたんで、鳥渡分らなかつたぞ。」

と昔通りのゾンザイな言葉つきで云つた。

「うむ。いろ／＼苦勞が多いんでね。頭なんざア、こんなに薄くなつて了つた。」

私は微苦笑をし乍ら、自ら禿げ上つた頭髪に手をやり、それを隱すやうに帽子を被り直して、再び又彼の、五分刈にした無雑作な、イガ栗頭を見比べた。それは伸ばして分けて居ないだけに、到底私と同年輩とは見えないで、せい／＼年齢を多く見ても、二十九か三十位の青年の頭としか思はれなかつた。で、更に付け加へて云つた。

「……それにしても君の變らないには驚いたね。餘り變らな過ぎるんで、君ぢやあるまいと思つた位だよ。」

「是でも相應に苦勞はあるんだがな。」と、彼も自ら嘲笑するやうな顔を、窓枠から乘り出させて、「根が鈍(どん)だからだらう。」

「何時から此方に居るんだい。——ちツとも知らなかつた?」

私は話頭を轉じて訊いた。五百木は、たしか私たちが高等學校を出る時は、獨逸語か何かに落第點を取つて、一年遲れて卒業した筈だが、其時になつて急に文學志望を變へて、京都大學の法科に轉じて了つた事までは、私も噂に聞いて知つてゐた。——其頃は誰しもがさう云ふ岐路に立つてゐた。かく云ふ私なぞまでも、文學者や創作家として立たうとするには、前途に多大の困難があるのを案じて、餘程京都の法科へ移つた方が、策の得たるものかも知れないと考へた。其時分は高等學校の純文科即ち一部乙の卒業生は、東京の法科へは入れなかつたが、京都なら自由に入學を許した。で、高等學校を出た仲間でも、もと〱法科志望なのが、人員過多で文科へ廻されてゐた連中初め、もとから純粹に文科志望の者でも、悧巧な人々は相次いで京都へ去つた。私たちの組でも、一年から首席を續けて來て、自他共に英文學の秀才を以て目してゐた須藤君まで、文學に見切りをつけて、京都へ行くと聞いた時は、私たちもひそかに考へ直した。この須藤君の感化で、純文志望の者でも、三四人は變つた。が、私は何だかまだ文學を今日になつて見捨てる氣が出なかつた。それに東大ならともかく、京都へ行くといふことが、心細くて厭やだつた。そしても一つは、餘りに同級の人たちが去つて了ふので、意地でも一つ踏み止まつてやらうと云ふ、反抗めいた氣分もあつた。そしてまかり間違つて、田舍の中學教師で朽ち果てようとも、初一念を貫徹して、やれる所までやつて見ようと、辛うじて決心を固め直したのだつた。……さうして純粹の英文科に、殘つた者と云ふのは、私の外には柳川保吉と成田俊一の三人しか無かつた。柳川は俊秀な都會青年で、頭腦もよく家庭も裕かであつた爲に、好な志望を變へずに濟んだが、彼とても寧ろ作家たるよりは、せめて高等學校の敎授か、うまく行つて一と角の英文學者として立ち得れば、それで滿足だと思つてゐたに違ひなかつた。成田は寧ろ初め法科志望だつたのを、家が富豪で後顧の患もない上に、俗世間的な立身出世を輕蔑する思想に傾い

ていたので兩親の意志にさへ反抗して、逆に熱心な文學研究を志したのだつた。此の外にもとの仲間には、木村啓吉が居たけれど、彼は別な事情で京都の法科でなく文科へ、籍を置く事になつた。

さう云ふ事情で、私は五百木たちと東西に分れて、手紙のやり取りもせず、殆んど忘れて數年を過した。其間に私たちは在學中から、同人雜誌を發刊して、幸ひにそれに載せた創作が認められ、卒業する前後から新進作家として立つ事が出來た上に、丁度うまく世間の文學熱と平行して、此處四五年ばかりの間に、仲間のものは大抵文壇の中堅作家として各自の地位を樹立する事になつて了つた。

幸運も幸運には違ひなかつたが、辛苦でない事はない十年間だつた。その十年は他のいづれの年代にも增して、永く且つ重い十年間だつた。そしてその十年間を經て、もう大學に居た事さへ、遠い昔話にでもしようと云ふ際に、思ひもかけない昔通りの、五百木の姿を此處に發見しようとは！

私が「いつから此處に居るんだい」との問ひで、彼のその間の生活を、訊ねたかつたのも無理はなかつた。

五百木は、さう聞かれると、さすがに鳥渡面伏せたげな顏色を見せたが、やがて寧ろ今猶かうした生活をしてゐる事を、誇りに思つてゐるかのやうな、生々した語調で言ひ出した。

「……うむ。あれから暫らく京都に居たけれどな。どうも餘り面白く無いんで、それに鳥渡頭腦を惡くしたもんだから、一二年田舍に引込んでゐたんだよ。が、さればと云つて百姓してゐるのも退屈なんで、又一昨年から此方へ入り直したんだ。新規蒔直しと云つた形でな。」

「ふうむ。さうか。」私は彼が、迷つたり愚圖ついたり、休んだり續けたりしてゐる心持が、それだけの對話で、大方察せられる氣がした。「そして今は何をやつてゐるんだ。」

「經濟。尤も例に依つて、それも籍だけ置いて居るんだ。どうも今更、眞面目に勉强する氣にもなれんからな。まア呑氣に、ゆつくりやつてゐるのさ。」

彼は淋しく笑つて見せた。

「呑氣で、全く羨ましいなア。まつたく、露西亞の大學生みたいぢやないか。」

私も微笑を返す外はなかつた。

「何が羨ましい。君たちこそ、鳥渡の間に流行作家になつちまいやがつて。毆るぞ!」

さう云つて彼は又聲を立てずに、口だけ大きく開いて笑つた。

「…………」

私は仕方なしに笑つてゐた。

「此頃は木村の野郎も、大した勢ひぢやないか。遠くから見てゐると、俺たちなんさア、迚も足許へも近寄れないやうだが、相變らず元氣か。」

彼はそんな事を訊ね出した。

「うむ。何だか此頃は心臟が弱くなつたとかで、悲觀してゐるよ。ほんとに、みんな働き草疲れつちまつたのかも知れない。……」

私は、文壇の一部から、そんな事でも云はれたら、躍起となつて反對もし兼ねない癖に、彼の前では思はずそんな風に云はざるを得なかつた。

「だが、君たちみたいになつちまへば、もう占めたものさ。――木村に會つたら、宜しく云つて與れ。時々君たちにも

會つて見たいと思ふんだが、何しろ、もう偉く成り過ぎてゐるんでなア。」
「そんな事はないよ。遊びに來て呉れ。木村だつて、君が訪ねて行つたら、喜んで歡迎するだらう。——俺は本郷五丁目の、美滿津の裏通りに住んでゐるから、序があつたら、遊びに來いよ。」
さう云ひ乍ら、何だが私は腹の底で、彼に來られては、珍らしい話もある代り、何か困るやうな感じがして言葉を切つた。
「うむ。行かう。家は大體見當がついてるから。——」
彼も、さう進んでは居なかつたが、そんな風に答へた。
「時に、池の方へ出るには、どつちへ行つたら一番近いんだい。震災後、すつかり地理が變つて、まるで見當がつかないんだが。——」
私はやうやく、後ろに待たしてゐる友人を、顧みるやうにして云つた。年少の友は、二人の話を邪魔すまいと、稍々遠く離れたところに、ボンヤリ外を眺め乍ら立つてゐた。
「何だ散歩か。——池の方なら、…さうだな。矢つ張り此の寮について、表ての方へ廻るのが一番だらう。」
「抜けられるんだね。」
「うん、抜けられる。」
「有難う、ぢやア失敬。」
「失敬。—その中ちにほんとに遊びに行くかもしれんぜ。」
「あゝ來給へ。…おい原田君、此方から廻らう。」

さう云ふやうな事で、私は友と一緒に、寮の裏手から表口へ廻つた。と、其處は池の端へ出る、大通りに面してゐた。

暫らく歩いて行つたところで、道の左右から樹が被ひかぶさるやうな、池の上道まで來ると、その年少の友原田は、私の方を親くやうにして訊いた。

「……あの、今の人、あの人は貴方の何ですか。」

此の年少の友には、私に向つて隨分ゾンザイな、親しげな口をきく大學生を、不思議に思つたらしかつた。

「うむ、あれかい。」五百木の事を、猶も考へ續けてゐた私は微笑して答へた。「あれは僕の舊友でね。高等學校時代の同級生だよ。」

「へえ?同級生。―だつて隨分年が違ふぢやありませんか。」

原田は眼を三角にして見せた。

いや、あれで年は僕と違はないんだよ。ひよつとすると、一つ位、向うが上かも知れないんだ。が、境遇と云ふものは恐ろしいもんだね。幾らか着物や何かのせいもあるだらうが、向うはまだ學生々々して、どうしたつて三十にはならないやうに見える。それだのに僕は、もう四十位に見られるんだからね。其の間の開きたるや、大變なものに見えるんだよ。」

「へゝえ、さうですか。」原田は猶も感嘆するやうに、「年も違つて見えるが、境遇も隨分違つてゐるもんですね。一體貴方が高等學校を出てから、何年になるんです。」

「さうさね。十年には成るだらうね。」

私は遠い空を見るやうにして、咏嘆的にさう答へた。

「これでゐて、向うはまだ大學生なんですか！」

原田は、呆れるやうにして、もう見えもしない寄宿舍の方を振り返つた。

「まるで、トロピモッだね。あゝ云ふ男が、日本にも居るんだから面白い。」

「まだ文科大學に居るんですか。」

原田は益々好奇的に訊ねて異れた。さう訊ねて呉れる事は、私の感慨をそれとなく語るのに、都合よかつた。

「いや、もとは同じ文科に居たんだが、中途で文學に見切りをつけ、志望を變へて、法科へ移つちまつたんだがね。あの男だつて、僕らと一緒にやつて來れば、今時分は相應の作家になつて居たかも知れない。——尤も作家になんぞ成るより、あゝしていつまでも學生で居た方が、幸福かも知れないけれど。……」

私は何か、そんな風な云はずともいゝ事を、付け加へずに居られなかつた。

原田の興味は益々加はつたらしかつた。

「へゝえ、ぢやア、さうするとあの人も、中途で法科へなんぞ變らなければ、さしづめ、貴方がたと同じく、新思想同人になれた人なんですね。」

「あゝ、さうとも。」私は深く點頭いた。「なれたどころか、僕たちが初め、第三次新思想をやり出した時分は、まだ杉浦と一緒にあの男も高等學校に一年遲れて殘つてゐる時分でね。僕たちがあの男を同人にしようと思つて、勸誘に行つた事さへあるんだよ。」

私はさう云つて、當時の狀況を思ひ出し乍ら、言葉を切つた。ゆくりなく、若い日の吾々の姿が、眼の前にハッキリ

浮び出て來た。

「はア?さうすると、どうだつたんです。」

「さうするとね、其時分、思想的に云へば、そんな熱心な文學青年の僕たちより、彼の方がずつと徹底した、一種のデガダンな、虚無的な傾向を持つてゐたらしいんだね。彼はまだ高等學校生の癖に、一とかどの遊蕩兒になつてゐて、吉原に馴染の花魁が出來てゐると言ふ始末だから堪らない。其時彼はあの追分の、テモテ教會の向ひにある、下宿の一つに泊つてゐたんだがね。丁度僕が其話に行つた時は、惡友たちと一緒に、朝歸りの牛肉か何か食つてゐる際でね。もう文學なんてものを、すつかり見くびつて了つてゐたらしい彼は、そんな同人雜誌を、金を出して發刊し合ふ位なら其金で遊びに行つた方が増しだなんて、膠もなくやられた末、まア君達でやれるだけやつて見給へ、なぞと冷笑される仕末さ。それでいゝ加減箝概させられて、歸つて來たつきり、もう文學上の交際は、僕たちもしなくなつたんだがね。——今から考へると、あの時の彼奴の心持では、自分の才能に見切りをつけてゐたと共に、僕たちの才能だつて、どうせ物に成るまいと、多寡を括つて居たに違ひないよ。」

「へえ、さうですか。そんな事まであつた人なんですか。ぢやア、今日貴方があの人に會つた事は、なか〳〵兩方に取つて、感慨無量な譯ですね。」

原田が小賢しげにさう云つた。

「まア、さう云つた譯だね。だが、それよりも何よりも、向うがまだ大學生で居ると云ふ事が、僕にはヘンに應へて㝵尾のあたりがまだ落着かないよ。正直のところ、優越を感じる以上に、何か反省させられるやうな感じがあつていけない。……」

「さうでせうね。」――長距離競走で、何周か遅れた相手と、一緒に走つてゐるやうなもんでせう。」

原田には、私の心持が、まだよく呑み込めないらしく、そんな事を云つてゐた。

「さう。さう云ふ氣持もあるがね。」

私は強ゐて逆はずに、靜にさう相槌だけ打ち乍ら、樹の間に蒼みまさつた池の面を、高くからボンヤリ眺めつゝ、猶も五百木の事を考へつゞけてゐた。……

二

それから原田と別れて、もう燈の點く時分の家へ歸つてからも、何かにつけて五百木の事が、思ひ出されてならなかつたが、それも二三日の間で、やがて十日と經ち廿日と過ぎる中には、身邊を取り卷く俗事や、慌しい仕事に忙殺されて、忘れるともなく彼の存在などは、餘り念頭に上せなくなつてゐた。

たゞ、其間でも木村に會つた時は、直ぐ取つて置きの話題として、それを思ひ出すのを忘れなかつた。

「……時に君、僕は此間珍らしい男に會つたぜ、あの、高等學校時代の五百木さ。」

「ふうむ？　何處で？」

木村は奥深い眼をパチ〳〵させて、さう興味もなげに訊ね返した。

「大學の構内でだがね。彼奴まで大學生で、寄宿舍に居やがるんだよ。あいつには驚いたね。まだ大學生そのまゝで居るたア！」

「ふうむ？　さうかい。可怪しな奴だね。どうして今時分まで、學生々活なんぞして居るんだらう。」

「ずる〳〵べツたりに、休んだり出たりして、今だに學生々活の呑氣さが、忘れられないでゐるんぢやないかね。――何でも其中に、君ん所へも遊びに來たいやうな話をしてゐたから、訪ねて來るかも知れない。來たら會つて見給へ。昔とちつとも變つてないで、若いのに驚くから。――」

「さうかい。一體そんなに大學に粘りついてゐて、何をする積りなんだらう。」

木村は思慮深く、實用的に話を運んでゐた。

「當人は經濟をやつてゐると云つてゐたがね。何をするツて氣もないんだらうな。」

「仕様がない奴だな。――京都に居る時も、隨分遊蕩ばかりしてゐて、評判は餘りよく無かつたけれど、曲りなりに卒業したかと思つてゐたら、まだ東京の寄宿舍なんぞに居るんだね。」

「併し、さうなるといつそ面白いぢやないか。」

「面白い事は面白いがね――そんなら、まだあの大隅の方が、ずつと境遇がいゝかも知れない。」

「ふうむ？君は大隅に會つたのかい。大隅はどうしてゐるんだい？」

私は膝を進めるやうにして訊ねた。大隅と云ふのも、同じく高等學校時代の、これは初めから文學志望でないのに、文科へ廻されて、一緒の教室で教へを受けてゐた仲間だが、苦學をしてゐたために、頭が悪く、試驗の際などは木村や私たちの教へを受けて、辛うじて通過（パス）すると云つた風な、成績のよくない學生だつたが、是も京都の法科へ行つてから、私には杳として消息が傳はらなかつた。

「大隅はね。京都でも球突場を經營したりしてね。やつと學校を卒業すると直ぐ、此方へ歸つて來て何處かへ勤めてゐたらしいんだが、或る時、新聞に母を養ひ乍ら苦學してゐる感心な娘の記事を見るとね。自分の身に引比べて非常に同

情して、早速其家を慰問したんださうだ。そしてそれが縁となつて、ついに其娘と結婚したんださうだがね。其後、何處からか資本を引出して、土橋の近所に自動車の材料屋を經營して、初めて大分うまく行つてたと云ふ話だつた。俺が丁度あの新聞記者をして居る時分でね。其頃銀座で會つた話は君にもしたらう？しなかつたかね。」

「うん。さう云へば何だかそんな話は聞いたやうな氣もするな。――それから、どうしたんだつけ？」

「何でも其時の話では、一と月千圓以上儲かる時もあるとかで、大に得意になつてゐたがね。それから二三年經つて、つい半年ばかり前の事だがね。ふいと僕の所へ訪ねて來たんだよ。で、話を聞いて見るとね。其後、自動車屋の方は、すつかり失敗して了つたんで、今ではそいつを人手に渡し、自分は今何か、ソラ、小判型や四角な下足札があるだらう厚い丈夫なボール紙で出來たやうな――帝劇やホテルなんかで使てるぢやないか――あれの特許權を得て、製造してるんださうだがね。資本が足りなくなつたから、何處か出所はないかつて、僕ん所へ相談に來たんだけれどね。僕は氣の毒だけれど、そんな金はないから言下に斷つてやつたんだよ。だつて、あんまり可笑しいぢやないか。大隅が下足札を製造するなんて。……」

木村は直截簡明だが、心では可なり同情してゐるらしく、眼をパチ〳〵屢叩き乍ら、泣き笑ひに似た表情を見せた。

「ふうむ。さうかい。成程、そいつは、いづれを勝と白眞弓(しらまゆみ)だね。」

私も、兎もすれば感慨に耽りたがる心を、重い諧謔で紛らした。

「だがまだ僕は大隅の方が、大隅らしい生き方をしてゐると思つて、感心してゐるんだよ。」

「これはさうだね。」

私は同意しながらも、五百本の万年大學生の方にも、何となく浪漫的な心を牽かれてゐるのを覺えた。

「兎も角も、さう云ふ仲間から見ると、吾々は運がよかつたんだね。こんな風に彼等の事を、笑ひ話にして濟まされるんだから。——」

そんな事で、私たちは話頭を他へ轉じて了つた。……

それから二三ケ月經つた。或る日だつた。心に寧日なき文壇生活の渦卷の中で、私はすつかり彼らの事なぞは念頭から忘れ去つて了つた頃、或夜晩く外出から歸つて見ると、女中が原稿様のものを差出して、私にかう傳へた。

「……あの、それから今日は、お留守中に五百木さんとか仰有る方が、二度も訪ねておいでになつて、二度目に是を置いていらつしやいました。……」

「なに、五百木？どんな人だつたい。大學生だつたかい？」

私はさう聞くと、何故か濟まぬ事をしたやうに心臓を働かして、さう訊ね返した。

「はい。さうでした。制服を着た方で。——一番初めにおいでになつたのは、午後の三時頃でしたが、今日はお留守だと申上げると、さも私を信用してゐないやうに、ぢつと顔を睨み返すやうにしていらつしやいましたが、突然だと、久野は大方誰にも會はないんだらうが、自分は先生の昔のお友達で、よく知つてゐる者だから、忙しいだらうが扁渡でもそう云つて呉れつて、改めてさう仰有るんでせう。何だか私が居留守でも使つて、玄關拂ひでもしたやうに、お取りになつたらしいんですよ。で、私も怖うございましたから、いえ、決してさう言ふ譯ではない。本當にお留守なんだと申上げますと、又、では、何時頃歸るとお訊きになるんで、分らないが、ひよつとすると夕方お歸りになるかも知れないと申上げましたら、そんなら又夕方來る、と威張つたやうに仰有つて、お歸りになつたんでございますよ。……」

女中はくどい位に忠實な田舎者だつただけに、一生懸命さう復命した。

「ふうむ。そして又夕方來て、是を置いて行つたんだね。」

私はその原稿樣のものを受取つて、重さを計るやうにした。薄暗かりで手に取つたところ、それは廿枚ほどの書きものに相違はなかつた。

「はい夕方おいでになつて、まだ歸らないのか。それは殘念だつて、大變殘念がつていらつしやいましたが、では是をお渡しして吳れろつて、そこに添へてあるお手紙と一緒に、置いていらしたんでございます。」

「さうか。それは濟まなかつた。」

私は何だらう、どうせ碌な事ではあるまいと直覺されたが、兎も角も興味を以て、その添手紙と原稿とを持つたまゝ、急いで二階の書齋へ上つた。そして取り敢へず手紙の封を切つて讀んだ。其文面には、鉛筆の走り書きでかうあつた。

「先日は失敬、今日は約を履んで、君を二回訪問した。が、二度とも留守で會へぬのが殘念。いろ〳〵話してお願ひしたい件もあるが、實は小々學資不足なので、別封の原稿、君の力でどうか成つたら、どうかして貰へまいか。御一讀御叱正の上、何處かへ御發表下さらば幸甚。先づは甚だ失禮乍ら、右お願ひまで。早々。

舊姓五百木柿沼三次郎拜。

久野學兄侍史。」

としてあつた。

私は矢つ張りさうだつたか、と、少し迷惑なやうな、落膽の念をさへ覺えた。が、それは原稿にもよりけりだ。若し萬一、その原稿が少しでも面白くて、發表に價するものなら、頼まれる迄もなくさう云ふ道を講じて、五百木にデビユ

ッの機會を與へ、それを機會に彼を再び作家志望へ取戻すのも、舊友に對する何よりの道だと思はれた。それにしても內容だ。私は急いで今度は、別封の原稿を展げて見た。十年前[redacted]袂を分つた舊友が、万年大學生である現今、急に昔の仲間で作家として立つてゐる自分に會ひ、往時の才能を呼びして、道樂半分に起稿した作品が、素晴らしいものであつたなぞと云ふ事實が、決して無いとは限らない！私は一種の期待で胸をわくつかせ乍ら、久しぶりの友の文字に對した。

併し、先づその一番上の、最初の一頁を取つて、最初の行を讀み下した時、自分は忽ちそんな期待が、裏切られてゐるのを感じた。一見、それは歌稿だつた。それも、かう云ふ題のついてゐる歌稿だつた。

（歌）と、先づ其頁の上部には記されてゐた。そして其下に、『落花の下の人々と贈られしキユウピイ。』…

私は其題を見て、落膽するよりは微笑した。そして次の歌の一二首を讀んでみた。

もののふや春黃昏のはかりごと、影そふ落花かなしかりけり。

と言ふのが冒頭の一首だつた。

俊寬の曲耳に入り目覺れば、かなし悲戀の友吹き居たり。

それが二首目だつた

黎明や新人淚新らしき花こぼれつゝ影そふ春は。

そんなやうなのが、それから猶七八首並んでゐた。そして最後に、

贈られしキユーピイのみは目圓らに空しき春の吾や見凝むる。

と云ふので止めてあつた。

私は勿論、歌は分らなかつた。が、かう云ふ風な歌なら、昔、高等學校に居た時分、五百木なぞと一緒に、歌會へ出て作つた事があつた。そして驚くべき事には、今猶、五百木の歌調は、其時分と變りが無いとは！

けれどもそれは、歌の事だと思つた。そして今度は其下の、戯曲らしいもの丶原稿に、更らに眼を走らせねばならなかつた。

これは『黎明の丘より』と題する一幕物だつた。讀んで見ると、舞台は、イエルサレムに近い丘上で、時代は基督降誕の數時間前、暗の中には、ヘロデの暴虐に惱む人達や、飢と渇の中に、戀を語る若い男女、吾が兒を奪ひ殺されて、狂氣した母なぞが、一人の豫言者を中心に、何か東方に立上る、一道の光を待ち受けながら、蠢いて居るのだつた。其中の或者は、豫言者の言を信ぜず、暗の深さに脅えて、自殺して了ひ、或者は饑餓に堪へ兼ねて、曉を待たずに死んで了つた。そして、それらの折重つた上に、白衣を纒ふた半裸の豫言者と、狂ひつ丶笑ふ母と、互の愛を賴りに、最後まで望を失はなかつた若い男女とが、辛うじて殘つて、白く輝きを帶びて來る空に、手をさしのべて祈る。……と言つた風な象徴的な戯曲だつた。

それはかう簡單に書けば、まだ面白さうだけれど、可なり支離滅裂で、——しかも一と昔前、丁度私たちが五百木と共に、高等學校にゐた時分に、充分悪影響を受けたところの、メーテルリンクとホフマンスタールとアンドレーフを混雜にしたやうな、强ゐて難解な字句を連ねた、コケ脅しの戯曲だつた。たゞ取柄と云へば、その黎明を待つ氣持に、又たはそれを待ち切れずに死に行く氣持に、一脈の同情が持てるきり、其凝りに凝つた、或る部分は力の籠つた豫言者の文句なども、空文と云へば空文に過ぎないものだつた。——全體として、どう考へても、あの頃の校友會雜誌に載るべき程度の、習作的な戯曲でしかあり得なかつた。

讀み終つて、何と云ふ昔と變らなさ加減だらうと思ふと、私は再び微笑を禁じ得なかつた。五百木ともあらう者が、矢張り一度棄てた道では、矢つ張りこんな程度のものしか持つてゐなかつたのであらうか。まだこの程度の憧れめいた詩的表現で、彼は現代の文壇に通用すると思つてるのであらうか。さう思ふと其無邪氣さが微笑され、憫笑されて來た。が、ふと、私は又別な事を考へて、憫笑を唇の端から納めた。といふのは、ふいと、是は五百木の質の惡い惡戯で、わざとこんな作品を持ち込み、私に昔の幼稚さを思ひ出させるのみか、今の私たちの作品でも、是と大同少異だと言ふ事を、皮肉に思ひ知らせるための、意識的行爲ではなからうか、と疑はれて來たからだつた。さうでも思はなければ、是を發表したい云々は兎も角、原稿料へ換へたいと云ふのは、少しどうかして居ると感ぜられない譯には行かなかた。

が、それにしては、少し念が入り過ぎてゐるやうにも思へた。手紙の文句も嘘とは思へなかつた。

結局、私は暫らく考へた末、どつち道、是は此儘放つて置くより、外に仕方がないと思つた。發表なぞは、何處かの同人雜誌でもない限り、到底覺束なかつた。金に換へるなぞは、夢にも等しい事だつた。でも、うつかりそんな事を云つてやつたりしては、惡戯だとすれば反唖されるだらうし、本氣だとすれば氣を惡くするだらう。――さう思つて、向うから何とか云つて來る迄、放つて置く事にした。丁度留守で、彼に會はずに濟んだ事も、其點から云うと好都合だつた。さうして、それを本函の隅に重ねたまゝ、いつの間にか又忘れたやうに、一と月ばかり經つた。

たしか其年の七月の半ば頃だつた。私は突然又五百木から、一通の手紙を受取つた。見るとそれは、彼の故郷の會津から出されたもので、何だか濟まないやうな氣持で、恐る／＼開いて見た文面には、大略次のやうな事が記されてあつた。

それは、原稿を預けつ放しにして、つい序が無かつたゝめ、其後一度も訪ねて行く機會がない中に、此方へ歸省して了つたが、其後あれはどうなつたらうか。讀んで、何處かへ推薦して吳れたらうか。若しまだゞつたら、呉々も宜しく願ひたい。自分は又何となく、文章などを書いて見たい氣持になつてゐるから、あれの發表を機會に、少し君たちの指導を受けて、勉强したいやうにも思ふ。それから前には、あれを賣つて原稿料にして貰ひたいと云つたが、そんな事を云つても無名の自分には、なか〳〵望まれない事だから、只、發表するだけでも有難い。……

それを讀むと、私は彼が、矢つ張り本氣だつたのかと思つた、彼のために少しく暗然とした。そして何とかかんとか辭を構へて、あの原稿を送り返さう。——さう思ひ乍ら、二三日、さう重大事でもないまゝに捨てゝ置いた。

そして二三日捨てゝ置く間に、又忘れて了つた。

すると又一ケ月ばかり經つた、八月の或る日だつた。至急要用と朱書した手紙が、又故郷の五百木から、私の所へ着いた。私はハツと思つた。そして又恐る〳〵封を切つて見た。

すると中には、又かう云ふやうな事が書いてあつた。

前に手紙を差上げたが、今だに返事がないのは、どうしたものかと思つて待ち暮してゐる。若しあの原稿が、どうにもならないものなら、それでいゝから、ハツキリさう云つて寄越して貰ひたい。若し又、何とか君の力で、發表の道が構ぜられるなら、それも大變結構だが、實は此方の田舍の雜誌と新聞から、何か原稿は無いかと、非常に懇請されて困つてゐる。就ては、あれが差し當つて東都の大雜誌へ發表の道がつかないなら、それを向うへ廻したいから、至急送つて吳れ。……

それを讀むと、私は濟まなかつたと思ひ乍ら、ホツと又救はれたやうな感じを覺へた。そして本函の隅から、彼の原

稿を探し出すと、忘れない中に女中に命じて、小包みに作らせる事にした。原稿は亂雜な書齋の埃を被つて、少し變色しかけてゐた。私は小包みが出來上つたら、此處へ送つて呉れと云つて、舊姓五百木、柿沼三次郎から來た手紙の封筒を、一緒に女中に渡したまゝ、何かやつと厄から逃れたやうな息をした。

小包は、女中の手で直ぐ送られた。私はそれにつけて、何か一言手紙に書いてやらうと思ひ乍ら、毎もの筆無精で、つひ忘れて了つたまゝ、それなりに過ぎて了つた。

それつきり、彼の方から何の便りもなく、其後何の訪問も受けなかつた。彼の事も、今度こそは全く忘れたと云つても差支へなかつた。

が、それでも本郷通りなどで、割り合ひに老けた大學生に會つたり、姿が五百木に似た學生を見たりすると、ふと、彼のことが思ひ出されて、其後どうしたらう、と思ひ出す事もないではなかつた。そして其度に、ふいと文學の修業などと云ふものは、外のものと異なり、矢張り可なり六ケ敷いもので、惡い意味での稚拙感などは、なか〳〵脱けぬものだと言ふやうな事を、それとなく思ひ合せたりするきりの事だつた。……

三

すると、それから又一年ばかり經つて、今年の事だつた。其間に私は病を得て、永らく住み馴れた本郷の地を引拂らひ、空氣のいい海岸の逗子へ、假寓を構へてゐた。その假寓の、晴れた八月の眼覺めに、ふと新聞をとり上げて見た。見ると、三面の上半一面に、大きな標題で、學生の危險思想を研究した一團が、起訴された報導が出て居た。彼らはさうした思想を研究してゐたばかりでなく、それを實際運動化し、又發賣頒布を禁止されてゐる不穩文書を、秘密出版し

てゐたとかで、その人員は東西兩大學から、其他の公私大學に亘り、數十人を算してゐた。

私は、それらの報導を、大略標題其他で察讀すると、成程さう云ふやうな事も、今日の時世ではあり得る事だと思つた。そして深く心を動かされたともなく、一體どんな風な學生たちが其一團をなしてゐたのかと、住所氏名の列擧されたたあたりへ、漫然目をやつてゐた。華族の息子などの名が特に大きく記されてあつたりした。

が、東大生と云ふ項目に接すると、ひよつとして、誰か知つた人はゐまいかと、一と渡り氣を付けて讀んで見る氣になつた。そして其初めから二ツ三ツ目頃にある何だか見覺えのある名にふと私は目を引きつけられた。柿沼三次郎！　おやツと私は目を瞬つた。そして彼の族籍地を見直した。福島縣とあつた。年齡を見直した。それにはどうしたものか、二十五才としてあつた。年齡は違ふが、どうも出身地と云ひ、三次郎と云ふ特殊の名と言ひ、同名異人とは思はれなかつた。學科目も、經濟學生としてあつた。私はすツと背中が寒くなる氣がした。

若し彼だとすれば、あの万年大學生の五百木だとすれば！やつたな！と私は思つた。何だか異常な感動が、私の胸を走つた。彼だとすれば、男子三日會はされば、括目して見るべしとか何とか云ふ喩ではないが、あの幼稚な文章や歌を書いて、一年と經たぬ中に、彼の思想内では、こんな革命が起つてゐたのだ。さう思へば文學の教養なぞと違つて、そんな思想上の事では、それ位の事は非常に在りうる事に思へた。のみならず、色色彼の境遇を思ひ合せると、さう云ふ思想の傾向を取つた事も、當然過ぎる位當然なやうに思はれて來た。その根底がどれだけ深いものであるかどうかは分らぬが、何かに憧憬しつつ、失望しつつ、彷徨しつつ萬年大學生を續けて來た彼が、そんな轉向を取つたの心持は、私にも朧ろげ乍ら首肯けられて來た。

さうしてそれと共に、何か、彼にさう云ふ方向を取らした事に就ては、私たちにも責任があるやうに感じられてなら

なかつた。

私はボンヤリ眼を上げて、そこの薄暗い陰に、古びた大學の制服を着たまゝ、牢屋の中に居る五百木の姿を、まざまざと想像した。そしてそれが果して五百木だとすれば、何か差し入れでも出來るなら、してやりたいやうな氣持を感じた。――併し又それだけの熱意もない事は、やがて自分にも分つて來た。

結局、まさか五百木ではあるまい。――さう自分で獨語つ外無かつた。何だか本當にあの五百木ではないやうな氣もした。

一方の報道には、それらの學生が、無期停學に處せられた事が出てゐた。若し五百木だつたとしたところで、彼の万年大學生生活も、恐らくは是で終りだらうと思ひやつて、涙ぐましい例の微苦笑で、さし當り氣持を和らげるより外ないのを、私は感じた。

其朝の頃から、いたく空氣が冷え〳〵として來た。

（十五年十月）

編輯後記

◇「明治」はもう我々にとつては新しいクラシツクである。懐しい過去である。世界文學に誇るべき明治文學の開化期は同時に我新日本文學の開化期である。我々はこの光輝ある有意義の明治文學に正當なる認識を有つことが國民としての當然の義務であり、同時に國民としての誇りである。

◇我社は此記念すべき半世紀の燦然たる業績を蒐集し「現代日本文學全集」を刊行することになつた。この企劃はいろいろの意味に於て全國民より久しく要望されていたものだ。我國では近頃何々全集等雨後の筍の如く簇出し、殆んど其選擇に迷ふほどである。加之、一全集の價格は少くとも數十金を下らざる狀態にある。かくて出るもの、出るもの悉く特權階級にあらざれば之を購求する能はざるのみか、悉く之を讀過することは至難である。我社は之に鑑み、明治の一流たる逍遙、紅葉露伴、漱石、鷗外、蘆花、子規、樗牛、獨步一葉より現代文壇、歌壇俳壇、詩壇、論壇に活躍せる人々の全部の代表作を網羅して三十六卷通計四萬三千二百枚として明春一月より發行することゝした。

◇一册に集錄さるる枚數は一千二百枚で菊判三百頁總ルビ六號三段組み一册の定價は僅々壹圓である。これ全く空前の大計畫であり、出版界を震撼する劃期的の大革命であり、徹底的文學の民衆化である。

◇この世界的に壯觀無二なる全集を完成する上にどれほどの汗血が絞られたか、その苦心の跡を偲ぶだけでも涙がにじみ出る。特に出版界の大革命のことゝて利害の纏はることが多く、その禍根の截斷にどれだけの犧牲が拂はれたか、しかし、藝術のためへ、民衆のための一路突貫はここに渾然完璧な全集を生みました。

◇空前の廉價、空前の傑作集が瀟洒な氣持のいい新型の美本となつて近く上梓されます。我々は我社によりて特權階級の藝術が全國民に解放されたことをこの上なく悦びにたえぬ。

◇尙本全集に關する詳細を知りたい人々は端書で申込んで下されば內容見本を差上げます。

◇「改造」十二月號は「明治文學研究」號とする。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

(價八拾錢)

大正十五年十月十七日印刷納本
大正十五年十一月一日發行

編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 山本三生
印刷人 東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八

唯物史觀研究

■社會科學十月特輯■

特價金貳圓五拾錢
送料十二錢

今や巨人マルクスの理論とその一派の學說は全世界の思想を席捲し全世界の社會組織を震撼しつつある彼等の理論は實に唯物史觀の上に立脚する力强さである。この駸々たる思想的鬪爭と社會組織の轉向性、その依つて以て來たる根源的基調の考究なくして我々は何にを語り得やう哲理なき行動は狂でなくんば蒙だ。これ敢へて本誌が青年學徒諸君の上に此の書を掲ぐる所以だ。

■我々はいま如何にして戰鬪的唯物論を戰ひとり得るか……福本和夫
■マルクス方法論の一考察……河野密
■唯物史觀の立脚點……コルシュ
■經濟史と唯物史觀……堀經夫
■辨證法的唯物論（附行動の哲學としての辨證法的唯物論）……プレハノフ
■社會學と唯物史觀について……新明正道
■史的理想主義か史的唯物論？……淡德三郎譯
■階級主觀性と無產者科學の客觀性……大森義太郎
■マルクスの歷史理論とその變改者……クノー
■ヘエゲル哲學とマルクス、レエニンの辨證法的唯物論……土田杏村
■唯物史觀とエンゲルス……加田哲二
■吳越の辯……マルクス
■豫算に現はれたる露國勞農政府の傾向……阿部賢一
■マルクス前の唯物史觀……ポクロフスキー
■マルクスに於ける勞動組合說小考……坂本勝
■ヴイツコの歷史哲學と唯物史觀……佐々木修一郎
■フリードツリヒ・エゲルスの唯物史觀に關する書簡……向坂逸郎譯
■「日本農民生活」の批評……土屋喬雄
■「經濟學批判の方法論」に就いて……櫛田民藏
■唯物史觀に關する文獻集錄……
■最近社會學界主要論文及著書解題……

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

シンクレア著
前田河廣一郎譯

義人ジミー

定價金貳圓
送料十八錢

最新刊

現代社會組織の破綻を見事に織り出す驚くべき文豪シンクレアの筆頭に我が親愛なる、無智純情倭軀のジミー君は如何に活躍するか、アメリカ大陸と歐洲大戰亂を背景にした、この驚くべき構想の中に踊り、走り、笑ふ、このジミーに思ふ存分吾々は叱られ、奴鳴られ愛撫され、そして酔されてしまう。だが、それは單なるユーモアではない、全人類の本性に呼びかける涙ぐましき叫びである。藝術と思想がかく迄に美しく融合化された至完のものが全世界の何處にあらう。オオ、親愛なるジミーよ!!やがて將來さるべき曉の光輝ある旗手、虫喰齒の我がジミーよ!!

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社

葉山嘉樹著

海に生くる人々

定價壹圓五拾錢
送料十八錢

最新刊

この一書は惰眠せる現文壇と現代社會に對する大なる巨彈だ。奇怪なる構想。怖るべき××の拳、さりながら尙熱病のやうに反抗する青年、それはやがて將來さるべき太陽の亂舞にあらずして何ぞだ。一讀慄然たり乍ら引入れらるる如く讀返して後に殘る颯爽たる藝術的氣韻と社會的靈の苦悶は融合化されたる眞と美の刻印だ。プロ派に理論あつて實彈なしと稱せる愚昧の士は恥ぢよ!! この熱情と、この深刻さ、そしてこの美感の豊かさ。この異色ある葉山を得し事は吾々全社會人の誇りだ。青年も讀め子女も讀め老年も讀め、そして心臟しつかりと押へて三省せよ!!

發行所 改造社 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二


カルピス
滋強飲料
秋だ
うんと讀まう
うんと飲まう
智嚢を肥やす爲に
體力を肥やす爲に
カルピ
酒店・食料品店・藥店にあり

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
大正十五年十月十七日印刷納本

第八卷 第十一號 十一月號

株式會社秀英舍印刷